福島県文化財調査報告書第482集

阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告１

小田高原遺跡（１次調査）

２０１１年

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興事業団
国土交通省北陸地方整備局

阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告１

小田高原（おだこはら）遺跡（１次調査）

序　　文

文化財は，それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であり，我が国の歴史や文化を正しく理解するために必要不可欠なものです。

そのため，当時の姿がよく理解できるように，可能な限りそのままの形で文化財を保存し，後世に伝えていく努力を現代に生きる私たちに求められています。

さて，国土交通省が実施する「阿賀川下流狭窄部改修事業（長井地区）」は，阿賀川下流部のうち長井地区にある狭窄部の河道を掘削して川幅を広げる事業です。この事業が完成すると，洪水の流下を阻害する部分がなくなるため，出水による冠水被害などの災害を防ぐことができるようになります。

福島県教育委員会では，この計画地区内にある周知の埋蔵文化財包蔵地，いわゆる遺跡を含めた文化財を保存するため，関係機関と協議を重ねてきましたが，現状で保存が困難なものについては，詳細な記録を残すために発掘調査を実施することになりました。

本報告書は，平成22年度に発掘調査を実施した喜多方市所在の小田高原遺跡に関する調査結果をまとめたものです。

小田高原遺跡は平安時代に営まれた集落の跡と考えられますが，竪穴住居の他に須恵器や土師器を焼いた窯などがいくつも発見されていることから，集落の一部でやきもの作りなどの生産活動が盛んに行われていたことが分かりました。

また，当時の役人が使っていた帯金具や，仏教の儀式で使用したと思われるミニチュアのやきものの塔などが発見されていることから，この集落は当時の喜多方地方の中核的な集落の一つであった可能性も考えられます。

今後，この報告書が，県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査の実施に当たり，御協力いただいた喜多方市教育員会，国土交通省北陸整備局阿賀川河川事務所，財団法人福島県文化振興事業団を始めとする関係機関及び関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

平成23年12月

福島県教育委員会

教育長　　遠　藤　俊　博

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に先立ち，開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は，阿賀川下流狭窄部改修事業（長井地区）の実施に伴い，平成22年度に発掘調査を行った喜多方市慶徳町山科地区に所在する小田高原遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の１次調査では，平安時代の集落跡を確認し，当時の代表的な焼き物である土師器や須恵器を生産していたことも明らかとなりました。また，瓦塔や獣脚といった仏教・仏具に関わる遺物もあり，当遺跡の性格を考える上で貴重な発見となりました。

阿賀川河岸の遺構は厚い堆積土に埋もれていましたが，遺跡の一部で，過去の大きな地震によって生じたと考えられる地滑り痕を確認しました。おそらく，1611年の「会津慶長地震」の影響によるものと推測されます。当時の記録によれば、会津慶長地震の被害は甚大で，小田高原遺跡の上流で発生したという土砂崩れは阿賀川の流れを塞き止め，多くの集落が水没したという記録も残されています。このように，発掘調査では往古の生活跡のほか，災害の痕跡も観察されることがあります。

今後，この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として，広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，この調査に御協力いただきました喜多方市並びに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，当事業団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年12月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成22年度に実施した阿賀川下流狭窄部改修事業（長井地区）に関連する遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は，福島県喜多方市慶徳町山科字西新田・古屋敷に所在する小田高原遺跡（１次調査）の成果を収録した。

3　本発掘調査事業は，福島県教育委員会が国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所の委託を受けて実施し，調査・報告にかかる費用は国土交通省が負担した。

4　福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部の以下の職員を配置して調査にあたった。

副　主　幹　吉田　功　　専門文化財主査　香川愼一　　文化財主査　宮田安志

文化財主査　國井秀紀　　文化財主査　大河原勉　　文化財主査　山元　出

さらに調査期間中は，臨時的に以下の職員を配置した。

文化財主査　佐藤　啓　　文化財主査　阿部知己　　文化財副主査　磯山千映美

嘱　　託　本田拓基

6　本書の執筆・編集は担当職員が行い，文末に文責を示した。

7　自然科学分析は次の機関に依頼し，その報告を付章に掲載した。

放射性炭素年代測定・樹種同定　　株式会社　加速器分析研究所

土器胎土分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社

8　本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院発行の５万分の１地形図「喜多方」の該当範囲を複製したものである。

9　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関から御協力・御助言をいただいた。

喜多方市　　喜多方市教育委員会　　卜部厚志（新潟大学災害復興科学センター）

（敬称略・順不同）

用　　例

1　本書における地形図・遺構図の用例は，以下のとおりである。

(1) 方位・座標　図中の方位は座標北を示す。表示のないものは本書の天を北とした。座標軸には国土座標Ⅸ系に基づく座標値を記した。

(2) 毛　　羽　遺構内の傾斜部は「 ⅏ 」，相対的に緩傾斜の部分には「 ⅏ 」，後世の撹乱および削平部には「 ⅏ 」を用いた。

(3) 網　　点　図中の網点は以下を示す。これら以外を示す場合は同挿図中に凡例を示した。

焼土面　強い焼土面

(4) 土　　層　遺跡内堆積土層は，アルファベット大文字Ｌにローマ数字，遺構内堆積土層はアルファベット小文字ℓに算用数字を付して表記した。土色およびその記号は『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄1967)に基づく。

(5) 標　　高　水準点を基にした，海抜高度を示す。

(6) 縮　　尺　各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

(7) 小　　穴　小穴に付した(　)内の数値は，検出面からの深さ(㎝)を示す。

2　本書における遺物図の用例は，以下のとおりである。

(1) 土器断面　縄文土器・土師器・陶器は断面白抜きで示し，須恵器は断面を黒く塗りつぶした。粘土紐の積み上げ痕は一点鎖線で示した。

(2) 網　　点　図中の網点は以下を示す。これら以外は同挿図中に凡例を示した。

土師器の内面黒色処理　須恵器の火だすき

(3) 遺物番号　挿図ごとの通し番号とした。遺物番号に続く(　)内には，出土位置・層位を示した。

(4) 計測値　遺物の計測値は，図中に示した。また，推定値は(　)，残存値は[　]内に示した。

(5) 縮　　尺　各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

3　本書および調査・整理の上で使用した略号は以下のとおりである。

喜多方市…ＫＴ　小田高原遺跡…ＯＤＫ　竪穴住居跡…ＳＩ　須恵器窯跡…ＳＲ
須恵器窯跡作業場…ＳＲＷ　土　坑…ＳＫ　溝　跡…ＳＤ　焼土遺構…ＳＧ
竪穴・畝状遺構…ＳＸ　ピット…Ｐ　グリッド…Ｇ

4　参考・引用文献は執筆者の敬称を略し，第５章にまとめて収めた。

目　　次

序　章
第１節　事業の概要……1
第２節　調査に至る経緯……1
第３節　遺跡周辺の環境……3
地理的環境（３）　歴史的環境（５）

第１章　調査の概要
第１節　遺跡の位置と地形……11
第２節　調 査 経 過……11
第３節　調 査 方 法……13

第２章　調査Ⅰ区の遺構と遺物
第１節　概　　要……17
第２節　基 本 土 層……18
第３節　竪穴住居跡……21
1号住居跡(21)　2号住居跡(26)　3号住居跡(36)　7号住居跡(40)　10号住居跡(45)
第４節　溝　　跡……47
１号溝跡(47)　２号溝跡(49)　３号溝跡(51)　６号溝跡(52)　７号溝跡(53)
８号溝跡(54)
第５節　土　　坑……55
１号土坑(55)　２号土坑(56)　３号土坑(56)　４号土坑(58)　５号土坑(59)
６号土坑(59)　７号土坑(60)　８号土坑(62)　９号土坑(63)　11号土坑(63)
12号土坑(63)　13号土坑(65)　14号土坑(65)　15号土坑(65)　16号土坑(66)
17号土坑(66)　19号土坑(66)　20号土坑(67)　27号土坑(67)　33号土坑(76)
第６節　小　　穴……76
第７節　遺物包含層……77
第８節　ま　と　め……88

第３章　調査Ⅱ区の遺構と遺物
第１節　概　　要……95
第２節　基 本 土 層……96
第３節　竪穴住居跡……109
４号住居跡(109)　５号住居跡(112)　８号住居跡(113)　９号住居跡(117)　12号住居跡(119)
13号住居跡(120)
第４節　須恵器窯跡……124
１号須恵器窯跡(125)　２号須恵器窯跡(132)　３号須恵器窯跡(133)
第５節　溝　　跡……139

４号溝跡(139)　９号溝跡(141)
第６節　その他の遺構……142
10号土坑(142)　25号土坑(143)　26号土坑(143)　28号土坑(144)　32号土坑(144)
34号土坑(146)　35号土坑(146)　畝状遺構(149)
第７節　遺構外出土遺物……150
第８節　ま　と　め……155

第４章　調査Ⅲ区の遺構と遺物
第１節　概　　要……159
第２節　基 本 土 層……161
第３節　竪穴住居跡……167
６号住居跡(167)　11号住居跡(174)
第４節　溝　　跡……181
５号溝跡(181)
第５節　土　　坑……181
18号土坑(181)　21号土坑(182)　22号土坑(183)　23号土坑(184)　24号土坑(185)
29号土坑(185)　30号土坑(185)　31号土坑(186)
第６節　竪 穴 遺 構……187
１号竪穴遺構(187)
第７節　焼 土 遺 構……189
１号焼土遺構(189)
第８節　小　穴　群……190
第９節　遺構外出土遺物……192
第10節　ま　と　め……195

第５章　総　括……197

付　章　自然科学分析
第１節　放射性炭素年代測定……201
１.測定対象試料(201)　２.測定の意義(201)　３.化学処理工程(201)　４.測定方法(202)
５.算出方法(202)　６.測定結果(203)
第２節　出土炭化材の樹種同定……208
はじめに(208)　１.試　　料(208)　２.分析方法(208)　３.結　　果(208)
４.考　　察(209)
第３節　土器の胎土分析……212
はじめに(212)　１.試　　料(212)　２.分析方法(213)　３.結　　果(214)
４.考　　察(216)

挿図目次

序　章

図１　阿賀川狭窄事業位置図 …… 1
図２　遺跡周辺の地形分類 …… 4
図３　小田高原遺跡と周辺の遺跡 …… 6

第１章　調査の概要

図４　調査範囲と工事計画 …… 12
図５　調査範囲の区割りとグリッド配置 …… 14

第２章　Ⅰ区の遺構と遺物

図６　遺構配置図（Ⅰ区南部） …… 18
図７　Ⅰ区遺構配置図・基本土層 …… 20
図８　１号住居跡（１） …… 22
図９　１号住居跡（２） …… 23
図10　１号住居跡出土遺物（１） …… 24
図11　１号住居跡出土遺物（２） …… 25
図12　２号住居跡（１） …… 27
図13　２号住居跡（２） …… 28
図14　２号住居跡出土遺物（１） …… 31
図15　２号住居跡出土遺物（２） …… 32
図16　２号住居跡出土遺物（３） …… 33
図17　２号住居跡出土遺物（４） …… 34
図18　２号住居跡出土遺物（５） …… 35
図19　３号住居跡 …… 36
図20　３号住居跡出土遺物（１） …… 38
図21　３号住居跡出土遺物（２） …… 39
図22　３号住居跡出土遺物（３） …… 40
図23　７号住居跡 …… 41
図24　７号住居跡出土遺物（１） …… 42
図25　７号住居跡出土遺物（２） …… 43
図26　７号住居跡出土遺物（３） …… 44
図27　10号住居跡，出土遺物 …… 46
図28　１号溝跡，出土遺物 …… 48
図29　２号溝跡 …… 50
図30　２号溝跡出土遺物 …… 51
図31　３号溝跡 …… 52
図32　６号溝跡 …… 53
図33　７・８号溝跡，出土遺物 …… 54
図34　１～４号土坑 …… 57
図35　５・６・11号土坑 …… 61
図36　７～９・12・19号土坑 …… 64
図37　13～16・20号土坑 …… 68
図38　17・27・33号土坑，土坑出土遺物（１） …… 69
図39　土坑出土遺物（２） …… 70
図40　土坑出土遺物（３） …… 71
図41　土坑出土遺物（４） …… 72
図42　土坑出土遺物（５） …… 73
図43　土坑出土遺物（６） …… 74
図44　土坑出土遺物（７） …… 75
図45　小穴 …… 76
図46　遺物包含層出土遺物（１） …… 79
図47　遺物包含層出土遺物（２） …… 80
図48　遺物包含層出土遺物（３） …… 81
図49　遺物包含層出土遺物（４） …… 82
図50　遺物包含層出土遺物（５） …… 84
図51　遺物包含層出土遺物（６） …… 85
図52　遺物包含層出土遺物（７） …… 86
図53　遺物包含層出土遺物（８） …… 87

第３章　Ⅱ区の遺構と遺物

図54　Ⅰ７～13列土層柱状図 …… 96
図55　Ⅱ区基本土層観察地点 …… 97
図56　Ⅱ区８列以北基本土層（１） …… 99
図57　Ⅱ区８列以北基本土層（２） …… 100
図58　Ⅱ区８列以北基本土層（３） …… 101
図59　Ⅱ区８列以南基本土層（１） …… 102

図60　Ⅱ区８列以南基本土層（２）…… 103
図61　Ⅱ区８列以南基本土層（３）…… 104
図62　Ⅱ区８列以南基本土層（４）…… 105
図63　Ⅱ区８列以南基本土層（５）…… 106
図64　Ⅱ区８列以南基本土層（６）…… 107
図65　Ⅱ区８列以南基本土層（７）…… 108
図66　４号住居跡…… 110
図67　４号住居跡出土遺物…… 111
図68　５号住居跡…… 112
図69　５号住居跡出土遺物…… 113
図70　８号住居跡（１）…… 114
図71　８号住居跡（２）…… 115
図72　８号住居跡出土遺物…… 116
図73　９号住居跡，出土遺物…… 118
図74　12号住居跡…… 119
図75　12号住居跡出土遺物…… 120
図76　13号住居跡…… 121
図77　13号住居跡出土遺物（１）…… 122
図78　13号住居跡出土遺物（２）…… 123
図79　１～３号須恵器窯跡…… 124
図80　１号須恵器窯跡…… 126
図81　１号須恵器窯跡出土遺物（１）…… 128
図82　１号須恵器窯跡出土遺物（２）…… 129
図83　１号須恵器窯跡出土遺物（３）…… 130
図84　２号須恵器窯跡…… 132
図85　３号須恵器窯跡…… 134
図86　３号須恵器窯跡出土遺物（１）…… 135
図87　３号須恵器窯跡出土遺物（２）…… 136
図88　３号須恵器窯跡出土遺物（３）…… 137
図89　４号溝跡…… 140
図90　４号溝跡出土遺物 …… 141
図91　９号溝跡…… 142
図92　10・25・26・28・32号土坑 …… 145
図93　34・35号土坑…… 146
図94　土坑出土遺物（１）…… 147
図95　土坑出土遺物（２）…… 148
図96　畝状遺構…… 149
図97　遺構外出土遺物（１）…… 151
図98　遺構外出土遺物（２）…… 152
図99　遺構外出土遺物（３）…… 153
図100　遺構外出土遺物（４）…… 154
図101　調査Ⅱ区出土杯指数分布…… 157

第４章　Ⅲ区の遺構と遺物

図102　Ⅲ区遺構配置図…… 160
図103　Ⅲ区基本土層（１）…… 162
図104　Ⅲ区基本土層（２）…… 163
図105　Ⅲ区基本土層（３）…… 164
図106　Ⅲ区基本土層（４）…… 166
図107　６号住居跡（１）…… 168
図108　６号住居跡（２）…… 169
図109　６号住居跡出土遺物（１）…… 171
図110　６号住居跡出土遺物（２）…… 172
図111　６号住居跡出土遺物（３）…… 173
図112　11号住居跡（１）…… 175
図113　11号住居跡（２）…… 176
図114　11号住居跡出土遺物（１）…… 178
図115　11号住居跡出土遺物（２）…… 179
図116　11号住居跡出土遺物（３）…… 180
図117　５号溝跡…… 181
図118　18・21号土坑…… 183
図119　22～24号土坑…… 184
図120　29～31号土坑…… 186
図121　土坑出土遺物…… 187
図122　１号竪穴遺構，出土遺物…… 188
図123　１号焼土遺構…… 190
図124　ピット群…… 191
図125　遺構外出土遺物（１）…… 193
図126　遺構外出土遺物（２）…… 194

付　章　自然科学分析

図127　暦年較正年代グラフ（１）…… 206
図128　暦年較正年代グラフ（２）…… 207

図129 炭化材木材組織（１）…… 210
図130 炭化材木材組織（２）…… 211
図131 胎土化学組成散布図…… 215

表　目　次

序　章
表１　周辺の遺跡一覧…… 7

第１章　調査の概要
表２　竪穴住居跡一覧…… 15
表３　須恵器窯跡一覧…… 15
表４　溝跡一覧…… 15
表５　焼土遺構一覧…… 15
表６　土坑一覧…… 16
表７　その他の遺構一覧 …… 16

第3章　Ⅱ区の遺構と遺物
表８　１号須恵器窯跡出土遺物観察表…… 131
表９　３号須恵器窯跡出土遺物観察表（１）… 138
表10　３号須恵器窯跡出土遺物観察表（２）… 139
表11　底径･器高/口径比度数分布表…… 156

付　章　自然科学分析
表12　放射性炭素年代測定結果…… 204
表13　暦年較正年代…… 205
表14　樹種同定結果…… 209
表15　胎土分析試料一覧 …… 212
表16　蛍光Ｘ線分析結果 …… 214

写真図版目次

第２章　Ⅰ区の遺構と遺物
1　Ⅰ区調査前全景（南から）…… 219
2　Ⅰ区全景（南上空から）…… 219
3　Ｐ･Ｑ28Ｇ基本土層（北東から）…… 220
4　Ｎ27Ｇ基本土層（南西から）…… 220
5　１号住居跡（北から）…… 221
6　１号住居跡細部…… 221
7　２号住居跡（西から）…… 222
8　２号住居跡細部…… 222
9　３号住居跡（北西から）…… 223
10　３号住居跡細部…… 223
11　７号住居跡（南から）…… 224
12　７号住居跡細部…… 224
13　10号住居跡（南西から）…… 225
14　２・３・６～８号溝跡…… 225
15　１号溝跡（南から）…… 226
16　１号溝跡細部…… 226
17　土坑（１）…… 227
18　土坑（２）…… 228
19　土坑（３）…… 229
20　１号住居跡出土遺物 …… 230
21　２号住居跡出土遺物（１）…… 231
22　２号住居跡出土遺物（２）…… 232
23　３号住居跡出土遺物 …… 233
24　７号住居跡出土遺物（１）…… 234
25　７号住居跡出土遺物（２）…… 235
26　溝跡・土坑出土遺物 …… 236
27　土坑出土遺物 …… 237
28　遺物包含層出土遺物（１）…… 238
29　遺物包含層出土遺物（２）…… 239
30　遺物包含層出土遺物（３）…… 240

第３章　Ⅱ区の遺構と遺物

31　Ⅱ区全景(北上空から)…… 241
32　Ⅱ区全景(上空から) …… 241
33　10Ｇ列ＬⅡ土層(南西から)…… 242
34　Ｈ６ＧＬⅡ土層(南から) …… 242
35　基本土層 …… 243
36　４号住居跡(西から) …… 244
37　４号住居跡細部…… 244
38　５号住居跡(西から) …… 245
39　５号住居跡細部…… 245
40　８号住居跡(西から) …… 246
41　８号住居跡細部…… 246
42　９号住居跡(東から) …… 247
43　13号住居跡(南から) …… 247
44　12号住居跡(東から) …… 248
45　12号住居跡細部…… 248
46　１・３号須恵器窯跡(北西から)…… 249
47　２号須恵器窯跡(南西から)…… 249
48　１号須恵器窯跡細部 …… 250
49　２・３号須恵器窯跡細部 …… 251
50　４・９号溝跡，畝状遺構，遺物出土状況 ‥ 252
51　Ⅱ区土坑 …… 253
52　４・５号住居跡出土遺物 …… 254
53　４・５・９号住居跡・４号溝跡出土遺物 ‥ 254
54　８号住居跡出土遺物(１) …… 255
55　８号住居跡出土遺物(２) …… 255
56　13号住居跡出土遺物 …… 256
57　１号須恵器窯跡出土遺物(１) …… 257
58　１号須恵器窯跡出土遺物(２) …… 258
59　３号須恵器窯跡出土遺物(１) …… 259
60　３号須恵器窯跡出土遺物(２) …… 260
61　３号須恵器窯跡出土遺物(３) …… 261
62　25号土坑・遺構外出土遺物(１)…… 262
63　遺構外出土遺物(２) …… 263
64　遺構外出土遺物(３) …… 264

第４章　Ⅲ区の遺構と遺物

65　Ⅲ区全景(西上空から)…… 265
66　遺構集中部(上空から)…… 265
67　基本土層(ＬⅡ)…… 266
68　基本土層Ａ上部(南西から)…… 267
69　基本土層Ａ下部(南西から)…… 267
70　基本土層Ｂ(北西から)…… 268
71　基本土層Ｂ地すべり層(北東から) …… 268
72　基本土層Ｃ(南から) …… 269
73　６号住居跡(南から) …… 270
74　６号住居跡細部…… 270
75　６号住居跡カマド(西から)…… 271
76　６号住居跡カマド細部…… 271
77　11号住居跡(南から) …… 272
78　11号住居跡細部…… 272
79　11号住居跡カマド(南から)…… 273
80　11号住居跡カマド細部…… 273
81　土坑(１) …… 274
82　土坑(２) …… 275
83　１号竪穴遺構(北から)…… 276
84　５号溝跡，１号焼土遺構 …… 276
85　６号住居跡出土遺物(１) …… 277
86　６号住居跡出土遺物(２) …… 278
87　11号住居跡出土遺物(１) …… 278
88　11号住居跡出土遺物(２) …… 279
89　土坑・遺構外出土遺物…… 279
90　住居跡・土坑・遺構外出土遺物…… 280
91　磁器・土製品・鉄製品・粘土塊…… 280

序　　章

第1節　事業の概要

古来から会津盆地では，たびたび洪水が繰り返されてきた。第二次世界大戦前，原因の一つとして挙げられていた，会津西部に位置する阿賀川下流の蛇行部に3本の捷水路(ショートカット)を開削したが，大量の未掘削部を残したままの暫定通水であった。昭和57年9月，会津は戦後最大の出水に見舞われ，これを機に昭和58年から待望の阿賀川下流狭窄部改修事業が再開された。

阿賀川下流部は3地区の狭窄部(長井・泡の巻・津尻)が連続しており，これらの狭窄部が洪水の流下を阻害しているため，出水のたびに阿賀川下流地域において内水被害等の災害が発生している。国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所は，これらの被害を防ぐ目的で，阿賀川下流地域の治水安全度向上のため，昭和58年度から河道掘削等の改修事業に着手し，平成10年度に泡の巻地区，平成20年度に津尻地区まで完了した。引き続き長井地区に着手し，河道を掘削し護岸工事を行う改修事業である。なお，東北地方整備局郡山国道事務所の道路整備事業との調整を図り，本事業で発生する掘削土砂の一部を地域高規格道路国道121号「会津縦貫北道路」の盛土材として活用し，コスト縮減も図られている。

第2節　調査に至る経緯

小田高原遺跡は，喜多方市慶徳町山科字古屋敷地内に所在し，会津盆地北西部，阿賀川右岸の河

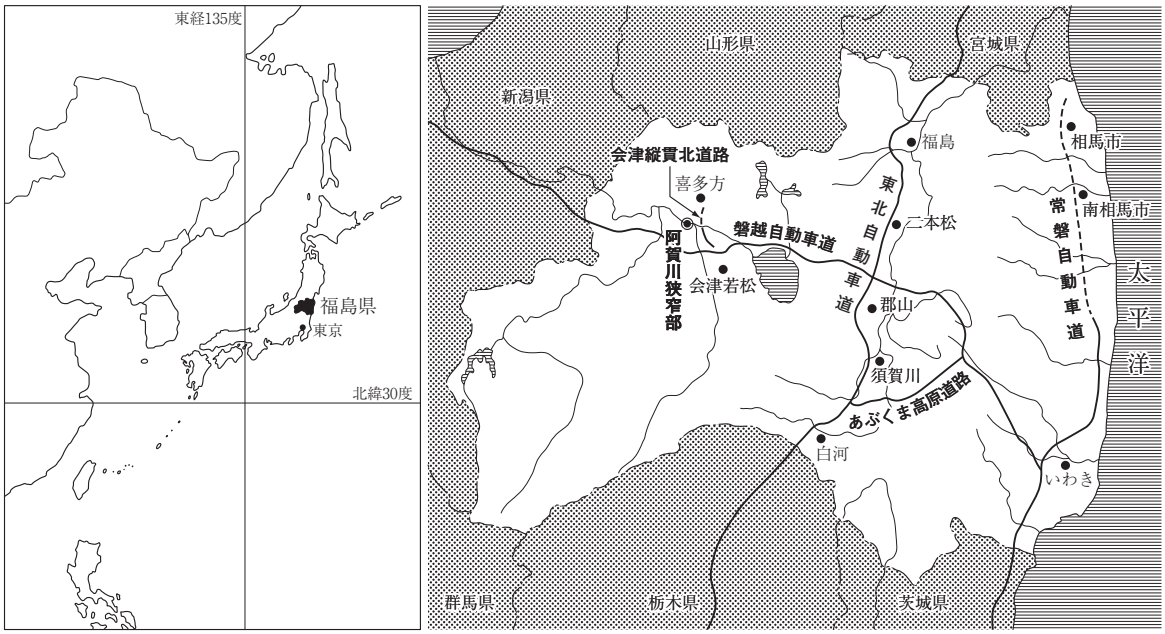


図1　阿賀川狭窄事業位置図

岸段丘上に位置する。旧喜多方市の市街地の西側に連なる琴平山麗の南西端部には小田高原台地が広がり，現況では耕地整理が進んだ水田地帯となっている。

小田高原遺跡は，古墳時代～奈良・平安時代の遺跡として登録され，遺跡の西側の段丘崖の山林部には小田高原窯跡が所在するとされ，昭和40年代後半の農道拡幅時に，古代の須恵器が多数採集されている。また，小田高原遺跡の北東には，西新田窯跡群が所在し，平成11～13年度に喜多方市教育委員会の実施した試掘調査では，９世紀前半～中葉にかけての須恵器窯跡や９世紀後半期の土器焼成遺構が確認されている。

平成19年11月に，国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所（以下，阿賀川河川事務所と略す）から，阿賀川下流狭窄部改修事業（長井地区）の実施に係る埋蔵文化財所在について，喜多方市教育委員会に協議依頼があり，工事予定箇所には小田高原窯跡が所在することから，両者は直ちに埋蔵文化財の保護を目的として協議を行うこととなった。その後，喜多方市教育委員会は，平成19・20年度にかけて阿賀川河川事務所と協議を重ね，これと併行して，工事予定箇所が小田高原遺跡とも隣接する場所であることから，福島県教育委員会とも協議の上，河川改修工事予定区域内の全域について試掘調査を実施することとした。

当初，試掘調査については，阿賀川河川事務所による用地買収が完了した後に，工事予定地内の樹木伐採が終了してから実施する計画でいたが，山林内に須恵器窯跡が存在する可能性があり，伐採木搬出の際に掘削される恐れがあったため，協議の結果，樹木の伐採前に試掘調査を実施することとしたが，これに伴い試掘トレンチを設定する場所が限定されることとなった。実際の試掘調査は，喜多方市教育委員会によって平成21年６・７月にかけて実施された。さらに，河川改修工事に関連して，小田高原遺跡北東部の遺跡範囲隣接地にて平成21年度中に水路等の改修工事を実施する計画が阿賀川河川事務所から示されたため，この工事箇所に該当する範囲についても８月に追加で試掘調査を実施した。これにより試掘調査の対象面積は，総計で25,350㎡となった。

試掘調査の結果は，調査範囲のほぼ全域から縄文時代，古墳時代，奈良・平安時代の遺構と遺物が確認され，大規模な複合遺跡であることが判明した。南北約330ｍ，東西約120ｍに及ぶ18,000㎡の範囲に加えて，洪水層に覆われた文化層の範囲（3,000㎡×２面）を含めた24,000㎡について埋蔵文化財包蔵地（遺跡）と確認された。

これにより，喜多方市教育委員会と福島県教育委員会が協議し，工事等の掘削により破壊される恐れのある場合には記録保存が必要と判断された。工事予定区域内で遺構・遺物が多数確認されたため，改修工事の予定地区については新たに埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として加えられることとなり，段丘最上面に位置する小田高原遺跡の一部として追加され，「福島県埋蔵文化財包蔵地台帳」にも遺跡範囲の追加変更が行われた。この結果に基づいて，福島県教育委員会と阿賀川河川事務所が，小田高原遺跡の保護を目的とする協議を行い，記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査の実施にあたっては，平成22年度より，福島県教育委員会が財団法人福島県文化振興事業団に委託して小田高原遺跡の発掘調査を実施することになった。（吉　田）

第３節　遺跡周辺の環境

地理的環境

福島県は東北地方で最も南に位置し，東北地方の玄関口に位置づけられる県である。県土の面積は13,782㎢を測り，北海道，岩手県についで３番目の広さを有する。そのうち８割は山地で占められており，南北に走る西から越後山脈・奥羽山脈・阿武隈高地に隔てられた会津地方・中通り地方・浜通り地方の３地方に分けられる。

会津地方の中心となる会津盆地は県内最大の内陸性盆地で，東西約13㎞，南北約35㎞の規模をもつ。盆地床の標高は175～220ｍを測る。小田高原遺跡の所在する喜多方市はこの会津盆地の北方に位置しており，市名である「きたかた」はこのことに由来するといわれる。

現在の喜多方市は，旧喜多方市と西部山間域の高郷村・山都町，東部盆地帯から山岳丘陵域を占める塩川町，北部山地帯の熱塩加納村の１市２町２村が平成18年に合併して成立し，新市域の総面積は約555㎢となった。東は耶麻郡北塩原村・磐梯町，西は耶麻郡西会津町と接し，南は阿賀川を挟んで河沼郡会津坂下町と，北は飯豊連峰を隔てて山形県と接している。

喜多方市の地形は中心街をなす中央の盆地域と，それを取り囲むように存在する山間地域に分かれる。東は標高1,404ｍの猫魔ヶ岳を主峰とする磐梯高原に，西は越後山脈から派生する標高1,000ｍ前後の山地に，北は飯豊連峰によってそれぞれ遮られ，南は西流する阿賀川によって区切られる。盆地域は大部分が上・中・下位の扇状地に分類され，盆地域には西から順に濁川，田付川，日橋川などが南西方向に流れ，阿賀川と合流する。北西部の山間地域では，只見川や一ノ戸川など中小の河川が発達し阿賀川に流れ込んでいる。

小田高原遺跡の所在する慶徳町は，喜多方市域でも西寄り，越後山脈から派生する山地の東縁，すなわち会津盆地の北西縁部に位置している。阿賀川は，この西部山地の手前で濁川，田付川，鶴沼川と交わり，山地へと流入する。現在，真木・袋原地区には捷水路が築かれ，河道が最短距離となっている阿賀川も，もとは左右に大きく蛇行を繰り返しながら山地を切り開いており，周囲の袋原・小田高原・真木・長井などには低位，中位の台地上の河岸段丘が発達する。

喜多方市域の地質をみると，中央の盆地部分は主に礫・砂・泥層からなる。西部の山地・丘陵地は新第三期中新世に属するものとされ，阿賀川東岸の慶徳町地域では礫岩，砂岩，泥岩，西岸部の高郷地域が緑色凝灰岩や砂岩・泥岩などからなり，山都町では，山都層群と呼ばれる礫岩・砂岩・泥岩・凝灰岩などからなる軟弱な地層が分布する。阿賀川と只見川流域に発達する河岸段丘面上には，会津シラスと呼ばれる沼沢火山放出物の水性二次堆積である軽石質砂を乗せている。

喜多方市域の気候は，全域が海から遠く離れた内陸性気候であるため寒暖の差が著しい。夏は高温多湿で７月の降雨量は200～300㎜ほどあって稲作に適するが，冬は寒く，特に山都町域では冬の季節風の影響を受け降雪が多く，豪雪法の「特別豪雪地帯」に指定されている。　　（宮　田）

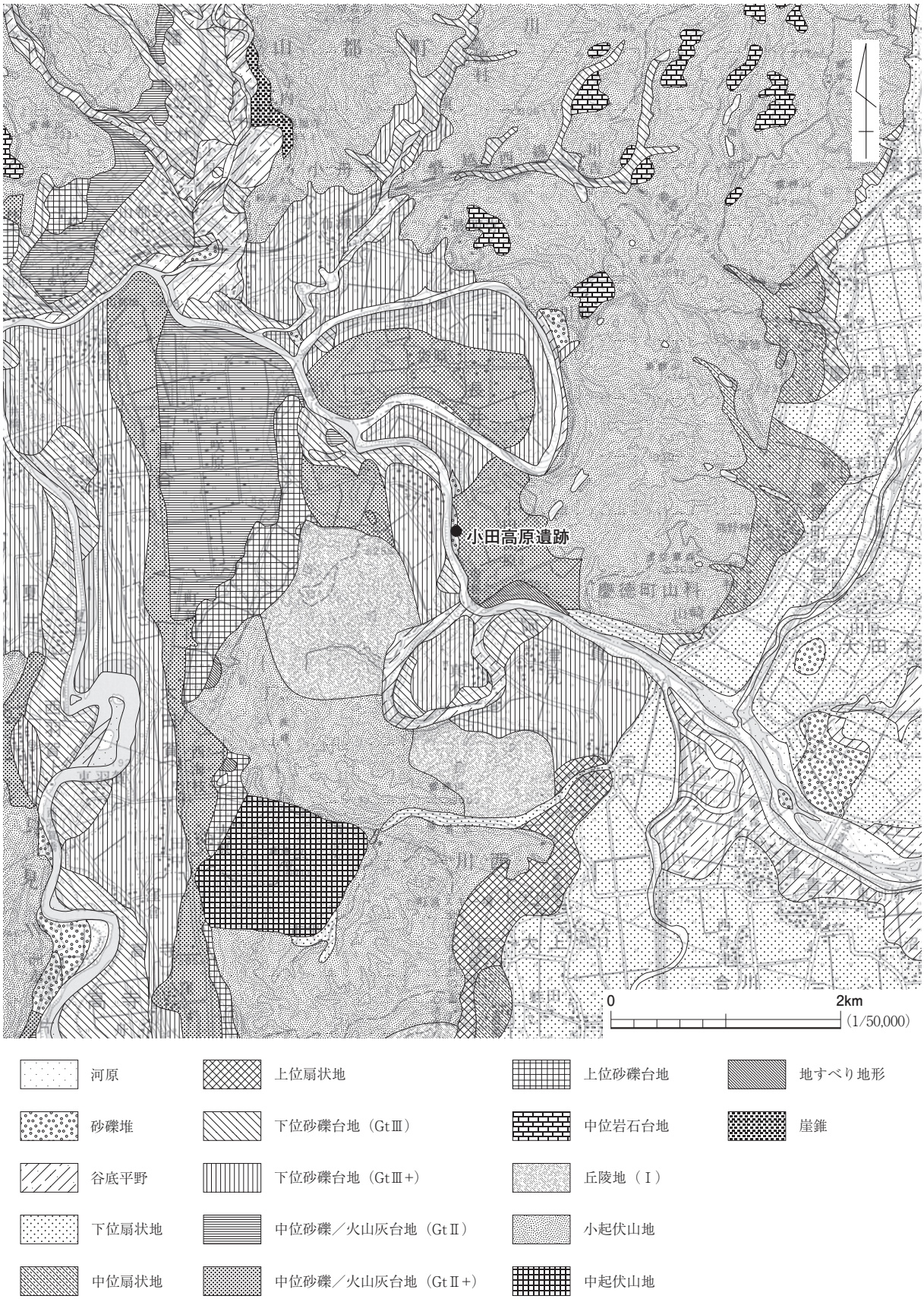


図2　遺跡周辺の地形分類（中村ほか1976を基に作成）

歴史的環境

現在の喜多方市内には，『福島県遺跡地図（会津地方）』（福島県教育委員会：1996）に登録されただけでも419を数える遺跡が存在する。

旧石器時代の遺跡として，高郷町塩坪遺跡が挙げられる。この遺跡は塩坪第１標高185～190ｍの阿賀川河岸段丘の端にあり，今から15,000年ほど前の後期旧石器時代の遺跡とされている。熱塩加納町地域にも旧石器～縄文時代の遺物散布地である丸山遺跡が存在する。

縄文時代の遺跡は，市域中央盆地部を挟んで，市南東部の塩川町雄国山麓と西部の山間部の山都・高郷町域，北部の熱塩加納町地域に分布する傾向が認められるが，中央盆地部でも遺跡が確認されている。東部の塩川町の雄国山麓には，早期後半の常世式土器の標識遺跡となっている常世・原田遺跡がある。この土器は貝殻腹縁文などが特徴的であり，雄国山麓に営まれた遺跡と新潟・北関東方面に分布が認められる。常世・原田遺跡の周辺には，前期～後期にかけての森台遺跡・上ノ台遺跡・南原遺跡・大原遺跡などが存在し，縄文時代の遺跡が多数確認されている。

北西部の山都・高郷町地域に目を転じてみると，市域東部に比べ中小の河川が発達し阿賀川に流れ込んでいる。山都町の一ノ戸川流域に存在する上林遺跡は古くから注目を集めた遺跡で，縄文・弥生時代の土器や石器が採集され，同時期の大規模集落遺跡である。この一ノ戸川上流域には廻戸遺跡や沢口段栗遺跡，長者屋敷遺跡など縄文時代の小規模遺跡が点在する。

高郷町の只見川流域では博毛遺跡・馬景遺跡・馬場遺跡など縄文中期～晩期の遺跡がある。盆地部の遺跡としては，塩川町鶴塚遺跡では後期の土器が，古屋敷遺跡では後期～晩期の土器が出土している。いずれも比較的小高い台地上に存在しており，集落の可能性が窺える。田付川流域の平沢北遺跡・治里遺跡・大沢遺跡は晩期の遺跡である。

小田高原遺跡の北約１㎞の会津坂下町袋原の阿賀川迂回部の河岸段丘上には，縄文時代晩期の大洞Ｂ式から大洞Ａ式土器が出土した袋原遺跡があり，土偶，打製石斧，石刀，独鈷石など多彩な土製品・石製品が出土している。

喜多方市における縄文時代の遺跡について概括的に述べれば，塩川町の雄国山麓域には早期～前期の遺跡が分布し，山都・高郷町地域には中期～晩期の遺跡が点在し，晩期になると盆地部にも集落が進出してくるといえよう。

弥生時代の遺跡は当地方でも数が少ないが，これまでに知られている弥生遺跡は中期段階の遺跡が主である。ＪＲ喜多方駅周辺の長内遺跡では，弥生土器とともに石庖丁が確認された。塚田Ａ遺跡・村前遺跡は濁川と田付川に挟まれた氾濫原上にあって，中期末～後期の集落跡が検出されている。松山町の三百苅遺跡・羽黒森遺跡・龍泉寺遺跡はいずれも散布地である。

この他先に述べた山都町の上林遺跡・二本木遺跡・金山遺跡，弥生時代前期の合口土器棺による再葬墓が確認された高郷町の上野遺跡がある。熱塩加納町の岩尾遺跡も弥生時代前期の再葬墓で，会津地方の弥生時代前期最古段階に比定される。会津坂下町には，大門遺跡や天王山式土器がまとまって出土した能登遺跡・高畑遺跡・上窪道北遺跡など10カ所の弥生時代の遺跡がある。

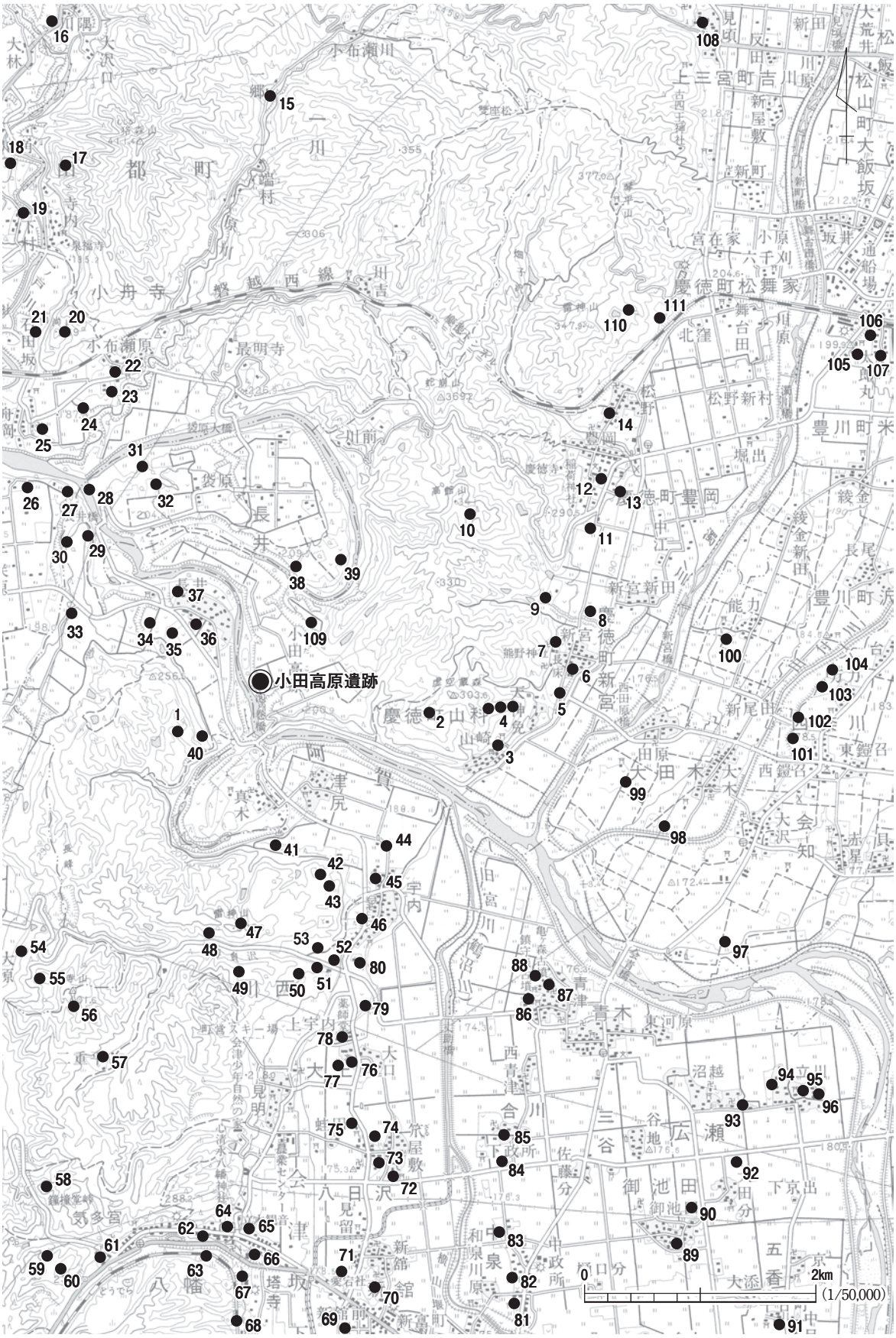


図 3　小田高原遺跡と周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡一覧

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　期
1	萩ノ窪窯跡	(会)長井字松曽根国有林	窯跡	平安
2	虚空蔵森古墳群	(慶)新宮字虚空蔵森	古墳	古墳
3	山崎横穴古墳群	(慶)山科字墓東	古墳	古墳
4	天神免古墳群	(慶)山科字虚空蔵森	古墳	古墳
5	招木遺跡	(慶)新宮字招木	集落	平安
6	新宮中世墓地	(慶)新宮字畑中	墳墓	中世
7	駿河館跡	(慶)新宮字熊野	城館跡	中世
8	新宮城跡	(慶)新宮字館内	城館跡	中世
9	灰塚山古墳	(慶)新宮字小山腰	古墳	古墳・中世
10	高館山城跡	(慶)豊岡字館石	城館跡	中世
11	八幡館跡	(慶)豊岡字不動前	城館跡	中世
12	慶徳城跡	(慶)豊岡字今町	城館跡	中世
13	新館跡	(慶)豊岡字本町	城館跡	中世
14	松野館跡	(慶)松舞家字稲荷前	城館跡	中世
15	一郷遺跡	(山)一川字一郷	散布地	平安
16	川隅塚	(山)木幡	塚	中世
17	高館館跡	(山)小舟字高館	城館跡	中世
18	日照田遺跡	(山)木幡字日照田	散布地	縄文
19	下村壇ノ越経塚	(山)木幡字壇ノ越	塚	近世
20	和尚山塚	(山)小舟字和尚山	塚	中世・近世
21	上ノ原平遺跡	(山)小舟字上ノ原平	散布地	平安
22	中条遺跡	(山)小舟字中条	城館跡	中世
23	小布施遺跡	(山)小舟字舘ノ内	城館跡	中世
24	船岡道遺跡	(山)小舟字船岡道	散布地	縄文
25	舟岡遺跡	(山)小舟字松岡道南	散布地	縄文
26	大村古墳群	(会)勝字大村	古墳	古墳
27	水上遺跡	(会)勝字水上	散布地	平安
28	竈原遺跡	(会)長井字竈原	散布地	縄文
29	板沢古墳	(会)長井字板沢	古墳	古墳
30	板沢遺跡	(会)長井字板沢	散布地	古墳・平安
31	竈館跡	(会)長井字竈	城館跡	平安
32	竈塚	(会)長井字竈	塚	平安
33	立子沼道下遺跡	(会)長井字立子沼道下	散布地	平安
34	山田遺跡	(会)長井字山田	散布地	縄文・平安
35	宮田遺跡	(会)長井字宮田	散布地	平安
36	極楽寺跡	(会)長井字宮田	社寺跡	中世
37	花畑遺跡	(会)長井字花畑	散布地	縄文
38	袋原窯跡	(会)長井字袋上	窯跡	平安
39	袋原遺跡	(会)長井字袋原	散布地	縄文
40	長井前ノ山古墳	(会)長井字七曲	古墳・塚	古墳・平安
41	山子遺跡	(会)宇内字山子乙	散布地	縄文・平安
42	鍛冶山遺跡	(会)宇内字鍛冶山	散布地	旧・縄・平
43	鍛冶山古墳群	(会)宇内字鍛冶山	古墳	古墳
44	宇内古屋敷遺跡	(会)大上字古屋敷	散布地	縄文
45	宇内古屋敷遺跡	(会)宇内字古屋敷他	散布地	縄文
46	五目遺跡	(会)宇内字五目	散布地	縄文
47	雷神山古墳群	(会)大上字次郎坂	古墳	古墳
48	勝負沢横穴群	(会)宇内字次郎坂		中世
49	森北古墳群	(会)宇内字森北	古墳	古墳
50	出埼山遺跡	(会)大上字森北	散布地	旧・縄・平
51	出埼山古墳群	(会)大上字森北	古墳	古墳
52	勝負沢遺跡	(会)宇内字勝負沢甲	散布地	縄文
53	次郎坂遺跡	(会)大上字次郎坂	散布地	旧・縄・平
54	福富館跡	(高)大田賀字大原	城館跡	平安
55	二ノ平館跡	(高)大田賀字櫛ヶ峯	城館跡	中世
56	高寺山古墳	(会)高寺字高寺	古墳	古墳
57	高寺遺跡	(会)高寺字二重平	散布地	縄文・平安
58	鐘突堂館跡	(会)高寺字鐘突堂	城館跡	中世
59	堂平Ａ遺跡	(会)気多宮字堂平	散布地	縄文・平安
60	堂平Ｂ遺跡	(会)気多宮字堂平	散布地	平安
61	堂平Ｃ遺跡	(会)気多宮字堂平	散布地	平安
62	松原遺跡	(会)塔寺字松原	散布地	縄・平・中
63	上ノ山遺跡	(会)塔寺字上ノ山	散布地	縄文～平安
64	茶碗塚地蔵経塚	(会)塔寺	塚	近世
65	大門遺跡	(会)塔寺字大門	散布地	縄文・弥生
66	経塚遺跡・古墳群	(会)塔寺字経塚	散布地	旧･縄･弥･古
67	観音森古墳	(会)塔寺字上ノ山	古墳	古墳
68	稲荷森古墳	(会)塔寺字上野	古墳	古墳
69	稲荷塚遺跡	(会)稲荷塚・上柳他	散布地	縄文～平安
70	大道遺跡	(会)大道	散布地	平安
71	森前遺跡	(会)新舘字森前	散布地	縄～古・平
72	天王遺跡	(会)八日沢字天王	散布地	平安
73	飯沼Ａ遺跡	(会)八日沢字飯沼	散布地	平安
74	飯沼Ｂ遺跡	(会)八日沢字飯沼	散布地	古墳・平安
75	八日沢遺跡	(会)八日沢字館ノ内	散布地	平安
76	寺ノ内遺跡	(会)大上字寺ノ内	散布地	平安
77	柳下Ｂ遺跡	(会)大上字柳下	散布地	平安
78	村北遺跡	(会)大上字村北	散布地	平安
79	惣座原遺跡	(会)大上字惣座原	散布地	平安
80	陣ヶ峯城跡	(会)宇内字五目	城館跡	平安
81	中屋敷Ａ遺跡	(会)中泉字中屋敷	散布地	平安
82	中屋敷Ｂ遺跡	(会)中泉字中屋敷	散布地	平安
83	三本木遺跡	(会)合川字三本木	散布地	平安・中世
84	宮ノ北遺跡	(会)合川字宮ノ北・村前	散布地	弥生～平安
85	政所館跡	(会)合川字政所	散布地	平安・中世
86	鎮守森古墳	(会)青津字館ノ越・中西	古墳	古墳
87	亀ヶ森古墳	(会)青津字館ノ越	古墳	古墳
88	男壇遺跡・石塔群	(会)青津字男壇	古墳・石造物	古墳・中世
89	旭田館跡	(会)御池田字旭田	城館跡	中世
90	御池田山ノ神遺跡	(会)御池田字山ノ神他	散布地	平安・中世
91	中目経塚	(会)五番字家ノ西	塚	中世
92	稲荷北遺跡	(会)沼越字稲荷北	散布地	平安・中世
93	辻田遺跡	(会)沼越字辻田	散布地	平安
94	高畑遺跡	(会)沼越字高畑	散布地	縄･弥･平･中
95	中立川遺跡	(会)立川字中立川	散布地	平安
96	東立川遺跡	(会)立川字東立川	散布地	平安
97	内屋敷遺跡	(塩)会知字内屋敷他	散布地	古墳～中世
98	鶴塚遺跡	(塩)大田木字鶴塚・下屋敷	集落跡	縄文～平安
99	古屋敷遺跡	(塩)大田木字古屋敷他	散布地	古墳
100	能力経塚	(塩)四奈川字稲荷前	塚	近世
101	鏡ノ町遺跡Ｂ	(塩)四奈川字鏡ノ町他	官衙関連	奈良～中世
102	鏡ノ町遺跡Ａ	(塩)四奈川字鏡ノ町	官衙関連	奈良～中世
103	牛塚古墳	(塩)四奈川字墓ノ前	塚	近世？
104	墓ノ前遺跡	(塩)四奈川字墓ノ前	散布地	奈良・平安
105	太郎丸西館跡	(豊)米室字館跡	城館跡	中世
106	太郎丸古墳	(豊)米室字太郎丸	古墳	古墳
107	太郎丸東館跡	(豊)米室字太郎丸	城館跡	中世
108	見頃館跡	(上)吉川字館中	城館跡	中世
109	西新田窯跡群	(慶)山科字西新田他	窯跡	奈良・平安
110	松野千光寺経塚跡	(慶)松舞家字金山	塚	平安・中世
111	松野千光寺跡	(慶)松舞家字大門	社寺跡	奈良

凡例　（慶）喜多方市慶徳町　（豊）喜多方市豊川町　（山）喜多方市山都町
（高）喜多方市高郷町　（塩）喜多方市塩川町
（上）喜多方市上三宮町　（会）河沼郡会津坂下町

古墳時代に入ると遺跡数は増加する。大和王権との結びつきによって，地域の支配者・首長の墓と考えられる古墳が盆地内に造営されるようになる。まず，弥生時代末～古墳時代前期初頭に位置づけられる周溝墓が，盆地部の舘ノ内遺跡や内屋敷遺跡，荒屋敷遺跡で検出されている。舘ノ内遺跡の周溝墓は四隅が張り出す形態で，周溝内から北陸系の土器が出土し，北陸地方や山陰地方の「四隅突出型墳丘墓」の影響を受けたものと考えられている。また，慶徳町木曽原遺跡では北陸系土器の他，玉造りに関連する管玉の未成品が多く出土した。この時期に北陸地方から人と玉造り技術が伝わったことが分かる。会津坂下町青津の男壇遺跡・宮東遺跡などでも方形周溝墓をはじめ，前方後円型・前方後方型の周溝墓が確認されている。

小田高原遺跡周辺の古墳としては，慶徳町の丘陵上に灰塚山古墳・虚空蔵森古墳群・天神免古墳群がある。天神免古墳群は小型の前方後円墳と円墳からなり，虚空蔵森古墳群は前方後円墳２基，円墳２基によって構成される。灰塚山古墳も前方後円墳で，立地や形状から見て，それぞれ前期古墳の可能性が高いと考えられる。この対岸である会津坂下町青津では亀ヶ森古墳・鎮守森古墳や西方の雷神山古墳など古式の古墳が比較的密集している。その北側の会津坂下町長井にも古墳時代前期～中期の築造と考えられる長井前ノ山古墳があるなど，付近には前期古墳が多く分布する。会津盆地の古墳は会津大塚山古墳を以って始めとする考えに変革を迫ると同時に，当地域での古墳の発生を考える上では欠かせない地域となっている。

盆地東縁にあたる塩川町雄国山麓の丘陵地帯先端部でも，多くの前期古墳が営まれ始めている。十九壇古墳群・深沢古墳，田中・舟ヶ森古墳，観音森古墳，高森山古墳が挙げられる。墳形不明なものもあるが，十九壇古墳群は前方後方墳・方墳からなる。その他，平坦地の古墳としては豊川町高堂太の水谷地古墳や同沢部の八幡塚古墳がある。

古墳時代中期～後期の古墳は，雄国山麓先端部に前期に引き続き比較的多く分布する。金森古墳・七ツ壇古墳群，常世・竹花古墳，狐壇古墳，明蓮寺古墳群などが確認されている。

盆地西部の慶徳町山科には，７世紀前葉の造営と考えられる山崎横穴古墳群がある。この横穴古墳群は，山崎集落北側の丘陵北東斜面に分布し総数37基の横穴古墳が確認されている。明治26年に発見され，遺物としては人骨，勾玉，直刀，馬具，須恵器などが出土した。また，盆地内では古屋敷遺跡で，後期の円墳７基が検出されている。北部の熱塩加納町や北西部の高郷・山都町における古墳の数は少ないが，熱塩加納町には高堰古墳群がある。山都町には七ツ壇古墳群があり，高郷町には６～７世紀の造営と考えられる前方後円墳の大谷古墳や藤の森古墳が存在する。

古墳時代の集落遺跡としては，塩川町の盆地平坦部に鶴塚遺跡や舘ノ内遺跡・内屋敷遺跡で後期の集落が確認されている。熱塩加納・山都・高郷町地域では，該期の集落遺跡は発見されていない。塩川町に存在する国指定史跡の古屋敷遺跡は，古墳時代中期の国内最大級の豪族居館跡である。この遺跡からは「コ」字状に配置された倉庫群や２つの方形区画施設，祭祀跡などが検出された。

奈良・平安時代には律令体制が確立し，喜多方市域は会津郡から９世紀前半頃に分置された耶麻郡に属したものと考えられる。奈良時代の遺跡は比較的少数だが，平安時代の遺跡は盆地平坦部に

おいて増加する。この時期の郡衙は明確でないが，これに関連する遺跡は塩川町鏡ノ町遺跡Ａ・Ｂ，内屋敷遺跡で確認された。鏡ノ町遺跡Ａ・Ｂでは多数の掘立柱建物跡，柵列，周溝状遺構などが検出され，墨書土器，奈良三彩陶器，陶器類などが出土した。内屋敷遺跡では奈良・平安時代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡，柵列などが検出され，出土遺物も猿投産施釉陶器，ロクロ土師器，須恵器，瓦塔，灯明皿などの仏具や円面硯，墨書土器などの出土資料があり，一般集落とは異なる様相を示している。

豊川町米室の村前遺跡や塚田Ａ・Ｂ遺跡などは，市域でも数少ない奈良・平安時代の複合遺跡である。山都・高郷町では，この時期の遺跡は只見川東岸の平坦地に集中している。これは当時主な産業が水田耕作であったために，耕作に都合のよい盆地に集落を営むようになったためと考えられる。市内関柴町・豊川町・慶徳町には，起源を古代の条里制に求められる格子状地割を構成する畦畔・水路・道路などが見出せるという。

小田高原遺跡から阿賀川を隔てた会津坂下町長井地区の東向き斜面上には，平安時代の須恵器窯跡である萩ノ窪窯跡が存在する。この窯跡は，須恵器と土師器長胴甕を同時に焼成した窯であることに特徴がある。小田高原遺跡の北東には西新田窯跡がある。平成10～13年にかけて試掘調査が行われ，須恵器窯と土器生産遺構からなる生産遺跡であることが判明した。この他にも小田高原遺跡から約１㎞北方の会津坂下町袋原には同時代の窯跡である袋原窯跡が存在するなど，遺跡周辺には窯跡がいくつかあり，会津盆地北西縁部に土器生産に関わる集団が存在したことを窺わせる。

古代末～中世初期には律令制の崩壊が進む。この時期の遺跡としては，塩川町鏡ノ町遺跡Ａ・Ｂ，荒屋敷遺跡，内屋敷遺跡などがある。荒屋敷遺跡では白磁・かわらけ・珠洲系中世陶器などが出土し，日橋川の「津」（川湊）であろうとされる（井：2003）。中世初期における川の水運を利用した物資の流通が窺える。内屋敷遺跡ではこの時期の遺構として，掘立柱建物跡，道路跡，方形区画施設などが検出された。方形区画施設の中からは方形竪穴状遺構や井戸跡などが検出され，何らかの宗教施設ではないかとされる。

会津坂下町に目を向けると，宇内に陣が峯城跡がある。本城跡は勝負沢が形成した標高195.0～197.5ｍの扇状地上にあって，堀に囲まれた平場から掘立柱建物跡，土塁，溝状遺構，土坑，鍛冶炉などが検出されており，貿易陶磁器，国産陶磁器，土師質土器，漆器類，須恵系陶器，銅製錘（権衡）などが出土している。

中世になると武家社会が確立し，上三宮町には佐原氏を地頭とする加納庄が，慶徳町を中心に新宮氏が支配する新宮庄が成立する。新宮庄は新宮の熊野神社の社領が荘園化したものといわれ，庄域は熊野神社周辺にとどまらず，塩川町西部および山都町，高郷町，耶麻郡西会津町のうち阿賀川以北の一帯に比定されている。これらの荘園領主は応永～永享年間（1394～1441）に滅亡し，蘆名氏の支配下に入る。この時期には盆地部に城館跡が数多く残る。新宮氏の居館である新宮城跡は，濁川西岸の河岸段丘上に立地し，土塁，盛土整地層，柱穴などが検出され，土師質土器，陶器，磁器，石製品，金銅仏などが出土した。本丸跡には土塁がめぐる，いわゆる方形館である。付近には駿河

館跡や八幡館跡・高館山城跡など中世城館跡が分布する。

この他，慶徳町の松野千光寺経塚では，東北最古の経塚遺物である大治５年(1130)銘をもつ石櫃が出土した。また，本経塚からは経筒，独鈷杵，五鈷杵などが出土し現存している。塩川町には「鎧召」・「源太屋敷」，会津坂下町には「中政所」・「下政所」などといった中世的な地名が今日でも残っている。

戦国時代に入ると，会津地方でも戦乱が相次ぐ。その多くは大名化する蘆名氏と在地領主との戦いであった。天文年間(1532～1554)には，会津の諸領主のほとんどは蘆名氏に服属した。田付川東岸の小田付村と西岸の小荒井村は，それぞれ蘆名家臣の佐瀬氏と小荒井氏の支配下に入った。この２つの村は江戸時代には会津北部の経済・文化の中心となり，現在の喜多方市街地の原型となった。天正17年(1589)，蘆名氏は摺上原の戦いで伊達政宗に滅ぼされるにいたる。

近世の喜多方市は，戦国の群雄割拠の時代から幕藩体制に組み込まれる。その初期に伊達氏の支配から蒲生氏郷・上杉景勝・加藤嘉明・蒲生秀行(再蒲生)の時代を経て，寛永20年(1643)保科(松平)氏の治世を迎える。喜多方市は会津藩領となり漆器や酒・味噌・醤油などの醸造業が発達した。塩川には代官所も置かれた。銀の採掘を主とした熱塩加納町の加納鉱山は，近世初期の創業といわれている。山都・高郷町は阿賀川と只見川の合流点に位置しており，越後裏街道が通り，交通の要所にあたっていた。

塩川町は慶長13年(1608)に桧原峠越え米沢街道の宿駅に定められた。この時期の遺跡としては，塩川町の旧米沢街道沿いに別府の一里塚がある。中世～近世にかけての塚・石造物なども多く，牛塚・七ツ壇塚群，能力経塚など宗教に関わる遺物が多く残されている。山都町には舘原代官所，旧一ノ戸村制札場などが残されている。塚などの信仰に関連する遺構も少なくない。

慶長16年(1611) 9月27日に発生した所謂「会津慶長地震」は喜多方市にも甚大な被害をもたらした。この大地震の影響で山崎村(喜多方市慶徳町)の山崩れによって阿賀川が堰き止められ，東西４～５㎞・南北２～４㎞に及ぶ山崎新湖が形成された。この新湖によって23の集落が水没したとされる。また，山崎新湖が完全に消滅したのは大地震の発生から34年以上の年月がかかったとされる。山崎新湖によって，会津坂下町が越後街道筋の宿駅に変更された。

慶応４年(1868)の戊辰戦争の際には，熊倉村や小田付村などが戦場となり被害をこうむった村も多かった。

喜多方市は近代に入ると，明治８年(1876)に耶麻郡から小荒井・清次袋・塚原・小田付・稲村の５カ村が合併して喜多方町が成立し，若松県を経て明治９年(1877)に福島県に所属する。明治14年(1882)には耶麻郡役所が塩川町から，喜多方町へ移された。

当地方は明治初年頃から製糸業が発達した。また，明治15年(1883)時の県令三島通庸が会津三方道路の開削を図り，農民たちに過酷な負担を強制したのに対し，自由党会津部の民権家たちに指導された農民が服役・代夫賃拒否闘争を繰り広げたいわゆる喜多方事件があるなど，当地域は自由民権運動でも先進的役割を果たした地域でもある。　　(宮　田)

第１章　調 査 の 概 要

第１節　遺跡の位置と地形

小田高原遺跡は，喜多方市慶徳町山科字古屋敷・西新田に所在する。北緯37度37分07秒，東経139度48分02秒に位置している。ＪＲ磐越西線喜多方駅の南西約6.4㎞のところにあって，遺跡の西側を北流する阿賀川を挟んだ対岸は，河沼郡会津坂下町長井地区となる。

小田高原遺跡は，越後山脈から派生する山地が阿賀川によって開析された，通称「小田高原台地」と呼ばれる中位砂礫／火山灰台地（GT Ⅱ＋）の西半から阿賀川の縁までが範囲とされる。調査対象となった箇所は，台地の西端から段丘崖，河川敷の範囲である。その標高はおよそ170～200ｍを測る。段丘崖には，標高175ｍ・190ｍ付近に小段丘状の平坦面が２段形成されており，最上位段丘面と最下位の河川敷を合わせて，都合４面の平坦面を有している。

調査範囲の平面積は19,300㎡を測り，平成22年度実施した１次調査はこのうち南西部分を除き，河川敷の文化面重層範囲1,000㎡を加えた15,800㎡である。（宮　田）

第２節　調 査 経 過

小田高原遺跡の発掘調査は平成22年５月13日に開始し，12月17日に終了した。延べ日数は107日である。今回の１次調査は，調査員を６名配し，15,800㎡相当の面積について発掘調査を実施した。調査に先立ち行われた福島県教育委員会・国土交通省阿賀川河川事務所による事前協議で工事工程上の優先箇所が示されており，かかる調査区東部の3,000㎡（後，工事計画の変更等によって4,900㎡まで拡幅）の範囲をⅠ区として発掘調査に着手した。河川側の調査区については，Ｘ座標：179,650を境界として，以北をⅡ区，以南をⅢ区とした。

５月13日に現地入りし，事前準備として作業員雇用説明会，連絡所，駐車場造成を行った。用地内の森林伐採が終了予定日よりも遅延したため，重機による表土除去の着手は25日からである。

６月上旬，桜町遺跡から発掘器材を搬入。６月８日，慶徳地区の作業員の雇用を開始し，Ⅰ区の遺構検出作業に着手する。６月10日，Ⅱ区の重機による表土除去作業を開始する。同日，Ⅰ区で古代の竪穴住居跡と，南北に延びる１号溝跡を確認する。６月14日，Ⅱ区の北東部で須恵器窯跡を確認した。６月22日から堂島地区の作業員の雇用を開始する。Ⅰ区の斜面部で形成されている遺物包含層の掘り込みを開始する。

７月９日，調査Ⅰ区の南東部斜面でクラックが発生したため，大型土嚢等による処置を行う。７月21日から豊川地区の作業員の雇用を開始し，Ⅱ区の遺構検出作業に着手する。梅雨が明けた７月下旬以降，記録的な猛暑が連日続く。

図4　調査範囲と工事計画

8月4・5日，小田高原遺跡のまほろん教職員体験研修に8名が参加，Ⅰ区で体験発掘が実施される。8月20日，新潟大学卜部准教授来跡。8月23日，Ⅲ区の重機による表土除去を開始する。8月25日，ラジコンヘリによるⅠ区の空中写真撮影・測量を実施。

9月上旬も連日の猛暑。9月7日，慶徳・豊川地区の作業員の追加雇用を開始する。Ⅱ区で竪穴住居跡，土坑を検出した。9月9日，Ⅰ区の3,900㎡について引渡しが行われる。9月10日，慶徳町婦人会が小田高原遺跡の見学に訪れる。9月27日，秋雨の影響によってⅡ区の東側斜面が崩落し，多量の土砂が流入しているのを確認する。9月下旬は連日の排水作業に追われる。9月30日，Ⅲ区で平安時代の竪穴住居跡を確認する。

秋雨が落ち着いた10月5日から，Ⅱ区に流入した土砂の除去を開始する。10月8日，畦畔の付け替えが終了し，Ⅰ区の追加分400㎡について調査を開始する。10月20～22日，Ⅱ区を中心に簡易ボーリングによる地質調査を実施した。

11月８日，Ⅰ区400㎡の引渡しが行われた。11月10日，ラジコンヘリによるⅡ区の空中写真撮影・測量を実施した。

12月１日，ラジコンヘリによるⅡ区の空中写真撮影・測量を実施した。12月７日にⅠ区，10日にⅢ区の調査が終了する。12月15日，Ⅰ区とⅢ区の調査終了部分について引渡しが行われた。12月16日，Ⅱ区の第１文化層とした箇所について調査が終了する。翌17日，器材撤収と作業員の雇用が終了し，小田高原遺跡の１次調査が終了した。なお，Ⅱ区北側の斜面崩落による土砂流入防止と安全を確保するため，Ⅱ区内に大型土嚢を設置する作業を12月20～24日の期間で実施した。

２次調査の早期着手を目指して，平成23年３月７～24日の日程で，Ⅲ区の重機による表土除去を計画した。３月７日，調査員２名を配し，Ⅲ区の北東部から表土除去を開始する。３月11日の午後３時前，東日本大地震が発生。調査区も大きく揺れ，避難する。調査区の内外で土砂崩れ等の発生は認められなかった。３月14日，阿賀川河川事務所からの作業中止指示を受け，調査区内に待機していた重機を撤収した。（宮　田）

第３節　調 査 方 法

今回の調査で使用した測量座標は，公共座標Ⅸ系Ｘ＝179,800，Ｙ＝－3,000を基点とし，10ｍ四方のグリッドを調査区全体に網羅した。座標値は世界測地系による。グリッドは基点から東へ10ｍごとにアルファベットでＡ・Ｂ…，南へ算用数字で１・２…と付し，その組み合わせによってＡ１・Ｂ１…と呼称した。各グリッドには測量杭を設定し，遺構の記録，遺物の採り上げに利用した。標高は阿賀川河川事務所が設定した基準点を利用し，遺跡・遺構等の標高観測・調査に利用した。

基本土層は，アルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせて表し，さらに細分した層については，ローマ数字の後にアルファベット小文字などを付けて，ＬⅠａ・ＬⅡｂ・ＬⅡコ・ＬⅢＥ…などのように表した。

竪穴住居跡などの大型遺構の掘り込みは，４分割法によって行った。土坑など比較的小型の遺構については２分割法で掘り込みを行った。遺物包含層の掘り下げは，グリッドに沿って10ｍ四方の正方形の畦を残して掘り下げ，断面観察・記録を行った。土色の判別には『新版標準土色帖』を用い，記録した。住居跡・須恵器窯跡・竪穴遺構は1/20，土坑・小穴・焼土遺構は1/10または1/20で，溝跡・畝状遺構は1/40または1/80で図化した。

遺構の写真は35㎜版および６×4.5㎝版カメラを用い，モノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムで，同一被写体を同一アングル，同一コマ数で撮影した。調査範囲の全景写真はラジコンヘリコプターによる空中写真撮影による。

発掘調査で得られた資料は，財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部で整理作業を行い，報告書刊行後は所定の様式に従い，各種の台帳類を作成し，福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。（宮　田）

図5　調査範囲の区割りとグリッド配置

表２　竪穴住居跡一覧

（　）：遺存値

遺構番号	挿図番号	位　置	平面形	規模（cm）			年　代	遺　物	備　考
				長径	短径	深さ			
SI01	8・9	Ⅰ区（P27･28）	方形	400	350	20	８Ｃ末～９Ｃ前	稜椀	
SI02	12･13	Ⅰ区（P26･27）	方形	510	(410)	20	８Ｃ末～９Ｃ前	鉸具	工房？
SI03	19	Ⅰ区（P・Q28･29）	方形	400	－	20	８Ｃ末～９Ｃ前		南半調査区外
SI04	66	Ⅱ区（H・Ⅰ10）	長方形	400	340	42	９Ｃ末～10Ｃ前	土師器	
SI05	68	Ⅱ区（Ⅰ・Ｊ８）	方形	(327)	－	10	９Ｃ中～後	土師器	
SI06	107･108	Ⅲ区（Ｊ17･18）	長方形	518	405	23	９Ｃ末	土師器・須恵器	SI06＞SI11
SI07	23	Ⅰ区（Q27）	方形	220	190	30	８Ｃ末～９Ｃ前		竪穴状遺構
SI08	70	Ⅱ区（Ⅰ７）	長方形	(435)	353	23	９Ｃ末～10Ｃ前	土師器・刀子	
SI09	73	Ⅱ区（H・Ⅰ９）	方形	244	(220)	14	９Ｃ末～10Ｃ前	土師器	竪穴式住居跡
SI10	27	Ⅰ区（P26･27）	方形	360	300	20	８Ｃ末～９Ｃ前	土師器・須恵器	竪穴状遺構
SI11	112･113	Ⅲ区（Ｊ17）	方形	530	498	61	９Ｃ中～後	土師器・須恵器	
SI12	74	Ⅱ区（H13）	方形	550	520	40	９Ｃ末～10Ｃ前	土師器・刀子	竪穴状遺構
SI13	76	Ⅱ区（H11）	長方形	438	350	30	９Ｃ中～後	土師器・須恵器	竪穴状遺構

（新）＞（旧）

表３　須恵器窯跡一覧

（　）：遺存値

遺構番号	挿図番号	位　置	平面形	規模（cm）			年　代	遺　物	備　考
				長径	短径	深さ			
SR01	79･80	Ⅱ区（Ｋ６）	羽子板状	(206)	124	－	９Ｃ中～後	須恵器	SR01＞SR03
SR02	79･84	Ⅱ区（Ｋ６）	楕円形	(205)	(103)	－	９Ｃ中～後		
SR03	79･85	Ⅱ区（Ｊ・Ｋ５・６）	台形	(195)	145	－	９Ｃ中～後	須恵器	

（新）＞（旧）

表４　溝跡一覧

（　）：遺存値

遺構番号	挿図番号	位　置	平面形	規模（m）			年　代	遺　物	備　考
				長径	短径	深さ			
SD01	28	Ⅰ区（N８～O29）		213	1.4	0.4	８Ｃ末～９Ｃ前		
SD02	29	Ⅰ区（O28, P28･29）		10.0	0.6	0.6	８Ｃ末～９Ｃ前	土師器	
SD03	31	Ⅰ区（O・P22）		6.4	0.6	0.5	８Ｃ末～９Ｃ前		排水溝？
SD04	89	Ⅱ区（Ｋ５～７）		28	0.9	0.2	平安時代～	須恵器	道跡？
SD05	117	Ⅲ区（Ｊ18）		6.0	1.7	0.2	平安時代	土師器	通路？
SD06	32	Ⅰ区（O・P20）		4.4	0.4	0.1	奈良～平安時代		排水溝？
SD07	33	Ⅰ区（O15･16）		6.0	1.6	0.5	８Ｃ末～９Ｃ前		排水溝
SD08	33	Ⅰ区（O15）		3.2	1.1	0.3	８Ｃ末～９Ｃ前		排水溝
SD09	91	Ⅱ区（H14）		(9.5)	1.9	1.0	平安時代～	土師器	

表５　焼土遺構一覧

遺構番号	挿図番号	位　置	平面形	規模（cm）			年　代	遺　物	備　考
				長径	短径	深さ			
SG01	123	Ⅲ区（Ⅰ20）		75	54	3	平安時代		

表６　土坑一覧

（　）：遺存値

遺構番号	挿図番号	位　置	平面形	規模（cm）			年　代	遺　物	備　考
				長径	短径	深さ			
SK01	34	Ⅰ区（Q28）	楕円形	120	90	25	８C末～９C前		
SK02	34	Ⅰ区（Q28）	楕円形	110	90	25	奈良～平安時代		
SK03	34	Ⅰ区（P27）	方形	300	270	35	８C末～９C前		土器焼成土坑？
SK04	34	Ⅰ区（O29）	方形	(115)	110	35	８C末～９C前		木炭焼成土坑？
SK05	35	Ⅰ区（O28）	方形	(230)	215	20	８C末～９C前		土器焼成土坑？
SK06	35	Ⅰ区（P26）	円形	170	－	80	８C末～９C前		簡易水溜用施設
SK07	36	Ⅰ区（O29）	方形	140	(110)	40	８C末～９C前		土器焼成土坑
SK08	36	Ⅰ区（L31）	長方形	115	55	75	縄文時代		落し穴
SK09	36	Ⅰ区（P21）	楕円形	230	140	75	縄文時代		
SK10	92	Ⅱ区（H10）	楕円形	192	140	18	平安時代	土師器	土器焼成土坑？
SK11	35	Ⅰ区（P・Q27）	方形	135	80	20	奈良・平安時代		
SK12	36	Ⅰ区（P27･28）	円形	80	－	20	８C末～９C前		
SK13	37	Ⅰ区（O28）	方形	180	(160)	15	８C末～９C前		土器焼成土坑？
SK14	37	Ⅰ区（O28）	楕円形	120	(50)	20	８C末～９C前		SK14＞SK15
SK15	37	Ⅰ区（O28）	楕円形	(100)	(40)	10	８C末～９C前		SK15＜SK14
SK16	37	Ⅰ区（P26）	楕円形	170	145	25	８C末～９C前		
SK17	38	Ⅰ区（P26）	円形	250	－	95	８C末～９C前		簡易水溜用施設
SK18	118	Ⅲ区（J18）	楕円形	200	173	21	９C末	土師器・須恵器	SK18＞SD05
SK19	36	Ⅰ区（O19）	円形	90	－	25	奈良・平安時代		木炭焼成土坑
SK20	37	Ⅰ区（P26）	楕円形	160	(140)	70			SI02＞SK20
SK21	118	Ⅲ区（J18）	楕円形	95	85	30	９C末～	土師器	SK21＞SI06
SK22	119	Ⅲ区（I20）	楕円形	56	48	14	９C中～後	土師器	
SK23	119	Ⅲ区（J18）	円形	54	－	30	９C中～末	土師器	ロクロピット
SK24	119	Ⅲ区（J19）	円形	58	－	14	９C中～末	土師器	
SK25	92	Ⅱ区（I8）	円形	150	－	23	9C末～10C前	土師器	土器焼成土坑
SK26	92	Ⅱ区（H10）	不明	210	(84)	16	9C末～10C前	土師器・須恵器	
SK27	38	Ⅰ区（O17）	長方形	(300)	90	15	奈良･平安時代		木炭焼成土坑
SK28	92	Ⅱ区（J12）	円形	80	－	40	平安時代		
SK29	120	Ⅲ区（I21･22）	長方形	(176)	(120)	26	９C	土師器	土器焼成土坑
SK30	120	Ⅲ区（I20）	円形	68	62	20	８C末～９C初		
SK31	120	Ⅲ区（I22）	円形	(90)	－	16	８C末～９C初		
SK32	92	Ⅱ区（G12）	楕円形	213	150	14	９C代	土師器・須恵器	土器焼成土坑？
SK33	38	Ⅰ区（O17）	楕円形	100	(60)	15	奈良･平安時代		
SK34	93	Ⅱ区（H9）	楕円形	115	98	32	９C末～10C前		
SK35	93	Ⅱ区（J5）	方形	(95)	(53)	10	平安時代～		木炭焼成土坑

（新）＞（旧）

表７　その他の遺構一覧

（　）：遺存値

遺構番号	挿図番号	位　置	平面形	規模（cm）			年　代	遺　物	備　考
				長径	短径	深さ			
SX01	122	Ⅲ区（I19）	方形	302	298	70	18C後～	磁器・鉄製品	竪穴遺構
SX02	96	Ⅱ区（F16, G14～16）		(580)	－	－	近世？		畝状遺構

第２章　調査Ⅰ区の遺構と遺物

第１節　　概　　要

調査Ⅰ区は今回の調査範囲東部に位置し，Ⅰ区西側には調査Ⅲ区が接している。地形的には，阿賀川右岸沿いに形成された河岸段丘面にあたる。なお，遺跡の主体は，標高197.5～198.0ｍの最上位の段丘面である。（Ⅰ区の報告にあたっては，便宜的に集落が確認された最上位の段丘面を最上位段丘面として報告することとした。）また，段丘崖を経て下位に小規模な段丘面が形成されている。段丘崖には幾つか小規模な沢が形成されており，その部分が湧水地となっている。調査Ⅰ区内の段丘面の比高差は約13ｍである。

調査区の現況は，最上位の段丘面が水田，段丘崖および小規模な段丘面は雑木林である。なお，Ⅰ区南端部の段丘崖部については，土層断面の観察から基盤層が地すべりを起こし，窪地になった部分に水田補助整備時等による盛土がなされ現地形を形成していることが判明した。このため，この部分についてはトレンチによる土層観察と土層作図に留めた。

調査Ⅰ区で確認された遺構は，竪穴住居跡５軒（内２軒は竪穴状遺構），土坑20基，溝跡６条などである。なお，昭和40年代に阿賀川に続く農道切通しで確認された須恵器窯跡については，今回の調査では確認されなかった。地区の古老によれば，この農道については降雨などで度々崩れていたようであり，須恵器窯跡についてはこれらの要因で既に消失しているものと考えられる。

調査Ⅰ区で確認された遺構の所属時期については，本遺跡の主体時期である奈良時代末～平安時代初頭にかけてのものが大半である。遺構の分布状況は，図７に示したようにほぼ調査区の東南端部分に集中している。確認された遺構は最上位段丘面の縁部に位置しており，集落の中心部は調査区の東側の水田が広がる段丘面に形成されているものと考えている。

遺物は，土師器片約24,780点，須恵器片約1,780点，縄文土器片約400点，土製品25点，石器・石製品20点，鉄製品１点，鉄滓などが出土した。これらの遺物は，調査区の全体から出土しているものの，その大半は遺構内や遺構周辺部からの出土で，他の部分での出土状況は希薄である。

なお，出土遺物の中には，窯体などが付着した須恵器等も認められ，近くに須恵器窯跡が営まれていたことを窺い知る遺物も確認されている。また，検出した遺構内からは，器面が爆ぜ，底部が抜け落ちた土器や粘土塊を多量に含むものも認められ，集落内で須恵器窯および焼成坑などによる土器生産を併せて行っていたものと考えられる。

出土遺物については，奈良時代末～平安時代初頭の遺物が主体を占める。遺物包含層と層位の関係については，「本章第２節」で述べる。　　（大河原）

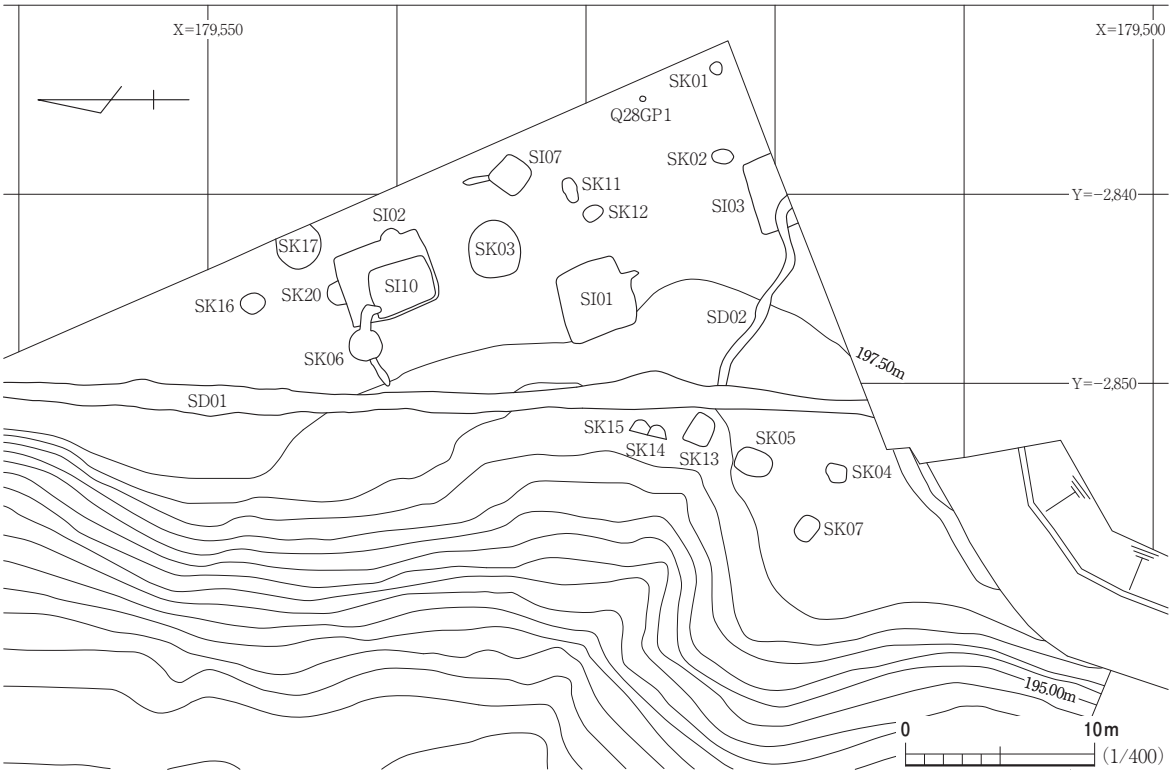


図６　遺構配置図（Ｉ区南部）

第２節　基 本 土 層

調査Ｉ区の地形は，阿賀川右岸沿いに形成された河岸段丘にあたり，複数の大小規模の段丘面と段丘崖がいくつか形成されている。このため，段丘によって土層の堆積状況が異なっている。土層の堆積状況は最上位段丘面の一部で水田耕作による削平，撹乱が認められるものの比較的安定した堆積状況にあった。また，最上位段丘では遺物包含層と遺構の検出層位との関係も確認できたことから，最上位段丘面を基本的な層位とし，調査区内にまたがる段丘全体を概観し，各層ごとの特徴や遺構の検出状況，包含される遺物などの関係から各層を対応させ，以下の７層に大別した。

ＬＩは黒色土で，調査区全体に分布する現表土，耕作土である。層厚は10～50㎝。特に調査区南側では，水田補助整備事業時などで削られた土が段丘崖に押し出され，層厚が２ｍに及ぶ部分も認められる。これらの盛り土には，削平された包含層も含まれ，部分的に多量の遺物を含む場所も認められた。

ＬＩｂは，暗灰黄色粘質土である。調査区の東南部のＭ・Ｎ29グリッド周辺部に部分的に堆積する層である。層厚は10～30㎝。本層については堆積状況等からＬⅣの再堆積層と考えられる。少量の遺物を含むが上方からの流れ込みによる再包含と思われる。土層観察の結果，本層下位でＬⅡが確認(柱層図⑥)されたことからＬⅡ堆積後に形成された層と判断した。

ＬⅡは黒褐色土でほぼ調査区全体に堆積する層である。層厚は５～30㎝を測る。縄文時代・奈良

時代末～平安時代初頭の遺物を包含するが，縄文時代の遺物の出土量は少ない。また，遺物の包含密度は，遺構が確認された最上位段丘面周辺とその下位の段丘崖にかけて密度が高く，それ以外の場所では希薄である。

ＬⅢは暗褐色砂質土で集落が形成された最上位段丘面とその下位の段丘崖の一部に堆積する層である。層厚は10～30㎝。１～５㎝程度の沼沢パミスを含む。本層から遺物は出土していない。奈良時代～平安時代の遺構の検出層位である。なお，今回の調査では，本層から縄文時代の遺構は確認されなかった。

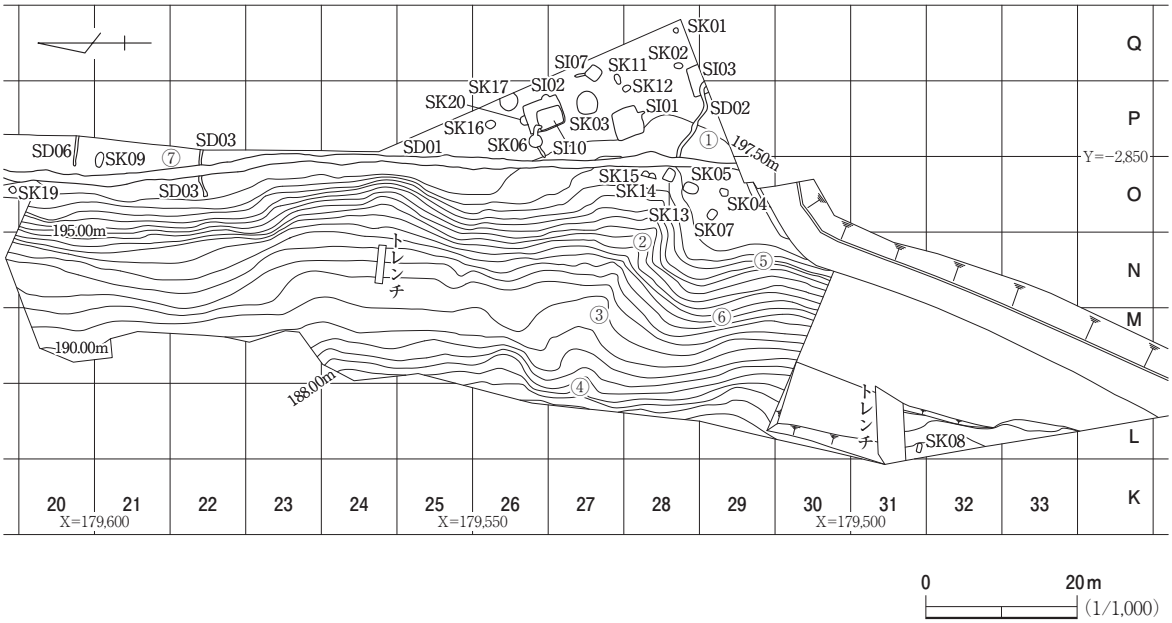
また，段丘崖の一部で確認されたＬⅢについては，土層断面等の観察から最上位段丘面から流れ込んだＬⅢが沢地形に留まった再堆積層と考えられ，ＬⅢについては本来最上位段丘面にのみ堆積していた層と考えている。

ＬⅢａは黄灰色粘質土で調査区南側Ｍ29グリッド周辺の段丘崖の一部に堆積する層である。層厚は10㎝を測る。土質や堆積状況等から基盤をなすＬⅤの再堆積層と考えられる。本層から遺物は出土しなかった。また，ＬⅢとの直接的な層序関係は確認できなかったものの，ＬⅡ下位で確認されていることからＬⅡ形成以前には堆積を終了していると判断し，本層についてはＬⅢａとして報告することとした。

ＬⅣは黒褐色土で最上位段丘面とその下位の段丘崖の一部に堆積する。層厚は10～15㎝。本層から遺物は出土していない。最上位段丘面では比較的安定した堆積状況にあるものの，その下位の段丘崖や小規模な段丘面では部分的に認められる。本来はこれらの場所でも安定した堆積状況にあったと考えられるが，地形的な要因等で流失してしまったものと思われる。遺構は，最上位段丘面で縄文時代の土坑が本層で確認されている。なお，奈良時代～平安時代の遺構については本層でも確認しているが，これらは，ＬⅢが欠落した部分やＬⅢの層厚が薄く遺構検出作業時に本層まで掘り下げてしまった結果であり，本来はＬⅢ上面で遺構が構築されていたものと考えている。

ＬⅤはにぶい黄橙色粘質土で調査区全体に堆積する。遺物は含まず，本調査区の基盤をなす層である。なお，基盤層については調査区内で色調や土質の相違はあるものの，細分せずにＬⅤとして報告した。

以上のように，本調査区では最上位段丘面で比較的安定した堆積状況が認められるが，その下位の段丘崖および小規模な段丘面では，地形的な要因等により，層が欠落または再堆積層が部分的に確認された。遺物は，ＬⅠ・Ⅰｂ，ＬⅡに包含されているが，ＬⅠ・Ⅰｂについては，耕作時ないし再堆積時の流れ込みによって再包含されたものと思われ，本来の遺物包含層はＬⅡとなる。包含される遺物は，縄文時代では前期前葉，中期中葉，後期前葉，晩期と各時期にわたっているが出土量は少なく，各時期で出土の分布状況に相違は認められない。また，奈良時代・平安時代の遺物についても遺構が確認された周辺の最上位段丘面からの出土が大半である。この他に，最上位段丘下位からも遺物は出土しているが，沢地形にＬⅡが部分的に堆積した場所である。　（大河原）



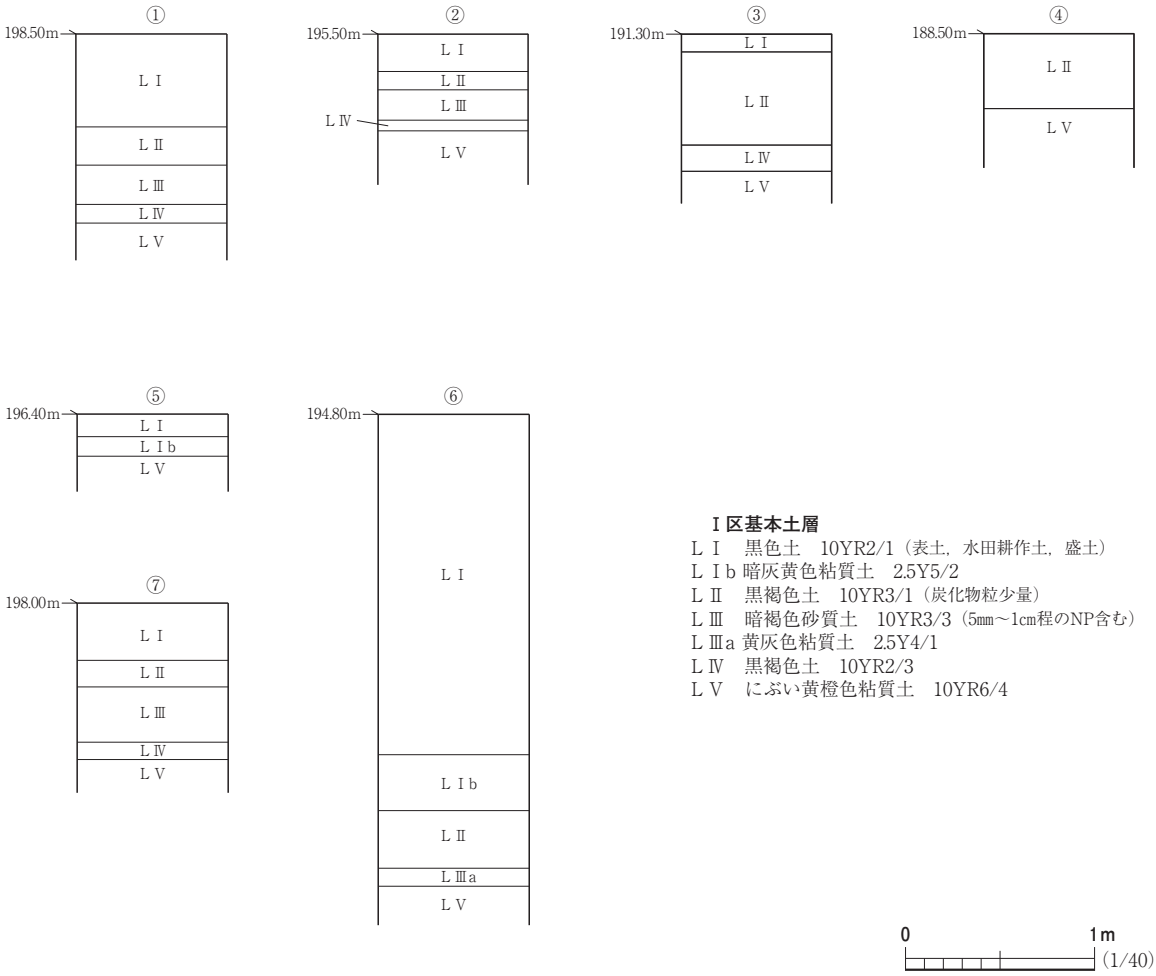


図７　Ⅰ区遺構配置図・基本土層

第３節　竪 穴 住 居 跡

調査Ｉ区から確認された竪穴住居跡は５軒である。このうち７・10号住居跡については竪穴住居跡として調査を行ったが，カマドなどの内部施設が確認されなかった。このため，この２軒については最終的に竪穴状遺構と判断した。報告にあたっては，特に竪穴状遺構の節は設けずに，これらの遺構については本節で報告することとした。調査Ｉ区から確認された竪穴住居跡および竪穴状遺構の時期はいずれも奈良時代末～平安時代初頭に所属する。遺構検出面はＬⅢ上面である。

なお，調査区境で検出された２・３・10号住居跡については，工事計画の変更により調査範囲が拡張したため，拡張部の調査を行うこととなった。このため，調査終了した部分については，基盤層ＬＶまで掘り下げているためこの部分にあたる遺構は遺存していない。

また，出土遺物のうち未還元の須恵器杯については，須恵器窯ではなく土器焼成坑で生産されたと考えられる土器も認められるが，調査区内で出土する還元化した須恵器杯と製作技法，器形などが変わらないことから，これらを比較するため須恵器の項目で報告している。これらの土器については，須恵器系土器などの名称を用いて報告されることもあるが，近年10世紀前半の土器に使用される場合が多く，今回は未還元といった呼称を使った。これらの土器については，断面を白抜きし還元化した須恵器と区別している。以下，竪穴住居跡について個別に報告を行う。

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（図８・９，写真５・６）

調査区東南部，Ｐ27・28グリッドに位置する。地形的には最上位段丘面に立地する。ＬⅡ除去後，ＬⅢ上面で黒褐色土の方形の広がりとして検出した。他の遺構との重複区関係は認められない。遺構内堆積土は３層に分層でき，いずれも壁際からの流入状態を示すことから自然堆積と判断した。

平面形は方形を呈し，規模は南北3.5ｍ，東西４ｍ。壁は比較的急な角度で立ち上がり，壁高は15～20㎝を測る。床は暗褐色土で貼床が施され，ほぼ平坦に整えられていた。また，全体的に軽い踏み締まりが確認できた。

住居内施設として，カマドとピット２個を検出した。カマドは南壁東隅に位置する。袖部は住居内に80㎝ほど張り出し，白色粘土を含んだ暗褐色土で構築され，芯材として長胴甕を使用している。両袖の最大幅は１ｍを測る。燃焼部の規模は焚口幅55㎝，奥行き90㎝。底面は床面より５㎝程掘り窪められ，断面形は皿状を呈す。また，底面は１㎝程焼土化していた。煙道部は，カマド奥壁から住居外に50㎝ほど張り出している。煙道部の幅は15～30㎝，底面から検出面までの高さは10㎝を測る。

カマド内堆積土は５層に区分した。ℓ１は住居内堆積土ℓ１に相当する。ℓ２・３はカマド天井崩落土に起因する層，ℓ４・５は煙道部からの流入土である。また，ℓ３上面で土師器の短胴甕が

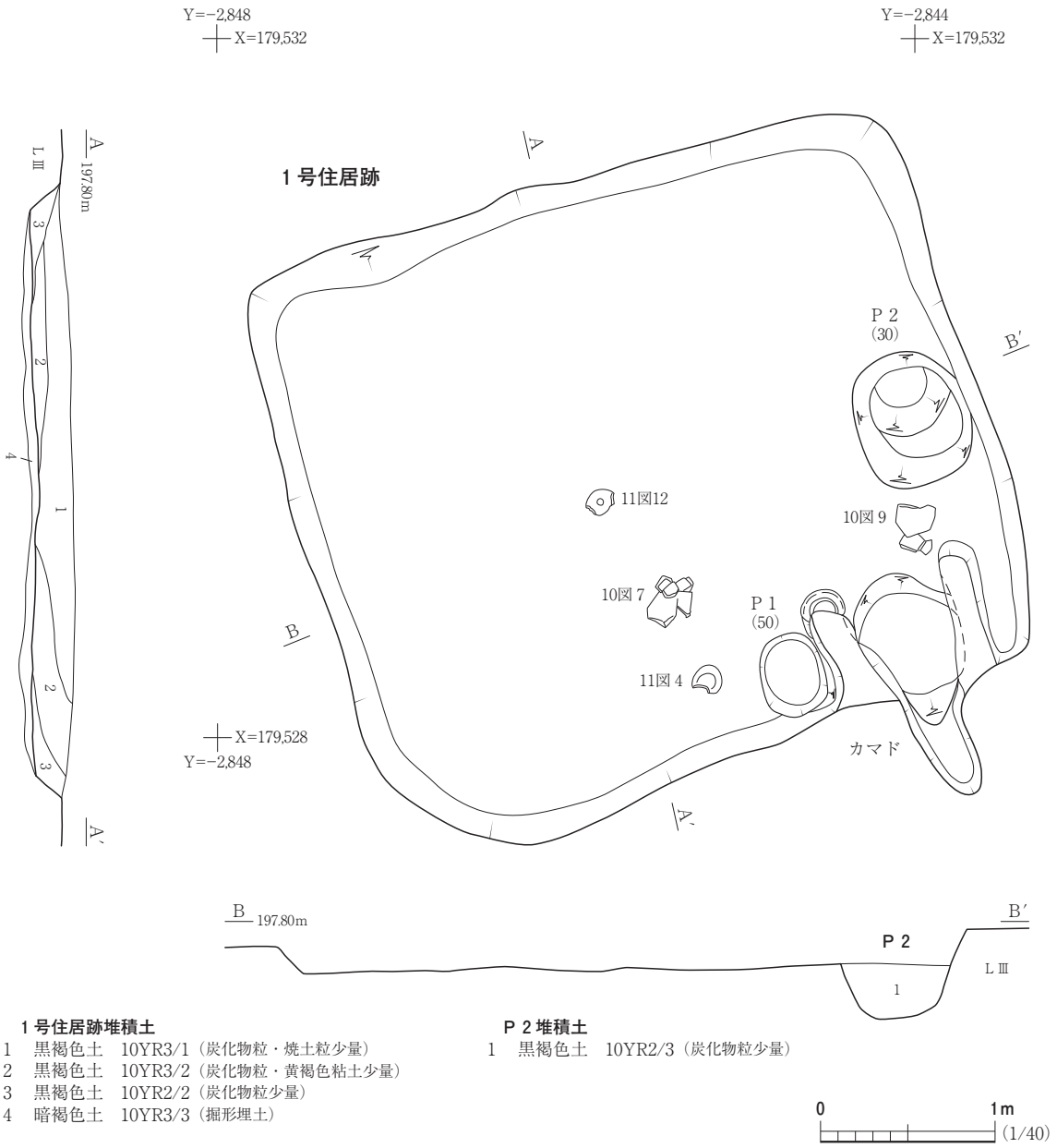


図８　１号住居跡（１）

伏せられた状態で２つ出土している。出土状況や土層の観察等から上部の流れ込みによるものや支脚などではなく，カマド廃棄時に据えられたものと判断した。カマド天井を一度壊し燃焼部底面をその構築土で整え，これらの土器を据えた後に，残りの天井構築土で埋め戻したものと考えている。

ピットはカマド脇と東壁のほぼ中央の床面で検出した。Ｐ１はカマドの右袖に接し，平面形は楕円形を呈す。規模は長径50㎝，短径40㎝，深さは50㎝を測る。断面形は鍋底状を呈している。堆積土は黒褐色土１層で，堆積土中からは多くの遺物が出土している。Ｐ１については，規模や位置から貯蔵穴として機能したものと考えている。Ｐ２は東壁中央位置している。平面形は楕円形を呈し，規模は長径80㎝，短径65㎝，深さは30㎝を測る。底面は南側から北側に向かい緩やかに傾いている。Ｐ２についても位置や規模から貯蔵穴的なものと考えている。

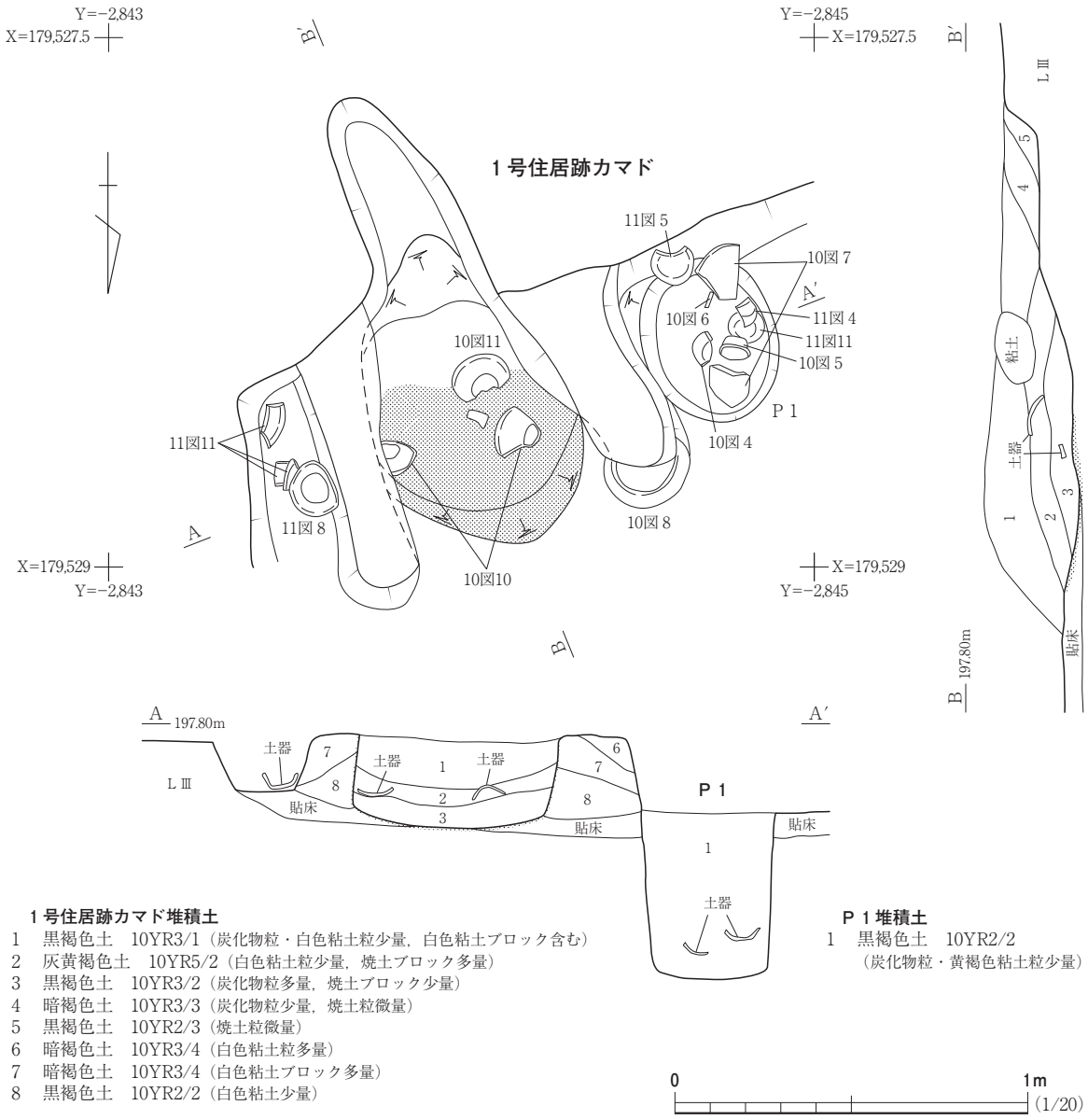


図９　１号住居跡（２）

遺　　物（図10・11，写真20）

出土遺物は土師器片426点，須恵器片18点などが出土している。これらの遺物は遺構内堆積土を中心に出土しているが，完全な形をしたものの多くは，カマド周辺とＰ１内からの出土が多い。また，遺物のなかには，ＳＩ07の堆積土から出土したものと接合関係にあるものも認められる。この土器については，出土層位や資料の遺存度などからＳＩ07で報告している。（図24－８）

図10－１～４はロクロ整形の土師器杯である。１～３はいずれも内面に黒色処理が施されるが，３は外面および底面にもミガキが行われ，黒色処理が施されている。１・２の体部下半から底部にかけては，回転ヘラケズリ再調整が施されている。４は器面が脆く観察しにくいが内外面にミガキを施し，内面黒色処理を行った痕跡が認められる。５は小壺で器面は非常に脆く，器形にも歪みがある。形状から須恵器の短頸壺を模倣したものかもしれない。６は全面にミガキが行われている長

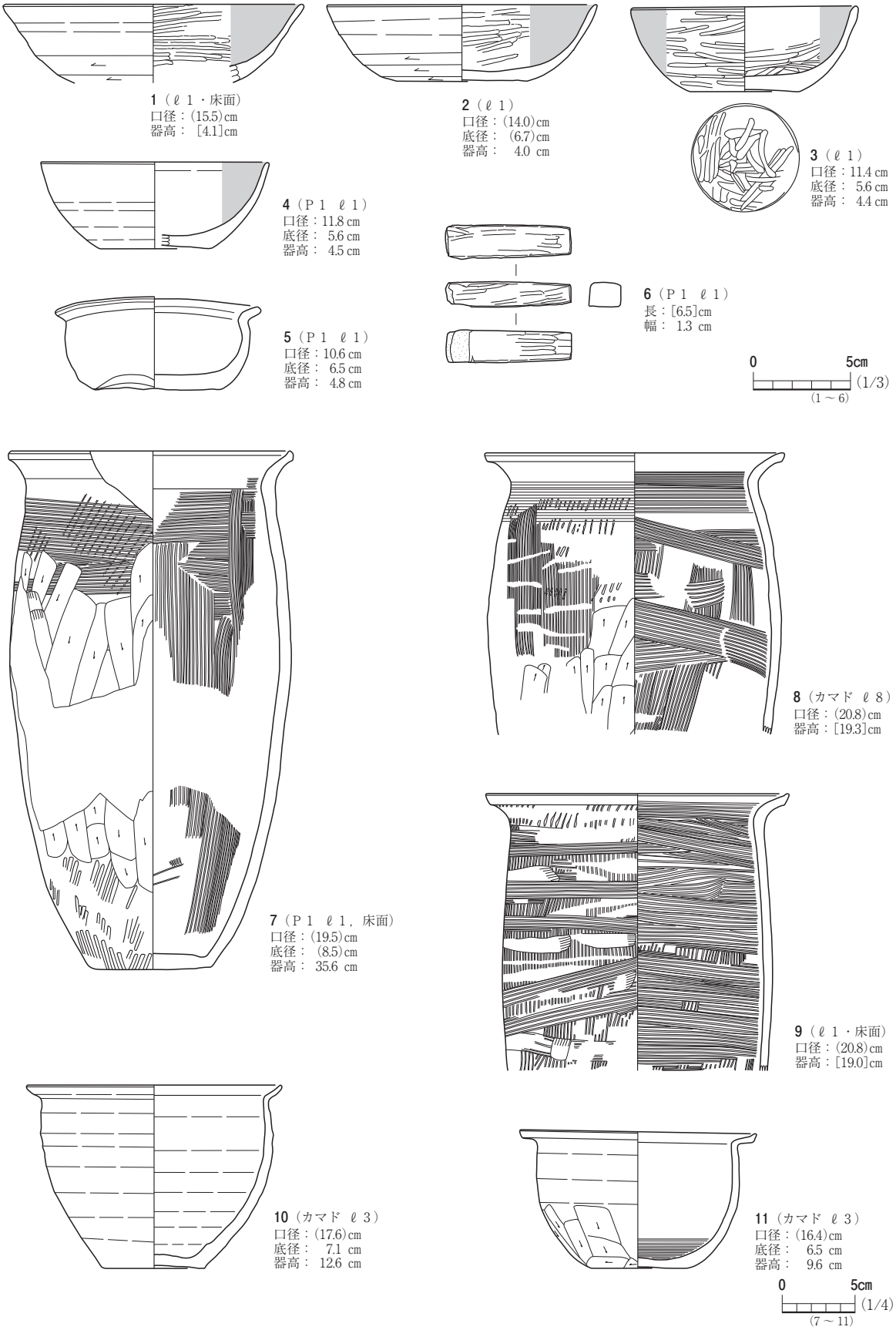


図10　１号住居跡出土遺物（１）

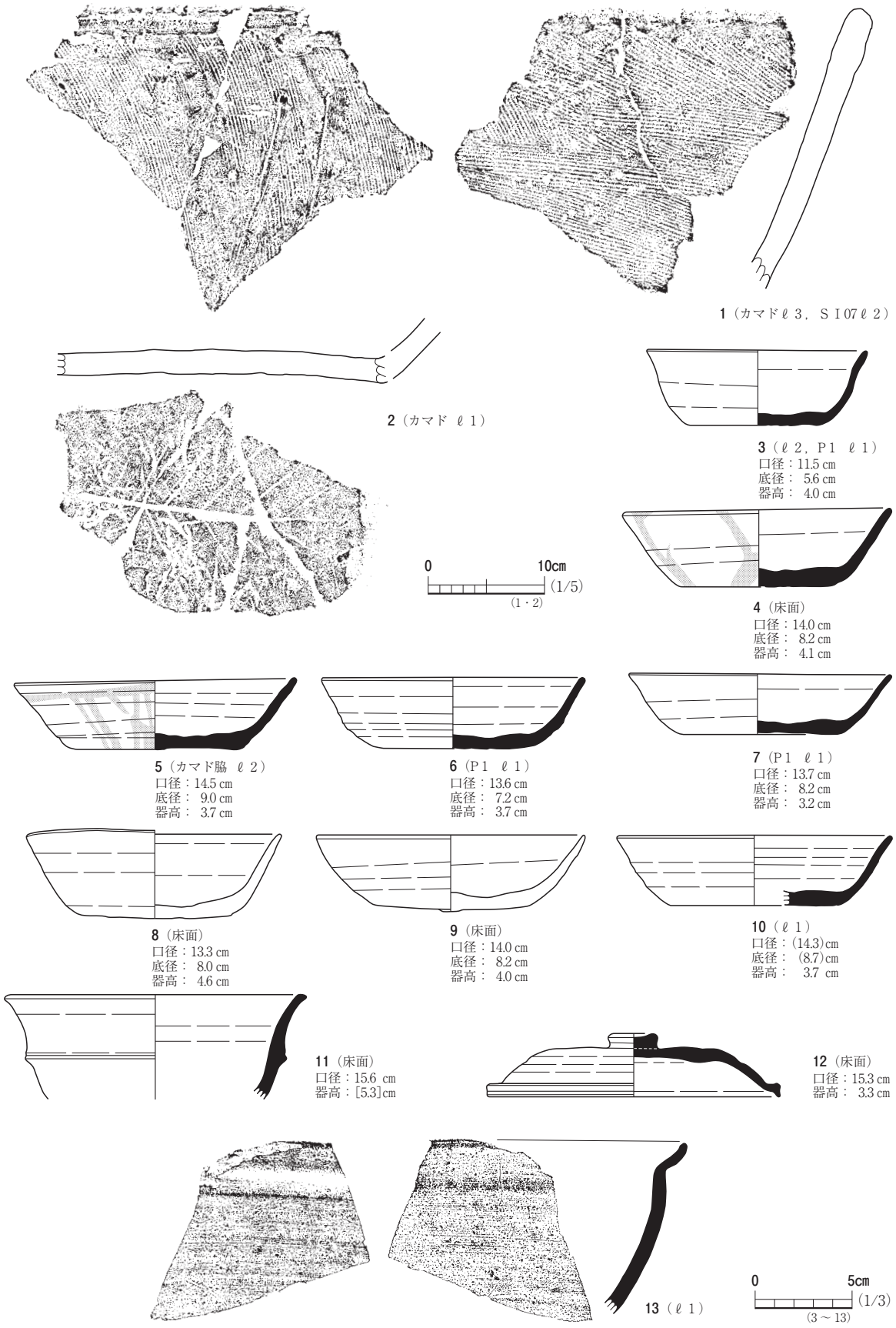


図11　1号住居跡出土遺物（2）

方形状の土製品である。形状から柄部と考えられる。

図10－７～11は土師器甕である。器形的には７～９の胴部中央がやや膨らみ，口縁部が「く」字状に外反する長胴甕と10・11の胴部中央から上半にかけて膨らみをもつ短胴甕が認められる。短胴甕には，口縁部は「く」字状に外反するものと11のようにほぼ真横に引き出されるものが認められる。７～９はタタキ成形後にカキメ，縦位のハケメ，ヘラナデ，手持ちヘラケズリなどの調整を施す。また，全体の器形がわかる７を見ると胴部下半にタタキ痕を残す。内面は，ハケメ・カキメ調整が施される。10・11はロクロ整形後，10のように調整を加えないものと11の胴部下半に手持ちヘラケズリ，内面にカキメ調整を施すものがある。図11－１・２は土師器の大型鉢の口縁部と底部である。１の外面には縦方向，内面には斜めにハケメが施される。２の底面には木葉痕が観察できる。

図11－３～10は須恵器杯である。いずれも器高は比較的低く，底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる器形である。３については，他の資料に比べ，やや小型である。底部の切り離しは，いずれも回転ヘラ切りによる。これらの土器は底径／口径比が0.55～0.6，器高／口径比0.25～0.3に収まる土器（４・９・10）と底径／口径比が0.61以上，器高／口径比0.31以上（３・８）に分かれる。焼成はいずれも良好で堅緻なものが多く，４・５には火だすき痕が認められる。また，８・９については未還元のもので，色調が浅黄橙色を呈す。

図11－11は須恵器稜椀で体部に明瞭な稜を有す。同図12は中央が浅く窪んだ摘みをもつ蓋である。天井部はほぼ平坦に整えられているが，部分的にヘラ切り痕を残す。同図13は須恵器の鉢で，口縁部が「く」字状に外反し口端部が上方に摘み上げられている。

ま と め

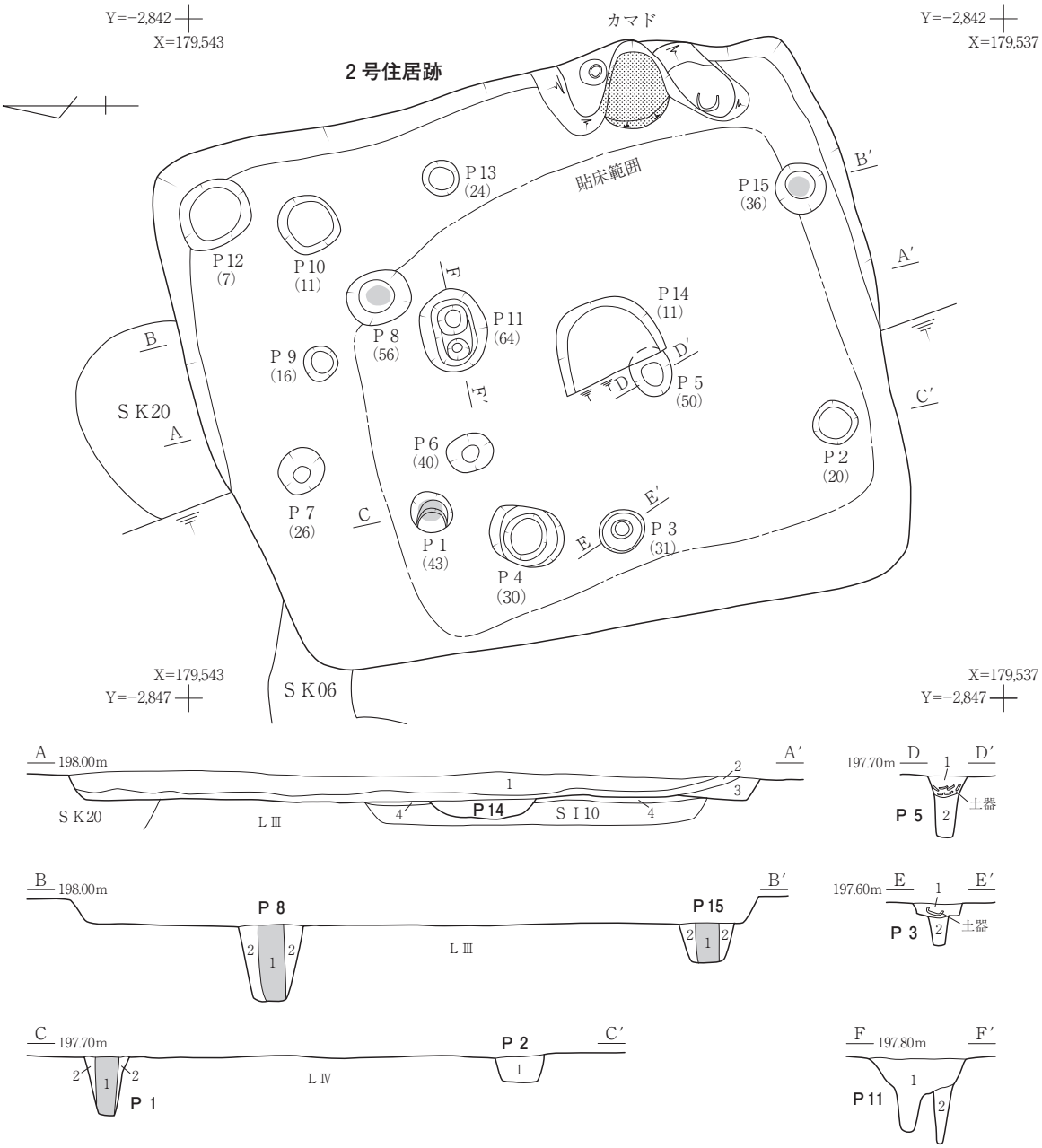
本住居跡は，南北3.5ｍ，東西４ｍ程の方形を呈する。住居内施設として，貯蔵穴と考えられるピットとカマドを検出した。出土遺物の多くはカマド周辺の床面やＰ１内から比較的まとまって出土している。これらのなかには，日常的な供善具や煮炊具の他に稜椀などの仏具系の遺物が出土していることが本住居跡の特徴である。本住居跡の所属時期については，遺物の特徴などから８世紀末葉～９世紀前葉頃と考えている。（大河原）

２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構（図12・13，写真７・８）

調査区東南部，Ｐ26・27グリッドに位置する。地形的には最上位段丘面に立地する。遺構検出面はＬⅢ上面である。ＳＩ10，ＳＫ20と重複関係にあり，本遺構が新しい。なお，ＳＫ06の溝状施設と重複しているが，この溝状施設については本住居跡に伴う可能性もある。また，本住居跡の西側壁および南北壁の一部は，遺構検出時に掘り過ぎてしまい遺存していない。

遺構内堆積土は３層に分層した。ℓ１・３については，壁際からの流入状態を示すことから自然堆積と判断した。ℓ２は，床面全体を直接覆う堆積土で，炭化材や焼土，粘土を多量に含む。土層



２号住居跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒・黄褐色粘土ブロック少量）
2　黒褐色土　10YR2/2（炭化材多量，焼土粒少量）
3　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量）
4　にぶい黄褐色粘土　10YR4/3（焼土粒・黄褐色粘土少量，貼床埋土）

Ｐ１堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（にぶい黄褐色土ブロック少量）

Ｐ２堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量）

Ｐ３堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（焼土粒少量，にぶい黄褐色粘土含む）
2　黒褐色土　10YR2/3（炭化物粒少量）

Ｐ４堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（焼土粒少量，にぶい黄褐色粘土含む）

Ｐ５堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（炭化物粒・焼土粒少量）
2　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4（炭化物粒少量）

Ｐ６・７・９・10・12・13堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒・焼土粒少量）

Ｐ８堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒少量）
2　黒褐色土　10YR2/2（にぶい黄褐色粘土少量）

Ｐ11堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量，焼土粒多量）
2　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒少量）

Ｐ14堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（焼土粒多量，にぶい黄褐色粘土少量）

Ｐ15堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒少量）
2　褐色土　10YR4/4（にぶい黄褐色土ブロック少量）

図12　２号住居跡（１）

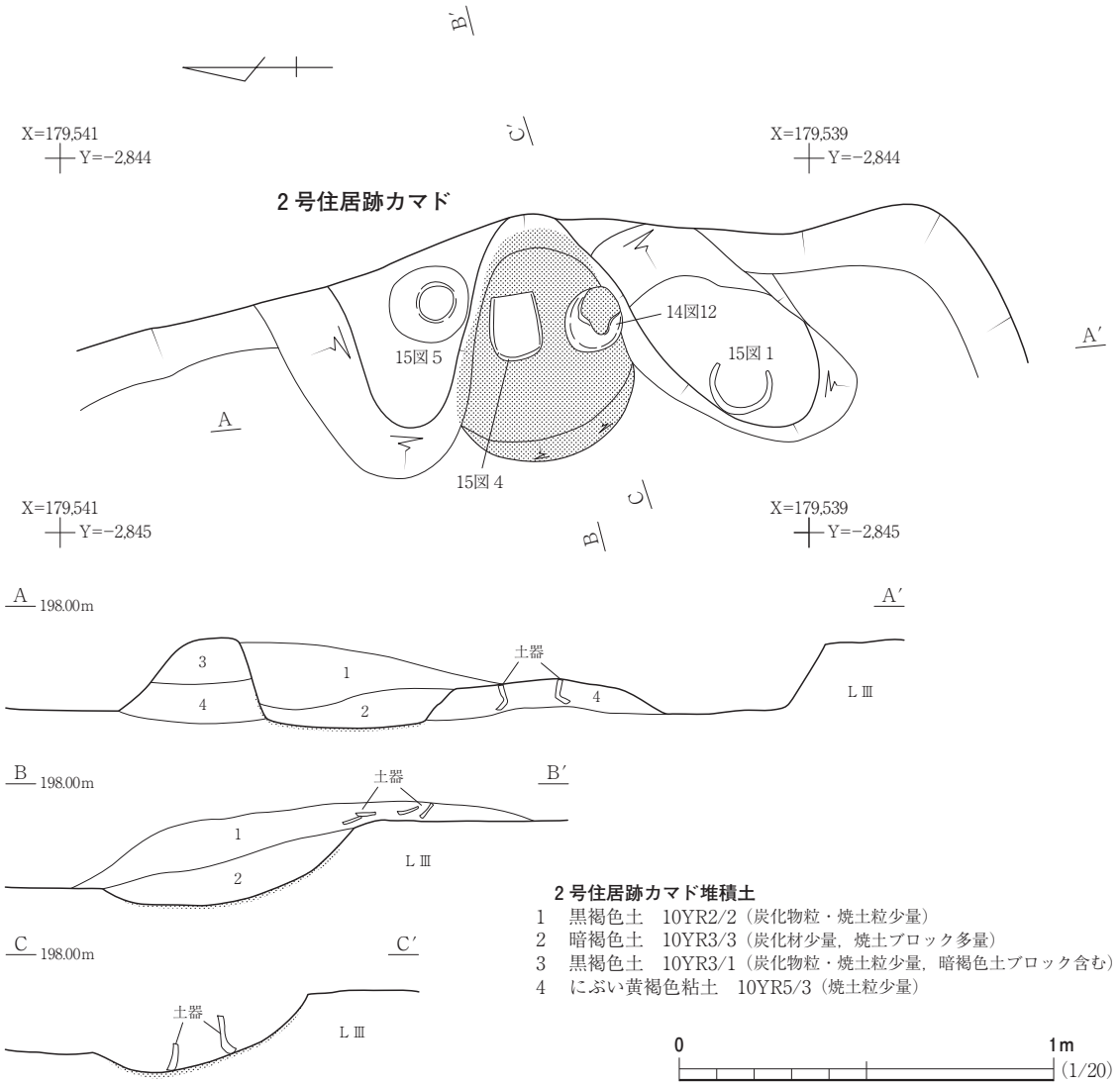


図13　２号住居跡（２）

の観察状況から，火災に起因する層と考えている。また，ℓ２には焼成時の影響で形が歪んだ土師器甕が出土している。

平面形は遺存状況から方形を呈していたものと考えられる。規模は東西が遺存長で4.1ｍ，南北5.1ｍ。遺存する壁は比較的急な角度で立ち上がり，壁高は10～20㎝を測る。床はＳＩ10と重複する部分をにぶい黄褐色粘土で貼床を施し，それ以外はＬⅢ上面をそのまま床面として使用している。床面はほぼ平坦に整えられているが，細かい凹凸が認められ，全体的に軽く踏み締まっていた。

住居内施設として，カマドとピット15個を検出した。カマドは東壁南隅に位置する。袖部は住居内に50～70㎝程張り出し，にぶい黄橙色粘土と黒褐色土で構築されている。袖部の芯材には，長胴甕が用いられていた。両袖の最大幅は1.4ｍを測る。右袖の構築土から，銙帯具の鉸具が出土した。カマド燃焼部は焚口の幅が約60㎝，奥行き70㎝を測る。底面は床面より５㎝程掘り窪められている。底面の断面形は皿状を呈し，１㎝程焼土化していた。煙道部は確認されなかった。

カマド内堆積土は２層に区分した。ℓ１は住居内堆積土ℓ２に相当する層である。ℓ２はカマド

天井崩落土である。また，燃焼部底面からは長胴甕の口縁から胴部が倒立状態で出土している。燃焼面に据えられているものの，位置的に支脚とは考えられない。このため，カマド廃棄時に据えられたものと判断した。カマド天井を一度壊し燃焼部底面に倒立状態で設置した後，天井構築土で埋め戻したものと考えている。

ピットは住居跡床面中央周辺と壁際で検出した。このうちＰ１・８・15については，柱痕が確認されたことと規模や位置などから主柱穴と考えられる。なお，Ｐ２についても位置的に主柱穴と判断した。この他，Ｐ４・５・11についても規模や位置などから主柱穴と考えている。また，Ｐ11の土層断面の観察から柱の据え替えが確認でき，本住居跡については上屋の建て替えがあった可能性がある。Ｐ４・５については，Ｐ14との重複状況や検出時に本住居跡の床面を削平した段階で確認していることから，重複するＳＩ10に伴う可能性もある。西側壁中央に位置するＰ３は，検出時に周辺の床面に黄橙色粘土が散らばっていた。Ｐ３については，ピット断面形が漏斗状を呈していることから，いわゆるロクロピットの可能性がある。東壁北隅に位置するＰ12は，比較的浅めのピットであるが規模や位置などから貯蔵穴的なピットと判断した。床面中央で検出したＰ14は，多量の焼土粒を含む黒褐色土で埋め戻されていた。鍛冶等に関係する施設と考えたが，鍛冶を行った痕跡や遺物などは確認できなかった。

遺　　物（図14～18，写真21・22）

出土遺物は土師器片5,879点，須恵器片178点，鉄製品などが出土している。遺物は床面から遺構内堆積土ℓ２を中心に出土しているが，特に住居跡中央周辺からの出土が多く，二次的に比熱を受け器面が爆ぜているものや形が歪んだ土器も認められる。これらの遺物は短胴甕が多い。なお，土器の割れ方や器形の歪み状況から，住居内で製作したものが火災焼失の際に生じた産物ないし，住居廃絶後の窪地を利用した土器焼成坑の可能性を指摘しておきたい。

また，遺物のなかには，他の遺構ＳＩ07，ＳＫ03の堆積土から出土したものと接合関係にあるものも認められ，出土層位や資料の遺存度などから，ＳＫ03と接合関係(図17－３)にあるものについては本遺構で，ＳＩ07と接合関係にあるものはＳＩ07(図25－２)で報告した。

図14－１～５はロクロ整形の土師器杯である。１・３・４にはいずれもミガキ後に黒色処理が施されるが，２・５は黒色処理が施されていない。また，３の内面は密にミガキが行われている。器形的には，１・４の体部下半に丸みをもち，口縁部までほぼ直線的に立ち上がるもの，３・４の体部下半に丸みを持ち，口縁が外傾しながら立ち上がるもの，２の体部下半から口縁部まで，外傾して立ち上がるものが認められる。口縁端部は外反するものが多いが，５のように内湾気味になるものも認められる。１・２・４の体部下半には回転ヘラケズリ再調整，３・５には手持ちヘラケズリ再調整が施されている。３・４の底部の切り離しは，回転糸切りによる。

図14－６は体部下半に丸みをもち，口縁部が緩やかに外反する土師器の小型鉢である。底部周辺に手持ちヘラケズリ再調整が施される。同図７は蓋，８は高杯でいずれも両面に丁寧なミガキが施され，内外面に黒色処理が施されている。図14－９～15，図15は土師器甕である。器形的には図

14－10～13の胴部にやや丸みをもち，口縁部が「く」字状に外反する短胴甕，図14－14・15，図15－１～３の胴部上半に膨らみをもち，口縁部が「く」字状または大きく外反する長胴甕が認められる。なお，図化しなかったが，全体的に歪みがひどい短胴甕(写真21)が出土している。

甕の内外面の調整は，短胴甕はロクロ整形痕を残すものが多いが，図14－10・13のように胴部下半にヘラケズリ再調整が施されるものや，同図12・13のようにカキメ調整が施されるものも認められる。長胴甕については内外面ハケメやカキメ調整を施すものが多く，図15－３～５のように縦方向の手持ちヘラケズリを外面胴部中央から底部にかけて行うものも認められる。また，同図１・２には口縁部と胴部境にタタキの痕跡が認められる。同図７は体部中央に丸みを持つ土師器鉢型土器である。内外面の器面の調整は，縦方向のハケメ後にカキメを施す。また，外面の体部下半には，縦位の手持ちヘラケズリが密に行われている。図16－１・２は土師器の鍋で，いずれもタタキ整形後に内外面にカキメやハケメ調整が施される。２の体部下半には縦位の手持ちヘラケズリが施される。同図３は甑の底あるいは，盤になるものと思われる。

図18－１～10は須恵器杯である。底部の切り離し技法は，いずれも回転ヘラ切りによる。器形的には，器高が低く底部周辺にやや丸みもち，体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものがほとんどである。これらの土器はほぼ底径／口径比が0.55～0.6，器高／口径比0.26～0.3に収まるが，４の底径／口径比が0.62，同図７が0.51を測る。焼成は比較的良好なものが多いが，５～10は未還元のもので，色調が浅黄橙色を呈す。また，６の器面には爆ぜた痕跡が認められる。

図18－11は須恵器の高台付杯である。身の部分は浅く，高台は貼り付けによるもので，断面形は方形状を呈している。同図12・13は須恵器の高台付盤で，13の底面には「廣」の墨書が施されている。同図14・15は須恵器の蓋で，いずれも中央が浅く窪む摘みをもつ。14の天井部はほぼ平坦に整えられているが，中央に向かい緩やかに傾いている。また，15の天井部から体部にかけて回転ヘラケズリが施される。形状は山笠状を呈している。

図18－16は須恵器の横瓶で外面にカキメ，内面にアテ具痕と円盤貼り付けの痕跡が認められる。同図17は土師器盤の底部である。内面にミガキが施され，底面には「廣」の線刻が認められる。

図16－４・５，図17は土管状土製品である。図17－１のように形状が土管状を呈すものと図16－４・５，図17－２・３のように土管を半分に割った形状のものが認められ，下部に円孔をもつものが多い。また，口縁部が「U」字状を呈している。図18－18は鈴帯具の鉄製鉸具で，鉸具頭は隅丸方形状を呈している。

ま と め

本住居跡は平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。規模は東西4.1ｍ，南北5.1ｍを測る。土層の観察状況から，本住居跡は火災にあったものと考えられる。住居内施設としては，カマドと主柱穴などを検出している。本住居跡については，断面形状がロクロ状ピットに類似する施設なども確認されていることなどから，工房的な役割を持った住居跡の可能性が高く，所属時期については遺物の特徴などから８世紀末葉～９世紀前葉頃と考えている。（大河原）

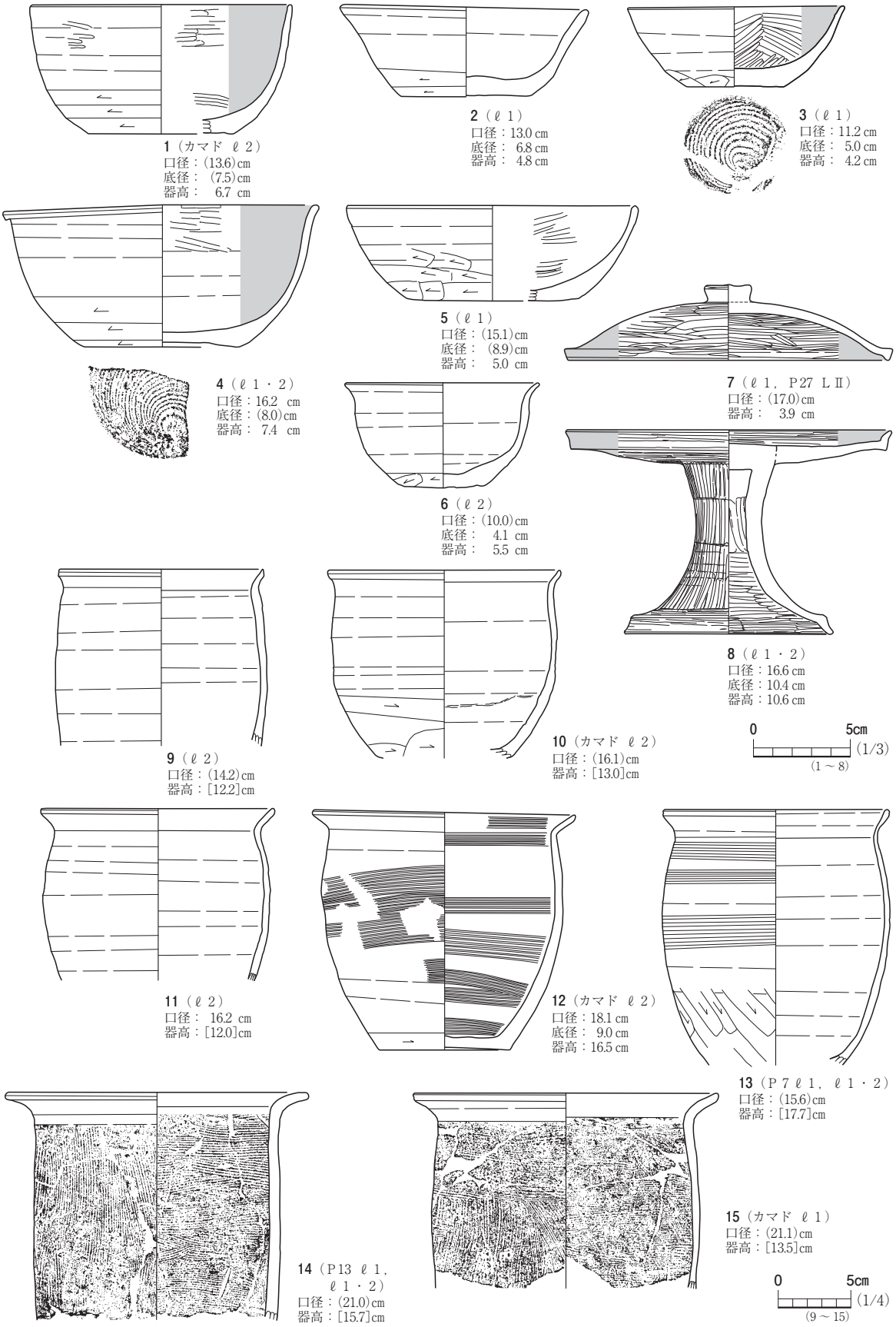


図14　2号住居跡出土遺物（1）

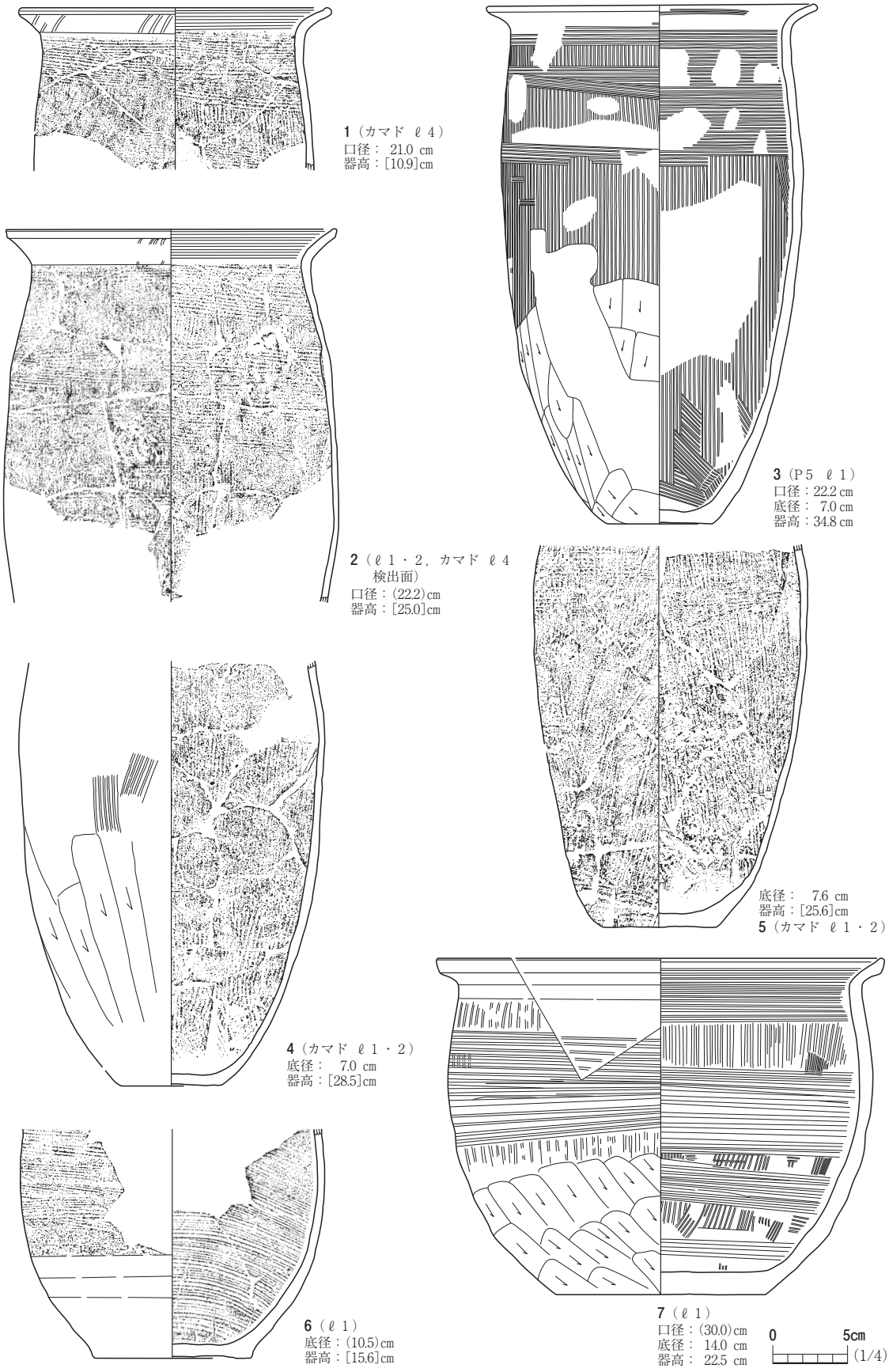


図15　２号住所跡出土遺物（２）

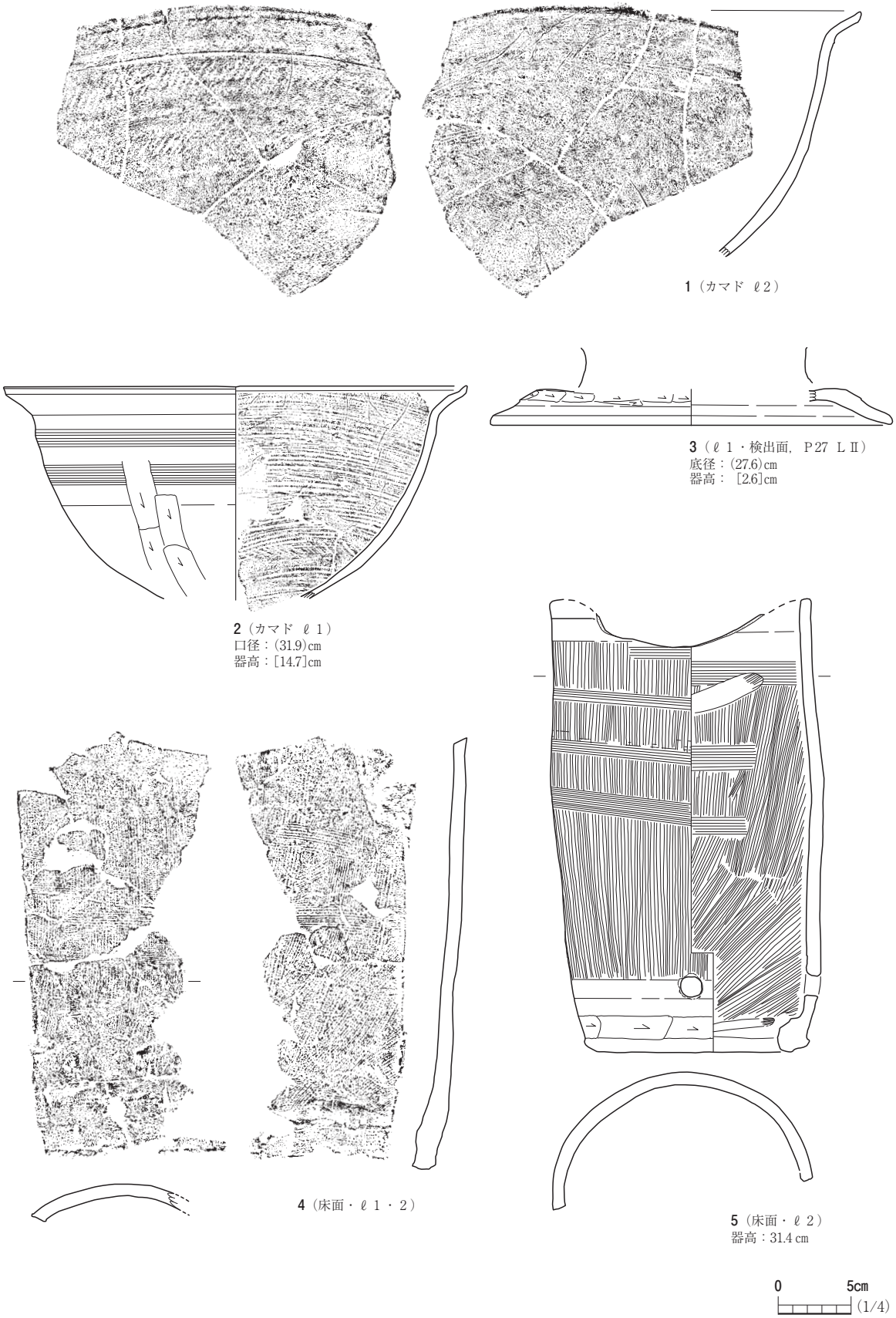


図16　2号住居跡出土遺物（3）

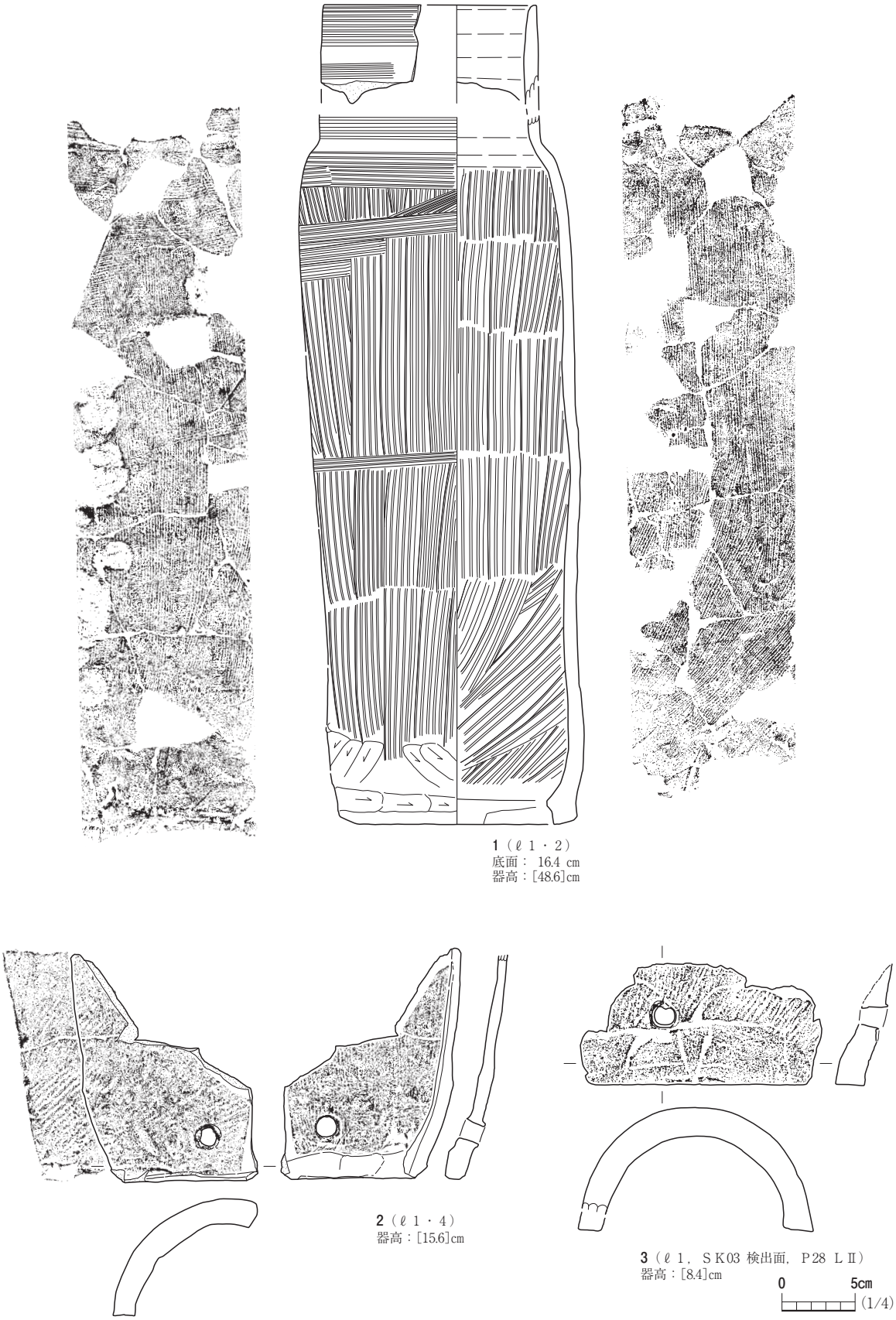


図17　２号住居跡出土遺物（４）

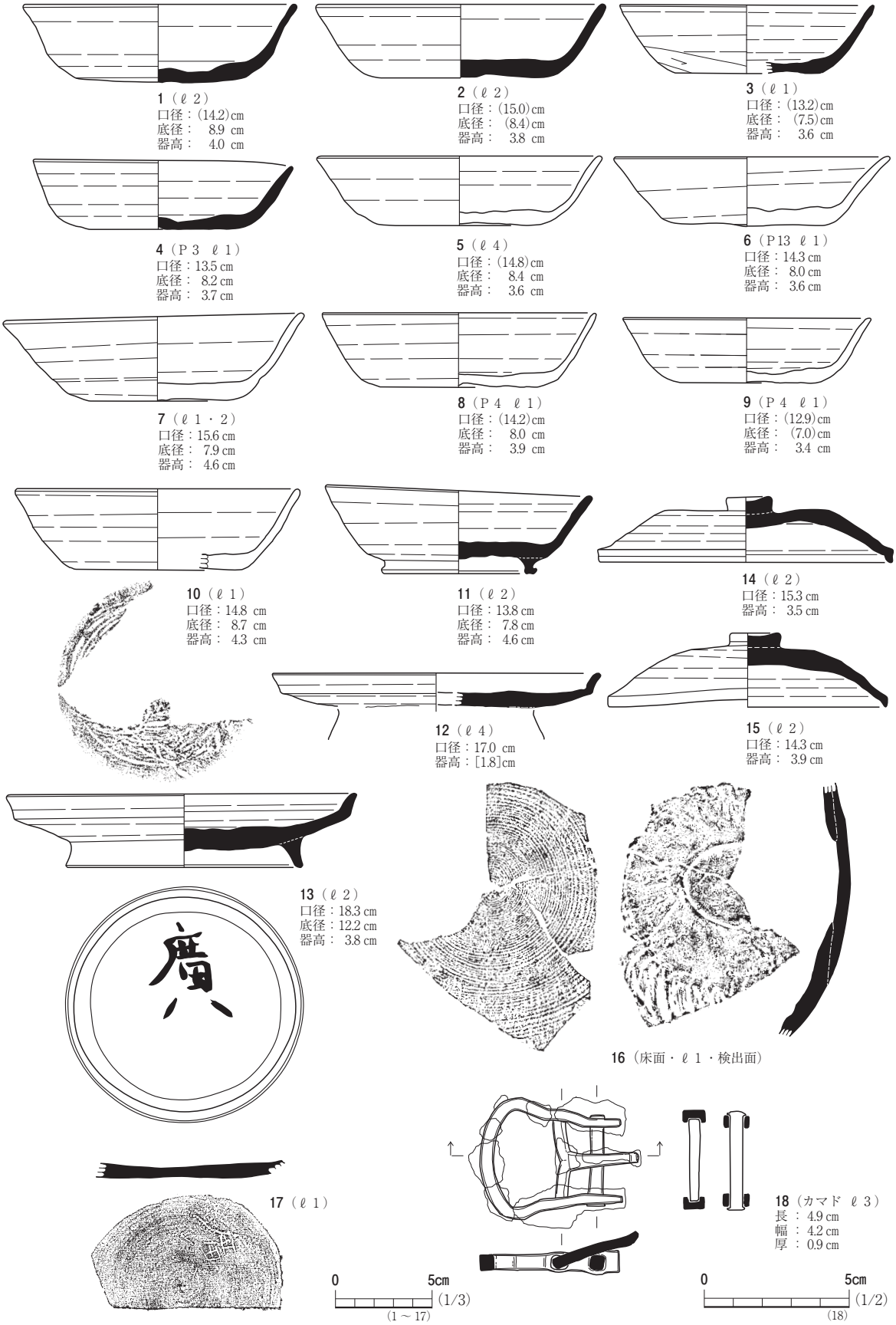


図18　2号住居跡出土遺物（5）

３号住居跡　ＳＩ03

遺　　構（図19，写真９・10）

本住居跡は，調査区東南部，Ｐ・Ｑ28・29グリッドに位置し，地形的には最上位段丘面に立地する。遺構はＬⅢ上面で検出した。ＳＤ02と重複関係にあり，本遺構が古い。また，住居跡の南側については，調査区外に延びているため調査は行っていない。

堆積土は２層に分かれ，いずれも壁際からの流入状況を示すことから，自然堆積と判断した。本住居跡の平面形については，全体を調査していないため明確ではないが，方形を呈しているものと考えられる。規模は全体が検出できた北側の壁で約４ｍを測る。検出できた壁は比較的急な角度で立ち上がり，壁高は20㎝を測る。床は黄色褐色粘土を含む暗褐色土で貼床を施し，全体的に平坦に整えられている。また，踏み締まりなどは確認できなかった。

住居内施設として，ピット３個と壁溝を検出した。検出したピットについては，住居跡全体を調査していないためその機能は特定できないが，位置や規模などから支柱穴的なものと考えている。

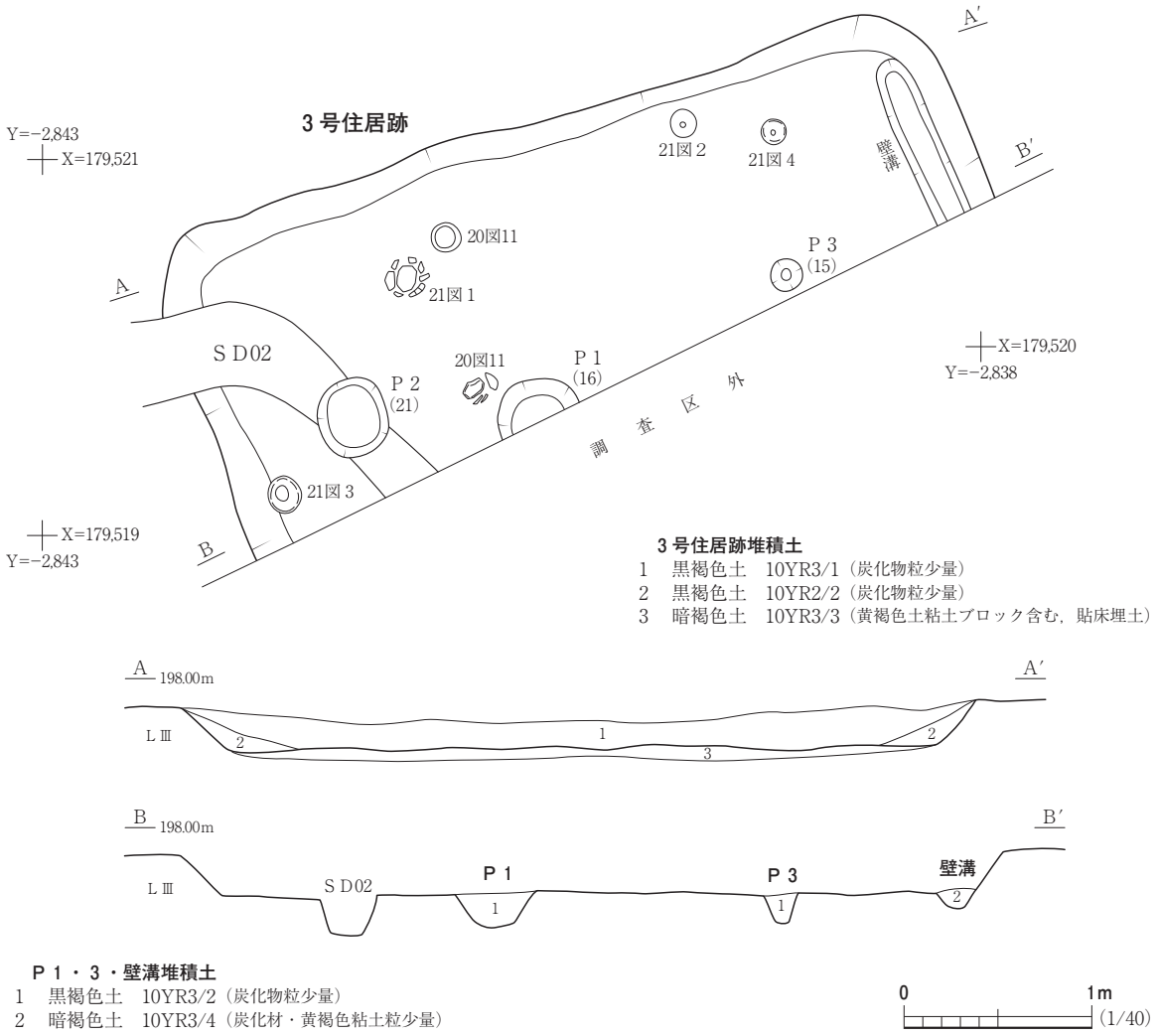


図19　３号住居跡

壁溝は東側の壁に沿って検出した。検出した壁溝の規模は，長さ１m，幅20㎝，深さ10㎝を測る。この他の住居内施設は確認されなかった。

遺　　物（図20～22，写真23）

出土遺物は土師器片405点，須恵器片52点，鉄滓，縄文土器片43点等が出土している。遺物は床面から須恵器杯や蓋が出土している。また，住居跡中央から東側の壁際のℓ１下層から，須恵器の大甕と横瓶が土圧で押しつぶれたような状態で出土している。

図20－１は土師器杯である。底部周辺には回転ヘラケズリ再調整，内面には井桁状にミガキが行われ，黒色処理が施されている。同図２は蓋の摘みで，内外面に黒色処理が施されている。同図３・４は土師器の甕である。３は外面上半にロクロ整形痕，下半には縦位の手持ちヘラケズ再調整が認められ，内面にはカキメが施される。４は内外面に縦位のハケメが行われている。同図５は土師器の大型甑と考えている。内外面には密に縦位のハケメが施される。

図20－６～11は須恵器杯である。底部の切り離しは，同図６～９が回転ヘラ切り，同図10・11は回転糸切りである。７の底部周辺は部分的にヘラケズリ再調整が行われている。器形的には，底部周辺に丸みをもち，体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものが多い。これらの土器は底径／口径比が0.57～0.6，器高／口径比0.24～0.28（６・９・11）と底径／口径比が0.61以上（７・９）に大きく分かれる。焼成は良好で堅く焼き締まっているが，８～11は未還元のもので色調が浅黄橙色を呈している。また，７の内面には火だすき痕が認められる。

図20－12・13は須恵器高台付杯である。器形的に身が浅く小型の12と身が深く大型の13に大別できる。12の外面には自然釉が認められる。また，13の外面の体部中央には，沈線が巡らされている。同図14は須恵器小壺で，焼成時の影響で口縁部が歪む。底部には回転糸切り痕が認められ，底部中央は穿孔されている。この穿孔は焼成前に外側から行われていた。また，内外面底面まで自然釉が認められる。

図21－１～４は須恵器の蓋である。摘みは２・４のように中央が浅く窪むものと，１・３の窪みがほとんどないものが認められる。天井部はほぼ平坦に整えられているが，４のように天井部から口縁部にかけて丸みを帯び，山笠状を呈しているものも認められる。

図21－５は須恵器の甕である。器形的には胴部中央に膨らみをもち，頸部から口縁端部まで緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がる器形となる。外面には，胴部下半から上半にかけてカキメ，下半から底部には，ハケメ調整が認められる。また，胴部上半と底部周縁にタタキ痕を残す。内面には，全体的に波状文が認められ，下半にハケメ調整が施される。また，内外面に自然釉が認められる。同図６は須恵器横瓶で，器形は俵型を呈す。口縁部資料については出土していないが，外面にタタキ痕が押しつぶされた部分が認められることから，この部分に口縁部が作られていたものと思われる。外面にはタタキとカキメ，内面には波状文が認められる。製作技法は，片面閉塞によるもので，円盤貼り付けの痕跡が認められる。なお，未調査部の住居跡南側部分に接合可能な横瓶の破片が出土する可能性もあるため，今回は接合可能な破片資料を基に復元実測している。

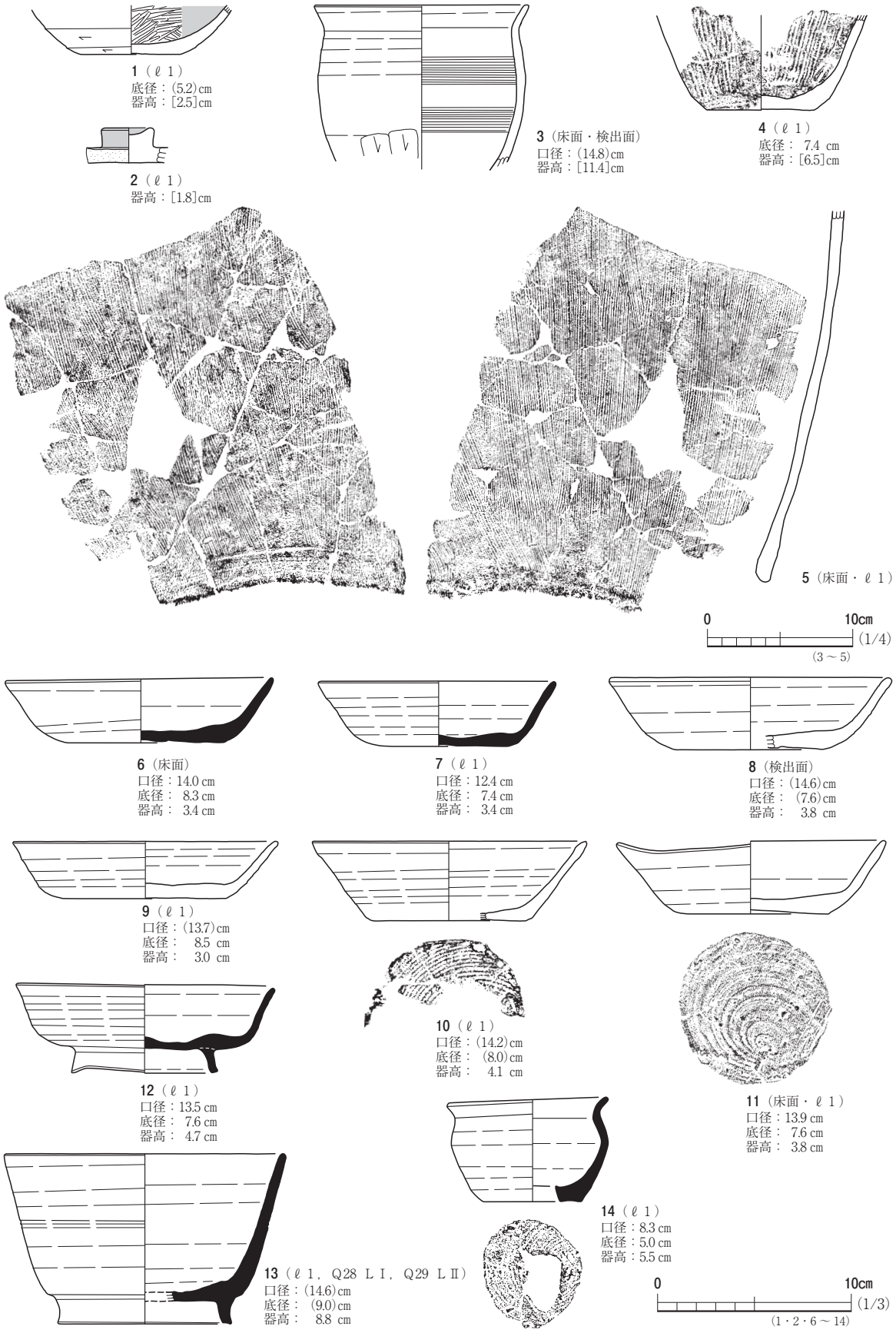


図20　３号住居跡出土遺物（１）

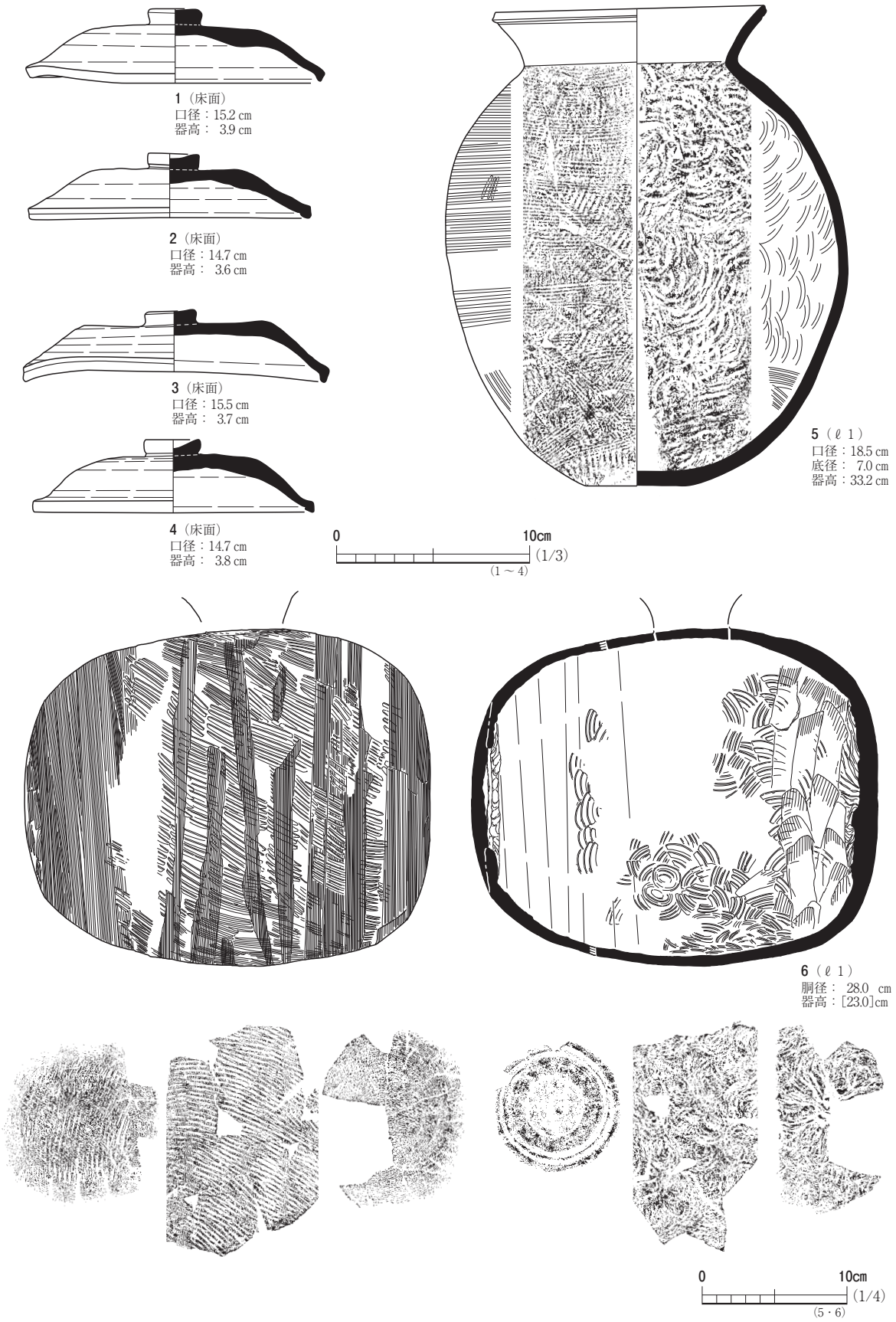


図21　3号住居跡出土遺物（2）

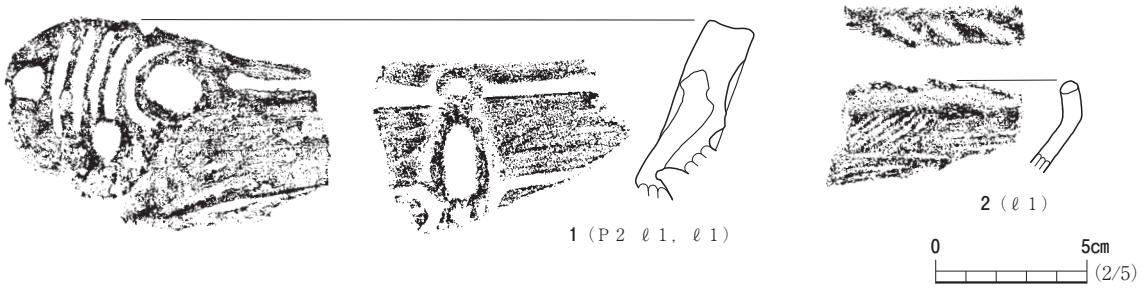


図22　３号住居跡出土遺物（３）

図22－１・２は縄文土器で同図１は口縁部直下に沈線を巡らせ，口縁部と胴部の文様を沈線と刺突で構成する。同図２は単節斜縄文が施され，口唇部には棒状工具による圧痕が加えられる。

ま と め

本遺構は南側の大半が調査区外にあたるため，平面形や内部施設など不明な点が多い。本遺構については，今回検出した遺構の規模や内部施設の支柱穴と考えられるピットや壁溝などから，竪穴住居跡として報告した。遺物は須恵器杯，蓋，甕，横瓶などが出土している。本住居跡の所属時期については，遺物の特徴などから８世紀末葉～９世紀前葉頃と考えている。（大河原）

７号住居跡　ＳＩ07

遺　　構（図23，写真11・12）

本遺構は，調査区東南部，Ｑ27グリッドに位置し，地形的には最上位段丘面に立地する。遺構はＬⅢ上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが，西側にＳＩ02・10とＳＫ03が隣接する。なお，本遺構については，規模やカマドなどが検出されなかったことなどから，竪穴状遺構と判断した。

堆積土は３層に分かれる。ℓ２については多くの遺物と白色粘土塊や炭化材を多量に含むものの壁際からの流入状況を示すことから，自然堆積と判断した。なお，これらの遺物については，埋没過程の窪地に廃棄されたものと考えている。

本遺構の平面形は方形を呈し，規模は南北が2.2ｍ，東西で1.9ｍを測る。壁は急な角度で立ち上がり，高さは20～30㎝を測る。底面はＬⅣ層をそのまま利用し，ほぼ平坦に整えられている。なお，貼床などは施されていないが，全体的に踏み締まっている。

本遺構の施設として底面中央で焼土面，北側の壁でピット２個，西側の壁から溝状施設を検出した。焼土面は底面の中央から南側にかけて南北0.7ｍ，東西1.3ｍの範囲で検出した。平面形は不整な楕円形を呈し，底面から５㎝程焼土化している。焼土面周辺からは遺物などは出土していない。ピットは北側の壁中央でＰ１，北壁西隅でＰ２を検出した。Ｐ１は北壁中央から外側に20㎝程張り出す。いずれのピットも平面形が直径30㎝程の円形状を呈している。

溝状施設は西側壁の中央から北壁西隅に位置する。検出時に平面的な遺構の重複関係が認められなかったことや堆積土の観察などから，本遺構に伴う施設と判断した。溝状施設については，竪穴

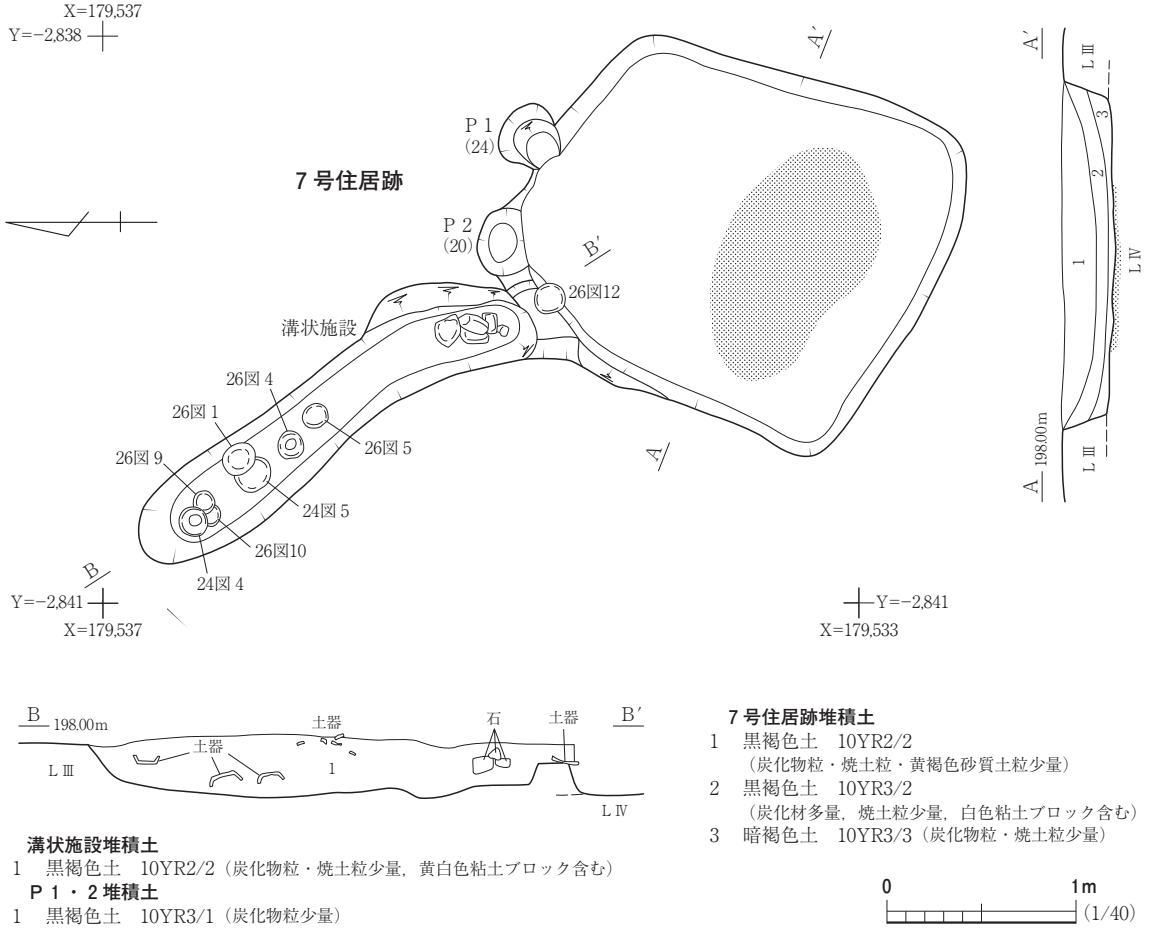


図23　７号住居跡

状遺構との接する部分で粘土塊と礫がまとまって出土したため，カマドとその煙道部の可能性も考えたが，焼土面や袖の痕跡などは確認されなかったため，溝状施設として報告する。溝状施設は遺構の外側に2.4ｍ程延び，幅は30～50㎝，深さは30㎝を測る。断面形は鍋底状を呈し，凹凸が認められる。また，堆積土中にほぼ完全な形の土師器および須恵器の杯がまとまって出土している。

遺　　物（図24～26，写真24・25）

出土遺物は土師器片1,268点，須恵器片99点，スサ入りの粘土塊などが出土している。遺物は遺構内堆積土ℓ２と溝状施設内からの出土が多い。特に溝状施設からはほぼ完全な形の土師器および須恵器の杯がまとまって出土している。遺物の器種も豊富で杯，椀，蓋，甕の他，甑や壺，大型鉢や手捏ね土器がある。また，遺物のなかには，ＳＩ01(図24－８)，ＳＩ02(図25－２)の堆積土から出土したものと接合関係にあるものも認められ，これらについては，出土層位や資料の遺存度などから，本遺構で報告する。

図24－１～５，図26－９は土師器の杯である。図24－１・２・４は底部周辺に回転ヘラケズリ再調整が行われる。これらの土器は，いずれも丁寧にミガキが施され，器面に光沢をもつものが多い。同図３は内外面ともに丁寧にミガキが施されている。同図５の底部の切り離しは回転糸切りによる。１・５は内面黒色処理が行われている。図26－９の底面は，手持ちヘラケズリ再調整で平坦

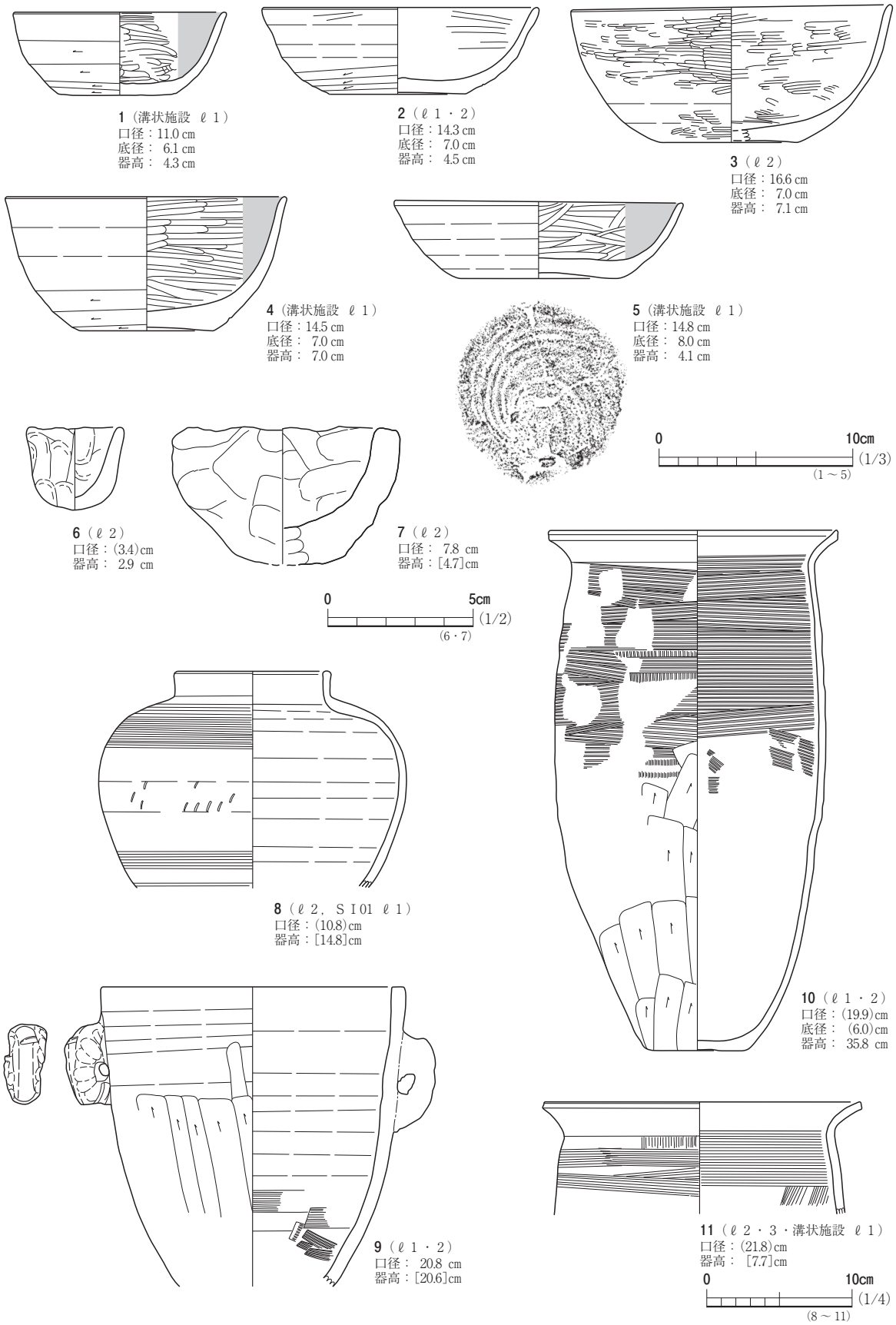
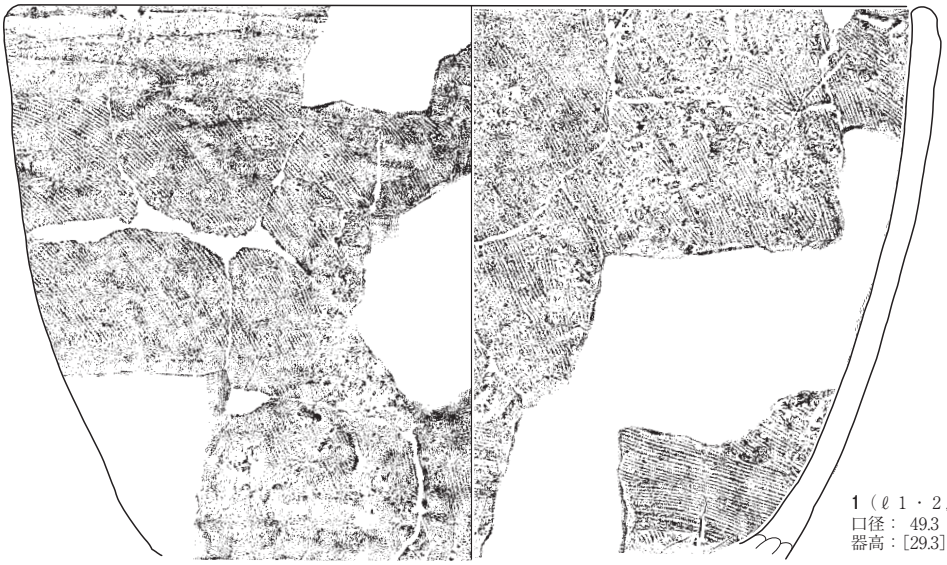
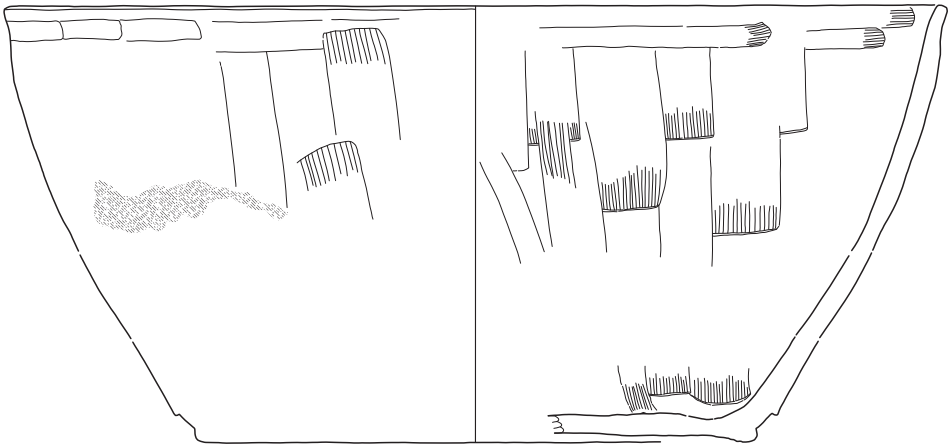


図24　７号住居跡出土遺物（１）





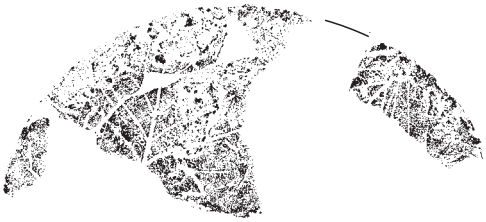


図25　7号住居跡出土遺物（2）

に整えている。また，器面は爆ぜており，非常に脆弱である。

図24－6・7は手捏ね土器で，指頭によるナデや押さえで器面を整えているが，7の器面は凹凸が激しい。同図8は土師器の短頸壺である。体部上半に膨らみをもち，頸部が直立する器形である。体部をタタキで整形，その後カキメで体部を丸く整えている。同図9は土師器の甑で，体部両側に把手をもつ。外面の体下半には，縦位の手持ちヘラケズリ調整が施される。同図10・11は土師器の長胴甕で，いずれも内外面に縦および斜め方向のハケメが施された後にカキメ調整が行われる。また，10の胴部下半から底部にかけては手持ちヘラケズリ再調整が行われる。

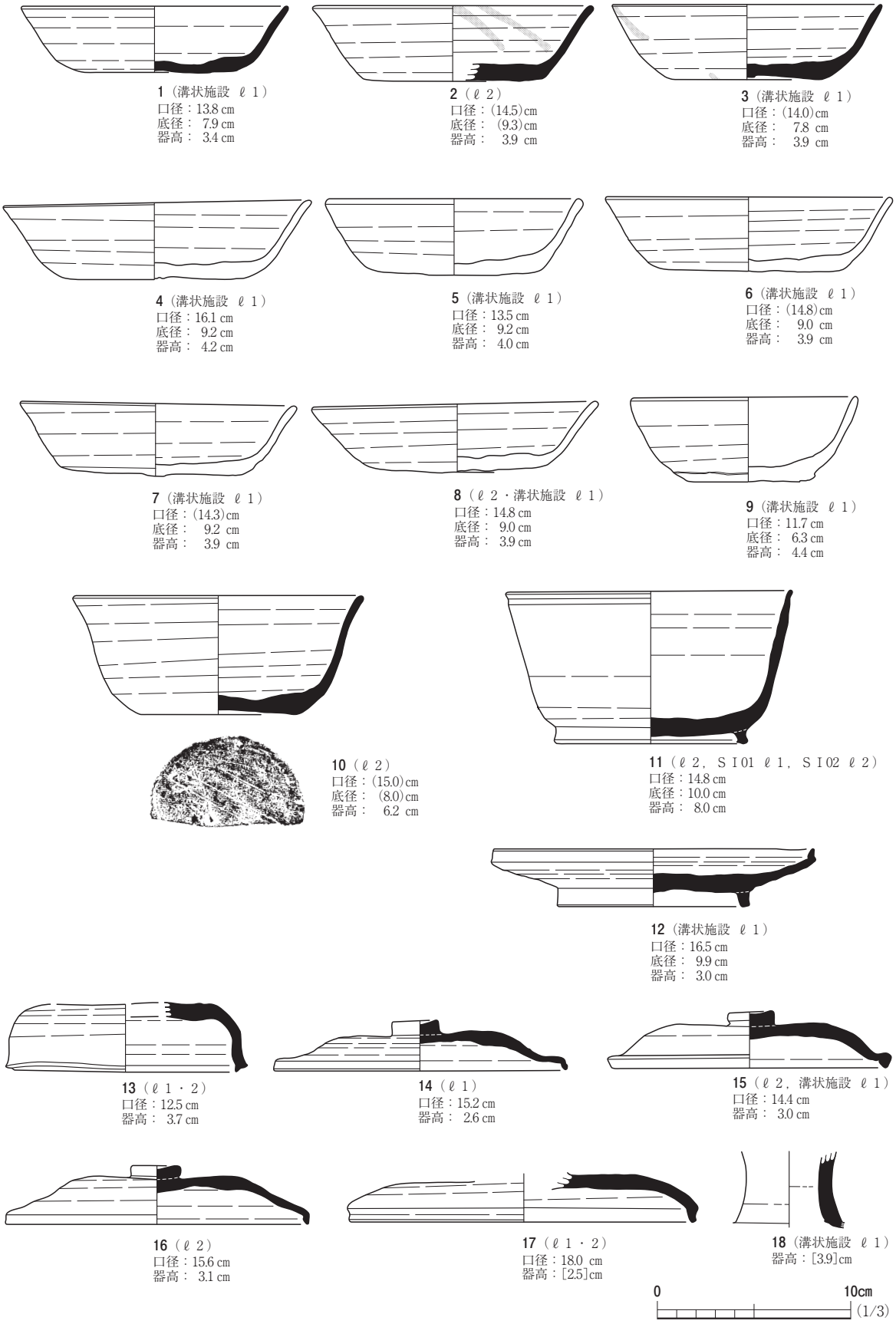


図26　７号住居跡出土遺物（３）

図25－１・２は土師器の大型鉢である。器形は，いずれも底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がる。内外面の調整は，１が縦方向のハケメ，２にはヘラナデが施されている。また，２の底面には木葉痕が認められる。

図26－１～８・10は須恵器の杯である。器形的には，10以外いずれも器高が比較的低く，底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら立ち上がり，口縁端部がやや外反する。底部の切り離し技法は，いずれも回転ヘラ切りによる。これらの土器は，底径／口径比が0.55～0.6，器高／口径比0.25～0.3以下に収まる土器（１・３・４・６・８）と底径／口径比が0.61以上，器高／口径比0.27～0.3以下（２・５・７）に分かれるが，同図10は底径／口径比が0.55，器高／口径比0.41を測る。焼成は比較的良好なものが多いが，４～８は未還元で色調は浅黄橙色を呈す。また，２・３には火だすき痕が認められる。

図26－11は高台付杯で，口縁部下端に沈線が巡る。高台は貼り付けによるもので，底面の縁辺部に設けられている。同図12は須恵器盤で体部外面に明瞭なロクロ整形痕を残す。高台は11と同様に底面の縁辺部に設けられている。同図13～17は須恵器の蓋である。天井部は平坦に整えているが，部分的に切り離しの痕跡を残すものも認められる。13は天井部に摘みをもたず，口縁部に段を有す。14～16は中央部が浅く窪む摘みをもつ。17は大型の蓋で，壺等に用いられたものと考えられる。同図18は長頸瓶の頸部資料と思われる。

ま と め

本遺構は南北が2.2ｍ，東西で1.9ｍの平面形が方形を呈した竪穴状遺構である。本遺構に伴う施設として，焼土面とピット２個，溝状施設を検出した。本遺構については，遺構底面に顕著な焼土面を有し堆積土中にスサ入りの粘土塊などを含むことから，土器焼成坑の可能性がある。なお，本遺構の所属時期については，遺物の特徴から８世紀末葉～９世紀前葉頃と考えている。　（大河原）

10号住居跡　ＳＩ10

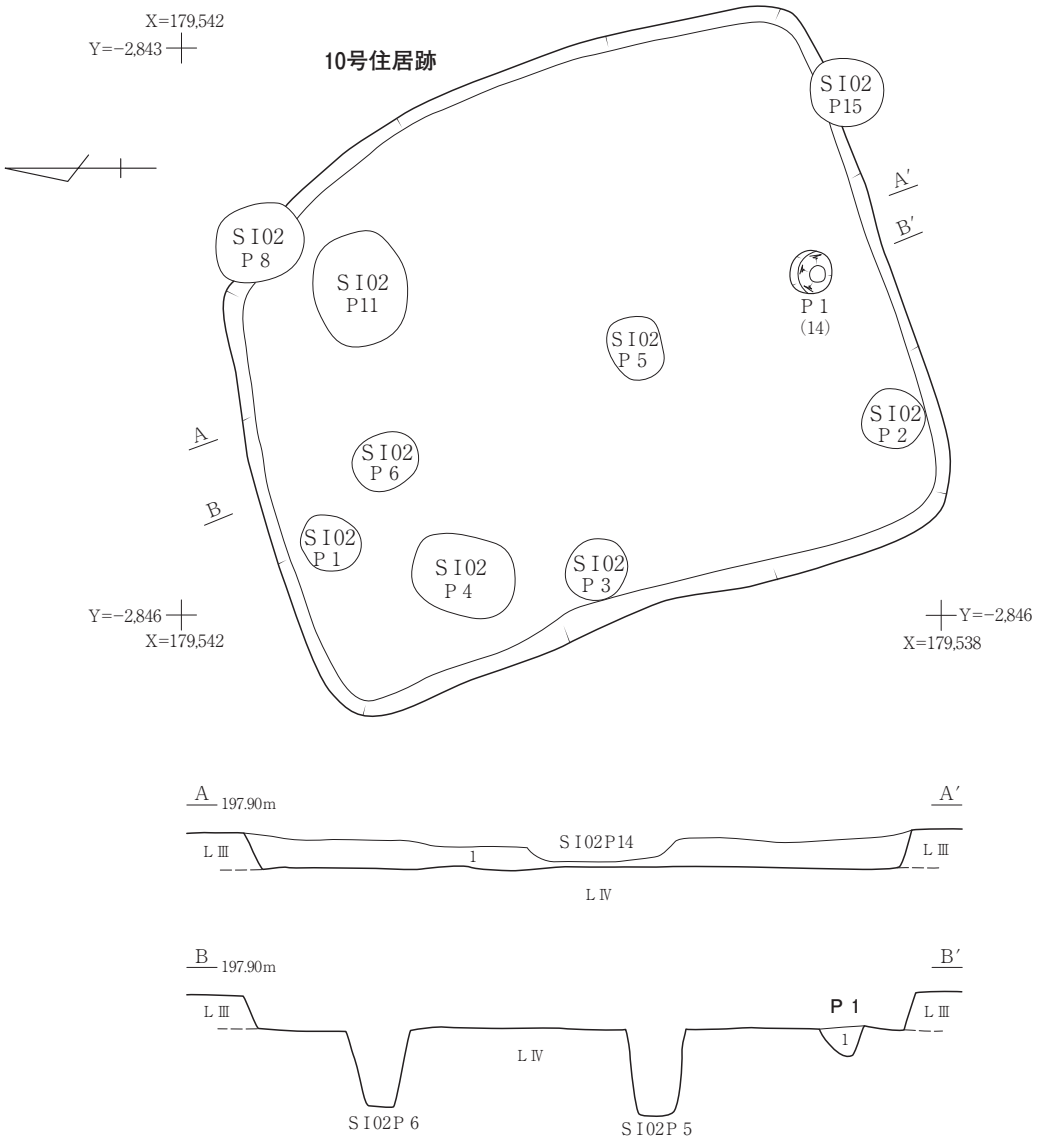
遺　　構（図27，写真13）

本遺構は，調査区東南部，Ｐ26・27グリッドに位置し，地形的には最上位段丘面に立地する。本遺構はＳＩ02調査時に検出しているが，西側の一部はＳＩ02調査時に同時に掘り込んでしまい，ＳＩ02で検出したＰ４・５については本遺構に伴う可能性もある。ＳＩ02と重複し本遺構が古い。

本遺構については，規模や内部施設としてカマドなどが検出されなかったことから，ＳＩ07と同様に竪穴状遺構として報告する。

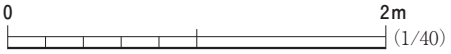
本遺構の堆積土は暗褐色土１層である。堆積過程は判断できないが，同一面上で重複するＳＩ02構築時に埋め戻された可能性が高い。平面形は方形を呈し，規模は南北が3.6ｍ，東西で３ｍを測る。壁は急な角度で立ち上がり，高さは10～20㎝を測る。底面には貼床などは施されず，掘り込んだＬⅣ層をそのまま利用している。底面は全体的に踏み締まっていて，細かな凹凸が認められる。

本遺構の施設としてピット１個を南壁の中央際で検出した。Ｐ１は直径が25㎝程の円形を呈し，



10号住居跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（炭化物粒少量）

Ｐ１堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒・にぶい黄褐色粘土粒少量）



1（ℓ１）

2（ℓ１，Ｐ１　ℓ１）
口径：(15.0)cm
器高：［1.3］cm

3（ℓ１）
底径：(10.0)cm
器高：［1.8］cm

図27　10号住居跡，出土遺物

深さは14cmを測る。なお，ＳＩ02で検出したＰ４・５については本遺構に伴う可能性もある。この他，本遺構に伴う施設は確認できなかった。

遺　　物（図27）

出土遺物は土師器片127点，須恵器片７点が出土している。遺物は堆積土中から散在的に出土している。図27－１は内外面にハケメ調整が施された土師器甕の胴部資料，同図２は蓋で内外面に丁寧なミガキ調整が行われ黒色処理が施されている。同図３は須恵器杯の底部資料で，底部には回転ヘラケズリ再調整が施されている。

ま と め

本遺構は南北が3.6ｍ，東西で３ｍの方形を呈した竪穴状遺構である。本遺構に伴う施設として，ピット１個を検出した。本遺構の所属時期については，遺構の重複関係よりＳＩ02より古い時期の所産と考えている。（大河原）

第４節　　溝　　跡

調査Ｉ区で検出した溝跡は６条である。検出した溝跡については，削平の影響やいずれも調査区外に延びているため，全体の形状や規模が明確に把握できていない。このうち１号溝跡は南北，その他の溝跡は東西に配されている。また，１号溝跡については，調査区の南端から北端にかけて広域に検出され，他の溝跡との関連も考えられることから，全体図の他に２・３・６～８号溝跡の平面図中にもあわせて掲載した。

溝跡の所属時期は，出土遺物や検出層位等から奈良・平安時代に所属するものと考えている。

１号溝跡　ＳＤ01（図28，写真15・16）

本溝跡は，Ｎ８，Ｏ11～29グリッドに位置し，調査を行った最上位段丘面の裾部に沿って検出された。なお，溝跡南北端は調査区外に延びている。遺構検出面はＬⅢ上面であるが，削平を受けＬⅢが欠損する部分についてはＬⅣで検出している。他の遺構との重複関係は，ＳＤ03・07・08と重複し本溝跡が新しいが，堆積土の状況や出土遺物などから大きな時期の差はないものと考えている。なお，ＳＤ02は平面および断面での重複関係は認められなかった。このため，ＳＤ02については，ＳＤ01とほぼ同時期に機能していたものと考えている。

本溝跡は，最上位段丘面の縁辺部の地形に沿って南北に構築されているため，溝跡は直線的ではなく，蛇行するように南北に延びている。なお，部分的に削平を受け遺存していない場所や沢地形で段丘縁辺が大きく内湾する場所では一度調査区外に延び，再び調査区内で検出される場所も認められた。調査区内における本溝跡の規模は全長約213ｍ，幅約１～1.4ｍ，深さ10～40cmを測る。

周壁は緩やかに立ち上がっている部分が多い。また，底面は凹凸が激しく，なかには楕円形状に窪む部分も見られ，北から南に向かい緩やかに傾斜している。なお，Ｏ21・24グリッド周辺では部

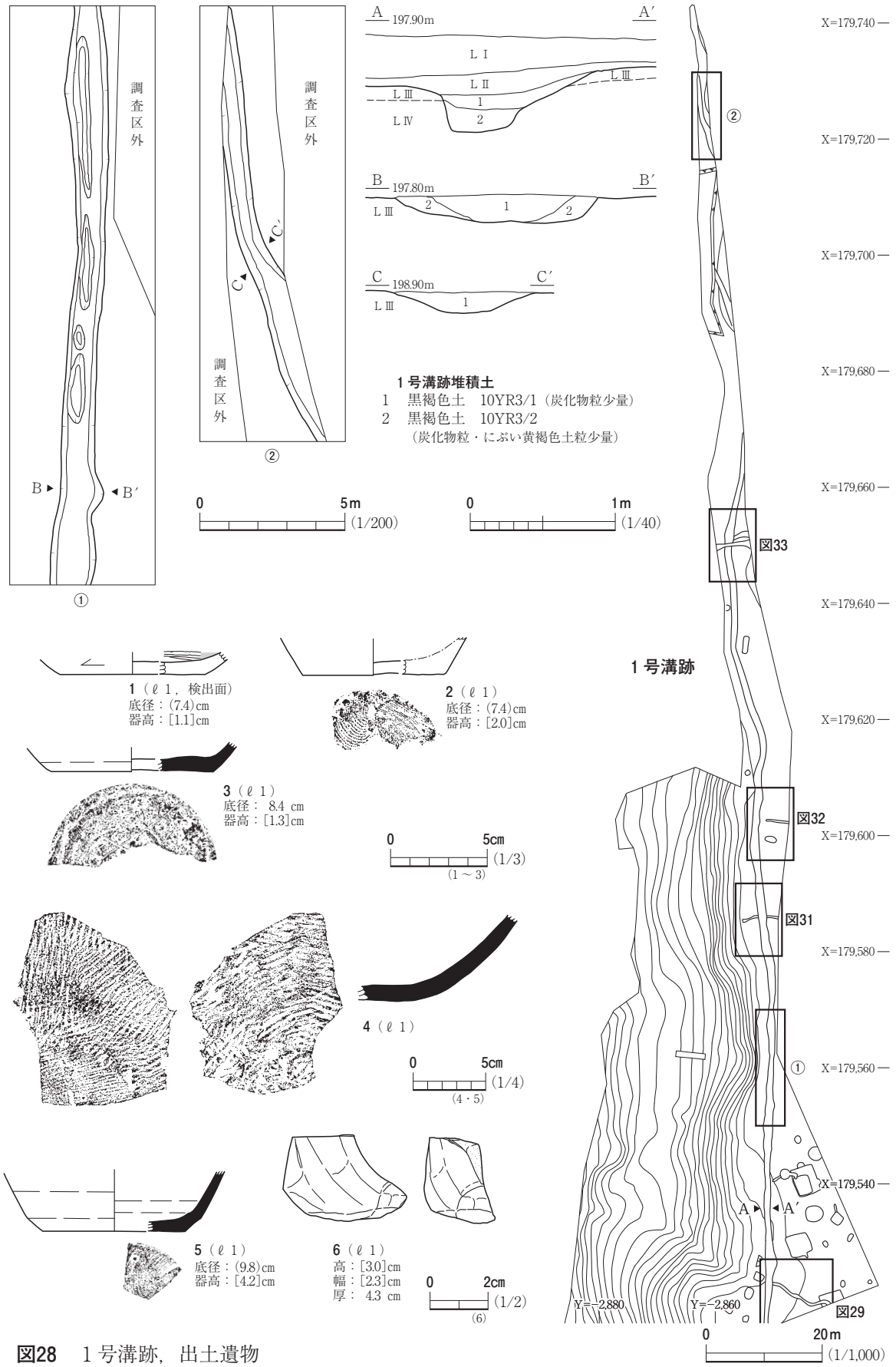


図28　１号溝跡，出土遺物

分的に南から北に向かい緩やかに傾斜している。溝跡北端と南端底面の比高差は約1.7ｍ。また，断面形を見ると鍋底状と皿状を呈す部分とが見られ，部分的に底面の掘り込みに違いが見られる。

堆積土は場所によって単層の部分も認められるが，ほとんどの場所で２層に分層され，いずれも壁際からの流入状況が観察されることから自然堆積土と判断した。なお，底面からは粘性の堆積土などは確認されなかった。このため，常時湛水していたとは考えにくい。

遺物は，堆積土中から土師器片692点，須恵器片35点などが出土している。ほとんどの遺物はＯ22～29グリッドから出土しているが，特に遺構の密度が高いＯ27～29グリッドから多く出土している。また，遺物は特にまとまった出土状況ではなく，検出面から堆積土上層にかけて散在的に出土している。図28－１は内面が黒色された土師器杯で，底部に回転ヘラケズリ再調整が行われている。同図２は土師器甕の底部資料で，底面には回転糸切り痕を残す。同図３は須恵器杯である。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。底面には切り離した後に「×」状の線刻が施されている。同図４は須恵器大甕の底部資料で，外面にタタキ痕，内面にアテ具痕を残す。また外面には部分的に自然釉が認められる。同図５は須恵器の瓶あるいは壺の底部資料で，底面に回転糸切り痕が認められる。内外面には部分的に自然釉がかかる。同図６は土師製の獣脚片である。

本溝跡の所属時期については，他の遺構との重複関係もあるものの，出土遺物等に大きな時期差は認められないことから，８世紀末葉～９世紀前葉頃に属すものと考えている。溝跡の機能としては，降雨などによる水が直接段丘崖に流れ込まないための排水用の溝と考えられる。また，溝跡が検出された最上位段丘縁辺部は最近まで林道として使用され，明治期の丈量帳には本溝跡とほぼ同じ場所に最上位段丘北端部から阿賀川へ続く道が記されている。このため，本溝跡は道と排水を兼用して使用していたものと考えている。（大河原）

２号溝跡　ＳＤ02（図29・30，写真14・26）

本溝跡は，東南部のＯ28，Ｐ28・29グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。なお，削平を受けＬⅢが欠損する部分についてはＬⅣで検出している。他の遺構との重複関係は，ＳＩ03と重複し本溝跡が新しい。また，ＳＤ01については平面および断面での重複関係は認められなかったため，本溝跡とほぼ同時期に機能していたものと考えている。

本溝跡が検出された周辺地形は東から西にかけて緩やかに傾斜する地形に位置し，東から西に向かい蛇行しながらＳＤ01へと続く。溝跡の東端は調査区外に延びている。溝跡東端と西端の検出面の比高差は約40㎝。調査区内における本溝跡の規模は全長約10ｍ，幅約25～60㎝，深さ20～60㎝を測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がっている部分が多い。また，底面は平坦で，東から西に向かい緩やかに傾斜している。溝跡東端と西端底面の比高差は約40㎝を測る。また，断面形を見ると鍋底状を呈している部分が多い。堆積土は場所によって単層の部分も認められるが，大半が２層に分層でき，レンズ状の土層堆積状況が観察されることから自然堆積土と判断した。

遺物は，堆積土中から土師器片33点，須恵器片１点などが出土している。遺物の大半がＳＩ03と

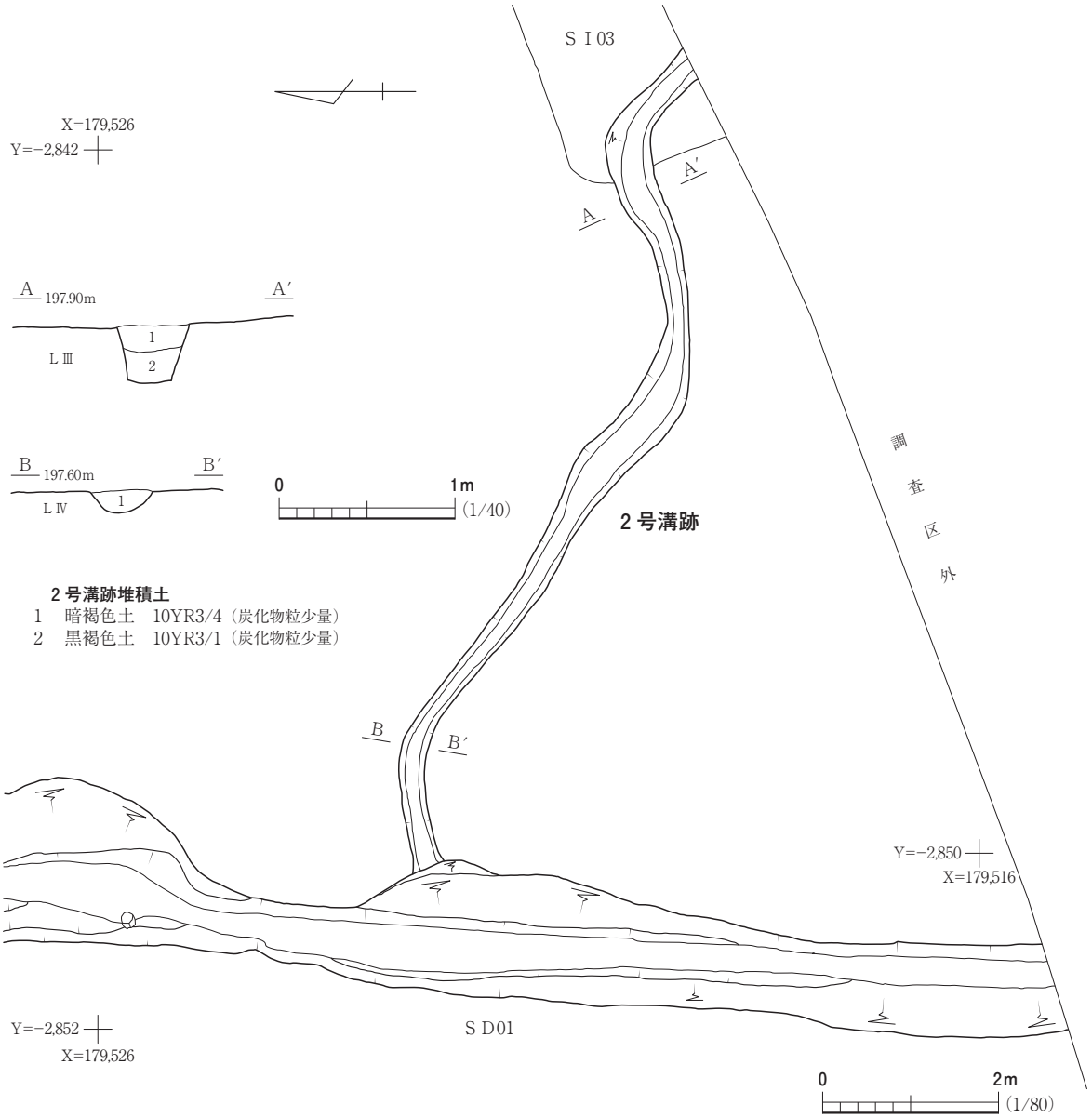


図29　２号溝跡

重複する部分で出土している。また，これらの遺物はＳＩ03床面から溝跡内に流れ込んだ状況で出土しており，本来はＳＩ03に帰属するものと考えている。図30－１は内外面に縦方向のハケメが施された大型の鉢である。外面には縦方向にヘラケズリ再調整も部分的に施される。同図２は須恵器大甕の口縁部資料，同図３は須恵器蓋の摘みである。同図４は内外面黒色処理された高台付杯の高台部資料である。

本溝跡の所属時期は，遺構の重複関係からＳＩ03より新しい時期と考えられ，機能は降雨時などの排水用の溝と考えている。また，段丘崖の沢地や湧水地などの自然流路に直接排水するのではなく，位置的な関係から本溝跡からＳＤ01に排水していたものと考えられる。（大河原）

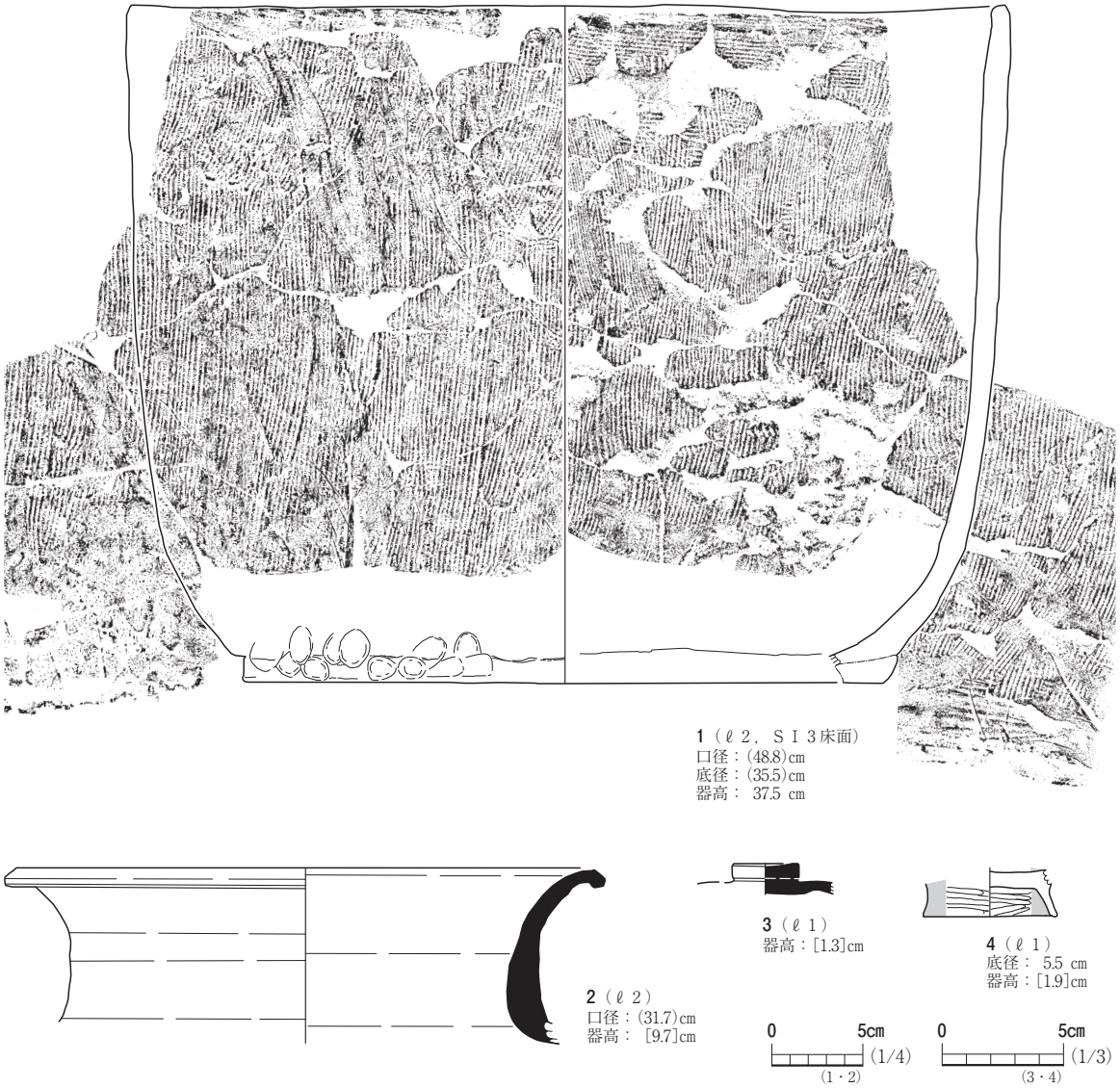


図30　２号溝跡出土遺物

３号溝跡　ＳＤ03（図31，写真14）

本溝跡は，調査区中央南側のＯ・Ｐ22グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係は，ＳＤ01と重複し本溝跡が古い。

本溝跡は東から西にかけて緩やかに傾斜する地形に位置し，東から西に向かい緩やかに曲がりながら段丘崖へと続くが，溝跡東端は調査区外に延びている。溝跡東端と西端の検出面の比高差は約70㎝。調査区内における本溝跡の規模は全長約6.4ｍ，幅約50～60㎝，深さ７～50㎝を測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がっている部分が多い。底面はほぼ平坦で，東から西に向かい緩やかに傾斜している。溝跡東端と西端底面の比高差は約20㎝を測る。溝跡の断面形は鍋底状を呈している。堆積土は３層で，いずれもレンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積土と判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

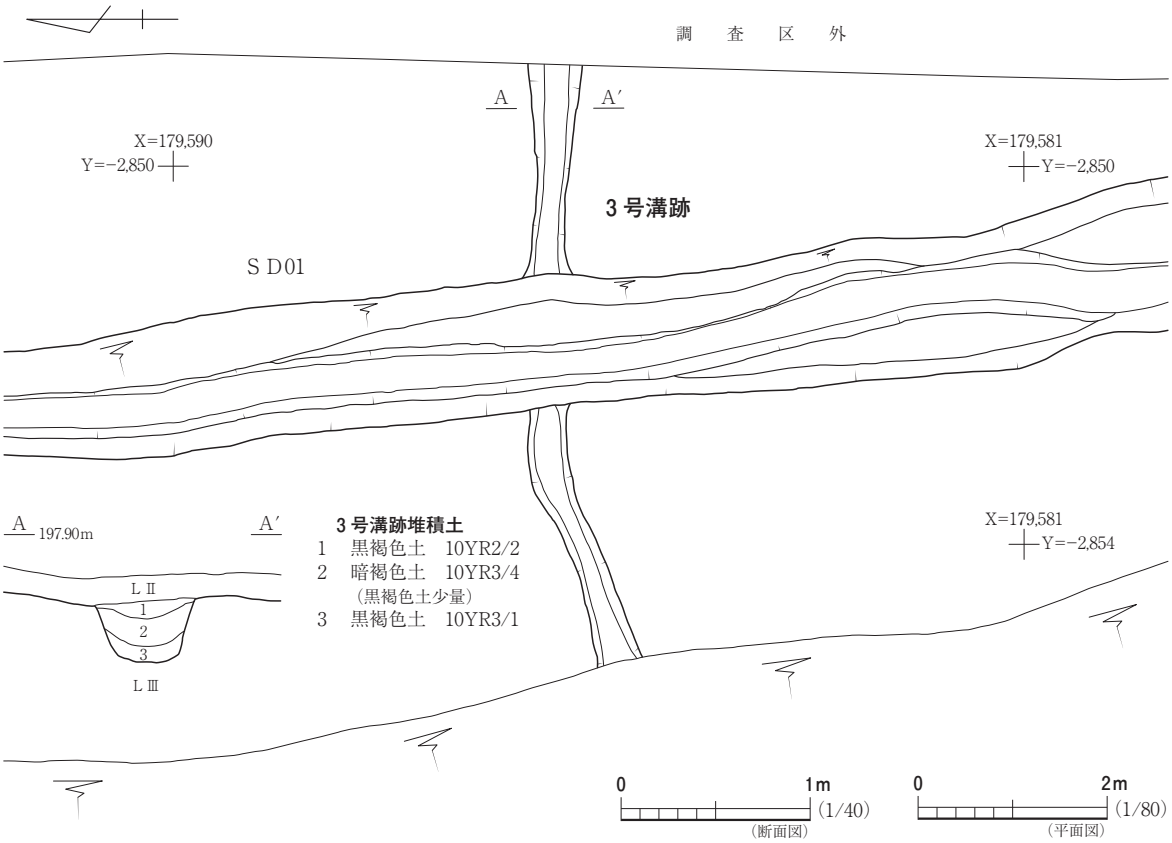


図31　３号溝跡

本溝跡の所属時期については，遺構の重複関係からＳＤ01より古い時期と考えられる。溝跡の機能としては他の溝跡と同様に降雨時などに備えた排水溝と考えている。また，溝跡西端が段丘崖へ伸びて途切れ，周辺に沢地や湧水地などの自然流路が認められることから，段丘崖の自然流路に直接排水したものと考えられる。（大河原）

６号溝跡　ＳＤ06（図32，写真14）

本溝跡は，調査区中央南側のＯ・Ｐ20グリッドに位置する。遺構はＬⅢ上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが，西側にＳＤ01が近接する。

本溝跡は東から西に向かいほぼ直線的に配されている。東端は調査区外に延びているため，溝跡全体の形状は不明である。溝跡東端と西端の検出面の比高差は約20㎝。調査区内における本溝跡の規模は全長約4.4ｍ，幅約30～40㎝，深さは５～10㎝を測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がり，溝跡の断面形は鍋底状を呈している。底面は東から西に向かい緩やかに傾斜し，東西端の底面の比高差は約10㎝を測る。堆積土は１層で，堆積状況から自然堆積土と判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

本溝跡の所属時期については，出土遺物や重複する遺構がないため特定することはできないが，遺構検出面や周囲の遺構の分布状況から奈良～平安時代に属すものと考えている。溝跡の機能としては他の溝跡と同様に降雨時などに備えた排水溝と考えられる。また，段丘崖の沢地や湧水地など

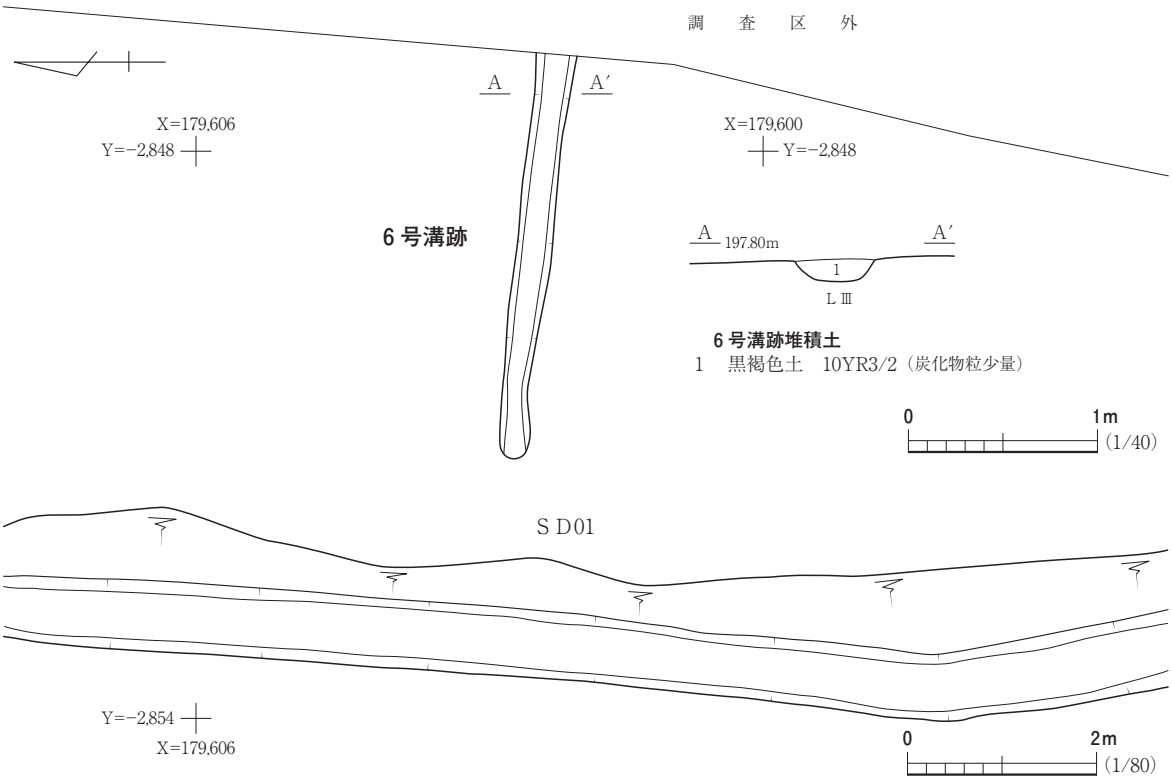


図32　６号溝跡

の自然流路に直接排水するのではなく，位置的な関係から本溝跡からＳＤ01に排水していた可能性が高い。（大河原）

７号溝跡　ＳＤ07（図33，写真14）

本溝跡は，調査区中央のＯ15・16グリッドに位置し，ⅠⅢ上面で検出した。ＳＤ01重複し本溝跡が古い。また，北側にＳＤ08が隣接する。

本溝跡は東から西にかけて直線的に配されている。東西端部は調査区外に延びているが，東端は基盤層まで削平を受けているため遺存していない。また，西端は調査区外の段丘崖に続いている。溝跡東端と西端の検出面の比高差は約30㎝。調査区内における本溝跡の規模は全長約６ｍ，幅約0.5～1.6ｍ，深さ50㎝を測る。周壁は底面から急な角度で立ち上がるが，東西端部では壁上半から検出面に向かい緩やかに外傾している。底面はほぼ平坦に整えられ，東から西に向かい緩やかに傾斜している。溝跡東端と西端底面の比高差は15㎝を測る。溝跡の断面形は漏斗状を呈している。

堆積土は５層で，このうちℓ２～５については，にぶい黄褐色を基調とした砂質土と粘土が交互に堆積していることから，人為堆積と判断した。なお，ℓ２上面はほぼＳＤ01底面と同じ高さに整えられていることから，ＳＤ01構築時に本溝跡を埋め戻して再利用していたものと考えている。

遺物は，ℓ１から土師器片１点が出土している。図33－１は内外面にカキメ調整が施された甕の口縁部資料である。

本溝跡の所属時期は，遺構の重複関係からＳＤ01より古い時期と考えている。溝跡の機能は他の

溝跡と同様に降雨時などに備えた排水用の溝と判断した。なお，溝跡西端が段丘崖へ延びるため，段丘崖の沢地形などの自然流路に排水したものと考えられる。また，本遺構堆積土ℓ２上面とＳＤ01の底面が同一の高さに整えられていることから，ＳＤ01構築時に再利用していた可能性が高く，ＳＤ01に集められた水を段丘崖に排水する機能を有していたものと考えている。　（大河原）

８号溝跡　ＳＤ08（図33，写真14）

本溝跡は，東南部のＯ15グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。ＳＤ01と重複し検出時の平面形の確認では本溝跡が古いと判断したが，配置的にＳＤ01と同時に機能していた可能性があり，本溝跡がＳＤ01より先に埋没したものと考えられる。また，南側にＳＤ07が隣接する。

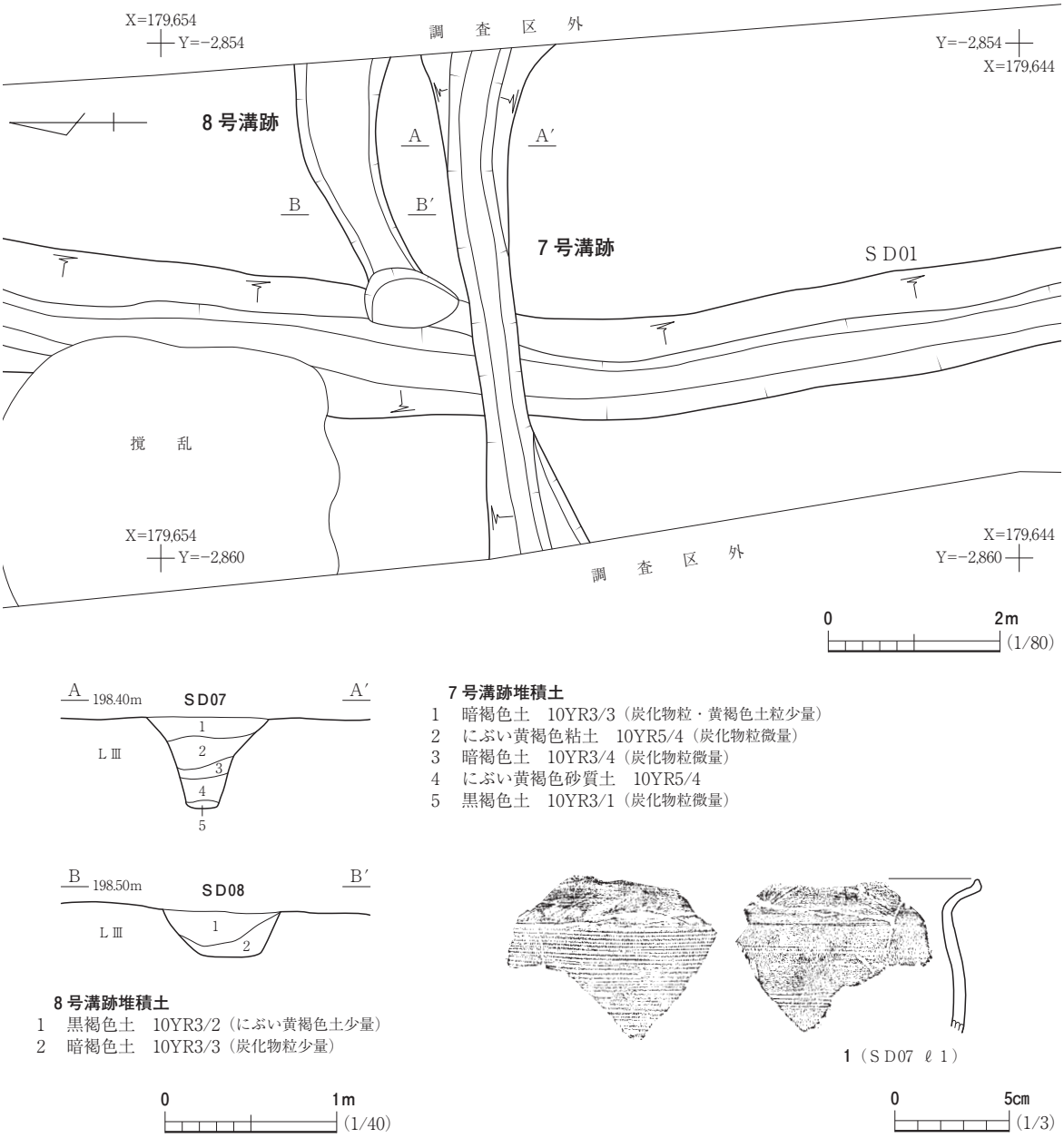


図33　７・８号溝跡，出土遺物

本溝跡は東側から西側にかけて曲線を描くように配置されている。東端部は調査区外に延びているが，既に基盤層まで削平を受けているため遺存していない。西端部はＳＤ01の東壁に取り付く。東端と西端の検出面の比高差は約15㎝。

調査区内における本溝跡の規模は全長約3.2ｍ，幅約0.6～1.1ｍ，深さ５～30㎝を測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がる。また，底面は平坦で東から西に向かい緩やかに傾斜しているが，ＳＤ01と重複する部分には浅い楕円形状の窪みをもつ。溝跡東端と西端底面の比高差は約15㎝を測る。溝跡の断面形は鍋底状を呈している。堆積土は２層で，レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積土と判断した。遺物は出土しなかった。

本溝跡の所属時期については，出土遺物がないため特定できないが，検出層位などから他の溝跡とほぼ同時期の所産と考えている。

溝跡の機能としては降雨時などに備えた排水用の溝と判断した。なお，ＳＤ01との関係から本溝跡を経由しＳＤ01に排水していたものと考えられる。（大河原）

第５節　土　坑

調査Ｉ区で検出した土坑は20基である。所属時期は，縄文時代に所属する土坑が２基，それ以外はいずれも奈良・平安時代に所属するものと考えている。検出された土坑は縄文時代の落し穴と考えられるＳＫ08を除き，いずれも最上位段丘面に分布している。最上位段丘面で検出された土坑は，住居跡が検出された調査区の南東部周辺に密に分布している。

また，出土遺物のうち，未還元の須恵器杯については，須恵器窯ではなく土器焼成坑で焼成されたと考えられる土器も認められるが，調査区内で出土する還元化した須恵器杯と製作技法，器形などが変わらないことから，これらを比較するため須恵器の項目で報告している。これらの土器については，須恵器系土器などの名称を用いて報告されることもあるが，これらの土器は近年10世紀前半の土器に使用される場合が多く，今回は未還元といった呼称を使った。これらの土器については，断面を白抜きし還元化した須恵器と区別している。以下，土坑について個別に報告を行う。

１号土坑　ＳＫ01（図34・40，写真17）

本土坑は，調査区南東部のＱ28グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが，西側にＳＫ02が近接する。平面形は東西0.9ｍ，南北1.2ｍの不整な楕円形状を呈している。検出面から底面までの深さは25㎝を測る。壁は比較的急な角度で立ち上がり，断面形は鍋底状を呈している。また，底面はほぼ平坦に整えられている。堆積土は２層で，ℓ２に黄褐色粘土をブロック状に含むことから，人為堆積土の可能性が高い。

遺物は，堆積土中から土師器片７点が出土している。図40－５は胴部中央に膨らみをもつ土師器の甕である。外面上半にはカキメ調整が施される。また，胴部下半に粘土が付着しているため，粘

土で胴部下半から底部を固定して使用されていた可能性がある。

本土坑の所属時期については，検出面や出土遺物などから８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えている。（大河原）

２号土坑　ＳＫ02（図34，写真17）

本土坑は調査区南東部のＱ28グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，西側にＳＩ03が，東側にＳＫ01が近接する。平面形は楕円形を呈し，規模は東西0.9ｍ，南北1.1ｍを測る。検出面から底面までの深さは25㎝を測る。壁は緩やかな角度で立ち上がり，断面形は皿状を呈している。また，底面はほぼ平坦に整えられているが，中央に向かい緩やかに窪んでいる。遺構内堆積土は２層で，壁際からの流入状況が観察されることから，自然堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の所属時期については，遺物が出土していないため特定できないが，検出面や周囲の遺構の分布状況などから，奈良～平安時代に属すものと考えている。（大河原）

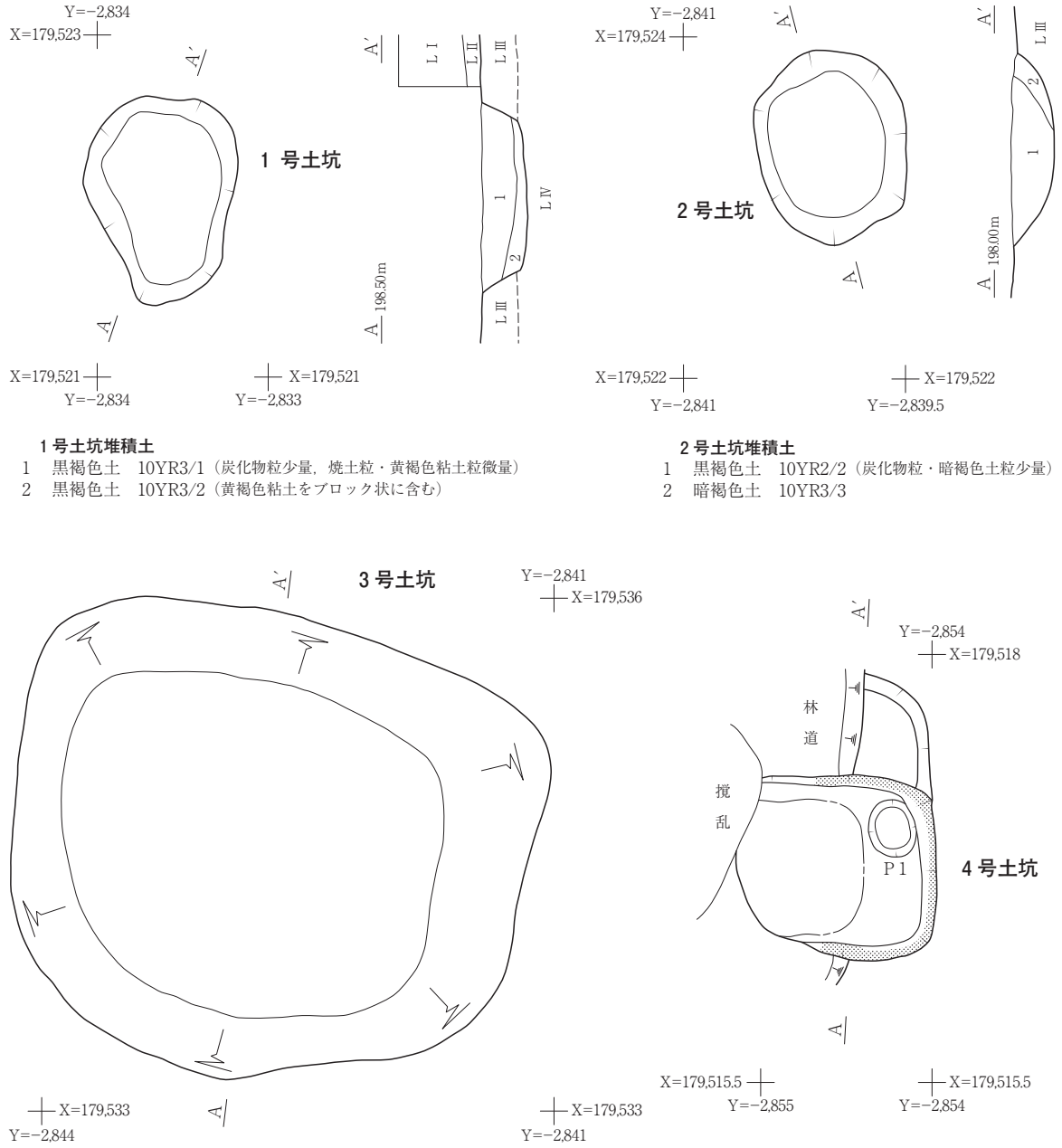
３号土坑　ＳＫ03（図34・39・40，写真17・26）

本土坑は調査区南東部のＰ27グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，南西側にＳＩ01，北側にＳＩ02・10，東側にＳＩ07が近接する。また，平面形は不整な方形を呈している。規模は東西３ｍ，南北2.7ｍを測る。検出面から底面までの深さは35㎝。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がり，断面形は鍋底状を呈している。底面はほぼ平坦に整えられているが，細かな凹凸が認められる。遺構内堆積土は３層に分けられ，いずれも底面と平行するような堆積状況を示すことから，人為堆積と判断した。

遺物は，ℓ１・２を中心に土師器片1,741点，須恵器片80点，粘土塊が出土している。出土遺物の細片が多く，器面が爆ぜた状態のものも認められる。図39－１～５は須恵器杯である。底面の切り離しは，いずれも回転ヘラ切りによる。焼成はいずれも良好であるが１～４は未還元で色調が浅黄橙色を呈している。同図６・７は須恵器の蓋である。天井部中央に浅く窪んだ摘みをもつ。天井部は平坦なものの，形状は山笠状に近い。同図８～10は須恵器甕片である。外面には平行線タタキ，内面には波状文やハケメが認められる。

図39－11・12は土師器杯である。11は内面に黒色処理が施されている。底部には回転糸切り痕が認められる。12は内面にミガキが行われているが，黒色処理は施されていない。また，底部には回転ヘラケズリ再調整が行われている。同図13は土師器蓋である。内外面にミガキが施されているようだが，器面が爆ぜており，観察できない。

図39－14～17は土師器の甕である。破片資料であるため，全体の器形を知ることはできないが，いずれも口縁部が「く」字状に外反し，胴部が14・15のように膨らみをもつものと，16のように直線的なものとが認められる。内外面には，ハケメやカキメ調整が施されている。16はタタキとロク



1 号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒少量，焼土粒・黄褐色粘土粒微量）
2　黒褐色土　10YR3/2（黄褐色粘土をブロック状に含む）

2 号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒・暗褐色土粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3

3 号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1
（黄褐色粘土をブロック状に含む，炭化物粒・焼土粒少量）
2　黒褐色土　10YR2/3
（黄褐色粘土微量，炭化物粒・焼土粒少量）
3　黒褐色土　10YR2/2
（黄褐色粘土微量，炭化物粒少量）

4 号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（炭化物・焼土粒少量）
2　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒・黄褐色粘土少量）
3　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒多量，焼土粒・黄褐色粘土少量）
4　暗褐色土　10YR3/4（黄褐色粘土ブロック多量，掘形埋土）

Ｐ１堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒少量）

0　1m（1/40）

図34　１～４号土坑

ロで成形し，その後カキメ調整で形を整えている。図40－１は甕あるいは甑と考えられ，胴部下半から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形となる。外面には縦方向のハケメ，内面にはカキメが施される。同図２は甑あるいは土管状土製品と思われる。外面にタタキ，内面にはカキメ後，斜め方向にハケメが施される。同図３は土師器の大型鉢で，外面には縦方向のハケメ後，部分的にケズリ調整が施される。内面は全体的に縦や斜め方向にハケメを行い，部分的にカキメ調整が認められる。同図４は砥石で，各面に研磨作業時の線状痕が認められ一部には溝状の部分もある。

本土坑の所属時期は，出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えている。機能としては廃棄坑または，熱を受けた痕跡が認められなかったものの，粘土塊や器面が爆ぜた土器も認められることから，土器焼成坑の可能性もある。（大河原）

４号土坑　ＳＫ04（図34・40，写真17・26）

本土坑は調査区南東部のＯ29グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，土坑西側半分は林道により削平され遺存状況は悪い。また，北側にＳＫ05，西側にＳＫ07，東側にＳＤ01が近接する。平面形は，遺存状況から方形状を呈していたものと思われる。また，北側の壁に張り出し部を伴う。土坑の規模は，遺存長東西1.15ｍで，南北1.1ｍ。検出面から底面までの深さは35㎝を測る。

壁はいずれも比較的急な角度で立ち上がり，断面形は鍋底状を呈している。なお，南北の両壁は熱を受け１㎝程焼土化していた。底面は部分的に黄褐色粘土ブロックを多量に含む暗褐色土で埋め戻され，その上面を平坦に整えている。また，底面の北東隅でピット１基を検出した。ピットは直径30㎝程の円形を呈し，深さ15㎝を測る。北壁の張り出し部は，遺存長で東西40㎝，南北60㎝，深さ10㎝を測る。土坑の堆積土は４層に分けられ，このうちℓ４は底面の掘形埋土である。また，ℓ１～３については，いずれも底面と平行するような堆積状況を示すことから，人為堆積と判断した。

遺物は，土師器44点，須恵器７点，縄文土器２点が出土している。これらの遺物の多くは，ℓ１からの出土が多い。図40－６・７は須恵器の杯である。６の内外面には火だすき痕が認められる。７は焼成時の影響で底部が爆ぜて破損している。未還元で，器面は浅黄橙色を呈している。８は高台付杯で，外面に回転ヘラケズリ再調整が施される。同図９は土師器の短胴甕で，内外面にロクロ整形痕を残す。

本土坑の所属時期は，出土遺物などから８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えている。本土坑の機能については，壁の一部に熱を受けた痕跡が認められることと，堆積土中に多量の木炭粒を含むことなどから，木炭焼成と考えている。なお，出土遺物や土坑の形状がＳＫ07に類似する点が多いことから，本土坑については土器焼成坑の可能性も指摘しておきたい。（大河原）

５号土坑　ＳＫ05（図35・41，写真17・26）

本土坑は調査区南東部のＯ28グリッドに位置する。遺構は，ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，土坑の西側半分は林道や撹乱により削平され遺存状況は悪い。また，北側にＳＫ13，南西側にＳＫ07，南側にＳＫ04が近接する。平面形は，東側の壁が膨らむ不整な方形状を呈している。規模は，遺存長で東西2.15ｍ，南北2.3ｍを測る。検出面から底面までの深さは10～20㎝を測る。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦に整えられているものの，東から西にかけて緩やかに傾斜し，部分的に浅い皿状の窪みが認められる。また，土坑の底面から焼土面とピットを検出した。焼土面は南側の壁際に位置している。平面形は東西80㎝，南北70㎝の不整な楕円形状を呈し，底面から２㎝程焼土化している。ピットは東側の壁中央に位置する。ピットの平面形は直径30㎝程の円形を呈し，深さが15㎝を測る。土坑の堆積土は２層で，いずれも底面と平行するような堆積状況を示すことから，人為堆積と考えている。

遺物は，ℓ１を中心に土師器片333点，須恵器片５点，縄文土器片６点が出土している。図41－１は口縁部が「く」字状に外反する土師器甕の口縁部片である。外面の口縁部と胴部の境にはタタキ痕が部分的に認められる。タタキ整形後に縦方向のハケメ調整を行っている。内面も縦方向のハケメ調整とカキメ調整が認められる。同図２は，底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる鉢型土器である。内外面にはハケメ調整が施される。同図３は，高台付杯の口縁部片と思われる。両面にミガキが施され黒色処理も部分的に確認できるが，器面が爆ぜているため観察しにくい。同図４～７は未還元の須恵器の杯である。歪みはあるものの，いずれも器高が低く，底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら立ち上がる器形になる。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。焼成は比較的良好であるが，器面は浅黄橙色を呈している。同図８は須恵器の蓋である。天井部はロクロ整形で平坦に整えられ，摘みは中央部が浅く窪む。

本土坑の所属時期には，出土遺物などから８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えられる。土坑の機能については，底面に熱を受けた痕跡が認められることや堆積土中に焼成があまく，器面が爆ぜた遺物なども認められることから，土器焼成に関係する施設と考えている。（大河原）

６号土坑　ＳＫ06（図35・41，写真17・26）

本土坑は調査区東南部Ｐ26グリッドに位置する。遺構検出面は，ＬⅢ上面である。ＳＩ02と本土坑の溝状施設が重複しているが，溝状施設についてはＳＩ02に伴う可能性もある。

平面形は，直径が約1.7ｍの円形を呈し，東西側に溝状の施設が伴う。検出面から底面までの深さは70～80㎝を測る。壁は急角度で立ち上がり，底面は平坦に整えられている。断面形は鍋底状を呈している。堆積土は４層で，いずれも壁際から流入し，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

また，本土坑の東西で溝状施設を検出した。検出時，平面形および堆積土の観察から本土坑に伴

う施設として調査を行ったが，溝状施設の東端がＳＩ02・10の西壁隅に位置することから，ＳＩ02・10に伴う可能性もある。溝状施設は東側が「Ｌ」字状を呈し，土坑を挟んだ西側では直線的に配されている。溝状施設の規模は東側で東西1.4ｍ，南北1.4ｍ，西側で1.8ｍを測る。幅は20～80㎝，深さは10～20㎝を測る。壁は東側で緩やかに立ち上がるが，西側は比較的急な角度で立ち上がっている。底面は，ほぼ平坦に整えられているが，西側では土坑に向かい緩やかに傾き，土坑と接する部分では階段状を呈している。溝状施設の堆積土は２層で，壁際からの流入が認められることから，自然堆積と考えている。

遺物は，土坑堆積などから縄文土器片10点，土師器片14点，須恵器片１点，溝状施設から土師器片５点が出土している。図41－９は口縁部が大きく外反する土師器甕の口縁部片で，外面にロクロ整形痕，内面にはカキメ調整が認められる。同図10は未還元の須恵器杯で，器形は器高が低く，底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りによる。

本土坑の所属時期については，出土遺物などから８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えられる。なお，本土坑の機能については，土坑底面に粘性の堆積土が確認できなかったが，西側の溝状施設底面が土坑に向かい傾斜していることや，調査時に降雨後土坑に水が溜まり，数日間貯水していたことなどから，簡易の水溜用の施設と考えられる。（大河原）

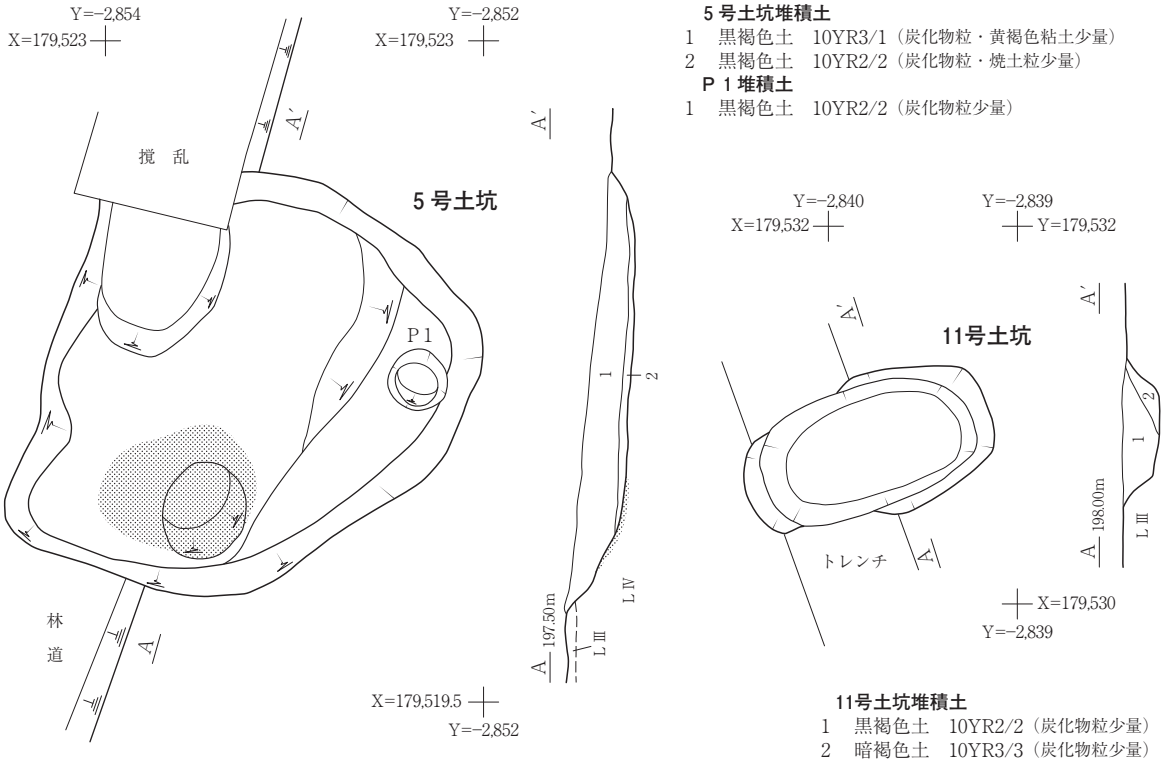
７号土坑　ＳＫ07（図36・42～44，写真18・27）

本土坑は調査区南東部のＯ29グリッドに位置し，ＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，南側と東側の壁の一部は撹乱を受け遺存していない。また，東側にＳＫ04・05が近接する。平面形は，方形を呈しているが，南北壁の中央に半楕円形状の張り出しをもつ。規模は，遺存部分で東西約1.4ｍ，南北約1.1ｍを測る。検出面から底面までの深さは40㎝を測る。周壁は急な角度で立ち上がっている。なお，北側と西側の壁の一部は熱を受け，２㎝程焼土化していた。土坑の底面は平坦に整えられ，断面形は鍋底状を呈している。南北壁の張り出し部の規模は，遺存状況が良い北側の壁で幅70㎝を測り，壁から外側に15㎝程張り出している。深さは15㎝を測る。

土坑の堆積土は５層に分かれ，ℓ４・５については壁土崩落などに起因する自然堆積土と考えているが，ℓ１～３については床面と平行に堆積し，ℓ２上面からℓ１にかけて多量の遺物を含むことから人為堆積土と判断した。また，ℓ３下層からは伏せられた状態で土師器杯が出土している。

遺物は，ℓ１層を中心に土師器片74点，須恵器片30点，縄文土器片２点が出土している。出土遺物は未還元の須恵器杯が多い。これらは形が歪み，器面が爆ぜ，底部が抜け落ちた状態で出土しているものがほとんどである。この他に須恵器椀や土師器杯，甕，甑，大型鉢，土管状土製品などと遺物の器種は豊富である。

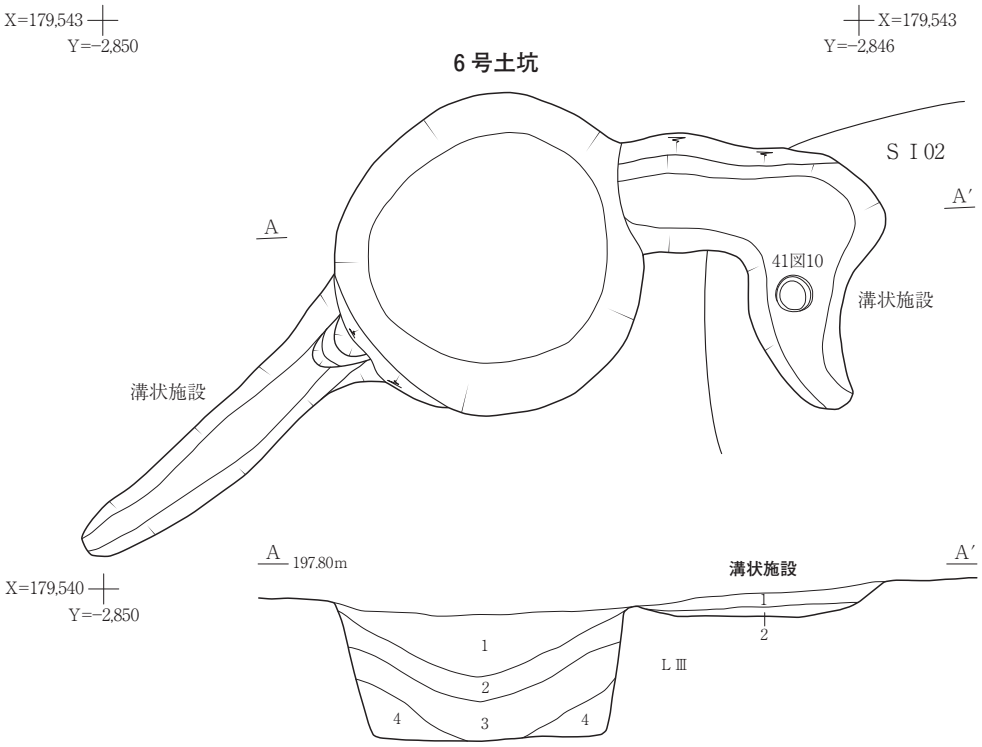
図42－１～３は内面黒色処理が施された土師器杯である。いずれも，体部下半に回転ヘラケズリ再調整が施されている。１・２の外面の口縁部周辺に部分的ミガキ調整が加えられているが，１は器面が粗く，ほとんど観察できない。同図４～９は土師器の甕である。４は胴部上半に膨らみをも



５号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒・黄褐色粘土少量）
2　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒・焼土粒少量）

Ｐ１堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒少量）

11号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量）



６号土坑堆積土
1　黒色土　10YR2/1（炭化物少量）
2　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒少量）
3　黒褐色土　10YR2/3（暗褐色砂質土粒少量）
4　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土粒少量）

溝状施設堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量）

0　1m
(1/40)

図35　５・６・11号土坑

つ短胴甕，５～８は長胴甕で，内外面はハケメとカキメ調整によるものが多く，中には５・８のようにヘラケズリ再調整が施されるものも認められる。５・６は胴部から口縁部にかけてタタキ痕が認められる。９は短胴甕あるいは，鉢になるものと思われる。同図10は内外面にハケメ調整が施された大型鉢の底部である。特に底部から体部下半を整形する際に強めのハケメ調整が施されており，外面の凹凸が激しい。

図43－１・２は土師器の甑である。いずれも，器面の調整にハケメやカキメを施す。１の体部下半から底部周辺に指押さえの痕跡が認められる。２は外面に縦方向のハケメ後，内外面にカキメ調整が施される。同図３は，半円形状の土管状土製品である。外面にはタタキ調整が認められ，底部付近に円孔が施されている。

図43－４～14，図44－１～11は未還元の須恵器の杯である。焼成時の影響で形が歪み底部が破損し，器面が爆ぜたものが大半である。器形は器高が比較的低く，底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら立ち上がり，口縁短部がやや外反する。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りによるが，図43－12は静止糸切り，図44－９は回転糸切りである。いずれも，調査区で出土している還元焼成された須恵器杯と製作技法や器形に変わりは認められない。復元可能な土器から観察すると，底径／口径比が0.55～0.6，器高／口径比0.25～0.3に収まる土器（図43－４～９，図44－５～７・９）が最も多く，底径／口径比が0.6以上，器高／口径比0.25～0.3（図43－10・11，図44－８），底径／口径比が0.55以下，器高／口径比0.25～0.3（図44－１・４）に大きく分かれる。焼成は比較的良好なものも認められるが，いずれも還元化しておらず，色調は浅黄橙色を呈している。図44－12は須恵器の高台付杯である。身の部分が深く，高台は底面の縁辺部に貼り付けで設けられている。

本土坑の所属時期については，出土遺物などから８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えられる。本土坑の機能については，壁面に熱を受けた痕跡が認められることや堆積土中に還元化されず器面が爆ぜた遺物なども認められること，壁際に張り出し部をもつ形状が土器焼成坑に類似する点から，底面に焼面は認められなかったものの，土器焼成坑と考えている。（大河原）

８号土坑　ＳＫ08（図36，写真17）

本土坑は調査区南西部のＬ31グリッドに位置している。本調査区内で検出した土坑はいずれも最上位段丘面の平坦部に分布するのに対して，本土坑は段丘崖の狭い平坦部から検出されている。遺構検出面はＬＶ上面である。重複する遺構はなく，周辺の遺構の密度は希薄である。

土坑の平面形は長方形状を呈し，規模は東西1.15ｍ，南北0.55ｍを測る。壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がっている。底面はほぼ平坦であるが，中央に高まりをもつ。検出面から底面までの深さは最も深い部分で75㎝を測る。また，底面中央でピット１個を検出した。ピットは，直径が８㎝の円形を呈し，深さは20㎝を測る。土坑内の堆積土は５層に分けた。ℓ１～３は，レンズ状の堆積状況が認められることから，自然堆積と判断した。また，ℓ４はピット内堆積土，ℓ５は掘形埋土である。本土坑から遺物は出土しなかった。

本土坑は形状などから，縄文時代の落し穴と考えられる。所属時期の詳細については，出土遺物がないため特定できない。（大河原）

９号土坑　ＳＫ09（図36，写真17）

本土坑は調査区中央南側のＰ21グリッドに位置する。遺構はＬⅣ上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが，西側にＳＤ01，北側にＳＤ06が近接する。本土坑の平面形は，不整な楕円形状を呈している。規模は東西約2.3ｍ，南北約1.4ｍ。検出面から底面までは最も深い土坑中央部で75㎝を測る。壁は比較的緩やかに立ち上がり，底面は細かな凹凸が認められ，北側に向かい緩やかに傾斜している。堆積土は３層で，いずれも壁際からの流入状態が認められることから，自然堆積と考えている。本土坑からは，遺物は出土しなかった。

本土坑の所属時期については，遺物が出土していないため特定できないが，検出面や形状などから縄文時代に属すものと判断した。（大河原）

11号土坑　ＳＫ11（図35，写真18）

本土坑は調査区南東部のＰ・Ｑ27グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はないが，土坑南北壁の一部はトレンチで削平してしまい遺存していない。また，ＳＩ07が北側に隣接する。平面形は方形状を呈し，規模は東西1.35ｍ，南北0.8ｍを測る。検出面から底面までの深さは20㎝を測る。壁は緩やかな角度で立ち上がり，断面形は鍋底状を呈している。また，底面はほぼ平坦に整えられているが，北側に向かい緩やかに傾斜している。堆積土は２層で，壁際からの流入状況が観察されることから，自然堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

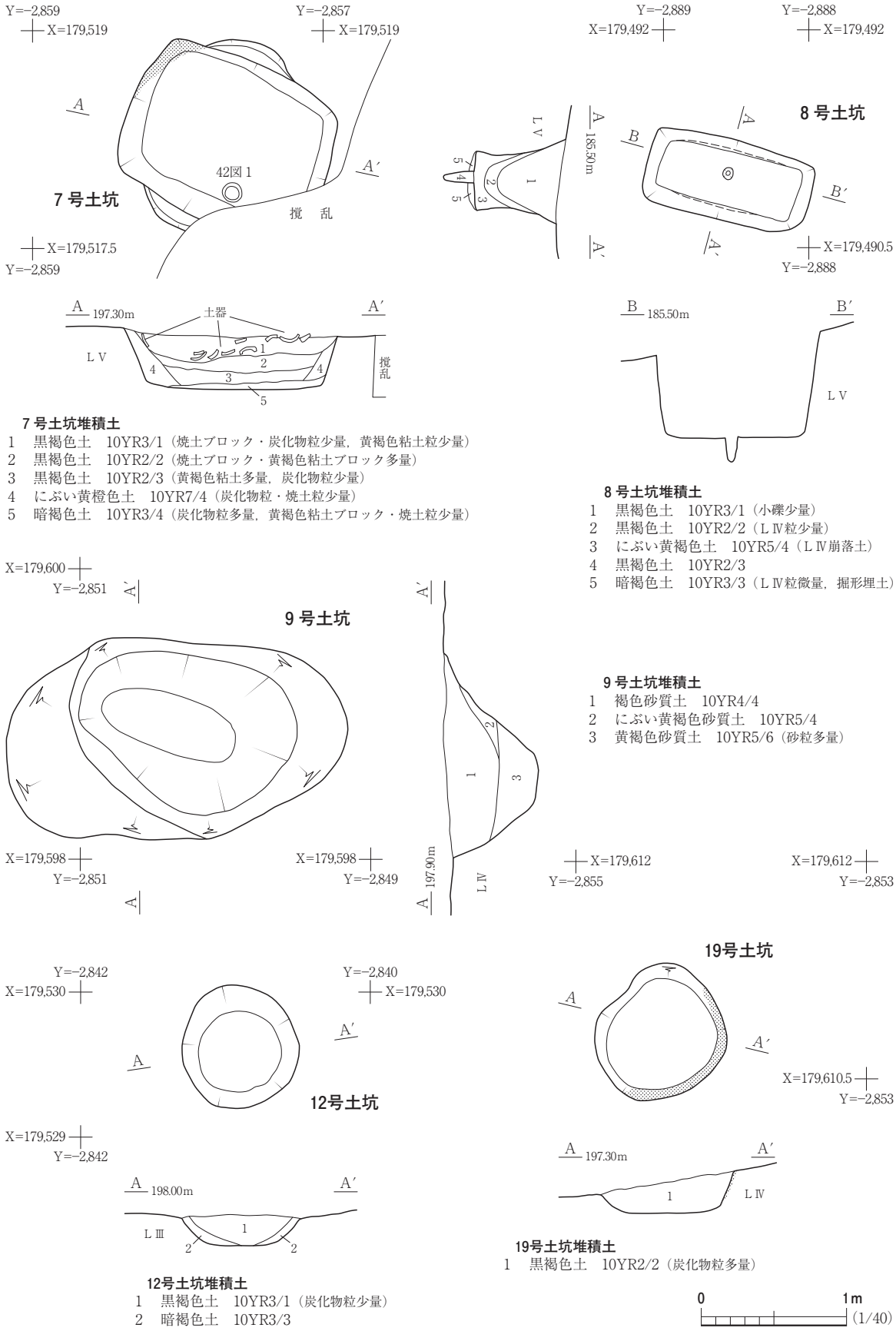
本土坑の所属時期については，遺物が出土していないため特定できないが，検出面や周囲の遺構の分布状況などから，奈良・平安時代に属すものと考えている。（大河原）

12号土坑　ＳＫ12（図36・41，写真18・27）

本土坑は調査区南東部のＰ27・28グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，本土坑と重複する遺構はない。なお，ＳＩ01が西側に近接する。平面形は，直径が80㎝ほどの円形状を呈している。検出面から底面までの深さは20㎝を測る。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がっている。また，断面形は鍋底状を呈し，底面はほぼ平坦に整えられている。堆積土は２層で，壁際に沿ってレンズ状の堆積状況が認められることからから，自然堆積土と判断した。

遺物は，土師器片154点，須恵器片３点がℓ１上面からまとまって出土している。図41－11は未還元の須恵器杯である。底部の切り離しは回転糸切りによる。同図12は土師器甕の底部資料で，底部内面に「×」字状の線刻が認められる。同図13は土師器長胴甕の胴部下半の資料である。内外面にはハケメ，また外面の底部周辺には手持ちヘラズリが密に施されている。

本土坑の所属時期については，出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから８世紀末葉～９世紀前



7 号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（焼土ブロック・炭化物粒少量，黄褐色粘土粒少量）
2　黒褐色土　10YR2/2（焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック多量）
3　黒褐色土　10YR2/3（黄褐色粘土多量，炭化物粒少量）
4　にぶい黄橙色土　10YR7/4（炭化物粒・焼土粒少量）
5　暗褐色土　10YR3/4（炭化物粒多量，黄褐色粘土ブロック・焼土粒少量）

8 号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（小礫少量）
2　黒褐色土　10YR2/2（ＬⅣ粒少量）
3　にぶい黄褐色土　10YR5/4（ＬⅣ崩落土）
4　黒褐色土　10YR2/3
5　暗褐色土　10YR3/3（ＬⅣ粒微量，掘形埋土）

9 号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/4
3　黄褐色砂質土　10YR5/6（砂粒多量）

12号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3

19号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒多量）

図36　7 ～ 9 ・12・19号土坑

葉に属すものと考えている。（大河原）

13号土坑　ＳＫ13（図37・38，写真18）

本土坑は調査区南東部のＯ28グリッドに位置する。遺構は，ＬⅣ上面で検出した。重複する遺構はないが，西側半分は林道や撹乱により削平され遺存していない。また，北側にＳＫ14・15が，南側にＳＫ05が近接する。平面形は，遺存状況から不整な方形状を呈していたものと考えられる。規模は，遺存長で南北1.8ｍ，東西1.6ｍを測る。検出面から底面までの深さは15㎝を測る。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がっている。底面は細かな凹凸が認められ，西側に向かい緩やかに傾斜している。また，土坑の底面からピット３個を検出した。ピットは底面中央と北側壁中央に位置する。ピットはいずれも直径30㎝程の円形を呈し，深さは土坑底面から15～20㎝を測る。土坑の堆積土は２層で，いずれも壁際からの流入状況を示すことから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ１から土師器片88点，須恵器片１点，粘土塊が出土しているが，細片が多い。図38－１は大型鉢の体部資料で，内外面に縦方向のハケメ調整が施されている。

本土坑の所属時期については，周囲の遺構の分布状況や出土遺物などから８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えられる。なお，本土坑の機能については，遺存状況が悪いため，その詳細を特定することはできないが，周辺に土器生産に関連する遺構が隣接しており，粘土塊なども出土していることから，それらに関連する施設と考えている。（大河原）

14号土坑　ＳＫ14（図37，写真19）

本土坑は調査区南東部のＯ28グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。ＳＫ15と重複し本土坑が新しい。また，西側半分は林道により削平され遺存していない。平面形は，遺存状況から楕円形状を呈していたものと考えられる。規模は，遺存長で東西0.5ｍ，南北1.2ｍを測る。検出面から底面までの深さは20㎝。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がり，土坑の底面は東側に向かい緩やかに傾斜している。堆積土は黒褐色土１層で堆積過程は不明である。遺物は出土しなかった。

本土坑は，重複関係からＳＫ15より新しい。また，時期については出土遺物がないため特定できないが，周囲の遺構の分布状況などからほぼ同時期の所産であると考えている。（大河原）

15号土坑　ＳＫ15（図37，写真19）

本土坑は調査区南東部のＯ28グリッドに位置する。遺構検出面は，ＬⅣ上面である。他の遺構との重複関係は，ＳＫ14と重複し本土坑が古い。また，西側半分については林道や撹乱により削平，南側はＳＫ14と重複し遺存していない。平面形は，遺存状況から円形ないし楕円形状を呈していたものと思われる。規模は遺存長で南約１ｍ，東西0.4ｍ，検出面から底面までの深さは10㎝を測る。壁は緩やかな角度で立ち上がる。また，土坑底面は一部掘り過ぎてしまったが，ほぼ平坦に整えられている。堆積土は黒褐色土１層で堆積過程は不明である。遺物は堆積土中から土師器片５点が散

在的に出土したが，細片であったため図示しなかった。

本土坑の所属時期については，重複関係からＳＫ14より古い。また，時期については，周囲の遺構の分布状況などから，ほぼ同時期に属するものと考えている。（大河原）

16号土坑　ＳＫ16（図37・44，写真19・26）

本土坑は調査区南東部のＰ26グリッドに位置する。ＬⅢ上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが，南側に，ＳＩ02・10，ＳＫ06・17・20が近接する。平面形は不整な楕円形状を呈し，規模は東西1.45ｍ，南北1.7ｍを測る。検出面から底面までの深さは25㎝。壁は比較的急な角度で立ち上がっている。土坑底面はほぼ平坦に整えられ，断面形は鍋底状を呈している。堆積土は３層で，いずれも壁際からの流入状況を示すことから，自然堆積と判断した。

遺物は，ℓ１から土師器片46点，須恵器片３点が散在的に出土した。図44－13・14は未還元の須恵器の杯である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで，焼成は比較的良好であるが，色調が浅黄橙色を呈す。同図15は須恵器大甕の口縁部片である。外面に窯壁が付着し，破断面に自然釉が認められる。同図16・17は土師器の甕で，いずれも内外面にカキメ調整が施されている。

本土坑の所属時期については，出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えている。（大河原）

17号土坑　ＳＫ17（図38，写真19）

本土坑は調査区南東部のＰ26グリッドに位置し，遺構検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係は認められないが，東側の一部は調査区外に延びている。また，西側に，ＳＩ02・10，ＳＫ06・16・20が位置している。平面形は調査区内で検出した状況から，直径2.5ｍ程の円形状を呈しているものと思われる。検出面から底面までの深さは95㎝を測る。壁は比較的急な角度で立ち上がっている。土坑底面には細かな凹凸があり，中央に向かい緩やかに傾く。また，断面形は鍋底状を呈している。堆積土は５層に分層した。いずれも壁際に沿って流入し，レンズ状の堆積状況が認められることから，自然堆積と判断した。

遺物は，ℓ１から土師器片15点が散在的出土している。図38－３は須恵器の杯である。底部の切り離しは，回転ヘラ切りによる。

本土坑の所属時期については，出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから，８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えられる。なお，土坑の機能については特定できないが，西側に位置するＳＫ06と規模などが類似することから，同様の機能を持ったものと考えられる。（大河原）

19号土坑　ＳＫ19（図36，写真19）

本土坑は調査区南東部のＯ19グリッドに位置している。遺構検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが，東側にＳＤ01が近接する。なお，遺構の分布状況は希薄である。本土坑の平面形は，

直径が90㎝程の不整な円形状を呈している。壁は比較的急な角度で立ち上がる。また，南側周壁は熱を受け，２㎝程焼土化していた。底面はほぼ平坦で，断面形は鍋底状を呈している。検出面から底面までの深さは10～25㎝を測る。土坑の堆積土は炭化物粒を多量に含む黒褐色土１層で，堆積過程については不明である。本土坑から土師器片２点が出土しているが，細片のため，図示でできなかった。

本土坑の時期については，出土遺物がないため特定できないが，周囲の遺構の分布状況などから奈良・平安時代に属すものと考えている。また，本土坑の機能については，壁に熱を受けた痕跡が認められ，堆積土中に多量の木炭粒を含むことから，木炭焼成坑と考えている。（大河原）

20号土坑　ＳＫ20（図37，写真19）

本土坑は調査区南東部のＰ26グリッドに位置する。遺構はＬⅢ上面で検出した。ＳＩ02と重複し，新旧関係では本土坑が古い。また，西側壁の一部は削平してしまい，遺存していない。

平面形は遺存状況から，西側が膨らむ不整な楕円形状を呈していたものと思われ，規模は南北1.6ｍ，東西が遺存長で1.4ｍを測る。検出面から底面までの深さは70㎝。壁は急な角度で立ち上がる。土坑底面は，東側に向かい緩やかに傾いている。また，断面形は鍋底状を呈している。堆積土は４層に分層した。いずれも壁際に沿った堆積状況が認められることから，自然堆積と判断した。遺物は，ℓ１から土師器片14点が出土しているが，細片のため図示できなかった。

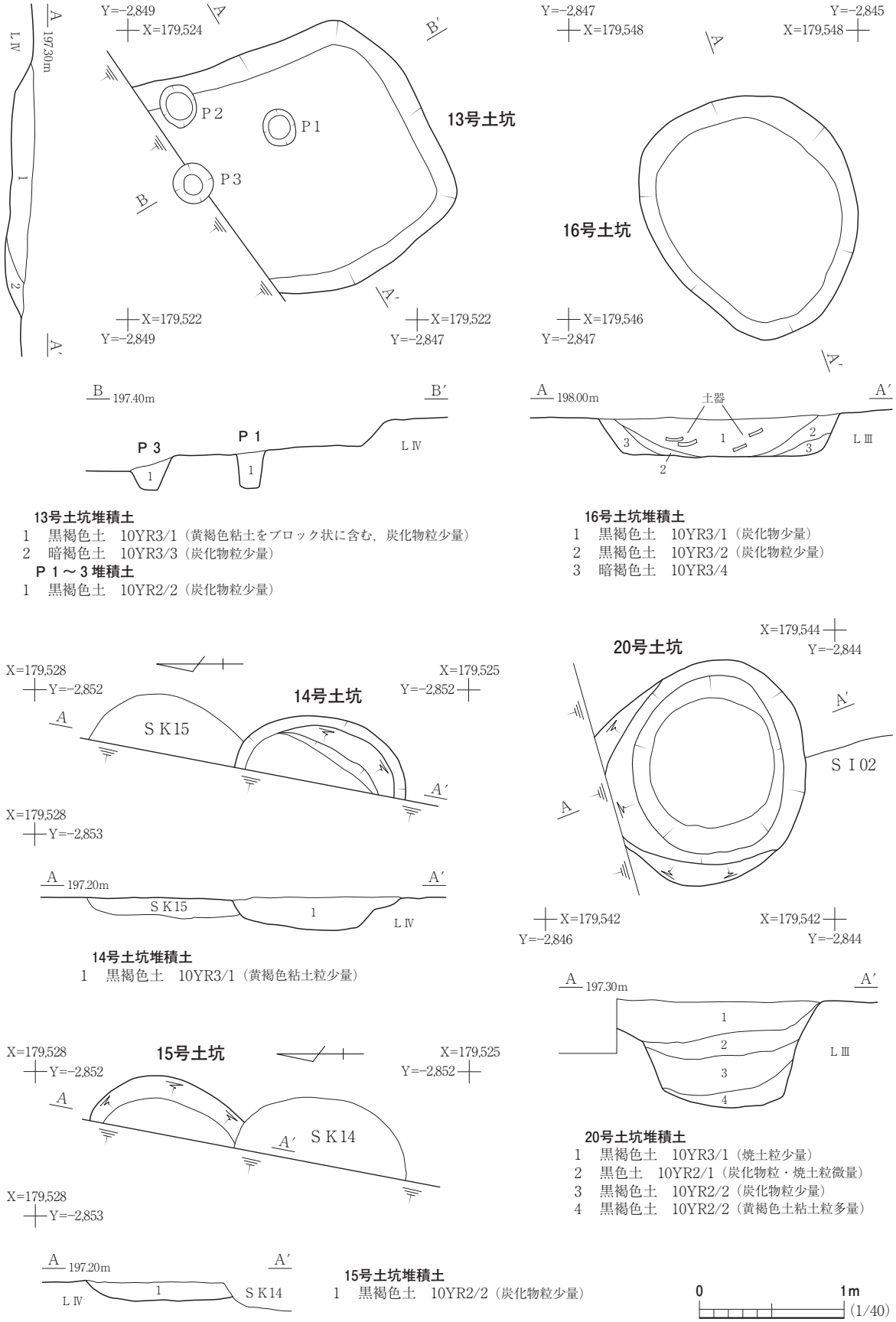
本土坑の所属時期については，遺構の重複関係から，ＳＩ02より古く位置づけられる。なお，土坑の機能については特定できない。（大河原）

27号土坑　ＳＫ27（図38，写真19）

本土坑は調査区南東部のＯ17グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。重複する遺構はないが，南側の一部は撹乱を受け遺存していない。なお，西側にＳＤ01が近接しているが，遺構の分布状況は希薄である。土坑の平面形は，長方形状を呈している。規模は南北が遺存長で３ｍ，東西0.9ｍを測る。検出面から底面までの深さは15㎝。壁は比較的急な角度で立ち上がり，東西壁中央の壁以外は，いずれも熱を受け１㎝程焼土化していた。底面は凹凸が認められ，南側に向かい緩やかに傾斜している。また，南北両端の底面は熱を受け，１～３㎝程焼土化していた。土坑の堆積土は２層で，いずれも底面に平行に堆積していることから，人為堆積と考えている。

遺物は堆積土中から，須恵器片１点が出土した。図38－２は須恵器の壺あるいは瓶で，外面にロクロ整形痕，内面にカキメ調整が認められる。

本土坑の時期については，出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから奈良・平安時代に属すものと考えている。また，本土坑の機能については，壁と底面に熱を受けた痕跡が認められ，堆積土中に多量の炭化物粒を含むことから，木炭焼成坑と考えている。（大河原）



13号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（黄褐色粘土をブロック状に含む，炭化物粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量）
Ｐ１～３堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒少量）

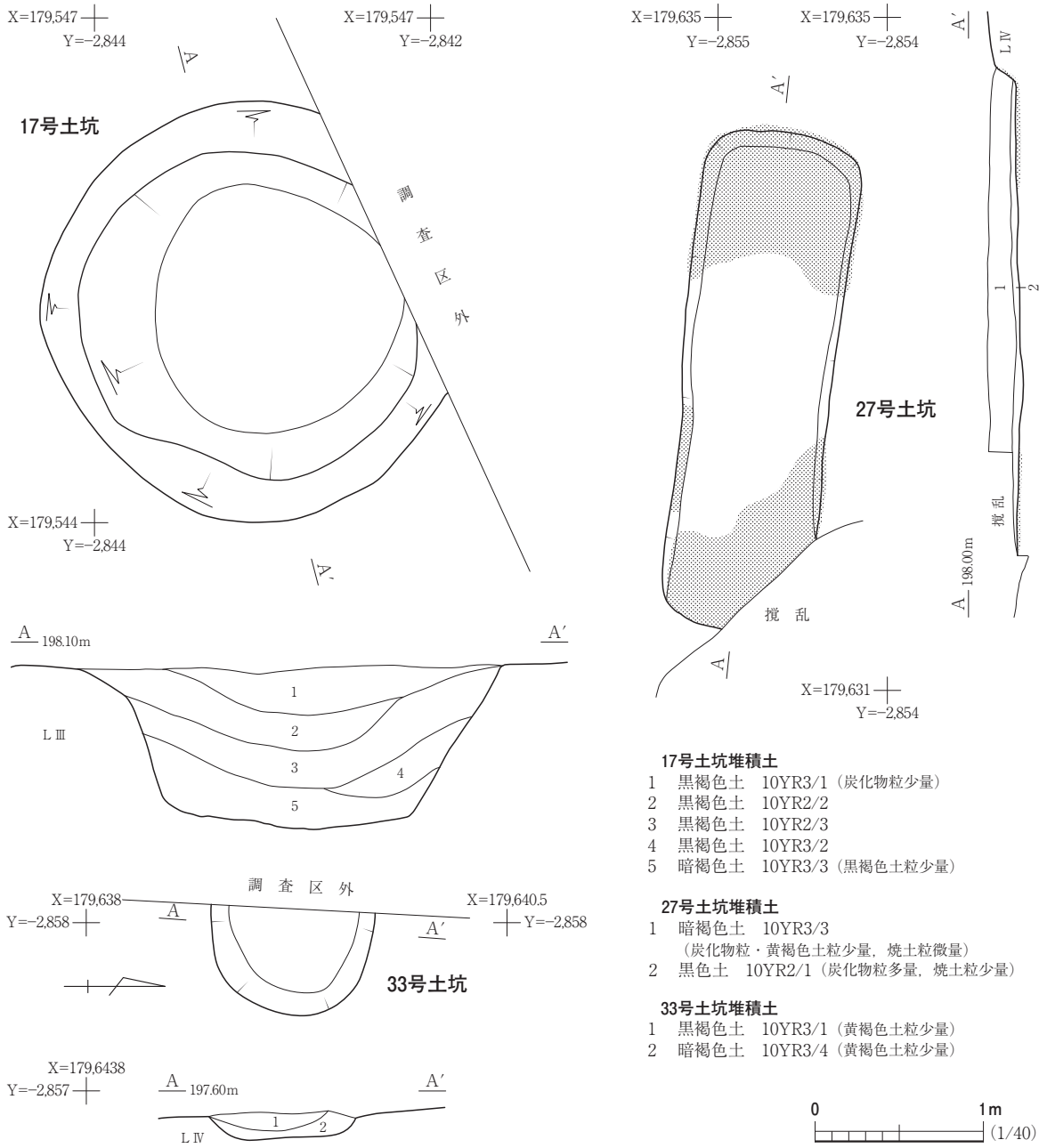
16号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物少量）
2　黒褐色土　10YR3/2（炭化物粒少量）
3　暗褐色土　10YR3/4

14号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（黄褐色粘土粒少量）

20号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（焼土粒少量）
2　黒色土　10YR2/1（炭化物粒・焼土粒微量）
3　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒少量）
4　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粘土粒多量）

15号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒少量）

図37　13～16・20号土坑



17号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒少量）
2　黒褐色土　10YR2/2
3　黒褐色土　10YR2/3
4　黒褐色土　10YR3/2
5　暗褐色土　10YR3/3（黒褐色土粒少量）

27号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/3
（炭化物粒・黄褐色土粒少量，焼土粒微量）
2　黒色土　10YR2/1（炭化物粒多量，焼土粒少量）

33号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR3/1（黄褐色土粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/4（黄褐色土粒少量）

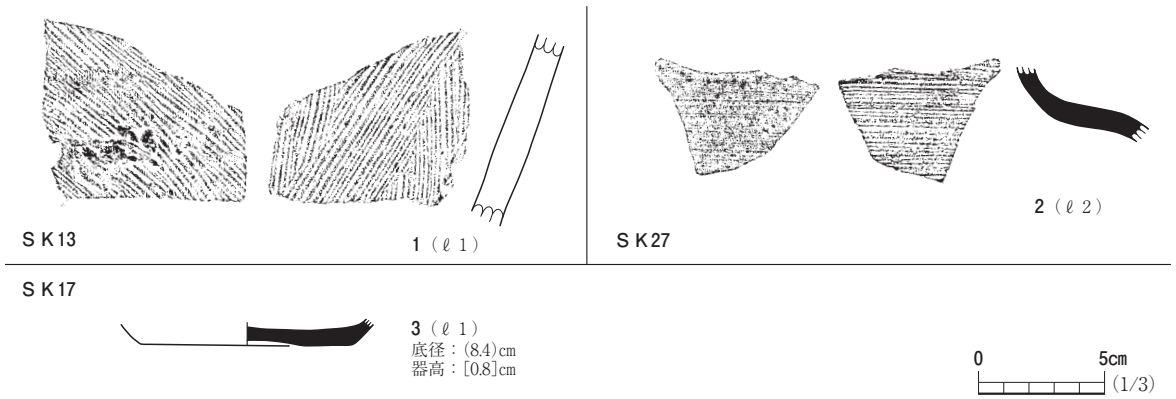


図38　17・27・33土坑，土坑出土遺物（１）

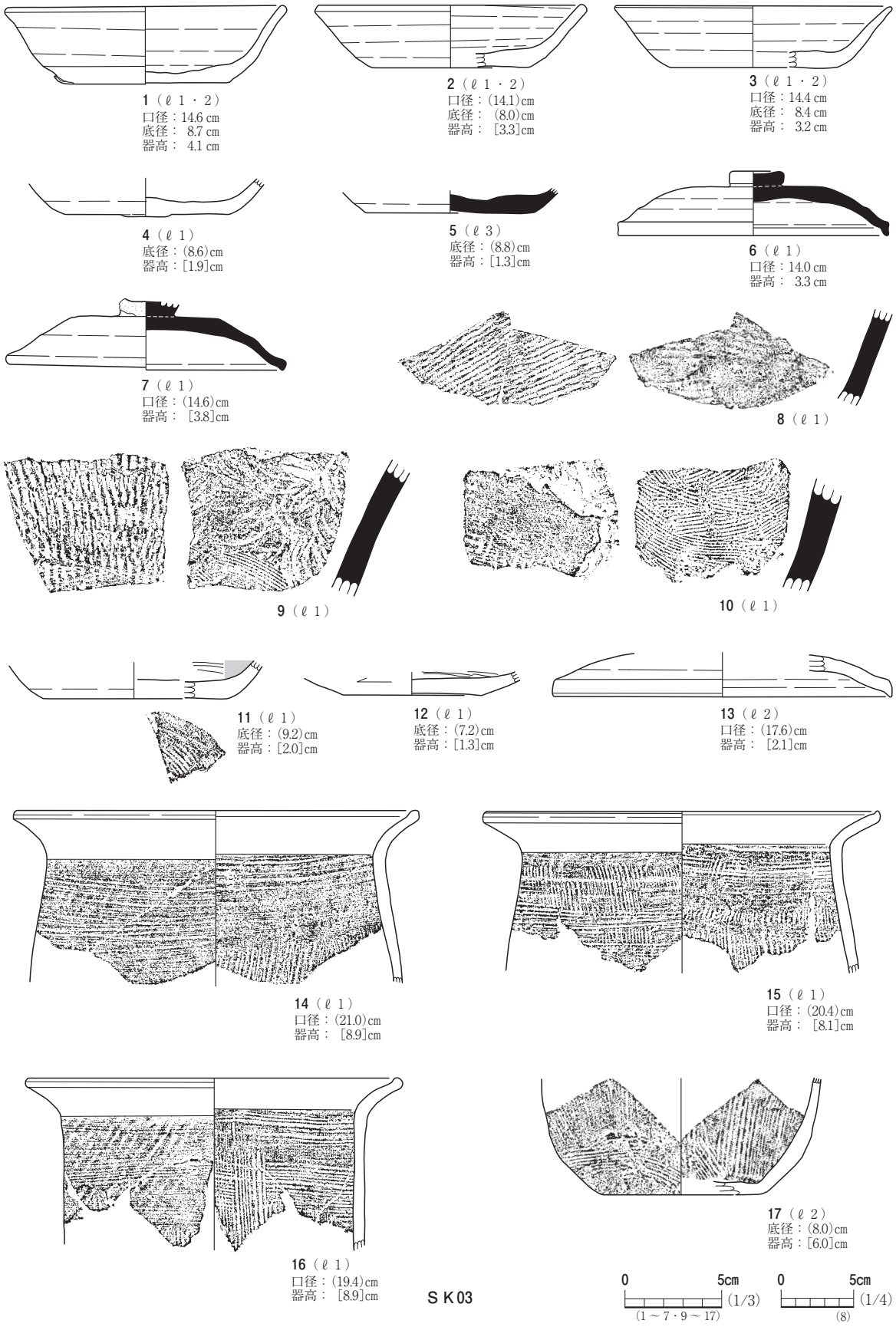

1（ℓ１・２）
口径：14.6 cm
底径： 8.7 cm
器高： 4.1 cm
2（ℓ１・２）
口径：(14.1)cm
底径： (8.0)cm
器高： [3.3]cm
3（ℓ１・２）
口径：14.4 cm
底径： 8.4 cm
器高： 3.2 cm
4（ℓ１）
底径：(8.6)cm
器高：[1.9]cm
5（ℓ３）
底径：(8.8)cm
器高：[1.3]cm
6（ℓ１）
口径：14.0 cm
器高： 3.3 cm
7（ℓ１）
口径：(14.6)cm
器高： [3.8]cm
8（ℓ１）
9（ℓ１）
10（ℓ１）
11（ℓ１）
底径：(9.2)cm
器高：[2.0]cm
12（ℓ１）
底径：(7.2)cm
器高：[1.3]cm
13（ℓ２）
口径：(17.6)cm
器高： [2.1]cm
14（ℓ１）
口径：(21.0)cm
器高： [8.9]cm
15（ℓ１）
口径：(20.4)cm
器高： [8.1]cm
16（ℓ１）
口径：(19.4)cm
器高： [8.9]cm
17（ℓ２）
底径：(8.0)cm
器高：[6.0]cm
ＳＫ03
0 5cm (1/3)
(1～7・9～17)
0 5cm (1/4)
(8)

図39　土坑出土遺物（２）

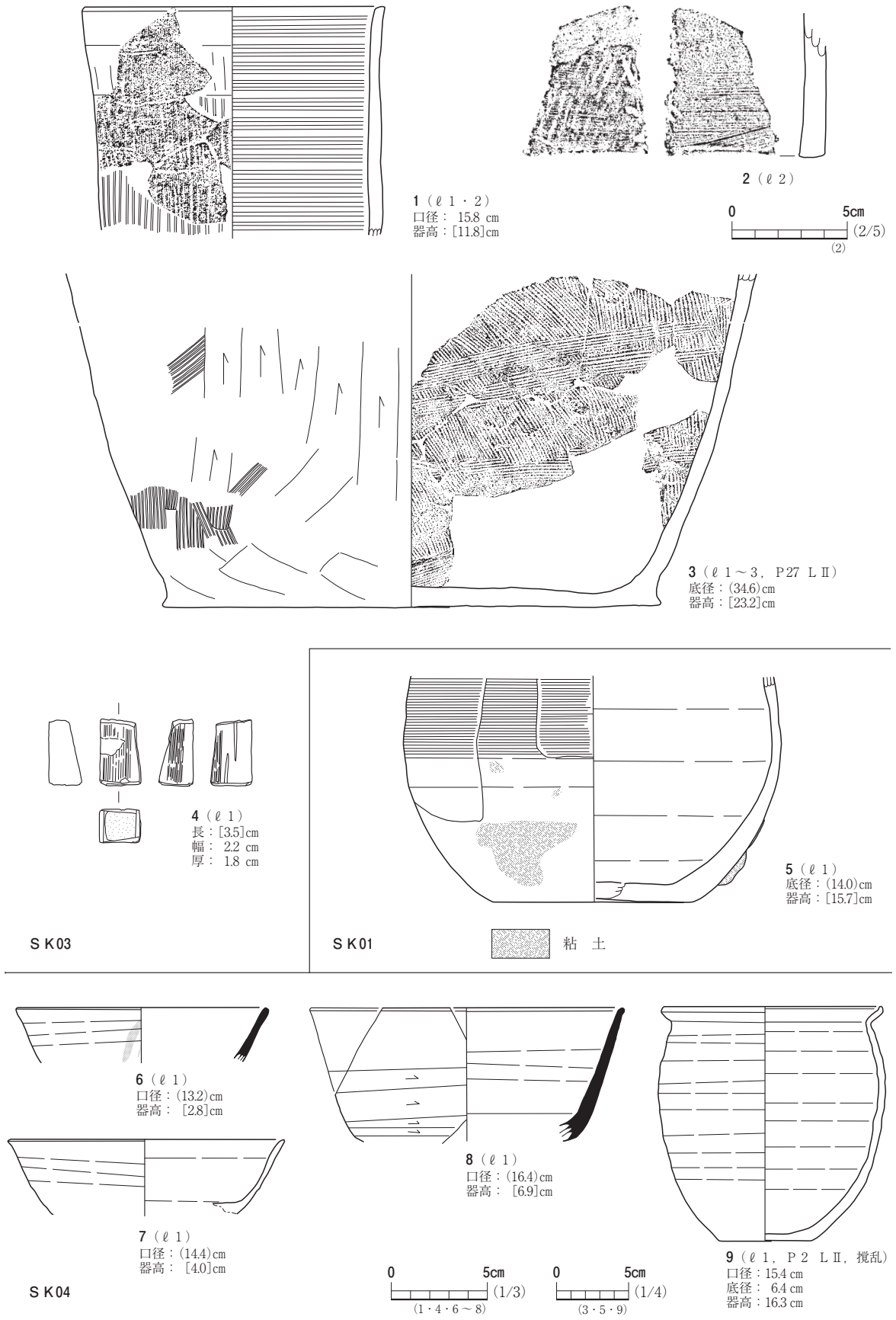

1（ℓ１・２）
口径： 15.8 ㎝
器高：[11.8]㎝
2（ℓ２）
0 5㎝ (2/5)
(2)
3（ℓ１～３，Ｐ27 ＬⅡ）
底径：(34.6)㎝
器高：[23.2]㎝
4（ℓ１）
長：[3.5]㎝
幅： 2.2 ㎝
厚： 1.8 ㎝
ＳＫ03
5（ℓ１）
底径：(14.0)㎝
器高：[15.7]㎝
ＳＫ01
粘　土
6（ℓ１）
口径：(13.2)㎝
器高： [2.8]㎝
7（ℓ１）
口径：(14.4)㎝
器高： [4.0]㎝
ＳＫ04
8（ℓ１）
口径：(16.4)㎝
器高： [6.9]㎝
9（ℓ１，Ｐ２ ＬⅡ，攪乱）
口径：15.4 ㎝
底径： 6.4 ㎝
器高：16.3 ㎝
0 5㎝ (1/3)
(1・4・6～8)
0 5㎝ (1/4)
(3・5・9)

図40　土坑出土遺物（３）

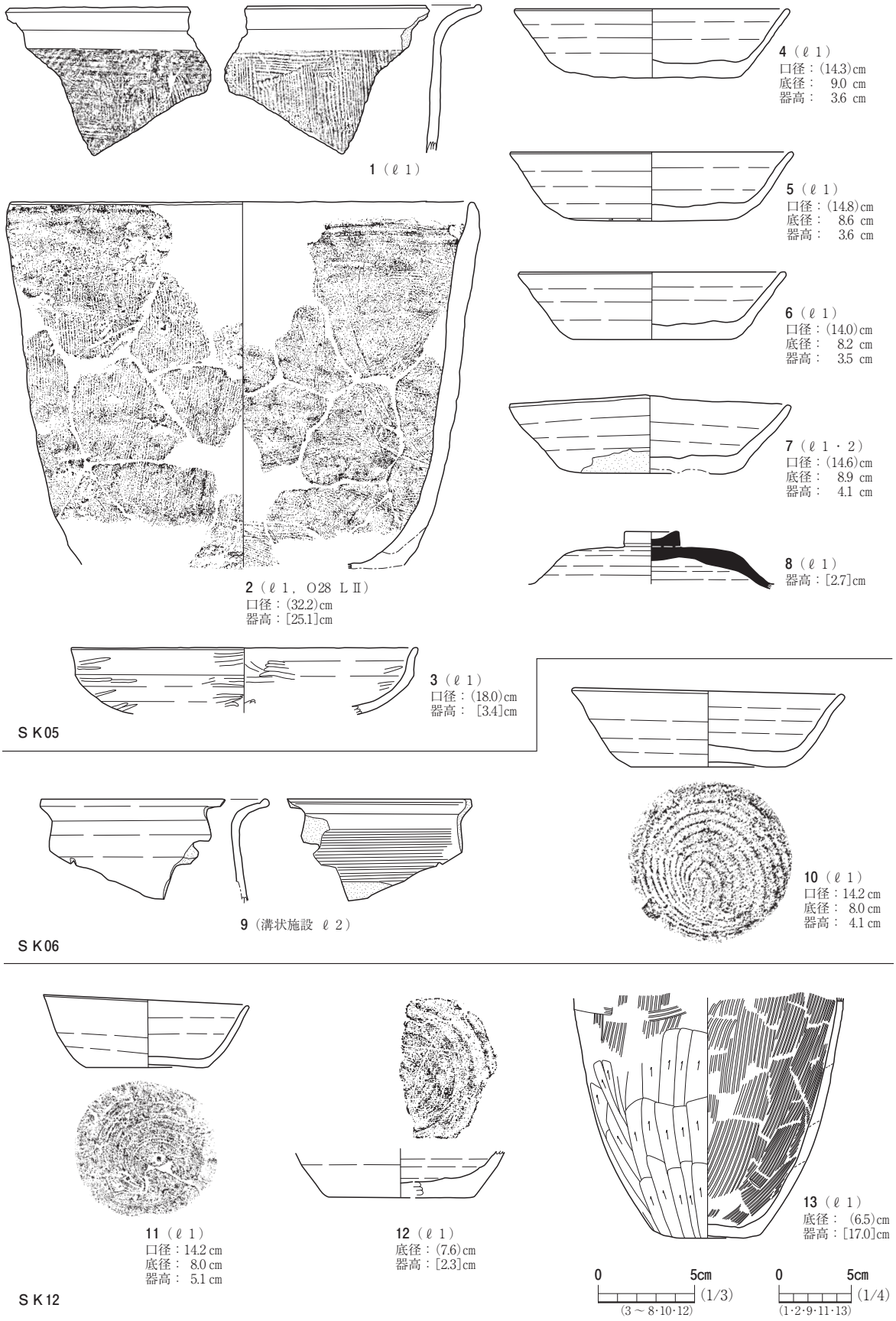

1（ℓ１）
2（ℓ１，O28 LⅡ）
口径：(32.2)cm
器高：[25.1]cm
3（ℓ１）
口径：(18.0)cm
器高：[3.4]cm
SK05
4（ℓ１）
口径：(14.3)cm
底径：9.0 cm
器高：3.6 cm
5（ℓ１）
口径：(14.8)cm
底径：8.6 cm
器高：3.6 cm
6（ℓ１）
口径：(14.0)cm
底径：8.2 cm
器高：3.5 cm
7（ℓ１・２）
口径：(14.6)cm
底径：8.9 cm
器高：4.1 cm
8（ℓ１）
器高：[2.7]cm
9（溝状施設 ℓ２）
10（ℓ１）
口径：14.2 cm
底径：8.0 cm
器高：4.1 cm
SK06
11（ℓ１）
口径：14.2 cm
底径：8.0 cm
器高：5.1 cm
12（ℓ１）
底径：(7.6)cm
器高：[2.3]cm
13（ℓ１）
底径：(6.5)cm
器高：[17.0]cm
SK12
0 5cm (1/3)
(3～8･10･12)
0 5cm (1/4)
(1･2･9･11･13)

図41　土坑出土遺物（４）

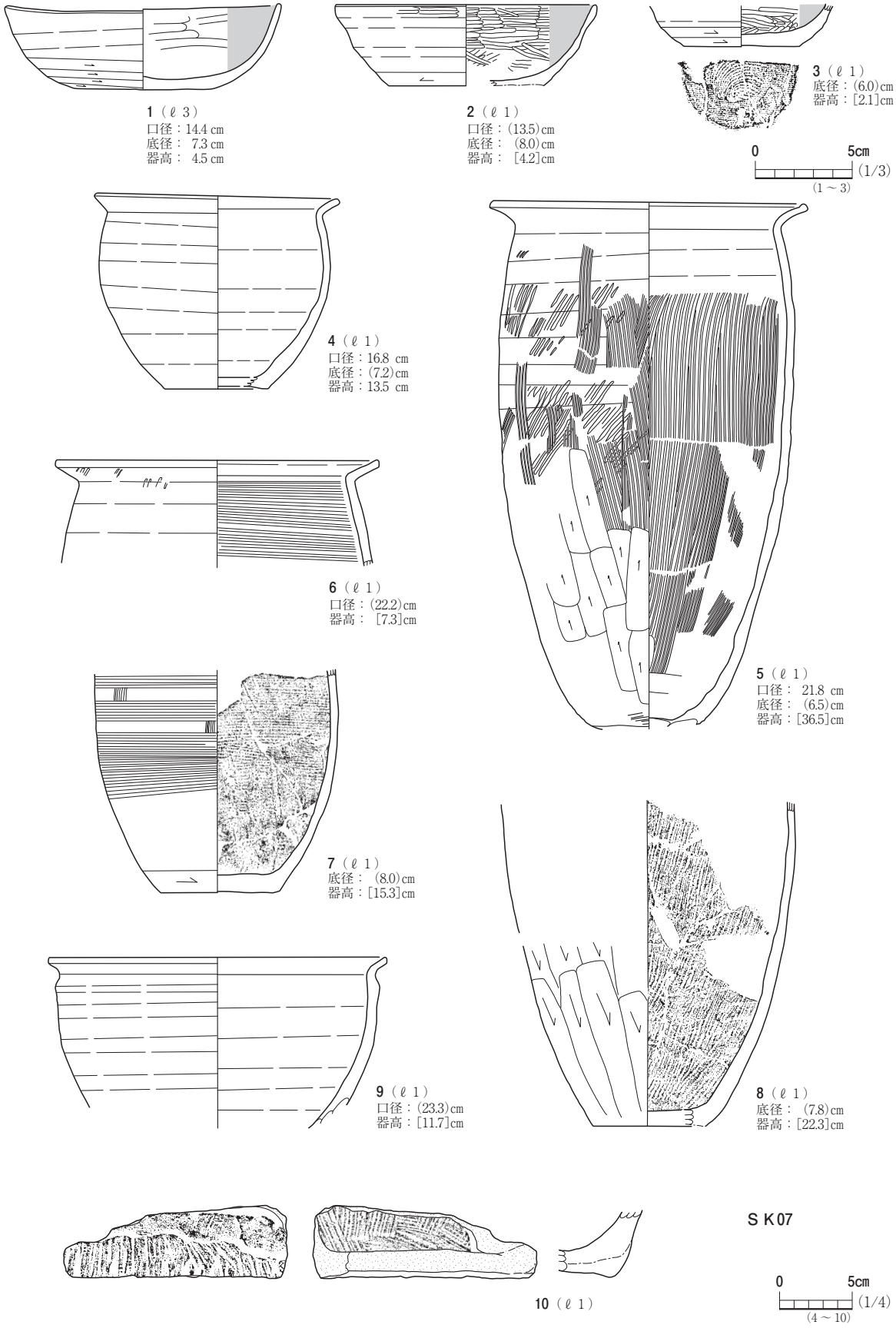

1（ℓ３）
口径：14.4 cm
底径： 7.3 cm
器高： 4.5 cm
2（ℓ１）
口径：(13.5)cm
底径： (8.0)cm
器高： [4.2]cm
3（ℓ１）
底径：(6.0)cm
器高：[2.1]cm
0
5cm
(1/3)
(1～3)
4（ℓ１）
口径：16.8 cm
底径：(7.2)cm
器高：13.5 cm
5（ℓ１）
口径： 21.8 cm
底径： (6.5)cm
器高：[36.5]cm
6（ℓ１）
口径：(22.2)cm
器高： [7.3]cm
7（ℓ１）
底径： (8.0)cm
器高：[15.3]cm
8（ℓ１）
底径： (7.8)cm
器高：[22.3]cm
9（ℓ１）
口径：(23.3)cm
器高：[11.7]cm
10（ℓ１）
ＳＫ07
0
5cm
(1/4)
(4～10)

図42　土坑出土遺物（５）

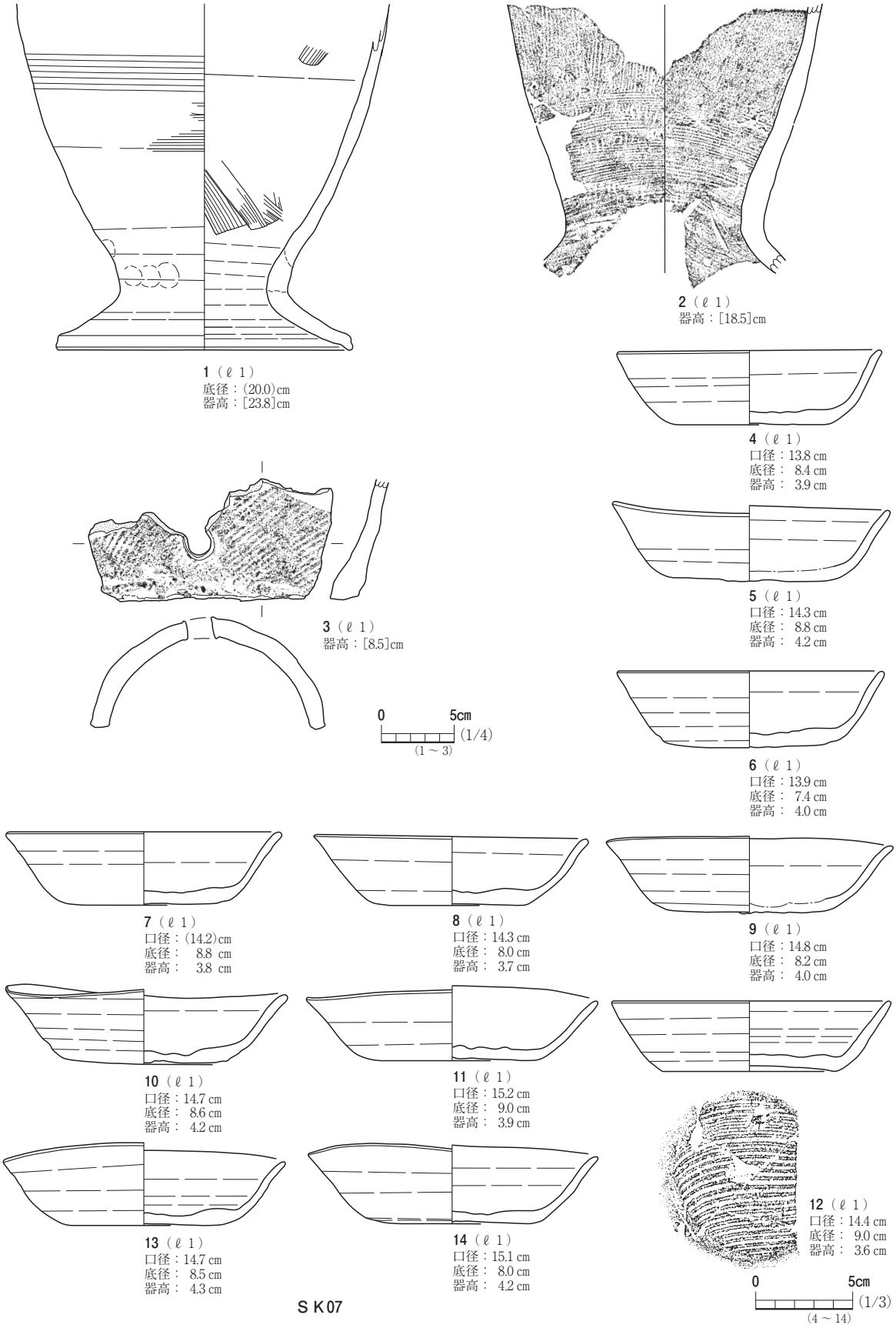

1（ℓ１）
底径：(20.0)cm
器高：[23.8]cm
2（ℓ１）
器高：[18.5]cm
3（ℓ１）
器高：[8.5]cm
0 5cm
(1/4)
(1～3)
4（ℓ１）
口径：13.8 cm
底径： 8.4 cm
器高： 3.9 cm
5（ℓ１）
口径：14.3 cm
底径： 8.8 cm
器高： 4.2 cm
6（ℓ１）
口径：13.9 cm
底径： 7.4 cm
器高： 4.0 cm
7（ℓ１）
口径：(14.2)cm
底径： 8.8 cm
器高： 3.8 cm
8（ℓ１）
口径：14.3 cm
底径： 8.0 cm
器高： 3.7 cm
9（ℓ１）
口径：14.8 cm
底径： 8.2 cm
器高： 4.0 cm
10（ℓ１）
口径：14.7 cm
底径： 8.6 cm
器高： 4.2 cm
11（ℓ１）
口径：15.2 cm
底径： 9.0 cm
器高： 3.9 cm
12（ℓ１）
口径：14.4 cm
底径： 9.0 cm
器高： 3.6 cm
13（ℓ１）
口径：14.7 cm
底径： 8.5 cm
器高： 4.3 cm
14（ℓ１）
口径：15.1 cm
底径： 8.0 cm
器高： 4.2 cm
0 5cm
(1/3)
(4～14)
ＳＫ07

図43　土坑出土遺物（６）

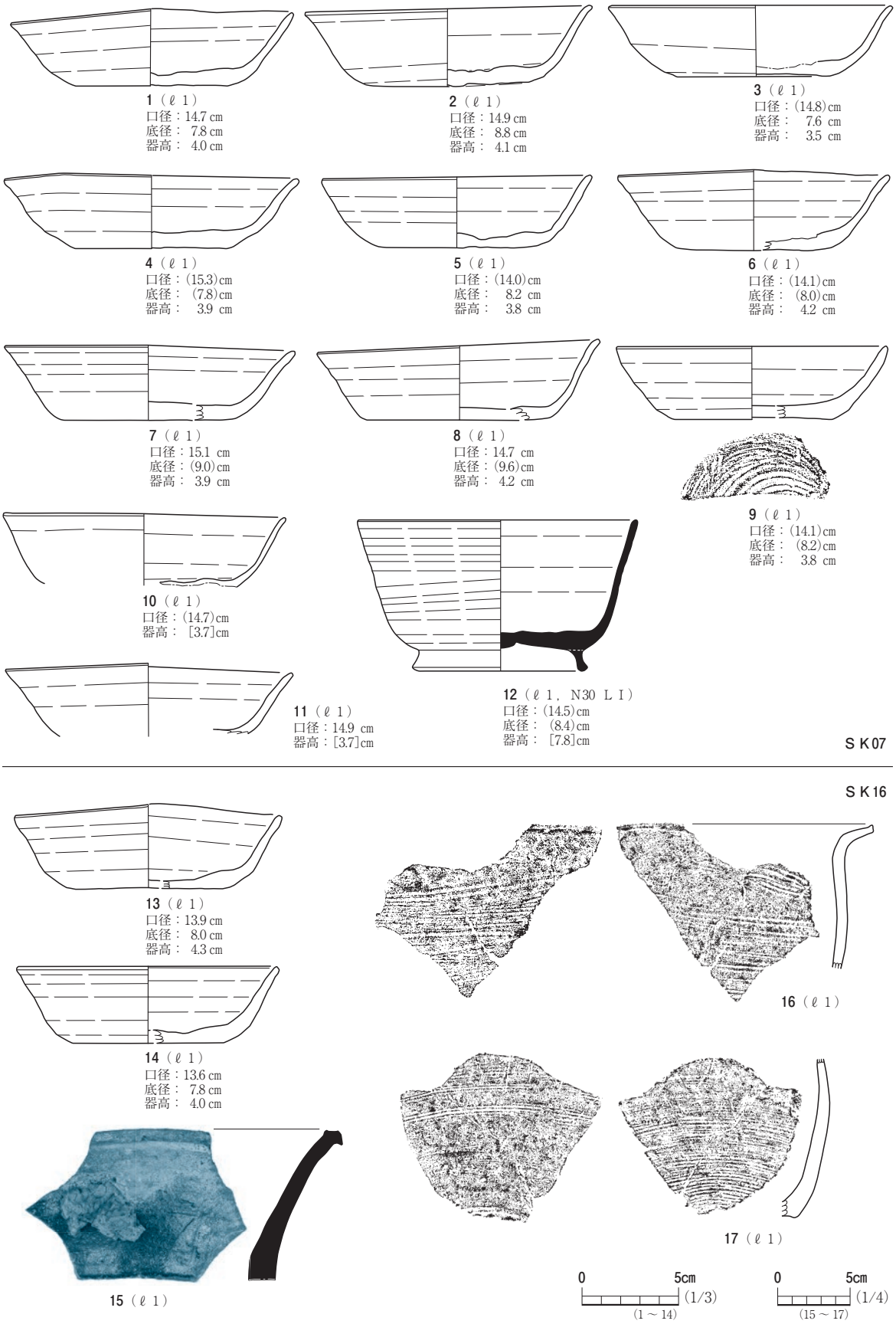

1（ℓ１）
口径：14.7 cm
底径：7.8 cm
器高：4.0 cm
2（ℓ１）
口径：14.9 cm
底径：8.8 cm
器高：4.1 cm
3（ℓ１）
口径：(14.8)cm
底径：7.6 cm
器高：3.5 cm
4（ℓ１）
口径：(15.3)cm
底径：(7.8)cm
器高：3.9 cm
5（ℓ１）
口径：(14.0)cm
底径：8.2 cm
器高：3.8 cm
6（ℓ１）
口径：(14.1)cm
底径：(8.0)cm
器高：4.2 cm
7（ℓ１）
口径：15.1 cm
底径：(9.0)cm
器高：3.9 cm
8（ℓ１）
口径：14.7 cm
底径：(9.6)cm
器高：4.2 cm
9（ℓ１）
口径：(14.1)cm
底径：(8.2)cm
器高：3.8 cm
10（ℓ１）
口径：(14.7)cm
器高：[3.7]cm
11（ℓ１）
口径：14.9 cm
器高：[3.7]cm
12（ℓ１，N30 L I）
口径：(14.5)cm
底径：(8.4)cm
器高：[7.8]cm
SK07
SK16
13（ℓ１）
口径：13.9 cm
底径：8.0 cm
器高：4.3 cm
14（ℓ１）
口径：13.6 cm
底径：7.8 cm
器高：4.0 cm
15（ℓ１）
16（ℓ１）
17（ℓ１）
0 5cm (1/3)
(1～14)
0 5cm (1/4)
(15～17)

図44　土坑出土遺物（７）

33号土坑　ＳＫ33（図38，写真19）

本土坑は調査区中央部のＯ17グリッドに位置している。遺構検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが，土坑西側は調査区外に延びている。また，東側にＳＤ01が近接しているが，周辺の遺構の分布状況は希薄である。本土坑の平面形は，検出状況から楕円形状を呈しているものと思われる。調査区内で検出した土坑の規模は，東西0.6ｍ，南北約１ｍである。壁は緩やかな角度で立ち上がり，底面は凹凸している。検出面から底面までの深さは15㎝を測る。土坑の堆積土は２層で，レンズ状の堆積状況が認められることから，自然堆積と判断した。本土坑から遺物は出土しなかった。

本土坑の時期については，出土遺物がないため特定できないが，周囲の遺構の分布状況などから奈良・平安時代に属すものと考えている。（大河原）

第６節　小　穴

調査Ｉ区で検出した小穴は１基である。検出された周辺を精査したが，他の小穴は確認できなかった。所属時期については，遺構検出面や周囲の遺構分布状況から奈良・平安時代に所属するものと考えている。

Ｑ28グリッドＰ１（図45）

本小穴は，調査区南東部のＱ28グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，南側にＳＫ01が近接する。平面形は直径50㎝程の不整な円形状を呈している。検出面から底面までの深さは，30㎝を測る。壁は南側で比較的急な角度で立ち上がるが，北側では開口部付近で外傾している。堆積土は１層で，堆積過程は不明である。遺物は土師器片８点，須恵器片１点が出土しているが，いずれも細片のため図示できなかった。

本小穴の所属時期については，検出面や周囲の遺構の分布状況などから，奈良・平安時代に属するものと考えている。（大河原）

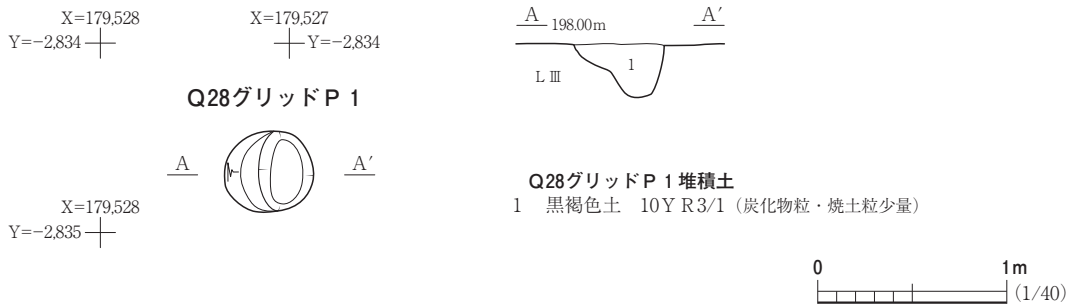


図45　小穴

第7節　遺 物 包 含 層

調査Ⅰ区における遺物包含層としては，ＬＩｂ・ＬⅡの２層が確認されている。遺物は，ＬＩｂ・ＬⅡおよび耕作等により浮上し再包含されたＬＩも含め縄文土器，土師器，須恵器，土製品，石器・剥片などが出土している。時期的には，縄文時代前期～晩期，奈良・平安時代と各時期にわたって出土しているが，奈良時代末～平安時代初頭の遺物が主体を占める。なお，縄文時代の遺物では，中期中葉～後期前葉の遺物が多い。

なお，包含層から出土した遺物のうち，未還元の須恵器杯については，須恵器窯ではなく土器焼成坑で焼成されたと考えられる土器も認められるが，調査区内で出土する還元化した須恵器杯と製作技法，器形などが変わらないことから，これらを比較するため須恵器の項目で報告している。

これらの土器については，須恵器系土器などの名称を用いて報告されることもあるが，これらの土器は近年10世紀前半の土器に使用される場合が多く，今回は未還元といった呼称を使った。これらの土器については，断面を白抜きし還元化した須恵器と区別している。

層序と分布

遺物包含層と基本層序の関係については「本章第２節」で述べたとおりである。本調査区内ではＬＩｂ・ＬⅡの２層が遺物包含層に該当する。これらの遺物は，最上位段丘面と下位の段丘崖の沢部に比較的良好に堆積している。

次に，各層から出土する遺物と検出遺構から各層の堆積時期を概観する。ＬＩｂは，調査区の東南部のＭ・Ｎ29グリッド周辺部に堆積する層である。奈良・平安時代の遺物を少量含むが，堆積状況等からＬⅣの再堆積層と考えられ，出土遺物については上方からの流れ込みによる再包含と思われる。形成時期については，本層下位でＬⅡが確認されていることから，ＬⅡ堆積後に形成された層である。ＬⅡは調査区全体に堆積する層である。縄文時代，奈良時代末～平安時代初頭の遺物を包含するが，縄文時代の遺物の出土量は少ない。なお，奈良時代末～平安時代初頭の遺構が本層下位のＬⅢで検出されていることから，ＬⅡについては平安時代以降に形成されたものと思われる。なお，ＬⅢについては，沼沢火山の噴火に起因する軽石を含むことから，縄文時代前期後葉以降に堆積した層と考えている。

遺物出土（ＬＩ～Ⅱ出土）平面分布状況を見ると，出土した遺物のうち，土師器40%，須恵器27%については遺構が密に分布する最上位面Ｏ・Ｐ26～28グリッドから出土している。これらの土器の大半はＬⅡからの出土である。この他，出土した土師器の22%，須恵器の28%が段丘崖にあたるＭ・Ｎ29グリッドで出土しているが，これらはいずれもＬＩからの出土である。また，縄文時代の土器の40%が最上位段丘面縁部にあたるＯ28グリッドから出土している。なお，遺構密度が希薄なＮ～Ｐ18～25，Ｎ・Ｏ６～17グリッドからはほとんど遺物は出土していない。

土器・土製品（図46～53，写真28～30）

遺物包含層から出土した土器は，ＬＩｂ・ＬⅡおよび耕作等により浮上し再包含されたＬＩも含め破片数にして縄文土器片約340点，土師器片約13,400点，須恵器片約1,260点が出土している。

縄文土器（図46～48，写真28）

図46～図48－１～６は縄文土器である。縄文時代の遺物は，縄文時代前期前葉～晩期の土器が出土しているが，後期前葉の土器の出土量が最も多く，次いで中期中葉の土器となる。いずれも破片資料であるため，全体の器形を知ることはできないが，ほとんどが深鉢形土器になるものと思われる。以下，各時期の土器についての説明を行う。

図46－１・２は縄文時代前期前葉に比定される土器で，１には羽状縄文，２は連続する刺突文で口縁部文様帯を構成する。区画された無文帯にコンパス文が施されている。図46－３～12は中期中葉に比定される土器である。３は隆線，４～12は沈線で模様を構成する。

図46－13～19，図47－１～10は後期前葉に比定される土器である。図46－13～15は口縁部と胴部を隆帯で区画するもので，13の隆帯上に小突起をもつもの，14・15の口縁部から端部に盲孔をもつ棒状隆帯が垂下するものがある。また，14・15の口唇部には刺突文が施されている。同図16・17は口縁部直下に沈線が巡らされる。口縁部文様帯は幅広く，16のように無文になるものと17のように沈線で曲線を描くものが認められる。図46－19，図47－１・２は口縁部が内屈する土器で，図46－19のように幅広の口縁部文様帯内に沈線が施されるものと，図47－１・２のように無文部を形成するものとがある。胴部には，いずれも多条沈線が施される。図47－３～10は多条沈線が施された胴部資料である。同図11は平行沈線間に列点状の刺突が施された土器で，後期前葉～中葉の資料と思われる。

図47－12～17は晩期に比定される土器である。12～15には網目状拠糸文（13～15は同一個体），16・17は同一個体で条線文が施される。図47－18～21，図48－１～６は地文のみが施された土器を一括した。いずれも斜行縄文が施されている。図47－18は口縁直下に円孔，同図19は沈線が施される。図48－６は底部片で，底面に網代編み圧痕が認められる。図48－７は，土器片製円盤である。周縁を打ち欠き，円形状に形を整えている。

土 師 器（図49，写真29）

包含層から出土した土師器を器種別に見ると，破片数であるが甕類が最も多く，杯類は少ない。また，他の器種は甑や鉢，壺，盤類も少量ながら出土している。

１～７は杯で，底部が遺存する資料については，いずれも回転ヘラケズリ再調整が施されている。１・２には黒色処理が施されていないが，内外面にミガキが行われている。外面のミガキは口縁部周辺のみで，外面のミガキは７にも施されている。６は，ベンガラが付着した口縁部片である。８は壺状の器形になると思われ，口縁部に浅い切込みが認められる。９は高杯あるいは高台付盤である。高台部に透かし状の切込みが施される。

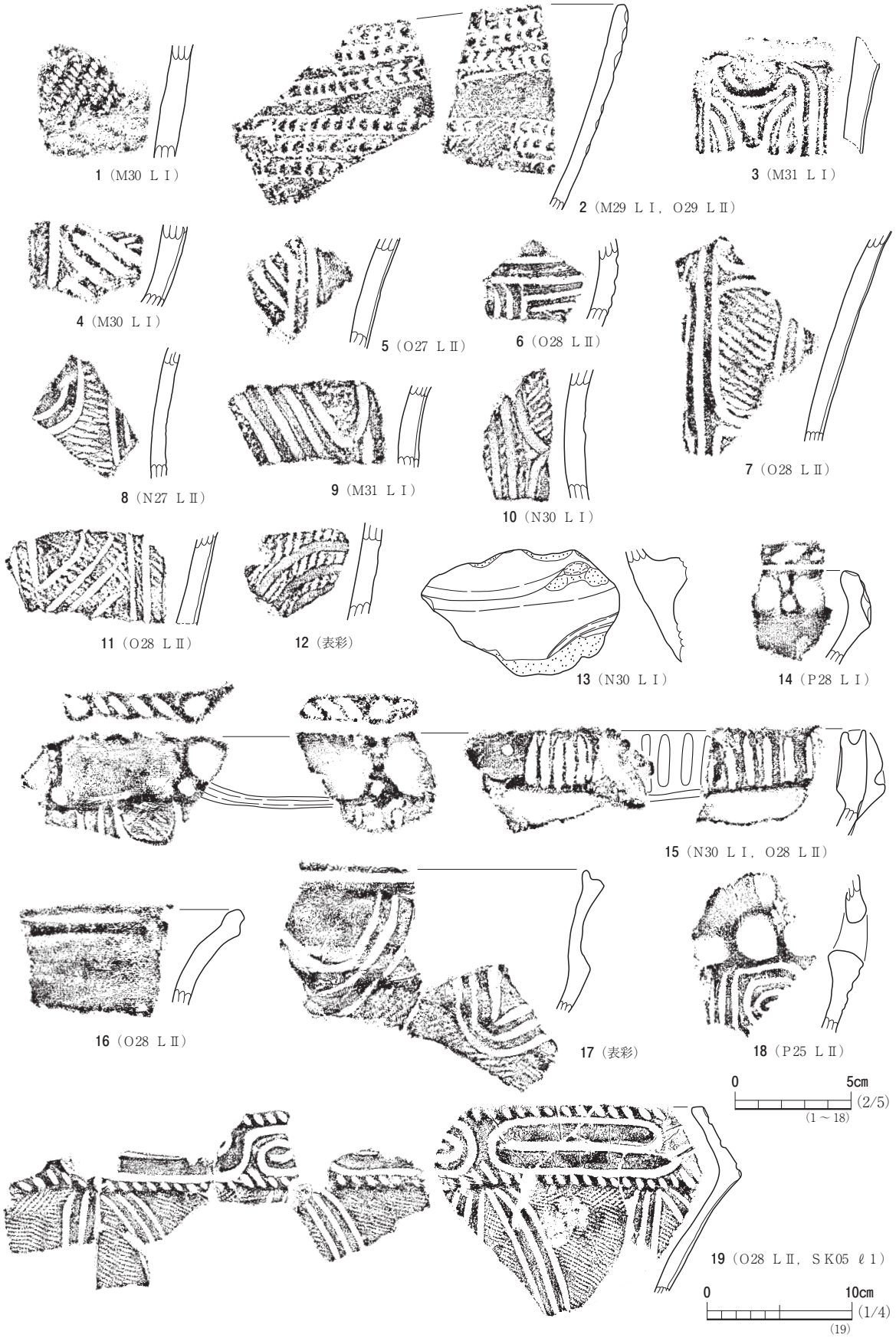


図46　遺物包含層出土遺物（1）

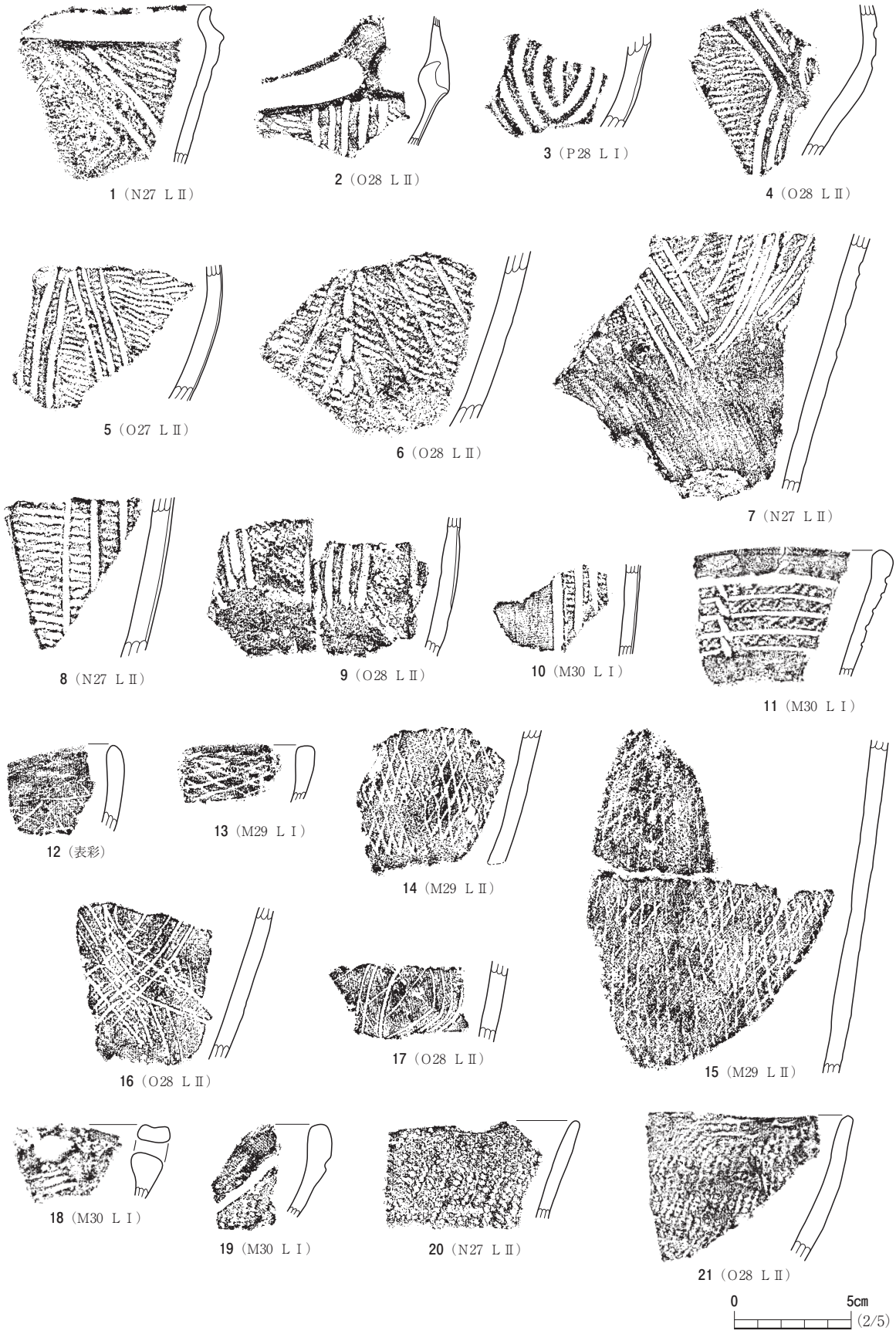


図47　遺物包含層出土遺物（２）

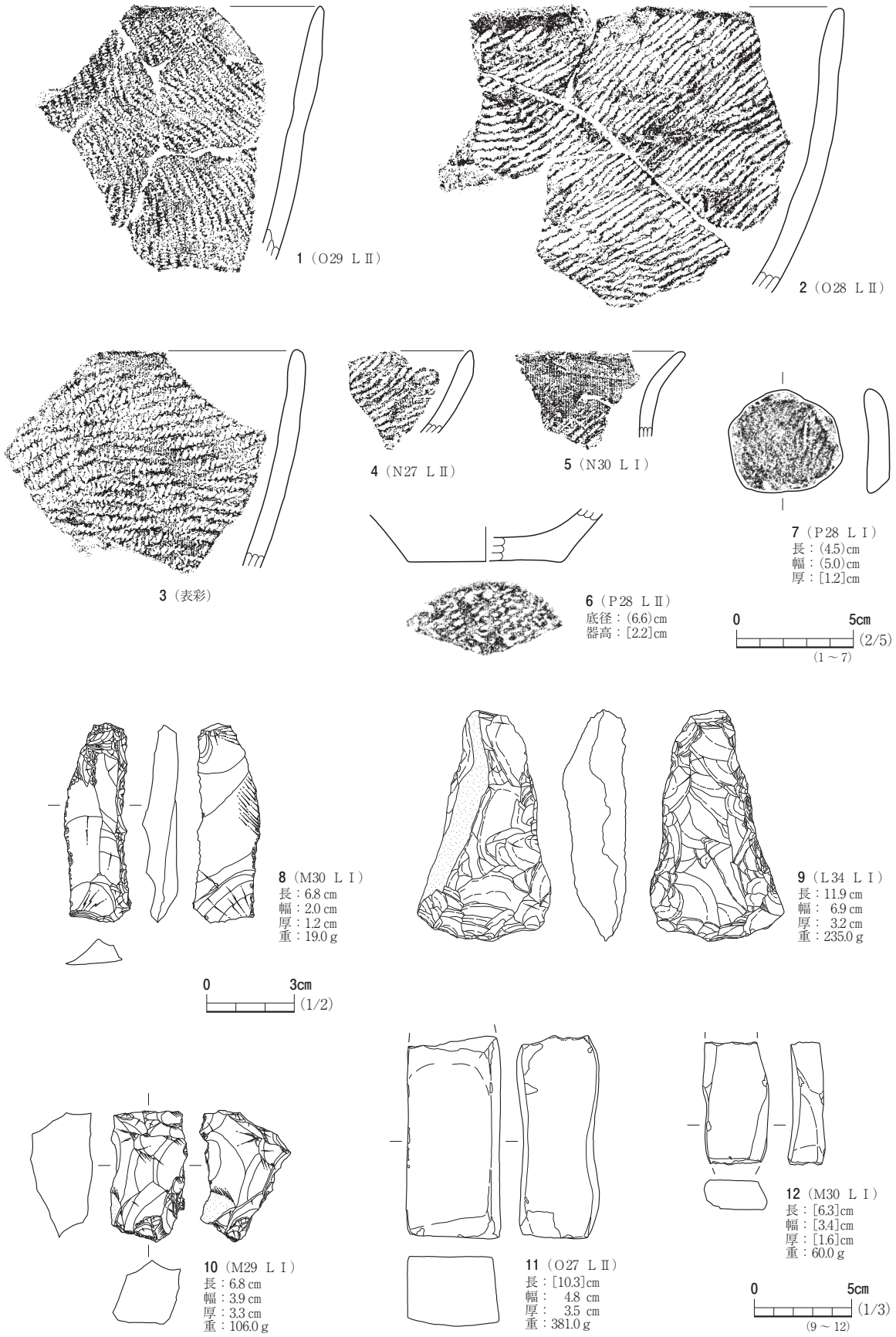


図48　遺物包含層出土遺物（3）

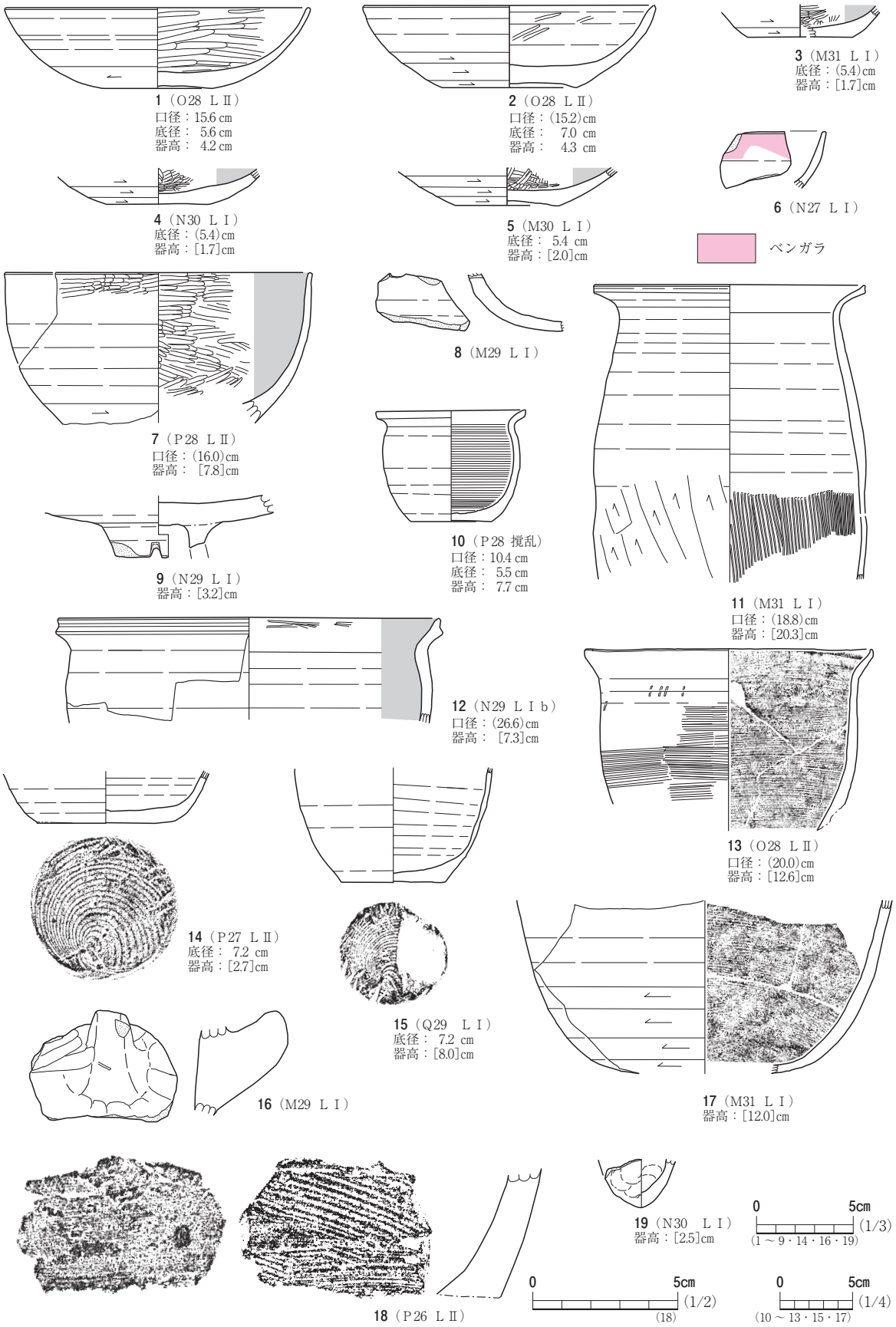


図49　遺物包含層出土遺物（４）

10～15は甕である。10・12・13は短胴甕，11は長胴甕になるものと思われる。10は外面にロクロ整形痕，内面にカキメ調整が施される。12は内面に黒色処理，13は口縁部と胴部境をタタキで整形した後，内外面をカキメで整えている。11は内外面の胴部上半にロクロ整形痕，外面下部に手持ちヘラケズリ，内面下部にはハケメ調整が縦方向に施される。14・15は胴部下半から底部の資料で，底部の切り離しは，回転糸切りによる。16は突起状を呈した甑の把手部である。

17・18は鉢で，17の外面体部下半には回転ヘラケズリ再調整，内面にはカキメ調整が施される。18は大型の鉢の破片で外面に籾痕が認められる。19は手捏ね土器である。

須 恵 器（図50・51，写真29）

出土した須恵器を器種別に見ると，破片数であるが杯類が最も多く，次いで甕類である。他の器種では蓋，小壺なども認められるが，瓶類はほとんど出土していない。なお，遺構内からは，この他に鉢類，横瓶，高台盤なども出土している。

図50－1～7は杯で，このうち5～7が未還元のものである。器形はいずれも，器高が低く底部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がるが，7は焼成時の影響で口縁部が波打つほどに大きく歪んでいる。7の底部の切り離しは回転糸切りであるが，その他は回転ヘラ切りによる。焼成はいずれも比較的良好である。同図8・9は高台付杯で，いずれも身の部分は浅く，高台部は底面縁辺に設けられている。同図10・11は蓋で，天井部が水平で浅く，中央が浅く窪んだ摘みをもつ。同図12～14は小壺で，内外面にロクロ整形痕を残すが，14は上半に明瞭な稜を有している。内外面に自然釉が認められる。底部は回転糸切り技法で切り離されているが，12・13の底面には焼成前に穿孔がなされている。同図15は瓶類の高台付底部資料で，高台外面に稜を有している。

図50－16，図51は甕類である。図50－16は口縁部が外反し，胴部が球形を呈した大甕である。内外面に平行タタキが認められ，外面には自然釉がかかる。図51は甕類の破片資料である。1は沈線で波状文が施された頸部片である。他の資料は胴部資料で内外面は平行タタキ，格子目，菱形，波状文などが認められる。なお，10の内外面には自然釉が認められ，内面に窯壁が付着する。焼台に転用された可能性もある。

土 製 品（図52・53，写真30）

出土した土製品は約15点。内容としては瓦塔，瓦，獣脚，土錘，土器片製円盤などがある。なお，土器片製円盤については，縄文土器内で報告した。

図52－1・2は，土師製の獣脚である。手捏ねで形を整えた後にヘラ状の工具で表面を平滑にしている。なお，2は二次的に熱を受けたためか，表面が脆弱である。これらの獣脚は器と接する断面の状況から，盤などの浅い器種類ではなく，鍋など容器下半に膨らみをもつ器種に付属するものと思われる。図52－3・4は瓦塔の屋蓋部破片資料である。半裁竹管状の工具で押し引きし瓦を表現している。瓦は継ぎ目も表現されており，3・4で瓦の長さに違いが認められる。同図5・6は布目瓦である。図53－1～3は筒型の土製品である。形状は1・2の半円柱状，3の半柱状を呈するものが認められる。用途は不明である。これらの土製品は，内面にはヘラナデ調整が施されるも

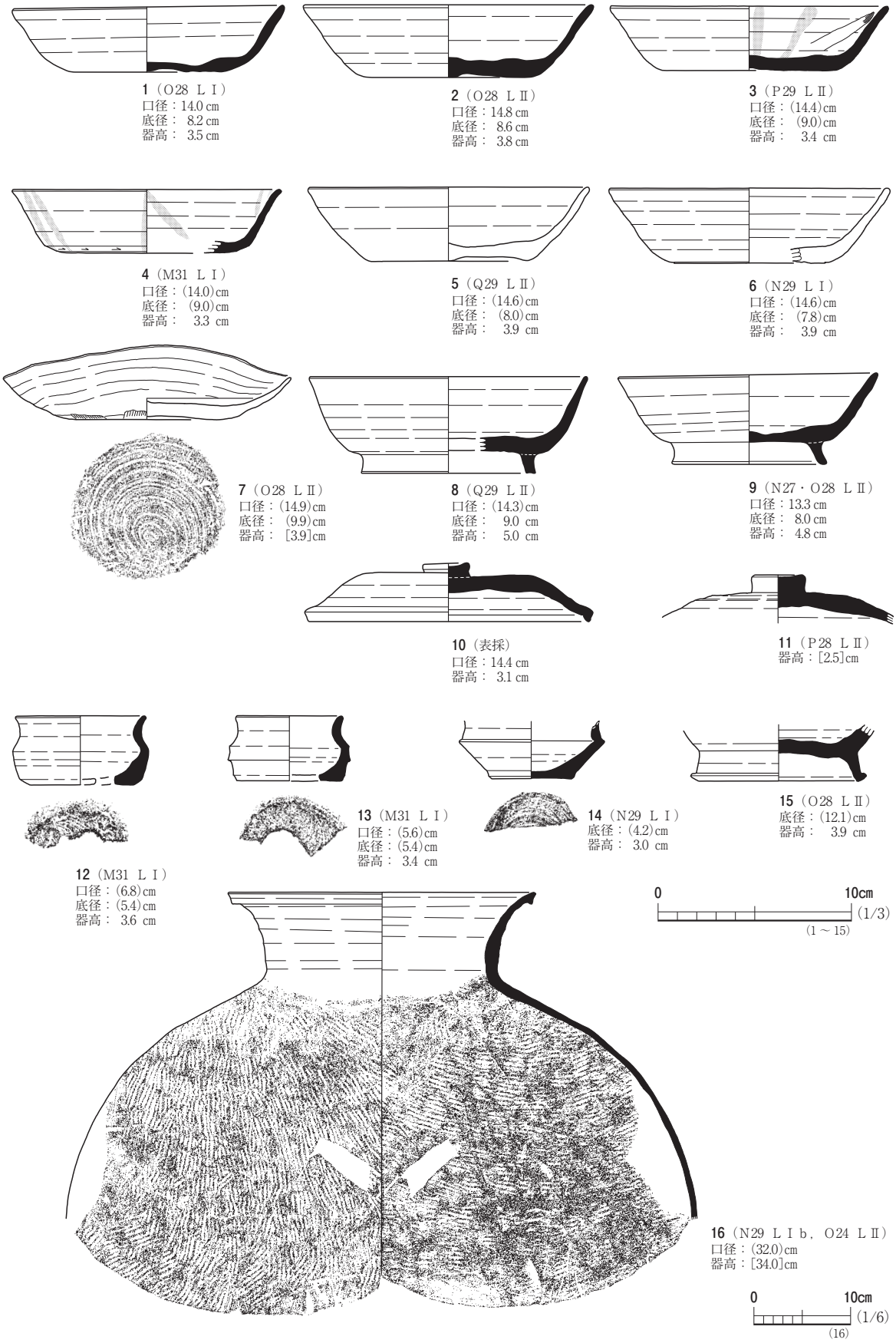


図50　遺物包含層出土遺物（５）

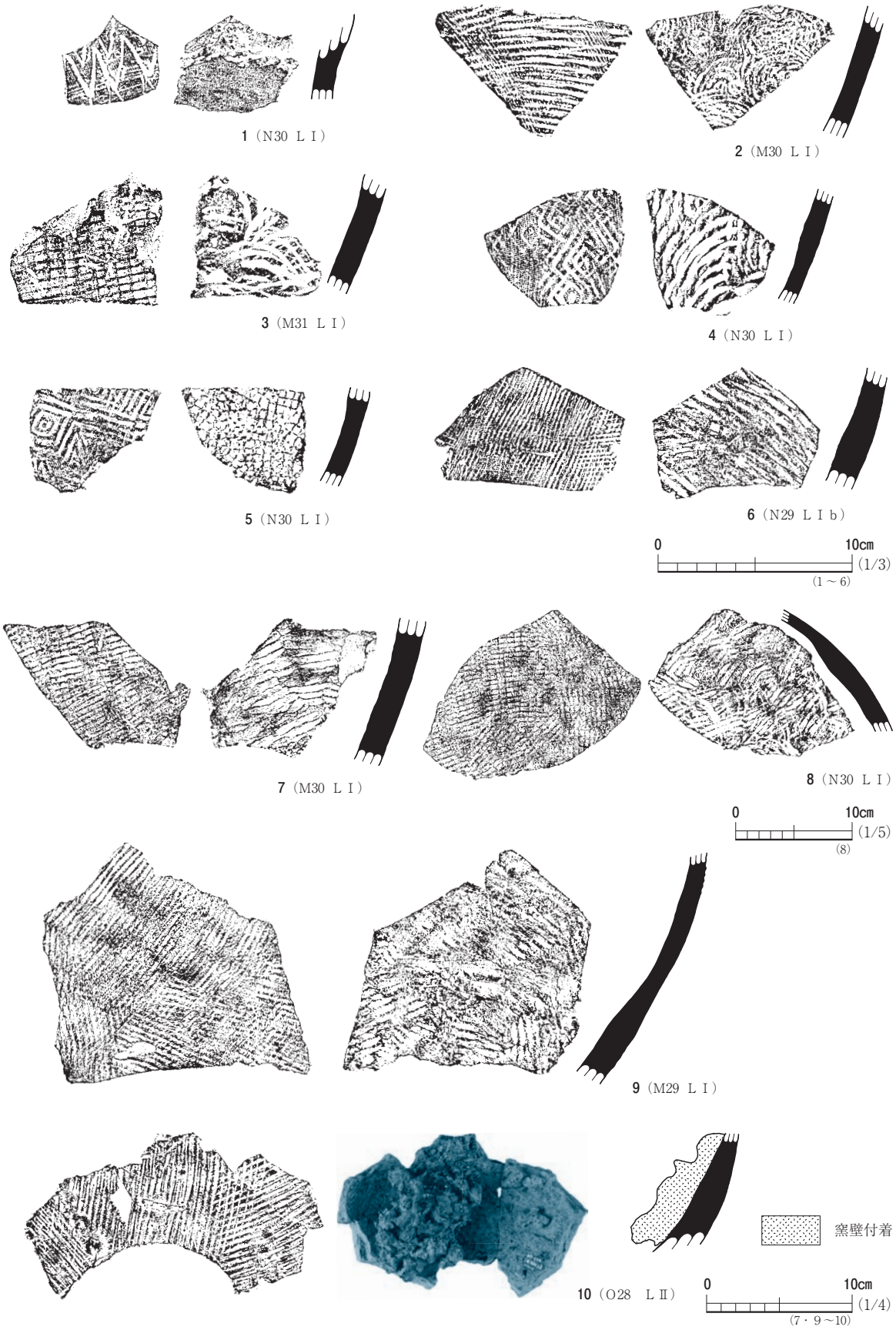


図51　遺物包含層出土遺物（6）

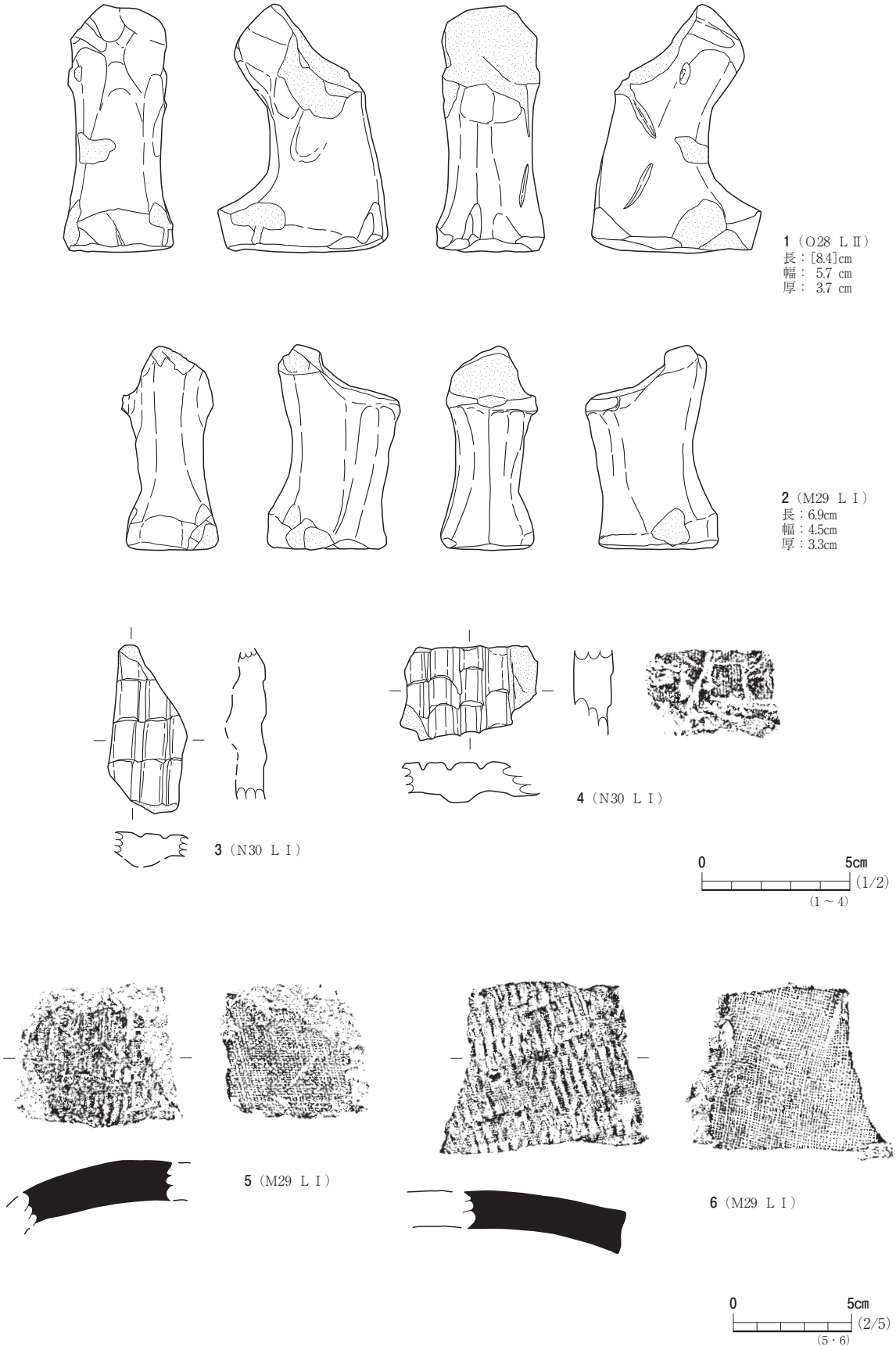


図52　遺物包含層出土遺物（７）

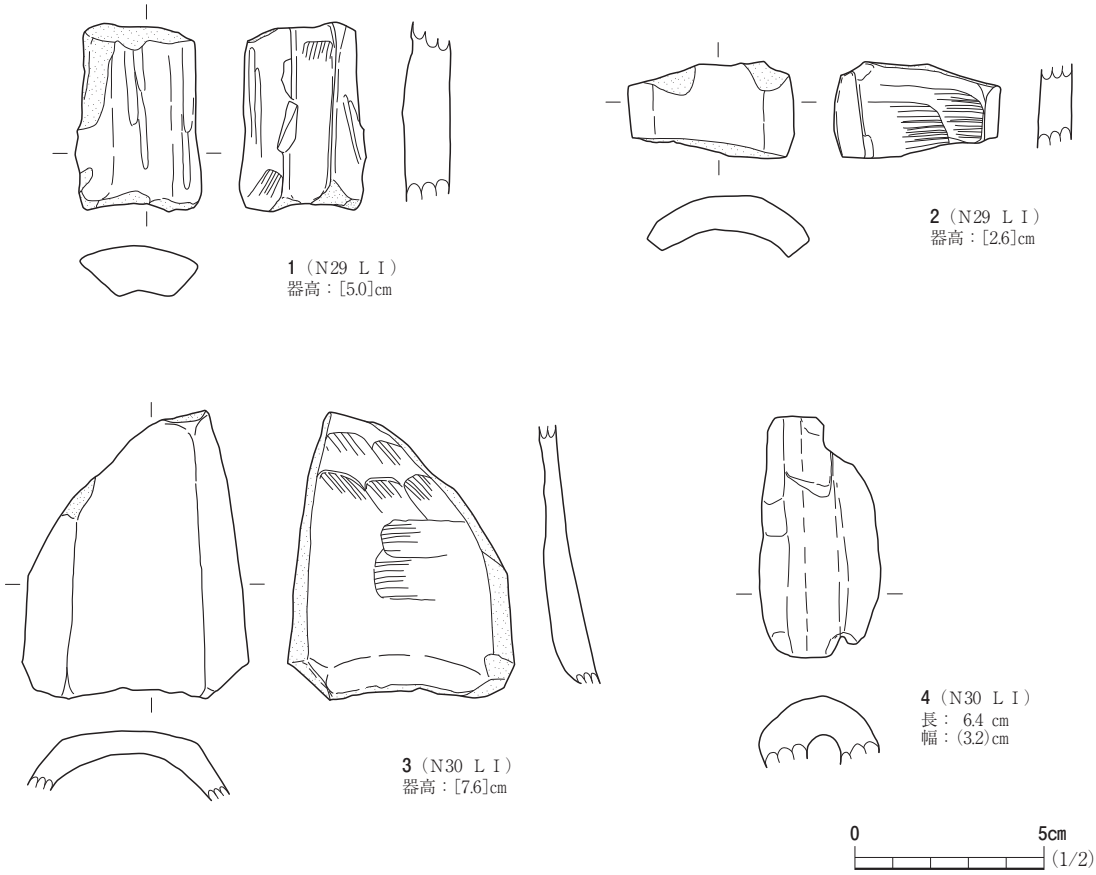


図53　遺物包含層出土遺物（8）

のが多く，外面をミガキ調整などで平滑にしている。同図4は管状土錘である。表面は，ヘラケズリで調整されているが，凹凸が目立つ。

石器・石製品（図48，写真28）

遺物包含層からは，石器・石製品は剥片類も含め16点が出土している。8は削器としたものである。縦長の剥片の縁辺部に刃部を作り出すための簡単な剥離調整が行われている。9は打製石斧である。剥離成形は全体に施されているが，素材全体の厚みを取り切れず自然面を残す。また，刃部は凸刃状を呈している。10は石核である。打面を頻繁に転移させながら剥片剥離を行っている。11・12は砥石で，各面に磨痕が認められる。（大河原）

第８節　ま　と　め

調査Ⅰ区では，８世紀末葉～９世紀前葉の集落を確認した。遺構の分布状況などから，集落の中心部分は調査区東側に広がる台地上に形成されているものと考えている。集落の南側は，昭和40年代後半に須恵器資料が採集されている小田高原窯跡推定地にあたるが，今回の調査では小田高原窯跡に関係する遺構は確認されなかった。なお，調査区内からは土器焼成坑と考えられる土坑も確認され，集落内で須恵器生産と焼成坑による土器生産が併せて行われていたものと想定される。

集落内で出土した遺物は，供膳具，煮炊具，貯蔵具の他に，仏具と考えられる稜椀，瓦塔，獣脚なども確認されている。鉄製品の中には銙帯具の鉸具も出土しており，出土遺物の内容から見ても一般的な集落とは様相が異なる。本集落は出土遺物や水運の要所などに営まれていることから，当地域の拠点的な集落の一つといえる。

本節では，今回調査Ⅰ区で確認された奈良・平安時代の遺物や集落についてまとめる。

１．遺物について

調査Ⅰ区から出土した奈良･平安時代の遺物は，土師器片約24,780点，須恵器片約1,780点である。この他，土製品，石器・石製品，鉄製品も少量ながら出土している。以下では，遺構内から比較的まとまって出土した資料を中心に，調査Ⅰ区の遺物の特徴について述べる。

１）土　器

①土師器

杯　杯には内黒処理されるものと，ミガキが施されるが内面黒色処理されないものがあるが，全体的な出土量は少ない。ミガキ処理だけのものは，内外面に施されるものも認められる。外面調整技法では，回転ヘラケズリ再調整を行うものとロクロ整形のみのものとがある。回転ヘラケズリ再調整は体下半を中心に行われるが，回転ヘラケズリの範囲が広いものと幅の狭いものが混在する。これらの土器は，回転ヘラケズリ再調整によるためか，外面に光沢をもつことが多い。底部の切り離しは，再調整で確認できないものが多いが，回転糸切りによるものと思われる。

器形は，底径が大きく身が低いもの（図10－２）と身が比較的高く椀状を呈するもの（図14－４），比較的小型のも（図14－３）が認められる。また，器形による内面黒色処理および外面再調整などの違いはほとんど認められないが，内外面に丁寧なミガキを施すものには，椀状を呈するものが多い。

甕　煮炊具およびロクロ土師器の中で最も出土量が多い。なお，非ロクロの甕は出土していない。住居跡から出土した甕は，器形的特徴から大きく長胴系のものと短胴系のものに大別できる。なお，これらについては，口縁部の形態や調整方法，法量的なことからさらに分類可能であるが，今回は細分せずに大まかな甕の特徴について述べる。

長胴甕では，胴部中央から上半膨らみをもち，口縁部が「く」字状に外反するものと真横に引き

出されるものが認められる。底部はいずれも平底である。口縁端部は，摘み出しを行わないものとわずかに摘み出されるものとが認められる。法量的には，口径が20～23㎝，器高約35㎝，底径約７㎝とほぼ同一規格である。製作は，整形にロクロとタタキを併用し，器面の調整にハケメとカキメを用いる。タタキの痕跡を部分的に残すものも認められるが，多くはハケメとカキメおよび手持ちヘラケズリ調整により，その整形痕を消されている。なお，手持ちヘラケズリ調整は密に行われるものが多く，そのため胴部下半が砲弾状を呈すものも認められる。また，長胴甕のタタキ整形は，北陸の長胴甕と共通する部分がありその影響が窺える。

短胴甕では，胴部上半に膨らみをもち，口縁部が「く」字状に外反ものが多い。底部はいずれも平底である。口縁端部は，ほとんど摘み出しが行われていない。法量的には，口径が14～18㎝，器高８～16㎝，底径７～10㎝で，器高に差が見られる。内外面調整技法は，主にロクロ整形のみで，少量ながらカキメや手持ちヘラケズリが施されるものも認められる。

大鉢　出土量は多くないが，全体の形が分かる資料がＳＩ07，ＳＤ02から出土している。器形的には底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がるものと，体下半に丸みをもつものが認められる。底部は平底で，木葉痕を残すものもある。法量的には，口縁部径が30㎝程度のものと約50㎝のものとが認められる。製作技法は，非ロクロによる。内外面調整技法は基本的に長胴甕と同じで縦および斜めのハケメ調整を施すが，カキメ調整は認められない。内外面ヘラナデのみ施されたものも認められる。なお，内面に粘土が付着した痕跡が確認できるものもある。

②須恵器

還元杯　供膳具の主体となるが，出土量的には後述する未還元のものが多い。底部の切り離しは，いずれも回転ヘラ切りによる。なお，部分的にヘラナデを施すものも認められる。器形的には，いずれも底径が大きく，器高が低いものとなる。法量的には，底径／口径比が0.55～0.6，器高／口径比0.25～0.3に収まる土器が最も多く，他に底径／口径比が0.6以上，器高／口径比0.25～0.3のものがある。また，ＳＩ01図11－３のように底径／口径比が0.6，器高／口径比0.34になるものも認められる。

未還元杯　須恵器系土器などの名称を用いて報告されることもあるが，これらの土器は10世紀前葉の土器に使用される場合が多く，今回は未還元といった呼称を使った。これらの杯については，焼成土坑で焼かれた製品と考えている。器形，製作技法いずれも集落内で確認される還元杯と焼成以外変わりはほとんど認められない。焼成土坑で焼かれた根拠の一つとして，ＳＫ07で一括出土した資料がある。これらの資料の多くは形が歪み，器面が爆ぜ，底部が抜け落ちた状態で出土しており，焼成坑で出土する所謂「ハネモノ」と同じ状態である。

これらの土器については，調査区内で出土する還元化した須恵器杯と製作技法，器形などがほとんど変わらず，この時期の須恵器杯の優越性やこの土器が生産地での須恵器杯の補完を目的としたものと考えられることから，今回は須恵器の項目で報告（断面を白抜きし還元化した須恵器と区別）したが，焼成過程および須恵器出自のロクロ土師器の展開などを考慮すれば，既に指摘されている

ように土師器の範疇で捉える方(菅原：1997)がこの土器については理解しやすい。

なお，内黒ロクロ土師器杯の系譜については，安積郡と接する当該地域の集落内から比較的多く出土していることから，安積郡を含む陸奥国内の他地域と考えられて(山中：2002)いる。

また，これらの土器については，先述したように一般消費地の供給ではなく生産集落内の須恵器工人が自給用として焼成したもの(菅原：1997)と考えられている。本遺跡でも調査Ⅰ区内の１～３号住居跡内から出土した還元・未還元杯の復元可能な個体でその出土数を見ると，未還元杯が４～７割と高い状況を示し，生産地の自給用品として使用されていたことを窺わせる。

以下，ＳＫ07出土の復元可能な資料からこれらの土器を観察する。法量的には，還元杯と同じく底径／口径比が0.55～0.6，器高／口径比0.25～0.3に収まる土器が最も多い。この他に底径／口径比が0.61以上，器高／口径比0.25～0.3のもの，底径／口径比が0.55以下，器高／口径比0.25～0.3のものが認められるが，焼成時の歪みなどを考慮すれば，ほぼ同一の規格内で製作されていたものと考えられる。底部の切り離しは，ほとんどが回転ヘラ切りによるが，回転糸切りが１点，静止糸切りが１点認められる。なお，数は少ないが，他の遺構からも回転糸切りによる底部切り離しが認められた。

当地域の８世紀後葉～９世紀における小型品の底部切り離し技法の相違については，大戸窯跡群の操業と供給面から，窯業生産体制の中で須恵器・土師器工人の二極分化が指摘(菅原1997)されている。これらの土器に回転糸切りや静止糸切りが少なからず認められている点では，須恵器工人と土師器工人との係わりが窺える。当地域では，８世紀末葉～９世紀前葉にかけて土師器の甕も非ロクロからロクロ整形に転換することが指摘(山中：2002)されており，須恵器生産地で在地工人集団(土師器工人)への技術教化(ロクロ技術の伝播)が行われ，ロクロ土師器工人が組織化(石本：1996)していくことによって，当地域における９世紀中葉以降の内黒ロクロ土師器杯の普及に繋がっていった可能性がある。

高台付杯　数は少ないものの，ほぼ完全な形の資料がＳＩ02・03・07，ＳＫ07などから出土している。身が浅いものと深いものに大別でき，後者は口縁部下端や体部中央に沈線を巡らす。喜多方市史４に報告されている資料はいずれも身の浅い高台付杯である。高台はいずれも貼り付けによるもので，底部外縁に設けられている。高台断面形は方形状を呈している。法量的には，身が浅いものでは口径が13～14㎝，身が深いものでは口径が14.5～15㎝に収まる。

蓋　須恵器のなかでは，杯に次いで出土量が多い。特にＳＩ03(住居北側の部分のみ調査)からは，床面から４つの蓋が出土している。形状は中央が窪む摘みをもつ平蓋状のものと数は少ないが，同様の摘みをもつ山笠状を呈するものも認められる。なお，ＳＩ07からは形状が杯を呈した蓋が１点出土している。蓋の天井部については，切り離しの痕跡を丁寧に消すものが多い。

法量は，口径が15～15.5㎝のものと14.4～14.7㎝のものに分かれる。器高は3.5～４㎝のものが多い。これらの蓋は高台杯に伴うものと思われ，法量的にみて前者は身の浅い高台付杯，後者は身の深い高台付杯とセットになるものと考えている。また，蓋外面縁辺部にのみ全周して残る自然釉

の痕跡から，正位高台杯＋倒立蓋＋正位蓋＋倒立高台杯の重ね焼き（北野：1998）が推測される。

小壺　出土量は少ない。ＳＩ03と遺構外から出土している。全体の形が分かるものでは，図20－14がある。形状的には，小型短頸壺と思われるが，底面に焼成前に外側から穿孔しているものが多い。底部の切り離しは回転糸切りによる。これらは焼成前に底面穿孔が行われていることから，実用的なものではなく，先述したように仏具もしくは窯の焼台の可能性がある。また，多孔壺などの特殊器種に付属するものとも考えたが，底面まで焼成されていることや，接合痕なども認められなかったことから，そのような用途ではないものと思われる。

瓶類　出土量は少ない。長頸瓶では頸部と底部の出土である。このうち，遺構外出土の底部資料は，高台の特徴が大戸窯跡ＭＨ33号窯に似た特徴を持つ。この他にＳＩ02・03から横瓶が出土している。製作技法は，いずれも片面閉塞によるもので，円盤貼り付けの痕跡が認められる。

２）土製品・鉄製品

①土管状土製品

出土量は少ないが器形が分かる資料がＳＩ02から数点出土している。器形的特徴から土管状を呈するもの，それを分割したものが認められる。前述したものは器高が約50㎝と比較的大型である。口縁部は実測図で復元しているが，玉縁状を呈していたものと思われる。後述したものは器高が30㎝程度で体部下半に円孔を有し，口縁部は「Ｕ」字状を呈している。玉縁状や「Ｕ」字状の口縁および体部下半の円孔などについては，これらを複数個連結させて使用するためのものと考えられる。内外面の調整技法は，いずれもハケメ，カキメを施す場合が多いが，分割したものでは，外面に整形時のタタキ痕を残すものも認められる。

このような土製品については，形状は違うものの７世紀頃には県内および他県でも確認され，主にカマドを構成する施設の一部として使用されたことが指摘（丹治：2001）されている。新潟県山三賀遺跡では，土管状を呈したものが出土しており，同じくカマドを構成する施設の一部として報告されている。周辺地域では，喜多方市塩川町内屋敷遺跡から分割した形状のものが遺構外から出土している。なお，本遺跡においては，大半が遺構内堆積土からの出土であり，その性格を特定するような出土状況は認められなかった。また，時代は異なるが奈良県飛鳥寺では，土管状土製品が暗渠の土管として使用されている例も認められる。

②瓦塔

遺構外ＬＩから瓦塔の屋蓋部２点が出土している。周辺の遺跡では，喜多方市塩川町内屋敷遺跡から９世紀中葉頃の屋蓋，軸部，基壇部が，鏡ノ町Ａ遺跡からは９世紀前葉頃の相輪部が出土している。内屋敷遺跡出土の屋蓋部と本遺跡出土の屋蓋部を比較すると，半裁竹管状工具で押し引きし瓦を表現している点は共通するが，本遺跡では瓦の継ぎ目も表現されているのに対し，内屋敷遺跡では継ぎ目が表現されていない点が異なる。

③鉸具

ＳＩ02カマド構築土から出土した。鉄製で鉸具頭は隅丸方形状を呈している。周辺地域の銙帯具

の出土事例は，喜多方市塩川町鏡ノ町Ｂ遺跡の溝状遺構（８世紀末葉～９世紀初頭）堆積土から石製丸鞆が出土している。また，新編会津風土記第七十七巻には会津美里町の「いしあい」で火葬壺内から10点の石製銙帯具（巡方，丸鞆，鉈尾）が出土した記載が認められる。「いしあい」の事例は，副葬品として腰帯が火葬壺内に収められた可能性があるが，本遺跡および鏡ノ町Ｂ遺跡の場合は，カマド構築土や溝跡から単体で出土している。単独で出土する銙帯具については，「腰帯から飾金具を取り外し，象徴的に分有していた。」（田中：2003），この他に山間部小規模集落から出土する事例からは「在地社会の支配体制を強固にするため，位階を示す銙帯具を分配し，地域社会での身分秩序を擬制させていた可能性がある。」（福田：2009）ことが指摘されている。

本遺跡の鉸具については，出土状況から本来の腰帯としての機能はなく，単体で持ち込まれていたものと考えられる。また，カマド袖構築土内から出土していることから，この行為を行った時点で上記指摘のような性格を持ち合わせない。県内でも住居跡のカマド内部（白河市佐平林遺跡），貼床埋土（福島市鎧塚遺跡），柱穴の埋土（郡山市柿内戸遺跡）などからの出土事例が報告されており，意識的に埋設された状況で出土するものについては，住居内祭祀を含め今後検討が必要である。

④土器の年代観

ここでは，上記報告の土器の年代観について簡単にまとめる。調査Ｉ区の土器の特徴として，①竪穴住居内において供膳具は数的に須恵器杯が主体で内黒土師器杯が少ないこと，煮炊具は土師器長胴甕と短胴甕が主体となること，須恵器の器種が豊富であること，②須恵器杯は底径／口径比が0.55～0.6，器高／口径比0.25～0.3に収まる土器が多いこと，③土師器杯の外面調整には回転ヘラケズリが行われ，幅の広いものと狭いものが混在していること，④長胴甕では非ロクロのものが認められないこと，⑤長胴甕胴部下半にタタキ整形痕を残す北陸系のものが認められること，⑥長胴甕の内外面調整は縦位の手持ちヘラケズリも認められるが，多くはハケメとカキメ調整であること，⑦蓋の天井部に切り離しの痕跡を残さないこと，⑧未還元須恵器杯（須恵器出自の所謂須恵器系土器）が含まれることなどが上げられる。これらの特徴の多くは，当地域における土師器，須恵器の８世紀末葉～９世紀前葉の特徴として指摘（会津若松市教育委員会：1994，石田：2000，山中：1999・2000・2003）されている。なお，竪穴住居跡の土器の構成や調整技法などは，周辺遺跡で見ると喜多方市塚田Ａ遺跡25号竪穴住居跡と共通している。また，須恵器高台杯，蓋，稜椀などの器形的特徴や法量は，大戸窯跡ＭＨ33号窯期，ＫＡ12号窯期に共通する部分が多く，調査Ｉ区の土器については，概ね８世紀末葉～９世紀前葉に属すものと考えている。

２．集落について

調査Ｉ区で確認された遺構は，竪穴住居跡５軒（内２軒は竪穴状遺構），土坑20基，溝跡６条などである。なお，昭和40年代に発見された須恵器窯跡については，今回の調査では確認されなかった。確認された遺構は，重複関係が認められた遺構もあるが，多くは前述したように８世紀末葉～９世紀前葉に所属するものと考えている。限られた範囲の調査であったため，集落の全体像を把握する

ことはできない。ここでは，検出された遺構などから，集落像の一端を垣間見たい。

本集落については，検出された遺構や以前発見された須恵器窯跡から，生産集落跡と考えられる。今回確認された遺構のうち，ＳＩ02についてはロクロ状ピットが確認されていること，その周辺の床面に粘土が散在していたことや規模などから，工房的な施設と考えている。なお，焼成が甘く歪んだ状態の土師器短胴甕が出土しているが，これらについては工房内で製作したものが，火災焼失の際に生じた産物の可能性もある。また，ＳＩ02の周辺には土器焼成坑と考えられるＳＩ07，ＳＫ07が位置している。この他，ＳＫ04・05・13についても同様の施設と考えられるが，これらについては，県内で報告されている土器焼成坑のように底面や周壁に顕著な被熱面は認められず，全てを焼成坑と判断するには問題がある。なお，顕著な被熱面が認められないことについては，本遺跡の土器焼成坑が他地域に供給することが目的ではなく，主に集落内での自給用品の生産であれば，生産頻度が少ないため，顕著な被熱面が形成されなかったものと考えられる。また，集落内で確認された土器焼成坑については，平面形が方形を呈し，ＳＫ07のように壁に張り出しを伴うことが特徴といえる。

調査区内で確認された土器焼成坑については，消費地への供給より生産地での自給を目的としたものと考えられるが，会津坂下町三本木遺跡６号住居跡で報告されている土師器杯が本遺跡の未還元須恵器杯に類似しており，生産地周辺には少なからず，供給されていた可能性はある。

工房施設や焼成坑の南西側には，小田高原窯跡が位置していたものと推測され，須恵器窯跡周辺に比較的まとまって生産関連遺構が営まれていたと考えられる。なお，集落全体の調査を行っていないため，その生産規模を知ることはできないが，今のところ小型製品を中心とした須恵器生産と集落内で消費する杯などを生産するための焼成坑が付随する小規模な生産集落と考えている。

須恵器生産については，会津北西部地域周辺において８世紀末葉～９世紀中葉まで大戸窯の製品と盆地西縁部の製品が相互補完したことが指摘(山中：2002)されており，本集落はその一端を担ったものと言える。当該期は会津郡から耶麻郡が分置したと考えられる時期と重なる。また，当地域は郡境に位置し，水上交通の要所に営まれている。８世紀に操業した盆地周縁の須恵器窯跡が衰退するなかで，小田高原窯跡および近接する喜多方市西新田窯跡や会津坂下町荻ノ窪窯跡が９世紀以降も引き続き営まれていることは，このような時代背景や立地条件などもその要因の一つであると考えられる。なお，この時期の小田高原窯跡で生産された製品の供給先とその範囲が今後の課題となる。

須恵器窯操業の背景としては，当地域においては会津郡の設置など当時活発化する陸奥国の官衙整備が挙げられる。窯操業の運営には，官と繋がりを持つ在地勢力が関与したと考えられ，当地域においては山崎横穴群と関係する在地勢力の関わり(山中：2002)が指摘されている。なお，銙帯具が出土する開拓集落については，律令の末端に連なる在地勢力が開拓指導したもの(村松：1989)と考えられ，本遺跡においても鉸具が出土しており，官との繋がりが窺える。本集落の経営者は，律令制が弛緩するなかで力をつけた官と繋がりを持つ在地有力者と考えられる。

今回の調査では，これら経営者が居住する建物跡や倉庫などは確認されなかった。集落の中心となる遺構については，調査区東側に広がる小田高原台地上に営まれているものと思われる。なお，阿賀川沿いには，在地有力者クラスの居宅跡が確認されており，生産場所と区別して営まれていることも想定される。出土遺物には瓦塔や獣脚，稜椀などの仏具も含まれることから，仏堂的施設などを集落内に有していた可能性がある。また，ＳＩ01からは稜椀も出土しており，集落内での仏教信仰の受容も窺える。

当地域では９世紀前葉頃に慧日寺，勝常時が創建され，仏教の普及と拡大が認められる。仏堂的施設や瓦塔などは，喜多方市内屋敷遺跡，鏡ノ町Ａ・Ｂ遺跡や会津若松市東高久遺跡など官衙関連施設や在地有力者クラスの居宅跡などで確認され，その時期は８世紀後葉～９世紀中葉頃である。今回の調査では，仏堂的施設は確認されていないものの，他の地域とほぼ同じ時期に集落内に仏教信仰が受容されたものと考えられる。仏教が受容される背景については，信仰的な側面の他に集落開発に伴い経営者が労働力の編成と確保，集落内の秩序維持，民衆統率のための規範づくりといった集落経営的な面からも積極的に受容されていったことが指摘(平野：1996)されている。

なお，本遺跡では，仏具系の遺物に対して墨書，刻書土器が各１点と少ない。周辺の遺跡においても，鏡ノ町Ａ遺跡Ｉ期，鏡ノ町Ｂ遺跡Ⅱ期，内屋敷遺跡４ａ～ｃ期にあたる８世紀後葉～９世紀前葉の時期は本遺跡と同様に墨書土器の出土が少ない傾向にある。鏡ノ町Ｂ遺跡では，Ⅱ期にあたる９世紀前葉以降に墨書土器が多量に出土しており，集落内での宗教活動の変容が窺える。

以上，確認された遺構や遺物などから集落について概観した。今回の調査からは，小規模な須恵器生産を主体とした生産集落であることが確認できた。遺跡の立地を見ると会津盆地の主流河川阿賀川沿いに位置し，集落が営まれている場所が盆地の出入口であることから，河川における物資の流通の拠点であったことも推測される。陸奥南部の郡衙等の立地条件として河川等の水上交通が指摘(荒木：2000)されており，当地域においても８世紀後半以降に阿賀川およびその支流沿いに官衙関連施設が営まれ，その重要性が窺える。本遺跡調査Ⅱ・Ⅲ区にあたる集落の西側は阿賀川に面しており，継続して調査が行われる予定である。これらの調査区内からは，水上交通における流通の拠点であったことを示す遺構が確認される可能性もあり，今後の調査に期待したい。　　（大河原）

第３章　調査Ⅱ区の遺構と遺物

第１節　　概　　要

調査Ⅱ区は，調査対象全区の北西部に位置する。調査Ⅱ区の面積は6,900㎡である。調査Ⅱ区の基点はＥ２グリッド杭（公共座標；X=179,710・Y=－2,960）とし，東方向はＬグリッド列（～Y=－2,890），南方向は17グリッド列（～X=179,640）までが調査Ⅱ区のおよその範囲である。

調査Ⅱ区の立地は概ね２段の段丘下位面であり，流路に接して河川敷状のなだらかな地形が広がる。調査前は畑地・山林などに利用されていた。調査Ⅱ区の北側はＶ字状の細い谷によって分断されるが，谷の北側にも河川敷状の地形がさらに続いている。なお，調査Ⅱ区の北側については平成22年度に試掘調査が行われたが，遺構・遺物は確認されていない。

調査Ⅱ区の東側には段丘斜面が迫る。段丘上位面から調査Ⅱ区までの比高は24ｍ以上である。同段丘斜面は降雨・融雪等の浸透による土砂崩れが発生しやすい地質で，９月の秋雨時期にも地滑り状に斜面が崩れて調査Ⅱ区内に多量の土砂が流れ込んだ。また，調査Ⅱ区の西半部は，河川氾濫時の高水敷になっている。調査Ⅱ区の地盤は，主に東側の段丘斜面の崩落土・西側の洪水砂の供給によって形成されている。

今回，調査Ⅱ区において7,900㎡相当の発掘調査を実施している。調査期間は６月10日～12月17日である。調査面積の内訳は，中世の遺物包含層を対象とした1,000㎡と，平安時代の遺物包含層・文化面を対象とした6,900㎡である。中世の遺物包含層は調査Ⅱ区の北西部で確認した。調査Ⅱ区の検出遺構は，竪穴住居跡６軒，須恵器窯跡３基，溝跡２条，土坑７基，畝状遺構１カ所である。竪穴住居跡はいずれも平安時代のものであるが，カマドが明確に認められたのはＳＩ08のみである。他の住居跡は遺存状態が悪く，構造的に不明な点が多い。

旧地形を概観すると，調査Ⅱ区のほぼ中央を幅10ｍ前後の狭長な平坦面が南北に延びており，Ｈ８～12グリッド付近では平坦面の東側が窪んで堤状の地形が形成されている。平坦面の西側は阿賀川に向かって比較的急な斜面になっている。今回，検出した竪穴住居跡はこの平坦面に立地しており，居住・作業場域を形成していたものと思われる。調査Ⅱ区の東部では西向きの谷が開き，調査Ⅱ区のほぼ中央に窪地を形成している。Ｊ11グリッド杭を中心とする一帯は，遺構・遺物が認められない空白域である。

須恵器窯跡は調査Ⅱ区の北東部で確認され，段丘斜面の裾部を利用して造られている。各窯跡は遺存状態が悪く構造的に不明な点が多いが，比較的大規模な土砂崩落を受けたと思われ，その影響によって窯跡の南側は大きく開析されている。この須恵器窯跡は平安時代であるが，その時期は出土遺物からＳＩ08よりも古い可能性がある。今回，調査の対象とした平安時代の文化面の下に，洪水層を挟んでさらに平安時代の文化面があることが確認されている。下位の平安時代の文化面が須

恵器窯跡の時期に相当する可能性がある。

調査Ⅱ区の南部は谷地形となっており，比較的遺構・遺物の密度が低い箇所である。なお，調査Ⅱ区南東部のＪ18グリッドで竪穴住居跡と考えられる遺構の一部が確認され，遺構の大半が調査区外とした区域に潜り込んでいる。

調査Ⅱ区の南端部で検出したＳＸ02は溝が平行に並ぶ遺構で，東西方向に畝立てが行われた畑跡の可能性があるものである。ＳＸ02は洪水砂で覆われていたが，同砂は調査Ⅲ区で確認された近世頃の洪水砂に類似しており，ＳＸ02の時期についても近世頃の可能性がある。（香　川）

第２節　基 本 土 層

調査Ⅱ区における堆積土の状況は地点によって異なる。調査Ⅱ区の東域は丘陵斜面からの影響が大きく，斜面崩落による浸食・埋積が著しい。一方，西域は河川堆積物が重層しており，調査Ⅱ区の基本土層は複雑な様相を呈する。なお，調査Ⅱ区では基盤層までの深さが２ｍを超える箇所もあり，簡易ボーリング機による地層採取を併用しながら基本土層の確認を行った。

調査Ⅱ区における基本土層は，喜多方市教育委員会によって平成21年度に実施された試掘調査の報告(2010：『喜多方市文化財報告書第８集』)に従い，調査Ⅱ区中央のＨ10グリッドに位置する２号トレンチ(以後，２Ｔ)の成果をまず基準とした。

２Ｔの堆積土は第１～９層に分けられ，第４・６層で平安時代の遺構・遺物が確認されている。ＳＫ10は，喜多方市教育委員会が２Ｔの第４層面で発見した遺構である。第６層は，第４層から約60㎝下がり，焼土面が発見されている。間の第５層は洪水砂層である。第２・３層では遺構・遺物が確認されていないが，比較的安定した土層であることから周辺に遺構が存在する可能性を指摘している。したがって，第１層＝ＬⅠ，第２層＝ＬⅡａ，第３層＝ＬⅡｂ，第４層＝ＬⅡｃとした。また，ＬⅡｃを平安時代の第１遺物包含層，２Ｔの第６層を第２遺物包含層(ＬⅢＥ等)とした。

ＬⅡｃは暗～黒褐色のシルト質層であるが，比較的粒径は大きく砂層に近い。ＬⅡｃ内には微量の炭化物粒・焼土粒を均等に含む。ＬⅡｃから土師器が出土したが，比較的下位で確認されたものが多い。ＬⅡｃの分布は，およそＳⅠ08～12が立地する南北方向の平坦面および東側地域に広がる。Ⅰ６～13グリッド杭を結ぶ基本土層観察用畔では，およそⅠ７グリッドから連続的にＬⅡｃが堆積しているのが認められた。

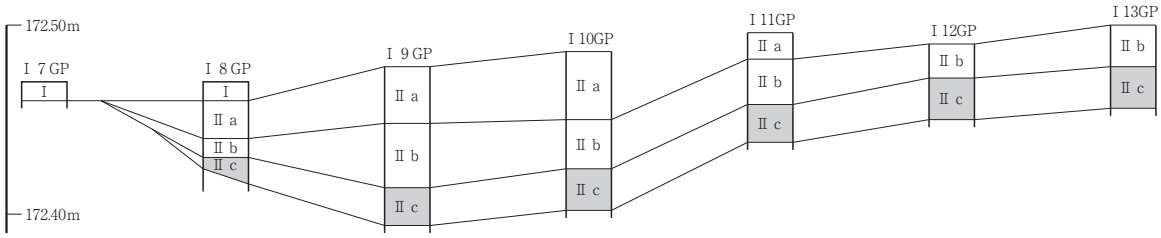


図54　Ⅰ７～13列土層柱状図

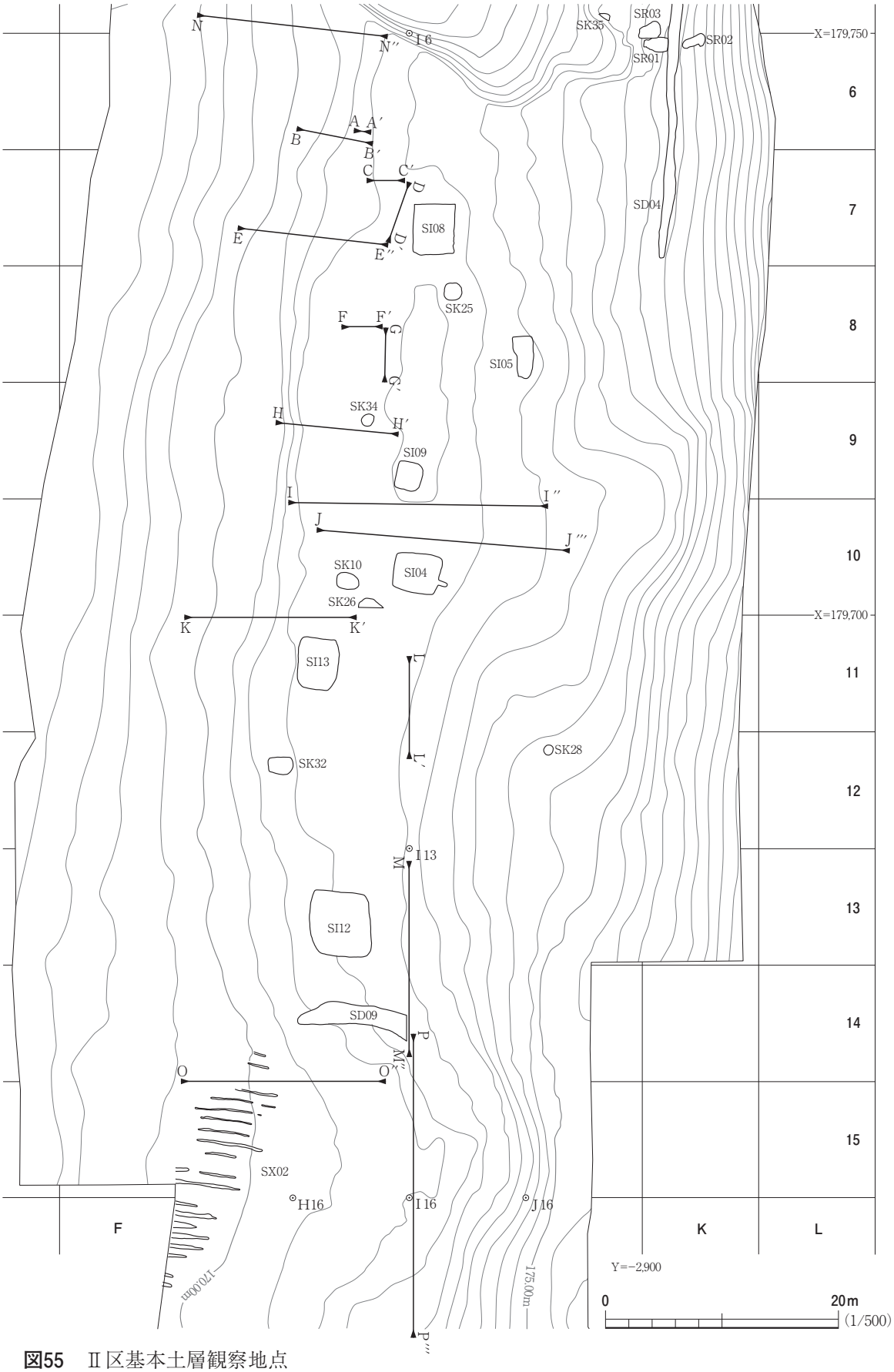


図55　Ⅱ区基本土層観察地点

調査Ⅱ区東部のＪ11グリッド付近から西向きの谷地形が扇状に開くが，Ｉ８～11グリッド付近で谷の外縁が緩やかに隆起するため窪地を形成している。Ｈ10～12グリッド杭を結ぶ基本土層観察用畔（Ｉ－Ｉ″）では，西からＬⅡｃがレンズ状に堆積しているのが確認される。しかし，中央部平坦面よりも西側の斜面域ではＬⅡｃの存在が明確でない。Ｈ－Ｈ′・Ｋ－Ｋ′では平坦面の西側堆積土をＬⅡＡ～Ｃに分けたが，東側のＬⅡａ～ｃとの対応関係は不明である。調査区北西部のＢ－Ｂ′ではＬⅡｃを確認しており，同層から土師器が出土している。しかしＢ地点よりも西側では，ＬⅡａ・ｂが確認できるものの，ＬⅡｃが浸食された可能性がある。なお，Ｉ－Ｉ″の東部ではＬⅡａ上にＬＩｂが厚く堆積する。ＬＩｂは明黄褐色の混合土で，東丘陵斜面から地滑り的に流入した崩落土である。ＬＩｂの層厚はＪ11グリッド付近で約1.2ｍを測る。

13グリッド列以南もおよそ西向きの谷地形であり，斜面崩落土と考えられるＬＩＢが確認される（Ｏ－Ｏ″・Ｐ－Ｐ‴）。調査区南部ではＬⅡｃが確認できず，また平安時代の第２遺物包含層としたＬⅢＥも谷によって刻まれ断絶している様子が窺える。谷の堆積土を沢ℓ１～18に分けたが，沢ℓ４は段丘礫と思われる石，沢ℓ10は黄褐色土塊を含んでおり，比較的大きな斜面崩落が繰り返されたものと推測される。また，沢ℓ３は洪水等による河川堆積物と考えられ，阿賀川からの影響も認められた。なお，沢ℓ３はＳＸ02を覆う堆積層であるが，調査Ⅲ区のＬⅡＲに類似し，近世頃にＳＸ02が埋没した可能性が考えられる。

遺構等の存在の可能性が指摘されたＬⅡａであるが，同層は暗褐色のシルト質層で，地点により層中に炭化物粒・焼土粒を含む箇所がある。今回の発掘調査ではＬⅡａ・ｂから遺構・遺物は確認できなかったが，調査Ⅱ区北西部のＬⅡコ（Ｎ－Ｎ″）とした層から瓦器・小刀が出土しており，ＬⅡｃよりも新しい遺物包含層を確認している。しかし，第１次調査ではＬⅡコとＬⅡａ～ｃの対応関係を明確にすることができなかった。

第２遺物包含層関連の発掘調査は，来年度以降に予定されている。第２遺物包含層としたＬⅢE，またはＬⅢE に相当すると考えられるＬⅢエ・サ（Ｅ－Ｅ″）の上には洪水砂（ＬⅢＤ・Ⅲウ・Ⅲコ）が堆積する。この洪水砂は２Ｔの試掘調査で示された第５層に相当し，第２遺物包含層を確認する際の指標となる層である。第２遺物包含層の分布は概ね第１遺物包含層に等しく，調査Ⅱ区中央の平坦面を中心とする範囲に広がっているものと推測される。Ｈ－Ｈ′・Ｋ－Ｋ′の観察では，ＬⅢE は平坦面突端部で収束しており，西側斜面には及んでいない。ＳＩ08の西側にＤ－Ｄ′を設定したが，ＬⅢイ面がＳＩ08の検出面である。ＬⅢイの約25㎝下で，ＬⅢE に相当するＬⅢエが堆積する。また，ＬⅢケでも遺物および焼土面を確認している。Ｅ－Ｅ″の観察では，ＬⅢエ・ケはＬⅢオ付近で途絶えるが，ＬⅢオの成因については不明である。ＬⅢエは，断絶的にＬⅢサとして続く可能性がある。

なお，喜多方市教育委員会の試掘調査では，Ｇ８グリッドに設定された４Ｔから平安時代の遺物包含層が２層（第４・11層）確認されているが，ＬⅢE との対応関係を明確にすることができず，来年度以降の調査の課題として残る。（香　川）

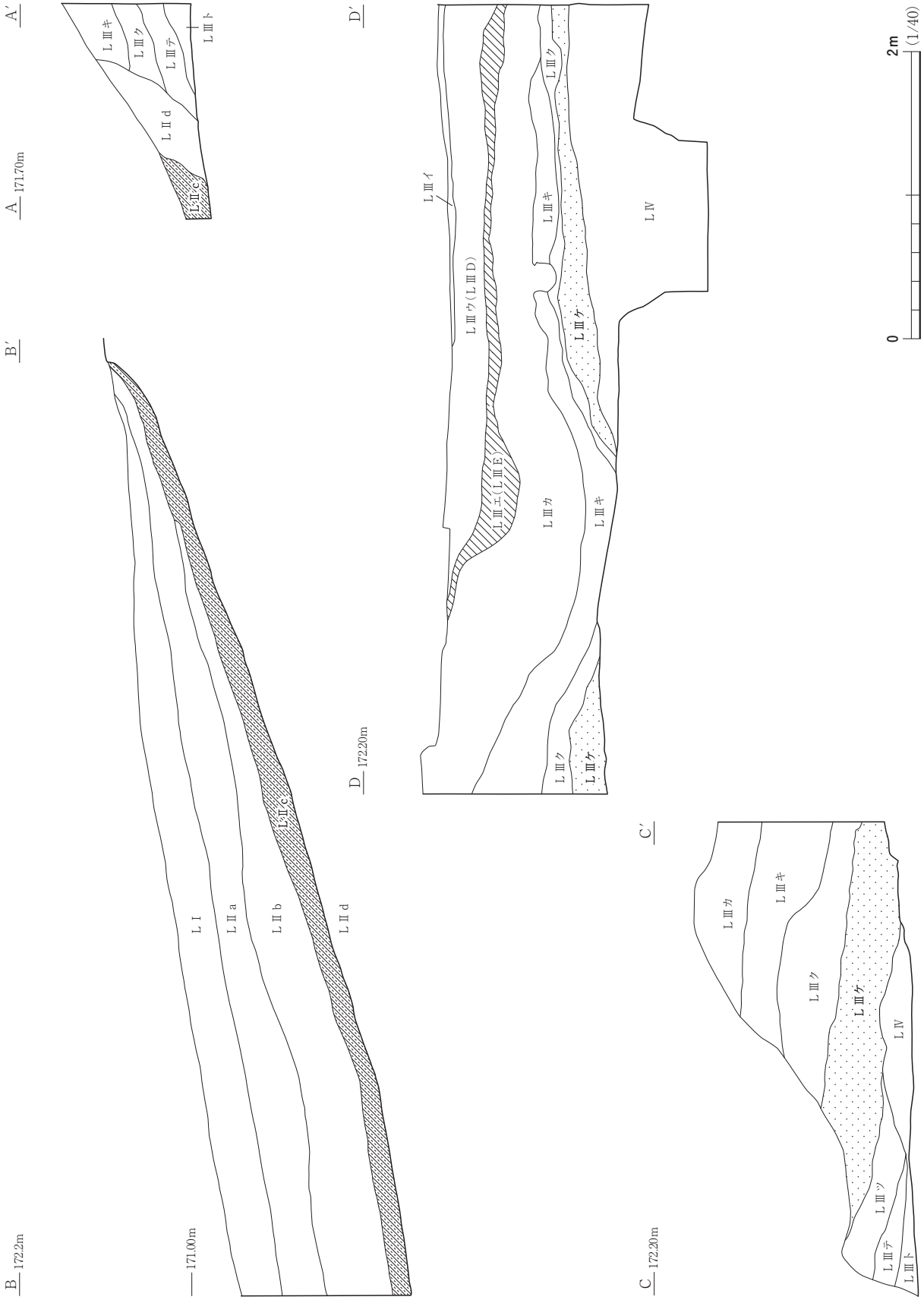


図56　Ⅱ区８列以北基本土層（１）

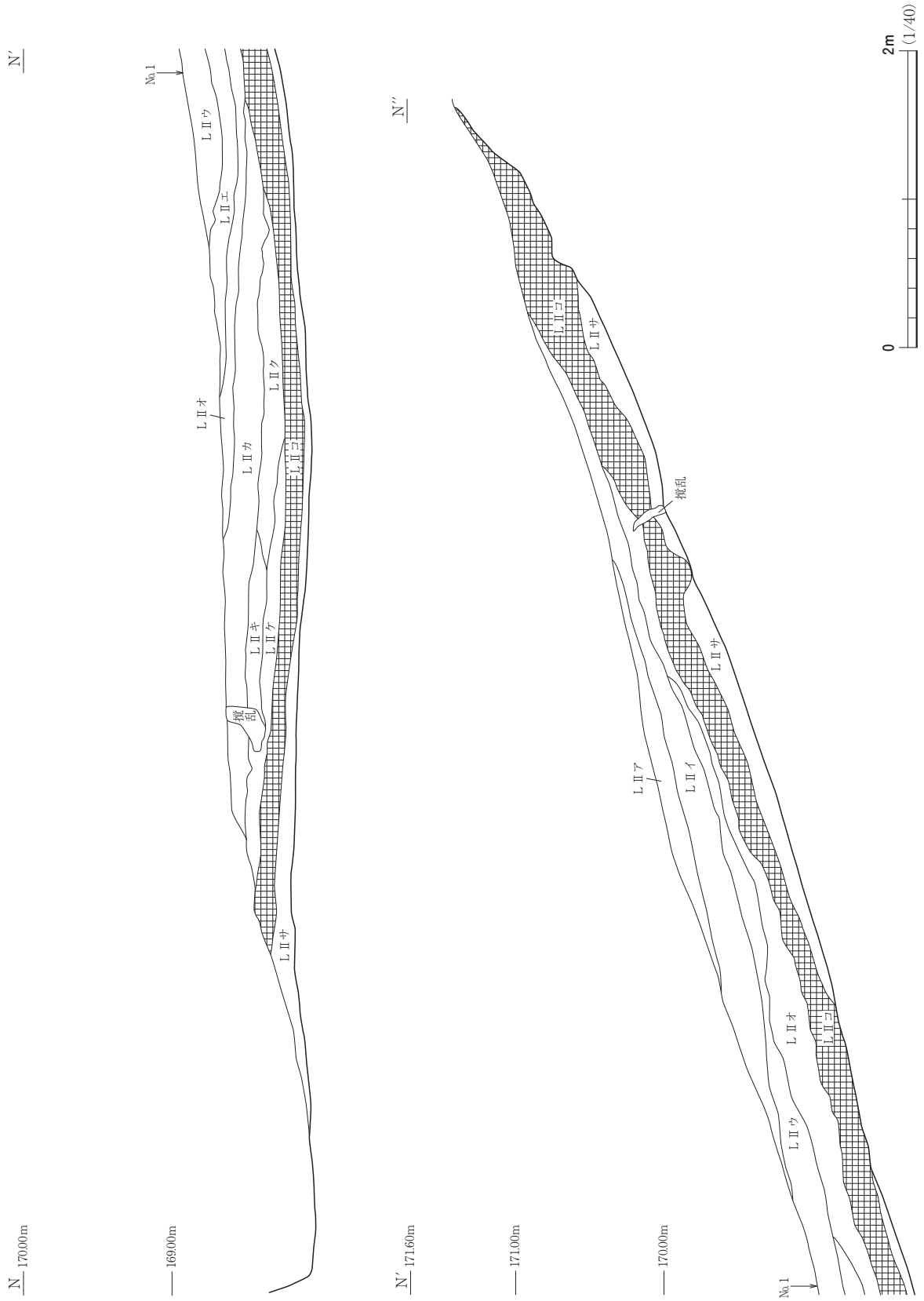


図57　Ⅱ区８列以北基本土層（２）

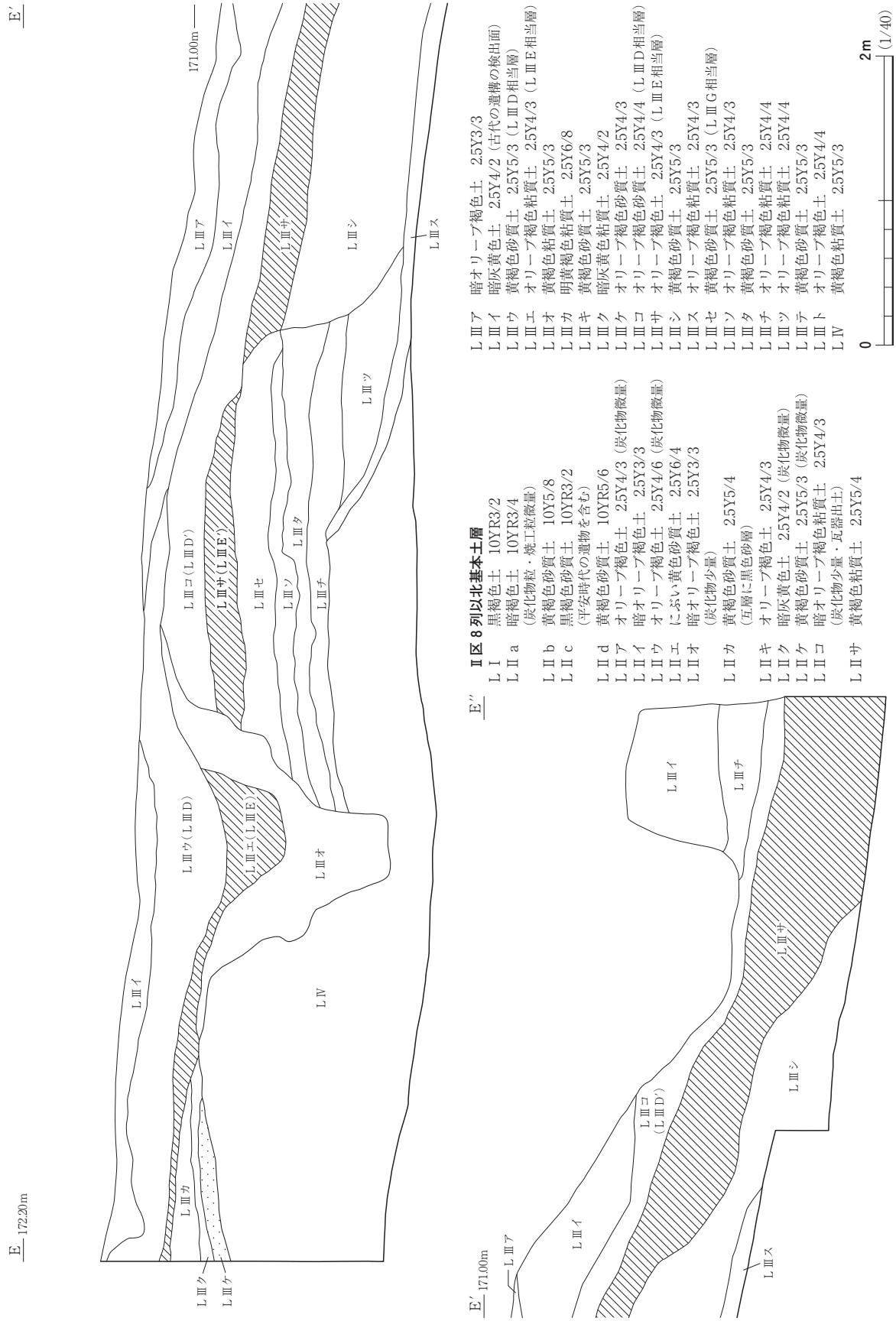


図58　Ⅱ区８列以北基本土層（３）

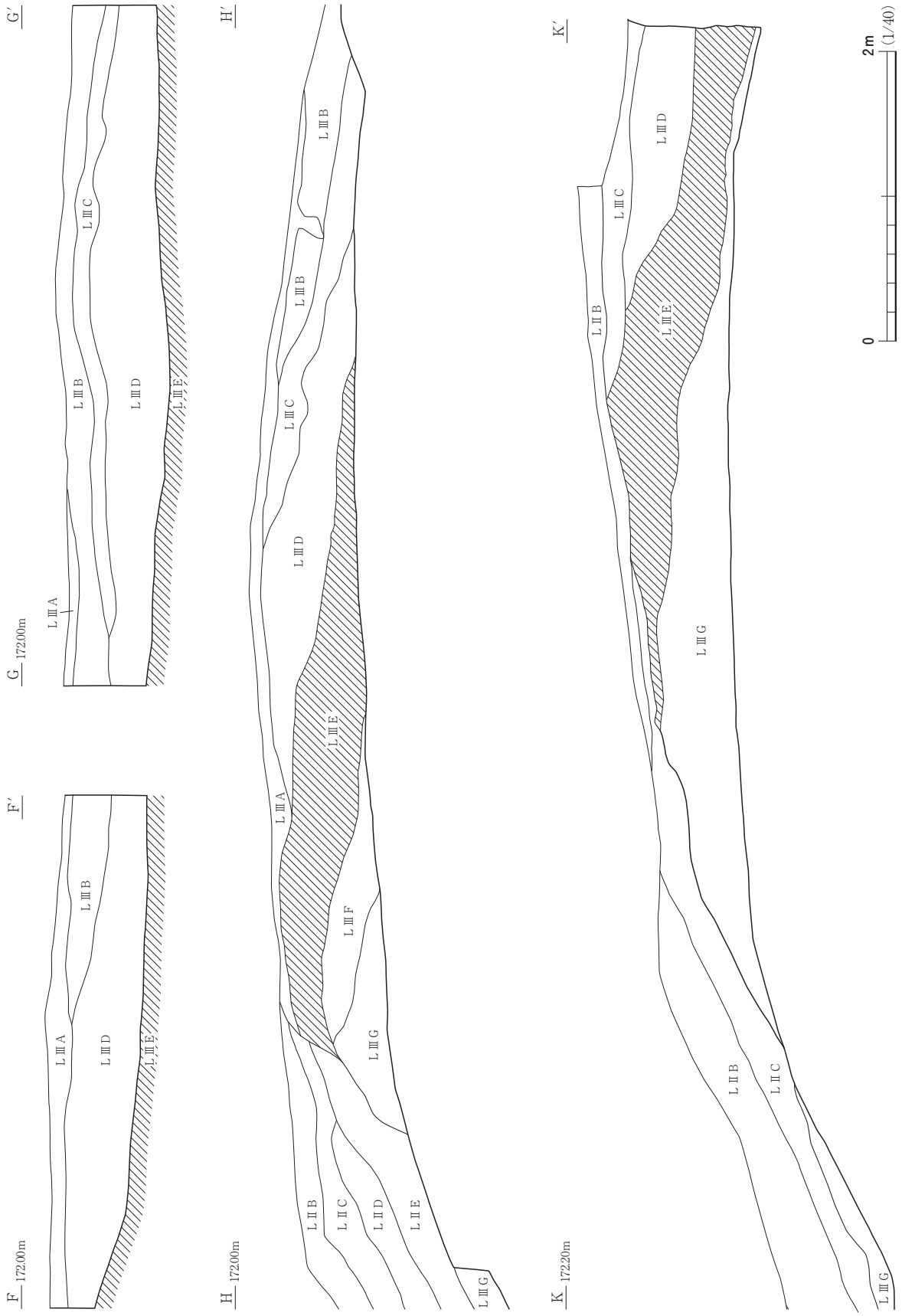


図59　Ⅱ区８列以南基本土層（１）

図60　Ⅱ区８列以南基本土層（２）

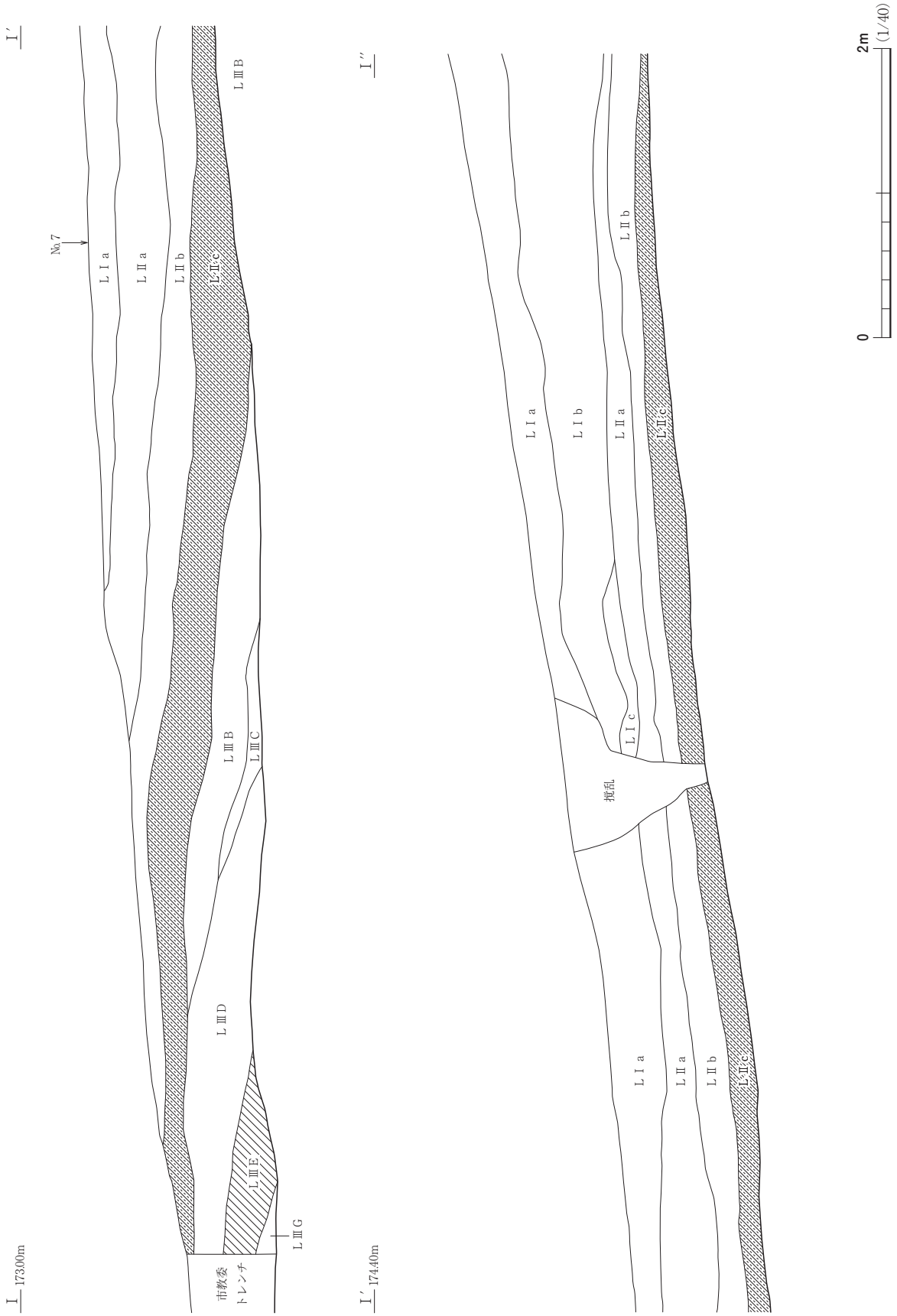


図61　Ⅱ区８列以南基本土層（３）

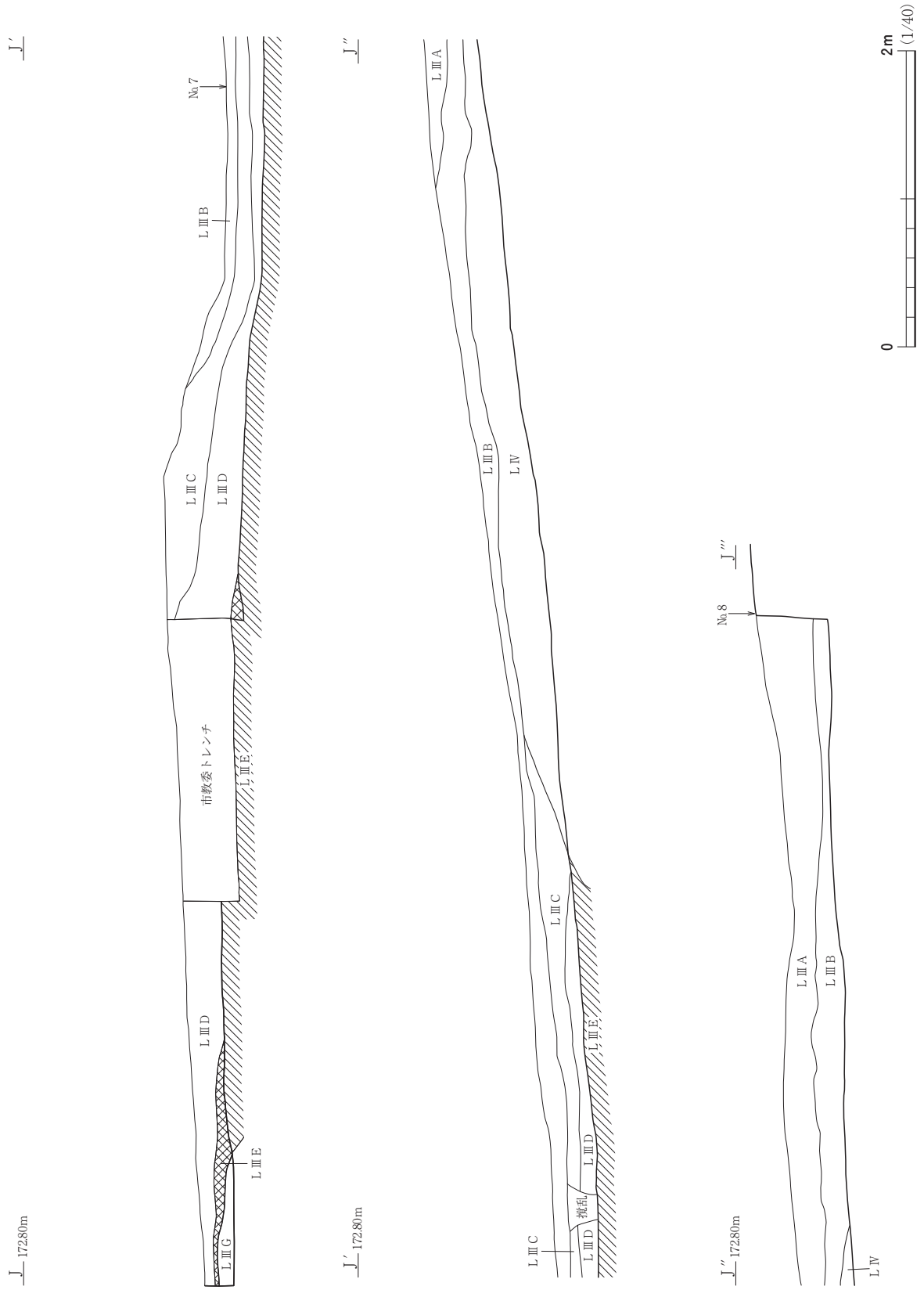


図62　Ⅱ区８列以南基本土層（４）

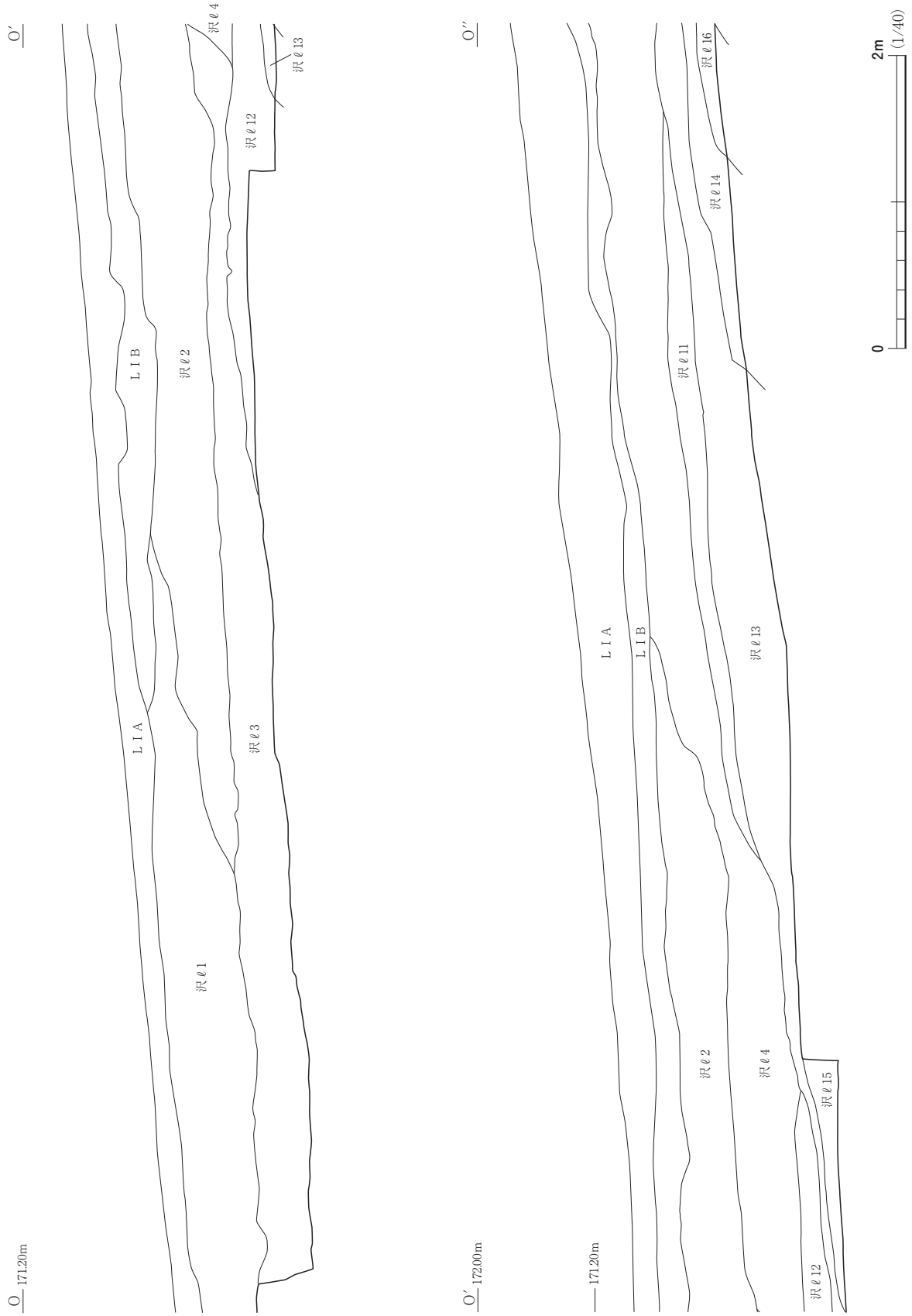


図63　Ⅱ区８列以南基本土層（５）

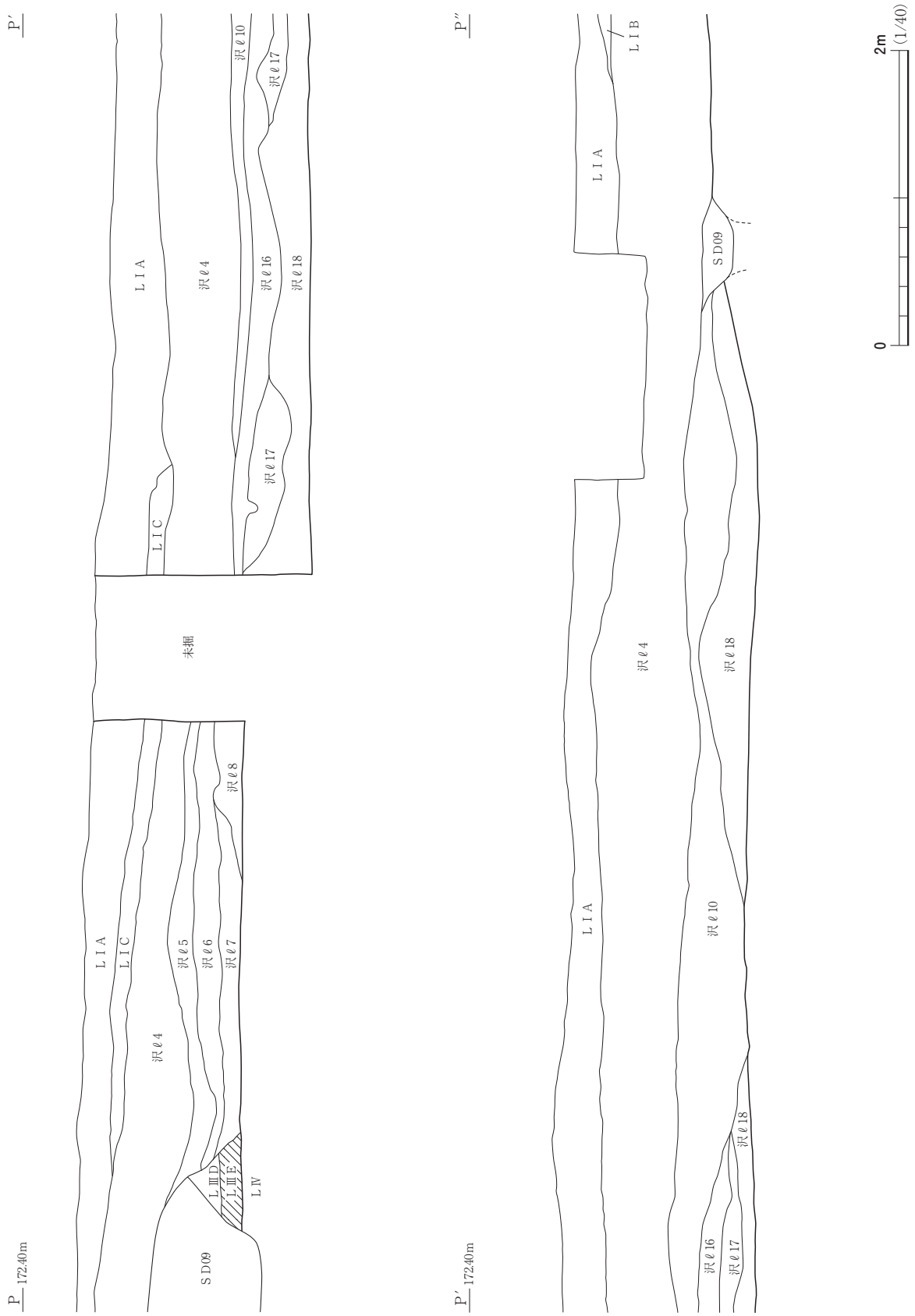
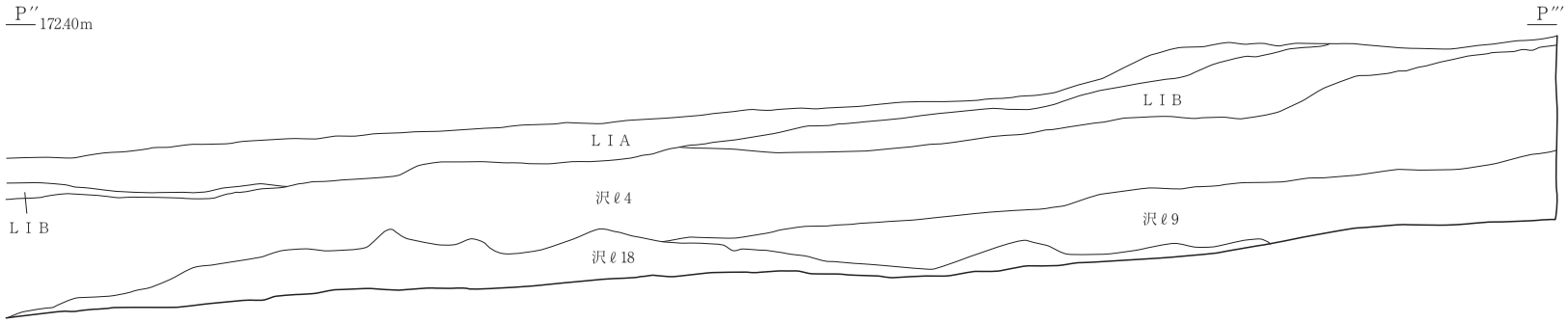


図64　Ⅱ区８列以南基本土層（６）



Ⅱ区８列以南基本土層

ＬＩａ　黒褐色土　10YR2/3（東斜面の崩落土塊少量）
ＬＩｂ　明黄褐色粘質土　10YR6/8（東斜面の崩落土が主体の層）
ＬＩｃ　黒褐色土　10YR2/2（礫少量）
ＬⅡａ　暗褐色砂質土　10YR3/4
ＬⅡｂ　褐色砂質土　10YR4/4
ＬⅡｃ　暗褐色砂質土　10YR3/3（土器・炭化物）
ＬⅡＡｄ　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（マンガン斑あり）
ＬⅡＢｅ　褐色土　10YR4/4
ＬⅡＣｆ　暗褐色砂質土　10YR3/4
ＬⅡＤｇ　褐色砂質土　10YR4/4
ＬⅡＥｈ　暗褐色砂質土　10YR3/3
ＬⅡＦｉ　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
ＬⅢＡ　褐色砂質土　10YR4/4（グリッド南北番号10列以北での古代の遺構検出面）
ＬⅢＢ　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
ＬⅢＣ　褐色砂質土　10YR4/4（グリッド南北番号11～15列間での古代の遺構検出面）
ＬⅢＤ　黄褐色砂層　10YR5/6（場所によっては褐色砂質土10YR4/4を呈した層になる）
ＬⅢＥ　褐色砂質土　10YR4/6（ＬⅣ粒多量，場所によっては暗褐色砂質土10YR3/4を呈した層になる）
ＬⅢＦ　褐色砂質土　10YR4/6
ＬⅢＧ　にぶい黄褐色砂層　10YR5/4（場所によっては黄褐色砂質土10YR5/6を呈した層になる）
ＬⅢＨ　褐色砂層　10YR4/4
ＬⅣ　褐色粘質土　10YR4/6（場所によっては黄褐色砂質土10YR5/6を呈した層になる）

Ⅱ区14～17列　沢堆積土

沢ℓ１　褐色砂質土　10YR4/6
沢ℓ２　灰黄褐色土　10YR4/2（土師器片・５㎜大炭化物微量）
沢ℓ３　褐色砂層　10YR4/4（５㎜大炭化物微量，洪水堆積層）
沢ℓ４　暗褐色土　10YR3/3（土師器片微量）
沢ℓ５　褐色砂質土　10YR4/4
沢ℓ６　褐色砂質土　10YR4/6
沢ℓ７　暗褐色土　10YR3/4
沢ℓ８　褐色土　10YR4/6
沢ℓ９　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（土師器片・５㎜大炭化物微量）
沢ℓ10　にぶい黄褐色土　10YR4/3（東斜面崩落の黄褐色土塊多量）
沢ℓ11　暗褐色土　10YR3/4（土師器片微量）
沢ℓ12　褐色砂質土　10YR4/4
沢ℓ13　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
沢ℓ14　褐色砂質土　10YR4/4
沢ℓ15　暗褐色砂質土　10YR3/3
沢ℓ16　暗褐色土　10YR3/3（土師器片・５㎜大炭化物微量）
沢ℓ17　褐色土　10YR4/4
沢ℓ18　褐色砂質土　10YR4/6

0　2m
(1/40)

図65　Ⅱ区８列以南基本土層（７）

第3節　竪 穴 住 居 跡

調査Ⅱ区において，計6軒の平安時代の竪穴住居跡（ＳＩ04・05・08・09・12・13）を検出した。各住居跡の遺存状態は全般的に悪く，構造的に不明な点も多い。また，当該期の住居跡はカマドの付設が一般的であるが，同燃焼部を明確に認めることができたのはＳＩ08のみである。

ＳＩ12・13については，検出時の平面形・規模等から竪穴住居跡として調査を行ったものの，カマド等の痕跡を確認することができなかったことから竪穴状遺構にも含められるが，本節で取り扱うことにする。

4号住居跡　ＳＩ04

遺　　構（図66，写真36・37）

調査Ⅱ区中央のＨ・Ｉ10グリッドにまたがって位置する住居跡である。遺構検出面はＬⅢＢ上面である。標高約172.0ｍの平坦面の上に構築されており，暗褐色砂質土の長方形広のプランとカマドの煙道部分を検出した。重複する遺構はない。西側にＳＫ10が，南西側にＳＫ26が近接する。また北側約6ｍのところにＳＩ09がある。

遺構内堆積土は，色調から6層に分けた。ℓ1は3㎜大の炭化物粒を含む暗褐色砂質土，ℓ2～4はにぶい黄褐色砂質土で，ℓ6は褐色土である。一部撹乱が認められるものの，ℓ1・3・6がレンズ状堆積をなすと考えられることから各層は自然堆積層と判断した。

上端規模は，東西4.00ｍ，南北3.40ｍを測り，平面形は東西が長い隅丸長方形を呈する。長軸方向はＥ13°Ｓである。検出面から底面までの深さは，東壁の中央で42㎝を測る。壁は約45°の角度で直線的に立ち上がる。床面の規模は，東西3.48ｍ，南北2.90ｍを測る。床面は概ね水平で平坦である。貼床は認められず，ＬⅢＤ面を床面として利用している。

付属施設としては，東壁のやや南寄りにカマドがあった可能性があり，東壁に長さ87㎝の煙道と思われる溝状の掘り込みが認められた。ただし，屋内の壁面や床面に熱を受けた痕跡は認められず，堆積土にも焼土やカマド構築材と考えられるような土は混入していなかった。その他，北壁中央の北側に直径40㎝，深さ16㎝のＰ1を検出したが，ＳＩ04との関連性は不明である。床面からは，柱穴・貯蔵穴などの付属施設は検出されなかった。

遺　　物（図67，写真52・53）

出土遺物は，土師器杯類841点，土師器甕類799点，鉢1点，器種不明の土師器片39点である。須恵器類その他は出土していない。このうち図示したのは67図の11点である。1～4は杯類である。1～3はいずれも高台を有し，内面にはヘラミガキ・黒色処理が，外面にはロクロナデが施される。4は高台をもたない資料で，外面には底部～体部に回転ヘラケズリが施されている。4の内面は熱を受けて黒色処理が消失した可能性がある。4の底部外面のほぼ中央には，細い釘状の工具

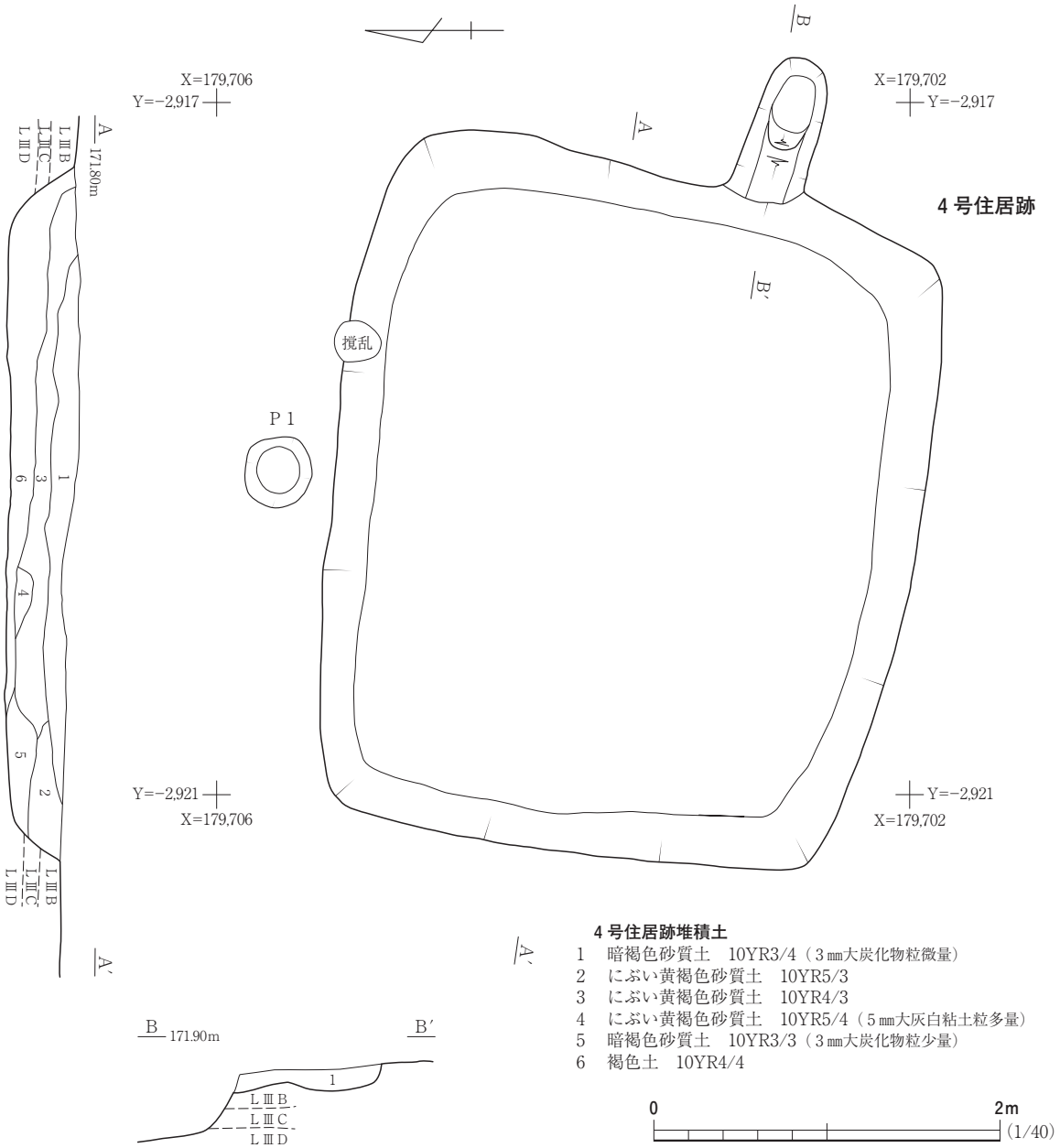


図66　４号住居跡

で「×」印が描かれている。

５～10は甕類をまとめた。５～９の口縁部～胴部上半にはロクロナデが施され，７・10の胴部下位外面にはタタキメが見られる。11は胴部側位に焼成前の穿孔が観察される資料であるが，その器種については不明である。

ま と め

本住居跡は東壁にカマドがあったと考えられる長方形基調の竪穴住居跡である。床面からは柱穴などは検出しておらず，上屋構造などは不明とせざるを得ない。また，カマドについても煙道のみの遺存で，本遺構内からカマド構築土や熱酸化面が認められず不明点が多い。

本住居跡は，出土遺物から９世紀末～10世紀前葉頃の所産と考えられる。　（宮　田）

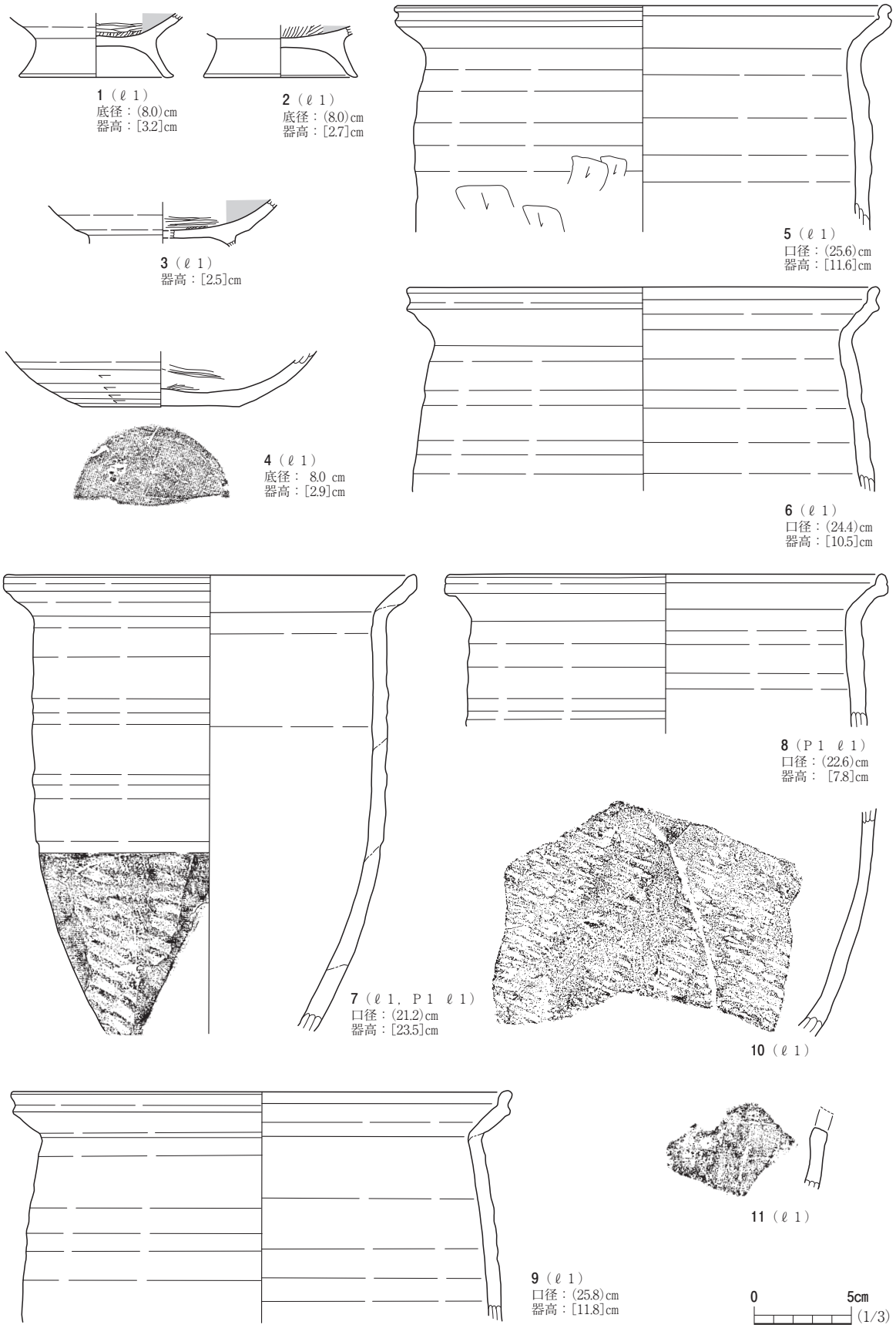


図67　4号住居跡出土遺物

５号住居跡　ＳＩ05

遺　　構（図68，写真38・39）

Ｉ・Ｊ８グリッドに位置する住居跡である。検出面はＬⅢＢ上面である。ＳＩ05は西方向に下る比較的緩やかな斜面地に構築されており，その標高は約172.4ｍである。遺存状態が非常に悪く，住居跡の西半部が消失していた。発見状況は，X=179,720を東西に通過する幅40㎝のトレンチを設定したところ，同北側断面にＳＩ05の床面・堆積土を確認した。また，ＬⅢＢのにぶい黄褐色土面に対し長方形状の落ち込みが認められた。なお，トレンチの南側断面では痕跡は確認できなかった。重複遺構はない。北西側約６ｍにＳＫ25，約９ｍにＳＩ08がある。

遺構内堆積土は１層のみで，ℓ１内には焼土粒・炭化物粒を含むが，いずれも微量である。ℓ１の観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず，自然に埋没した可能性が高いと考えられる。平面形は，遺存部の形状から方形または長方形であったと推測される。壁は東壁が唯一遺存していた。東辺の方向はほぼ真北を指し，立地斜面の等高線とほぼ平行している。東壁の遺存長は3.27ｍを測る。本遺構の南辺は，トレンチ断面の観察からX=179,720を超えない範囲にあったものと推測される。東壁から西方向に遺存する床面範囲は，最大で1.70ｍである。東壁の立ち上がり角度は約60°である。東壁の遺存高は，最大で約10㎝である。床面はＬⅢＢ面を直接利用しているが，床面のほぼ全面で生活痕と思われる汚れが認められた。床面は概ね水平に造られており，トレンチ断面等の観察から本遺構の西半部は自然の力で浸食されたものと推測した。

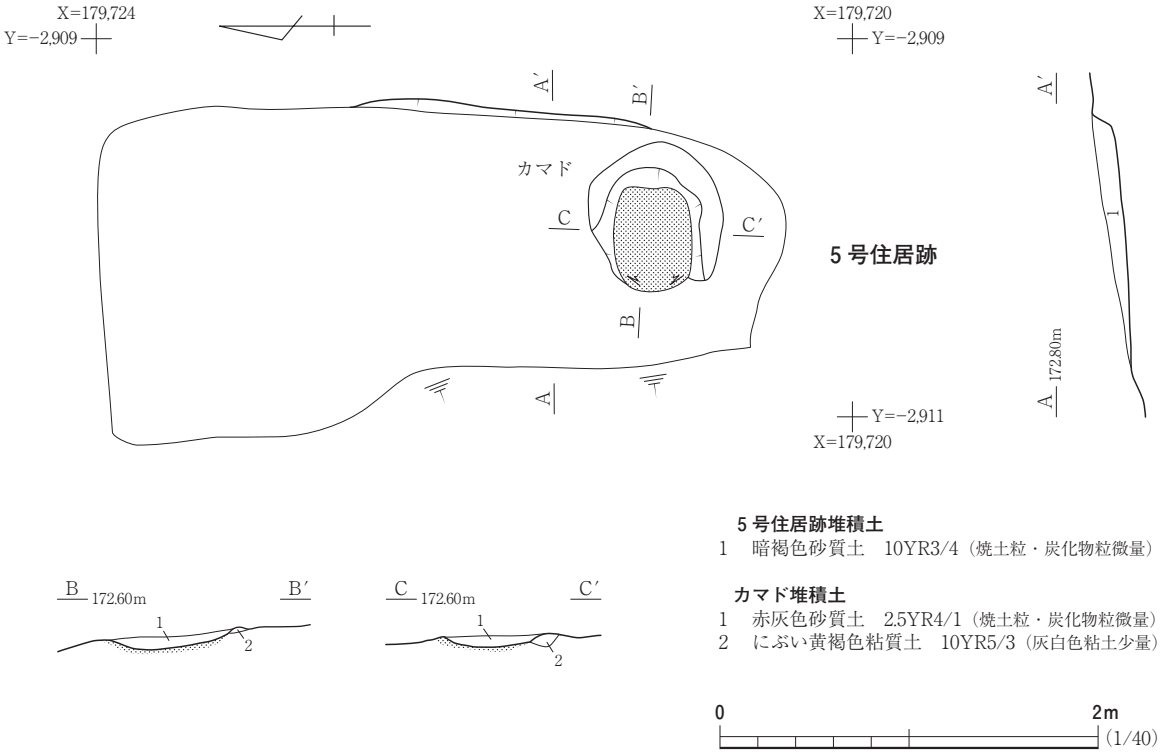


図68　５号住居跡

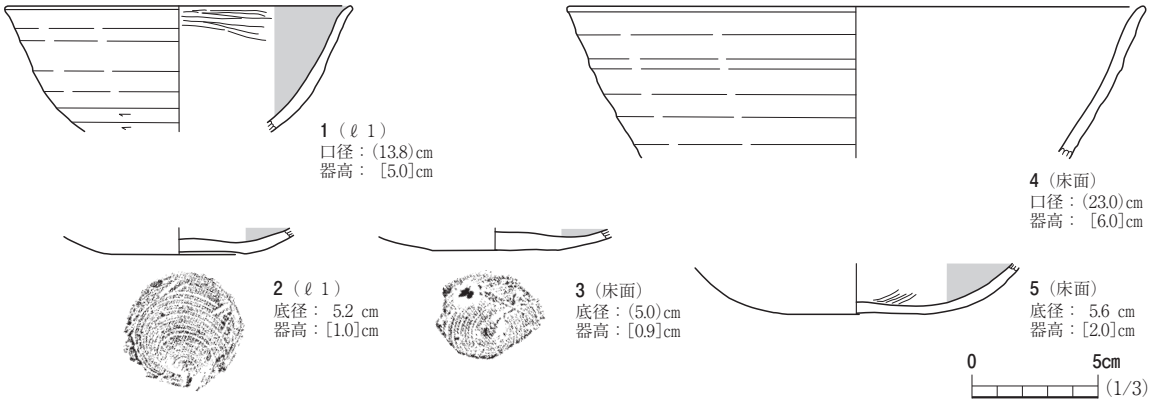


図69　5号住居跡出土遺物

ＳＩ05の南東部で焼土面を確認した。焼土面の周囲には，西側を除いて硬く締まる黄褐色土が巡っている。焼土面は皿状に窪んでおり，強く熱を受けて地表から約３cmの深さまで赤褐色に熱変していた。焼土面の性格については，炉・カマドなどが推測される。焼土面の規模は東西55cm×南北40cmである。本遺構から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかった。

遺　　物（図69，写真52・53）

遺構内から土師器の杯類19点・甕類５点が出土したが，そのほとんどが細片である。１～３・５はいずれも内面に黒色処理・ヘラミガキが施された杯である。１の体部下端には回転ヘラケズリによる調整が行われている。２・３はいずれも回転糸切痕が認められる。２の底部外面は無調整であるが，３はロクロからの切り離し後，回転ヘラケズリ調整が施されている。

４は東壁中央の床面から出土した資料で，その口径は推定値で23.0cmを測る。４の遺存度は約20％であり，底部の形状は不明である。体部の器厚は４mm前後で，同図１・５とほぼ同じである。４の内面は磨耗しており，その調整は不明である。

ま と め

ＳＩ05は遺存状態が悪く不明点が多いが，平面形状が方形または長方形の遺構であったと推測される。本遺構の南東部で焼土面を確認し，その位置からカマドの可能性も考えられる。柱穴は確認することができず，上屋の有無・構造等については不明である。遺構の時期については，平安時代前期末～中期初め頃と推測される。（香　川）

８号住居跡　ＳＩ08

遺　　構（図70・71，写真40・41）

Ｉ７グリッドに位置する住居跡である。検出面はＬⅢイ上面である。調査Ⅱ区のほぼ中央を南北に細長く延びる平坦地形の最北部に立地しており，その標高は約171.8ｍである。ＳＩ08の西側は，阿賀川に向かって比較的急な斜面になっている。ＳＩ08の西部はトレンチによって破壊されていたが，同断面の観察から住居跡床面が確認された。重複する遺構はない。南側約2.5ｍの地点にＳＫ25がある。

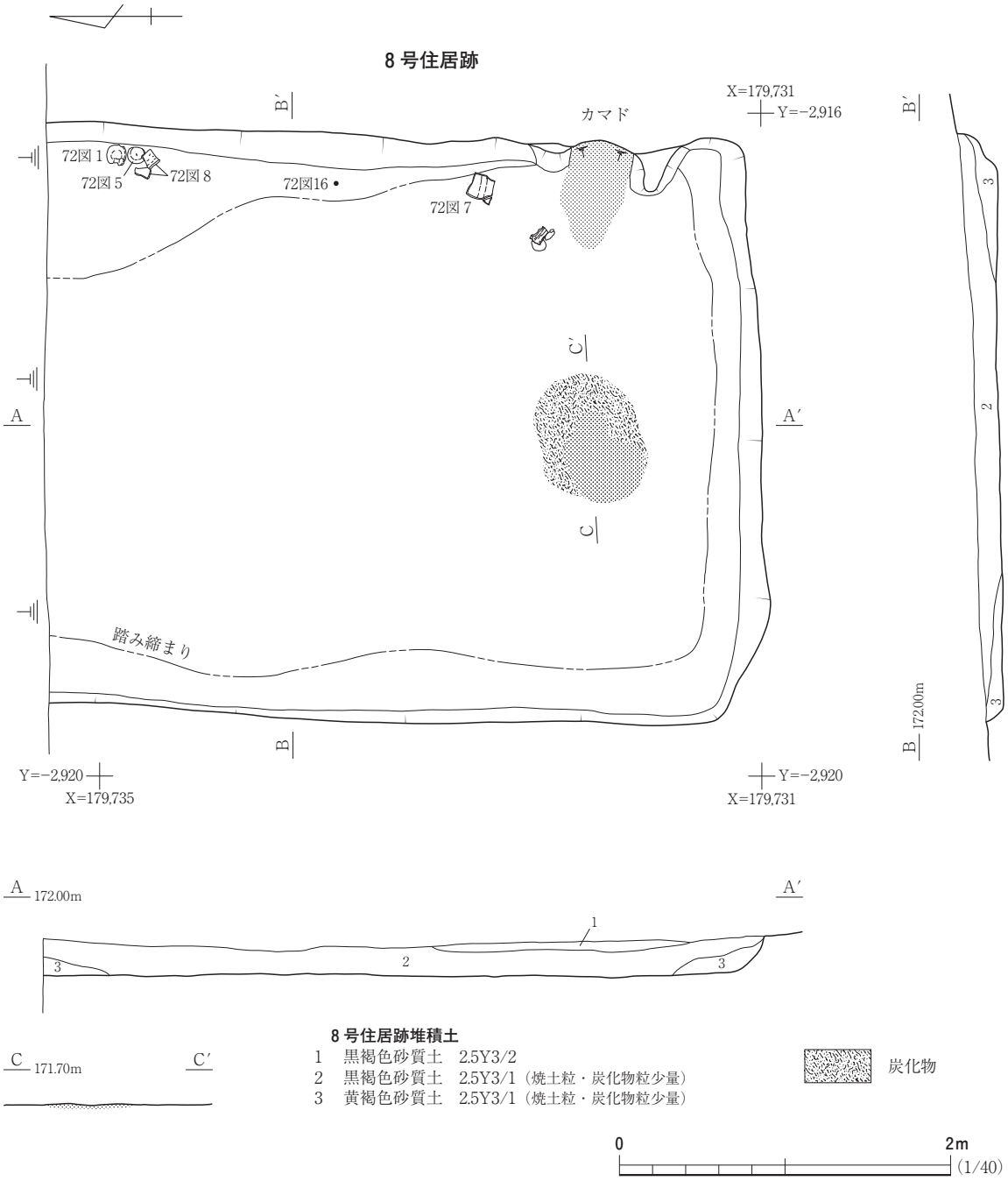


図70　８号住居跡（１）

遺構内堆積土は３層に分けた。ℓ１は住居跡の南部で確認したもので，炭化物・焼土等の含有物はほとんど認められなかった。ℓ２は，床面のほぼ全面を覆う黒褐色の砂質土である。ℓ２内には0.5～5.0㎝の消し炭状炭化物と２㎜前後の焼土粒を少量含み，下層ほど炭化物の形状が大きくなる。ℓ３は壁際で三角状に堆積する黄褐色砂質土である。ℓ１～３の状況から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず，自然に埋没した可能性が高いと考えられる。

住居跡平面形は，遺存部の形状から長方形であったと推測される。長軸方向はＮ３°Ｅで，真北方向に近い。規模は，長軸長が遺存値で4.35ｍ，短軸長が3.53ｍである。壁の断面は曲線的である。

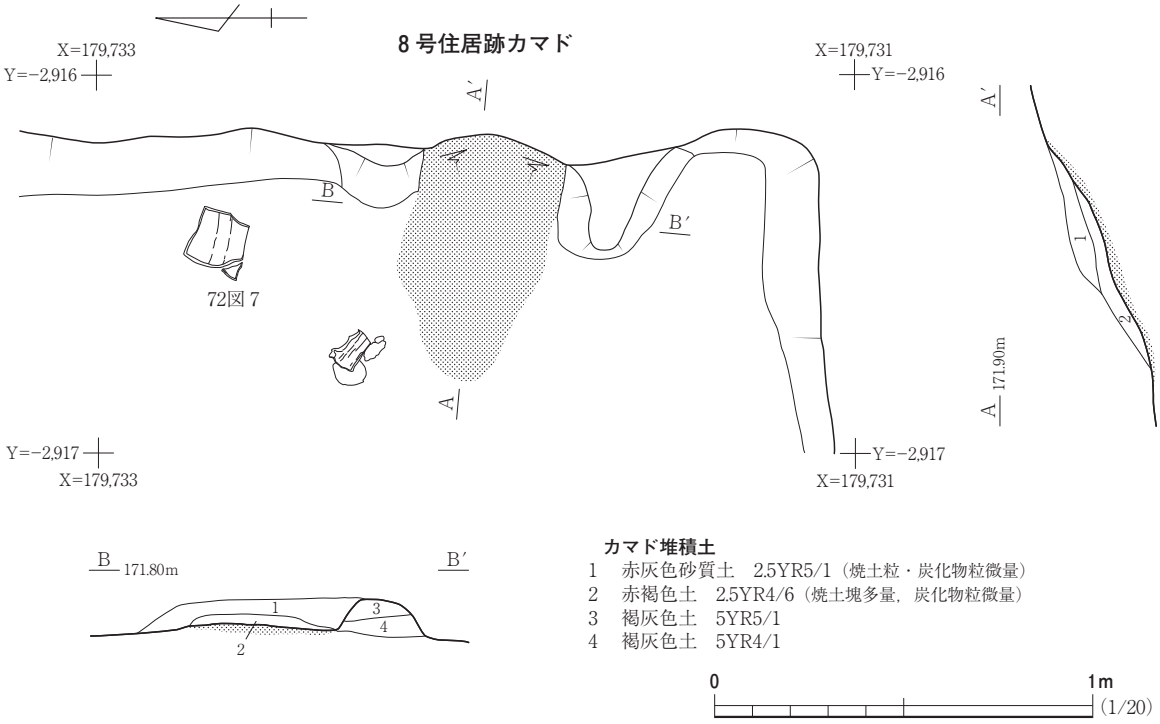


図71　８号住居跡（２）

壁の遺存高は，東壁中央部で23㎝，西壁中央部で８㎝を測る。床面はＬⅢウ面を直接利用しており，壁際を除いて硬く踏み締まっていた。床面南部で白色粘土・黄色粘質土の散布が認められ，部分貼床の可能性も考えられた。しかし，散布範囲がカマドに近いことや明確な掘形等が確認できなかったことから，部分貼床の痕跡ではないと判断した。

カマドは東壁南部に造られている。カマドの遺存状態は非常に悪く，火床面の範囲によって燃焼室のおよその位置が推測できた。カマドの右袖は色調によって２層（ℓ３・４）に分けたが，両層とも硬く締まる。右袖の遺存長は，東壁から西側へ27㎝である。火床面は赤褐色の硬化面が舌状に広がっており，焚口側から奥壁へ約20°の角度で傾斜している。火床面の範囲は東西66㎝×南北37㎝で，上面から約３㎝の深さまで熱変していた。奥壁の東側には煙道があったものと推測されるが，その痕跡を確認することはできなかった。

カマドの西側1.2ｍの地点で，東西56㎝×南北55㎝，深さ約３㎝の赤褐色に硬化した焼土面を検出した。この焼土面上を通過する土層観察畔（Ａ－Ａ′）から後世に掘り込まれたような痕跡は確認できなかったため，ＳＩ08に伴うものと判断した。同焼土面の周囲には炭化物が散らばっていたが，他に採取物はなくその性格は不明である。

ＳＩ08から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかった。

遺　　物（図72，写真54・55）

遺構内から土師器の杯類432点・甕類140点，刀子１点が出土した。須恵器は出土していない。

１は東壁沿いの床面北東部から口縁部を上に向けた状態で出土した土師質の杯で，器面の色調は灰白～淡黄色である。１の器形は内湾気味の体部から口縁部がわずかに外反し，底部／口径の比率

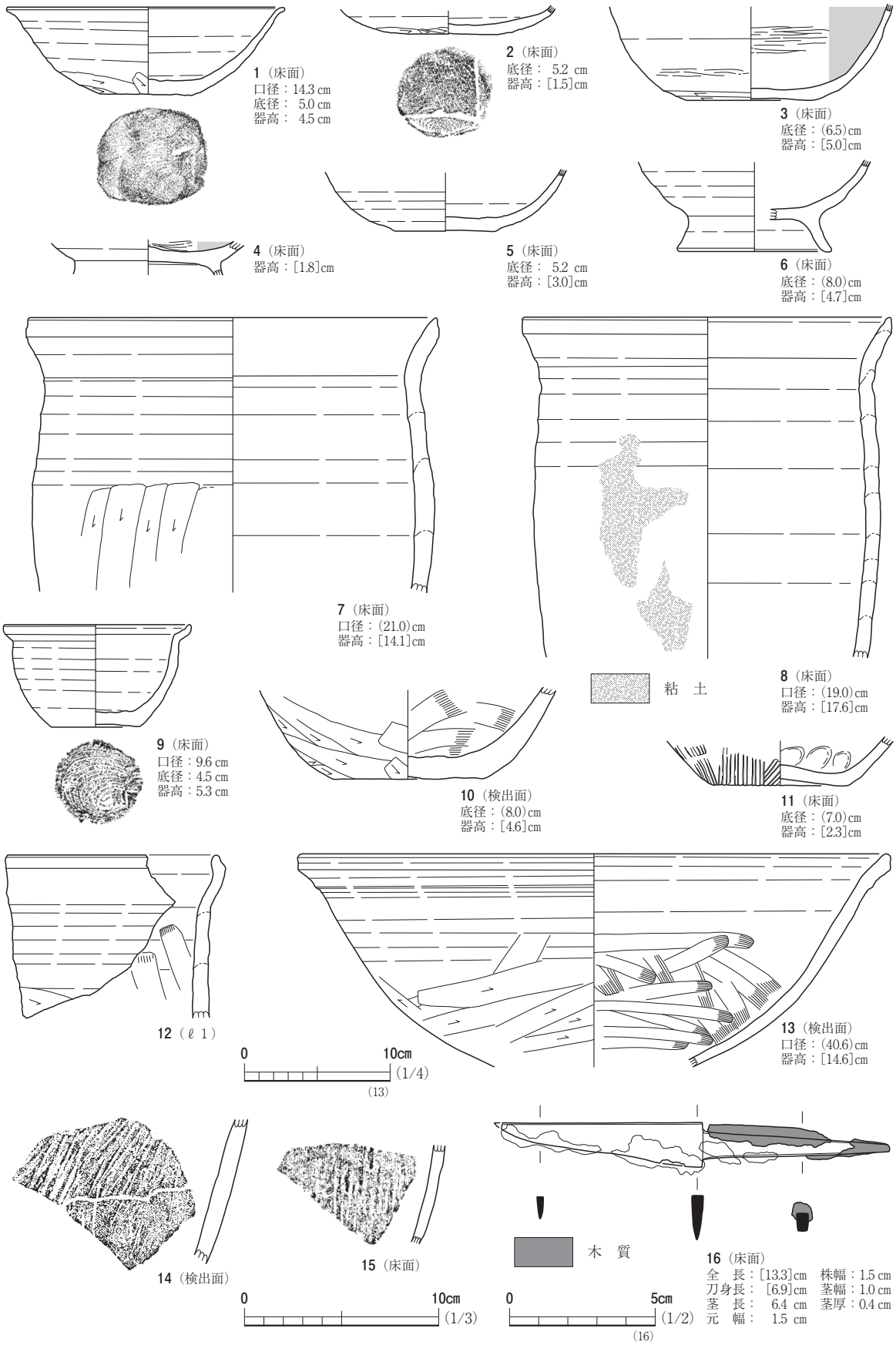


図72　８号住居跡出土遺物

は0.35と比較的数値が小さい。１の底部～体部下端は，ロクロからの回転糸切り後に手持ちヘラケズリ再調整が行われている。１の内面調整はロクロナデである。２も体部下端に手持ちヘラケズリ再調整が施されている。３は内湾の度合いが著しい椀状の器形で，体部外面に回転ヘラケズリ・ヘラミガキが施されている。３の内面は黒色処理・ヘラミガキ調整が施されている。４・６は床面から出土した高台付杯であるが，いずれも小片のため器形・調整の詳細は不明である。

７・８の長胴甕は，わずかに窄まる頸部から口縁部が直線的に開き，その口唇部は上方に突き上げられている。７の胴部下半にはヘラケズリ調整が，８の胴部下半には化粧土が認められた。９の小甕はカマドから北側へ約１ｍ離れた床面から出土したもので，口縁部の反りは７・８や12の長胴甕と違って屈曲が著しい。10は，外面にヘラケズリ調整，内面にヘラナデ調整が施された甕の底部破片である。11も甕の底部破片で，外面にタタキメ，内面に指圧痕が認められる。

13は全体の約30％が遺存する鉢で，遺構の検出時，カマドの南東側約60㎝の地点から出土したものである。底部の形状は不明であるが，遺存部から丸底の可能性が高い。13の胴部は内湾しながら立ち上がるが，口縁部では直線的に短く開く。外面にはケズリ調整，内面にナデ調整が施されている。14・15は比較的薄手の甕破片で，外面にはハケメが認められる。

16は東壁際の床面から出土した刀子である。切先部分がわずかに欠損しているが，遺存状態は比較的良好である。刃区と棟区の比はおよそ１：１である。茎には柄の痕跡と考えられる木質が付着している。

ま と め

ＳＩ08は西壁が失われているが，調査Ⅱ区では比較的住居跡の構造がわかる遺構である。平面形は長方形と推測され，カマドが南東角に付設されている。同様の住居跡には調査Ⅲ区の６号住居跡がある。貼床は認められなかったが，床面は非常に硬く締まっていた。カマドの西側から地床炉状の焼土面があり，生産的な行為に使用された可能性も考えられる。柱穴は確認することができず，上屋の有無・構造等については不明である。遺構の時期については，出土した遺物の年代から10世紀前後と考えられる。（香　川）

９号住居跡　ＳＩ09

遺　　構（図73，写真42）

Ｈ・Ｉ９グリッドに位置する住居跡である。検出面はＬⅢＣ上面である。ＳＩ09は窪地に堆積したＬⅢＢを掘り込んで構築され，西側は堤状に盛り上がった地形となっている。ＳＩ09付近の標高は約171.4ｍである。遺存状態は非常に悪く，東壁は検出段階ですでに失われていた。発見状況は，ＬⅢＣの褐色土面に対し不明瞭であったが，方形状の落ち込みが認められた。重複遺構はない。南側約5.5ｍの地点にＳＩ04，北西側約4.0ｍの地点にＳＫ34がある。

遺構内堆積土はℓ１の単層とした。ℓ１内には微量の炭化物粒を含む。ℓ１の色調はＬⅡｃよりも明るいが，両層の土質は類似している。ℓ１の観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認

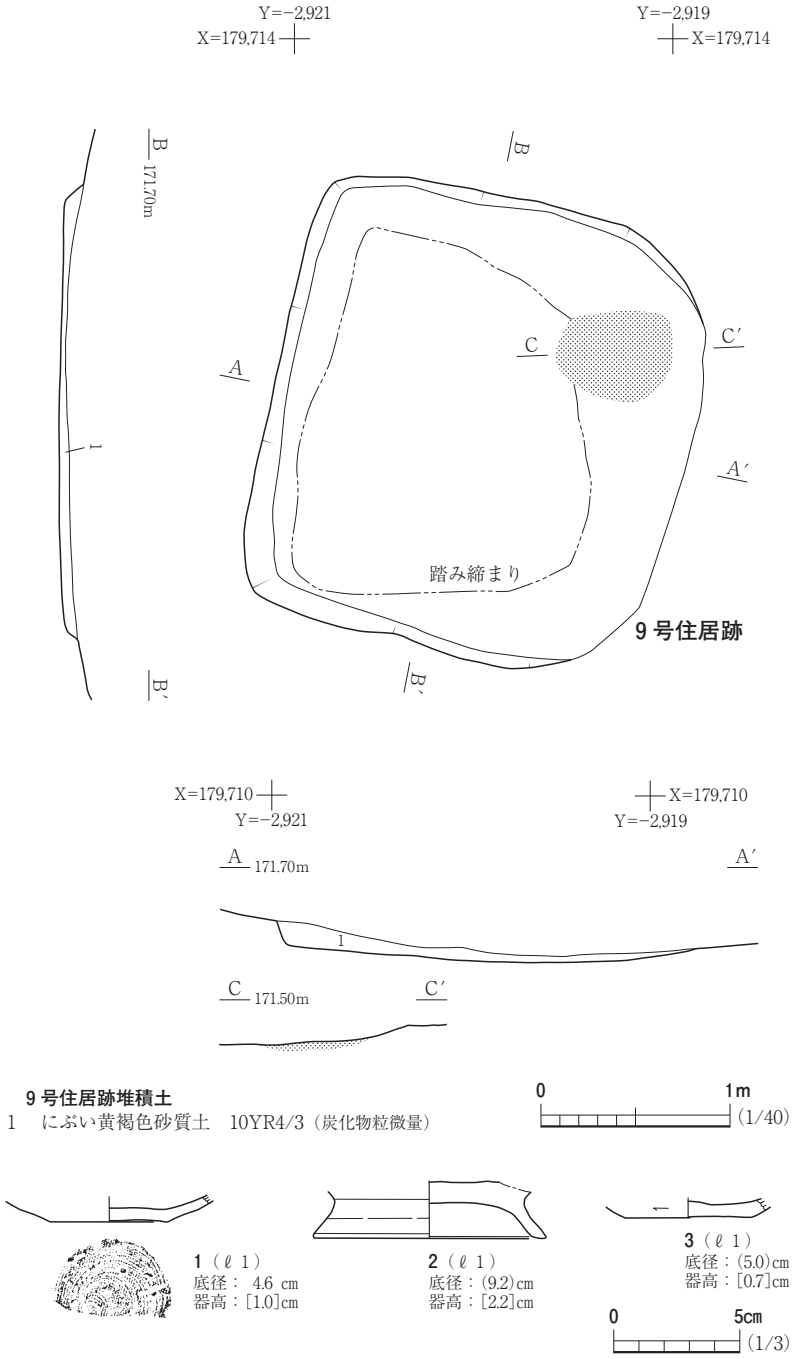


図73　９号住居跡，出土遺物

できず，自然に埋没した可能性が高いと考えられる。

住居跡平面形は，遺存する北西・南西角の形状がやや丸みを帯びており，方形に近い形状であったと推測される。北壁・南壁の中央を結んだ軸線の方向はＮ10°Ｅである。規模は，東西方向が遺存長で2.20ｍ，南北方向が2.44ｍである。壁の遺存状態は西壁が最も良好で，床面から約60°の角度で立ち上がる。検出面から床面までの深さは，西壁中央の最深部で14㎝を測る。床面はＬⅢＣ面を直接利用しており，その中央部がわずかに窪んでいる。床面の状況は炭化物の付着が認められ，また部分的に硬く踏み締まっていた。

ＳＩ09の北東部で赤褐色の焼土面を確認した。焼土面は概ね楕円形で，平面規模は東西60㎝×南北48㎝を測る。焼土面の東側の床面は緩やかに立ち上がっている。焼土面の熱変は床面から約４㎝までの深さまで及んでおり，非常に強い熱を受けたものと考えられる。ＳＩ09から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかった。

遺　　物（図73，写真53）

遺構内から土師器片が83点出土したが，大半が細片である。１～３はいずれも内面に黒色処理・ヘラミガキが施された杯類である。１・３の底部外面には回転糸切りによるロクロからの切り離し後，回転ヘラケズリ調整が施されている。２は，直線的に開く高台付杯である。

ま と め

ＳＩ09は遺存状態が悪く不明点が多いが，床面の北東部にカマドの可能性も考えられる焼土面が検出され，本遺構は竪穴住居跡として機能した可能性が考えられる。遺構の時期については，出土した遺物の年代から平安時代前期末～中期初め頃と考えられる。　（香　川）

12号住居跡　ＳＩ12

遺　　構（図74，写真44・45）

Ｈ13グリッドに位置する遺構である。検出面はＬⅢＣ上面である。東側の段丘斜面から平坦部となる地点に構築されており，その標高は約171.5ｍである。重複遺構はない。南側約４ｍの地点に

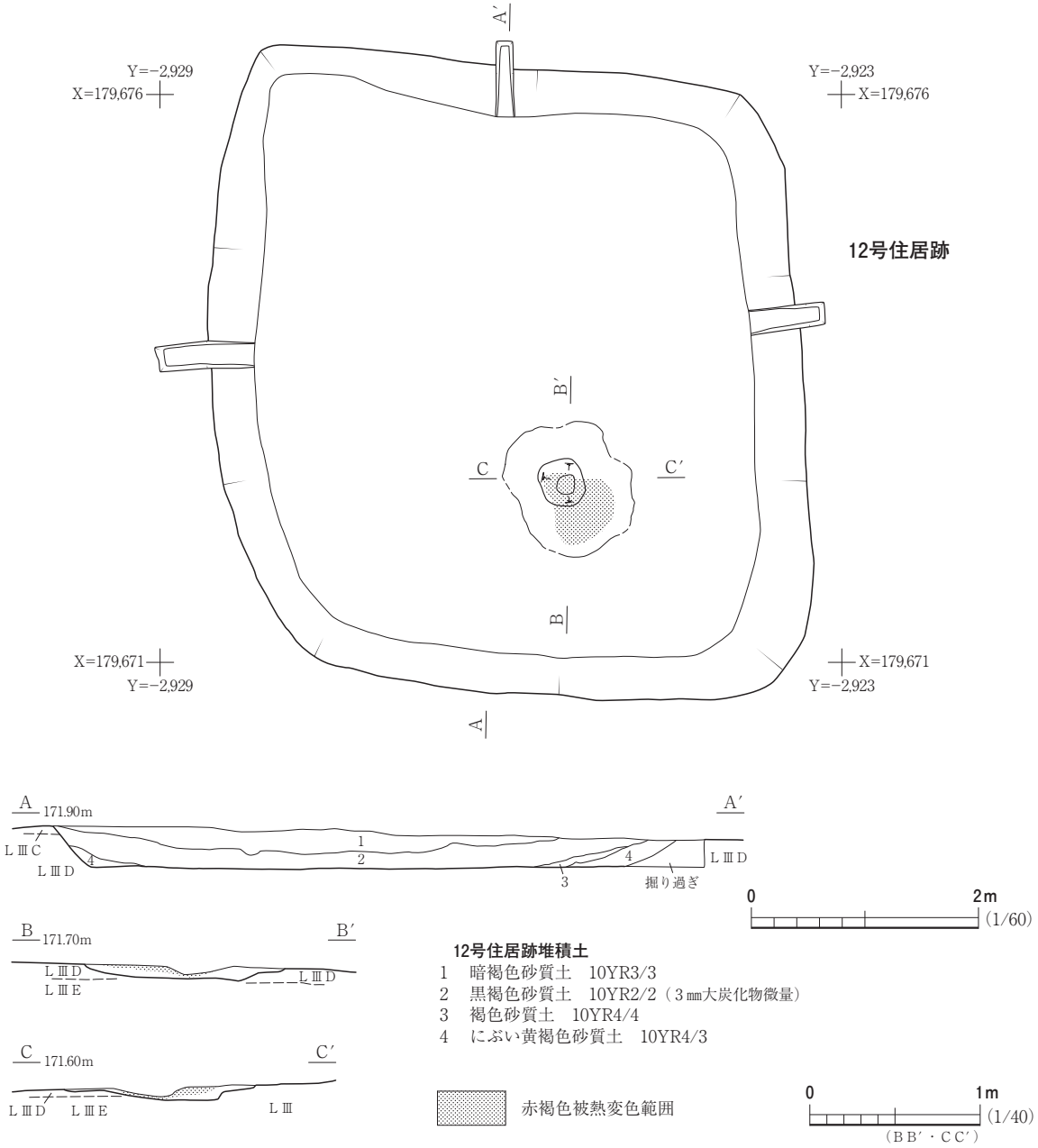


図74　12号住居跡（竪穴状遺構）

はＳＤ09がある。遺構内堆積土は４層に分けた。ℓ３内には微量の炭化物を含む。ℓ４は壁際の床面上に堆積する黄褐色系の砂質土で，壁崩落土の可能性もある。ℓ１～４の各層はレンズ状に堆積しており，自然に埋没した可能性も考えられる。

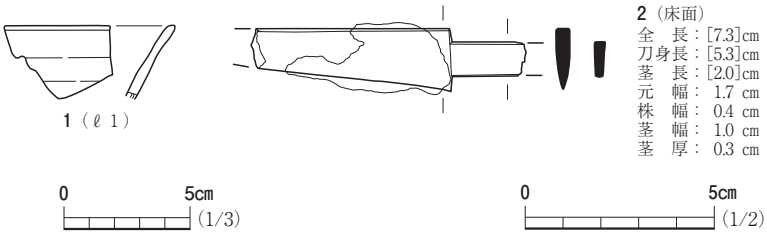


図75　12号住居跡出土遺物

平面形は隅丸方形に近い。南北の軸線方向はＮ３°Ｗで，立地する斜面とほぼ平行している。規模は，東西長5.20ｍ，南北長5.50ｍである。壁は約45°の角度で立ち上がる。検出面からの深さは，最深部の北壁中央部で40㎝を測る。床面はＬⅢＤ面を直接利用しており，ほぼ水平に造られている。

床面の中心から南東側約1.5ｍの地点で焼土面を確認した。焼土面の下部には楕円状に広がる起伏があり，起伏の埋没後に焼土面が形成されたようである。起伏内の堆積土は住居跡内堆積土のℓ２に類似していた。焼土面の形状は不定形で，東西50㎝×南北55㎝を測る。

なお，ＳＩ12から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかった。

遺　　物（図75）

遺構内から土師器の杯類６点・甕類31点，刀子１点が出土した。１はロクロ土師器の小片で，杯の口縁部破片であるが，磨耗が著しく内面の調整は不明である。２は床面から出土した刀子であるが，遺存状態が悪く切先と茎の大部分を失っている。

ま と め

ＳＩ12は，調査Ⅱ区において竪穴状の掘形をもつ遺構のなかでは最も規模が大きい遺構である。床面の中心からやや南東部の地点で焼土面を確認したが，堆積土の状況等から埋没過程で火が焚かれた可能性がある。ＳＩ12からカマドと考えられるような痕跡は確認できなかった。また上屋を推測させるような柱穴等も認められなかった。遺構の掘形は竪穴住居跡に類似するが，出土遺物等も少なく，同遺構の性格については不明である。遺構の時期については，出土した遺物の年代から平安時代前期末～中期初め頃と考えられる。

（香　川）

13号住居跡　ＳＩ13

遺　　構（図76，写真43）

Ｈ11グリッドに位置する遺構である。検出面はＬⅢＣ上面である。南北に延びる狭長な堤状の頂部付近を掘り込んで構築しており，その標高は約171.5ｍである。重複遺構はない。北東側約7.5ｍの地点にはＳＩ04がある。また，南西側約6.5ｍの地点にはＳＫ32がある。

遺構内堆積土は２層に分けた。ℓ１はレンズ状に堆積している。ℓ２は西部付近の床面を覆うように堆積している。ℓ１の状況から遺構の重複等が考えられたが，堆積土の観察から他遺構や人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。

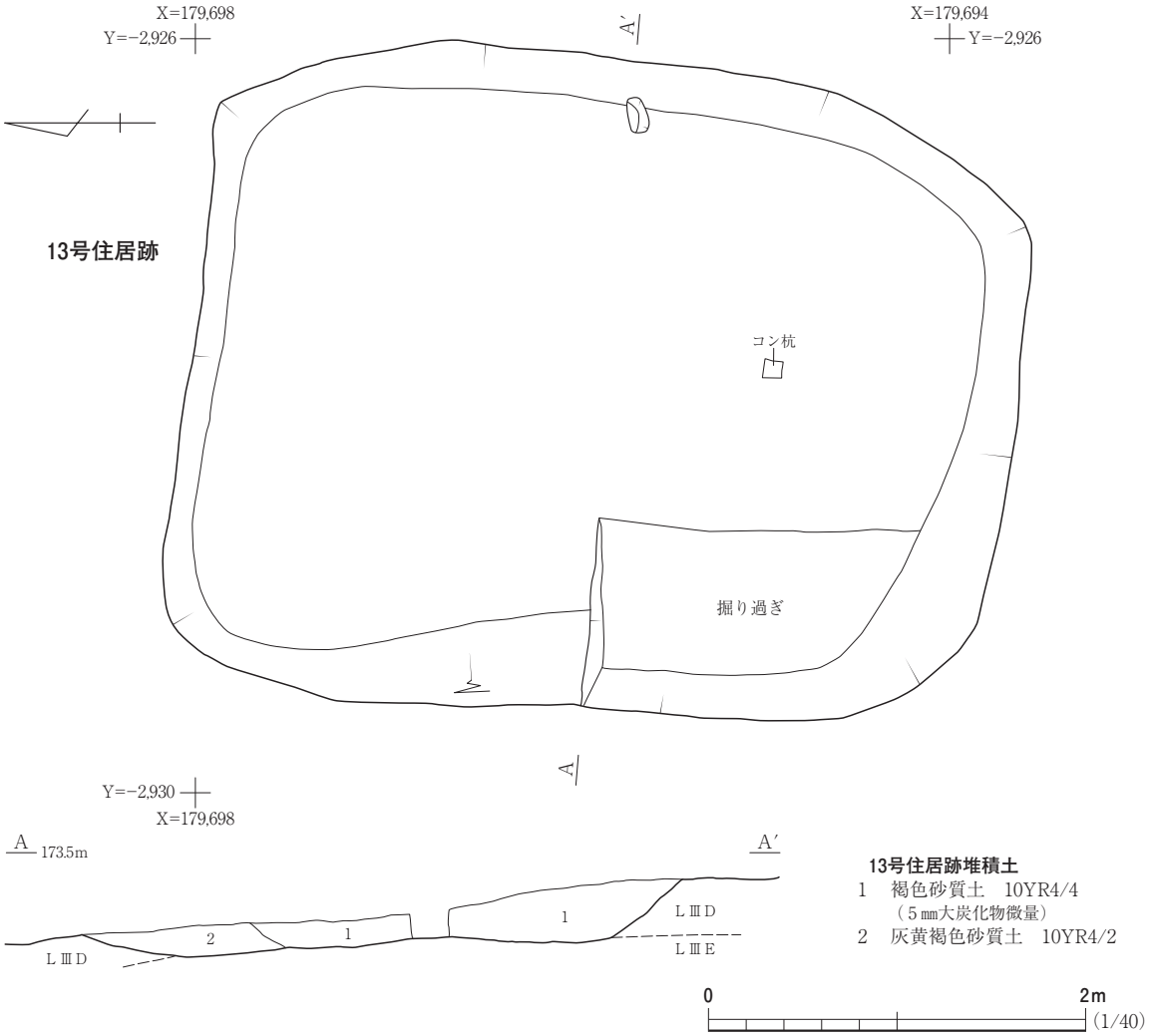


図76　13号住居跡（竪穴状遺構）

平面形は隅丸長方形である。長軸線の方向はＮ２°Ｅで，真北に近い。平面形の規模は，東西350㎝，南北438㎝である。壁の形状は，東壁は約45°の角度で立ち上がるが，西壁はⅢ状となっている。壁の遺存高は，北壁中央部で30㎝を測る。

床面は，貼床等の痕跡は確認できず，ⅢＥ面を直接利用している。床面はほぼ平坦に造られているが，東から西方向へわずかに傾斜している。

ＳＩ13から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかった。

遺　　物（図77・78，写真56）

遺構内から土師器の杯類115点・甕類224点，須恵器片10点が出土した。遺物の大半が住居跡東半部のℓ１上位で出土している。図77－１～８は土師器杯で，いずれの底部も回転糸切痕が認められる。１は比較的大型の杯で，底部外周～体部下端には回転ヘラケズリ調整が施されている。体部下端の回転ヘラケズリ調整は２・４・６・８でも認められる。４の器形はやや歪んでいる。３・５・７の内面の調整痕は，摩耗のため観察することができなかった。

図77－９～12は土師器の長胴甕である。９は比較的小型の底部破片で，底部外面に回転糸切痕

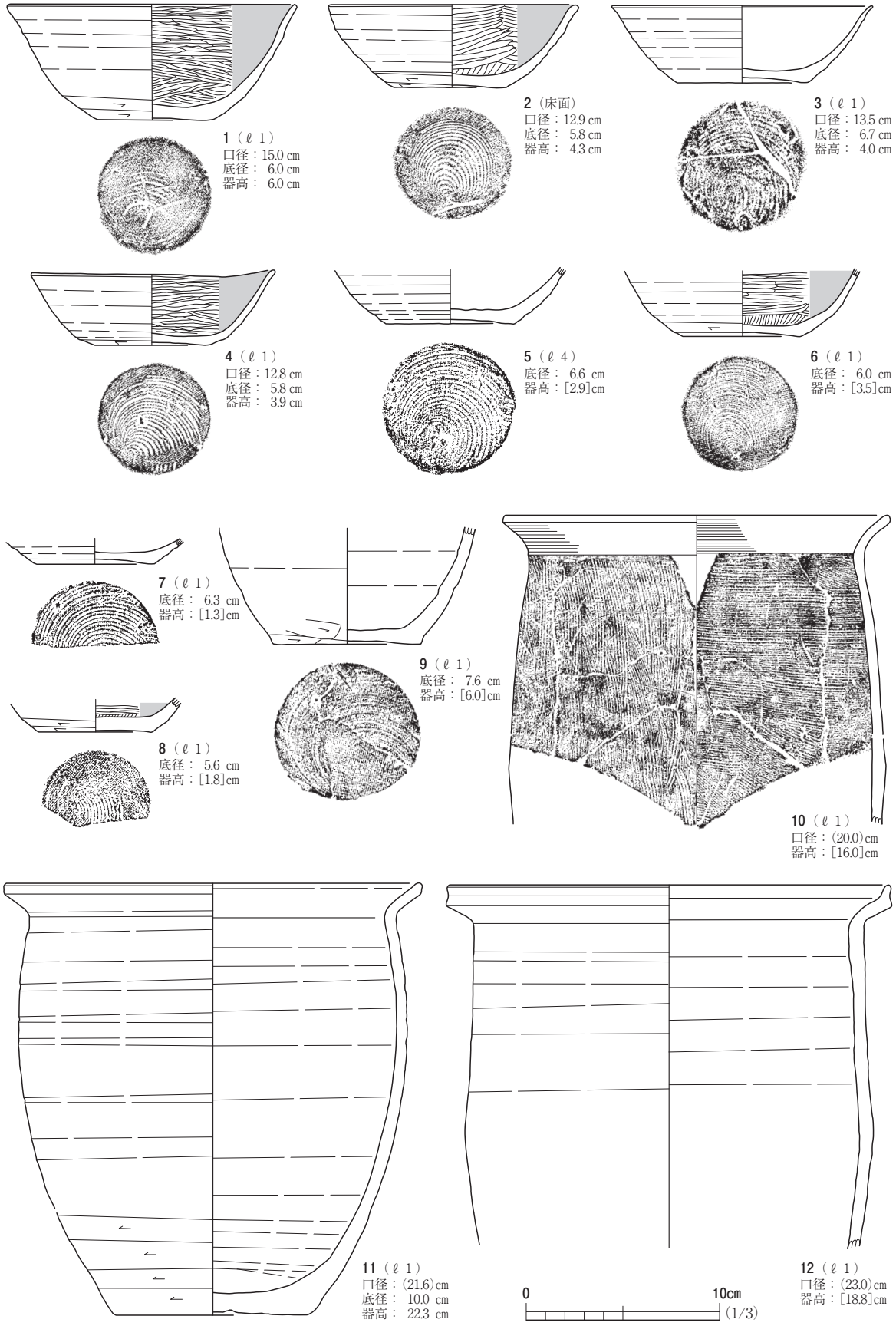


図77　13号住居跡出土遺物（１）

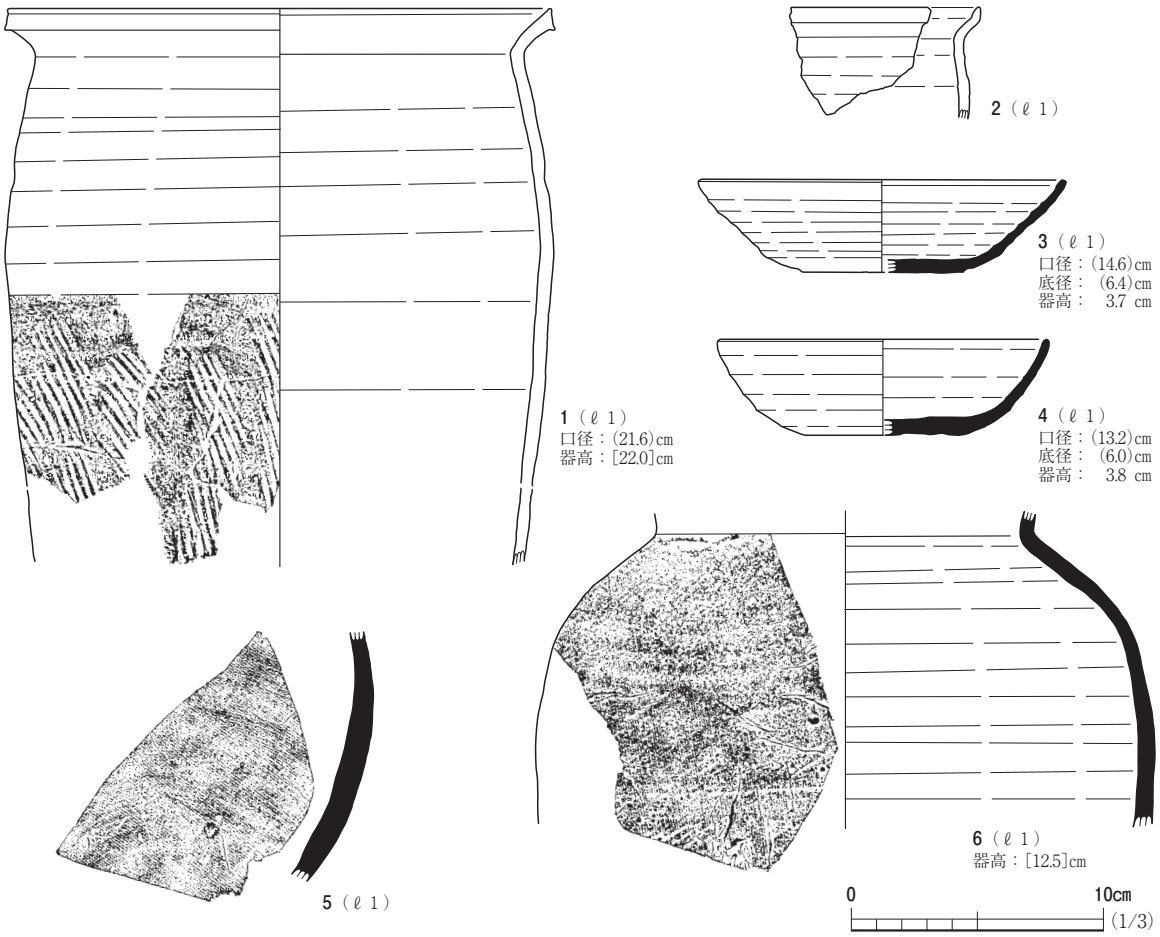


図78　13号住居跡出土遺物（2）

が観察される。10の器厚は比較的薄く，胴部外面は縦位のハケメ，内面には横位のハケメ調整が施されている。11は全体の45%が遺存するもので，口縁部は頸部から直線的に開いている。12は，口唇部が上方に突き出ている。図78－1・2も土師器の長胴甕の破片資料である。1の胴部下半は，タタキによる調整後にケズリ調整が施されている。2は小型の甕で，その口唇部は上方に摘み上げられている。

図78－3～6は須恵器である。3・4は杯で，3の体部は直線的に開くが，4の体部は内湾気味に立ち上がっている。3・4の底部外面には，いずれも回転ヘラ切痕が認められる。5・6は甕の破片資料である。6の胴部上半は比較的丸みが強い器形である。

ま と め

本遺構は，検出段階で遺物が比較的多く出土し，竪穴住居跡の可能性を考えて調査を行った遺構である。しかし，本遺構から住居跡の根拠となるようなカマドや柱穴等の施設を確認することができなかった。また，堆積土中の遺物量に対して床面出土の遺物は非常に少なく，本遺構については不明な点が多い。遺構の時期については，出土した遺物の年代から平安時代前期後半と考えられる。

（香　川）

第４節　須 恵 器 窯 跡

調査Ⅱ区の北東端部において，１～３号須恵器窯跡（ＳＲ01～03）を検出した。ＳＲ01～03が立地する丘陵斜面は地盤が脆弱で，雨水等による浸食が繰り返された地形であると考えられる。また，ＳＲ01～03の周辺は後世の撹乱も受けており，各窯跡の遺存状態は非常に悪い。

検出当初は，ＳＲ01・02を分離せず同一遺構として取り扱った。しかし，ＳＤ04の重複や遺存状

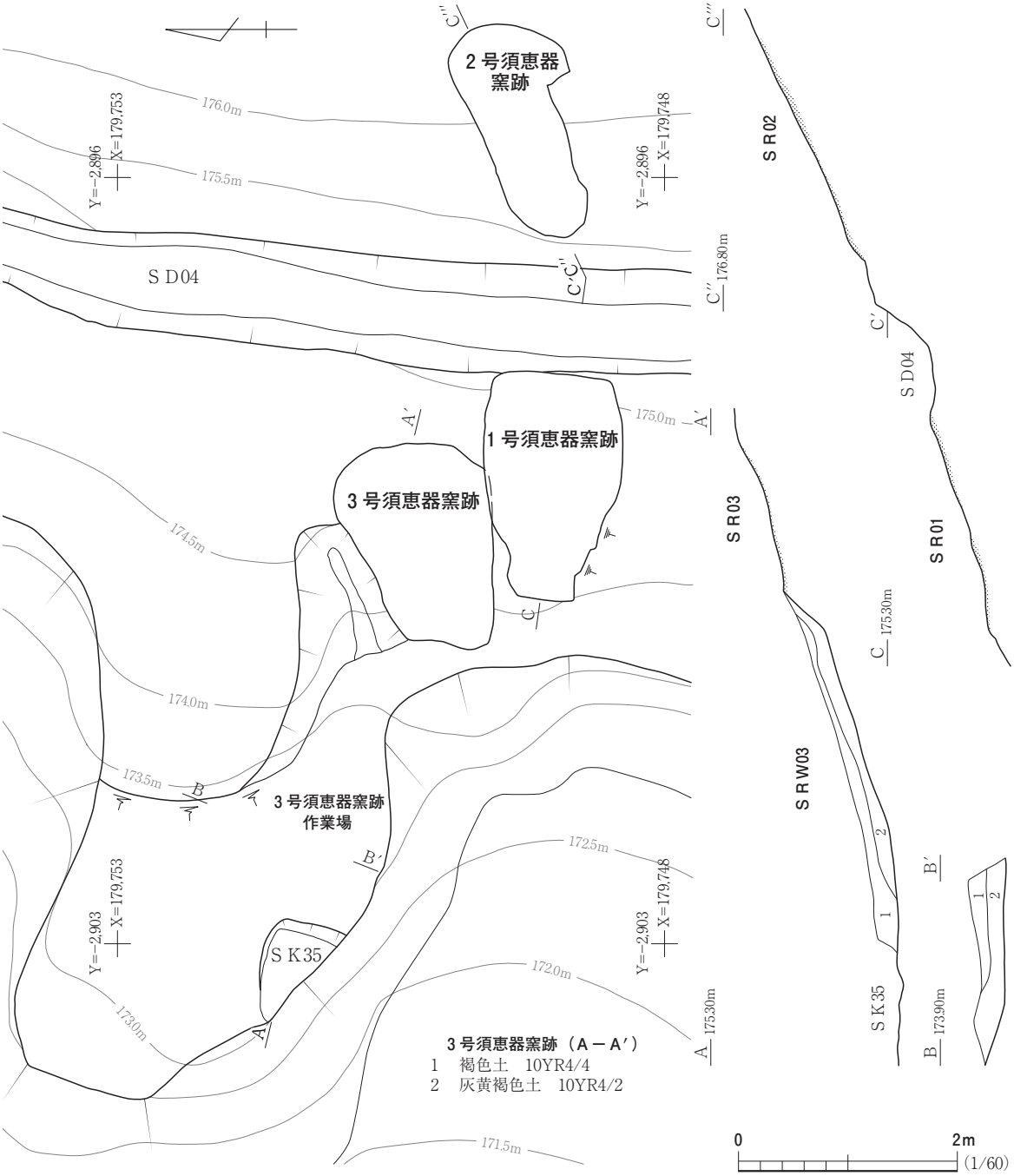


図79　１～３号須恵器窯跡

態の悪さから一連性を把握することができなかったため，西側をＳＲ01，東側をＳＲ02とした。

ＳＲ03は，ＳＲ01とほぼ同規模の燃焼面が広がる遺構で，その重複状況からＳＲ03の方が古いと判断した。ＳＲ03の北西側に灰原状の堆積範囲を確認したが，その下面は整地されたような平坦面になっていたためＳＲW03とした。

１号須恵器窯跡　ＳＲ01

遺　　構（図79・80，写真46・48）

Ｋ６グリッドに位置する窯跡である。検出面はＬⅣ上面である。立地は西向き丘陵斜面の裾部で，その標高は175.0ｍ前後である。しかし，周辺は浸食作用や重機等の撹乱によって旧地形を失っており，立地斜面は切り通し状に削平されている。検出状況は，撹乱土を除去したところ，羽子板状の落ち込みと須恵器片の散布が認められた。ＳＲ03と重複するが，ＳＲ01の方が新しい。またＳＤ04とも重複するが，本遺構の方が古い。

遺構内の堆積土をℓ１～６とした。各層はいずれも炭化物粒を少量含む。ℓ２～６は焼土粒・塊を含み，特に西部に堆積するℓ２・６は焼土塊を多量に含んでいた。ℓ１～６から窯壁と考えられるような塊は確認できなかった。ℓ７はＳＲ03の廃業後に整地されたと考えられる層で，その上層は赤褐色に変色しており，ＳＲ01の操業時の熱を受けたものと推測される。ℓ７はＳＲ03のℓ１と同一層である。ℓ１～６から，人為的に埋めたような痕跡を確認することはできなかった。また，各堆積土の観察から，ＳＲ01に伴う下部構造は確認できなかった。ℓ８～11は，遺構の西側の比較的急な斜面に堆積していた層である。ℓ８の上は重機等による撹乱を受けていた。ℓ８・10は黄褐色系の砂質土で，東側の丘陵から流れ込んできたものと推測される。ℓ９・11は，焼土粒・炭化物粒を微量含む層である。ℓ９から遺物は出土しなかったが，ℓ11内から須恵器が出土している。ℓ11は灰原層の可能性もあるが，地形の状況からＳＲ01の浸食後にℓ８～11が堆積した可能性もある。

遺存形は，西側が窄まった羽子板状である。長軸方向の遺存長は2.06ｍである。最大幅は西端部から約1.7ｍの地点にあり，1.24ｍを測る。長軸方向はＥ３°Ｓである。西端部から東側へ約50㎝までの底面幅は55㎝前後とほぼ一定で，焚口に相当すると考えられる。焚口の壁は底面から直線的に立ち上がり，その遺存高は最大で20㎝を測る。焚口の底面・壁面は，明赤褐色(5YR5/6)に熱変している。焚口付近はわずかに傾斜しており，その角度は約５°である。

焚口を過ぎると底面の色調が変わり，最大幅を測る1.7ｍ付近までにぶい赤褐色(2.5YR4/4)に熱変していた。また底面には炭化物が少量付着しており，同部は燃焼部に相当する可能性がある。燃焼部の底断面は皿状である。燃焼部の西半部はℓ７を，東半部は直接地山を利用している。燃焼部は直線的に立ち上がり，その角度は約20°である。

遺構の東端部では底面の色が暗赤褐色(2.5YR3/2)に変色し，非常に硬く焼き締まっていた。同部については焼成部の可能性もあるが，ＳＤ04の重複から焼成部の詳細については不明である。また，

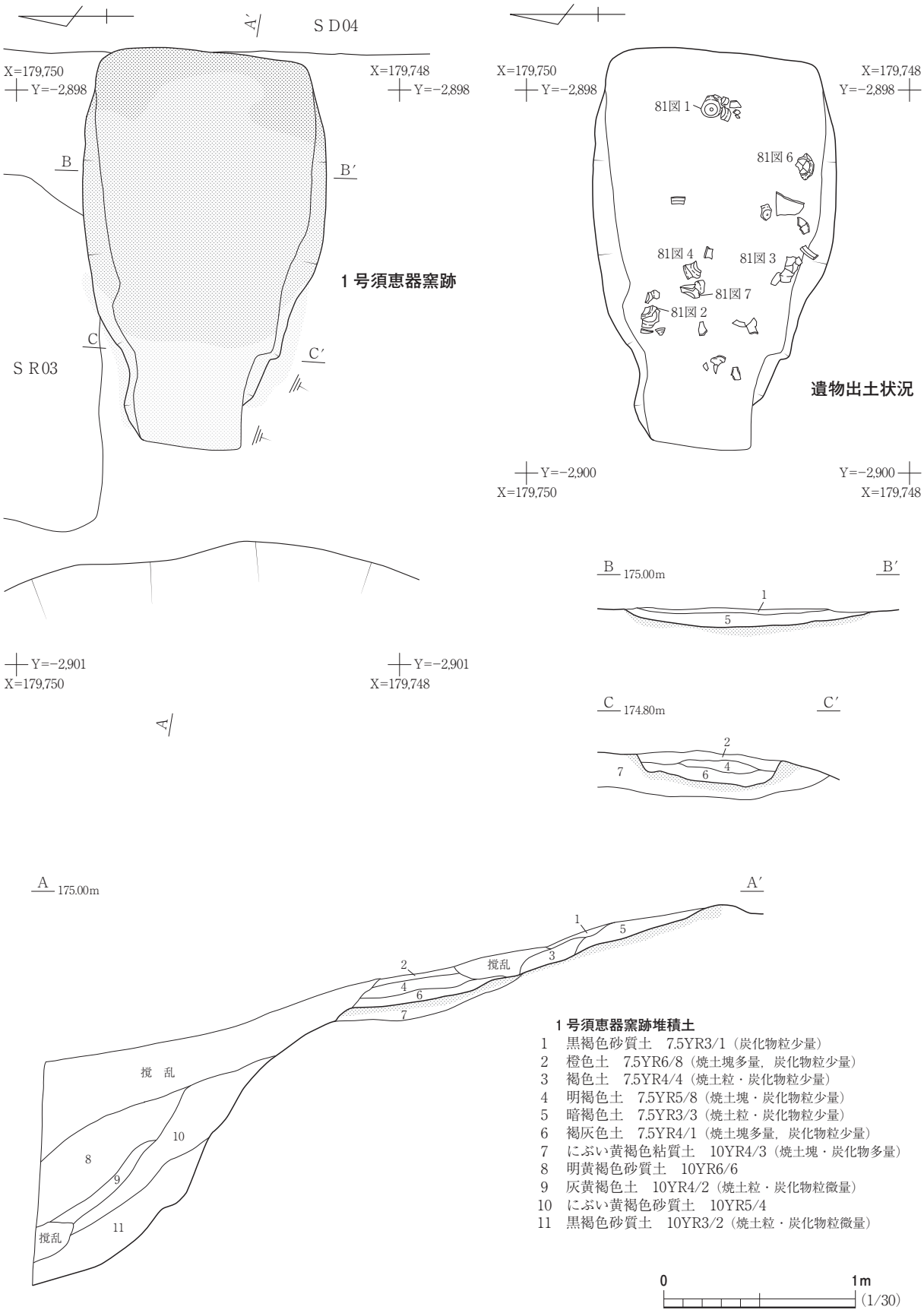

A′
ＳＤ04
X=179,750
Y=−2,898
X=179,748
Y=−2,898
B
B′
1号須恵器窯跡
C
C′
ＳＲ03
Y=−2,901
X=179,750
Y=−2,901
X=179,748
A
81図 1
81図 6
81図 4
81図 3
81図 7
81図 2
遺物出土状況
Y=−2,900
X=179,750
Y=−2,900
X=179,748
B 175.00m
B′
1
5
C 174.80m
C′
2
4
6
7
A 175.00m
A′
1
5
3
2
4
6
7
撹乱
撹　乱
8
9
10
11
撹乱
1号須恵器窯跡堆積土
1　黒褐色砂質土　7.5YR3/1（炭化物粒少量）
2　橙色土　7.5YR6/8（焼土塊多量，炭化物粒少量）
3　褐色土　7.5YR4/4（焼土粒・炭化物粒少量）
4　明褐色土　7.5YR5/8（焼土塊・炭化物粒少量）
5　暗褐色土　7.5YR3/3（焼土粒・炭化物粒少量）
6　褐灰色土　7.5YR4/1（焼土塊多量，炭化物粒少量）
7　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（焼土塊・炭化物多量）
8　明黄褐色砂質土　10YR6/6
9　灰黄褐色土　10YR4/2（焼土粒・炭化物粒微量）
10　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/4
11　黒褐色砂質土　10YR3/2（焼土粒・炭化物粒微量）
0
1m
(1/30)

図80　１号須恵器窯跡

焚口から西側についても，撹乱等によって削平を受けていたため，その状況は不明である。

遺　　物（図81～83，写真57・58）

遺構内から須恵器杯類670点・甕類36点，土師器片13点が出土した。出土量は，杯が全体の約93％を占める。杯の器形は，体部の断面形が曲線的なもの（図81－２など）と直線的なもの（図81－３など）に大きく分けられる。口縁部の形状は体部の形に連続するものが多く，図82－７・８のように口縁部で短く外反する器形は比較的少数である。遺存率が50％以上の杯の計測値は，口径12.6～14.3㎝（平均値13.4㎝）・底径5.8～7.8㎝（平均値6.8㎝）・器高2.7～3.8㎝（平均値3.3㎝）である。底径／口径比は，最大が図81－１の0.57，最小が図82－10の0.41である。

杯のロクロからの切り離しは，回転糸切り・回転ヘラ切り技法の２種類が認められる。回転糸切りのもの（図81－11・図82－１）は非常に少なく，切り離し痕が確認できた資料の大半が回転ヘラ切りのものである。図82－１の底部は無調整で，回転糸切り技法に特徴的な底部の反り上がりが顕著である。回転ヘラ切り資料には，図81－２・６などのように底部と体部の境が不明瞭なものもある。回転ヘラ切り痕には臍状の突起や螺旋状痕，また図81－８・図82－５のように低い平高台状となった底部がある。しかし，図81－２・20・21など比較的丁寧なナデ調整等によって切り離し痕のほとんどが消されたような資料もある。

掲載した50点のうち，およそ還元色を呈するものは46％（図81－15など）で，他は焼き締まった赤黒～褐色が24％（図81－13など），土師器のような浅黄橙～淡黄色が30％（図81－14など）である。還元色は灰～灰白色で，黄みを帯びた色調のものが多い。

出土杯の中には，器面に所謂火だすき痕が認められた資料がある。図82－７は，赤灰色の器面と同色だが艶のある紐状の筋が口縁～底部外面を巡る。同図23は内外面で火だすき痕が認められ，灰白色の器面に黒色の筋が通る。また，図81－５・10・23，図82－２・10・11・13・16の口縁部は帯状に体部の色調と異なっており，所謂重焼きの痕跡が確認できる。

図81－１～４・６・７は燃焼部の底面から出土した資料であるが，２次的に熱を受けたらしくいずれも器面の劣化が著しい。特に７の外面には爆ぜたような小穴や剝落が認められる。また，燃焼部底面に接した側に蒸発したような白色の付着物が認められる。１は燃焼部の東部中央で底部外面を上に向けた状態で出土したもので，器面の色調は，内面が灰色，外面が部分的ににぶい橙色になっている。２は焚口に近い地点で出土したもので，器面の色調は内外面ともやや黄みを帯びた灰色である。２の底部外面にはミガキ調整状の筋が認められるが，ナデ等の調整後，比較的乾燥してから再度ナデ調整を施した痕跡の可能性がある。３の底部外面は調整が著しく，ロクロからの切り離し技法は不明である。３の体部は概ね灰色であるが，底部は内外面とも橙色である。

図81－12は口縁の一部が大きく歪んだ資料で，２次的に強い熱を受けたらしく器面の劣化が著しい。12の外面は体部が還元色，底部が酸化色を呈し，底部に火だすき痕と思われる灰色の筋が観察される。内面は体部が酸化色，底部が還元色を呈し，外面の色調と反転している。図82－４も歪みによって器形が大きく崩れた資料である。図81－19は焼成前に口縁部の一部が破損したもので，

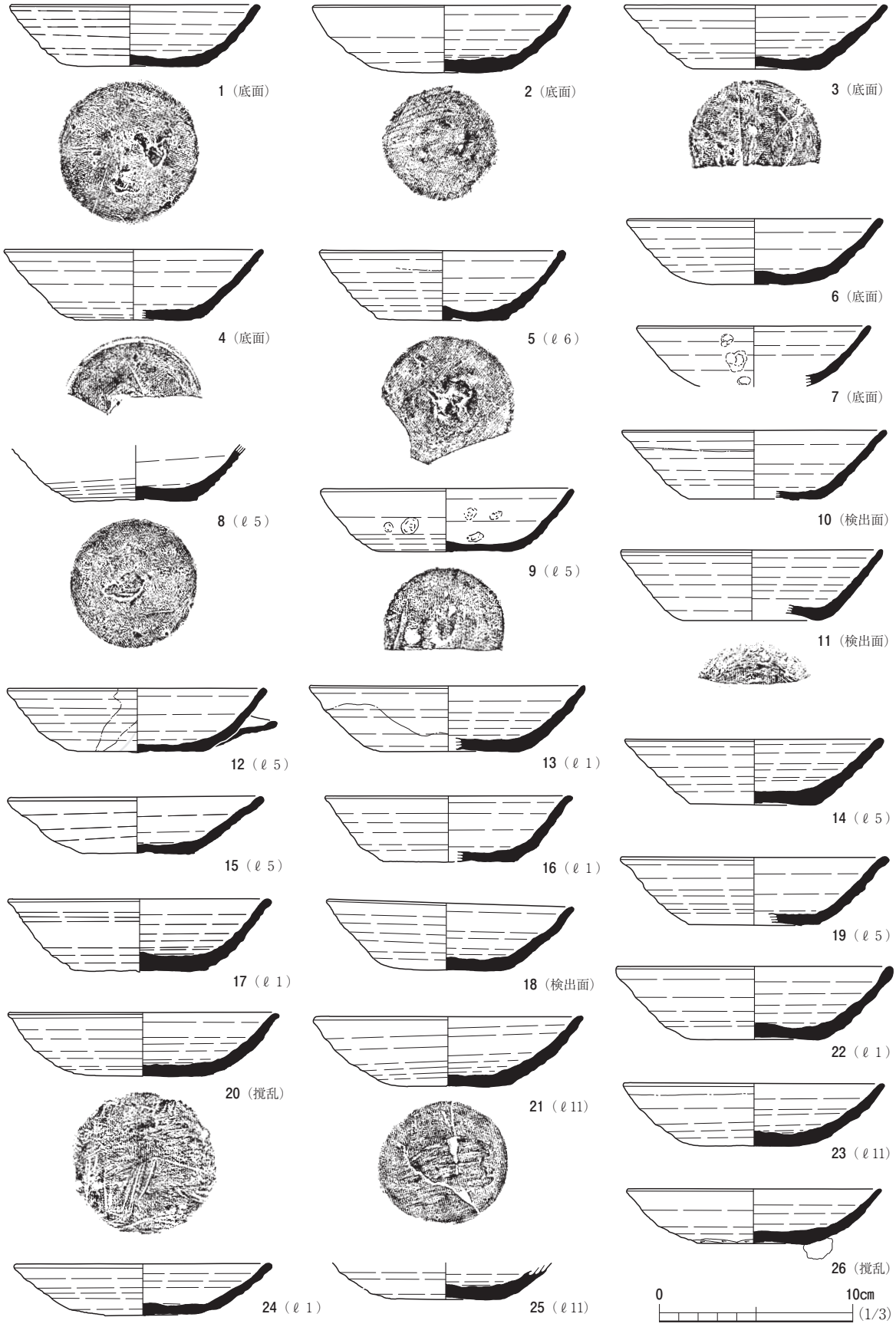


図81　１号須恵器窯跡出土遺物（１）

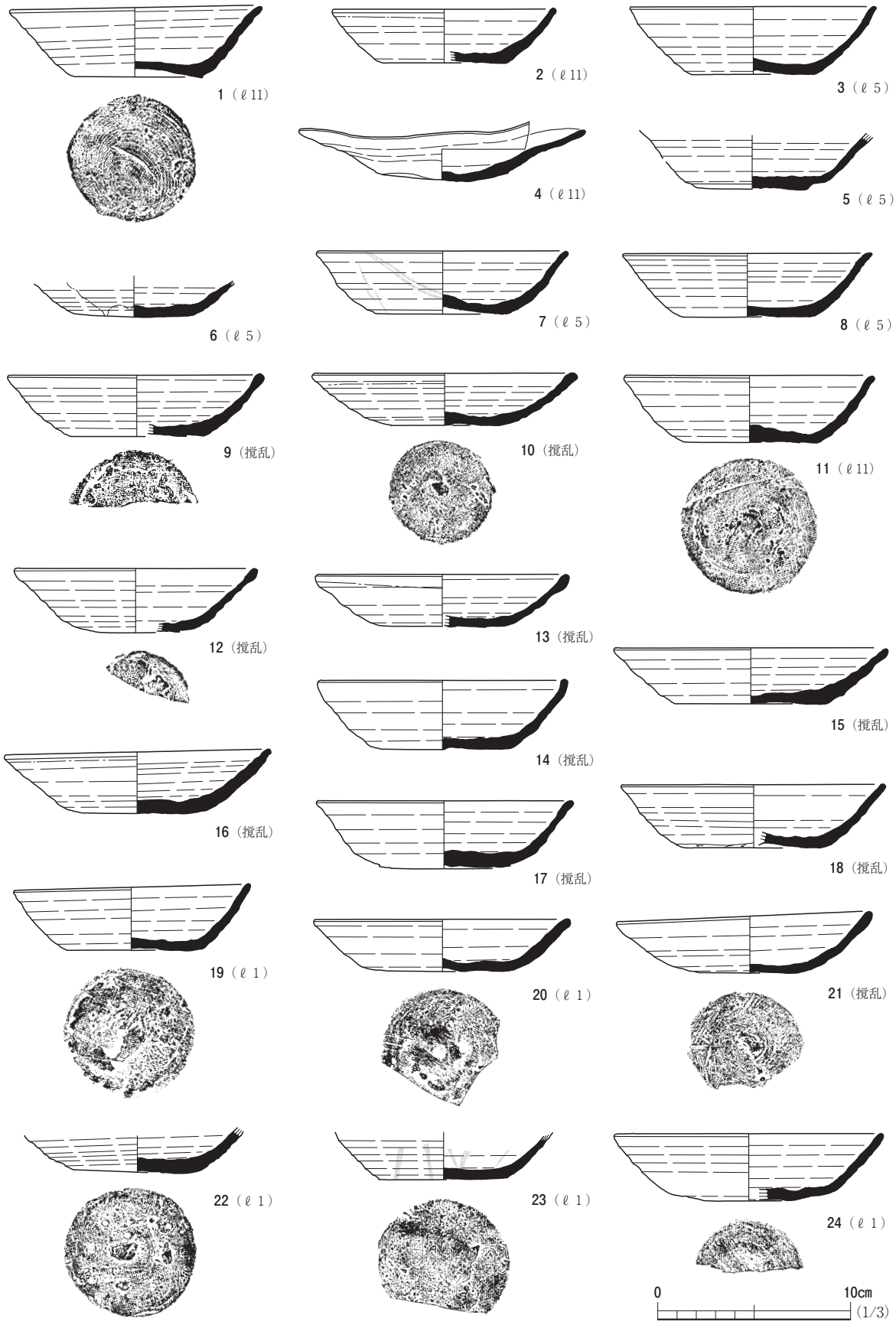


図82　1号須恵器窯跡出土遺物（2）

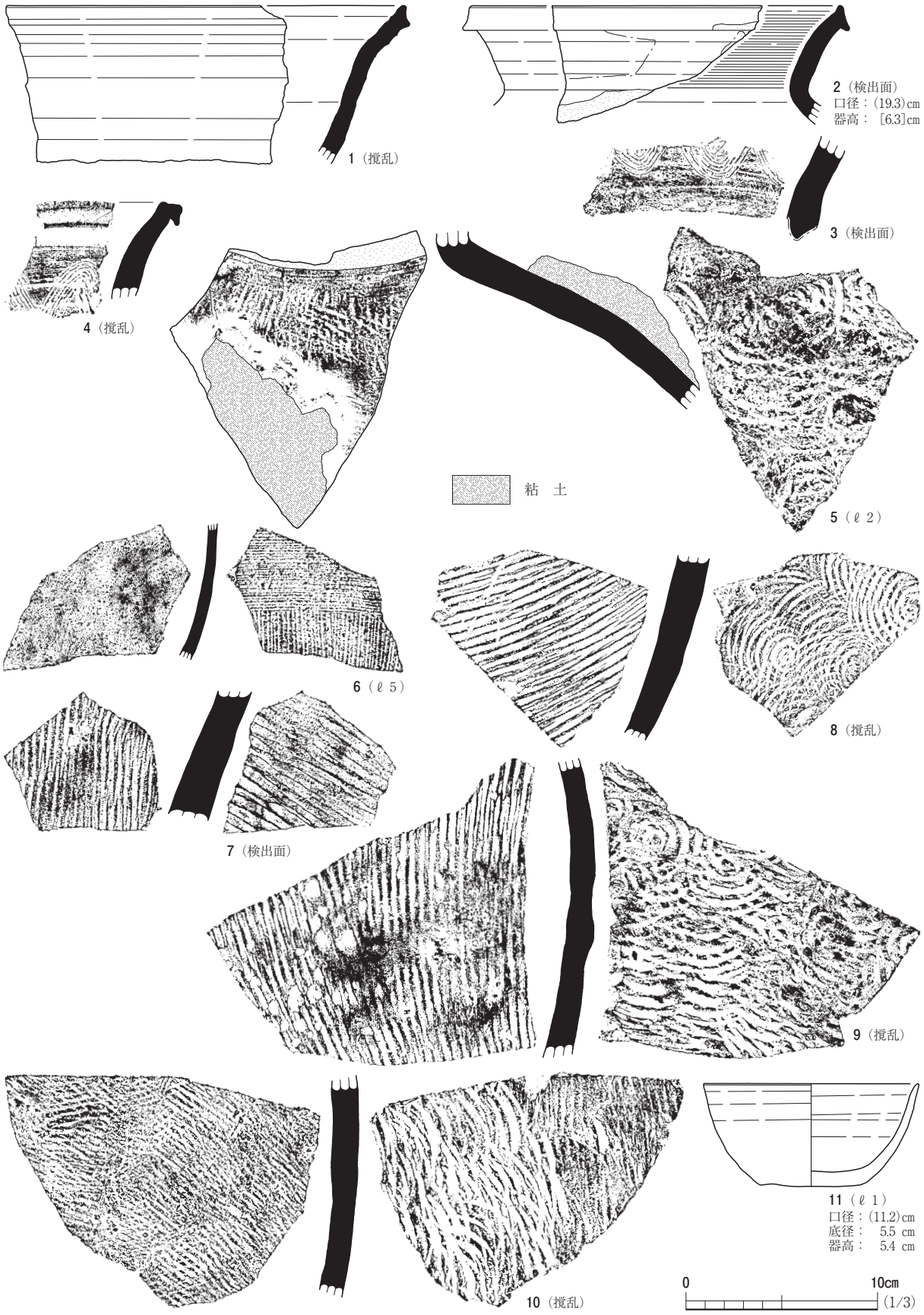


図83　１号須恵器窯跡出土遺物（３）

体部外面には砂が付着している。図81－26の体部下端には砂塊が付着している。

図83－１～10は須恵器甕の資料であるが，ℓ７・10上の撹乱土や検出面から出土したものが多い。１は橙色の酸化色を呈するが，形状から須恵器の口縁部と推測した。２は比較的小型の資料で，外面には自然釉の付着，内面にはカキメが認められる。３・４は櫛描波状文が施されている。５は胴部上位の破片で，外面にスサ入りの粘土塊が付着している。２次的に強く熱を受けたらしく，器面の一部が劣化している。６は底面に近いℓ５から出土した胴部破片で，内面に横・縦のナデ調整が施されている。７～10は内外面にタタキ・当て具痕が認められる胴部破片である。

図83－11はℓ１から出土した土師器の小型椀である。底部の切り離しは回転糸切りによる。摩

表８　１号須恵器窯跡出土遺物観察表

（　）：推定値，［　］：残存値，単位：cm

図	No.	場所	層位	器種	口径	底径	器高	分類	色調（外面）	底部切離し	調整	備考
81	1	SR01	底面	杯	(12.9)	7.4	3.2	B1	赤褐～褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	2	SR01	底面	杯	(13.4)	7.0	3.5	B2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	
81	3	SR01	底面	杯	(13.6)	6.7	3.3	C1	体部灰色,底部橙色	不明	ロクロナデ，底部ナデ	
81	4	SR01	底面	杯	(13.4)	(6.0)	3.6	D1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	5	SR01	ℓ６	杯	(12.7)	6.8	3.6	A1	灰色～浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
81	6	SR01	底面	杯	(13.2)	(7.4)	3.4	B2	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	7	SR01	底面	杯	(12.0)	－	[3.1]	B2	灰色	不明	ロクロナデ	２次的受熱顕著
81	8	SR01	ℓ５	杯	－	6.6	[2.7]	－	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	9	SR01	ℓ５	杯	(13.1)	(6.8)	3.2	B1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	２次的受熱顕著
81	10	SR01	検出面	杯	(13.6)	(7.0)	3.6	B1	灰色	回転ヘラ切	ロクナナデ	重焼痕
81	11	SR01	検出面	杯	(13.4)	(7.0)	3.7	A1	黒褐～灰色	回転糸切	ロクロナデ，底部無調整	
81	12	SR01	ℓ５	杯	13.3	6.8	3.3	B2	灰～浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ	歪み顕著，外面火襷
81	13	SR01	ℓ１	杯	(14.2)	(7.4)	3.4	B1	暗赤褐色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	自然釉
81	14	SR01	ℓ５	杯	(13.4)	(6.6)	3.4	C1	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	15	SR01	ℓ５	杯	13.2	6.0	3.0	C1	灰～暗灰黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	16	SR01	ℓ１	杯	(12.8)	(7.0)	3.4	A2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	17	SR01	ℓ１	杯	(13.6)	6.8	3.7	A2	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	
81	18	SR01	検出面	杯	(12.8)	7.0	3.6	A1	黄灰～浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	19	SR01	ℓ５	杯	(13.8)	(6.8)	3.5	C1	灰～浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	２次的受熱顕著
81	20	SR01	撹乱	杯	(14.0)	7.4	3.3	B2	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	21	SR01	ℓ11	杯	14.0	6.6	3.6	C2	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	22	SR01	ℓ１	杯	(14.3)	(6.6)	3.8	D1	灰褐～黄橙色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ・ケズリ	
81	23	SR01	ℓ11	杯	13.5	6.3	3.3	C2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
81	24	SR01	ℓ１	杯	(13.3)	(6.0)	2.7	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	自然釉
81	25	SR01	ℓ11	杯	－	6.0	[1.9]	2	暗赤褐色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
81	26	SR01	撹乱	杯	(13.2)	(5.8)	2.9	C2	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	底部，砂塊付着
82	1	SR01	ℓ11	杯	13.1	6.6	3.7	D1	灰～暗赤灰	回転糸切	ロクロナデ，底部無調整	２次的受　熱顕著
82	2	SR01	ℓ11	杯	11.6	6.6	2.8	B2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
82	3	SR01	ℓ５	杯	(12.6)	6.6	3.5	A2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
82	4	SR01	ℓ11	杯	－	(6.6)	2.7	－	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	歪み顕著，砂付着
82	5	SR01	ℓ５	杯	－	5.6	[3.0]	1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
82	6	SR01	ℓ５	杯	－	6.2	[1.8]	－	灰～褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	２次的受熱顕著
82	7	SR01	ℓ５	杯	(13.0)	(7.0)	3.3	B2	赤灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	外面火襷
82	8	SR01	ℓ５	杯	(13.0)	7.0	3.3	B2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
82	9	SR01	撹乱	杯	(13.3)	(6.8)	3.1	B2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
82	10	SR01	撹乱	杯	(13.7)	5.6	2.7	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
82	11	SR01	ℓ11	杯	(13.0)	7.0	3.5	A2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
82	12	SR01	撹乱	杯	(12.6)	(5.8)	3.3	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
82	13	SR01	撹乱	杯	(13.2)	(6.6)	2.7	B2	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	重焼痕
82	14	SR01	撹乱	杯	(13.0)	(7.0)	3.6	A2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	２次的受熱顕著
82	15	SR01	撹乱	杯	(14.2)	7.8	2.9	B1	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	２次的受熱顕著
82	16	SR01	撹乱	杯	(13.8)	(7.5)	3.4	B2	灰黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
82	17	SR01	撹乱	杯	(13.3)	(6.8)	3.5	B2	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	２次的受熱顕著
82	18	SR01	撹乱	杯	(13.8)	(7.0)	3.3	B1	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
82	19	SR01	ℓ１	杯	(12.2)	6.5	3.6	D1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	自然釉，砂付着
82	20	SR01	ℓ１	杯	(13.4)	7.0	2.7	B1	黒～灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
82	21	SR01	撹乱	杯	13.2	5.8	3.2	C2	赤黒～黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ・ケズリ	
82	22	SR01	ℓ１	杯	－	6.7	[2.1]	－	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	内面火襷
82	23	SR01	ℓ１	杯	－	6.7	[2.5]	－	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	内外面火襷
82	24	SR01	ℓ１	杯	(14.0)	4.4	3.5	2	暗赤褐色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	２次的受熱顕著

滅が著しく内面の調整痕を明瞭に観察することができなかった。

ま と め

ＳＲ01は，立地斜面・遺存部等の状況から須恵器窯跡の焚口～燃焼部が確認されたものと推測される。燃焼部に対して焚口幅は1/2程度窄まる。燃焼部は赤褐色に熱変しており，底面に炭化物が吸着していた。燃焼部の底面から２次的に強く熱を受けたような土器が出土しており，２回以上の操業が行われたと思われるが，燃焼部の堆積土から操業回数等を確認することはできなかった。焚口の西側は浸食を受けた影響もあり，灰原についても明瞭に確認することができなかった。

ＳＲ01は遺存状態が悪く窯構造の全容については不明であるが，ＳＤ04付近で斜度が変わり，続くＳＲ02が本窯跡の焼成部であった可能性もある。

出土土器は杯が大半である。杯の色調は浅黄～淡黄色の資料も多いが，意図的なものか，それともＳＲ01の構造的な要因によるものか明らかではない。大型甕の破片も出土しているが，焼台として利用された可能性も考えられるだろう。

遺構の時期については，出土土器の特徴などから平安時代前期後半と考えられる。　（香　川）

２号須恵器窯跡　ＳＲ02

遺　　構（図79・84，写真47・49）

Ｋ６グリッドに位置する窯跡である。検出面はＬⅣ上面である。立地は比較的急な斜面で，その

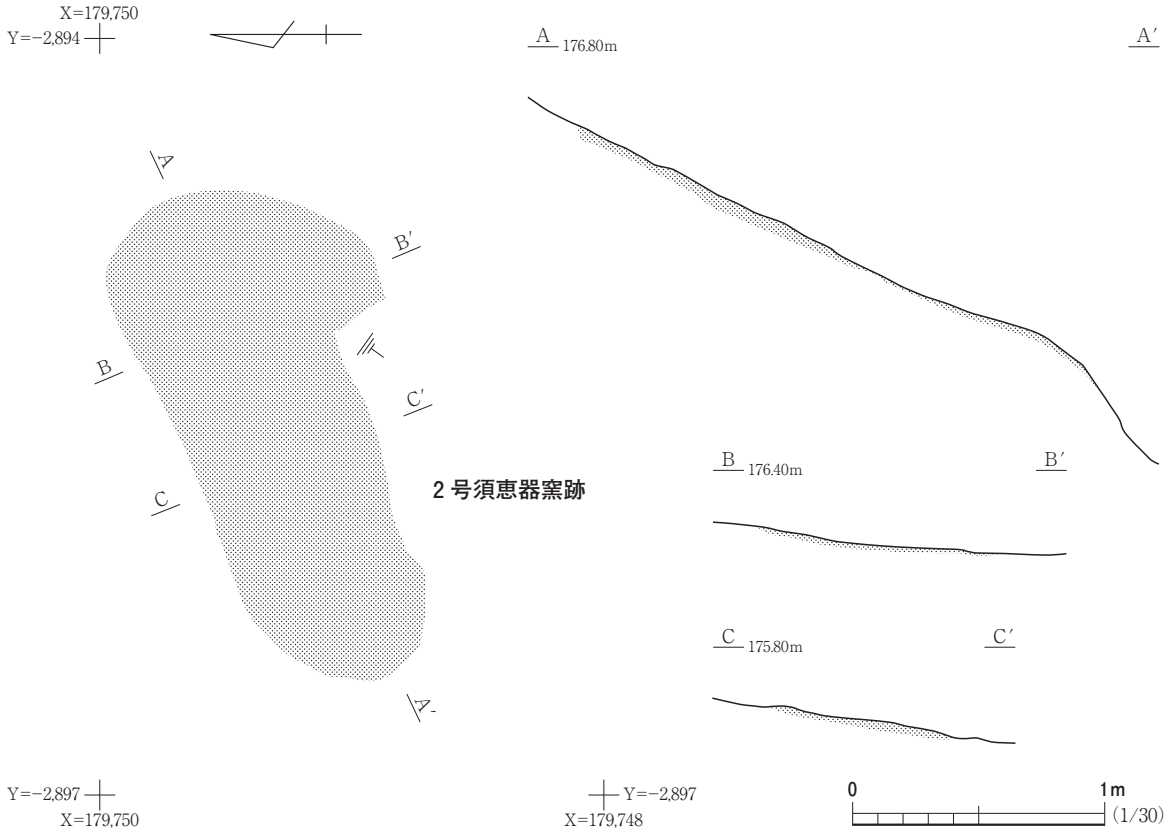


図84　２号須恵器窯跡

標高は176.0ｍ前後である。検出当初，本遺構はＳＲ01に連続するものとしていたが，確実ではないため本遺構をＳＲ02として単独で取り扱った。他に重複遺構はない。

ＳＲ02の遺存状態は非常に悪く，底面～上部構造を失っている。かろうじて楕円状に広がる赤褐色の変色面から遺構の存在がわかった。赤褐色の変色面は東西に長く，その規模は東西2.05ｍ，南北が最大で1.03ｍを測る。遺構が立地する斜面の傾斜は約25°である。本遺構に関連するような遺物は確認できなかった。

ま と め

本遺構は底面を含むすべての構造を消失している。しかし，赤褐色の熱変範囲から，須恵器窯跡に関連する施設が存在した可能性を推測させる。検出当初はＳＲ01との関連性も考えられたが，遺存状態の悪さから，ＳＲ02の全容は不明である。遺構の時期については周辺遺構との関連性から，平安時代前期後半頃と考えられる。（香　川）

３号須恵器窯跡　ＳＲ03・ＳＲＷ03

遺　　構（図79・85，写真46・49）

Ｊ・Ｋ５・６グリッドに位置する窯跡である。検出面はＬⅣ上面である。ＳＲ01の底面の断ち割りを行ったところ，下層から焼土面を発見しＳＲ03とした。ＳＲ01・03の新旧関係は，本遺構の方が古い。東側約70㎝の地点にはＳＤ04がある。

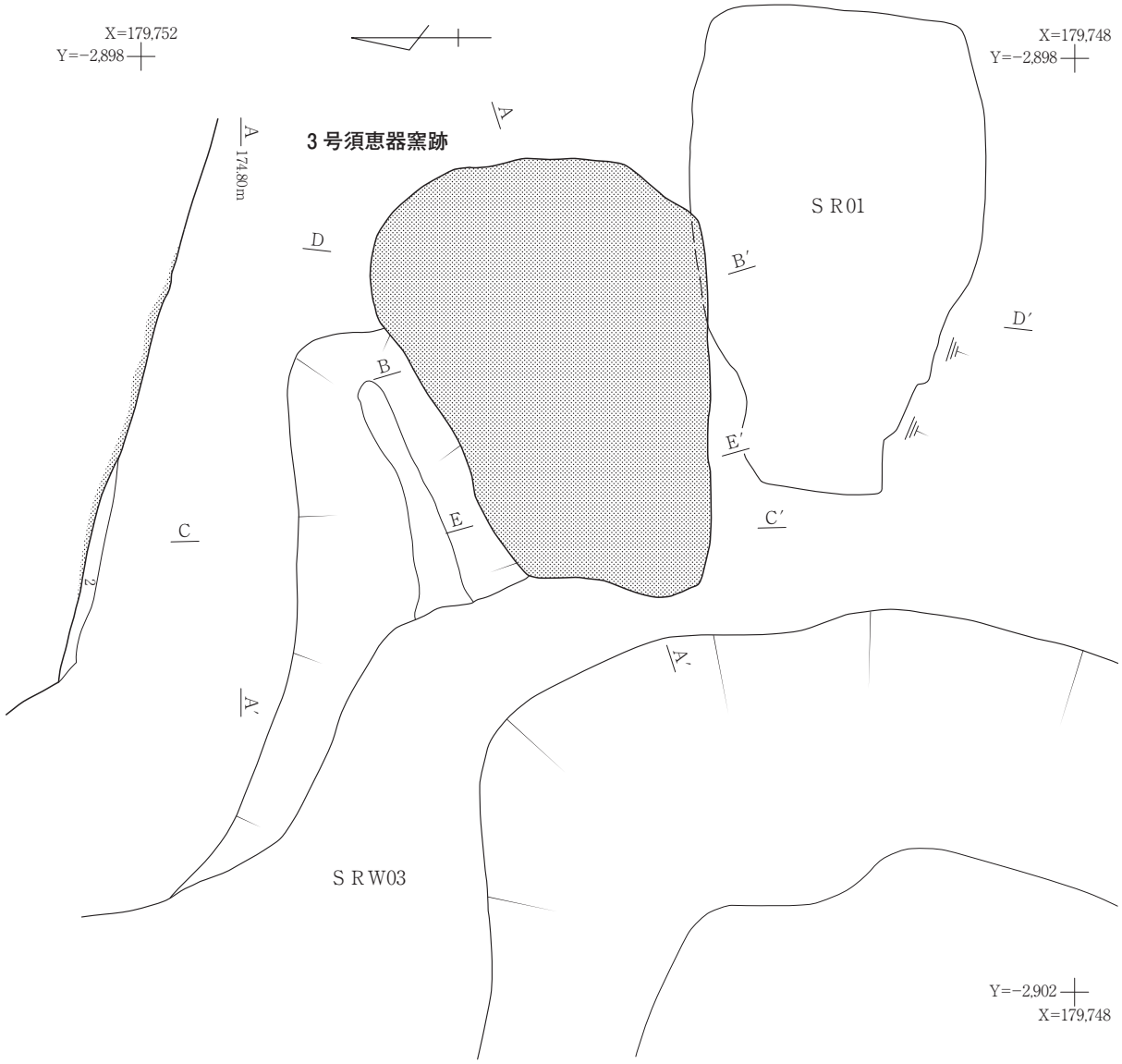
ＳＲ03の南西～西側は，浸食・撹乱により旧地形を失っている。北西側は浸食を免れており，灰原状の堆積物で覆われていた。同堆積物の下面は整地されたような平坦面になっていたため，作業場的な可能性から同部をＳＲＷ03とした。ＳＲＷ03・ＳＫ35は重複しており，その新旧関係はＳＫ35の方が新しい。

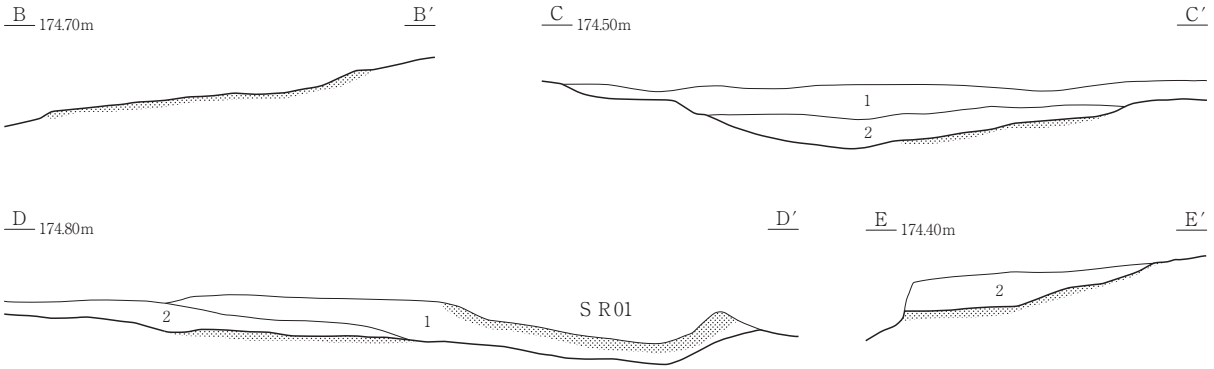
ＳＲ03内の堆積土は２層に分けた。ℓ１・２は，いずれも多量の焼土塊・炭化物・土器を混入する層である。また，ℓ２内には青灰色に硬化したスサ入りの窯壁塊が少量含まれていた。しかし，ℓ１では窯壁の混入がほとんど認められなかった。ℓ１・２は，混入物の状況から遺構破棄後に形成された整地層の可能性がある。

本遺構とした焼土面の平面形は，最小幅の西端部から東に向かって直線的に開く台形状である。ＳＲ03の北西部は削平されており，堆積土の状況から廃業時に破壊されたものと考えられる。焼土面の規模は，長軸長が1.95ｍである。最小幅は西端部にあり，0.73ｍを測る。最大幅は東部にあり，1.45ｍを測る。長軸方向はＥ９°Ｗである。

窯壁は確認できなかった。底面は西端部から約80㎝の地点までは曲線的に立ち上がるが，その後は約17°の角度で直線的に傾斜している。東側は急角度の斜面になっているが，浸食等による削平を受けた痕跡と思われる。

ＳＲＷ03は，ＳＲ03から北西側へ半島状に突き出た台状地形を呈する。ＳＲ03の西側やＳＫ35の削平状況から，ＳＲＷ03の平坦面は南側に広がっていたものと推測される。ＳＲＷ03の堆積土は





3号須恵器窯跡堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（焼土塊・炭化物多量）
2　褐灰色土　10YR4/1（焼土塊・炭化物多量）

0　1m
(1/30)

図85　３号須恵器窯跡

２層に分けた(図85)。ℓ１・２は灰原層の可能性も考えられるが，ＳＲ03のℓ１・２と土質・混入物が類似しており，ＳＲ03破壊後の整地層の可能性が高いと考えられる。ＳＲＷ03において，柱穴状の小穴は確認できなかった。

遺　　物（図86～88，写真59～61）

ＳＲ03から須恵器杯類253点・甕類５点，土師器片２点が出土した。ＳＲＷ03から須恵器杯類690点・蓋類１点・甕類12点，土師器片25点が出土した。遺存率が50％以上の杯の計測値は，口径12.2～14.8cm(平均値13.3cm)・底径5.8～7.4cm(平均値6.4cm)・器高2.7～4.0cm(平均値3.3cm)である。底径／口径比は，最大が図87－11の0.53，最小が図87－24・28の0.41である。

杯のロクロからの切り離し技法は，切り離し痕が確認できた資料のすべてが回転ヘラ切りによるものである。掲載した61点のうち，およそ還元色を呈するものは44％(図86－７など)で，他は焼き締まった赤黒～褐色が25％(図87－17など)，土師器のような浅黄橙～淡黄色が31％(図86－１など)である。

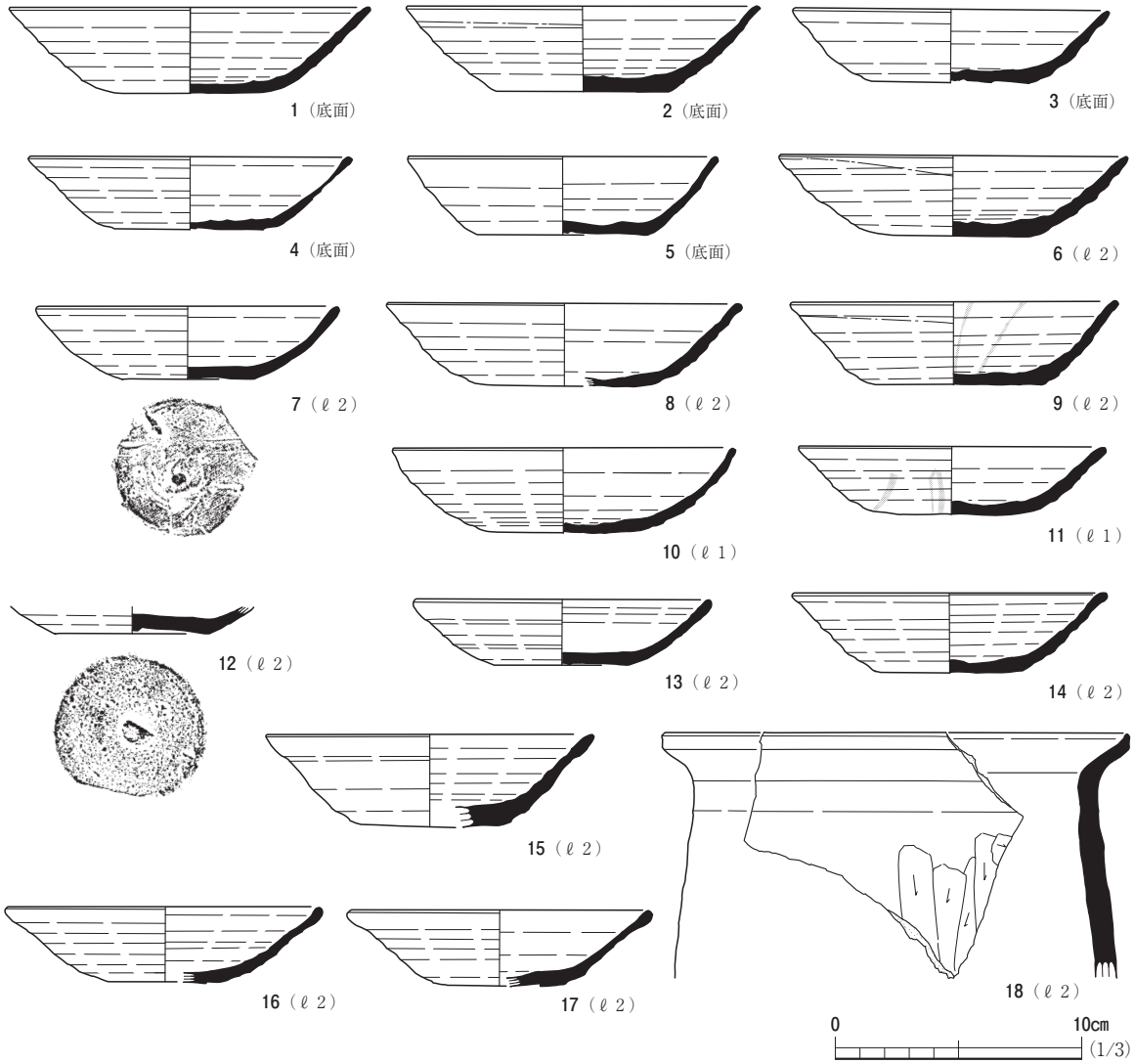


図86　３号須恵器窯跡出土遺物（１）

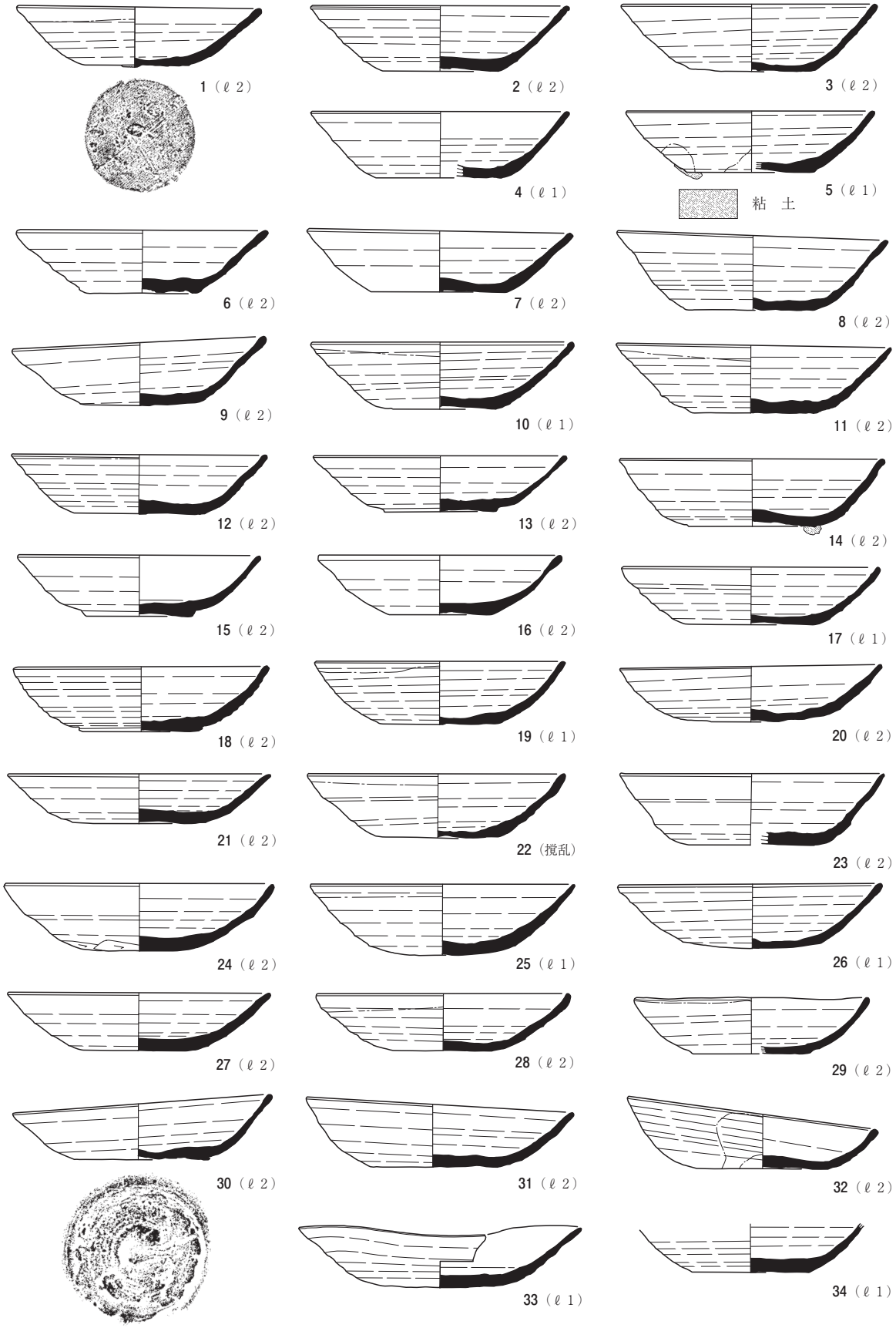


図87　３号須恵器窯跡出土遺物（２）

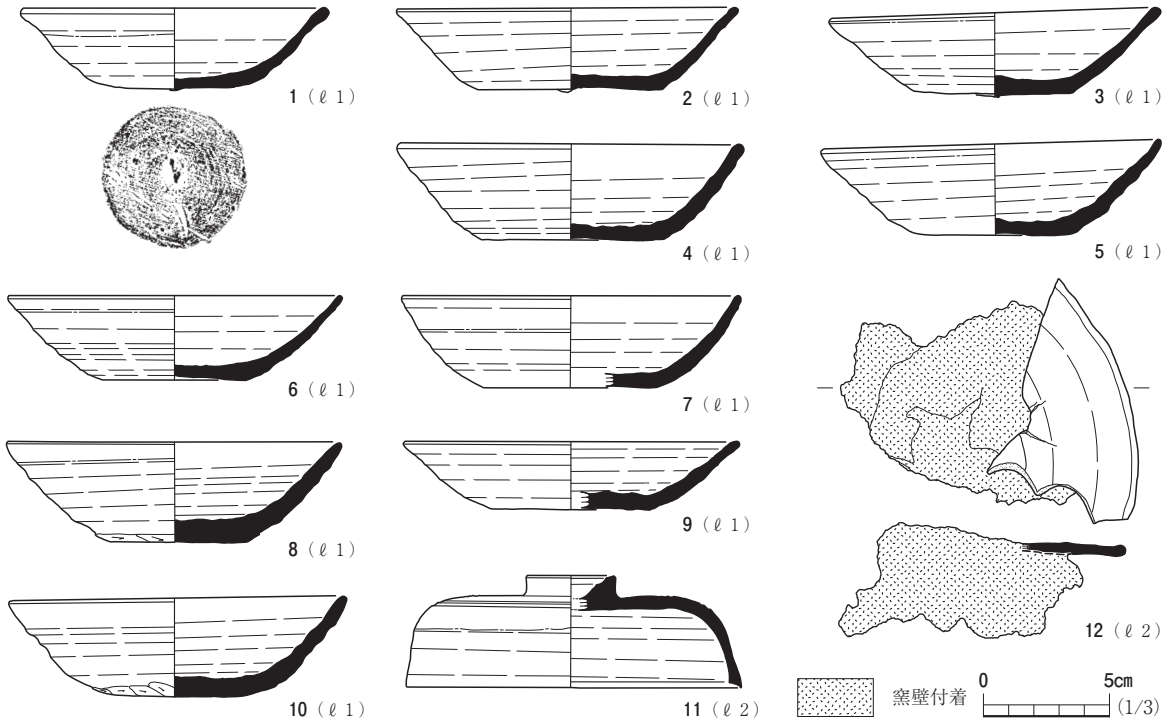


図88　３号須恵器窯跡出土遺物（３）

図86－１～５は，ＳＲ03の底面から出土したものである。１・２は器形・調整・色調が類似するもので，その口径は14cmを超え，出土資料のなかでは大型の部類に属する。１・２の底部調整は比較的丁寧なナデ調整が施され，回転ヘラ切りの切り離し痕がほとんど消されている。１・２と同様の資料には同図６・10があり，いずれも器面の色調が淡い黄色の酸化色を呈する。２の口縁部には重焼きの痕跡が確認できる。３・５は２次的に強く熱を強く受けており，器面の劣化が著しい。

図86－６～18は，ＳＲ03のℓ１・２から出土したものである。６の底部外面はナデ調整により回転ヘラ切り痕が消され，またヘラミガキ状の調整痕も認められる。10の体部から口縁部の断面は曲線的で，底部と体部の境界はやや不明瞭である。９は内面に，11は外面に火だすき痕が認められる。また９の口縁部は帯状に変色しているが，重焼きの痕跡と考えられる。13は口径が12.2cmと小型の部類に属する資料である。18は須恵器の長胴甕で，口唇部が上方に摘み上げられており，胴部外面には縦方向のケズリ調整が施されている。18の胎土は杯と比べて砂粒を多く含む。

図87－１～34は，ＳＲＷ03のℓ１・２から出土したものである。体部～口縁部の形状は１～14が直線的，15～29が曲線的に立ち上がるが，器形の違いから規模・調整法等に大きな差異は認められない。５の体部外面に自然釉が付着しており，底部にはスサ入りの小さな粘土塊が付着している。14の底部にも同様の粘土塊が付着している。13・15・18は低い平高台状の底部になっている。９・25の底部中央には爆ぜたようなひび割れが入り，焼成中に破損したようである。22～24の体部上位に段が付く。24の底部は，ナデ・ケズリ調整によって回転ヘラ切り痕が消され，また丸底風になっている。25の底部も丁寧なナデ調整等によって回転糸切り痕が消され，丸みを帯びた底部になっている。30～33は歪みによって器形が傾いた資料である。

図88－１～10はＳＲW03のℓ１から出土したものである。ℓ１の遺物出土量は，ℓ２と比較して少ない。１の底部外面にはヘラで付けたような筋が認められるが，意図的なものかはわからない。３・８の底部には弾けたようなひび割れが認められ，破損品と思われる。８・10の底部外面は比較的丁寧に調整を受けて，回転ヘラ切り痕が消されている。

図88－11はＳＲW03のℓ２から出土した蓋である。歪みが比較的強い。摘みは２段に窪められている。天井から肩には２条一組のカキメ状の筋が付けられている。体部外面には自然釉の付着が認められる。

図88－12は杯の口縁部破片で，扁平に反り上がった杯の外面がスサ入りの窯壁塊に癒着している。杯の色調は灰白色に還元している。

ま と め

ＳＲ03は遺存状態が悪く不明な点が多いが，ＳＲ01と同様の須恵器窯跡の可能性が高いと考えら

表９　３号須恵器窯跡出土遺物観察表（１）

（　）：推定値，［　］：残存値，単位：cm

図	№.	場所	層位	器種	口径	底径	器高	分類	色調（外面）	底部切り離し	調整	備考
86	1	SR03	底面	杯	14.8	6.2	3.5	C1	淡黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
86	2	SR03	底面	杯	14.4	7.4	3.5	B1	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
86	3	SR03	底面	杯	(12.9)	6.5	3.0	B2	灰白～褐色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	２次的受熱顕著
86	4	SR03	底面	杯	(13.0)	(6.0)	3.0	C1	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
86	5	SR03	底面	杯	(12.6)	7.0	3.2	B2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ	２次的受熱顕著
86	6	SR03	ℓ２	杯	14.2	7.4	3.3	B2	浅黄橙色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
86	7	SR03	ℓ２	杯	(12.4)	5.4	3.0	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
86	8	SR03	ℓ２	杯	(14.5)	(7.0)	3.4	C2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
86	9	SR03	ℓ２	杯	13.4	7.0	3.4	B1	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	内面火襷，重焼痕
86	10	SR03	ℓ１	杯	(14.0)	(7.0)	3.5	B2	浅黄橙色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
86	11	SR03	ℓ１	杯	(12.5)	6.6	2.8	B2	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	外面火襷
86	12	SR03	ℓ２	杯	－	6.2	[1.1]	－	灰黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
86	13	SR03	ℓ２	杯	(12.2)	5.4	2.7	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
86	14	SR03	ℓ２	杯	(12.8)	(6.0)	3.3	C1	灰褐～褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	２次的受熱顕著
86	15	SR03	ℓ２	杯	(13.4)	(5.6)	3.8	D1	灰黄色	不明	ロクロナデ・底部ケズリ	２次的受熱顕著
86	16	SR03	ℓ２	杯	(12.9)	(5.9)	3.1	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
86	17	SR03	ℓ２	杯	(12.4)	(5.4)	3.1	C1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
86	18	SR03	ℓ２	甕	(19.0)	－	[10.0]	－	灰色	－	ロクロナデ・ヘラ削り	胎土砂粒多
87	1	SRW03	ℓ２	杯	12.7	5.6	3.2	C1	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	重焼痕
87	2	SRW03	ℓ２	杯	(13.4)	(6.0)	3.4	C1	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	２次的受熱顕著
87	3	SRW03	ℓ２	杯	13.2	6.5	3.5	C1	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	
87	4	SRW03	ℓ１	杯	(13.4)	(6.6)	3.4	C1	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	２次的受熱顕著
87	5	SRW03	ℓ１	杯	(12.9)	6.6	3.2	B2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	粘土塊付着
87	6	SRW03	ℓ２	杯	13.0	6.0	3.3	C1	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	２次的受熱顕著
87	7	SRW03	ℓ２	杯	13.7	7.0	3.3	B1	にぶい褐色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	
87	8	SRW03	ℓ２	杯	14.0	6.8	4.0	D1	灰黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	
87	9	SRW03	ℓ２	杯	13.2	6.5	3.6	D1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	底部中央ひび
87	10	SRW03	ℓ１	杯	(13.6)	6.5	3.5	C1	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	重焼痕
87	11	SRW03	ℓ２	杯	14.2	6.5	3.6	C1	灰黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	底部中央ひび，重焼痕
87	12	SRW03	ℓ２	杯	(13.2)	6.8	3.1	B1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
87	13	SRW03	ℓ２	杯	(13.2)	5.8	2.9	C1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
87	14	SRW03	ℓ２	杯	(13.6)	6.4	3.5	C1	黒～灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	粘土塊付着
87	15	SRW03	ℓ２	杯	(12.6)	5.8	3.2	C2	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
87	16	SRW03	ℓ２	杯	12.6	5.3	3.1	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
87	17	SRW03	ℓ１	杯	(13.2)	6.7	3.0	B2	赤黒～褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	
87	18	SRW03	ℓ２	杯	(13.4)	6.4	3.4	C2	褐灰～灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	
87	19	SRW03	ℓ１	杯	(13.0)	6.0	3.3	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
87	20	SRW03	ℓ２	杯	13.6	6.0	3.0	C2	淡黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
87	21	SRW03	ℓ２	杯	(13.6)	6.8	2.6	B2	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	
87	22	SRW03	撹乱	杯	13.4	6.9	3.4	B2	灰褐色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	重焼痕
87	23	SRW03	ℓ２	杯	(13.6)	6.4	3.7	D2	黄灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
87	24	SRW03	ℓ２	杯	(13.8)	5.6	3.5	C2	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	
87	25	SRW03	ℓ１	杯	13.6	6.8	3.7	D2	黒褐色～灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	底部中央ひび，重焼痕
87	26	SRW03	ℓ１	杯	(13.7)	7.1	3.4	B2	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	

表10　３号須恵器窯跡出土遺物観察表（２）

（　）：推定値，［　］：残存値，単位：cm

図	No.	場所	層位	器種	口径	底径	器高	分類	色調（外面）	底部切り離し	調整	備考
87	27	SRW03	ℓ２	杯	(13.6)	5.6	3.0	C2	灰～灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
87	28	SRW03	ℓ２	杯	13.0	5.4	3.0	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ・底部ナデ	重焼痕
87	29	SRW03	ℓ２	杯	(12.2)	(6.1)	3.0	C2	灰～灰褐色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
87	30	SRW03	ℓ２	杯	13.4	6.9	3.4	－	灰色，白色付着	回転ヘラ切	ロクロナデ	口縁部ヒビ
87	31	SRW03	ℓ２	杯	13.8	6.6	3.6	－	灰～灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
87	32	SRW03	ℓ２	杯	13.0	7.0	3.7	－	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ，ケズリ	自然釉
87	33	SRW03	ℓ１	杯	－	6.6	3.3	－	暗赤灰色，白色付着	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	歪み顕著
87	34	SRW03	ℓ１	杯	－	6.2	[2.6]	－	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	
88	1	SRW03	ℓ１	杯	12.2	5.8	3.2	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ケズリ	重焼痕
88	2	SRW03	ℓ１	杯	13.6	7.3	3.3	B1	黄灰～浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
88	3	SRW03	ℓ１	杯	(13.2)	6.4	3.3	B1	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	底部中央ヒビ，重焼痕
88	4	SRW03	ℓ１	杯	13.8	7.2	3.8	A1	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
88	5	SRW03	ℓ１	杯	13.4	6.2	3.8	D1	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	底部中央ヒビ，重焼痕
88	6	SRW03	ℓ１	杯	(13.3)	(5.7)	3.4	C2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
88	7	SRW03	ℓ１	杯	(13.4)	(6.8)	3.7	A2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	重焼痕
88	8	SRW03	ℓ１	杯	13.4	5.6	4.0	D2	淡黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	底部中央ヒビ，重焼痕
88	9	SRW03	ℓ１	杯	(13.4)	(6.4)	2.7	C2	赤黒色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ	
88	10	SRW03	ℓ１	杯	13.4	5.8	4.0	D2	淡黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ，底部ナデ・ケズリ	底部中央ヒビ
88	11	SRW03	ℓ２	蓋	摘 3.6	13.3	4.4	－	灰色	－	ロクロナデ	短頸壺蓋
88	12	SRW03	ℓ２	杯	－	－	－	－	灰色	－	ロクロナデ	窯壁付着

れる。また今回検出したＳＲ03の遺存部についても，ＳＲ01と同様に焚口～燃焼部付近であったものと考えられる。

ＳＲW03は平坦面になっているため作業場的な施設が考えられるが，上屋の有無については不明である。ＳＲW03上の堆積土については灰原の可能性も推測されたが，燃焼部の堆積土と明確な差異が認められなかったため，ＳＲ03廃棄後の整地層と考えられた。出土土器は杯が大半であり，ＳＲ01の状況と類似している。ＳＲ01の時期については，出土土器の特徴等から平安時代前期後半と考えられる。

（香　川）

第５節　　溝　　跡

調査Ⅱ区からＳＤ04・09の２条の溝跡を検出した。ＳＤ04は調査Ⅱ区の北東部で確認したもので，河岸段丘の斜面が緩やかになる変換部を切り通すようにして造られた比較的溝幅の狭い遺構である。ＳＤ09は調査Ⅱ区の南部に位置し，西の阿賀川方向に向かって延びる比較的幅広の溝跡である。

４号溝跡　ＳＤ04

遺　　構（図89，写真50）

Ｋ５～７グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。ＳＤ04は，急峻な段丘斜面の傾斜が緩やかになる裾部を切り通すようにして造られた南北に長い溝跡である。標高は175.2ｍ前後である。北側は阿賀川に注ぐ「Ｖ」字状の流路になっており，丘陵斜面が分断されている。ＳＲ01と重複関係にあるが，本遺構の方が新しい。なお，ＳＲ01と重複する部分で壁から底面に熱を受けたような痕跡を確認することはできなかった。

遺構内堆積土はℓ１の単層とした。ℓ１は灰黄褐色の粘質土で，土質・土色等から東側の丘陵斜

面の崩落土と判断した。全長は28.0ｍを測るが，さらに南側へ延びていた可能性がある。遺構の北端部と南端部の比高は約１ｍである。

溝幅は遺存状態によって45～90㎝と一定ではない。壁は曲線状で，底面は比較的平坦に造られている。検出面から底面までの深さは，遺存状態が比較的良好なＳＲ01付近で20㎝を測る。

遺　　物（図90，写真53）

本遺構のℓ１から須恵器片が76点出土した。１～４の杯はいずれもＳＲ01～03の近辺から出土したもので，須恵器窯跡から混入したものと推測される。１～３の体部～口縁部の器形は，いずれも内湾しながら立ち上がる。３の口径は12.0㎝で，比較的小型の杯である。４の底部外面には回転ヘラ切り痕が認められ，中央に臍状の突起が観察される。

５は甕の胴部破片で，内面に当て具痕，外面にタタキメが認められる。６は平坦な底部から胴部が内湾気味に立ち上がる甕の破片である。７は甕の頸部付近の破片で，タタキ調整後にカキメ調整が施されている。８の外面にはタタキメが格子状に交錯している。８の内面は縦横にナデ調整が施されている。

ま と め

ＳＤ04は丘陵裾部に沿って南北方向に延びる遺構である。検出当初は，ＳＲ01～03に通じる作業道の可能性も考えられたが，重複関係からＳＤ04の方が新しいと判断した。

ＳＤ04の性格としては，比較的幅の狭い小道であった可能性が考えられ，遺構北側の水が流れる谷筋までの通路であった可能性が考えられる。遺構の時期は，ＳＲ01との重複関係から平安時代以降である。（香　川）

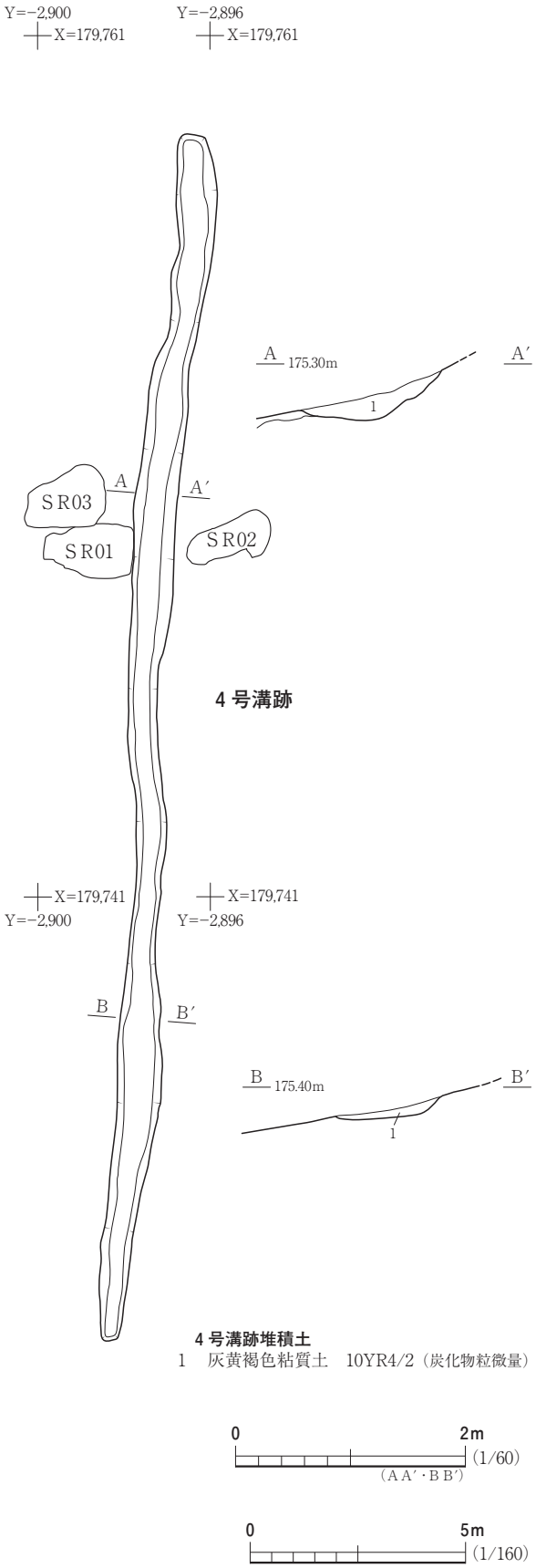


図89　４号溝跡

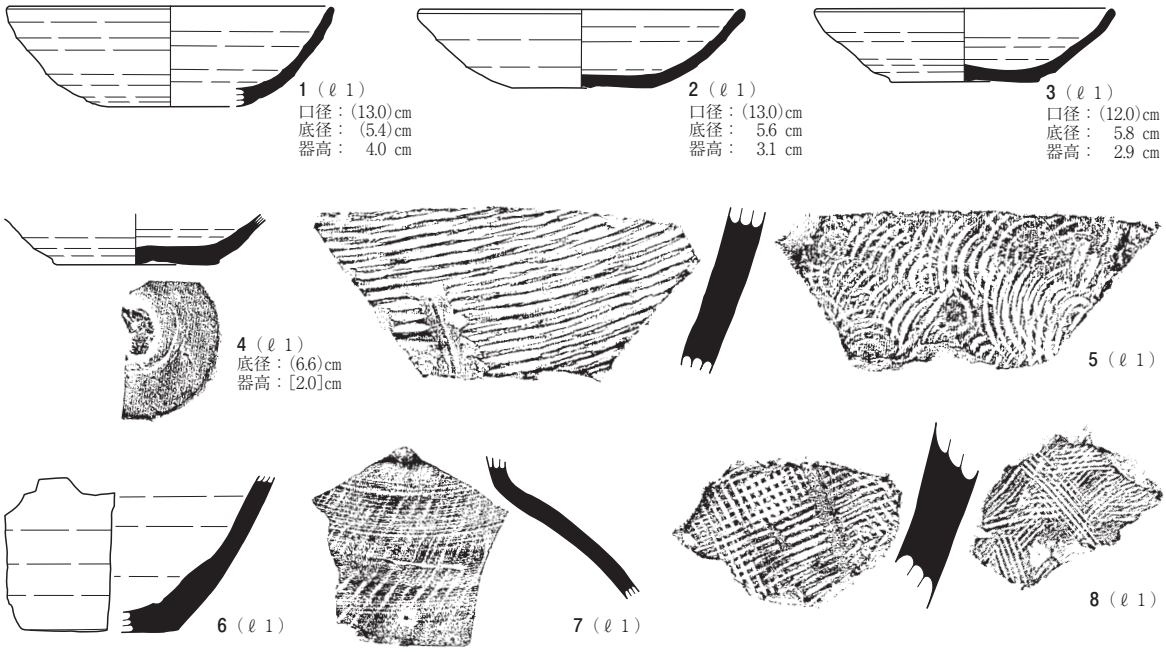


図90　４号溝跡出土遺物

９号溝跡　ＳＤ09

遺　　構（図91，写真50）

Ｈ14グリッドに位置する。検出面はＬⅢＢ上面で，標高は約170.9ｍである。ＳＤ09は，西側に開く谷状地形の落ち際を利用して造られた溝跡である。東部は削平によって失われている。重複遺構はない。北側約４ｍの地点にはＳＩ12がある。

遺構内堆積土は４層に分けた。最下層のℓ４は，やや粘質のシルト質土である。ℓ１～４は，土層観察から自然堆積土の可能性が高い。遺構の埋没後，東側の丘陵斜面からの崩壊土によって，遺構の上端と南壁の一部が削平されている。

ＳＤ09の断面は舟底状で，北壁では中ほどで段差が付いている。検出面から底面までの深さは，北部で1.0m を測る。平面形は，立地する谷地形の縁辺に沿うように弧状を描く。遺存長は9.45ｍである。最大幅は，東部で1.95ｍを測る。

遺構内の堆積土から平安時代の土師器片が６点出土したが，いずれも細片で図化できなかった。

ま と め

ＳＤ09は，上端幅約２ｍ，深さ約１ｍの比較的大型の溝跡で，谷を迂回するようにして阿賀川方向に進んでいる。断面形は浅い「Ｖ」字状で，上端幅に対し底面幅が非常に狭い。ＳＤ09の性格については流路等の可能性が考えられるが不明である。遺構の時期については，ＬⅢＢを少なくとも掘り込んでいることから，平安時代以降と考えられる。（香　川）

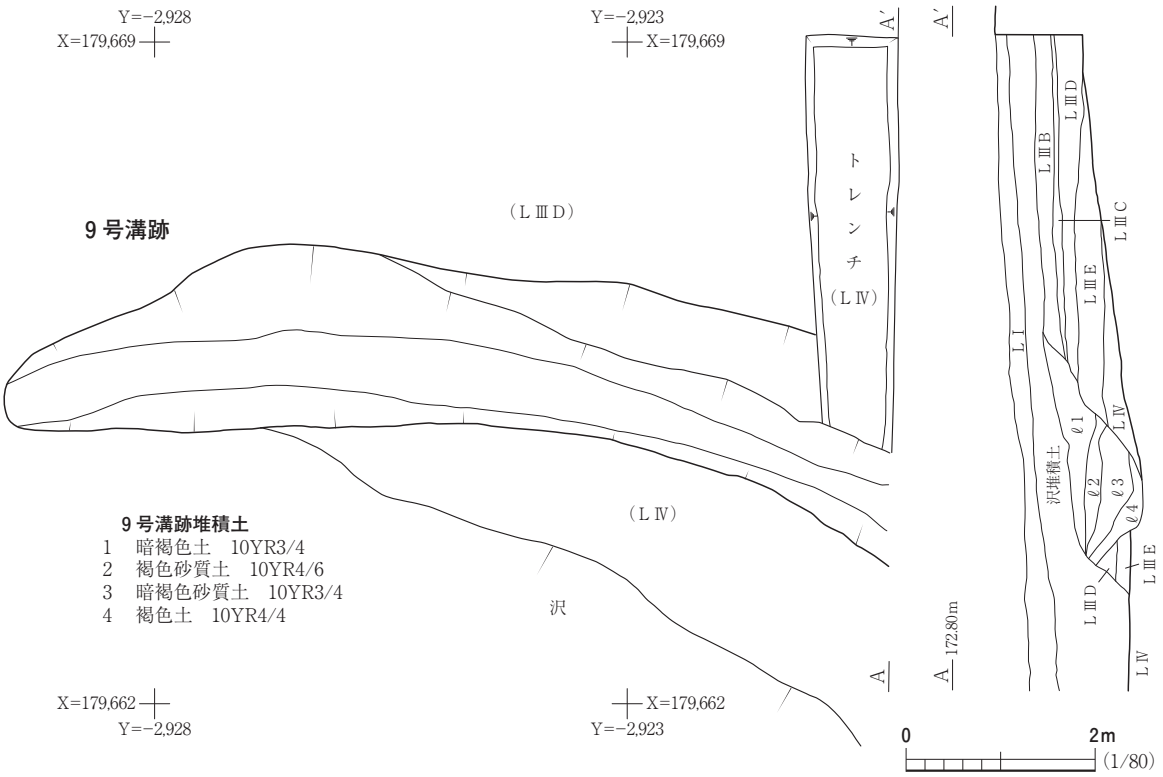


図91　９号溝跡

第６節　その他の遺構

調査Ⅱ区において計７基の土坑（ＳＫ10・25・26・28・32・34・35）と，平行に溝が並ぶＳＸ02を確認した。ＳＫ10・25・32は燃焼の痕跡が確認され，土師器等が多量に出土していることから生産関連遺構の可能性がある土坑である。ＳＸ02は，畝立ての可能性から畝状遺構としたものである。

10号土坑　ＳＫ10（図92・94，写真51）

Ⅱ区のほぼ中央，Ｈ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢＣ上面である。周辺にはＳＩ04，ＳＫ26が存在する。ＳＫ10が確認されたのは標高171.7ｍの平坦面である。遺構内堆積土は２層に分け，ℓ１は炭化物粒を微量含む。ℓ１から比較的多くの土師器が出土した。ℓ２はＬⅢＣ起源と思われる黄褐色土粒を含む。ℓ１・２の観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡を確認することはできなかった。

平面形は東西に長い楕円形で，上端の規模は東西192㎝，南北140㎝を測る。検出面から底面までの深さは18㎝である。底面の規模は東西156㎝，南北117㎝である。底面はほぼ水平で，壁の立ち上がりは緩やかである。底面の南部が褐色になっており，熱を受けた可能性がある。

遺構内からは土師器杯類65点，同甕類13点，同器種不明のもの28点が出土したが，その大半が細片である。遺物は図94－１～３に示した。１は杯の小破片で，内湾気味の体部から口縁部がわず

かに外反する。1の内面は黒色処理・ヘラミガキが施されているが，2次的に熱を受けたらしく黒色処理が消えかかっている。2は小型甕の底部と考えられる資料で，底部外面に回転糸切り痕とヘラ状工具の側面で刻んだような筋が観察される。3は甕の口縁部破片である。3の口唇部は「S」字状に外反している。3も2次的に熱を受けたらしく，器面の一部が剝落している。

SK10の性格については確実ではないが，土師器焼成遺構の可能性も考えられる。遺構の時期については，出土遺物から9世紀中頃の可能性がある。（宮　田）

25号土坑　SK25（図92・94，写真51・62）

Ⅱ区北部のI8グリッドに位置する。検出面はLⅢA上面で，土師器を多量に混入する暗褐色土の広がりとして確認した。北へ約2.5mのところにSI08がある。SK25が確認されたのは標高171.7m前後の西向き緩斜面である。遺構内堆積土は2層に分けた。ℓ1は炭化物を比較的多く含む暗褐色砂質土で，土師器片を混入する。ℓ2は炭化物を主体とする黒色砂質土で，ℓ1と同様に土師器片を混入する。図92に示した検出状況はℓ2上面での図化である。

平面形は円形で，上端の直径は約150cmである。検出面から底面までの深さは23cmである。底面の規模は東西126cm・南北130cmの不整形をなし，壁の立ち上がりは急角度である。LⅢA面を直接底面としており，熱変化による焼土化した部分が見られる。

遺構内からは土師器坏類221点，同甕類25点，同器種不明1点が出土した。須恵器その他は出土していない。遺物は図94－4～11に示した。4は高台をもち，内外面にロクロ整形が施される。内面は2次的に熱を受けており，ヘラミガキや黒色処理の有無については不明である。6も高台付杯であるが，高台が剝落している。6の内面はヘラミガキ・黒色処理の痕跡が確認できるが，2次的に熱を受けており黒色処理が消えかかっている。5・7は高台をもたない杯で，いずれも2次的に熱を受けて器面が劣化している。5は底部から体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。5の内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が確認できる。7の外面は無調整に近く，底部外面は軽いナデに止まる。

8～11に甕類を一括した。8・11は胴部上位の資料である。内外面ともにロクロ整形が施される。9は外面にロクロ整形，内面に横位のヘラナデが施される。10は胴部下半から底部にかけての資料で，9と同一個体の可能性がある。10の外面にはタタキ調整後，縦位のヘラケズリが施されている。12は外面に墨書銘のある杯の小破片であるが，判読できなかった。

SK10は，底面の熱酸化や土器の出土状況から土師器焼成土坑と考えられる。時期は，出土土器から9世紀末～10世紀前葉に位置づけられよう。（宮　田）

26号土坑　SK26（図92，写真51）

H10グリッドに位置する。検出面はLⅢA上面である。北東側約2mの地点にSI04，北西側約1mの地点にSK10がある。重複遺構はないが，土坑の南側を破壊されている。遺構内堆積土は2

層に分けた。ℓ１・２はいずれも炭化物粒を微量含む。ℓ１・２の土質はＬⅡｃに類似しており，ＳＫ26は自然に埋没したものと考えられる。

平面形は不明であるが，遺存部の形状から楕円形の可能性もある。規模は東西210㎝，南北84㎝である。検出面から底面までの深さは，最深部で16㎝を測る。底面はほぼ平坦である。壁は丸みを帯びて，緩やかに立ち上がる。遺構の堆積土から，土師器片28点，須恵器片16点が出土したが，すべて細片であり図化できなかった。

ＳＫ26の性格は遺存状態が悪く不明である。時期については，出土土器等から平安時代前期末～中期初め頃と考えられる。（香　川）

28号土坑　ＳＫ28（図92，写真51）

Ｊ12グリッドに位置する。検出面はＬⅢＡ上面である。重複遺構はない。遺構内堆積土は暗褐色土の単層とした。ＬⅣ塊を少量混入するが植物等による影響と思われ，ＳＫ28は自然に埋没したものと推測される。

平面形は，直径約80㎝の円形である。壁は急角度で立ち上がり，特に東部では垂直に近い。検出面から底面までの深さは，最深部で40㎝を測る。底面はほぼ平坦である。遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫ28は単独で立地する遺構で，その性格は不明である。時期については，西側で展開する遺構とほぼ同時期の平安時代に位置づけられる可能性がある。（香　川）

32号土坑　ＳＫ32（図92・95，写真51・62）

Ｇ12グリッドに位置する。検出面はＬⅢＧ上面で，にぶい赤褐色砂質土の広がりを確認した。標高171.2ｍの西向き緩斜面上にある。重複遺構はない。北側約５ｍの地点にＳＩ13がある。遺構内堆積土は３層に分けた。ℓ１は焼土層で，一部ℓ２上に堆積する。ℓ３はの北東部で観察されたにぶい黄褐色砂質土である。ℓ１～３の堆積状況は不明である。

平面形は東西に長軸をとるやや不整な楕円形を呈し，上端の規模は東西約213㎝，南北約150㎝を測る。検出面から底面までの深さは14㎝である。底面の規模は，東西203㎝，南北130㎝を測り，東から西へ緩やかに下がっている。東端と西端の比高は23㎝である。

ＳＫ32から出土した遺物は土師器杯類13点・甕類178点，須恵器片９点である。このうち９点を図95に示した。１は杯である。外面にロクロ整形を，内面に横位の細かいヘラミガキと黒色処理が施されている。２は甕の胴部下半である。内外面に縦位のハケメが認められ，内外面とも熱を受けて器面が脆くなっている。３は甕の口縁部資料である。ロクロ整形で頸部外面の屈曲部にタタキメが残っている。口唇部は上外方に摘み上げられ，内面に明瞭な稜が付く。内面はカキメ状のナデが施されている。４も外面にタタキメ，内面にカキメ状のナデが施された資料である。５は甕の底部である。内面に横位のハケメが，外面にはタタキが施される。６は内面に横位の，外面に縦位のタ

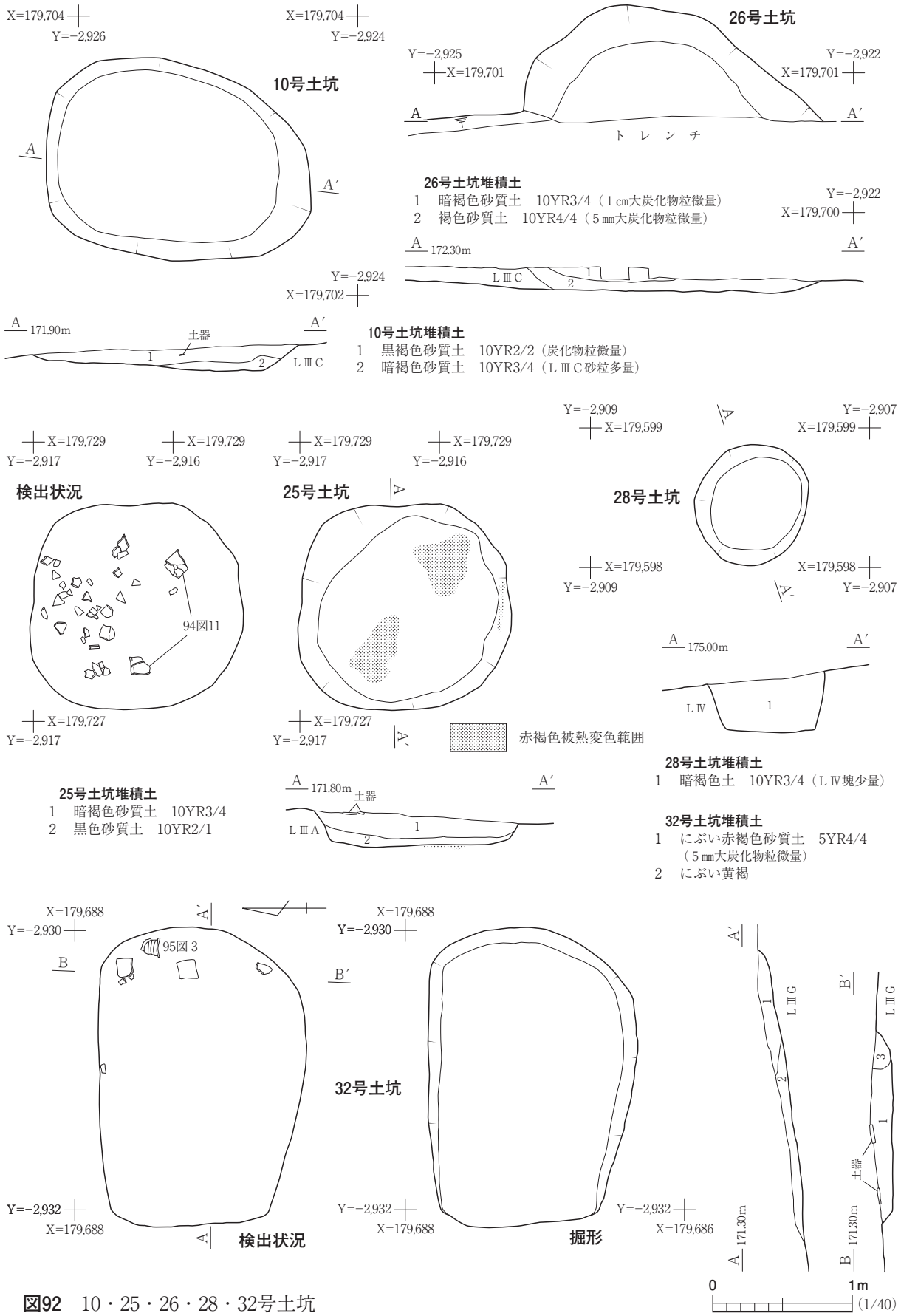


図92　10・25・26・28・32号土坑

タキメがみられる。７は須恵器甕の胴部である。内面に横位のナデが，外面にタタキ調整の後縦位のナデが施される。８は外面に格子状のタタキメが見られる。９は須恵器大型甕の胴部片である。内外面にタタキ調整が施される。

ＳＫ32は遺存状態が悪くその構造は不明であるが，焼土層や土師器・須恵器が比較的多く出土したことから，土器生産に関連した遺構の可能性がある。遺構の時期については，出土遺物から９世紀代と考えられる。（宮　田）

34号土坑　ＳＫ34

遺　　構（図93，写真51）

Ｈ９グリッドに位置する。検出面はＬⅢＡ上面である。ＳＫ34は，南北に延びる狭長な堤状地形の東側肩部を掘り込んでいる。重複遺構はない。南東側約4.5ｍの地点にはＳＩ09がある。

遺構内堆積土はℓ１の単層とした。ℓ１の観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず，遺構は自然に埋没した可能性が高いと考えられる。遺構内から遺物は出土しなかった。

平面形は，ほぼ楕円形である。規模は，長軸長1.15ｍ，短軸長0.98ｍである。壁は底面から60°前後の角度で立ち上がる。壁の遺存高は，最も良好は南東部で32㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが，西から東に向かってわずかに傾斜している。ＳＫ34の時期は，遺構検出面等から周辺に展開する住居跡とほぼ同時期の平安時代前期末～中期初め頃と考えられる。（香　川）

35号土坑　ＳＫ35

遺　　構（図93，写真51）

Ｊ５グリッドに位置する。本遺構はＳＲＷ03と重複関係にあり，ＳＲＷ03の堆積土を掘り込んでいることから，ＳＫ35の方が新しい。遺構の南から西部は崩落等によって消失している。

遺構内堆積土は，消し炭状の炭化物を多量に含むℓ１の１層である。平面形は，遺存部から方形または長方形であったと推測される。遺存長は，長軸95㎝，短軸53㎝である。壁の遺存高は東壁で10㎝を測る。底面はやや起伏があるが，ほぼ水平に造られている。底面の一部が熱を受けて赤褐色に変色している。遺構内から遺物は出土しな

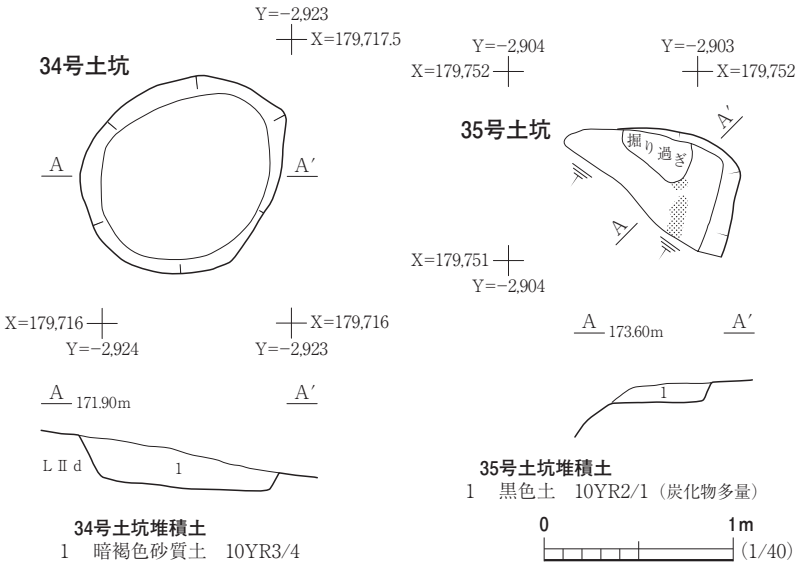


図93　34・35号土坑

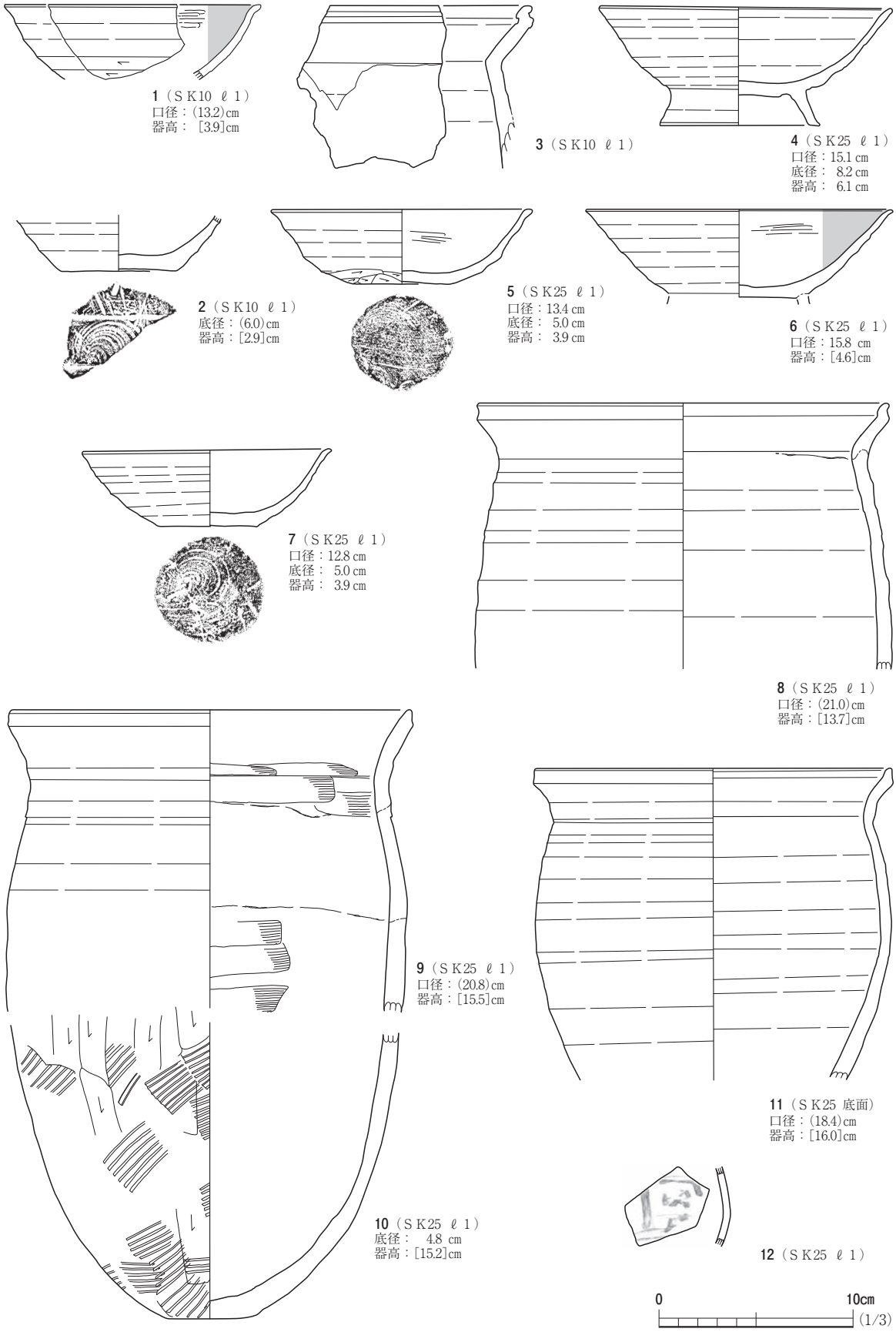

1（ＳＫ10 ℓ１）
口径：(13.2)cm
器高：［3.9］cm
3（ＳＫ10 ℓ１）
4（ＳＫ25 ℓ１）
口径：15.1 cm
底径：8.2 cm
器高：6.1 cm
2（ＳＫ10 ℓ１）
底径：(6.0)cm
器高：[2.9]cm
5（ＳＫ25 ℓ１）
口径：13.4 cm
底径：5.0 cm
器高：3.9 cm
6（ＳＫ25 ℓ１）
口径：15.8 cm
器高：[4.6]cm
7（ＳＫ25 ℓ１）
口径：12.8 cm
底径：5.0 cm
器高：3.9 cm
8（ＳＫ25 ℓ１）
口径：(21.0)cm
器高：[13.7]cm
9（ＳＫ25 ℓ１）
口径：(20.8)cm
器高：[15.5]cm
11（ＳＫ25 底面）
口径：(18.4)cm
器高：[16.0]cm
10（ＳＫ25 ℓ１）
底径：4.8 cm
器高：[15.2]cm
12（ＳＫ25 ℓ１）
0
10cm
(1/3)

図94　土坑出土遺物（１）

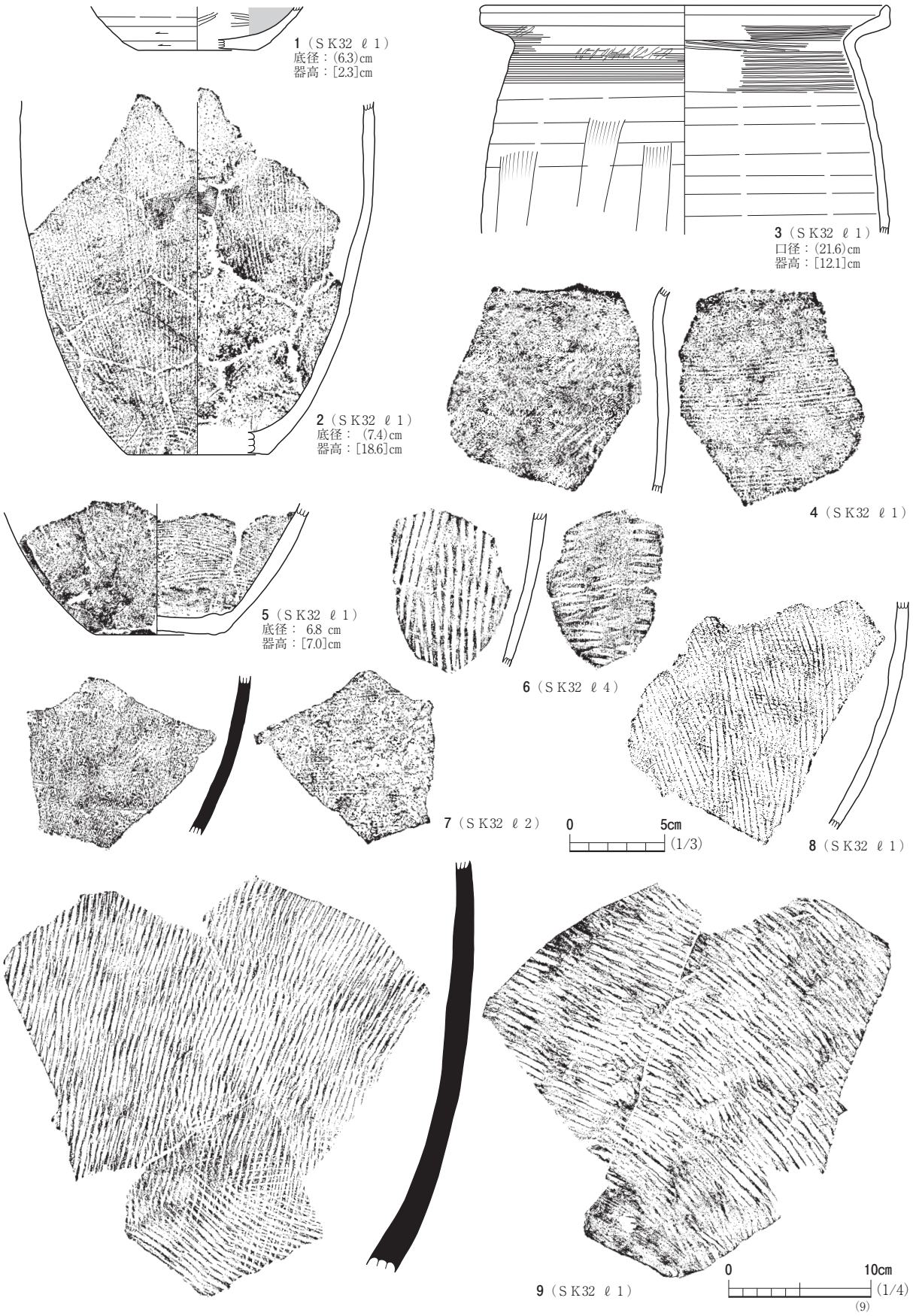

1（ＳＫ32 ℓ１）
底径：(6.3)cm
器高：[2.3]cm
2（ＳＫ32 ℓ１）
底径：(7.4)cm
器高：[18.6]cm
3（ＳＫ32 ℓ１）
口径：(21.6)cm
器高：[12.1]cm
4（ＳＫ32 ℓ１）
5（ＳＫ32 ℓ１）
底径：6.8 cm
器高：[7.0]cm
6（ＳＫ32 ℓ４）
7（ＳＫ32 ℓ２）
0 5cm
(1/3)
8（ＳＫ32 ℓ１）
9（ＳＫ32 ℓ１）
0 10cm
(1/4)
(9)

図95　土坑出土遺物（２）

かった。

ＳＫ35はℓ１の炭化物から木炭等の焼成が行われた可能性がある。遺構の時期は，ＳＲＷ03との重複関係から平安時代以降と考えられる。　　（香　川）

畝状遺構　ＳＸ02

遺　　構（図96，写真50）

Ｆ16，Ｇ14～16グリッドの平坦部に位置する。東側の丘陵斜面は，比較的大規模に崩れて谷状地形となっており，その後，川岸まで再堆積土によって覆われている。再堆積土を15層（沢ℓ１～15）に分けたが，沢ℓ12面において平行に溝が並ぶ本遺構を検出した。

ＳＸ02の溝は計19条確認した。各溝の上端幅は20㎝前後，検出面から床面までの深さは10㎝前後である。溝の断面は舟底状となっている。各溝内は黄褐色の砂で覆われていたが，同砂はⅢ区で確認された近世頃の洪水砂に類似している。各溝はおよそ東西方向に延びており，立地面の等高線と概ね直交している。遺存長は，最も長いもので5.8ｍを測る。

ＳＸ02の性格については，平行に並ぶ溝状の形態から縦畝の可能性が考えられ，畑跡と推測される。畝幅は0.4～1.0ｍであ

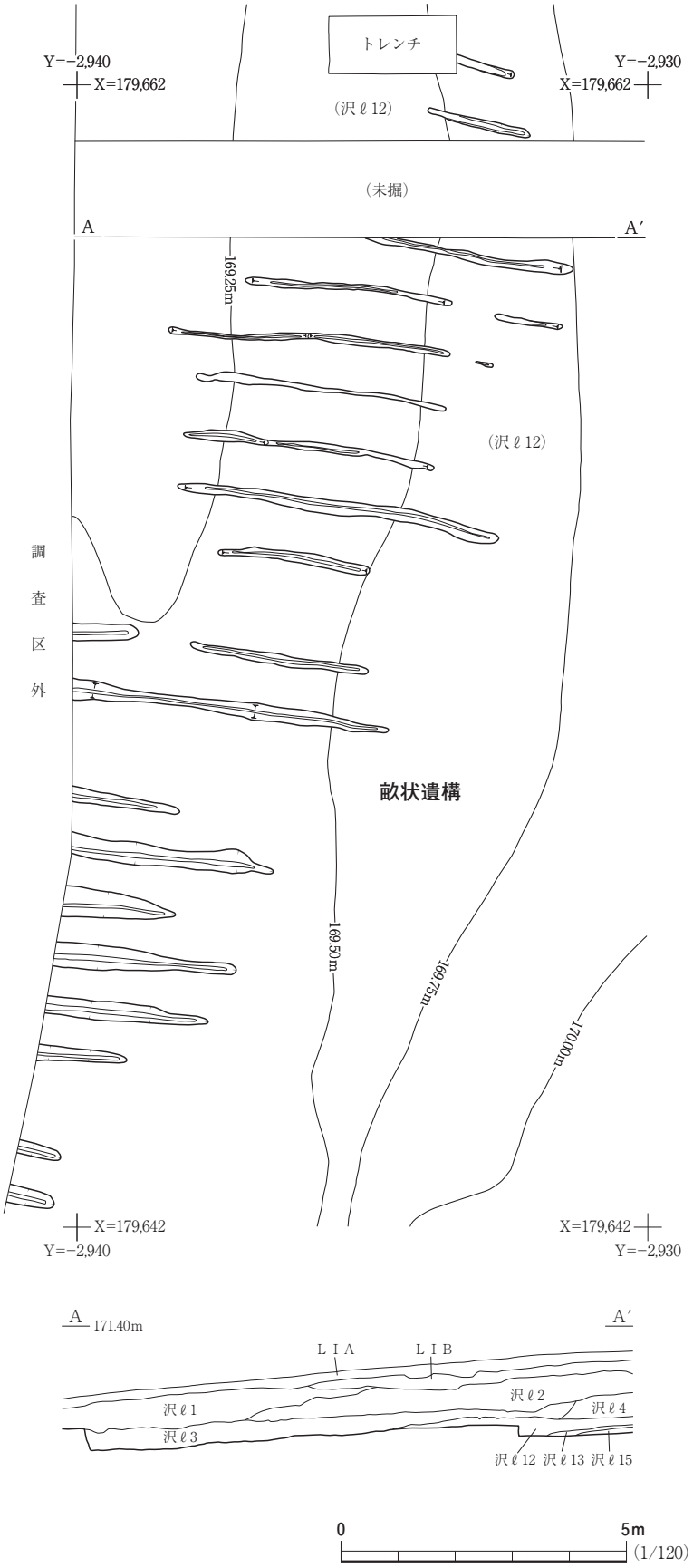


図96　畝状遺構

る。本遺構は，調査区外の西側へさらに広がっていると推測される。遺構の時期は，出土遺物がないため判然としない。しかし，各溝を覆う砂が近世頃の可能性があることから，本遺構についてもほぼ同時期の可能性がある。（香　川）

第７節　遺構外出土遺物

調査Ⅱ区のＬⅠ・Ⅱから，土師器の杯類3,389点・甕類1,686点・器種不明292点，須恵器の杯類837点・甕類71点，陶器７点，鉄製品３点が出土した。ＬⅡはさらに細分され，各地点で複雑な堆積状況を示すが，ＬⅡ出土の遺物のうち，ＬⅡｃのものが約91％を占める。ＬⅡｃ出土の遺物の時期は９世紀代が中心である。調査Ⅱ区の北西部ではＬⅡコとした層から瓦器・小刀が出土しており，中世の遺物も少量であるが確認している。

土 師 器（図97・98，写真62・63）

図97－１～９・11は平底の杯である。１～６は口径に対して底径が比較的短い資料である。１～５の器高は4.0㎝を超え，比較的深みのある器形である。１・３・５の体部下端は手持ちヘラケズリが施されている。１・２・６の内面は黒色処理・ヘラミガキ調整が施されているが，２次的に熱を受けたためか黒色処理のほとんどが消失している。４・６の底部周縁～体部下端には回転ヘラケズリ調整が施されている。２の底部は無調整である。４の体部下半のヘラミガキ調整痕は口縁部と比べて幅広である。７は底部外面に調整が施され，回転糸切り痕がほとんど消失している。８・11はほぼ無調整の底部破片である。９は雨水等による影響を受けたためか，器面がやや摩滅している。

図97－10・12～16は高台付杯の破片資料である。10の体部下端にはヘラケズリ調整が施されている。12は高台が剝落した資料で，回転ヘラケズリによる再調整が行われた底部外面に２条の筋が刻まれている。13は断面が三角の短い高台が付き，接合部に菊花状のオサエ痕が認められる。14は比較的大型の高台破片で，底部内面に黒色処理・ヘラミガキ調整が施されている。底部外面はケズリ・ナデ調整によってロクロからの切り離し痕が消失している。15の底部外面には回転糸切り痕が観察され，16は再調整によって回転糸切り痕がほとんど消失している。

図97－17～19は長胴甕の破片資料である。17・19は口縁部の外反が比較的弱く，内面側の口唇部にも明確な稜をもたない。18は調査Ⅱ区北西端部のＬⅡコとした地層から出土したもので，口縁部の外反が比較的強く，また口唇部が内傾している。

図98－１～７も甕の資料である。１の胴部下半にはタタキ痕とケズリ調整が認められる。２は比較的粗製の資料で器形がやや歪んでおり，熱を強く受けて器面が脆くなっている。底部は丸みを帯びた平底で，胴部が直線的に立ち上がる。口縁部は指先で摘んだように短く外傾する。調整は口縁部が横ナデ調整，胴部がケズリ・ナデ調整である。３の胴部外面にはカキメ状のナデ調整，底部外面には回転糸切り痕が認められる。４の底部資料は外面に木葉痕認められるもので，土師器ではない可能性もある。５の底部～胴部下端の調整は，外面がケズリ調整，内面が指によるナデ調整が施

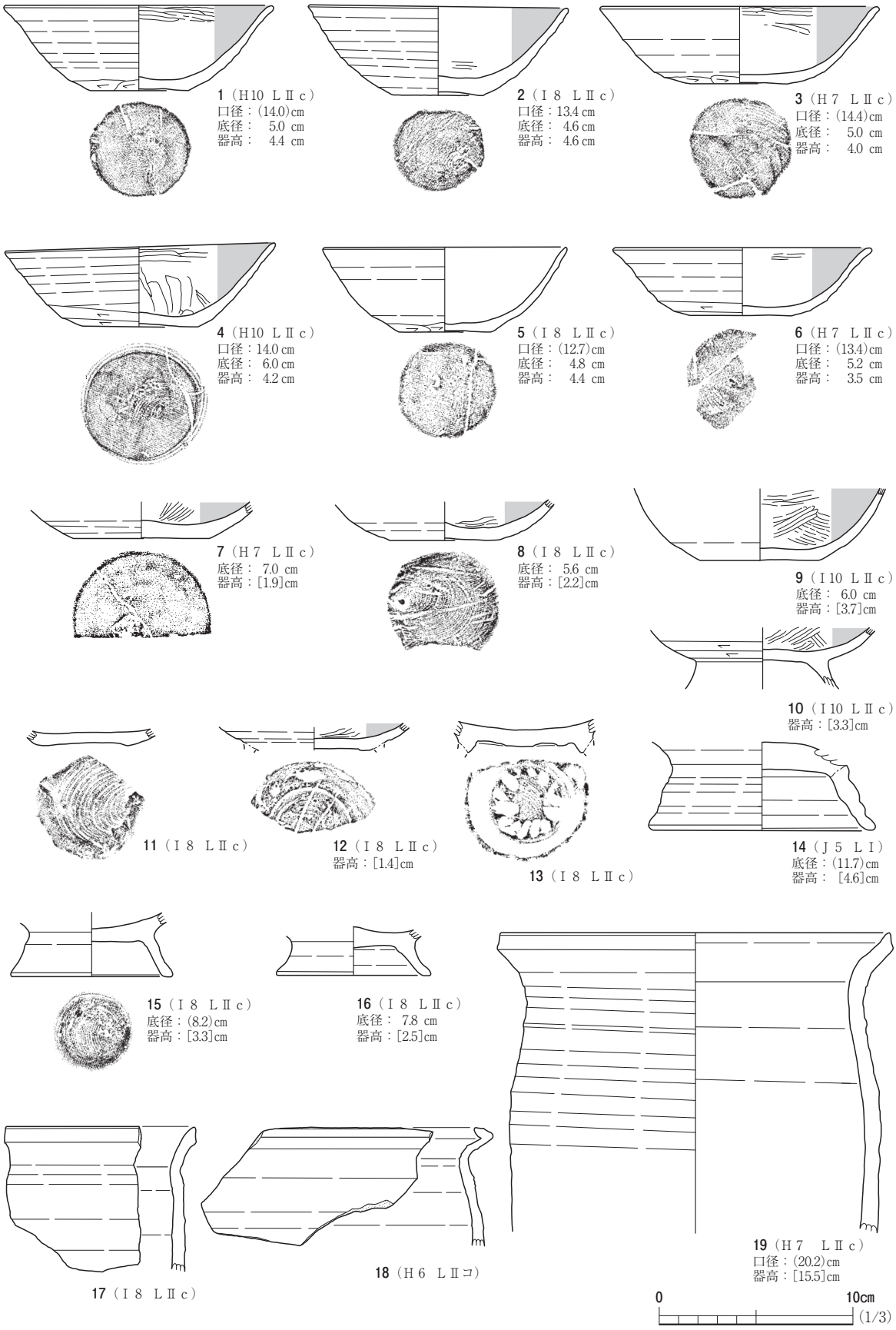


図97　遺構外出土遺物（１）

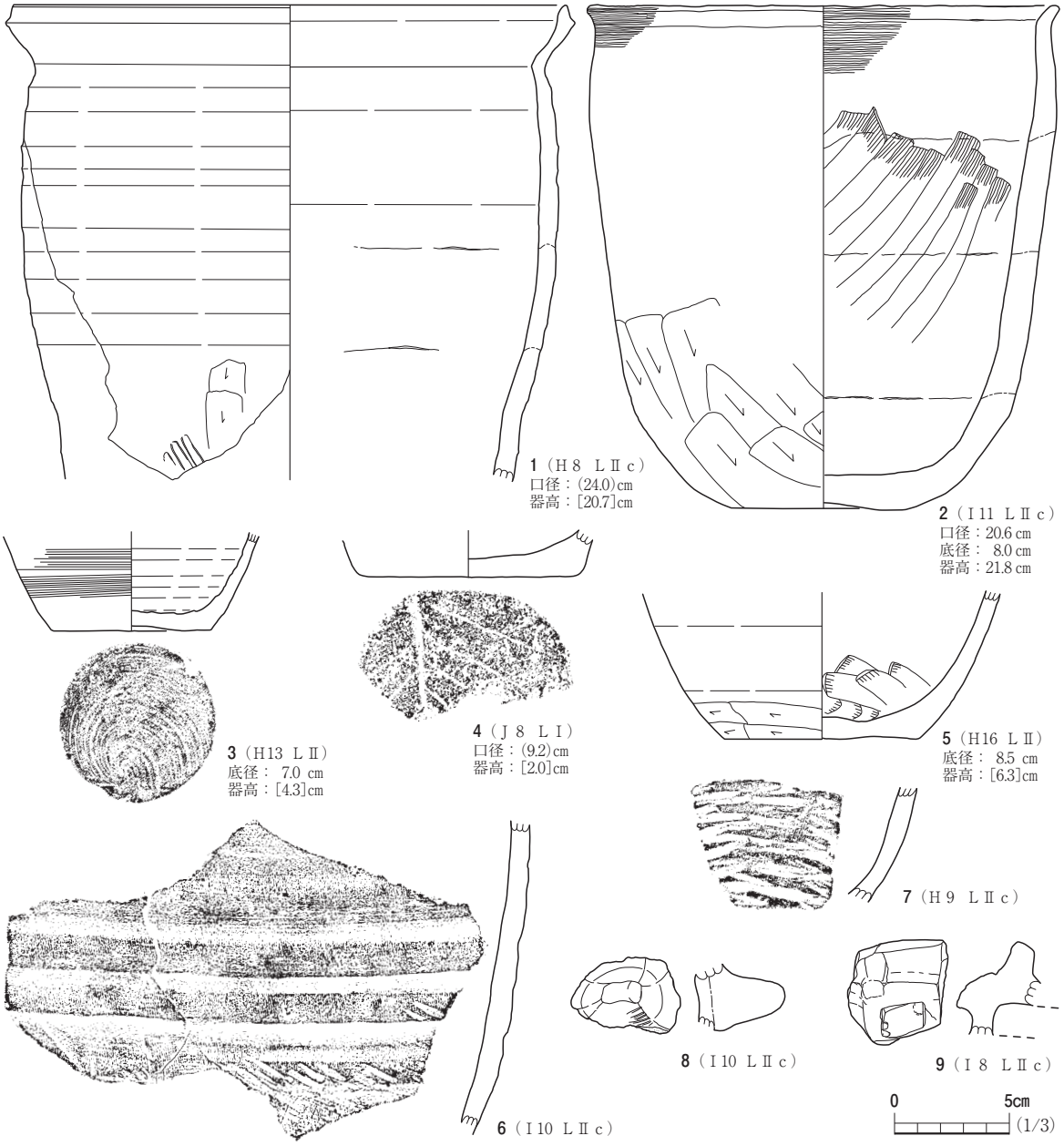


図98　遺構外出土遺物（２）

されている。６は下部にタタキメが認められる資料であるが，胴部の継ぎ目付近の破片と思われ，ロクロナデによってタタキメが一部消失している。７も体部下端の資料で，タタキ調整が施されている。図98－８は甑の把手と考えられるもので，ほぼ水平に張り出している。同図９は口縁部付近の破片で，外面と思われる側に断面が四角形の剝落痕が認められる。小片のため９の器種は不明であるが，鉄鍋模倣の把手付近の破片の可能性がある。

須 恵 器（図99，写真63・64）

図99－１～15は須恵器で，掲載資料のほとんどが調査Ⅱ区北東部の須恵器窯跡周辺から出土したものである。杯のロクロからの切り離しは，１～５・７が回転ヘラ切り技法，６が回転糸切り技法である。６・７は歪みが生じて著しく変形したもの，10は窯壁塊に底部外面が癒着した資料である。

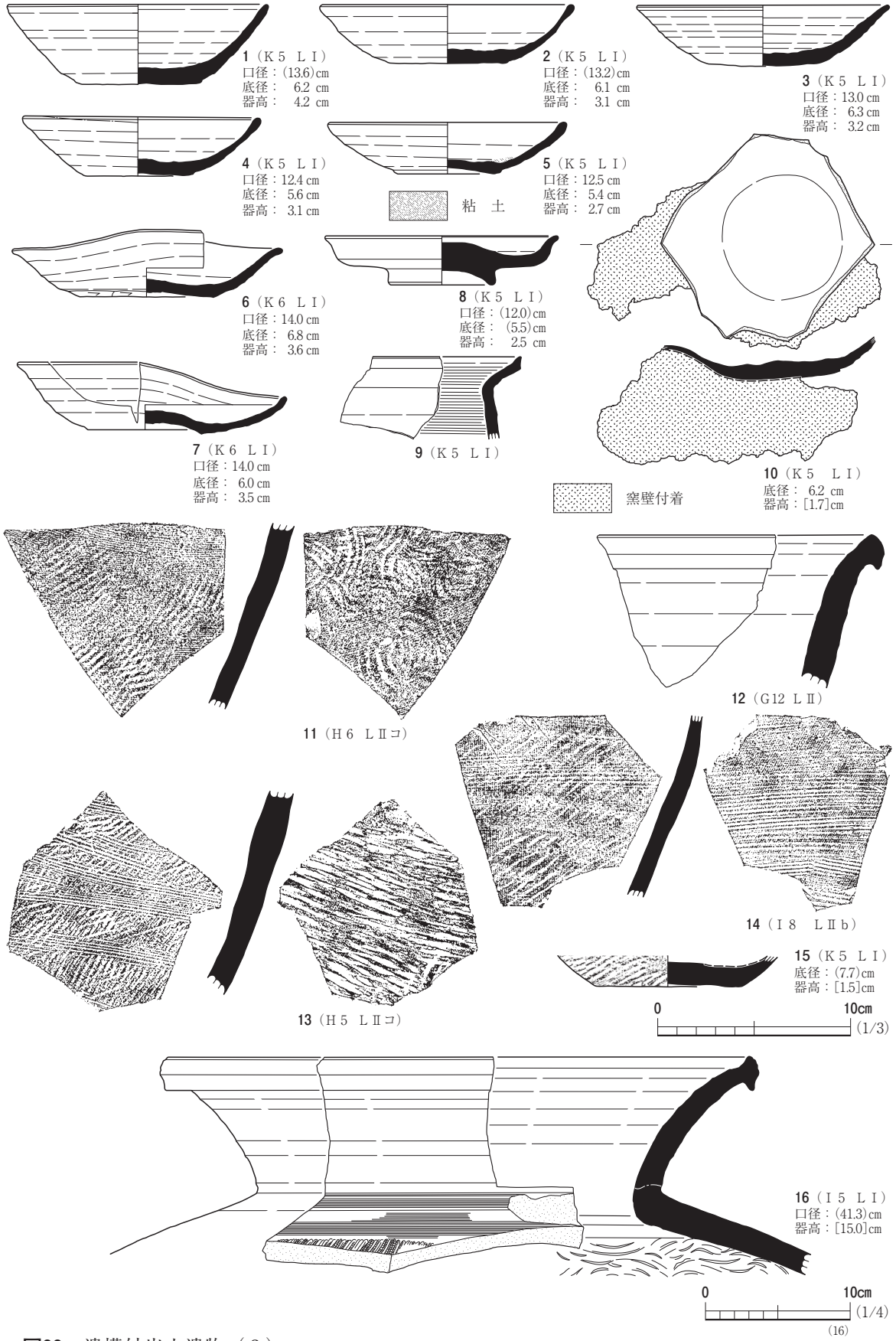


図99　遺構外出土遺物（３）

８は盤であるが，底部が肥厚して盛り上がっている。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部で短く外反する。９は灰色に還元した長胴甕の口縁部破片で，内面の調整はカキメ風のナデが施されている。11・13・14～16はタタキ調整が施された甕である。16は灰白色の大型甕の破片で，頸部にカキメが施されている。内面には当て具痕が残る。

瓦　　器（図100－１～９，写真64）

１～９は，調査Ⅱ区北西部のＫ５，Ｈ６グリッドから出土した瓦器である。１～９の出土層位はＬⅡコである。同北西部では，ＬⅡコの下層から平安時代の遺物包含層を確認している。１～９は底部外面が無調整で回転糸切り痕が認められるものの，いずれも器面がやや摩滅しているため細部の調整が明瞭に観察できない。１～３は器形が復元できた資料で，平高台状の底部から体部が直線的に開く。９は，比較的厚みのある体部が底部から直接立ち上がる。

鉄 製 品（図100－10・11，写真50・64）

10はＬⅡｃから出土した刀子で，平安時代の所産と推測される。切先付近が遺存するが，やや内反りの刀身である。11は，調査Ⅱ区北西部の斜面から出土した小刀である。出土層位はＬⅡコで，同層からは上記の瓦器が出土している。11の刀身は，鎬がない平造りである。また，身幅は比較的広く，寸詰まりな包丁形である。茎の端部は窄まり，目釘孔は茎の中央にあり，目釘や柄と思われる木質が付着している。

（香　川）

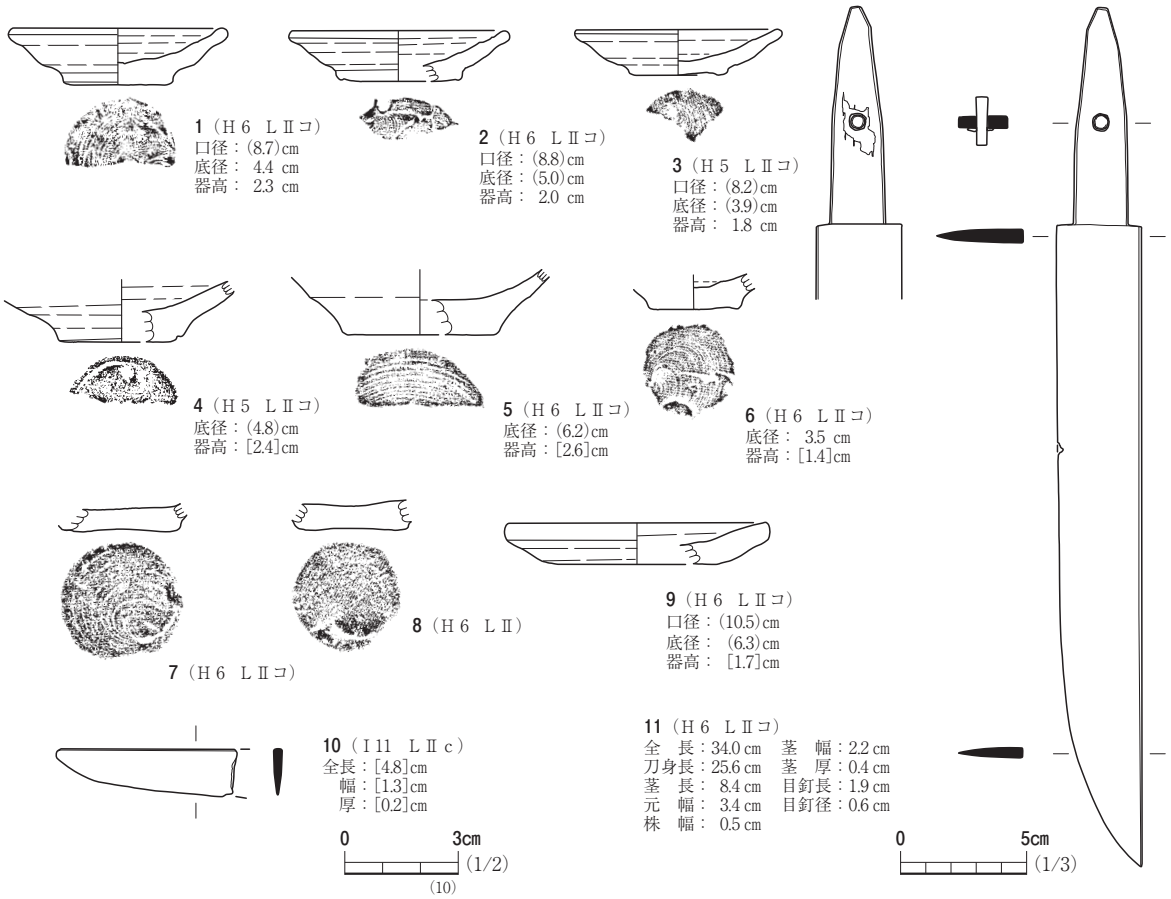


図100　遺構外出土遺物（４）

第８節　ま　と　め

調査Ⅱ区における平安時代の遺構には，竪穴住居跡・須恵器窯跡・土坑がある。ＳＫ10・25・32の各土坑は土師器を焼成した可能性があるもので，調査Ⅱ区の成果としては須恵器・土師器の土器生産に関連した遺構の発見に代表される。

調査Ⅱ区では平安時代の遺物包含層ＬⅡｃ・ⅢＥを確認しており，少なくとも同時代の生活面が２時期以上あったものと推測される。平成22年度の第１次調査では主にＬⅡｃを対象としたが，出土土師器を見る限りではＬⅢＥ関連の土器も含まれているようである。そこで本節では調査Ⅱ区から出土した土師器について概観し，土器の特徴から検出遺構の対応関係を確認する。

１．土師器について

調査Ⅱ区において，比較的まとまった量の土師器が出土した遺構はＳＩ08・13，ＳＫ25である。しかし，出土土師器の遺存状態が全般的に悪いため，特に土器の分類は行わない。ここでは遺構単位で杯類を中心に出土土師器の特徴をまとめる。

ＳＩ08　杯類は，無台杯(図72－１～３・５)・高台付杯(同図４・６)の２種類が認められる。無台杯１の特徴は，内外面ともロクロナデ調整が施された土師質の土器(赤焼土器)であること，器面の色が灰白～淡黄色を呈すること，底径／口径比0.35，器高／口径比0.31であること，体部が内湾し口縁部で短く開く器形であること，底部～体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整が施されていることなどである。他の杯類については遺存状態が悪く，詳細は不明であるが，ＳＩ08では内面黒色土師器と赤焼土器が混在する。その他の器種では，長胴甕の中に口縁部の屈曲が比較的弱いものが(図72－７・８)見られる。また遺構検出面の出土ではあるが，同図13のような丸底の大型鉢が出土している。ＳＩ08と同様の組成は，調査Ⅲ区のＳＩ06の出土資料に近い。

ＳＩ13　図77・78の掲載資料はその大半がℓ１からの出土品であるため，一括資料の抽出は困難である。しかし，ＳＩ13出土の土師器杯は未掲載遺物も含めて内面黒色の無台杯が主体であり，底部周縁～体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整を施しているものが多い。器形は，体部～口縁部まで内湾気味に開くか，または口縁部が微妙に外反する。また，図77－１のように器高が比較的深いものもある。長胴甕の口縁部は，頸部からの屈曲が比較的強い(図77－11・12，図78－１)。なお，ℓ１から須恵器杯(図78－３・４)も出土している。

ＳＫ25　ＳＫ25は，土師器焼成土坑の可能性が考えられる遺構で，遺構内堆積土にも破損品と思われる土器が含まれる。杯類は，無台杯(図94－５・７)・高台付杯(同図４・６)がある。各杯の内面の調整は２次的に熱を受けたらしく不明なものが多いが，５・６についてはヘラミガキ・黒色処理が観察された。５の底部周縁から体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。長胴甕の９は口縁部の屈曲が比較的弱い。ＳＫ25の出土資料は，ＳＩ08資料に類似する。

調査Ⅱ区の３遺構から出土した土師器は，形態的な特徴からＳＩ08・ＳＫ25とＳＩ13に大きく分けることが可能である。ロクロ土師器の無台杯については，時期差を推測する一つの方法として法量変化に着目し，一般的な傾向として底径／口径比の縮小化が指摘されていることは周知のとおりである。表11は調査Ⅱ区における無台杯類の底径／口径比，器高／口径比の度数分布表であり，比較資料として調査Ⅲ区のＳＩ06・11のデータを併せて掲載した。また，図101は調査Ⅱ区資料の底径／口径比，器高／口径比の合成図で，３カ所の楕円はそれぞれＳＩ06土師器・ＳＩ11土師器・ＳＩ11須恵器の分布エリアを示す。なお，ＳＩ06・11は重複関係にあり，ＳＩ06の方が新しい。

図101から，ＳＩ06土師器エリアにＳＩ08・ＳＫ25・ＬⅡｃ資料，ＳＩ11土師器エリアにＳＩ13土師器資料，ＳＩ11須恵器エリアにＳＩ13須恵器資料がおよそ含まれ，それぞれ器形の類似性が指摘される。このことから，ＳＩ13のℓ１出土の土師器・須恵器は同時期性が予想される。また，ＳＩ06・11の新旧関係から，ＳＩ13よりもＳＩ08・ＳＫ25・ＬⅡｃの方が新しいことが推測される。なお，ＳＩ06・08，ＳＫ25で採取した炭化物の放射性炭素年代測定では，それぞれ近接した年代観が得られており（付章参照），理科学的にも３遺構の同時期性に矛盾はない。

表11の底径／口径比について，ＳＩ08・ＳＫ25・ＬⅡｃの土師器は，そのほとんどが0.34～0.39に収まる。ＬⅡｃは喜多方市教育委員会が設定した２Ｔの第４層に対応し，調査Ⅱ区における平安時代の第１遺物包含層としたものである。ＬⅡｃから出土した土師器杯類には無台杯・高台付杯の２種類があり，無台杯の底径／口径比はおよそ0.40を境界としてＳＩ13と分離される。この傾向は調査Ⅲ区のＳＩ06・11の関係とほぼ同様である。ＬⅡｃ出土杯類の口縁部は，外方に開くものと開

表11　底径・器高／口径比度数分布表

底径／口径比	須恵器杯 Ⅱ区	須恵器杯 Ⅲ区	土師器杯 Ⅱ区	土師器杯 Ⅲ区
0.60				
0.59				
0.58		⑪		
0.57	●			
0.56	●			
0.55	●●			
0.54	●●●●◎◎			
0.53	●○	⑪		⑪
0.52	●●○○◎◎◎	⑪⑪⑪		⑪⑪
0.51	●●○◎◎◎◎◎	⑪		
0.50	●●●○○◎◎◎	⑪⑪	⑬	
0.49	●◎◎◎	⑪		⑪
0.48	◎◎◎◎◎◎			⑪
0.47	●●○◎	⑪		
0.46	●◎◎◎◎			⑪
0.45	●●◎⑬		⑬⑬	
0.44	●○○◎◎◎⑬	⑪		
0.43	◎		▲	⑪
0.42	○◎◎◎			
0.41	●◎◎			⑥⑪
0.40			⑬	⑪
0.39			△▲	
0.38			▲	⑥⑥
0.37			△	⑪
0.36			▲	⑥⑥
0.35			⑧▲	
0.34			▲	⑥⑥⑥
0.33				⑥⑥
0.32				⑥
0.31				
0.30				

器高／口径比	須恵器杯 Ⅱ区	須恵器杯 Ⅲ区	土師器杯 Ⅱ区	土師器杯 Ⅲ区
0.45				⑪
0.44				⑪
0.43				⑪
0.42				
0.41				⑪
0.40			⑬	
0.39				
0.38				
0.37				
0.36				⑪
0.35			▲	⑥⑥
0.34			▲	
0.33			⑬	⑪
0.32				⑥
0.31			⑧▲	⑥⑪⑪⑪
0.30	●◎◎	⑪	⑬⑬△	⑥
0.29	◎⑬	⑪⑪⑪⑪	△▲	⑥⑥⑥⑥⑥⑥
0.28	●●●●◎◎◎◎	⑪	▲	⑪
0.27	●●●◎◎	⑪		
0.26	●●●○◎◎◎◎◎	⑪	▲	
0.25	●●●○○◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎⑬			
0.24	●●●●●○○○◎◎	⑪		
0.23	●●○○◎◎◎	⑪		
0.22	○○◎◎◎◎			
0.21		⑪		
0.20	●●●◎			
0.19	◎			
0.18				
0.17				
0.16				
0.15				

須恵器…●：SR01，○：SR03，◎：SRW03，⑪：SI11，⑬：SI13　土師器…⑥：SI06，⑧：SI08，⑪：SI11，⑬：SI13，△：SK25，▲：ＬⅡｃ

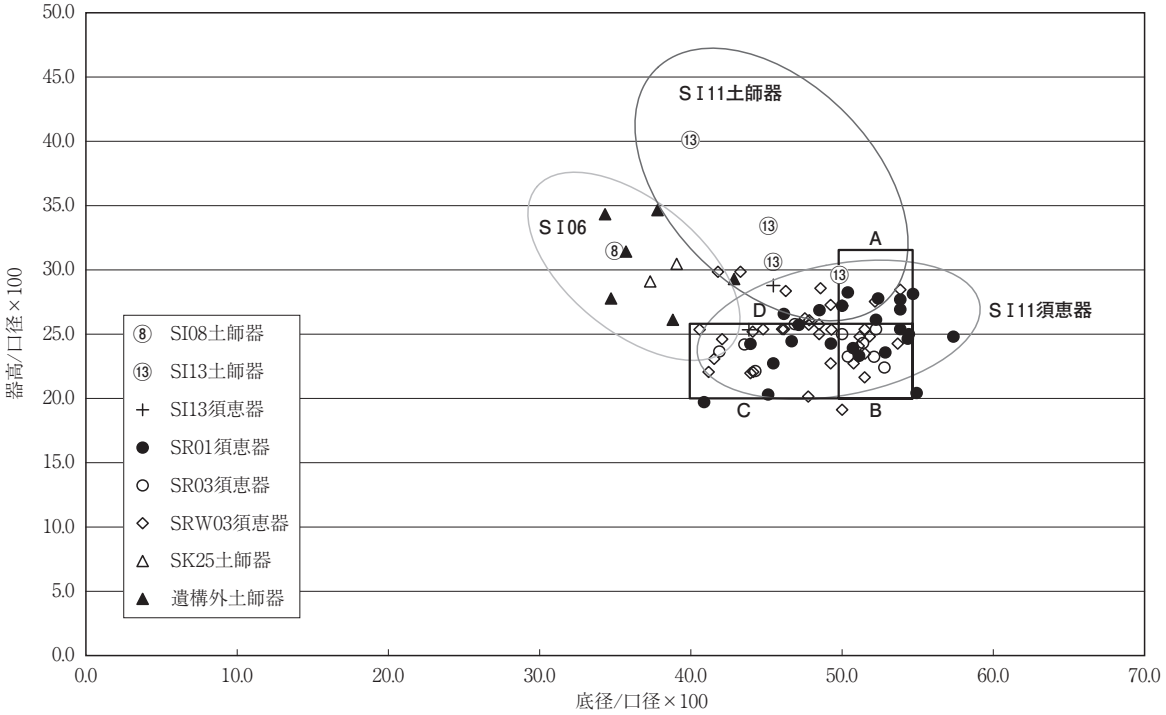


図101　調査Ⅱ区出土杯指数分布

かないものが見られる。なお，図97－４については，体部下半の膨らみが弱い逆台形状の器形からＳＩ13資料に近いと推測され，底径／口径比についても0.43を示す。同４はおそらくＬⅡｃに混入したものと推測され，ＬⅡｃの杯類はＳＩ06・08と同様に椀形が基本形である。杯類の再調整技法には手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリの２種類があり，無調整品は比較的少ない。この再調整から，ＬⅡｃの出土土器は宮城郡２群土器(村田：1995)以前に比定されるだろう。

ＬⅡｃ出土の高台破片は末広に開くもの(図97－15・16など)や，同図13のように断面が三角の短い高台破片がある。13の底部外面には高台との接合部に菊花状の接着痕(村田：1995)が認められ，この調整痕からＬⅡｃの上限を９世紀第４四半期に置くことが可能になるかと思われる。その他，ＬⅡｃから鉄鍋模倣の可能性がある把手状の小破片(図98－９)が出土している。

一方，ＳＩ13出土資料は，第１遺物包含層に先行するものと推測され，杯類は無台杯が中心である。また，須恵器杯の出土から，ＳＩ11・ＳＲ01～03との関連性も窺える。なお，ＳＩ13に近い基本土層(図59：Ｋ－Ｋ′)の堆積状況からＳＩ13出土とした遺物は，第２遺物包含層のＬⅢＥ(第２遺物包含層)に起因する可能性もある。

ＳＩ13資料には比較的器形が深い図77－１が含まれていたが，ＳＩ11資料の器高／口径比を見るとおよそ0.31～0.36，0.41～0.45に二分され，土師器杯については大きく２種類の形状的な規格があったものと推測される。ＳＩ11出土土師器杯の口縁部は内湾気味の体部からそのまま立ち上がるものが多いが，ＳＩ13資料では口縁部がわずかに外反するものが認められるため，ＳＩ11・13は椀形杯への直前段階の時期に位置づけられるであろうか。土師器の本格的な磁器指向型開始は９世紀中頃とされる(菅原：1996)。

２．須恵器について

ＳＲ01～03は遺存状態が非常に悪く，窯体の構造を復元することは困難である。立地斜面や遺存部の状況から半地下式の窖窯であったと推測されるが，天井部の構架材などは確認できなかった。また，灰原についても浸食された可能性がある。

ＳＲ01・03・ＳＲW03から確認された器種は無台杯・盤・蓋・甕であるが，出土数から生産の主体は杯である。杯のロクロからの切り離し技法は大半が回転ヘラ切りであり，当該期の土師器と異なる。須恵器杯には火だすき（図82－７など）や，口縁部に幅１㎝前後の変色帯（図81－10など）が巡るものがあり，重焼きによる焼成であったと推測される。焼台や平石などは出土していない。窯跡の内外から大型の須恵器甕の破片が出土しているが，焼台として利用された可能性もある。

須恵器杯の還元色は灰色または黄みを帯びた色調が多く，全般的に還元焔焼成は良好でない。また堅緻な赤褐～褐色を呈し，一度も還元焔焼成を経ていないものも多い。土師器のような浅～淡黄色を呈する杯の中には，比較的遺存状態が良好なものも認められた。窯跡周辺から出土する杯は性格上，大半が破棄品と思われるが，還元不良品についても流通には乗らなかった可能性がある。

調査Ⅱ区から出土した須恵器杯の分類については，山中編年案（1999）に準拠し，底径／口径比が0.50～0.55で，器高／口径比が0.27～0.32のものをＡ類，0.20～0.26のものをＢ類とした。底径／口径比が0.40～0.50で，器高／口径比が0.20～0.26のものをＣ類，0.27～0.32のものをＤ類とした。Ａ～Ｄ類は，山中編年案のＤ～Ｇ類にそれぞれ対応する。また，体部の形状から直線的なものを１類，曲線的なものを２類としたが，明確な傾向は見出せない。

調査Ⅲ区ＳＩ11の須恵器杯（図116）は，器高／口径比のピークが0.29にあり，Ａ・Ｄ類を主体として，他にＢ類が認められる。土師器・須恵器杯の法量的な構成から，ＳＩ11資料は山中編年の「ホ」グループに類似する可能性がある。一方，調査Ⅱ区の須恵器杯は，器高／口径比が0.26以下となるＢ・Ｃ類が主体的である。Ｂ・Ｃ類は，山中編年案のＥ・Ｆ類に対応するもので，当該期の中通り地方では不在とされる須恵器杯である（山中：2000）。

以上，出土土師器・須恵器杯類から調査Ⅱ区の成果を要約すると，以下のとおりである。

①　関連遺構：ＳＩ08・ＳＫ25（土師器焼成土坑）・第１遺物包含層（ＬⅡｃ）
　　時　　期：９世紀第４四半期～10世紀前葉
　　器　　種：土師器（含赤焼）無台杯・有台杯（器形：椀形，回転糸切）
　　底径／口径比0.34～0.39，器高／口径比0.25～0.35

②　関連遺構：ＳＩ13・ＳＲ01～03（須恵器窯跡）・第２遺物包含層（ＬⅢＥ）
　　時　　期：９世紀中葉～後葉
　　器　　種：土師器無台杯（器形：杯形・椀形，回転糸切），須恵器無台杯（回転ヘラ切）
　　土師器…底径／口径比0.40～0.50，器高／口径比0.30～0.40
　　須恵器…Ｂ・Ｃ類（器高／口径比0.20～0.26）主体　　（香　川）

第４章　調査Ⅲ区の遺構と遺物

第１節　　概　　要（図102）

調査Ⅲ区は今回の事業に関連する調査範囲の中では南西部にあたる部分である。グリッドとしては，東西がＧ～Ｌグリッド列，南北が17グリッド列以南となる。地形的には調査Ⅰ区に位置する３段目の小段丘面から落ちる急傾斜の崖面，２段目の小段丘面，最下位の平坦面を含む。25グリッド列以北においては２段目の小段丘面の形成が顕著であり，最下位の平坦面までが調査範囲となる。26グリッド列以南では平坦面は形成されず，北西に向かって下る比較的緩やかな斜面となる。この部分では最下位の平坦面は遺跡範囲から除外されている。平成22年度の調査範囲は，このうち調査Ⅲ区北部の17グリッドの調査Ⅱ区との境界から23グリッド列までの3,000㎡となっており，２段目の小段丘および最下位の平坦面までが調査対象となる。

２段目の小段丘は，標高が175～176.5ｍ程度の棚状の平坦面である。東側の３段目の小段丘面との高低差が15ｍ程あり，西側は最大1.5ｍ程の高低差をもって最下位の平坦面へと繋がる。東西10～18ｍの幅をもち，南北の全長は80ｍ程度の長さに及ぶ。小段丘上も単純に平坦ではなく，20～24グリッド列は東からの沢２，南東からの沢３とする沢地形が入り，高さにして１ｍ程周囲から窪んでいる。この小段丘は，次節でも述べる断ち割り調査によって，阿賀川による洪水堆積物に加え，崖面上位の斜面崩壊による堆積物が，河岸段丘状に取り残されたことにより形成されたものと想定される。最下位の平坦面は，標高170～173ｍを測る，西方に向かって下る緩斜面である。洪水堆積土である砂・シルトのみが認められ，斜面からの崩落土は認められない。北端にはⅡ区南端の沢へと連なる沢４，21グリッド列には西へと下る沢１が下刻される。西端は次節で述べるように新期の洪水層によって，遺物包含層が切られている。

調査区内からは竪穴住居跡２軒（６・11号住居跡），土坑８基（18・21～24・29～31号土坑），溝跡１条（５号溝跡），竪穴遺構１基（１号竪穴遺構），小穴25個が検出されている。土坑には，焼成土坑やロクロピットといった土師器の生産に関連すると思われる遺構も含まれている。これらの遺構はいずれも２段目の小段丘上に位置し，特に平坦であるＪ17～19グリッドに集中する。北東端で検出された住居跡２軒は平安時代のものであり，同時期の包含層に被覆されていた溝跡および土坑もこれに近い時期の遺構と考え得る。小穴に関してはこれらの遺構との重複が認められ，いずれも住居跡や土坑よりも新しいと判断される。また，竪穴遺構は近世以降の遺構である。これ以外の部分については，20～23グリッド列の沢地形堆積土が平安時代の遺物包含層となっている。最下位の平坦面は，遺物が少量出土するに過ぎない。

出土遺物は９世紀代の土師器が大半を占め，同時期の須恵器が次ぐ。その他は，これ以降の遺物，特に陶器や鉄製品の出土が目に付く程度である。

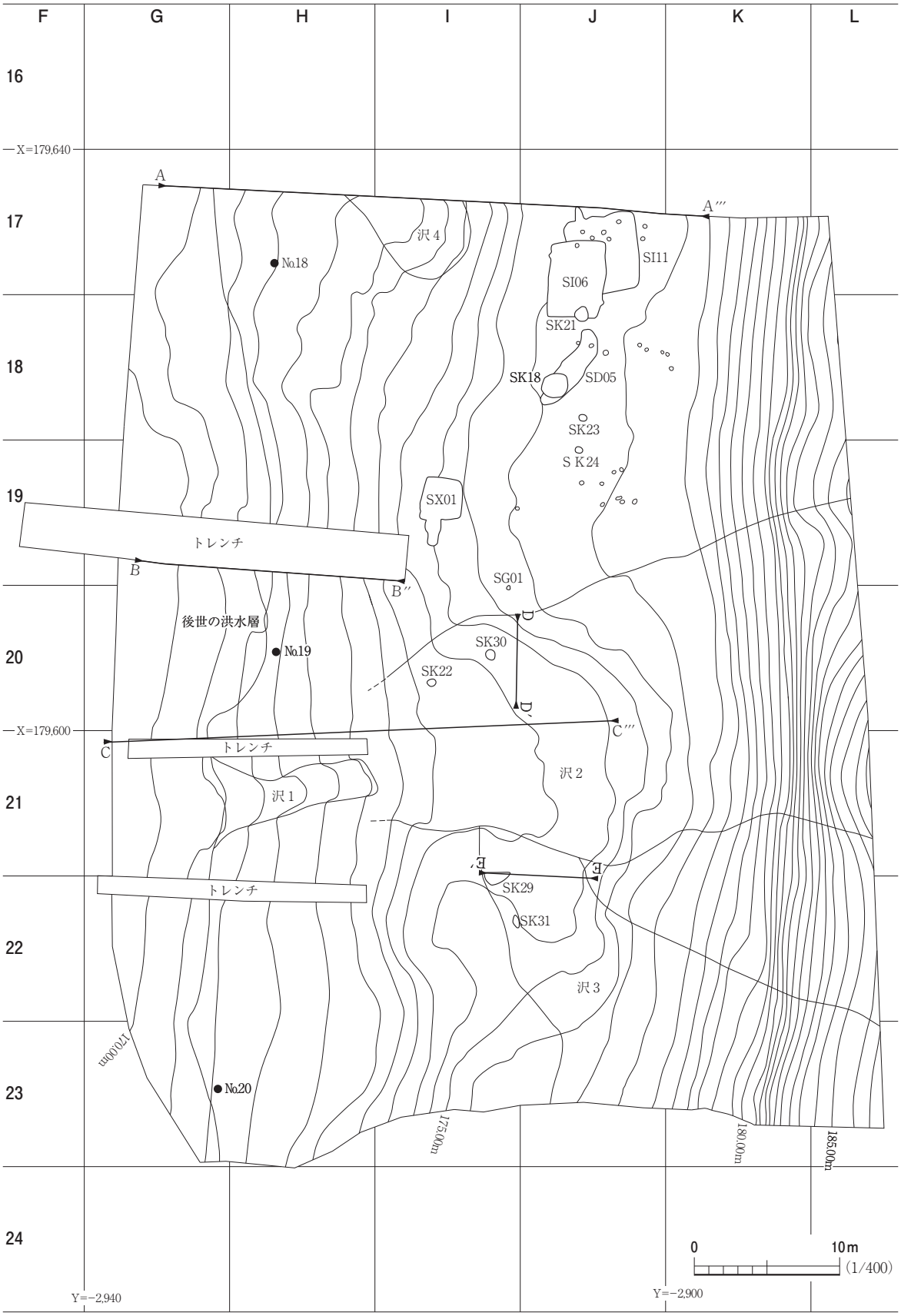


図102　Ⅲ区遺構配置図

第２節　基 本 土 層（図103～106，写真67～72）

遺構内堆積土を除く調査区内基本土層の観察は，Ⅱ区との調査区境（Ａ断面），喜多方市教委の設定した９Ｔ（Ｂ断面），21グリッド列に設定した畦（Ｃ断面）において行った。結果，洪水等の河川による堆積物，東方の斜面上位からの崩落土が複雑に堆積する状況が認められた。これらの堆積物に対してⅡ層を遺物包含層，Ⅲ層上面を遺構検出面とする，Ⅰ～Ⅳ層（ＬⅠ～Ⅳ）に大きく分けて考えることとした。各層はその分布や土質の違いによってさらに細分される。その他に，沢１～４と呼称した旧流路状の地形部分についてはＣ断面およびＪ20グリッド（Ｄ断面），Ⅰ・Ｊ22グリッド（Ｅ断面）に設定した畦で観察を行った。これらは遺構としては取り扱わないものの，堆積土層については基本土層とは分けて遺構内堆積土と同様の扱いとした。以下に各層の細分，堆積状況および特徴について詳述する。

ＬⅠは東部の小段丘面を被覆する表土層であるＬⅠａ，その下位に認められる包含層上に乗る斜面地山粘土の崩落土層であるＬⅠｂ，最下位平坦面を被覆する砂質の表土層であるＬⅠｃの３層に分けられる。

ＬⅡは平安時代の遺物包含層を一括した。図103のＡ断面に見られるＬⅡａ～ｃは，北東部の小段丘上にほぼ水平に堆積する土層である。ＬⅡａは黒味がかったシルトで斜面崩落前の旧表土層と考えられる。ＬⅡｂ・ｃは砂質土で，この周辺の遺構を埋めている。大部分の遺物はこれらから出土する。ＬⅡｄ・ｅは最下位平坦面に認められる。ＬⅡｄ１はＨ17・18グリッドにのみ認められるシルト層である。ＬⅡｄ２は西方に下って堆積する粘性の強いシルト層で多量の炭化物を含んでいる。20グリッド列以北に堆積し，西側はＬⅡＲによって切られている。このＬⅡｄ２はⅡ区のＬⅢＥに近い土質であるが，調査区境に沢が入り込むため両層の連続は確認できていない。ＬⅡｅについてはＬⅡｄ１の下位でのみ確認された砂質土層である。ＬⅡｄ・ｅ層からの遺物出土点数は少ない。

ＬⅡＲとしたものについては，調査区西端に堆積する新しい時期の洪水層である。陶磁器片や角釘が出土しており，近世前後の堆積と想定できる。なお，Ｂ断面に認められるＬⅡＲ９は，地震を要因とすると考え得る円弧すべりによる地すべり層である。ＬⅡＲ９ｇとした層は土師器を包含しており，元はＬⅡｄ２に比定される。この上にはＬⅡＲ９ｆとした比較的目の粗い砂が確認でき，これはⅡ区ＬⅢＤと類似している。これらよりも上位のＬⅡＲ９ｂやＬⅡＲ９ｄはⅡ区ＬⅡに近い暗色系の砂質土である。ここから，Ⅲ区の最下位平坦面については，元来Ⅱ区と類似した堆積物が存在していたが，現況では失われている可能性を想定できる。

ＬⅢは遺構検出面以下の土層のうち，遺跡よりも古期の斜面崩落土層上の堆積物および河川の側方付加堆積物と考え得る土層をここにまとめた。斜面崩落土については観察地点ごとに堆積状況が異なっており，断面ＡとＣにおいては統一を図らず別記号によって細別した。ＬⅢａ～ｈは北東部

図103　Ⅲ区基本土層（１）

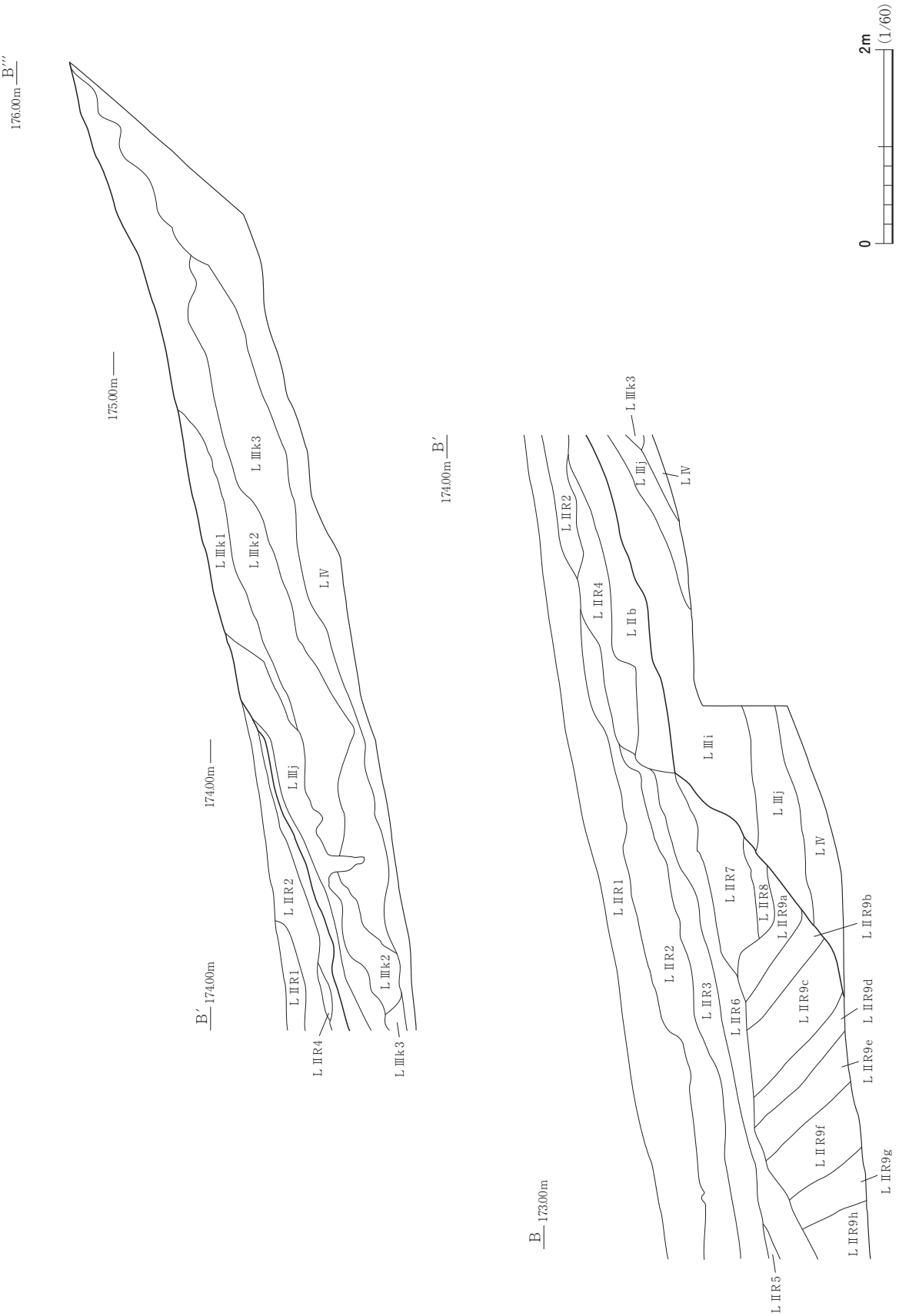


図104　Ⅲ区基本土層（2）

177.00m C'''
176.00m C''
175.00m
174.00m
173.00m C'
172.00m C
C'' 176.00m
C' 173.00m
沢２ℓ１
沢２ℓ２
沢２ℓ３b
倒木痕
攪乱
ⅢＩ
ⅢＩ
ⅢＩ

Ⅲ区基本土層Ａ－Ａ′

ＬⅠａ　暗褐色土　10YR3/3（小礫少量，表土層）
ＬⅠｂ　明黄褐色土　10YR6/6（斜面崩落土）
ＬⅠｃ　暗褐色砂　10YR3/3（炭化物微量）
ＬⅡＲ1 にぶい黄褐色砂　10YR4/3
ＬⅡＲ2 暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3（Ⅱ区沢ℓ4相当）
ＬⅡＲ3 褐色砂　10YR4/4
ＬⅡａ　黒褐色土　10YR2/2（炭化物・焼土粒微量）
ＬⅡｂ　黒褐色砂質土　10YR3/1（炭化物少量）
ＬⅡｃ　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物微量）
ＬⅡｄ　暗褐色土　10YR3/4（炭化物少量，Ⅱ区ＬⅢＥ相当か）
ＬⅡｅ　褐色砂質土　10YR4/4
ＬⅢａ　黒褐色土　10YR2/2（明黄褐色土粒・小礫少量）
ＬⅢｂ　褐色土　10YR4/4（炭化物微量）
ＬⅢｃ　黒褐色土　10YR3/1（炭化物少量）
ＬⅢｄ　にぶい黄褐色砂　10YR4/3
ＬⅢｅ　にぶい黄褐色土　10YR4/3
ＬⅢｆ　黒色土　10YR1.7/1（シルト岩粒少量）
ＬⅢｇ　にぶい黄褐色土　10YR5/4（シルト岩粒・にぶい黄褐色砂多量）
ＬⅢｈ　にぶい黄褐色土　10YR4/3
ＬⅢｉ　褐色砂　10YR4/4（粘質土互層に入る）
ＬⅢｊ　暗褐色土　10YR3/4
ＬⅣ　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/4
（炭化物を含む黒～暗褐色土互層に入る）

Ⅲ区基本土層Ｂ－Ｂ′

ＬⅡＲ1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
ＬⅡＲ2　褐灰色砂質土　10YR4/1
ＬⅡＲ3　にぶい黄褐色砂　10YR4/3
ＬⅡＲ4　にぶい黄褐色砂　10YR5/4
ＬⅡＲ5　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
ＬⅡＲ6　褐灰色砂質土　10YR4/1
ＬⅡＲ7　にぶい黄褐色砂　10YR5/3
ＬⅡＲ8　褐灰色砂質土　10YR4/1
ＬⅡＲ9　地すべり層
ＬⅡＲ9a 灰黄褐色砂　10YR6/2
ＬⅡＲ9b 褐灰色砂質土　10YR4/1
ＬⅡＲ9c にぶい黄褐色砂　10YR5/3
ＬⅡＲ9d 褐灰色砂質土　10YR4/1
ＬⅡＲ9e にぶい黄褐色砂　10YR4/3
ＬⅡＲ9ｆ 灰黄褐色砂　10YR6/2（目の粗い砂，Ⅱ区ＬⅢＤか）
ＬⅡＲ9ｇ 灰黄褐色土　10YR5/2（ＬⅡｄか）
ＬⅡＲ9ｈ にぶい黄褐色土　10YR5/3
ＬⅡｄ　灰黄褐色土　10YR5/2（炭化物多量，Ⅱ区ＬⅢＥ相当か）
ＬⅢｉ　灰黄褐色砂　10YR6/2（灰黄褐色土互層に入る）
ＬⅢｊ　灰黄褐色土　10YR5/2（炭化物少量）
ＬⅢｋ1　にぶい黄橙色砂質土　10YR7/4
ＬⅢｋ2　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/3（灰黄褐色砂少量）
ＬⅢｋ3　灰黄褐色砂　10YR6/2（にぶい黄褐色土のラミナ）
ＬⅣ　灰黄褐色砂　10YR6/2
（炭化物を含むにぶい黄褐色土互層に入る）

Ⅲ区基本土層Ｃ－Ｃ′

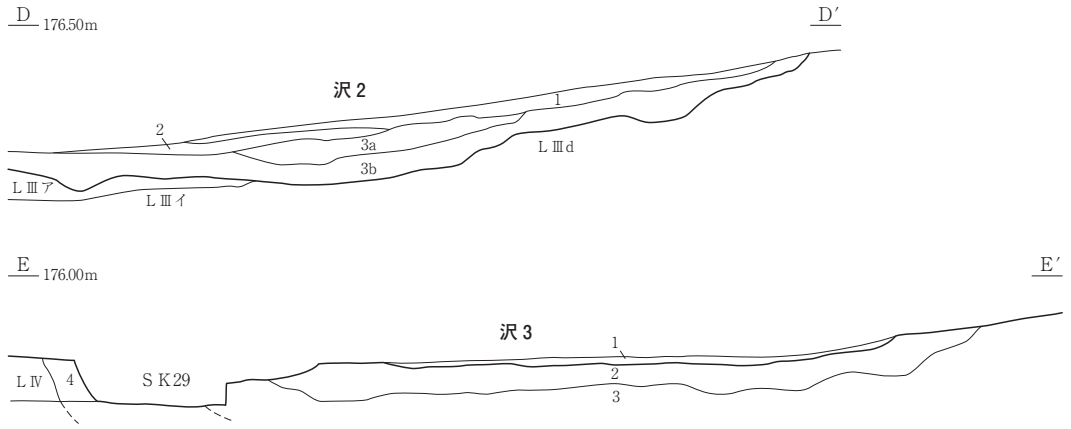
ＬⅡＲ1 にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
ＬⅡＲ2 褐灰色砂　7.5YR4/1
ＬⅢア　黄褐色土　2.5Y5/3（炭化物微量）
ＬⅢイ　黒色土　10YR2/1（シルト岩片・明黄褐色土塊多量）
ＬⅢウ　明黄褐色土　10YR6/6（斜面崩落土）
ＬⅢエ　黄褐色土　2.5Y5/4（シルト岩片・明黄褐色土塊少量）
ＬⅢオ　明黄褐色粘質土　10YR6/6
（シルト岩・Ⅰ区ＬⅣ多量，斜面崩落土）
ＬⅢカ　黄褐色土　2.5Y5/4（中・最下部に灰黄褐色砂のラミナ挟む）
ＬⅢキ　にぶい黄橙色砂　10YR6/3（褐灰色粘土塊多量）
ＬⅢク　暗褐色砂質土　10YR3/3（黒色土を縞状に挟む）
ＬⅢケ　明黄褐色粘質土　10YR6/6（シルト岩多量，斜面崩落土）
ＬⅢコ　黄褐色土　2.5Y5/4（下部に明黄褐色土塊多量）
ＬⅢサ　灰黄褐色砂質土　10YR4/2（シルト岩片少量）
ＬⅢシ　褐灰色砂質土　10YR4/1（シルト岩片多量）
ＬⅢス　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/3
（シルト岩片・明黄褐色土塊多量）
ＬⅢセ　褐灰色砂質土　10YR4/1（シルト岩片・明黄褐色土塊多量）
ＬⅢソ　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/3
（シルト岩片・明黄褐色土塊多量）
ＬⅢタ　明黄褐色粘質土　10YR6/6
（シルト岩多量，下部ににぶい灰黄褐色砂質土挟む，斜面崩落土）
ＬⅢチ　明黄褐色粘質土　10YR6/6（斜面崩落土）
ＬⅢツ　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/3
ＬⅢテ　褐灰色粘質土　10YR5/1
ＬⅢト　褐灰色砂質土　10YR4/1
（上面にシルト岩粒，にぶい黄褐色砂多量）
ＬⅢｉ　褐色砂　10YR4/6
ＬⅢｊ　褐色砂質土　10YR4/6（上面に灰黄褐色土のラミナ）
ＬⅢｋ　褐色砂質土　10YR4/6（上面に灰黄褐色土のラミナ）
ＬⅣ　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/4（褐灰色粘土のラミナ）

遺構？堆積土Ａ－Ａ′

1　黒褐色土　10YR2/2（小礫多量）
2　暗褐色土　10YR3/4（炭化物少量）
3　暗褐色土　10YR3/3（明黄褐色土粒少量）
4　暗褐色土　10YR3/3（炭化物微量）

倒木痕堆積土Ｃ－Ｃ′

1　暗褐色砂質土　10YR3/3（黒色土塊多量）
2　黒色土　10YR2/1（焼土塊・炭化物少量）



沢２堆積土
1　黒色土　10YR2/1（明黄褐色土塊を含むラミナ）
2　黒褐色土　10YR3/1（シルト岩片・明黄褐色土塊多量）
３ａにぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
３ｂ暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物少量）

沢３堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR2/2（炭化物少量）
2　灰黄褐色土　10YR5/2（炭化物多量，ＬⅢア相当か）
3　にぶい黄橙色砂質土　10YR6/4
（シルト岩片・明黄褐色土塊多量，ＬⅢエ相当か）
4　褐灰色砂　7.5YR5/1（炭化物少量）

0　2m（1/60）

図106　Ⅲ区基本土層（４）

の平坦面で観察される土層である。ＬⅢｈとした流路状の落ち込み上にＬⅢａ・ｆ・ｇとした斜面から崩落した黒色土・岩屑を挟みながら，その他のシルト・砂が水平に近い状態で堆積することにより，遺構集中部の平坦な基盤地形を形成している。ＬⅢｉ～ｋは西部の新期洪水層範囲沿いに認められる，褐色砂と炭化物を含む暗褐色シルトの互層である。層理が川へ向かって急傾斜で下り，ＬⅣ堆積後に側方付加された河川堆積物と考え得る。21グリッド以南ではＬＩｃ直下でこれらの層が露出する。ＬⅢア～チはＣ断面で確認された層順である。崩落土層がＡ断面よりも大きな塊として認められ，これらがＡ断面でのＬⅢｃ以下の褐色系の砂質土の堆積中に崩落したものと想定される。ＬⅢア～コ，ＬⅢサ～チが崩落時期の単位となると思われる。ＬⅢツ～トは水平堆積し，ＬⅢトはＡ断面ＬⅢｇに類似した細粒の岩屑が混じる層である。

ＬⅣはＬⅢに比して目の細かい砂で，炭化物を含む暗褐色のシルト・砂質土のラミナを複数含んでいる。図103のＡ断面にはこれらのラミナも示したが，川に近い西方でやや乱れがあるものの，層理がほぼ水平を呈しているのが見て取れる。

沢１堆積土は土層断面図を示していないが，暗褐色土の単層でＬⅡＲ２とした新期の洪水層へと繋がっており，近世前後の流路と考えられる。若干の遺物が出土する。沢２はℓ１がＬⅡａに類似し，ℓ２は崩落土を多量に含む。ℓ３は上部のａと下部のｂに分けられる。ＬⅡｂに類似するℓ３ｂは，やや多くの遺物を含んでいる。沢３堆積土は４層を確認した。うち遺物を包含するのはℓ１で，ℓ２との層理面に包含する割合が高い。炭化物を多量に含むℓ２は，周辺に所在する遺構の検出面となっている。ℓ３以下から遺物は出土しない。沢４堆積土について，Ⅲ区内で確認できるのはⅡ区沢ℓ４とされた層のみである。Ⅱ区の土層観察では，ℓ４は新期洪水層へと繋がっていくことが確認されており，これはⅢ区内での土層観察ではＬⅡＲ２に比定される。これよりこの沢は近世前後に形成されたものと推定できる。（山　元）

第3節　竪穴住居跡

Ⅲ区の１次調査では，２軒の竪穴住居跡を確認した。これらの住居跡は，調査区の北東端で重複して確認されたもので，いずれも平安時代のものである。この他，今回確認された住居跡の北側では，未調査ではあるが，ほぼ同様な時期と考えられるⅡ区の14号住居跡の存在が確認されている。

６号住居跡　ＳＩ06

遺　　構（図107・108，写真73～76）

本遺構は，調査区北東部のＪ17・18グリッドに位置する。２段目の小段丘北部の平坦面に構築され，ＬⅢｂ上面で検出した。ＳＩ11，ＳＫ21と重複し，新旧関係はＳＩ11が古く，ＳＫ21が新しい。周辺にはＳＤ05，ＳＫ18が隣接する。

平面形は長方形で，東・西壁が若干東へ傾くため平行四辺形状となる。規模は長軸5.18ｍ，短軸4.05ｍを測り，検出面からの深さは最大23㎝である。東壁は急角度で立ち上がり，それ以外の部分では西に向かって壁高が低くなる。床面は平坦である。貼床は，カマドのある住居跡南部に認められ，硬く締まっている。また，東壁から炉の間とカマドの周辺はさらに硬く踏み締まっている。

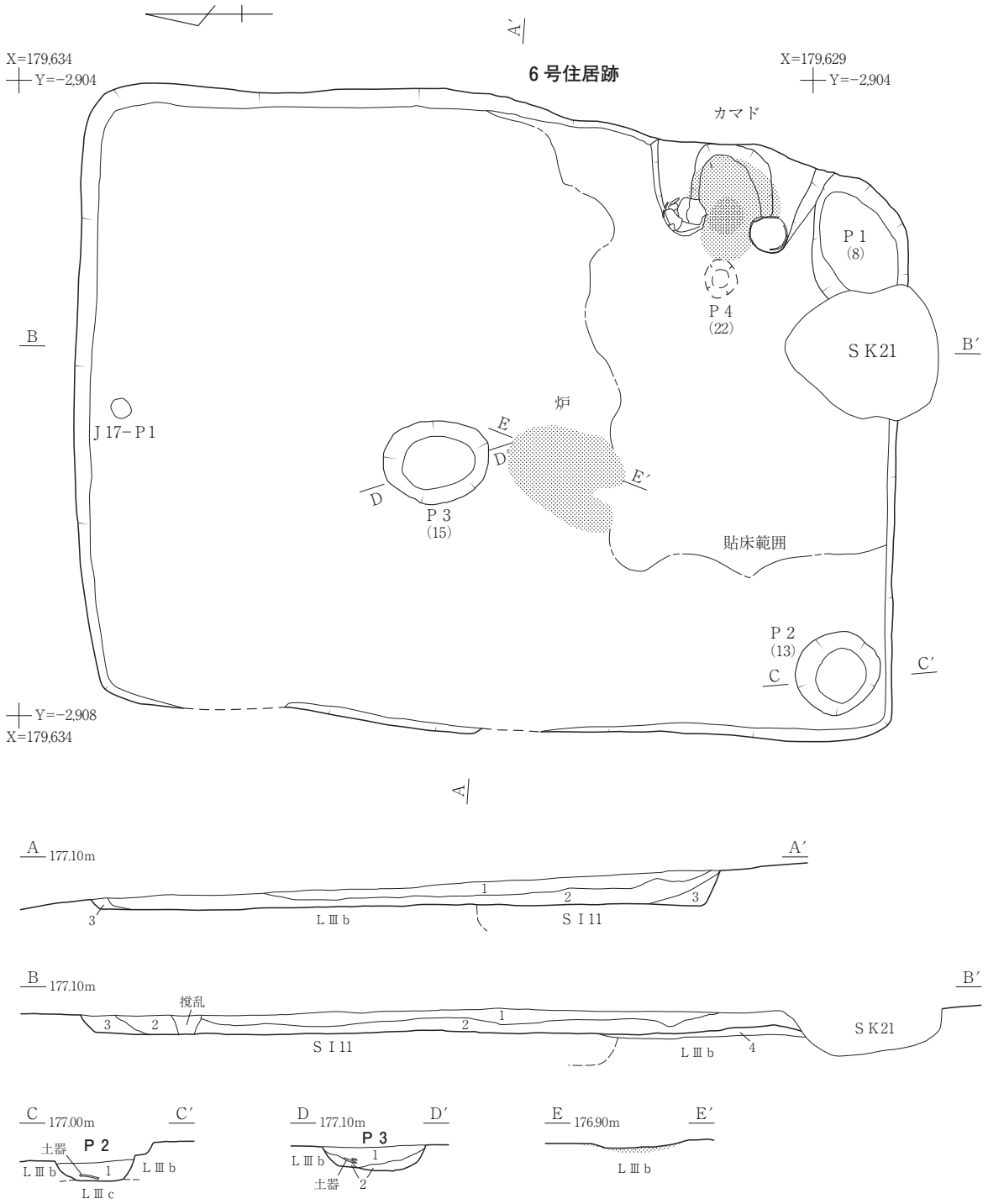
堆積土は４層に細分された。ℓ１～３はレンズ状堆積を示す自然堆積土，ℓ４は黄褐色粘土粒を多く含む貼床である。ℓ１は基本土層のＬⅡｂ，ℓ２がＬⅡｃを主体とするものと考えられる。

屋内施設としては，カマド１基，炉１基，ピット４個が確認された。カマドは住居跡南東隅付近の東壁に構築され，袖部は貼床の上で確認された。袖先端部の図110－４・５の土師器長胴甕は，それぞれ倒立させた状態で袖の構築材として設置されている。焚口の幅は30㎝で，底面での奥行は37㎝である。長軸67㎝，短軸58㎝と焚口外まで赤褐色に焼土化し，その厚さは最大８㎝を測る。さらに焼土面の中央部は焼き締まっている。カマド内堆積土は５層に分けられ，ℓ１が流入土，ℓ２がカマドの構築材と思われる焼土塊や粘土塊を含む土，ℓ３は焚口付近にある木炭層である。ℓ４・５はカマド袖の構築土である。ℓ２はカマド上部を壊した土を埋め戻したものと考えられる。

カマドの周囲には土器が多数出土しているが，特に図108の下部に示したように，カマドの奥壁底面には，図109－19・20に示した甕２つが伏せ置かれ，北側の19の上には，同図１・４・８・11に示した土師器杯が４つ重ねられて出土した。堆積状況と併せ見るに，これらの土器は，カマド上部を壊し，片付けを行った後に底面に土器を配置し，ℓ２としたカマドの廃土で埋め戻されたものと考えられる。この行為は，カマドの廃絶に伴い行われたものであろう。また，カマドの北側に見られる白色粘土範囲は１㎝程の厚さのもので，カマド袖に被さるように貼られたものと考えられる。

カマド前方の床面中央付近では，楕円形を基調とする明赤褐色焼土範囲が確認でき，これを炉と判断した。炉は，床面が長軸80㎝，短軸58㎝の範囲で焼土化し，その厚さは４㎝まで達する。

ピットは，住居の隅付近と床面中央から４個確認した。そのなかで，明確な柱穴は確認されてい



6号住居跡堆積土

1　暗褐色土　10YR3/3（焼土・炭化物粒少量）
2　オリーブ褐色土　2.5Y4/4（焼土・炭化物粒少量）
3　褐色土　10YR4/4
4　暗褐色土　10YR3/4（黄褐色粘土粒多量）

P 2 堆積土

1　暗褐色土　10YR3/4（灰黄褐色粘土粒微量）

P 3 堆積土

1　暗褐色土　10YR3/4（灰白色粘土粒少量）
2　黒褐色土　10YR2/3（炭化物粒少量，灰白色粘土微量）

0　2m
(1/40)

図107　6号住居跡（1）

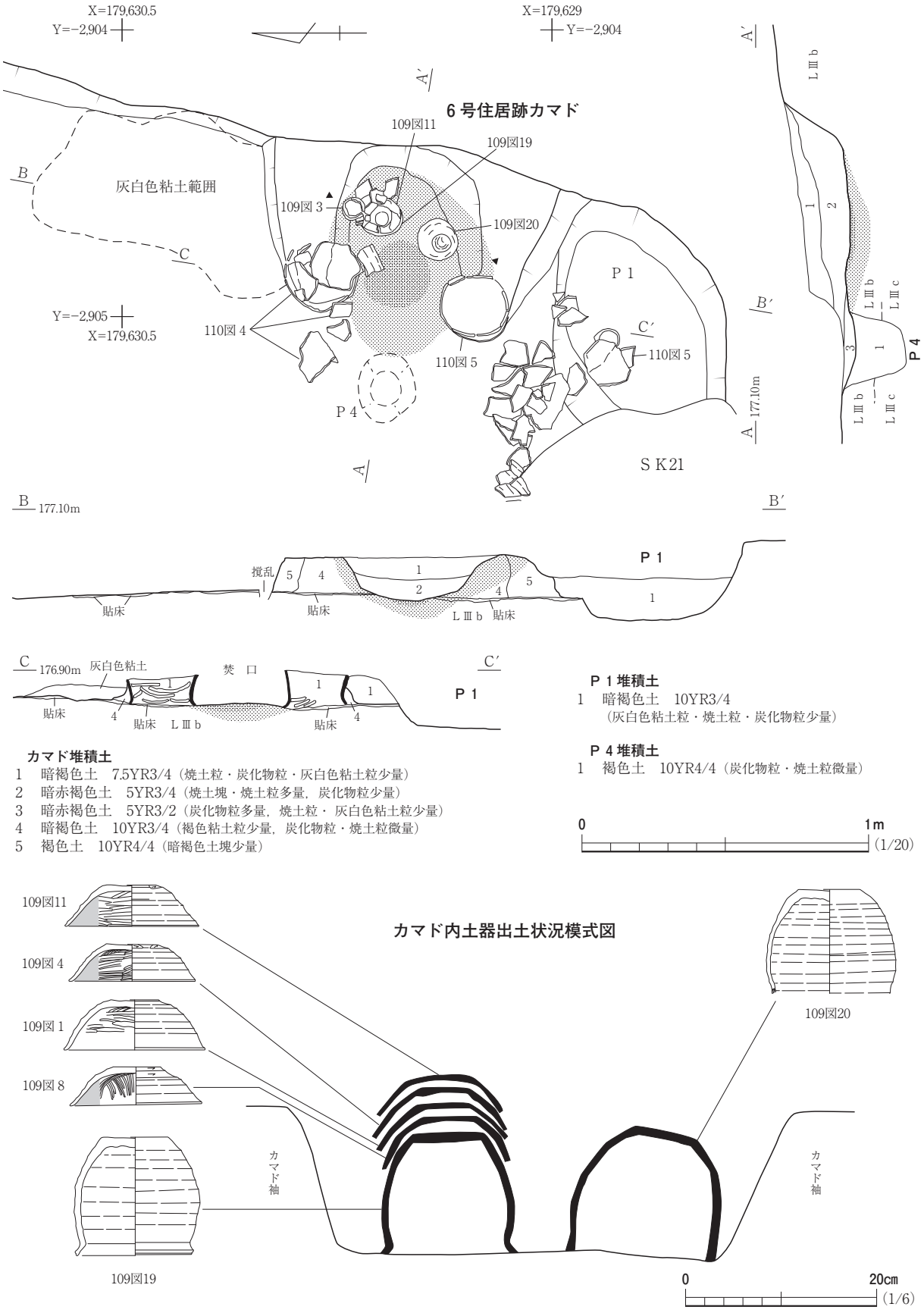

X=179,630.5
Y=−2,904
X=179,629
Y=−2,904
6号住居跡カマド
109図11
109図19
109図3
109図20
灰白色粘土範囲
B
C
Y=−2,905
X=179,630.5
110図4
110図5
110図5
P1
P4
SK21
A
A′
B′
C′
177.10m
LⅢb
LⅢc
B
177.10m
B′
撹乱
貼床
LⅢb
P1
C
176.90m
灰白色粘土
焚口
C′
P1
カマド堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/4（焼土粒・炭化物粒・灰白色粘土粒少量）
2　暗赤褐色土　5YR3/4（焼土塊・焼土粒多量，炭化物粒少量）
3　暗赤褐色土　5YR3/2（炭化物粒多量，焼土粒・灰白色粘土粒少量）
4　暗褐色土　10YR3/4（褐色粘土粒少量，炭化物粒・焼土粒微量）
5　褐色土　10YR4/4（暗褐色土塊少量）
P1堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（灰白色粘土粒・焼土粒・炭化物粒少量）
P4堆積土
1　褐色土　10YR4/4（炭化物粒・焼土粒微量）
0
1m
(1/20)
カマド内土器出土状況模式図
109図11
109図4
109図1
109図8
109図19
109図20
カマド袖
0
20cm
(1/6)

図108　6号住居跡（2）

ない。Ｐ１はカマド右脇で確認され，貯蔵穴と考えている。Ｐ２・３は長軸55㎝前後のもので，検出面からの深さは14㎝前後である。住居内堆積土に近い土で埋没する。性格は不明であるが，Ｐ３はℓ２に炭化物粒を含むことから，隣接する炉に関連する可能性がある。Ｐ４はカマド焚口で確認され，貼床を掘り込んで構築される。堆積土の上部が焼けていることから，カマド機能時には埋め戻されていたものと考えられる。性格は不明である。

遺　　物（図109～111，写真85・86）

出土遺物は，土師器片2,040点，須恵器片９点，石器１点，粘土塊２点である。主に住居跡南部から出土している。土師器は杯類と甕類に分けると，杯類は全体の６割以上を占める。須恵器は全て杯で，数が極端に少ない。このうち，土師器27点，須恵器１点を図示した。

図109－１～12はロクロ整形の土師器杯である。いずれも，口縁端部が外反する特徴を持つ。１・３は大振りかつ深めで，体部が内湾する器形である。２は同様に大振りで内湾する器形であるが，これらよりも浅い。４～10は体部下端が内湾気味ではあるが口縁部に向かって外傾する度合が強く，全体としては浅めの器形となる。11は直線的に外傾する器形である。底部の切り離しは，回転糸切り痕が１・４・６・12で確認されるが，それ以外は再調整のため確認できない。体部下端から底部の調整は，ロクロおよび手持ちヘラケズリのものが多く，１・６のように再調整のないものも認められる。３は乾燥が進んでから体部上位まで回転ヘラケズリを加えられ，表面が平滑なミガキ状の効果を得ている。内面調整はいずれもヘラミガキが認められる。黒色処理は２・３・５・６・９に明瞭に認められるが，４・８は痕跡が窺える程度で，これら以外は確認できない。

図109－13は須恵器杯である。小さめの底部から内湾気味に立ち上がる器形を呈する。底部には手持ちヘラケズリが施されている。

図109－14～17は土師器高台付杯である。内面ヘラミガキがなされる。器形のわかる14・17は，14に短脚，17に長脚が取り付き，杯部は体部から内湾気味に立ち上がり，口縁部端が外反する器形である。器面調整では，杯部下端に回転ヘラケズリ，内面黒色処理が施される。特に14は，陶器碗の器形を模倣したものと考えられる。15・16は脚部から杯底部の破片で，長脚が取り付く。

図109－18～20，図110－１・２は土師器甕類である。いずれも，口縁部が「く」字状に屈曲し，端部は摘み上げられる。底部は平底である。図109－18～20，図110－１・２は，胴部に丸味をもつ小型の甕である。口縁部から底部までがロクロ整形される。図109－18～20，図110－１は球胴状となるのに対し，図110－２はこれらよりもやや大きく，胴長である。底部の切り離しは，図109－18・20，図110－１に回転糸切りが認められる。図109－18・19の底部は手持ちヘラケズリが施される。また，図109－18は，焼成前に胴部下半に孔が穿たれており，その他の甕とは異なる使用法がされた可能性がある。

図110－３～５は長胴甕である。口縁部から胴部上半までがロクロ整形され，内面中位以下にはヘラナデが認められる。３・４は胴部下半の平行タタキメの上から中位に，５は胴部下半にヘラケズリを施す。３・４では胴部中央，５では胴部下部に，接合痕および段差が見られ，作りの違う口

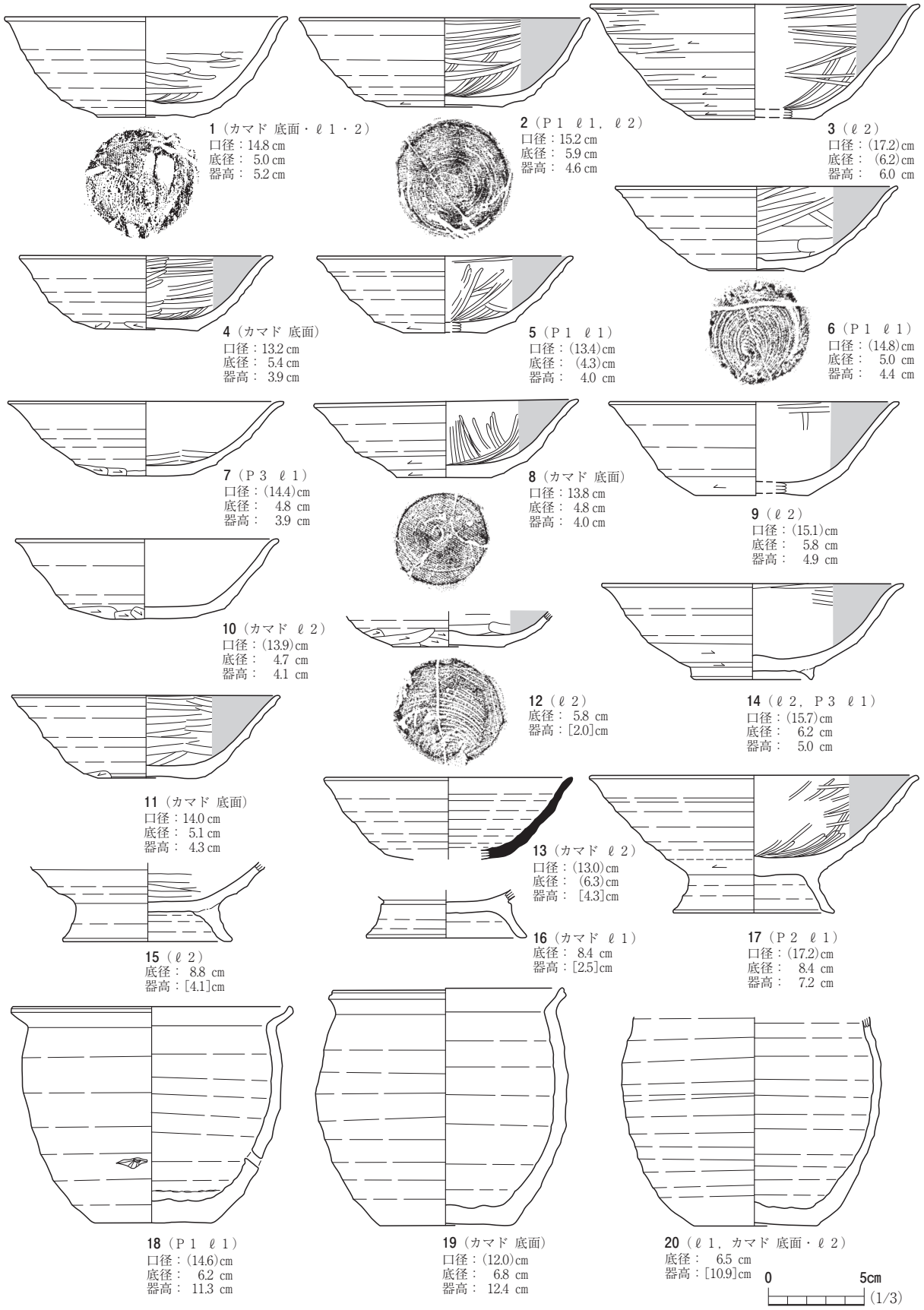


図109　6号住居跡出土遺物（1）

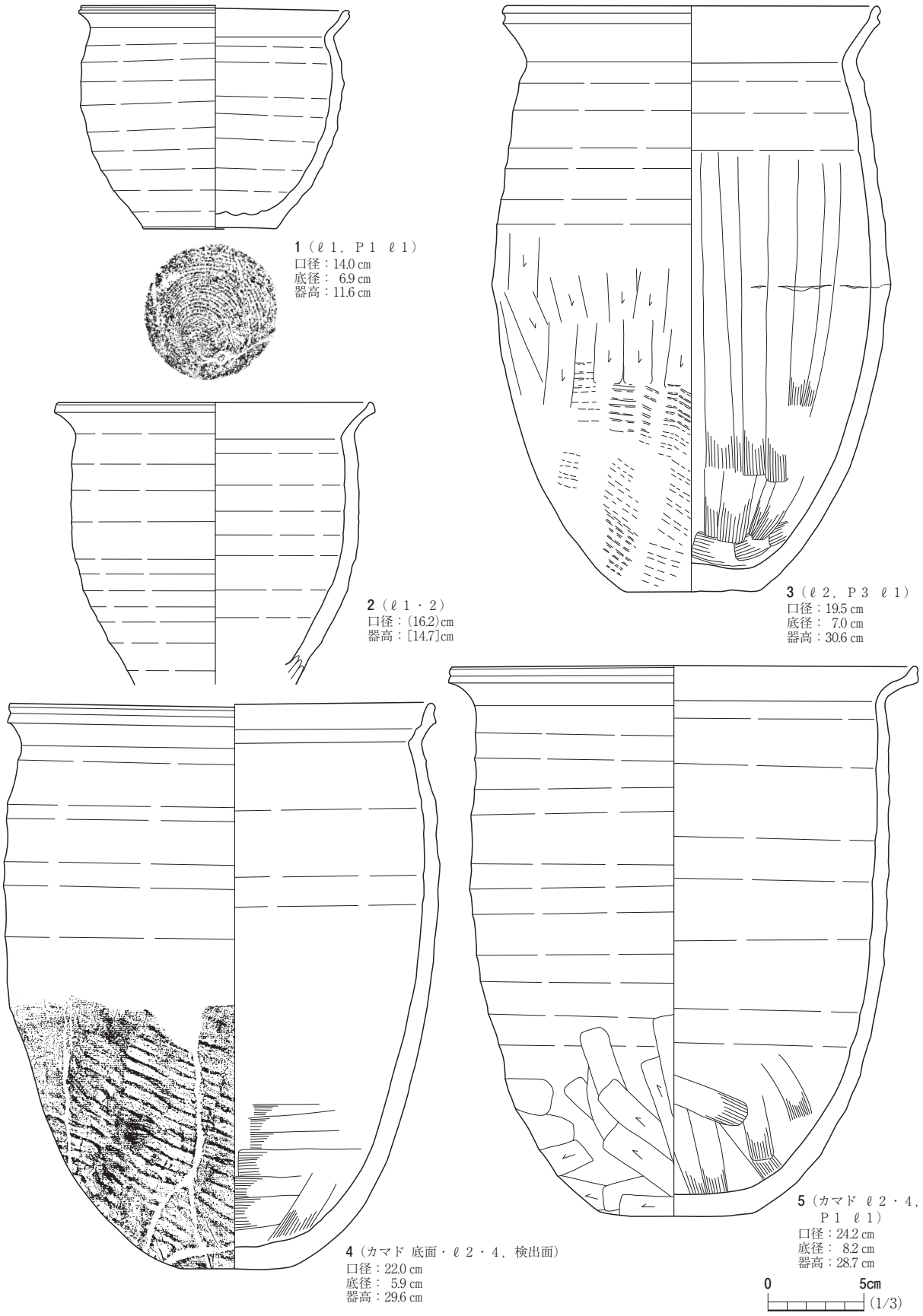


図110　６号住居跡出土遺物（２）

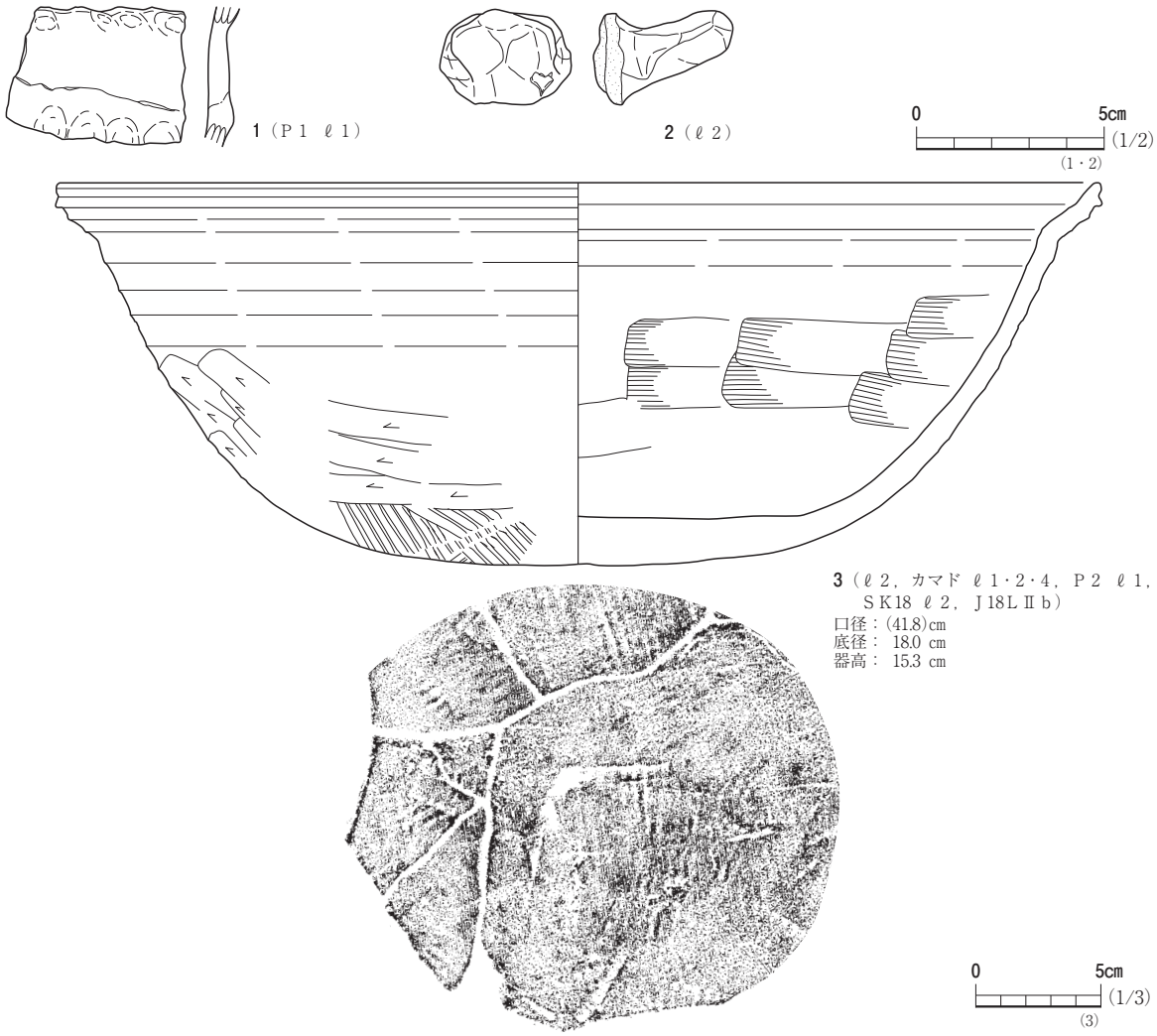


図111　6号住居跡出土遺物（3）

縁部と底部とを接合した後に外面にケズリ，内面にナデを加えたと考えられる。

図111－1は土師器筒型土器である。外面には，輪積痕と指頭痕が2段に認められる。胎土には，太平洋側の粘土に含まれる白色針状物質が認められることから，搬入品の可能性が高い。

図111－2は土師器双耳甑の把手である。胴部の接合面から剝がれたものである。

図111－3は土師器鍋である。約3割が遺存する。口縁から体部上半はロクロ整形され，底部から体部下半にかけては，タタキ整形後にヘラケズリ，内面にヘラナデが施される。この他，本資料はSK18出土土器と接合した。

ま と め

本遺構は，長軸方向が北を向く長方形を呈する東カマドの住居跡である。明確な柱穴は有さず，床面中央には炉が配される。カマド袖の構築材には長胴甕が使用され，廃絶時には，土器を配置するなどのカマドに関わる祭祀行為が認められる。遺構の時期は，SI11との重複関係および出土遺物から9世紀末葉と考えられる。（國　井）

11号住居跡　ＳＩ11

遺　　構（図112・113，写真77～80）

本遺構は，調査区北東部のＪ17グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂ上面である。ＳＩ06と重複しており，新旧関係は本遺構の方が古い。 北側にはⅡ区のＳＩ14が隣接する。

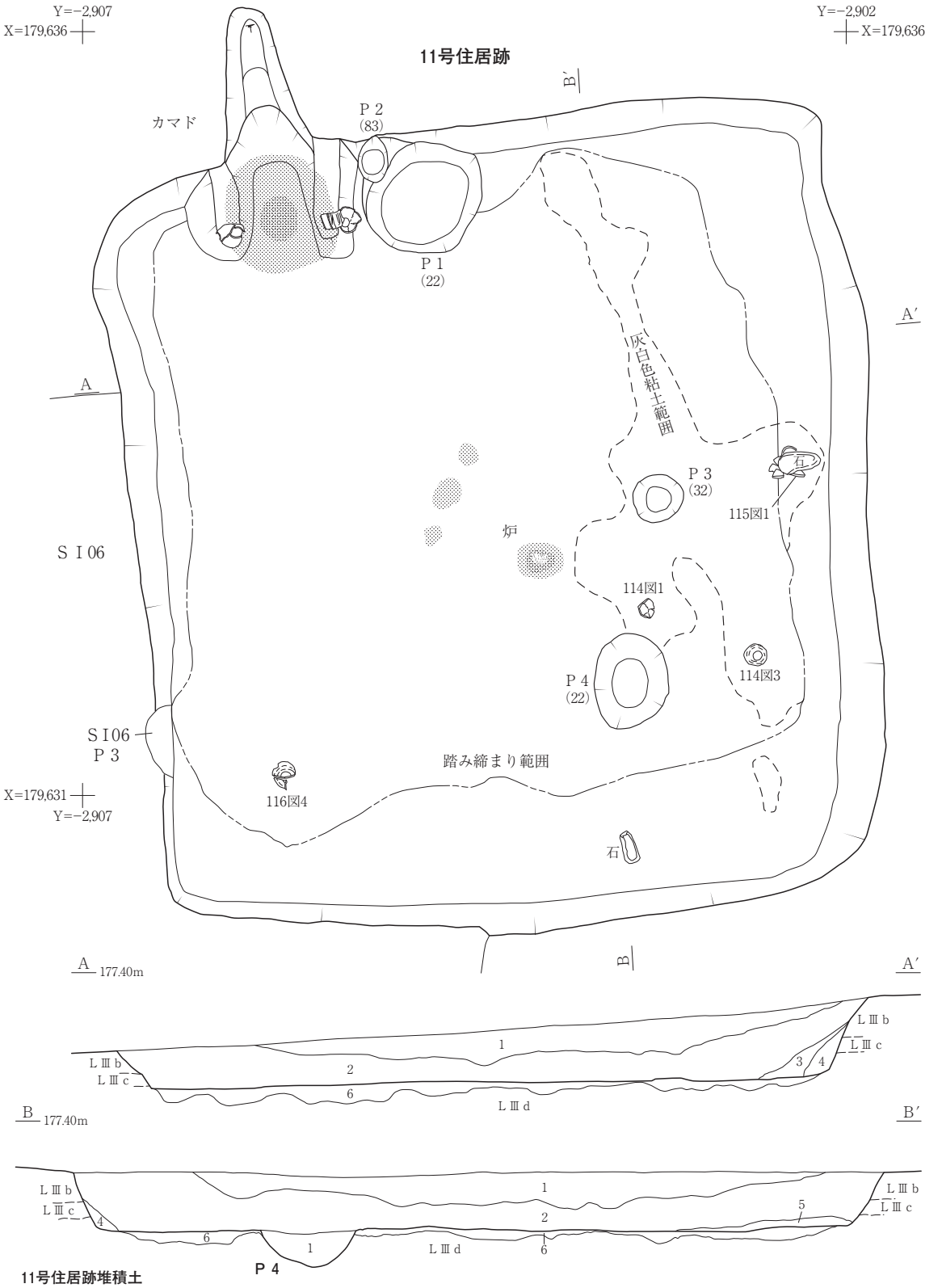
平面形は南北方向が若干長い方形を呈し，主軸方位は北からやや西に傾く。規模は長軸5.30ｍ，短軸4.98ｍを測り，検出面からの深さは最大61㎝である。周壁は全体的に急角度で立ち上がり，床面はほぼ水平である。貼床は壁際を除くほぼ全面に施される。踏み締まり範囲は，カマド周辺から床面の大部分に確認された。さらに，床面の東壁際では貼床上に灰白色粘土の堆積が認められた。

堆積土は６層に分けた。ℓ１・２はレンズ状の堆積を示しているが，土器や炭化物粒，粘土塊や黄褐色土粒等が含まれることから人為堆積と考えられる。ℓ３・４は，壁際で三角状に堆積することから自然堆積と考えられる。ℓ５は貼床上の灰白色粘土を含む土で，Ｐ３がこの上面で検出されており，さらに貼床上面に擦り付けられたような堆積状況から，住居機能時に追加された床面と考えた。ℓ６は褐色土粒や黄褐色粘土塊を含む貼床である。

屋内施設としては，カマド１基，炉１基，焼土化範囲，ピット４個が確認された。カマドは住居北西隅付近の北壁に構築され，袖と煙道が確認された。袖は貼床上に造られ，袖構築材としてＳＩ06のカマドと同様に，図115－４・５の土師器甕を伏せて使用している。奥壁上端は住居外へと飛び出すような形態である。煙道は北壁から１ｍ程張り出す。先端から緩やかに下り，奥壁付近は平坦となる。カマドの寸法は焚口幅が46㎝，底面における奥行は63㎝を測る。底面は，焚口外からカマド袖上までの長軸80㎝，短軸68㎝の範囲が赤褐色に焼土化し，その厚さは最大８㎝である。その中央部では焼き締まりを確認した。カマド内堆積土は７層に分けられ，ℓ１が流入土，ℓ２～５がカマドの天井や袖等の崩落土を含む流入土，ℓ６・７がカマド袖の構築土である。さらに，カマドの焚口前方付近からは，図113で示したように土器が多量に出土した。

炉は床面のほぼ中央に位置し，東西に長い楕円形の焼土化範囲として確認された。炉の中央では僅かに還元した範囲が認められ，焼き締まりも確認できた。規模は長軸31㎝，短軸24㎝を測り，焼土の厚さは最大４㎝である。その形状や還元範囲が認められることから，鍛冶炉の可能性が考えられる。しかし，鉄滓や鍛造剝片等を確認することはできなかった。炉の西側では，赤褐色の焼土化範囲が３カ所認められた。これらは，位置関係から炉に関連するものと考えられる。

ピットは，カマド東脇と床面の東部から４個確認した。Ｐ１はカマド東脇の楕円形のもので，規模は長軸75㎝，短軸64㎝を測る。位置関係からカマドに伴う貯蔵穴と考えられる。Ｐ２は，Ｐ１と同様にカマド東脇で確認された径25㎝程のもので，形状や位置から支柱穴の可能性も考えられる。Ｐ３は，炉の東側で確認された円形のもので，規模は径33㎝を測る。床として追加された粘土であるℓ３上面から確認できることから柱穴の可能性がある。Ｐ４は，炉の南東側で確認された楕円形のもので，規模は長軸64㎝，短軸50㎝を測る。性格は不明である。



11号住居跡堆積土

1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物塊・粒・灰白色粘土塊少量，焼土粒微量）
2　暗褐色土　10YR3/4（褐色土粒・黄褐色土粒・灰白色粘土塊少量，焼土粒微量）
3　褐色土　10YR4/6（黄褐色土塊少量）
4　黒褐色土　10YR2/3
5　暗褐色土　10YR3/3（灰白色粘土塊・炭化物粒多量）
6　暗褐色土　10YR3/3（褐色土粒・灰白色粘土塊少量）

Ｐ４堆積土

1　褐色土　10YR4/6（黄褐色土塊少量）

0　2m（1/40）

図112　11号住居跡（１）

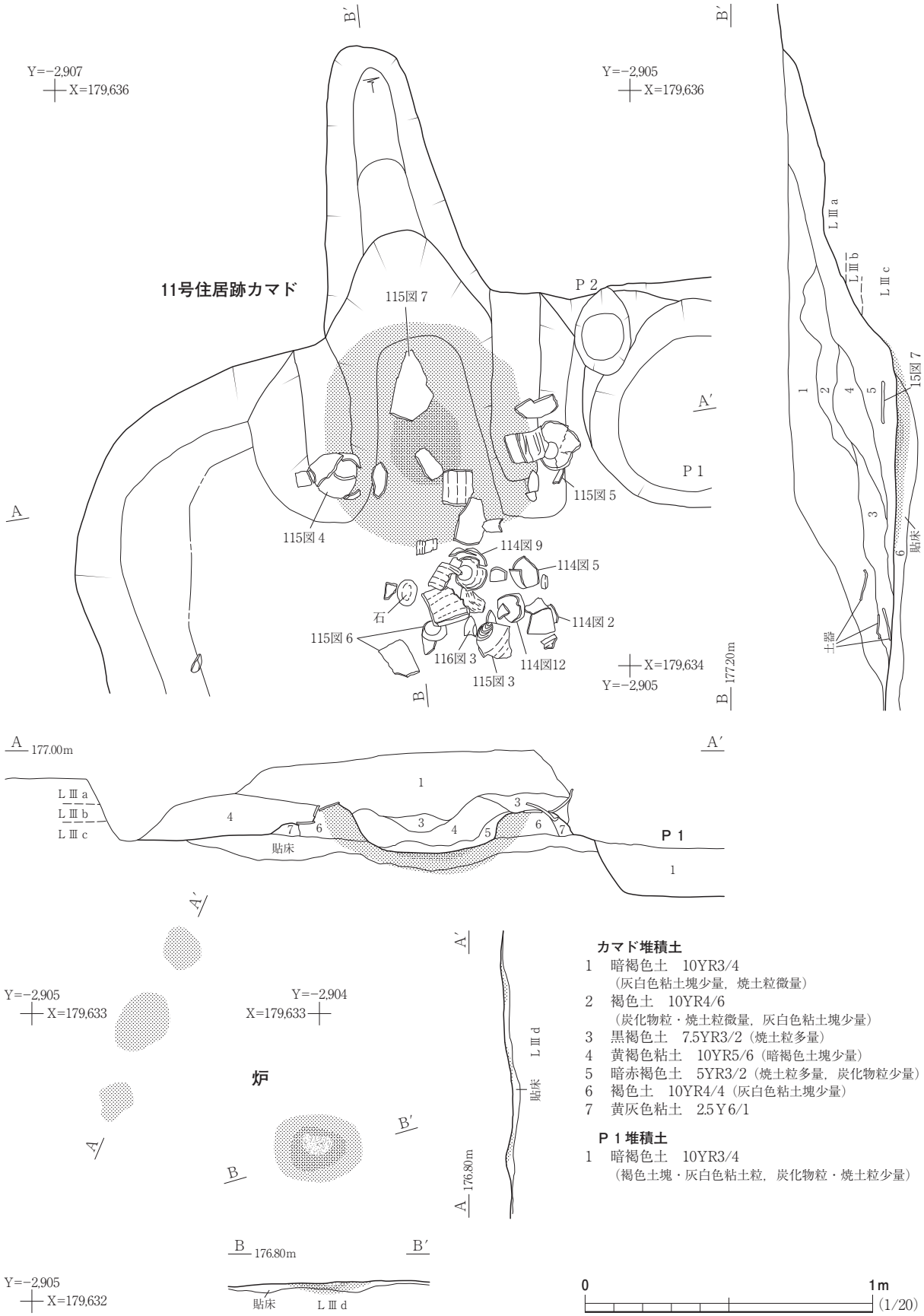


図113　11号住居跡（２）

遺　　物（図114～116，写真87・88・90）

出土遺物は，土師器片1,019点，須恵器片116点，土製品１点，粘土塊４点である。土師器は杯と甕が主体となるが，この他に鉢も認められる。高台付杯は含まれていない。須恵器の出土数はＳＩ06に比して多く，そのなかでは杯が圧倒的に多い。これらの杯のなかには，生焼けのものや傷物等の焼成時の不良品が目立つ。このうち，土師器24点，須恵器14点，土製品１点を図示した。

図114－１～11はロクロ整形の土師器杯である。摩滅が著しい４以外には，内面調整としてヘラミガキ，黒色処理が認められる。１・２は小型の杯で，器高／口径比は0.40を超える。回転糸切りにより底部が切り離され，外面調整は体部下端に手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリが施される。３～７は器高／口径比が0.30前後と相対的に器高の低いものである。３～５は体部が内湾する器形で，底部から体部下端に回転ヘラケズリが施される。６・７は直線的に外傾する器形で，６に手持ちヘラケズリ，７には回転ヘラケズリが認められる。８～10は大振りのもので，８・９のように器高／口径比が0.43程度の椀形を呈するものもある。８が体部下端にのみ，９・10が底部から体部下端に回転ヘラケズリが施される。８・10には，回転糸切りによる底部の切り離しが確認される。

図114－12～17，図115－１～６は土師器甕類である。甕と長胴甕に大きく分けられる。甕は図114－12・13，図115－１～５である。底部までロクロ整形され，口縁部は「く」字状に開いて端部が摘み上げられる。図114－12・13はなかでも小型の甕である。図115－１～３は胴部最大径が口縁部直下に来る器形である。胴部の下端にヘラケズリが施される。カマド袖に設置された図115－４・５は甕のなかでも大振りで，胴部の最大径は中位にある。内面調整にはカキメが施される。

長胴甕は図114－14～17・図115－６である。図115－６は，底部欠損のため甕か甑の判断ができないが，外面のケズリ調整から甕と判断した。口縁部が大きく開いて端部が上に摘み上げられる。タタキ整形後に胴部の中位以下にはヘラケズリ，胴部内面にはカキメが加えられる。図114－14～17はタタキおよびヘラケズリの認められる胴部下半から底部の資料で，内面にはハケメおよびカキメが認められ，17はハケメをナデによって消している。

図115－７は単孔式の土師器甑を図上復元した資料である。底部から胴部下半が遺存する。外面に縦方向のヘラケズリを密に加え，内面はハケメ調整後にヘラナデを施す。さらに，下端には内外に横方向のケズリを加える。

図116－１～11は須恵器杯である。焼成状態は２・５～９など不良のものが約半数認められる。また，９のように体部下端の凹みや，底部の割れが観察される不良品もある。器形は，１～５のような体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるもの，６～11のように直線的に開くものに分けられる。器形の特徴は，土師器杯と共通するものがある。直線的に開くもののなかには，９・11のように口縁部端が外反するものもある。底部の切り離しは回転ヘラ切りで，１・６・７・９・11では，底部にヘラケズリ調整が僅かに施される。

図116－12・14は須恵器甕である。12は底径や器壁の厚さから小型のもので，底部には手持ちヘラケズリが施される。14は外面に平行タタキメ，内面には同心円状の当て具痕が認められる。

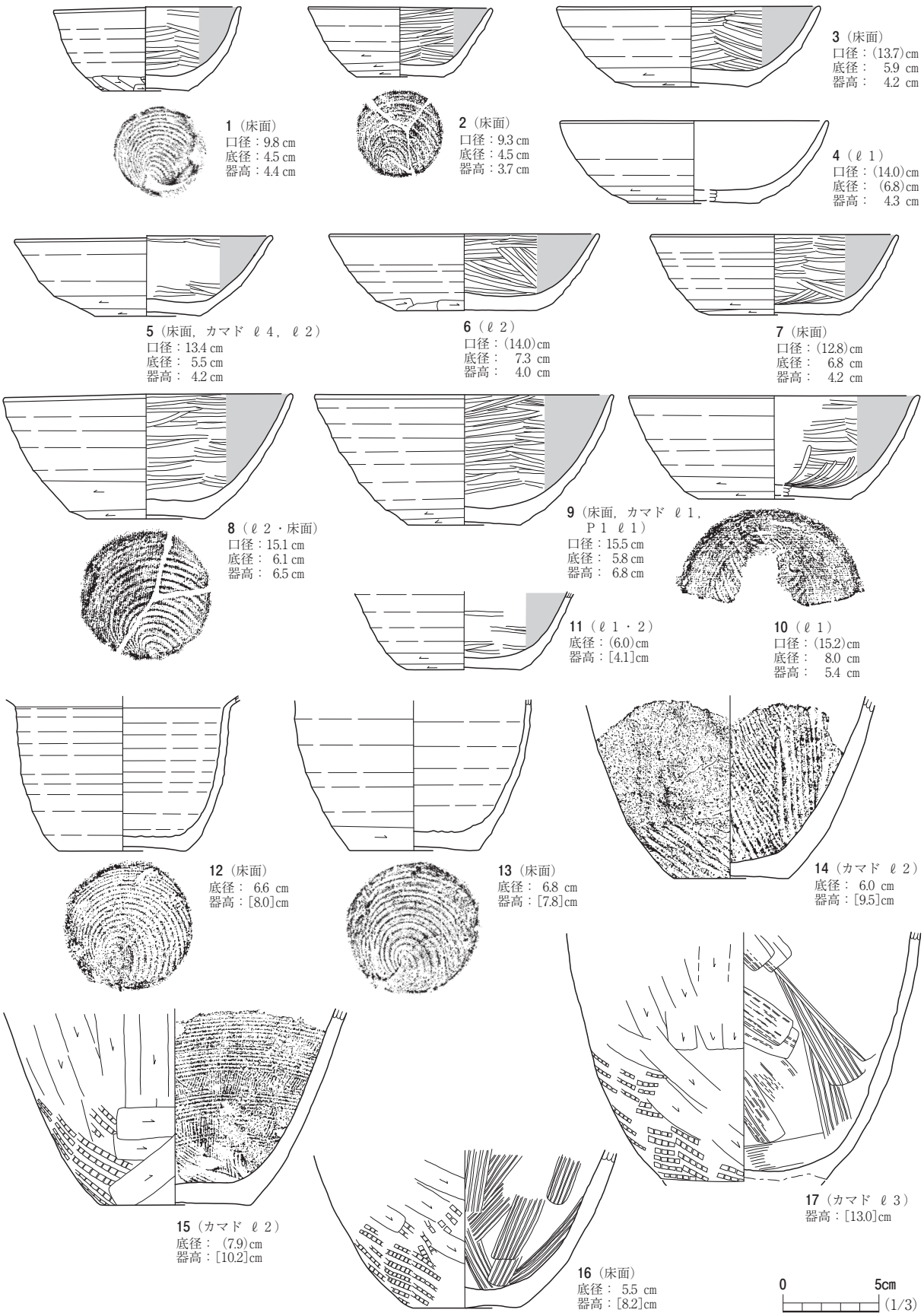


図114　11号住居跡出土遺物（１）

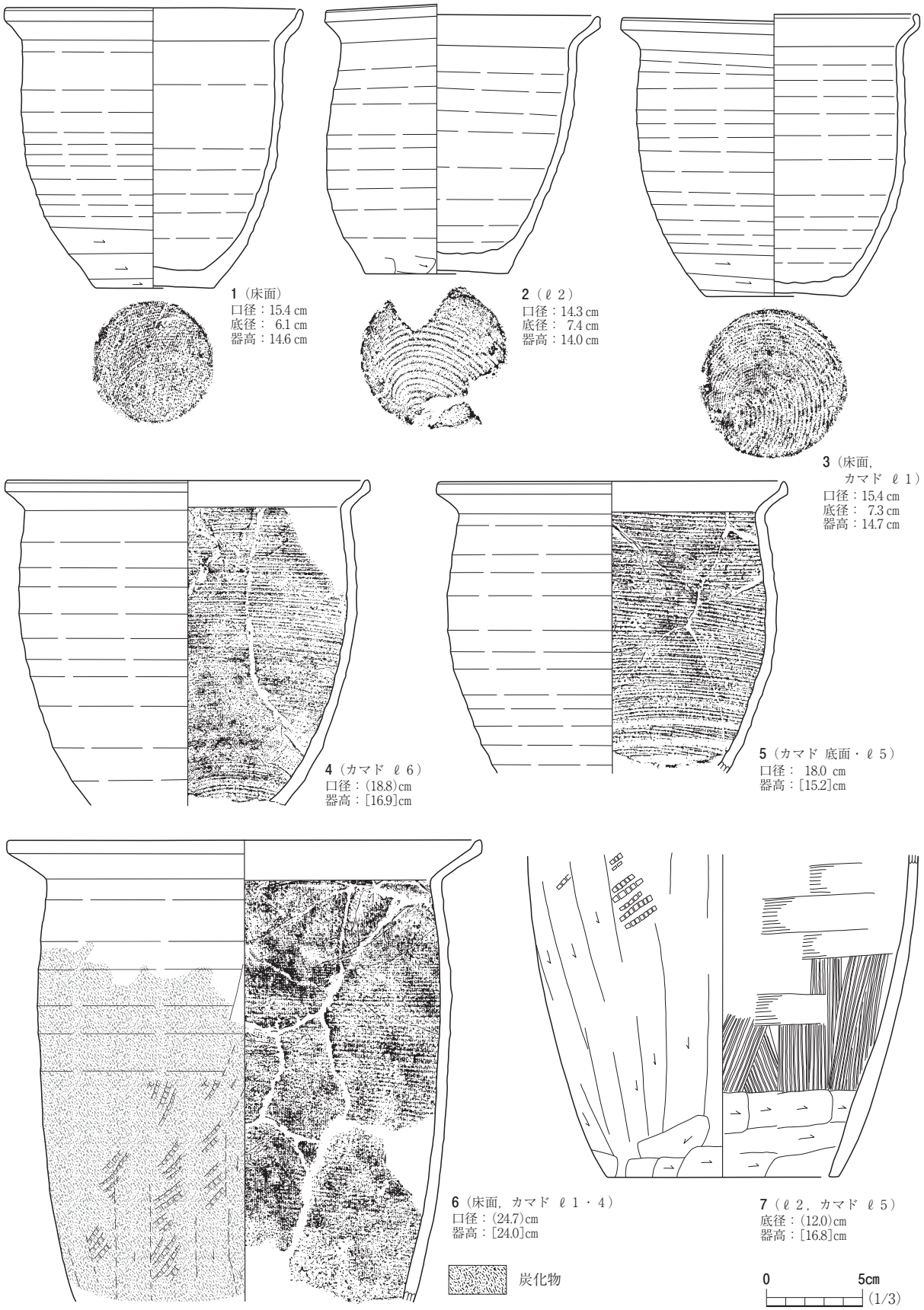


図115　11号住居跡出土遺物（2）

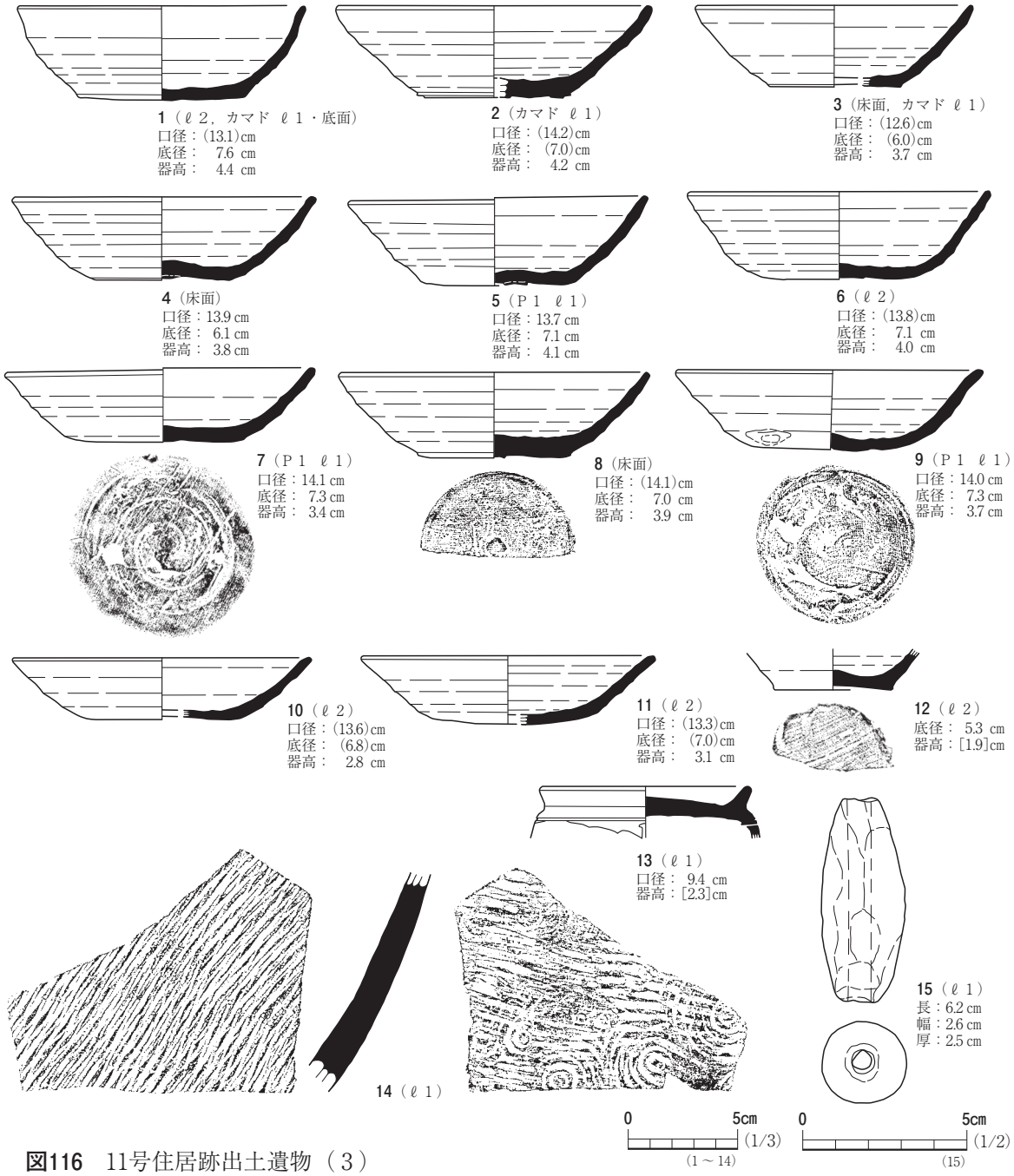


図116　11号住居跡出土遺物（３）

図116－13は須恵器円面硯の未使用品である。硯部と脚の一部が遺存し，透かしが認められる。

図116－15は管状土錘である。径７㎜の貫通孔が認められる。芯棒に粘土を貼り付けて指によるオサエ・ナデによって製作されている。

ま と め

本遺構は，方形を呈する北カマドの住居跡である。少数の柱穴と，床面中央では鍛冶炉と考えられる炉が確認された。出土した須恵器に不良品が多く含まれることから，Ⅱ区の須恵器窯跡との関連も考えられる。遺構の時期は，出土遺物から９世紀中葉～後葉と考えられる。　（國　井）

第４節　　溝　　跡

平成22年度の調査では，溝跡を１条確認した。住居跡が確認された２段目の小段丘上に構築され，性格については，11号住居跡等に伴う道跡と考えられる。

５号溝跡　ＳＤ05（図117，写真84）

本遺構はＪ18グリッドに位置し，ＬⅢｂ上面で検出される。北東部の段丘平坦面でも若干谷状に窪む部分に構築される。ＳＫ18と重複し，新旧関係は本遺構の方が古い。北側にはＳＩ06・11が，南東側にはＳＫ23が隣接する。

遺構は，ほぼ直線状に北東方向へと延びるが，北東端は僅かに北側に方向を変える。規模は長さ6.00ｍ，幅1.74ｍを測る。検出面からの深さは最大22㎝である。周壁は緩やかに立ち上がる。底面の標高は北東から南西に向かって低くなる。踏み締まり等の硬化面は認められない。遺構内堆積土は２層に分けられ，いずれもレンズ状の自然堆積と考えられる。ℓ２は基本土層のＬⅡｃを主体とする。

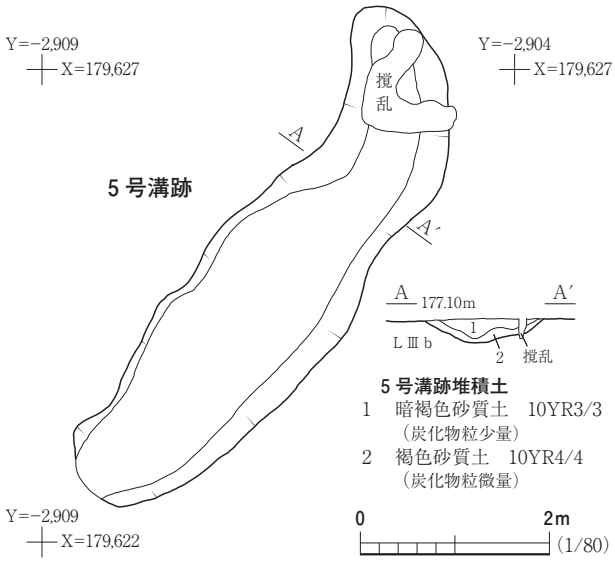


図117　５号溝跡

遺物は土師器杯と甕が32点出土したが，小片のために図示していない。

本遺構は，平坦部に構築された浅い溝跡である。時期は，遺構内堆積土や出土遺物の特徴から平安時代と考えられる。性格は，西側の斜面から平坦面の低い部分に取り付いており，北端部ではＳＩ11の方向に向きを変えることから，住居跡に伴う道跡の可能性が考えられる。（國 井）

第５節　　土　　坑

１次調査において７基の土坑を確認した。そのなかには，住居跡と同様の平安時代と考えられる土器生産に関連する焼成坑（18・29号土坑）とロクロピット（23号土坑）が確認される。

18号土坑　ＳＫ18（図118・121，写真89～91）

本遺構は，Ｊ18グリッドに位置する焼成土坑である。遺構の周辺では，検出時から多量の土師器が出土しており，暗褐色土の堆積範囲をＬⅢｂ上面で確認した。北側４ｍにはＳＩ06が位置してお

り，ＳＤ05を切って構築される。

平面形は楕円形を呈し，長軸は北東を向く。規模は長軸200㎝，短軸173㎝を測る。検出面からの深さは最大21㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は平坦である。また，遺構の東半では，底面から壁の一部にかけて赤褐色に焼土化し，特に中央部は強く焼けていた。遺構内堆積土は３層に分けられた。レンズ状の堆積状況を示し，全体的には自然堆積と考えられる。ℓ１・２は土器が多量に出土するが，底面に接するものはないため，埋没途上に土器が投棄されたものと考えられる。

出土遺物は，土師器片901点，須恵器片４点，粘土塊140点(500g)である。土師器には，杯・高台付杯・鉢・甕・鍋があるが，多くは杯と甕である。また，鍋はＳＩ06の図111－３と接合した。これらの土器は，ＳＩ06出土遺物の特徴に近似する。粘土塊は，表面にスサの痕跡を残すものが多く，楕円形状の薄手のものと丸玉状のものがある。そのなかで最も多い薄手のものを写真91に示した。図121には土師器６点，須恵器１点，土製品１点を示した。

図121－１・２はロクロ整形の土師器杯である。いずれも，体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり，口縁部で外反する器形を呈する。調整は内面がヘラミガキ後に黒色処理，外面には底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。１は，外面の回転ヘラケズリ後，器面全体に横方向のミガキが加えられる。同図３・４は土師器高台付杯である。３は杯部のみ遺存し，口縁部が強く外反する特徴がある。４は杯底部から脚部かけて遺存する。内面は黒色処理される。同図５は土師器鉢である。内面は，土師器杯と同様ヘラミガキ後に黒色処理が施され，外面の体部下端にはヘラケズリが観察される。同図８は土師器長胴甕の胴部片で，外面に平行タタキメ，内面にヘラナデが認められる。同図９は須恵器大甕の胴部片である。内面には同心円状の当て具痕，外面には平行タタキメが認められる。同図10は粘土塊である。表面には布目，縄目と竹の圧痕が認められ，棒が縄で縛られて固定された上に貼り付けられたものと考えられる。裏面は写真91に示したように，スサの痕跡や粘土を貼り付けた状態が確認できる。壁材の可能性が考えられる。

本遺構は，周辺にロクロピットが確認される点や底面が強く焼ける状況から，土師器焼成坑の可能性が考えられる。また，遺構内にＳＩ06と同時期の遺物が投棄されることから，機能停止後に捨て場として利用されたものと考えられる。時期は，出土遺物の接合関係を含めたＳＩ06との関係から９世紀末葉と考えられる。（國　井）

21号土坑　ＳＫ21（図118・121，写真81・89）

本遺構は，Ｊ18グリッドに位置する土坑である。ＳＩ06の埋没後に構築され，新旧関係は本遺構の方が新しい。

遺構の形状は不整な楕円形を呈し，規模は南北95㎝，東西85㎝を測る。検出面からの深さは最大30㎝である。周壁は，底面付近では丸味を帯びながらも急傾斜で立ち上がる。底面は南に向かって低くなる。遺構内堆積土は３層に分けられる。ℓ１・２は流入による自然堆積である。ℓ３は，炭化物を多量に含む土質と堆積状況から人為堆積と考えられる。

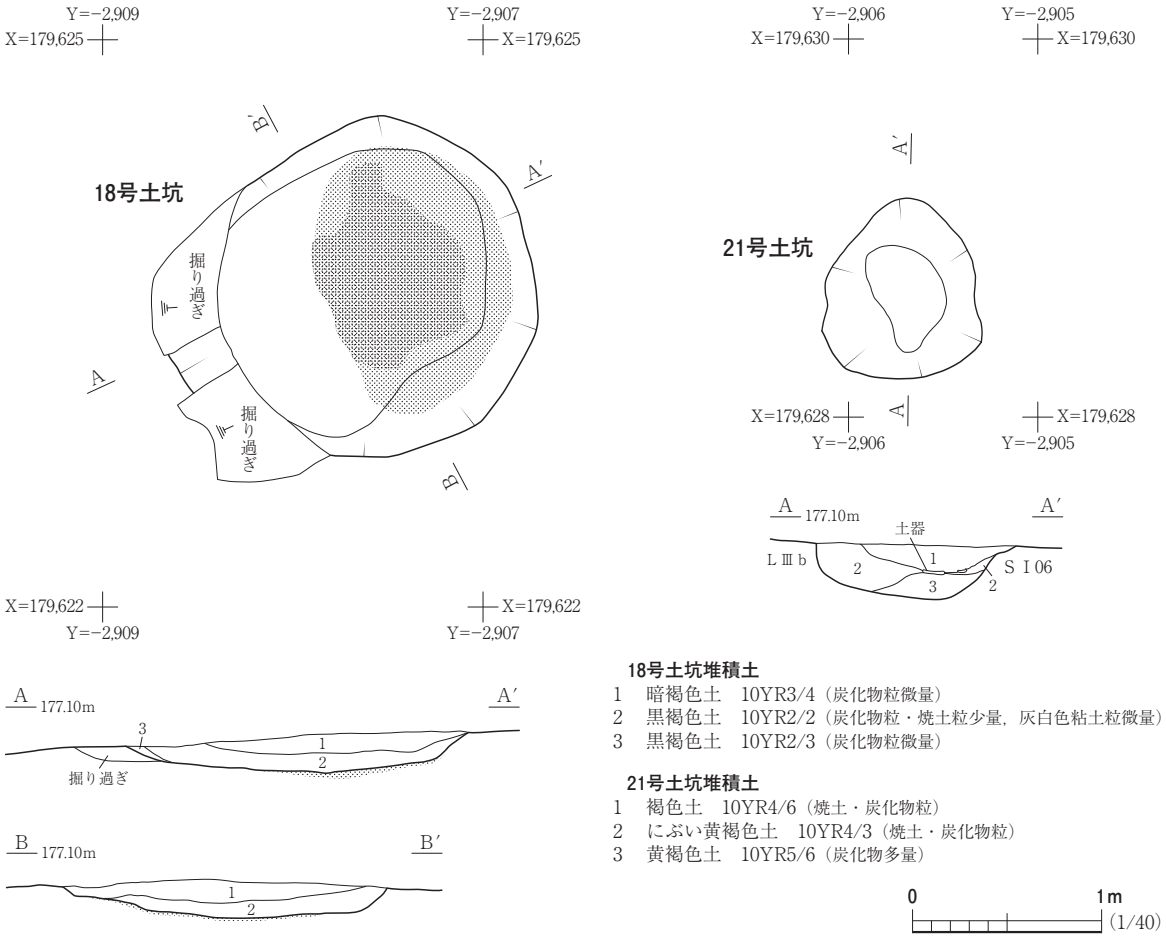


図118　18・21号土坑

遺物は土師器片80点が出土した。主にℓ１から出土する。図121－６はロクロ整形の土師器杯で，ＳＩ06のℓ１出土の破片と接合した。底径が小さく，口縁部が強く外反する器形をもつ。調整は内面がヘラミガキ，外面が底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。

時期は，住居跡との重複関係および出土土器から９世紀末葉以降と考えられる。　（國 井）

22号土坑　ＳＫ22（図119・121，写真81・89）

Ｉ20グリッドに位置する。沢２内の南に下る斜面に立地する。検出面はＬⅢｄと思われる砂層で土師器杯を伴う灰黄褐色砂質土の堆積範囲として検出した。

平面形は楕円形を基調とし，東西に長軸をもつ。断面形は皿状で，底面は周囲の傾斜に沿って南への下り勾配となる。規模は東西56㎝，南北48㎝を測る。検出面からの深さは14㎝である。堆積土は，灰黄褐色砂質土の単層である。

遺物は，図121－７に示した土師器杯の他に，ロクロ整形の土師器甕の同一固体片４点が出土している。図121－７の杯は3/4程が西壁に張り付くように出土した。その他の破片も堆積土中に含まれており，ほぼ完形に復元できた。器体は比較的大振りの椀形を呈する。ロクロ整形後に体部下半に回転ヘラケズリ，底面および内面にはヘラミガキを加えている。被熱のためか内面黒色処理は

確認できない。住居跡出土土器と比較して９世紀中葉～後葉に比定されよう。

遺構の時期は遺物の年代観から９世紀と考えられるが，用途については不明である。　（山　元）

23号土坑　ＳＫ23（図119，写真81）

本遺構はＪ18グリッドに位置する漏斗状の土坑で，ＬⅢｂ上面で検出した。周辺にはＳＩ06・11，ＳＤ05やＳＫ18・24が隣接する。

遺構の形状は円形を呈し，規模は直径54㎝を測る。検出面からの深さは最大30㎝である。断面形は，漏斗状を呈する。遺構内堆積土は４層に分けられる。ℓ４は粘土粒を多く含む土で掘形内を

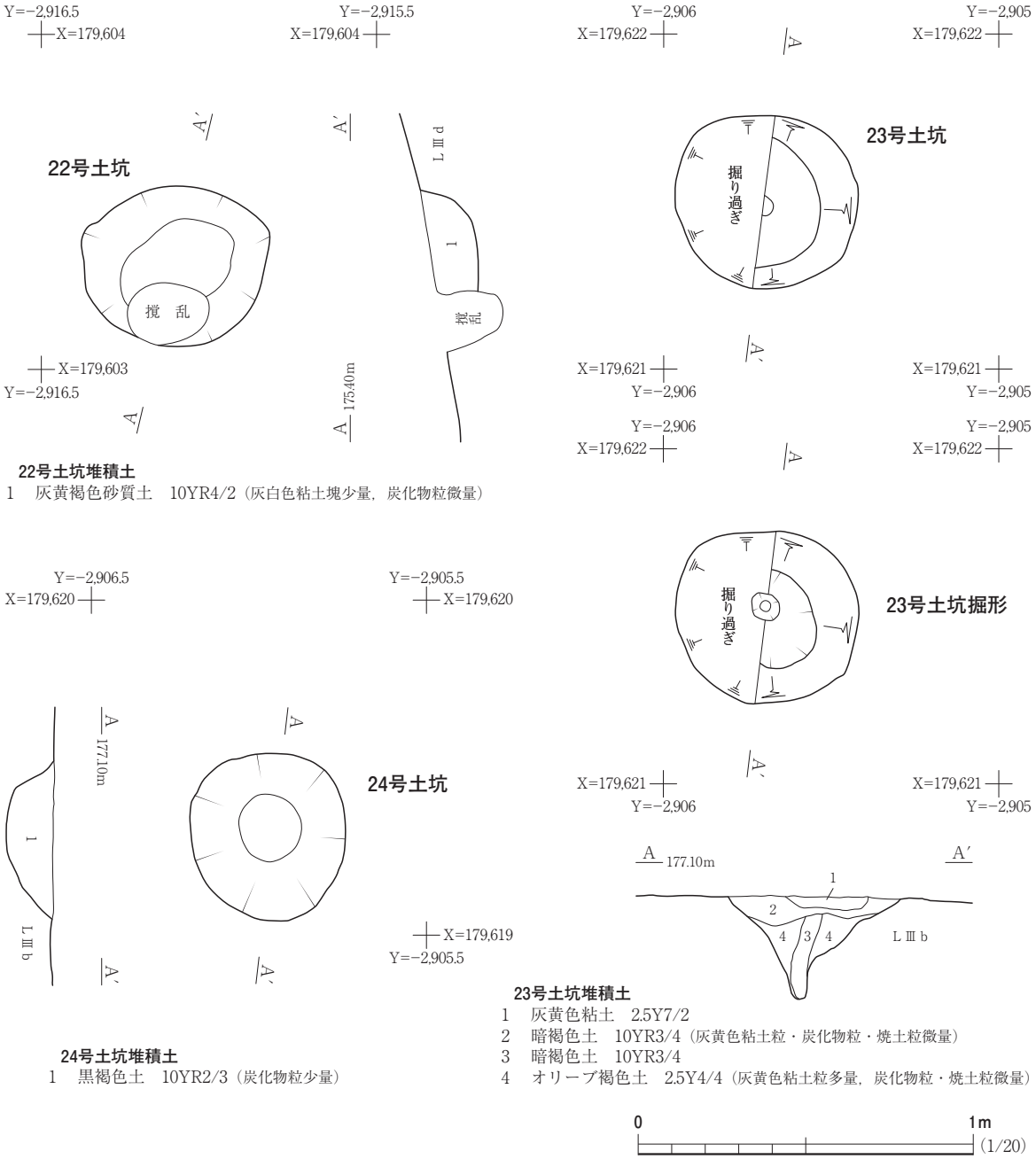


図119　22～24号土坑

覆い，その中央にはℓ３が棒状痕跡として認められる。このような遺構の特徴や周辺に土器生産遺構が確認されることから，本遺構はロクロピットと考えられる。よって，ℓ１・２は廃絶後に埋め戻されたもの，ℓ３がロクロの軸部分で，ℓ４が軸受け部分と理解される。遺物は，土師器片62点が出土しているが，小片のため図示していない。

本遺構は，漏斗状のロクロピットである。時期は９世紀中葉～末葉と考えられる。　（國　井）

24号土坑　ＳＫ24（図119，写真82）

本遺構はＪ19グリッドに位置し，ＬⅢｂ上面で検出した。北側には，ＳＫ23が隣接する。

遺構の形状は円形を呈し，規模は直径58㎝を測る。検出面からの深さは最大14㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は中央部が最も低くなる。遺構内堆積土は単層で，ＬⅡｂ主体土が流入することから自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片４点が出土するが，小片のため図示していない。

時期は堆積土から９世紀中葉～末葉と考えられる。性格については不明である。　（國　井）

29号土坑　ＳＫ29（図120，写真82）

Ⅰ21・22グリッドに位置する。沢３の西縁に立地する。検出面は沢３のℓ２とした灰黄褐色土層である。沢堆積土の掘り込み中，土層観察用畦の断面に焼土面が認められたことから確認した。

遺構は，底面中央に硬く焼き締まった焼土面を有する焼成土坑である。平面形は長方形を基調とする。長軸は北東方向である。北半は沢３の掘り込みによって失われた。周壁の立ち上がりは急であるが，底面が西に向かって下り勾配となっているため，東に向かうほど壁高は低くなる。

規模は長軸が遺存長で176㎝，短軸は120㎝を測る。深さは西壁際が最大で26㎝である。底面の焼土化範囲は長軸100㎝×短軸68㎝を測る。そのうち長軸62㎝×短軸48㎝の範囲が硬化する。焼土化は底面下10㎝まで及び，うち６㎝が硬化している。

堆積土は３層に分けられた。ℓ１は上半を埋める黒褐色土，ℓ２は炭化物を多量に含む黒色土である。ℓ３は壁面の沢３ℓ４とした砂質土に近しい。堆積状況がレンズ状を示すことから自然埋没と考えられる。遺物はℓ１から土師器細片が２点出土しているが，図示し得なかった。

時期は，周囲の遺構と同様に９世紀代と推定される。用途は，底面が焼き締まっていることがＳＫ18と特徴を一にすることから，土師器の焼成にあるものと推察される。　（山　元）

30号土坑　ＳＫ30（図120，写真82）

Ⅰ20グリッドに位置する。沢２内の南へ下る斜面に立地し，検出面はＬⅢｄと思われる砂層である。暗褐色土の堆積範囲として確認した。

平面形は円形である。周壁の立ち上がりは緩めで，皿状の形態である。規模は南北が68㎝，東西が62㎝を測り，深さは20㎝である。堆積土は沢２ℓ３ｂを主体とする。遺物は出土していない。

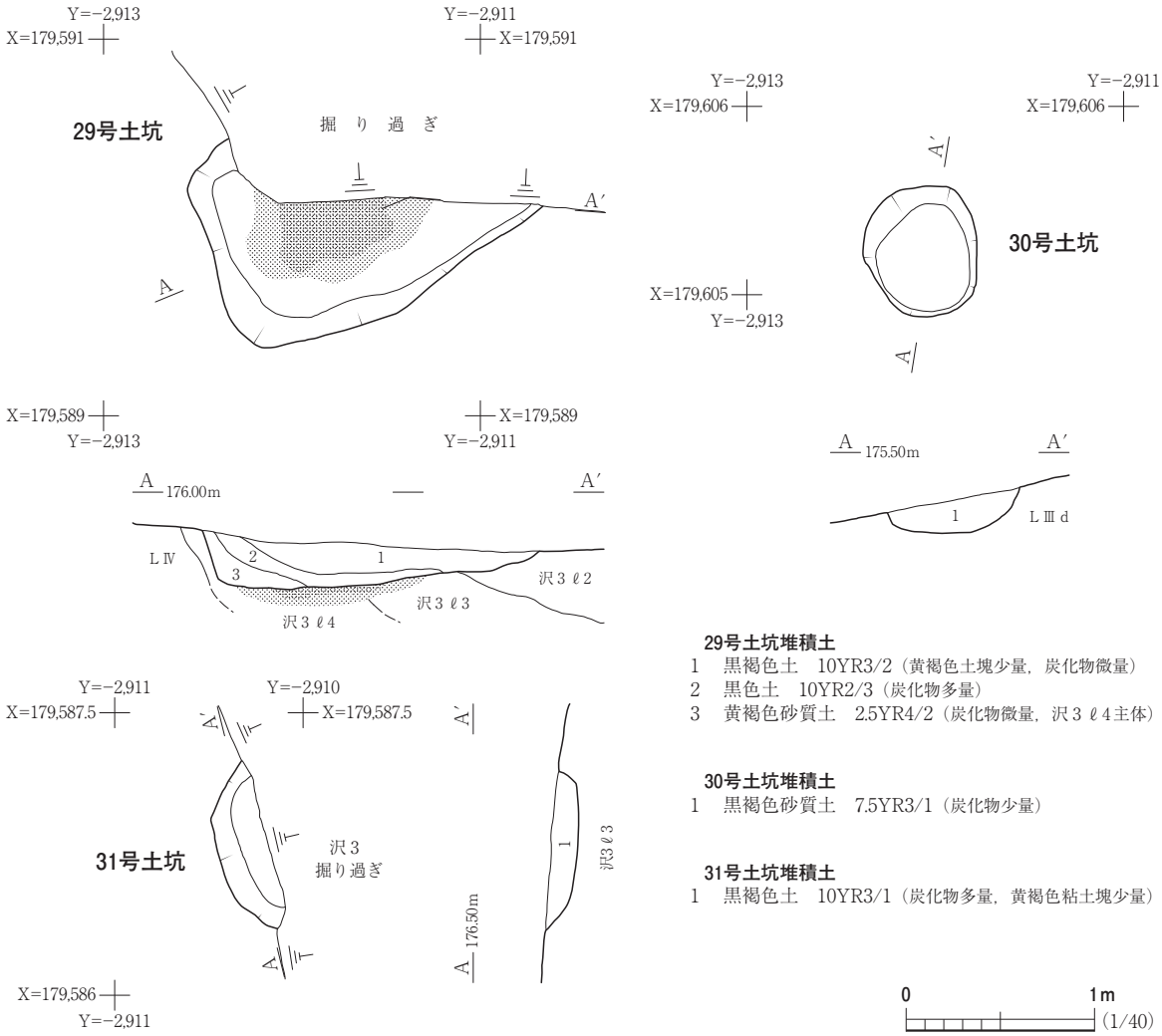


図120　29～31号土坑

９世紀の遺物を主体的に含む沢２堆積土に被覆されていたことから，時期は平安時代の初め頃と考えられる。性格については不明である。　（山　元）

31号土坑　ＳＫ31（図120，写真82）

Ｉ22グリッドに位置する。沢３の西縁に立地する。沢３のℓ２までの掘り込みを終えた後に断面に炭化物を含む黒褐色土の堆積範囲を確認し，これをＳＫ31とした。よって遺構の掘り込み面は沢３のℓ２およびℓ３である。

遺構の東半は沢３堆積土の掘り込みによって失ったが，平面形は円形を基調とするものと推定される。断面形は浅い皿形である。遺存長は南北で90㎝，深さは16㎝である。堆積土は炭化物を多量に含む黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

堆積土が９世紀の遺物を主体的に包含する沢３ℓ１に類似しており，時期については平安時代の初め頃と推定される。炭化物を多量に含む土質から焼成に用いられたと考え得るが，その焼成対象については明らかにし得ない。　（山　元）

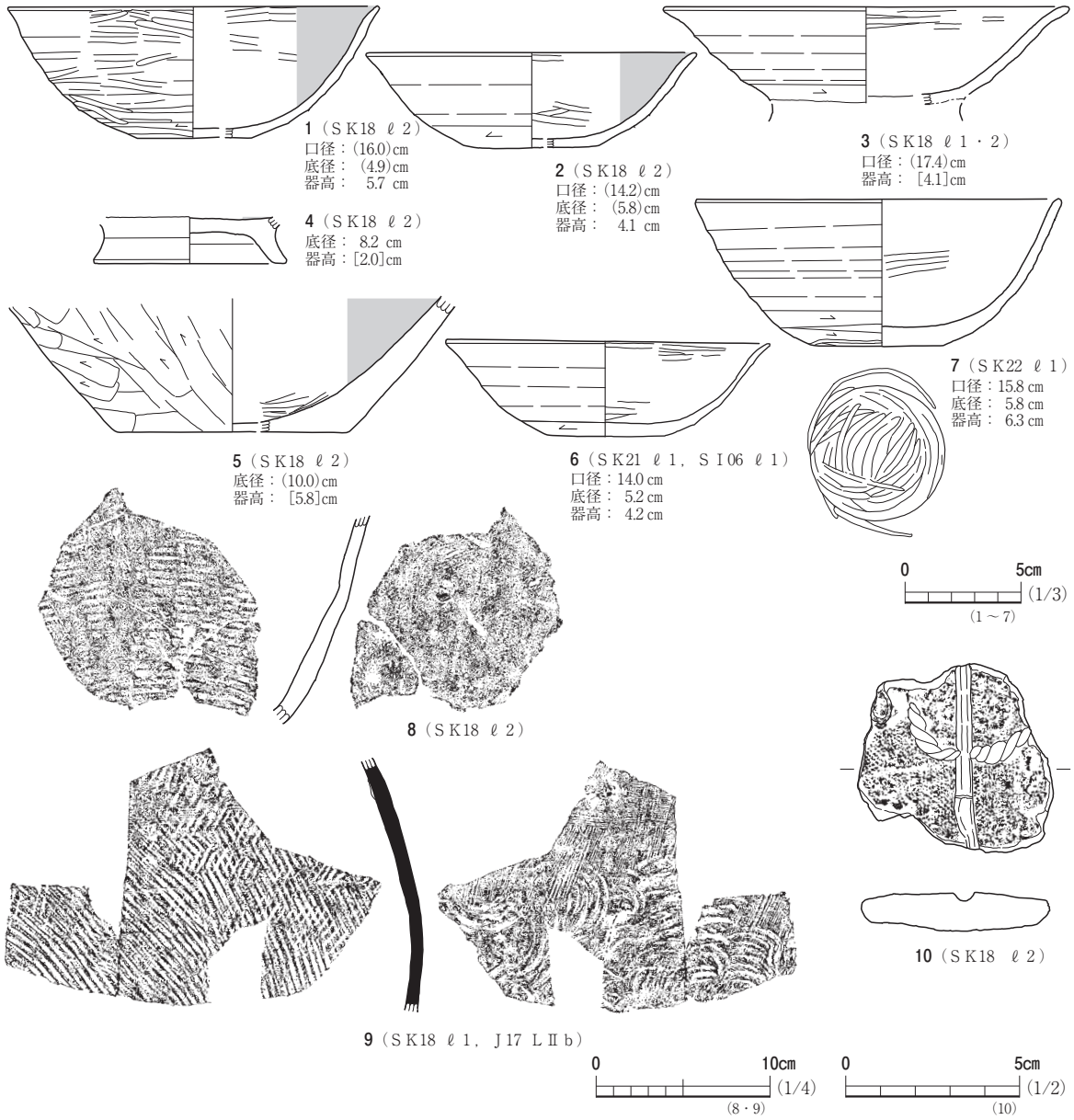


図121　土坑出土遺物

第６節　竪 穴 遺 構

１次調査において竪穴遺構としたものは１基である。竪穴住居跡が確認された北東部の小段丘平坦面に構築されるが，これらの遺構とは時期と性格の異なる近世以降の「むろ」と考えられるため，これらと区別して竪穴遺構として報告する。

１号竪穴遺構　ＳＸ01（図122，写真83・91）

本遺構はＩ19グリッドに所在する。小段丘でも最下位平坦面への落ち際に位置している。暗褐色土の堆積範囲としてＬⅢｂ上面で確認した。検出当初は古代の竪穴住居跡と判断して調査していた

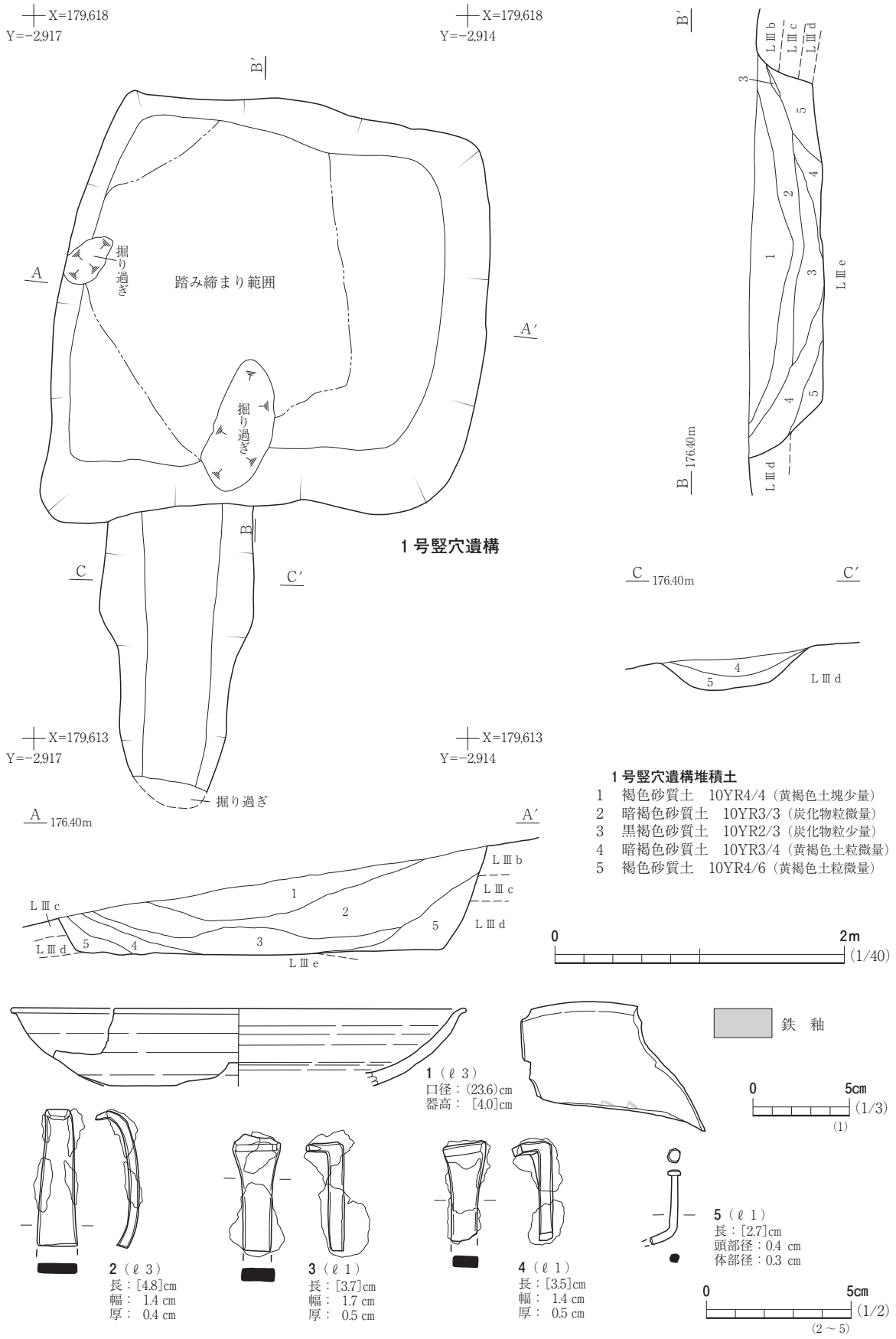


図122　１号竪穴遺構，出土遺物

が，カマドが伴わないことや磁器の出土から，竪穴遺構とした。また，竪穴遺構の南側に接する溝は，堆積土等の状況から本遺構に付設されたものと判断した。

遺構の平面形は，西側が若干長い方形を呈し，主軸は北からやや東へと傾いている。規模は，東西が2.98ｍ，南北が3.02ｍを測る。検出面からの深さは最大70㎝である。周壁は全体的に急角度で立ち上がる。底面に傾斜は認められず，細かな起伏をもちながらも概ね平坦に構築される。東壁際でＬⅢｄとする砂層，中央以西がＬⅢｅとするシルト層が露出し，シルト層部分に踏み締まり範囲が認められる。床面からは，焼土面や柱穴と思われるピットは確認できない。

竪穴の南側には南北に直線的に延びる溝が付設される。溝は南壁の西寄りに取り付き，長さは2.00ｍ，幅は最大1.07ｍで，深さは最大22㎝を測る。壁の立ち上がりは緩やかである。溝の底面は竪穴に向かって北方向へ下り，18㎝程度の落差をもって竪穴内へと落ちる。逆に南端は壁の立ち上がりが認められず，検出面まで下がったため消失したような状態となっている。この溝は，竪穴内と同様の堆積土で埋まっていることやその形状から，本遺構に伴う道状の入口施設ではないかと考えられる。

遺構内堆積土は５層に分けられる。全体的にレンズ状の堆積状況を示しており，自然堆積と考えられるが，ℓ３は磁器の出土があることや炭化物を含む土質であることから，これらが人為的に投入された可能性がある。

遺物は，磁器片２点，鉄製品５点が出土した。このうち，磁器片１点と鉄製品４点を図示した。

図122－１は本郷焼砕石手の皿で，口縁部の約１割が遺存する。内面には，僅かであるが鉄釉による草花文が認められる。時期は19世紀前後と考えられる。

図122－２～５はℓ１から出土した鉄釘である。２～４が断面が扁平な和釘であるのに対し，５は洋釘である。そのなかで３・４は頭部のつくりから皆折釘と判断される。これらの釘は，その形状から舟釘の可能性が考えられる。５の洋釘は，頭部，断面ともに円形を呈する。

本遺構は方形の竪穴で，底面には踏み締まりが認められた。南側には溝が付設されている。遺構の時期は，出土遺物から18世紀後半以降と考えられる。性格については物置等に利用された半地下式の「むろ」である可能性を考えている。（國　井）

第７節　焼 土 遺 構

１次調査において焼土遺構を１基確認した。住居跡や土坑等が確認された小段丘上の平坦面に構築されるが，その性格や時期は不明である。

１号焼土遺構　ＳＧ01（図123，写真84）

Ｉ20グリッドの沢２への落ち際に位置する。遺構はＬⅢｂ上面が焼土化する。焼土化範囲は，南北75㎝，東西54㎝の範囲内に３カ所の赤褐色に焼けた部分が確認される。焼土化した厚さは南方

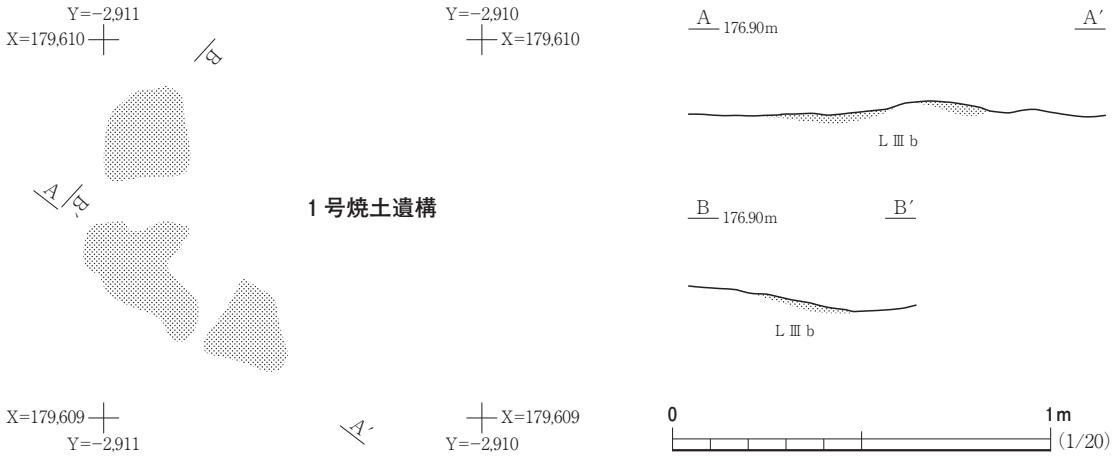


図123　１号焼土遺構

の２カ所で最大３㎝，北部の焼土化部分は，最大２㎝まで達する。焼土化の程度は弱く，焼き締まりは認められなかった。

本遺構は小規模な焼土遺構である。遺構の時期は，ＬⅡａ～ｃとする包含層に被覆されていた状況から平安時代と推測される。性格については不明である。（國　井）

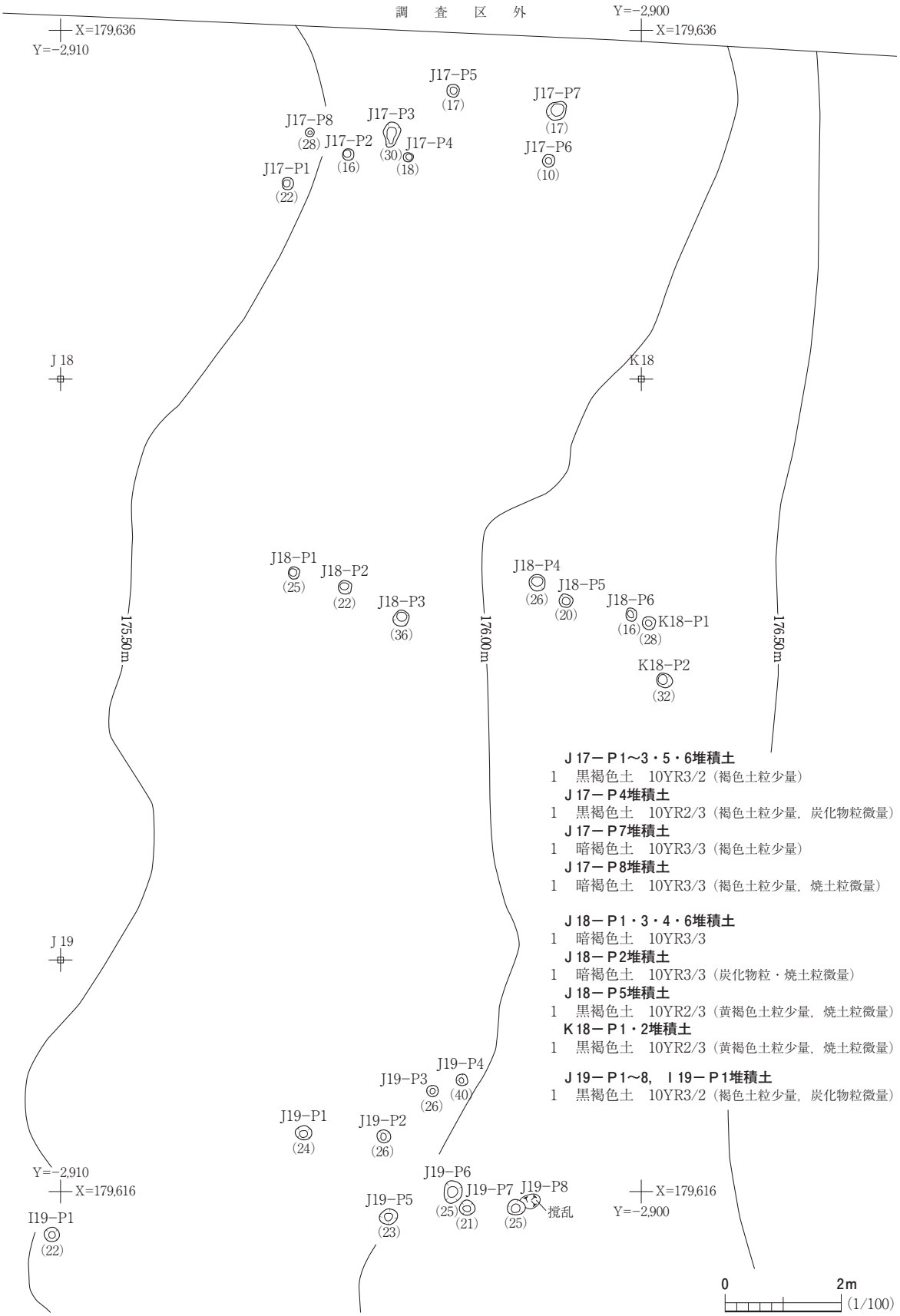
第８節　小　穴　群（図124）

１次調査においては，小穴を25個確認した。これらは竪穴住居跡の付帯施設とは認められず，かつ掘立柱建物跡や柱列等の規則的な配列が認められないものである。このような小穴についてはグリッドごとにＰ１・２・３…と番号を付して調査している。

小穴群は，調査区北東部のＩ19，Ｊ17～19，Ｋ19グリッドに位置し，住居跡や土坑等が確認された２段目の小段丘の平坦面に分布する。これらは，東側に急斜面が迫る位置で，東西11ｍ，南北20ｍの範囲で確認された。遺構検出面は，いずれもＬⅢｂ上面である。一部の小穴で他の遺構との重複が認められ，その関係はＪ17－Ｐ１～５がＳＩ11より新しく，Ｊ17－Ｐ１がＳＩ06よりも新しい。さらに，Ｊ18－Ｐ２はＳＤ05より新しい。

小穴は，北側からＪ17－Ｐ１～８の８個，Ｊ18－Ｐ１～６，Ｋ18－Ｐ１・２の８個，Ｉ19－Ｐ１，Ｊ19－Ｐ１～８の９個の３つの小群として捉えられる。各小群は，南北に６～７ｍの間隔をもって並んでいる。各小群内では，小穴が東西方向に細長く不規則に配列された状況を呈する。小穴の平面形状は円形のものが主体となり，楕円形を呈するものも若干認められる。直径14～36㎝と大きさには幅があり，なかでも18～24㎝のものが多い。検出面からの深さは12～36㎝で，25㎝前後のものが多い。大きさや深さによる分布上でのまとまりといったものは見出せず，小群内に大小の小穴が不規則に混じっているという状況である。

小穴内堆積土は，黒褐色土あるいは暗褐色土の単層である。このうち黒褐色土が堆積するものは18個，暗褐色土が堆積するものが７個ある。いずれもシルト質であることからＬⅡａを堆積土の主



Ｊ17－Ｐ1～3・5・6堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（褐色土粒少量）
Ｊ17－Ｐ4堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（褐色土粒少量，炭化物粒微量）
Ｊ17－Ｐ7堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（褐色土粒少量）
Ｊ17－Ｐ8堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（褐色土粒少量，焼土粒微量）

Ｊ18－Ｐ1・3・4・6堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3
Ｊ18－Ｐ2堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒・焼土粒微量）
Ｊ18－Ｐ5堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（黄褐色土粒少量，焼土粒微量）
Ｋ18－Ｐ1・2堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（黄褐色土粒少量，焼土粒微量）

Ｊ19－Ｐ1～8，Ｉ19－Ｐ1堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（褐色土粒少量，炭化物粒微量）

図124　ピット群

体とすると考えられる。断面の観察から柱痕や抜き取り痕等は確認されなかった。ただ，Ｊ17－Ｐ３は，南部が不整に広がるその形状から，柱が抜き取られたものである可能性が考えられる。

遺物は，Ｊ17－Ｐ１・３，Ｊ18－Ｐ１から土師器片が計９点出土したが，小片のため図示していない。いずれも竪穴住居跡出土土師器と変わらぬ特徴を持つもので，遺物包含層中から流入したものと考えられる。

各小穴の時期は，堆積土の土質や，重複関係を持つものはいずれも９世紀の遺構よりも新しいことから，10世紀以降の時期の所産と考えられる。（國　井）

第９節　遺構外出土遺物（図125・126，写真89～91）

遺構外からは，土師器片2,942点，須恵器片60点，陶磁器片12点，石製品（砥石）１点，鉄製品（角釘）１点，土製品（土錘）２点，焼成粘土塊12点が出土した。遺構が分布する北東部平坦面のＬⅡａ～ｃからの出土数の割合が61％と多く，沢２・３が23％でこれに次ぐ。最下位平坦面からの出土数は全体の５％程度に過ぎない。出土する土師器・須恵器の特徴は，ＬⅡａ～ｃと沢堆積土の間に差はない。加えて竪穴住居跡出土土器とも概ね共通しており，大部分が住居の構築された９世紀中葉～末葉の所産と判断される。また，少数ではあるが10世紀に掛かるかと思われる遺物の出土も認められている。これよりも新しい時期に帰属する陶磁器・鉄製品の類は，ＬＩおよびＬⅡＲとした新期の洪水層からの出土が主である。図125に土器，図126にその他の遺物を示した。

図125－１～６は土師器杯である。いずれもロクロ整形で，内面にヘラミガキと黒色処理がなされる。ヘラミガキは単位の見えないものが多い。１～３・６は被熱によるものか黒色処理が飛び，内面褐灰色を呈しており，図示していないもののうちでもこのような破片も少なくない。底部調整については，１～５が体部下端に回転ヘラケズリを加えられる。うち２・３・５は底部まで回転ヘラケズリによる再調整が及ぶ。加えて５の底面には条線状の凹線が認められる。他の１・４には回転糸切り痕が残されている。６は体部下端から底部までに手持ちヘラケズリが加えられている。器形の分かる１・２は，ＳＩ06出土土師器杯の形態に近く，体部下半が内湾気味に立ち上がり，口縁部がやや外反する器形を呈している。

図125－７～９は土師器高台付杯の高台部片である。いずれもロクロ整形で，内面にミガキと黒色処理がなされる。杯同様，これらのなかにもヘラミガキの単位が明瞭に観察できるものはない。いずれも台の底部は角張る。形状は７が直線的，８が外反気味に開く。９についてはこれらの２つと異なり台が低い。杯部器壁の立ち上がりが急であることから，椀形の器形をなすと思われる。

図125－10～12は土師器甕の破片である。いずれも長胴甕の胴部下半の資料と思われ，外面にタタキメが残される。内面はナデによって当て具痕跡は消されている。10は細い線状の平行タタキメ，11は平行タタキメ，12は斜格子状のタタキメが認められる。

図125－14は須恵系土器の皿である。外面灰色，内面淡黄色を呈し，焼成は軟質である。内外面

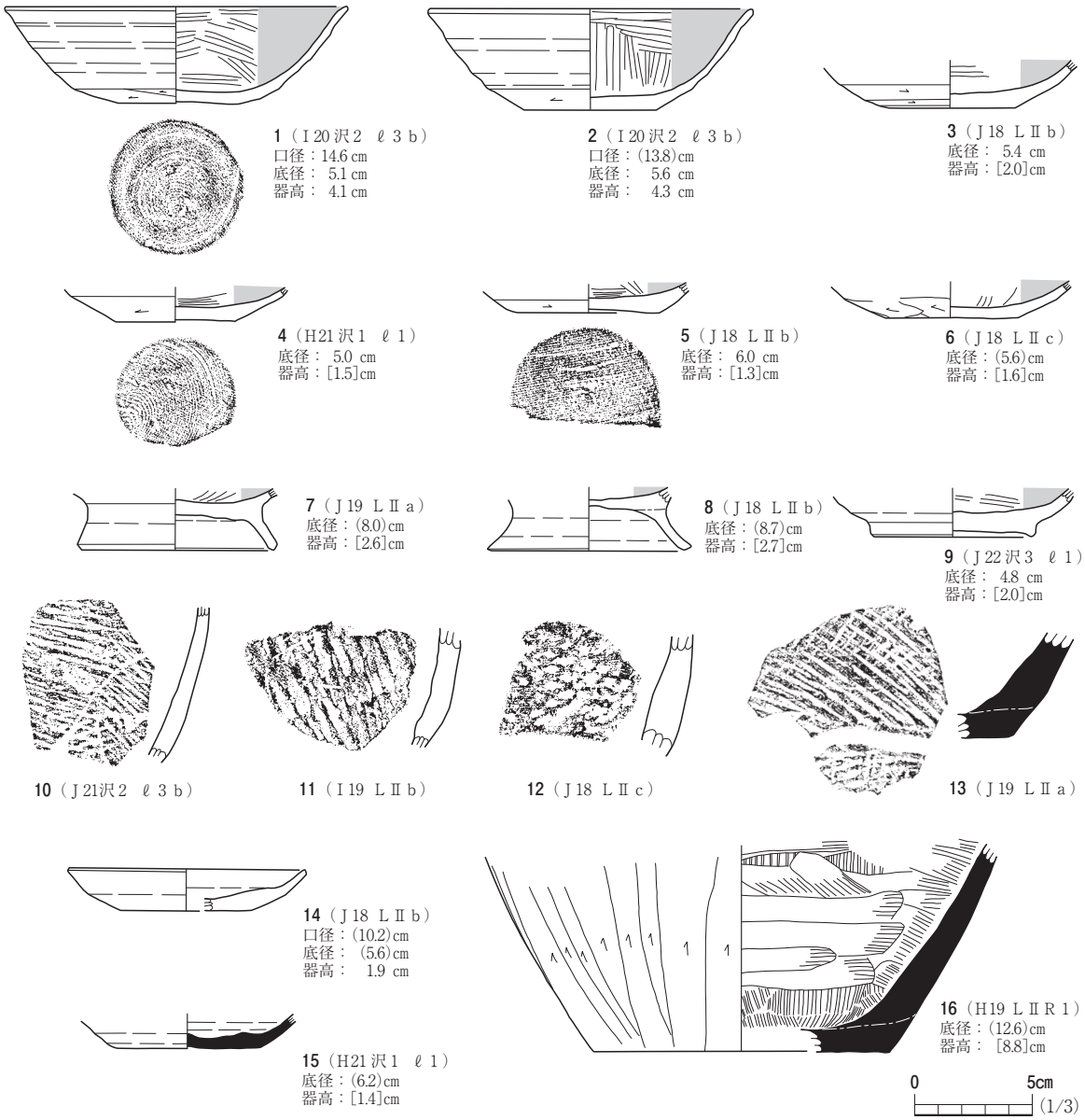


図125　遺構外出土遺物（１）

ともロクロによる整形痕のみが残される。切り離し方法は不明である。ＳＩ06・11の年代よりも新しい10世紀代の遺物の可能性がある。

図125－15は須恵器杯の底部片である。底面はヘラ切り後，回転ヘラケズリされる。ＳＩ11出土のものと底径は近似し，近い時期の所産かもしれない。

図125－13・16は須恵器甕の底部片である。13は外面に平行タタキメが認められ，内面の当て具痕はナデによって消される。16は外面が縦方向のヘラケズリによって調整される。内面は縦方向のハケメ調整の後に，横方向のヘラナデによってハケメを消している。

図126－１・２は管状土錘である。心棒に粘土を巻き付け，両端部に指オサエ，中央部に指オサエ・ナデ調整を加えることによって整形される。１は円柱形，２は錘形である。

図126－３は直方体の砥石である。両端は未使用面で４面が使用される。このうち図の正面と裏

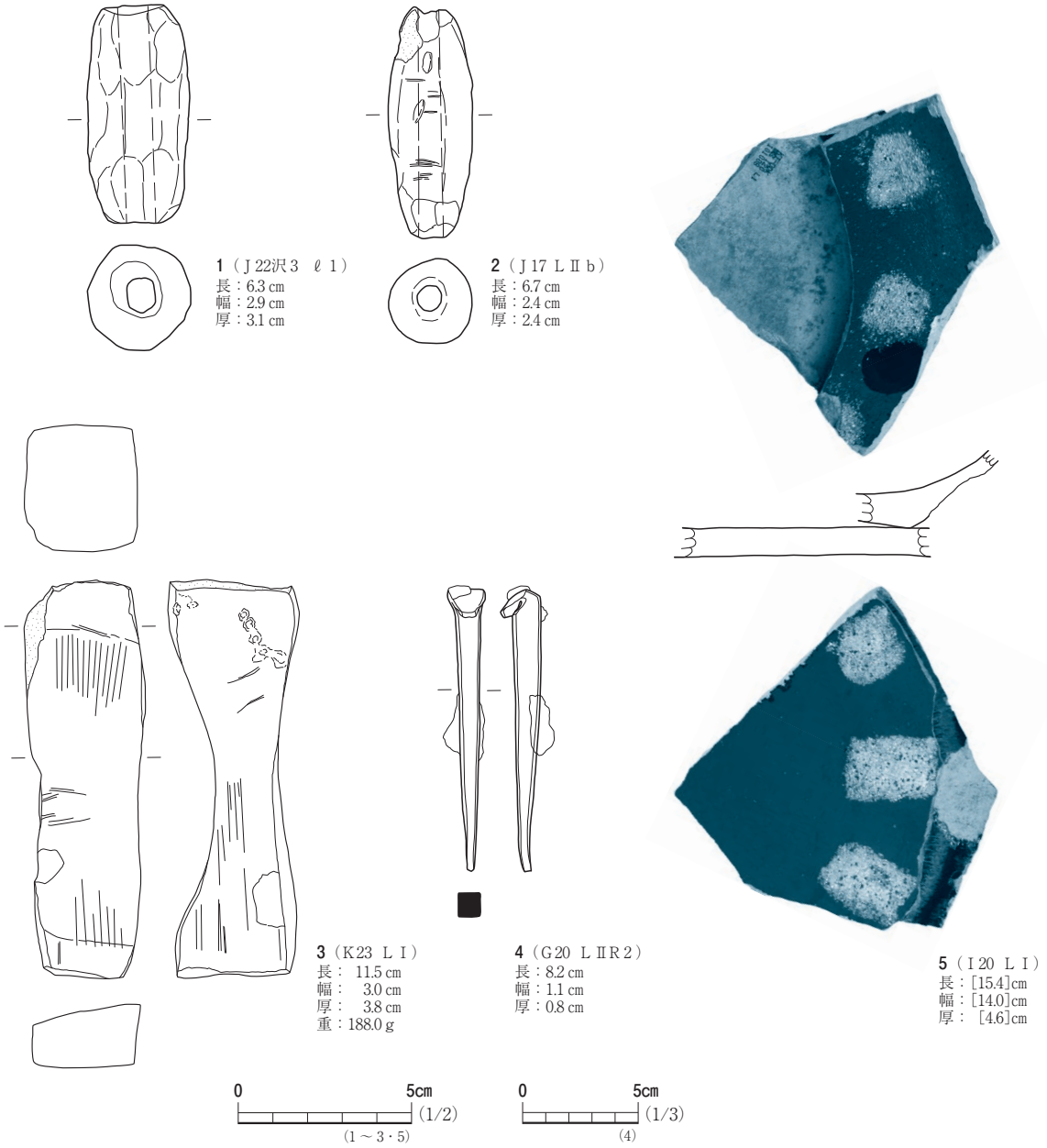


図126　遺構外出土遺物（２）

面の使用頻度が高く，凹面を呈する。凹面の端部および図の側面に当たる面に，長軸に平行した筋状の擦痕が残されている。凹面の深い部分には長軸に直行する擦痕が数条認められる。

図126－４はＬⅡＲ２から出土した鉄釘である。断面方形の角釘で，頭部は平頭となっている。ほぼ完形であり，長さは２寸５分ある。

図126－５は陶器片である。甕底部と焼台が釉薬によって溶着されている。釉薬は鉄釉である。焼台上面には釉は施されず，甕底面との接着部分のみに認められる。焼台底面および甕底部内面に３カ所ずつ砂が付着する。これ自体が焼台として機能したものと考えられる。

図126－３・５については，ＬＩからの出土であり，調査区内の遺構とは直接関係しないものと思われる。（山　元）

第10節　ま　と　め

平成22年度に実施したⅢ区の調査では，竪穴住居跡２軒，土坑８基，溝跡１条，竪穴遺構１基，小穴25個が検出され，９世紀を中心とする遺物が出土した。本節では，本調査区における出土土器および検出遺構についてまとめた上で，現在考えられる調査区付近での活動の変遷について，若干の考察を加えておく。

１．出土土器について

ＳＩ06，ＳＩ11，ＳＫ21の重複した３基の遺構の出土土器は，それぞれ異なった特徴を持っており，これについてまとめておく。各遺構の重複関係を再確認すると，古い順にＳＩ11，ＳＩ06，ＳＫ21となる。次に各遺構出土土器の特徴を挙げる。

ＳＩ11で確認できた器種は，土師器では杯，甕，長胴甕，甑，須恵器では杯，甕，円面硯である。土師器杯は体部が内湾する器形で，小型で器高のあるもの，器高の浅いもの，大型の椀形を呈するものの３つに大きく分けられる。土師器甕は胴部の張り出しが弱く，胴部最大径が上位にある。大きめのものの内面にはカキメ調整がなされる。土師器長胴甕は上半をロクロ，下半をタタキによって整形される。内面にはハケメ，カキメの調整がなされる。

ＳＩ06で確認できる器種は，土師器では杯，高台付杯，甕，長胴甕，鉢形の鍋，甑(把手)，筒型土器である。須恵器は杯のみで，数量も少ない。土師器杯・高台付杯は口縁端部が外反する器形である。大型の椀状のものと器高の浅いものに大きく分けられる。杯の底部はＳＩ11に比べて小さく，手持ちヘラケズリによって再調整されるものが多い傾向にある。内面黒色処理が確認できないものもあるが，ヘラミガキは施されており，いわゆる赤焼土器や須恵系土器と称されるものは認められない。土師器甕は胴部最大径が中位にあり，球胴状である。ロクロナデのみで整形される。土師器長胴甕および鍋は，ＳＩ11と同様に上半をロクロ，下半をタタキによって整形されるが，内面調整はロクロナデもしくはヘラナデのみである。

ＳＫ21では底部が小さく，口縁部が強く外反する器形の杯が出土する。

このように，器形の違いはもちろんのこと，古いものでは須恵器の量が多く，甕にハケメ，カキメ調整が残るのに対し，新しいものでは土師器高台付杯の出現や須恵器への依存性の低下など調整技法や器種組成の変化も見て取れる。これらの相違は，遺構の重複関係から，明らかに年代差と捉えることができる。山中雄志をはじめとする従来の会津地域における編年観に当てはめれば，ＳＩ11には９世紀中葉～後葉，ＳＩ06には９世紀末葉，ＳＫ21に９世紀末葉～10世紀初頭の年代を与えることができる(山中：1999・2000)。

さらに遺構外からは，須恵系土器の皿が出土していることから考えて，平安時代における調査区付近での活動は，９世紀半ば以降～10世紀代と考えることができる。

２．遺構について

調査区内で確認できた遺構は，平安時代では住居跡のほか土器焼成坑，ロクロピット，道跡と考えられる溝跡が近接して存在している。他に，これらの遺構を切って構築される小穴群，近世以降では竪穴遺構とした半地下式の「むろ」がある。いずれも，小段丘上で確認されたものである。

平安時代の遺構では，重複関係および出土土器から２時期に分けて考えることができる。古期は９世紀中葉～後葉でＳＩ11とＳＤ05とした道状の遺構，ＳＫ22が該期の遺構である。新期は９世紀末葉でＳＩ06とＳＫ18とした土器焼成坑，ＳＫ21が該期の遺構である。ロクロピットとしたＳＫ23，もう１基の土器焼成坑であるＳＫ29については，大きくは９世紀代に収まるであろうが，その詳細な帰属時期は明らかにし得ていない。

９世紀末葉に見られる住居跡とそれに近接した焼成坑という在り方は，Ⅱ区のＳＩ08とＳＫ25にも見ることができる。ＳＩ06とＳＩ08は平面形，主軸方位，カマドの位置，住居中央部に炉をもつなど特徴が共通している。非常に近接した時期に構築されたものと推測される。

３．変遷過程

Ⅲ区の遺構は，小高い小段丘上に構築される。この小段丘は，本章はじめに述べたように河川堆積物と斜面崩落土によって形成されたものである。山際に段丘状に取り残され，洪水の影響を受けなくなったこの場所を狙って，９世紀中葉～末葉に集落が形成されている。この地形の最終的な形成年代としては，ＳＫ29の検出面となった沢３ℓ２出土炭化物の^{14}Ｃ年代が７～８世紀という数値年代を示しており（付章第１節参照），想定される集落の相対年代と非常に調和的である。

一方，最下位の平坦面については，現地形では南北方向に非常に平坦な面となっている。ただし，ＬⅡｄ・ｅとした平安時代の包含層が，南部では欠層となり，北部では細分できるという状況から，元来は上流側から下流側へと下るような地形であり，少なくとも，Ⅲ区の最下位面では平安時代半ば以降も阿賀川による侵食・付加が繰り返されたと想定できる。基本土層Ｂ断面における，近世前後と推定できる洪水層への円弧すべり痕跡では，元ＬⅡｄ１（ＬⅡＲ９ｇ）上に，現在は確認できない数枚の暗色系の砂質土層が堆積しており，平安時代にはⅡ区と同様の包含層の形成があった可能性も想定できる。この地すべり自体は，卜部厚志氏からの教示によれば，地震等の大災害が要因と想定でき，会津盆地北端に地すべりによって山崎新湖を形成した慶長地震（1611年）をはじめとする中・近世にあったと想定される大地震の可能性が高い。よって現在のような地形への変化は近世以降に完成されたと考えられる。

近世以降には，竪穴遺構が構築される。堆積土上位からではあるが，舟釘が出土していること，近隣住民からの聞き取りで，道路網が整備される以前には遺跡内に対岸の長井地区との渡し舟の船着場があったとされていることから，川での舟運に関連した，物置や待機小屋などとして機能したのではないかと推測される。

（山　元）

第５章　総　括

小田高原遺跡は，喜多方市南西端の阿賀川北岸に位置し，小田高原窯跡の露頭(『喜多方市史４』：1995)・遺物散布により比較的古くから周知されていた遺跡である。小田高原遺跡の範囲は，平成21年度に行われた喜多方市教育委員会の試掘調査によって増補され，新たに加えられた段丘斜面～河川敷の箇所が阿賀川狭窄部改修事業(長井地区)における発掘調査の対象区である。なお，小田高原遺跡西方の対岸域が河沼郡会津坂下町長井地区で，阿賀川が市・町の境界となっている。

今回の１次調査では，縄文時代，平安時代，中・近世の遺構・遺物を確認した。遺構・遺物数から概ね平安時代が１次調査の主体である。奈良時代以降，承和七年(840)までの間に会津郡から耶麻郡が分置され(坂内：1995)，両郡の境界はおよそ阿賀川であったとされることから，平安時代における小田高原遺跡の立地は耶麻郡の南端部に位置づけられる。一方，対岸の長井地区は，所属が会津郡，河沼郡と変遷し，中世では蜷河荘に含まれる。

小田高原遺跡の工区に掛かる調査対象面積は19,000㎡以上と広域にわたるため，便宜上，Ⅰ～Ⅲ区に分けた。Ⅰ～Ⅲ区の詳細については第２～４章に記したとおりであるが，要約すると，Ⅰ区は旧遺跡範囲の小田高原台地西端部を含み，同平坦部で８世紀末葉～９世紀前葉に位置づけられる集落跡を確認した。

Ⅱ・Ⅲ区は概ね河川敷の一帯であり，遺構は主に段丘斜面の裾部からテラス状に張り出す平坦面で確認した。Ⅱ区では，遺存状態が悪いが９世紀中葉頃に操業していたと推測される須恵器窯跡ＳＲ01～03を発見し，杯を中心とする製品を生産していたものと考えられる。ＳＲ01～03は比較的小型の簡易な半地下式窖窯であったと考えられ，杯類の焼成は重ね焼きによるものと推測される。またⅡ区では，10世紀初頭頃の竪穴住居跡・土師器焼成土坑を確認している。対岸の長井地区には９世紀前葉頃の操業とされる荻ノ窪窯跡があるが，同窯の須恵器杯は底部の切り離しが回転糸切り技法であり，回転ヘラ切り技法の小田高原遺跡資料とは系統的な差異が認められる。

Ⅲ区では重複する２軒の竪穴住居跡ＳＩ06・11を発見し，出土遺物からＳＩ11が９世紀中葉頃，ＳＩ06が10世紀初頭頃に位置づけられる。ＳＩ06の側でほぼ同時期の土師器焼成土坑が検出され，Ⅱ区と同様の状況が窺える。ＳＩ11の出土遺物について，胎土分析(付章参照)から，須恵器杯がⅡ区の窯跡で生産された可能性があること。土師器・須恵器杯の胎土組成は一致しないこと。また，床面採取の粘土塊と土師器杯の化学組成が類似していることなどが指摘されている。ＳＩ11の土師器杯の底部切り離しは回転糸切りであり，須恵器杯とは技法が異なる。ＳＩ11は，採取粘土塊の成分から土師器生産との関連性が推測されるが，Ⅱ区で生産された異系の須恵器杯も受容している点が注目されるであろう。

喜多方市史掲載の８世紀中葉頃と考えられている小田高原窯跡は，Ⅰ区内の農道付近にあったも

のと推測される。しかし，同窯跡については今回の調査で確認することができず，削平等により消滅してしまった可能性がある。小田高原遺跡の北東側約600ｍの地点には平成10年度に発見された西新田窯跡群があり，試掘調査（喜多方市教育委員会：1999～2003）によって，８世紀末から９世紀前半の須恵器窯跡が10基前後分布しているものと推測されている。同試掘調査によって杯・長頸瓶・横瓶・甕・ミニチュアなどの須恵器が採取された他，９世紀後半の土師器焼成土坑が確認されている。なお，西新田窯跡群はＩ区の小田高原窯跡と併せて小田高原窯跡群と一括されていたこともあるようである。

Ｉ区に存在した須恵器窯跡については，採取遺物から，会津若松市の大戸窯跡にわずかに先行する８世紀中頃とされる。また，小田高原窯跡群ではなく西新田窯跡群を指していると推察されるが，同窯跡群の評価については，大戸窯跡の影響を強く受けた長頸瓶等の生産が８世紀末頃から開始されたとする（石田：1998・2000）。西新田窯跡群では，平安時代初期，高台部を除けば大戸窯産と見分けが付かないほどの長頸瓶を製作するに至る。しかし，大戸窯跡の規模が拡大していくなか，小田高原遺跡および周辺域における窯業の展開は比較的小規模なものに止まり，９世紀中葉を境に衰退した模様である。

小田高原遺跡の周辺域は，阿賀川北岸に天神免古墳群・虚空蔵森古墳群・灰塚山古墳が，また南岸に亀ヶ森古墳・鎮守森古墳などの前期古墳が集中しており，比較的古い段階で開けた要衝の地である。しかし，奈良時代の遺跡は比較的少なく，平安時代から増加傾向となるようである。小田高原遺跡においても８世紀中葉期の状況は，喜多方市史掲載の須恵器窯跡以外に遺構が確認されておらず，不明な点が多い。また，８世紀後葉期の遺構・遺物はほとんど確認されていない。小田高原遺跡における奈良時代後半期の様相は判然としない。

大戸窯跡は，８世紀末から爆発的な生産体制に移行し，９世紀中葉段階で最盛期を迎えたことが指摘されている（石田：1998）。西新田窯跡群は，創業が概ね８世紀末葉であり，長頸瓶模倣品の生産など大戸窯跡の拡大期に即応している。西新田窯跡群の経営主体は不明であるが，平安時代初期は，郡山市広網遺跡のように工房を中心とした新興集落が出現する時期でもある。Ｉ区で確認した８世紀末葉～９世紀前葉の集落跡は，西新田窯跡群の創業期と概ね一致し，平安時代初頭の新たな伸展期に成立した可能性もある。

Ⅱ区で確認した須恵器窯跡の操業時期は９世紀中葉頃で，西新田窯跡群の終了期に近い。会津地方における杯類の出土傾向は，９世紀前半代までは須恵器杯が量的に優越するものの，９世紀中葉以降は土師器杯が著しく増加することが指摘されている（山中：1999）。Ⅱ区のＳＲ01～03では須恵器杯類を中心に生産していたと考えられるが，土師器杯への需要変化が小田高原遺跡周辺域における須恵器生産の衰退の一因になった可能性がある。Ⅲ区のＳＩ11から出土した杯類は土師器杯が主体であり，９世紀中葉頃が杯類の転換期であったことを推測させる。以上のことから，Ⅱ区のＳＲ01～03は，小田高原地区の須恵器生産における過渡期の所産と推測される。

10世紀初頭頃のⅡ区ＳＩ08・Ⅲ区ＳＩ06では須恵器杯の出土が認められず，取って代わるように

赤焼き土器が含まれる。両住居跡に近接して土師器焼成土坑が検出され，須恵器生産終了後の西新田窯跡群の状況と概ね一致している。

他に１次調査では，Ⅱ区の北西部においてＬⅡコとした層から小刀が出土している。ＬⅡコ内から11～12世紀頃の瓦器が出土しており，小刀は中世の所産と推測される。当該期の遺構は確認できなかった。同様の小刀は喜多方市の内屋敷遺跡の墓壙から出土している。近世では竪穴遺構としたＳＸ01から船釘の可能性もある鉄釘が出土しており，河川敷状に張り出す狭窄部を利用した船着場があった可能性がある。

なお，Ⅲ区では，地震によって生じたと考えられる円弧滑りが観察された(写真70・71)。平安時代を含む遺物包含層が地滑りを起こしており，原因としては1611年に発生した「会津慶長地震」の可能性が考えられるとのことである。

今回，小田高原の１次調査によって，Ⅰ区についてはすべての調査を終了した。Ⅱ区では，第１遺物包含層・文化面とした概ね10世紀初頭期の調査は終了したが，ＳＲ01～03の創業期と推測される９世紀中葉頃の第２遺物包含層・文化面および下層については平成24年度に調査が予定されている。Ⅲ区は，8,500㎡のうち，北部3,000㎡については調査が終了し，残りの5,500㎡は平成23年度の第２次調査として，現在，調査中である。（香　川）

引用・参考文献（五十音順）

論文等

荒木　隆　2000「陸奥南部の郡衙立地条件と水運」『福島県立博物館紀要』15　福島県立博物館

石田明夫　1998『会津大戸窯　大戸古窯跡群保存管理計画書』　会津若松市

石田明夫　1998『会津，古代そして中世』（会津若松市史２　歴史編２　古代－２・中世－１）　会津若松市

石田明夫　2000「付編２　北部地域出土の土器」『若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅱ』　会津若松市教育委員会

石田明夫他　2000『会津のやきもの－須恵器から陶磁器まで』（会津若松市史14　文化編１　陶磁器）　会津若松市

石本　弘　1996「丸底から平底へ－福島県におけるロクロ導入期の土師器－」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会

井　憲治　2003「荒屋敷遺跡」『会津縦貫北道路調査報告』２　福島県教育委員会

小野木ルリコ　2006「飛鳥寺西門出土土管の検討」『史泉』103　関西大学

北野博司　1998「古代の土器」『辰口町西部遺跡群』１　石川県立埋蔵文化財センター

考古学から古代を考える会　2000『古代仏教系遺物集成・関東』

菅原祥夫　1996「大久保Ｆ遺跡」『常磐自動車遺跡調査報告』８　福島県教育委員会

菅原祥夫　1997「第９節　東北東部－古代陸奥の土師器生産体制と土師器焼成坑」『古代土師器の生産と焼成遺構』窯跡研究会編　真陽社

田中広明　2003『地方の豪族と古代の官人』柏書房

丹治篤嘉　2001「福島県内の筒型土製品・異形土製品について」『福島考古』第４号２　福島県考古学会

丹治篤嘉　2010「カマド燃焼部における遺物出土状況の検討」『福島県文化財センター白河館研究紀要2009』　福島県文化振興事業団

東北古代土器研究会　2008　『東北古代土器集成－須恵器・窯跡編－〈出羽〉』

仲田茂司　1994「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその背景」『考古学雑誌』第79巻第３号

生江芳徳　1971「新編会津風土記にみるいしあい出土の遺物について」『福島考古』第20号　福島県考古学会

中村嘉男他　1976『土地分類基本調査　喜多方』福島県
坂内三彦　1995「第２編　古代・中世」『喜多方市史』第４巻(資料編１)　喜多方市教育委員会
平野　修　1996「古代仏教と土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所　研究報告』第７集　帝京大学山梨文化財研究所
福田秀生他　2009「第１編　荻平遺跡」『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告』2　福島県教育委員会
村田晃一　1995「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第３号６　福島県考古学会
村松恵司　1989「村のくらし」『古代史復元』9　講談社
山中雄志　1999「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(前編)」『福島考古』第40号　福島県考古学会
山中雄志　2000「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(後編)」『福島考古』第41号　福島県考古学会
山中雄志　2002「会津地方におけるロクロ土師器の出現と展開を巡って」『福島考古』第43号　福島県考古学会
山中雄志　2008「会津地方」『東北古代土器集成－須恵器・窯跡編－〈陸奥〉』東北古代土器研究会編報告書

報告書

明日香村教育委員会　2010『飛鳥寺西方遺跡現地説明会資料』
会津坂下町教育委員会　1990『福島県営ほ場整備事業阿賀川Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書　青木遺跡』
会津坂下町教育委員会　1992『福島県営ほ場整備事業阿賀川地区遺跡調査報告書　宮ノ北遺跡・三本木遺跡』
会津坂下町教育委員会　1995『福島県営ほ場整備事業阿賀川Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書　稲荷北遺跡』
会津坂下町教育委員会　2000「萩ノ窪窯跡」『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書』
会津若松市教育委員会　1993『会津大戸窯　大戸古窯跡群発掘調査報告書』
会津若松市教育委員会　1994『会津大戸窯　大戸古窯跡群発掘調査報告書　遺物編』
会津若松市教育委員会　2005『東高久遺跡』
喜多方市教育委員会　1995「第１編　考古」『喜多方市史』第４巻(資料編１)
喜多方市教育委員会　1997『綾金・長尾地区遺跡発掘調査報告Ⅰ　塚田Ａ・Ｂ遺跡　村前遺跡』
喜多方市教育委員会　1999「西新田窯跡群」『平成10年度市内遺跡発掘調査報告書』
喜多方市教育委員会　2000「西新田窯跡群範囲確認試掘調査」『平成11年度市内遺跡発掘調査報告書』
喜多方市教育委員会　2001「西新田窯跡群」「小田高原遺跡」『平成12年度市内遺跡発掘調査報告書』
喜多方市教育委員会　2002「西新田窯跡群試掘調査(第三次)」『平成13年度市内遺跡発掘調査報告書』
喜多方市教育委員会　2010「小田高原遺跡試掘調査」『平成21年度市内遺跡発掘調査報告書』
喜多方市教育委員会　2010「中谷地遺跡」『県営経営体育成基盤整備事業駒形第一地区発掘調査報告書』
郡山市教育委員会　1985『広網遺跡　発掘調査概報』
塩川町教育委員会　1997『県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業塩川西部地区遺跡発掘調査報告書　鏡ノ町遺跡Ａ』
塩川町教育委員会　1999『県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業塩川西部地区遺跡発掘調査報告書４　古屋敷遺跡』
塩川町教育委員会　2001『県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業塩川西部地区遺跡発掘調査報告書５　鏡ノ町遺跡Ｂ』
塩川町教育委員会　2004『県営経営体育成基盤整備事業塩川西部地区遺跡発掘調査報告書７　内屋敷遺跡』
奈良国立文化財研究所　1997「飛鳥寺の調査　1996－１次」『奈良国立文化財研究所年報1997－Ⅱ』
新潟県教育委員会　1989『新新バイパス関係発掘調査報告書　山三賀Ⅱ遺跡』
福島県教育委員会　1980「佐平林遺跡(Ⅷ区)」『母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅴ
福島県教育委員会　1982「鳴神・柿内戸遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』Ⅴ
福島市教育委員会　1993『鎧塚遺跡』　福島市埋蔵文化財調査報告書第53集
福島市教育委員会　1996『福島県遺跡地図(会津地方)』

付章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

株式会社　加速器分析研究所

１．測定対象試料

小田高原遺跡は，福島県喜多方市慶徳町山科字古屋敷に所在し，阿賀川右岸の中位段丘から氾濫原にかけて立地する。測定対象試料は，竪穴住居跡，窯跡，土坑，流路等から出土した炭化物等の試料合計15点（FB.AG10.C01：IAAA－102763～FB.AG10.C03：IAAA－102765，FB.AG10.C07：IAAA－102766～FB.AG10.C18：IAAA－102777）である（表12）。土器付着炭化物 FB.AG10.C01は土器の外面より採取された。

２．測定の意義

試料が採取された土器，住居跡などの遺構の年代を明らかにする。25号土坑出土試料２点の測定では，底面出土の FB.AG10.C15と検出面出土の FB.AG10.C16の値を比較することで，遺構埋没と上位の包含層堆積に時間差があるか否か検討する。Ｊ22Ｇ沢３のℓ２は炭化物を多量に含んでいるためここから採取された FB.AG10.C17と，この層と同一地形面で検出された６号住居跡出土試料２点の年代値を比較することで，この層の堆積年代および地形の形成年代を推定する。Ｊ21Ｇ包含層下堆積物出土の FB.AG10.C18の測定では，この斜面地山崩落土の形成時期を推定するとともに，土砂の供給源である斜面上方に遺構が存在する可能性を確認する。

３．化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から１M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１M に達した時には「AAA」，１M 未満の場合は「AaA」と表12に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測

定装置に装着する。

4．測定方法

3MV タンデム加速器(NEC Pelletron 9SDH-2)をベースとした^{14}C-AMS 専用装置を使用し，^{14}C の計数，^{13}C 濃度(^{13}C/^{12}C)，^{14}C 濃度(^{14}C/^{12}C)の測定を行う。測定では，米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx Ⅱ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5．算出方法

(1) δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度(^{13}C/^{12}C)を測定し，基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表12)。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C 年代(Libby Age：yrBP)は，過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach：1977)。^{14}C 年代はδ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表12に，補正していない値を参考値として表13に示した。^{14}C 年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差(±１σ)は，試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し，pMC が100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値もδ^{13}C によって補正する必要があるため，補正した値を表12に，補正していない値を参考値として表13に示した。

(4) 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差(1σ＝68.2％)あるいは２標準偏差(2σ＝95.4％)で表示される。グラフの縦軸が^{14}C 年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C 補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース(Reimer et al.：2009)を用い，OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey：2009)を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表13に示した。暦年較正年代は，^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

６．測定結果

１号住居跡ℓ１出土土器付着炭化物 FB.AG10.C01 の ^{14}C 年代は1340 ± 30yrBP，暦年較正年代（1σ）は653～679cal AD の範囲である。

他の竪穴住居跡出土炭化物の ^{14}C 年代は，２号住居跡ℓ２の FB.AG10.C02が1250 ± 30yrBP，FB.AG10.C03が1330 ± 30yrBP，６号住居跡カマドℓ４の FB.AG10.C07が1180 ± 30yrBP，同住居跡炉跡底面の FB.AG10.C08が1200 ± 30yrBP，８号住居跡床面の FB.AG10.C09が1110 ± 30yrBP，同住居跡カマド底面の FB.AG10.C10が1180 ± 30yrBP，４号住居跡ℓ５の FB.AG10.C11が1140 ± 30yrBP，FB.AG10.C12が1130 ± 30yrBP である。同じ竪穴住居跡の同じ層から出土した２点の試料を測定した事例を検討すると，４号住居跡ℓ５の２点の値は誤差（±１σ）の範囲で重なり，近い年代を示すが，２号住居跡ℓ２の２点の値の間には若干年代差が認められる。同じ竪穴住居跡の別の層から出土した試料を測定した事例を見ると，６号住居跡の２点の値は誤差（±１σ）の範囲で重なる近い年代値となり，８号住居跡の２点の値は，わずかに誤差範囲で重ならないものの，近接した年代値である。

暦年較正年代（1σ）は，FB.AG10.C02が690～777cal AD の間に２つの範囲，FB.AG10.C03が655～688cal AD の範囲，FB.AG10.C07が782～886cal AD の間に２つの範囲，FB.AG10.C08が779～869cal AD の間に２つの範囲，FB.AG10.C09が895～972cal AD の間に２つの範囲，FB.AG10.C10が782～886cal AD の間に２つの範囲，FB.AG10.C11が885～968cal AD の間に２つの範囲，FB.AG10.C12が890～970cal AD の間に２つの範囲で示される。

須恵器窯跡出土木炭の ^{14}C 年代は，１号須恵器窯跡底面の FB.AG10.C13が1220 ± 30yrBP，３号須恵器窯跡作業場底面の FB.AG10.C14が1190 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1σ）は，FB.AG10.C13が773～870cal AD の範囲，FB.AG10.C14が782～880cal AD の間に２つの範囲で示される。

25号土坑出土炭化物の ^{14}C 年代は，底面の FB.AG10.C15が1180 ± 30yrBP，検出面の FB.AG10.C16が970 ± 30yrBP で，底面の試料が古く，検出面の試料が新しいという年代差が示された。暦年較正年代（1σ）は，FB.AG10.C15が782～888cal AD，FB.AG10.C16が1023～1148cal AD の間に各々複数の範囲で示される。

Ｊ22Ｇ沢３のℓ２出土炭化物 FB.AG10.C17の ^{14}C 年代は1270 ± 30yrBP，暦年較正年代（1σ）は688～771cal AD の間の２範囲である。６号住居跡の試料２点に比べて若干古い年代値を示し，重複関係に調和的と言える。

Ｊ21Ｇ包含層下堆積物（ＬⅢオ）出土炭化物 FB.AG10.C18の ^{14}C 年代は3190 ± 30yrBP，暦年較正年代（1σ）は1494～1438cal BC の範囲で，縄文時代後期末葉頃に相当する。今回測定された他のすべての試料よりも古い年代値となっている。

試料の炭素含有率はいずれも50％を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。

表12　放射性炭素年代測定結果

試料名	測定番号	採取場所		試料形態	処理方法	δ 13C（‰）（AMS）	δ 13C 補正あり	
		遺構名	層位				Libby Age（yrBP）	pMC（%）
FB.AG10.C01	IAAA－102763	1号住居跡	ℓ 1	土器付着炭化物	AaA	－22.85 ± 0.52	1,340 ± 30	84.59 ± 0.27
FB.AG10.C02	IAAA－102764	2号住居跡	ℓ 2	炭化物	AAA	－25.09 ± 0.47	1,250 ± 30	85.56 ± 0.27
FB.AG10.C03	IAAA－102765	2号住居跡	ℓ 2	炭化物	AAA	－24.04 ± 0.6	1,330 ± 30	84.71 ± 0.27
FB.AG10.C07	IAAA－102766	6号住居跡　カマド	ℓ 4	炭化物	AAA	－23.86 ± 0.59	1,180 ± 30	86.30 ± 0.29
FB.AG10.C08	IAAA－102767	6号住居跡　炉跡	底面	炭化物	AAA	－24.86 ± 0.52	1,200 ± 30	86.08 ± 0.28
FB.AG10.C09	IAAA－102768	8号住居跡	床面	炭化物	AAA	－27.04 ± 0.55	1,110 ± 30	87.05 ± 0.28
FB.AG10.C10	IAAA－102769	8号住居跡　カマド	底面	炭化物	AaA	－26.51 ± 0.47	1,180 ± 30	86.29 ± 0.29
FB.AG10.C11	IAAA－102770	4号住居跡	ℓ 5	炭化物	AAA	－25.32 ± 0.45	1,140 ± 30	86.79 ± 0.28
FB.AG10.C12	IAAA－102771	4号住居跡	ℓ 5	炭化物	AAA	－27.12 ± 0.53	1,130 ± 30	86.92 ± 0.3
FB.AG10.C13	IAAA－102772	1号須恵器窯跡	底面	木炭	AAA	－27.50 ± 0.43	1,220 ± 30	85.92 ± 0.27
FB.AG10.C14	IAAA－102773	3号須恵器窯跡作業場	底面	木炭	AAA	－24.82 ± 0.57	1,190 ± 30	86.21 ± 0.29
FB.AG10.C15	IAAA－102774	25号土坑	底面	炭化物	AAA	－25.37 ± 0.5	1,180 ± 30	86.35 ± 0.29
FB.AG10.C16	IAAA－102775	25号土坑	検出面	炭化物	AAA	－25.46 ± 0.61	970 ± 30	88.66 ± 0.29
FB.AG10.C17	IAAA－102776	J 22G沢3	ℓ 2	炭化物	AAA	－27.03 ± 0.54	1,270 ± 30	85.36 ± 0.29
FB.AG10.C18	IAAA－102777	J 21G包含層下堆積物	LⅢオ	炭化物	AAA	－24.38 ± 0.66	3,190 ± 30	67.19 ± 0.25

表13　暦年較正年代

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）	（yrBP）		
IAAA－102763	1,310 ± 20	84.96 ± 0.25	1,344 ± 25	653calAD － 679calAD（68.2%）	644calAD － 695calAD（87.8%） 700calAD － 707calAD（ 1.2%） 747calAD － 765calAD（ 6.4%）
IAAA－102764	1,250 ± 20	85.55 ± 0.26	1,252 ± 25	690calAD － 751calAD（55.2%） 762calAD － 777calAD（13.0%）	676calAD － 826calAD（91.3%） 840calAD － 863calAD（ 4.1%）
IAAA－102765	1,320 ± 20	84.87 ± 0.25	1,333 ± 26	655calAD － 688calAD（68.2%）	648calAD － 714calAD（82.2%） 745calAD － 768calAD（13.2%）
IAAA－102766	1,160 ± 30	86.5 ± 0.27	1,183 ± 26	782calAD － 790calAD（ 6.0%） 810calAD － 886calAD（62.2%）	773calAD － 898calAD（91.3%） 922calAD － 943calAD（ 4.1%）
IAAA－102767	1,200 ± 30	86.11 ± 0.27	1,203 ± 26	779calAD － 831calAD（42.1%） 837calAD － 869calAD（26.1%）	720calAD － 742calAD（ 4.5%） 770calAD － 892calAD（90.9%）
IAAA－102768	1,150 ± 20	86.68 ± 0.26	1,114 ± 25	895calAD － 926calAD（29.1%） 937calAD － 972calAD（39.1%）	885calAD － 990calAD（95.4%）
IAAA－102769	1,210 ± 30	86.02 ± 0.27	1,184 ± 26	782calAD － 790calAD（ 6.1%） 810calAD － 886calAD（62.1%）	773calAD － 898calAD（91.7%） 922calAD － 942calAD（ 3.7%）
IAAA－102770	1,140 ± 30	86.74 ± 0.27	1,137 ± 25	885calAD － 903calAD（16.5%） 916calAD － 968calAD（51.7%）	783calAD － 788calAD（ 0.9%） 815calAD － 844calAD（ 5.2%） 859calAD － 983calAD（89.3%）
IAAA－102771	1,160 ± 30	86.54 ± 0.28	1,126 ± 27	890calAD － 904calAD（12.5%） 914calAD － 970calAD（55.7%）	827calAD － 841calAD（ 1.6%） 864calAD － 990calAD（93.8%）
IAAA－102772	1,260 ± 20	85.48 ± 0.26	1,218 ± 25	773calAD － 870calAD（68.2%）	709calAD － 747calAD（13.9%） 766calAD － 887calAD（81.5%）
IAAA－102773	1,190 ± 30	86.24 ± 0.27	1,192 ± 26	782calAD － 791calAD（ 7.6%） 808calAD － 880calAD（60.6%）	726calAD － 738calAD（ 1.5%） 771calAD － 895calAD（92.4%） 925calAD － 937calAD（ 1.5%）
IAAA－102774	1,190 ± 30	86.28 ± 0.27	1,179 ± 26	782calAD － 790calAD（ 5.8%） 810calAD － 888calAD（62.4%）	774calAD － 899calAD（89.5%） 920calAD － 945calAD（ 5.9%）
IAAA－102775	970 ± 30	88.57 ± 0.27	967 ± 26	1023calAD － 1046calAD（29.3%） 1092calAD － 1121calAD（30.6%） 1140calAD － 1148calAD（ 8.3%）	1017calAD － 1155calAD（95.4%）
IAAA－102776	1,310 ± 30	85 ± 0.27	1,271 ± 27	688calAD － 725calAD（36.9%） 739calAD － 771calAD（31.3%）	666calAD － 780calAD（93.4%） 792calAD － 806calAD（ 2.0%）
IAAA－102777	3,180 ± 30	67.27 ± 0.23	3,194 ± 29	1494calBC － 1438calBC（68.2%）	1516calBC － 1416calBC（95.4%）

参考文献

Stuiver M. and Polach H.A.　1977　Discussion：Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19（3）, pp.355－363.

Bronk Ramsey C.　2009　Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51（1）, pp.337－360.

Reimer, P.J. et al.　2009　IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0－50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51（4）, pp.1111－1150.

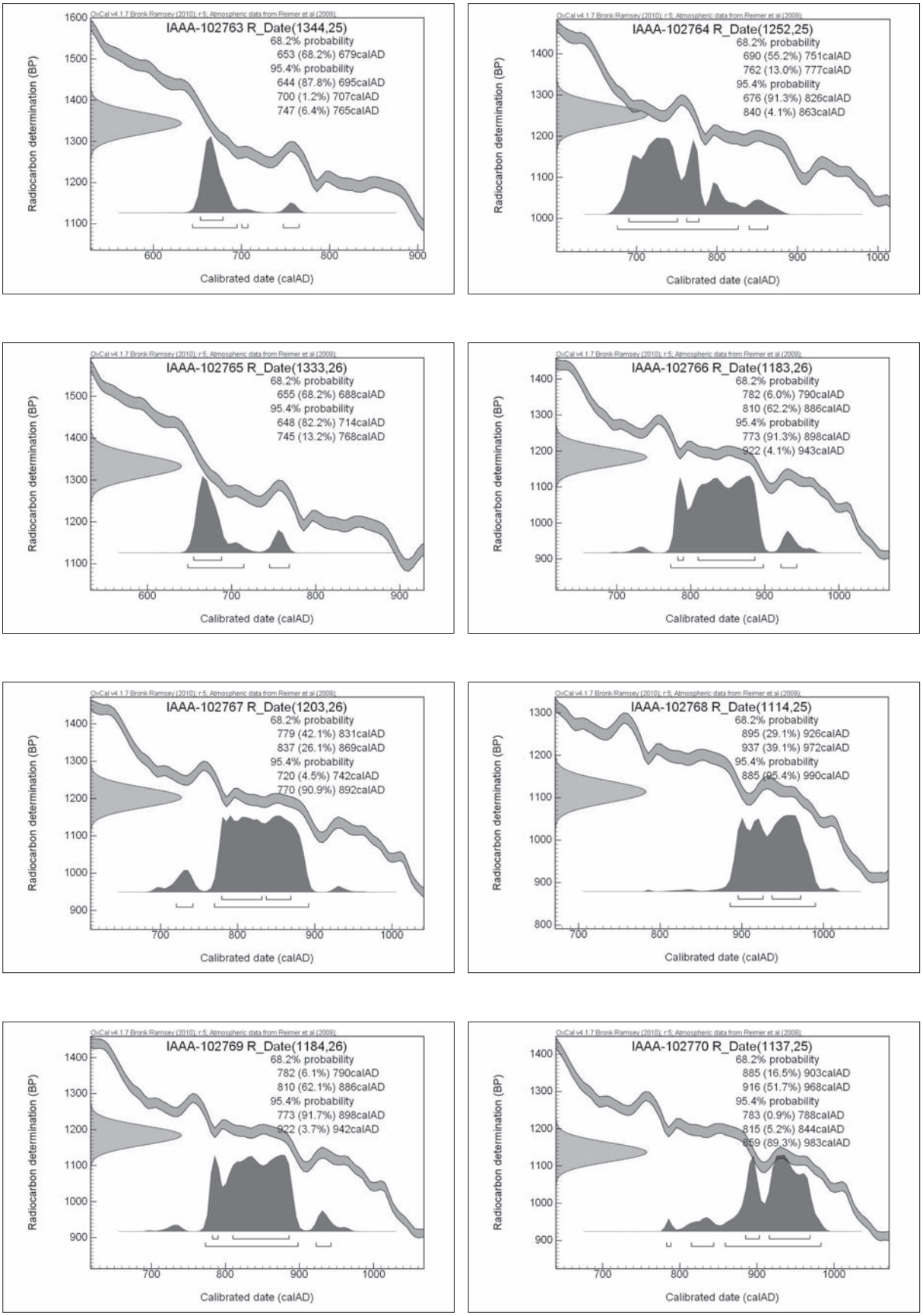


図127　暦年較正年代グラフ（1）

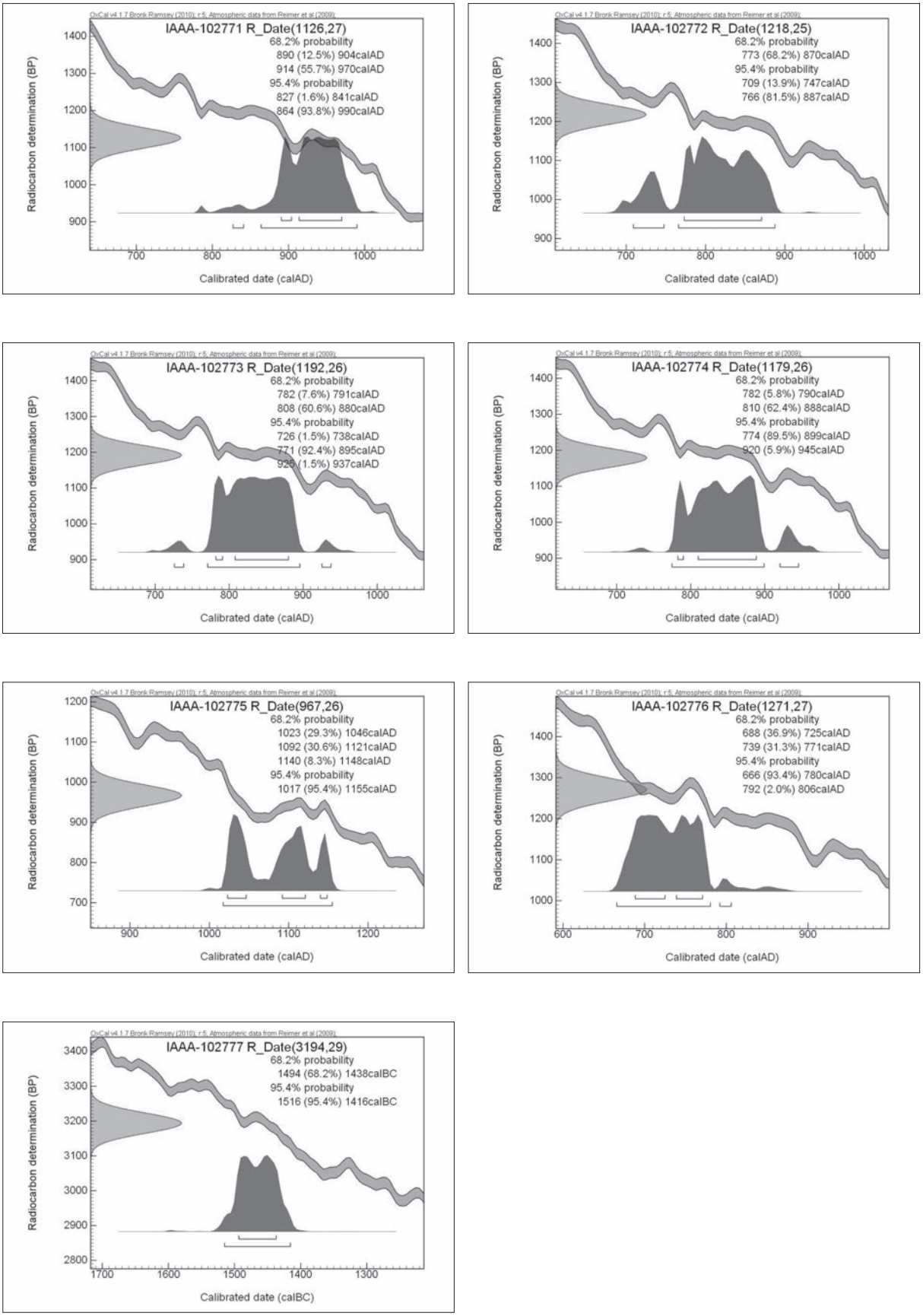


図128　暦年較正年代グラフ（２）

第２節　出土炭化材の樹種同定

株式会社　加速器分析研究所

はじめに

小田高原遺跡は，阿賀川右岸の段丘上に位置し，縄文時代の落し穴や奈良・平安時代の竪穴住居跡等が検出されている。本報告では，竪穴住居跡から出土した炭化材を対象として，木材利用を確認するための樹種同定を実施する。

１．試　　料

試料は，２号住居跡（ＳＩ02）から出土した炭化材５点（FB.AG10.C02～C06）である。

２．分析方法

試料を自然乾燥させた後，木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林（1991）や伊東（1995～1999）を参考にする。

３．結　　果

樹種同定結果を表14に示す。炭化材は，広葉樹２分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・バラ科ナシ亜科）に同定された。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*）ブナ科

環孔材で，孔圏部は１～３列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

バラ科ナシ亜科（Rosaceae sibfam. Maloideae）

散孔材で，管壁は中庸～薄く，横断面では多角形，単独および２～５個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性，１～２細胞幅，１～20細胞高。

表14　樹種同定結果

試料名	遺構名	層位	樹種同定結果	備考
FB.AG10.C02	２号住居跡	ℓ２	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
FB.AG10.C03	２号住居跡	ℓ２	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
FB.AG10.C04	２号住居跡	ℓ１	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
FB.AG10.C05	２号住居跡	ℓ２	コナラ属コナラ亜属コナラ節	芯持丸木（直径3.0㎝）
FB.AG10.C06	２号住居跡	ℓ２	バラ科ナシ亜科	芯持丸木（直径3.7㎝）

４．考　　察

２号住居跡は焼失家屋であり，出土した炭化材は構築部材等に由来すると考えられる。大型の炭化材の他，小径の芯持丸木も２点認められる。これらの炭化材は，５点中４点がコナラ節で，１点がナシ亜科であった。いずれも二次林や山地の落葉広葉樹林中に生育し，木材は重硬で強度が高い材質を有することから，構築部材として強度の高い木材を選択したことが推定される。

本地域では，同時期の構築部材の木材利用に関する資料がほとんどない。福島県内では，浜通り地方の大船廹Ａ遺跡や長瀞遺跡でコナラ節，クヌギ節，ハンノキ属等が比較的多く利用されている（パリノ・サーヴェイ株式会社：1995）。今回の結果から，本地域でもコナラ節が多く利用されていたことが推定される。

※）本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

参考文献

林　昭三　1991『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料　31』京都大学木質科学研究所　pp.81−181.

伊東隆夫　1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料　32』京都大学木質科学研究所　pp.66−176.

伊東隆夫　1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料　33』京都大学木質科学研究所　pp.83−201.

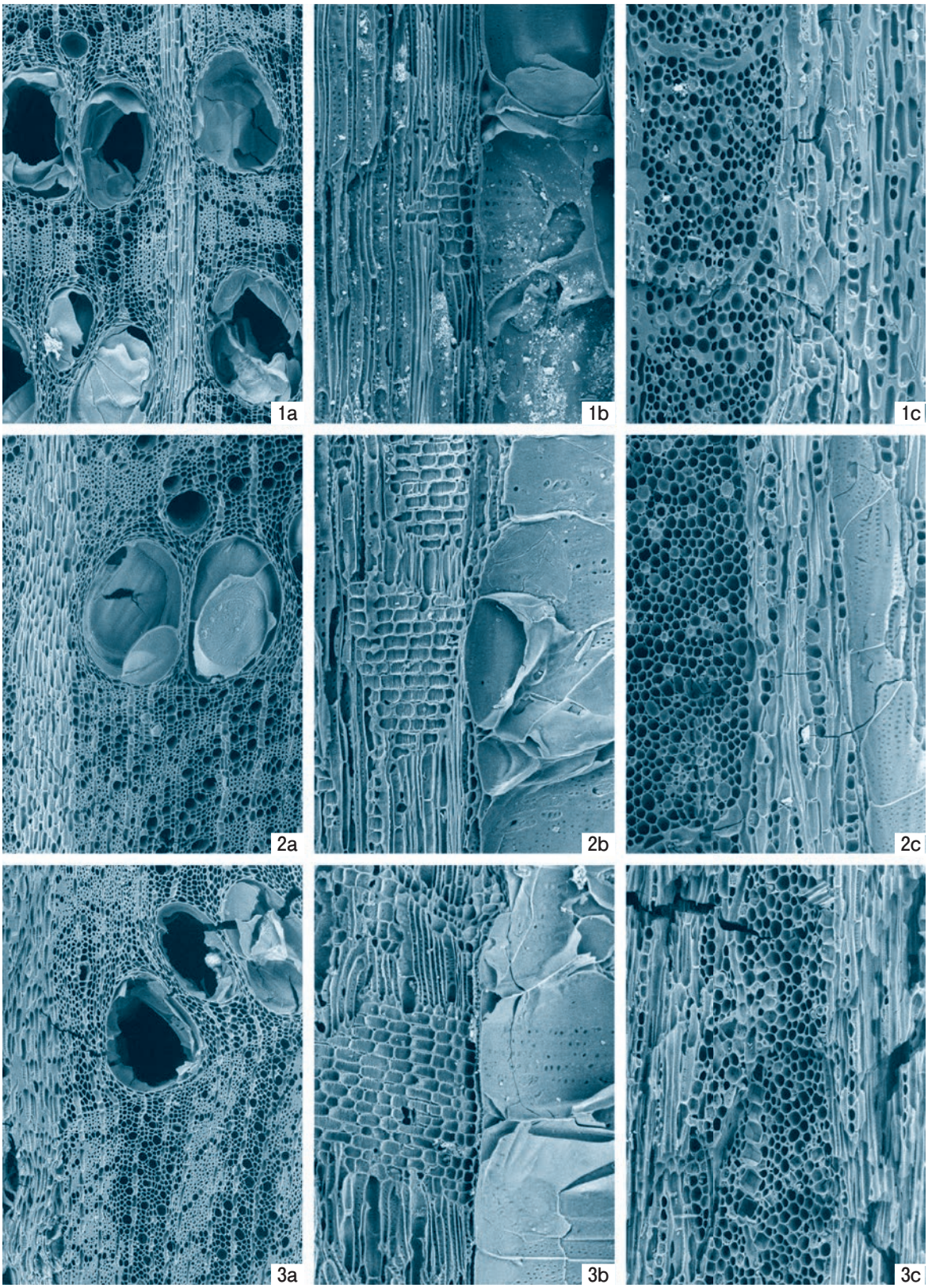
伊東隆夫　1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料　34』京都大学木質科学研究所　pp.30−166.

伊東隆夫　1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料　35』京都大学木質科学研究所　pp.47−216.

パリノ・サーヴェイ株式会社　1995「長瀞遺跡，大船廹Ａ遺跡，前田Ｃ遺跡における炭化材同定」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書第310集　福島県教育委員会・（財）福島県文化センター　pp.1271−1304.

島地　謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』地球社　p.176

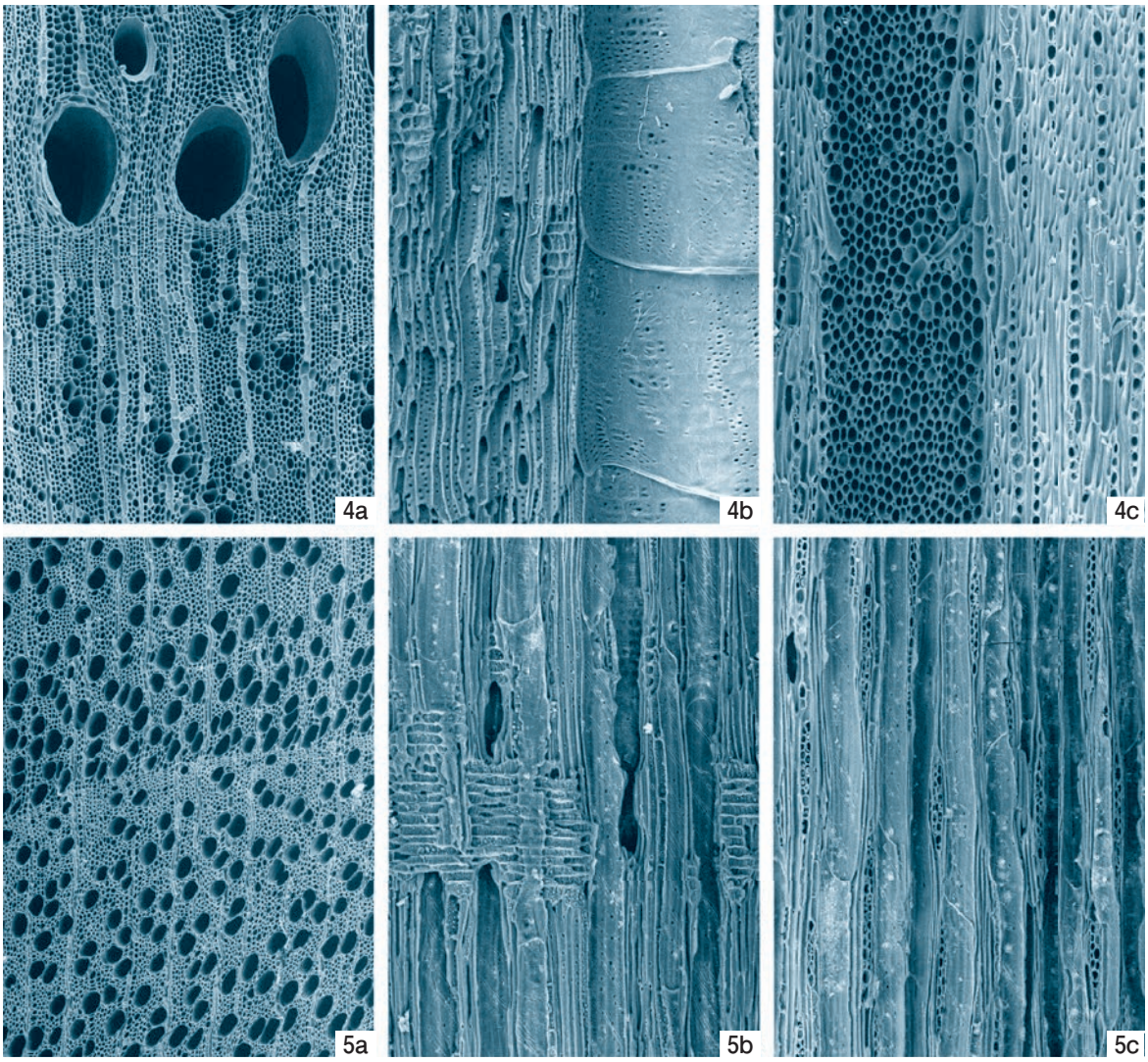
Wheeler E.A.，Bass P. and Gasson P.E.（編）　1998『広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）海青社　p.122［Wheeler E.A.，Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節（FB.AG10.C02）
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節（FB.AG10.C03）
3. コナラ属コナラ亜属コナラ節（FB.AG10.C04）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

図129　炭化材木材組織（1）



4. コナラ属コナラ亜属コナラ節（FB.AG10.C05）
5. バラ科ナシ亜科（FB.AG10.C06）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

図130　炭化材木材組織（２）

第３節　土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

喜多方市に所在する小田高原遺跡は，阿賀川右岸に分布する段丘上およびその斜面から沖積低地にかけて位置する。発掘調査では，段丘上に８世紀後半を中心とする集落が確認され，沖積低地には住居跡および須恵器窯や土師器焼成坑などが確認されている。

本報告では，窯跡および住居跡などの遺構から出土した須恵器の材質(胎土)の特性を把握することにより，器種間，時期間さらには土師器や粘土塊等との比較を行い，小田高原遺跡における須恵器の生産事情に関わる資料を作成する。

１．試　　料

試料は，小田高原遺跡から出土した須恵器片10点と土師器片２点および調査区内より採取した粘土３点の合計15点である。試料の一覧を表15に示す。試料には小高１～15までの試料№が付されている。小高１～５は須恵器の杯であり，これらのうち，小高１～３は須恵器窯跡出土，小高４および小高５は住居跡出土である。小高１～４までは９世紀中葉とされ，小高５は８世紀後半～９世紀前葉とされている。小高６～10までは，それぞれ，長胴甕，甕，杯，横瓶，杯蓋であり，小高６と小高７は窯跡出土，小高８は土坑出土，小高９・10は住居跡出土である。窯跡出土品は９世紀中

表15　胎土分析試料一覧

試料№	種別	器種	出土地点		出土層位	備　　考
			遺構	調査区		
小高１	杯	須恵器	１号須恵器窯跡	Ⅱ区	底面	９世紀中葉
小高２	杯	須恵器	１号須恵器窯跡	Ⅱ区	底面	９世紀中葉
小高３	杯	須恵器	３号須恵器窯跡	Ⅱ区	底面	９世紀中葉
小高４	杯	須恵器	11号住居跡	Ⅲ区	床面	９世紀中葉～９世紀後葉
小高５	杯	須恵器	２号住居跡	Ⅰ区	床面	８世紀後半～９世紀前葉
小高６	長胴甕	須恵器	３号須恵器窯跡	Ⅱ区	堆積土	形状が土師器甕に類似
小高７	甕	須恵器	１号須恵器窯跡	Ⅱ区	堆積土	９世紀中葉
小高８	杯	須恵器	７号土坑	Ⅰ区	堆積土	８世紀末葉～９世紀前葉（焼成不良）
小高９	横瓶	須恵器	３号住居跡	Ⅰ区	堆積土	８世紀末葉～９世紀前葉
小高10	杯蓋	須恵器	１号住居跡	Ⅰ区	床面	８世紀末葉～９世紀前葉
小高11	杯	土師器	11号住居跡	Ⅲ区	床面	９世紀中葉～９世紀後葉
小高12	長胴甕	土師器	８号住居跡	Ⅱ区	床面	10世紀初頭
小高13	粘土		８号住居跡	Ⅱ区	床面	床面に散布していた小塊
小高14	粘土		11号住居跡	Ⅲ区	床面	床面からまとまって出土した粘土塊
小高15	粘土			Ⅰ区	斜面露頭	約５万年前の沼沢テフラの風化層

葉とされているが，土坑・住居跡出土品は８世紀末葉～９世紀前葉とされている。

小高11と小高12はそれぞれ土師器の杯および土師器の長胴甕である。いずれも住居跡出土であるが，小高11は９世紀後半，12は10世紀初頭とされている。

小高13～15は，粘土試料である。これらのうち，小高13と小高14は住居跡床面から採取された粘土塊であり，小高15は調査区内の露頭から採取された沼沢テフラの風化層とされている。

２．分析方法

胎土分析には，現在様々な分析方法が用いられているが，大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており，後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。今回の分析で対象としている須恵器は，一般的には1000℃を超える高温焼成を経ているために，長石類などの一部の鉱物は変質し，溶失してしまう場合もある。このような場合は，焼成前の土（素地土）における鉱物組成とは若干の変化が生じている可能性があるが，これに対しては，焼成後もほとんど変化することのない化学組成を捉えることのできる蛍光Ｘ線分析が有効となる。

ここでは，SiO_2，TiO_2，Al_2O_3，Fe_2O_3，MnO，MgO，CaO，Na_2O，K_2O，P_2O_5の主要10元素およびRb，Sr，Y，Zr，Baの微量５元素について蛍光Ｘ線分析法によって分析する。以下に各分析条件を記す。

測定装置

理学電機工業社製RIX1000（FP法のグループ定量プログラム）

試料調製

機械乾燥（110℃）した試料を振動ミル（平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉砕した後，ガラスビートを以下の条件で作成する。なお，胎土表面に塗彩または釉薬が確認される試料については，これらを除去し，試料として供する。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）

溶剤および希釈率；融剤（ホウ酸リチウム）5.000g：試料0.500g

剥離剤；LiI（溶融中１回投入）

溶融温度；1200℃　約７分

測定条件

Ｘ線管；Cr（50Kv－50mA）

スペクトル；全元素Ｋα

分光結晶；LiF，PET，TAP，Ge

検出器；F-PC，SC

計数時間；PeaK40sec，Back20sec

3．結　　果

結果を表16に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として，以下に示す元素を選択し，それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した(図131)。

(a)化学組成中で最も主要な元素(SiO_2，Al_2O_3)

(b)粘土の母材を考える上で，長石類(主にカリ長石，斜長石)の種類構成は重要である。このことから，指標として長石類の主要元素である CaO，Na_2O，K_2O の３者を選択し，長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には，長石類全体におけるアルカリ長石の割合(Na_2O + K_2O) / (CaO + Na_2O + K_2O)を横軸とし，アルカリ長石におけるカリ長石の割合 K_2O/ (Na_2O + K_2O)を縦軸とする。

(c)輝石類や黒雲母，角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合これらの有色鉱物の主要な元素のうち，TiO_2，Fe_2O_3，MgO を指標として選択し，Fe_2O_3を分母とした TiO_2，MgO の割合を見る。

(d)各微量元素を選択する。組み合わせは，Rb-Sr と Zr-Ba とする。

また，これらの散布図では，須恵器の時期および土師器と粘土塊をそれぞれ異なる記号で示した。５つの散布図を見ると，窯跡出土須恵器の小高１～３・６・７は，有色鉱物主要元素の散布図では若干のばらつきを示すが，他の散布図では，互いに近接した分布を示している。さらにどの散布図においても窯跡出土須恵器とほぼ近接した位置に住居跡出土の小高４と小高10が認められる。一方，小高５・８・９の３点あるいはこれらのうちのいずれか２点は，どの散布図においても，上述した窯跡出土須恵器と小高４・10の分布域の縁辺にプロットされている。

表16－１　蛍光Ｘ線分析結果

(%)

試料No.	器種	主要元素											
		SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Ig.loss	合計
小高１	須恵器	69.30	0.67	19.62	4.11	0.02	0.83	0.58	0.95	1.79	0.02	2.11	100.00
小高２	須恵器	67.71	0.60	18.44	6.88	0.02	0.77	0.54	0.75	1.61	0.02	2.66	100.00
小高３	須恵器	68.96	0.69	19.55	3.90	0.02	0.83	0.56	0.90	1.75	0.01	2.83	100.00
小高４	須恵器	68.92	0.63	17.87	6.59	0.02	0.72	0.51	0.78	1.49	0.03	2.44	100.00
小高５	須恵器	66.00	0.62	16.00	5.02	0.03	0.58	0.50	0.77	1.46	0.02	9.00	100.00
小高６	須恵器	72.28	0.59	18.07	5.02	0.02	0.72	0.52	0.90	1.80	0.02	0.06	100.00
小高７	須恵器	68.46	0.65	19.38	5.58	0.01	0.83	0.50	0.70	1.75	0.02	2.12	100.00
小高８	須恵器	70.58	0.69	17.57	6.52	0.02	0.53	0.55	1.00	1.73	0.02	0.79	100.00
小高９	須恵器	72.38	0.64	17.93	5.33	0.02	0.71	0.41	0.69	1.81	0.01	0.07	100.00
小高10	須恵器	67.12	0.63	19.49	6.79	0.02	0.86	0.51	0.72	1.56	0.02	2.28	100.00
小高11	土師器	64.93	0.61	16.74	4.24	0.02	0.80	0.75	1.45	1.64	0.14	8.68	100.00
小高12	土師器	65.04	0.67	20.39	6.15	0.06	1.00	1.39	1.49	1.53	0.06	2.22	100.00
小高13	粘土	63.21	0.63	18.05	4.15	0.07	0.92	1.44	1.73	1.44	0.03	8.33	100.00
小高14	粘土	70.72	0.50	14.28	3.93	0.02	0.53	0.71	1.35	1.75	0.01	6.20	100.00
小高15	粘土	64.86	0.66	18.06	3.73	0.02	0.73	0.51	1.00	1.72	0.02	8.69	100.00

表16－２　蛍光Ｘ線分析結果

（ppm）

試料No.	器種	微量元素				
		Rb	Sr	Y	Zr	Ba
小高１	須恵器	86	77	31	157	405
小高２	須恵器	81	64	27	144	338
小高３	須恵器	76	78	31	167	412
小高４	須恵器	72	65	25	156	347
小高５	須恵器	79	51	20	160	583
小高６	須恵器	78	70	28	141	366
小高７	須恵器	82	64	28	150	371
小高８	須恵器	89	72	25	174	393

（ppm）

試料No.	器種	微量元素				
		Rb	Sr	Y	Zr	Ba
小高９	須恵器	90	61	24	163	365
小高10	須恵器	81	65	26	166	374
小高11	土師器	70	86	27	163	503
小高12	土師器	64	125	30	164	379
小高13	粘土	62	126	24	166	357
小高14	粘土	70	86	24	151	364
小高15	粘土	86	66	31	174	407

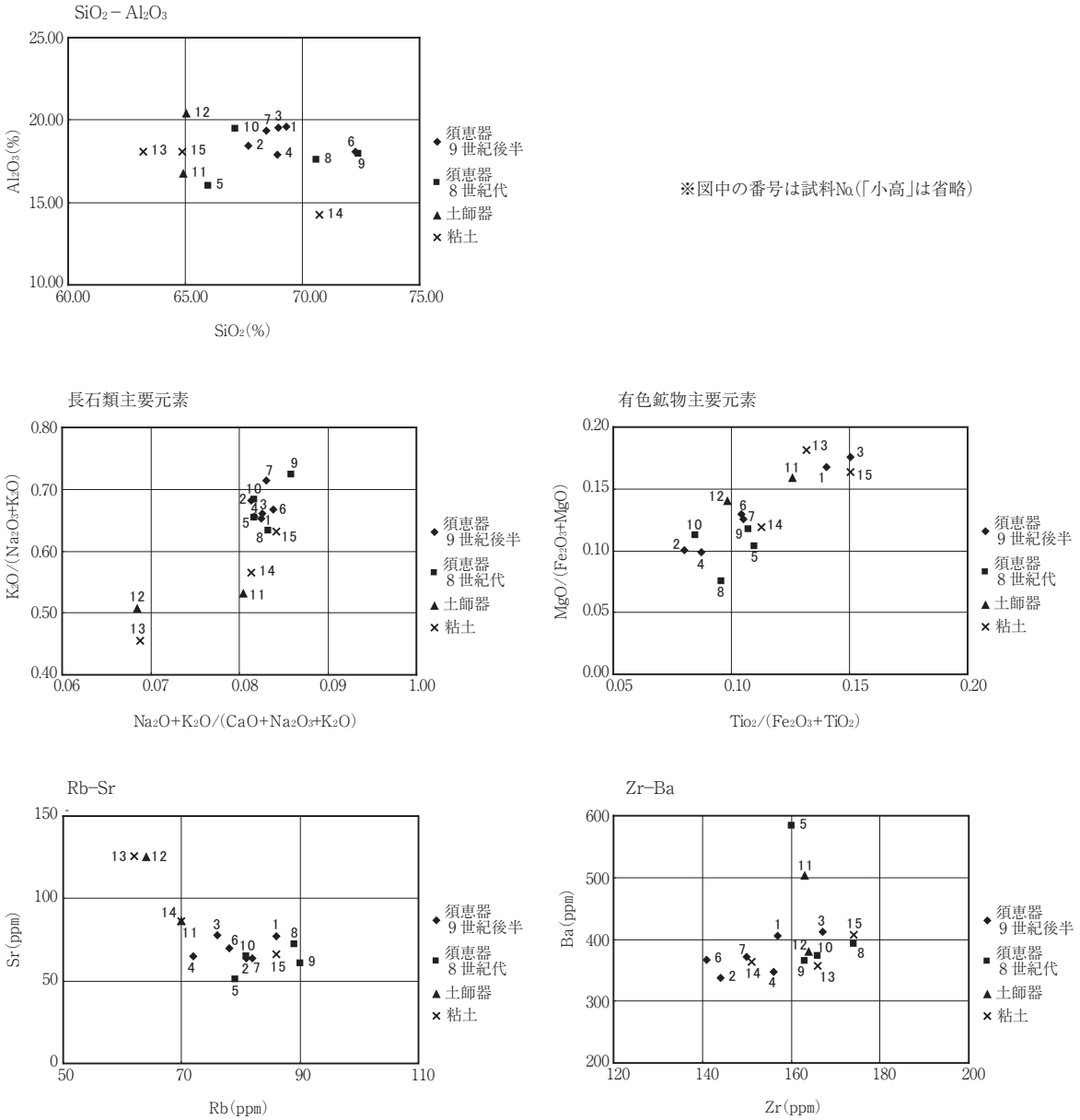


図131　胎土化学組成散布図

土師器試料の小高11と小高12は，$SiO_2-Al_2O_3$，長石類主要元素，Rb－Sr の各散布図において，上述した須恵器各試料の分布域から，顕著に離れた位置にプロットされている。

粘土試料では，小高13が有色鉱物主要元素散布図以外の散布図で土師器試料の小高12と常に近い位置にプロットされている。小高14は，長石類主要元素散布図と Rb－Sr 散布図では，土師器試料の小高11と近接した位置にあり，有色鉱物主要元素散布図と Zr－Ba 散布図では須恵器試料の分布域内に位置している。小高15は，いずれの散布図においても須恵器試料の分布域の外縁に位置している。

4．考　　察

前述した各試料の散布図における分布に，各試料の属性（器種や出土地点および時期）を対応させてみると，まず，窯跡出土須恵器については，窯が異なっても胎土に大きな違いはないことがわかる。また，窯跡出土須恵器と同時期とされる住居跡出土の杯の小高４は，その胎土が窯跡出土須恵器と近似していることから，１号窯跡あるいは３号窯跡で焼かれた製品であると考えられる。小高10も窯跡出土須恵器とほぼ同様の胎土と考えられるが，窯跡出土試料よりもおよそ100年古い時期とされている。この所見に従うならば，比較的長期にわたって同質の土が須恵器の原材料として使用されていた状況が窺える。しかし，その一方で，８世紀代の年代が推定されている小高５・８・９の各須恵器の胎土は，窯跡出土須恵器の胎土とは若干異なる材質であることが推定される。すなわち，段丘上で検出された８世紀後半とされる集落で使用されていた須恵器のなかには，材質の異なる（おそらく窯の異なる）少なくとも２種類以上の須恵器が混在していた可能性があると考えられる。

土師器試料については，須恵器とは材質が異なることは明らかであるが，今回注目される結果として，住居跡出土の粘土試料と化学組成が近いことが挙げられる。すなわち，住居跡床面から出土した粘土塊は，その出土状況も考慮すると，土師器の素地土の残片であった可能性があると考えられる。なお，テフラの風化層である小高15については，須恵器試料の化学組成からは若干ずれた位置にあり，土師器試料とはさらに離れた位置にあることから，それが土器の原材料の主体となるようなことはなかったと考えられる。ただし，須恵器の素地土の一部として使用された可能性はあると考えられる。

今回の分析では，試料数15点というなかでの解析であり，散布図における分布領域について，同質の胎土におけるばらつきの範囲か，異質の胎土であるかを特定することは難しい。今後，周辺における同時期の須恵器や土師器の分析例を蓄積することができれば，小田高原遺跡の窯跡出土試料の特性がより明瞭に捉えられることになり，周辺域における小田高原遺跡窯跡産の須恵器の分布状況を胎土から検証することが可能になると期待される。

写　真　図　版

1　Ⅰ区調査前全景（南から）

2　Ⅰ区全景（南上空から）

3　Ｐ・Ｑ28Ｇ基本土層（北東から）

4　Ｎ27Ｇ基本土層（南西から）

5　１号住居跡（北から）

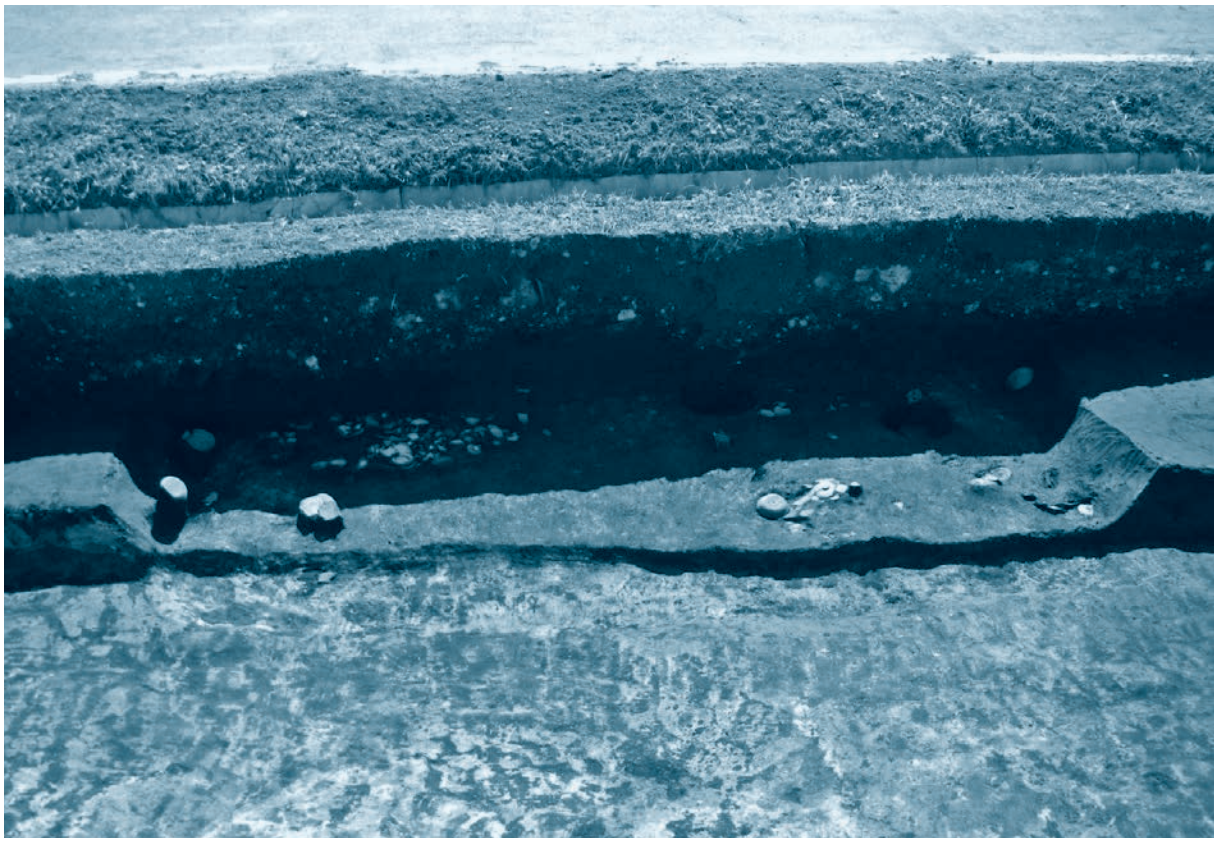
6　１号住居跡細部

a　検出（北から）　b　土層（南西から）
c　カマド（北から）　d　遺物出土状況（北東から）

7　２号住居跡（西から）

8　２号住居跡細部

a　土層（西から）　**b**　カマド（西から）
c　遺物出土状況（南西から）　**d**　作業風景（北東から）



9　３号住居跡（北西から）

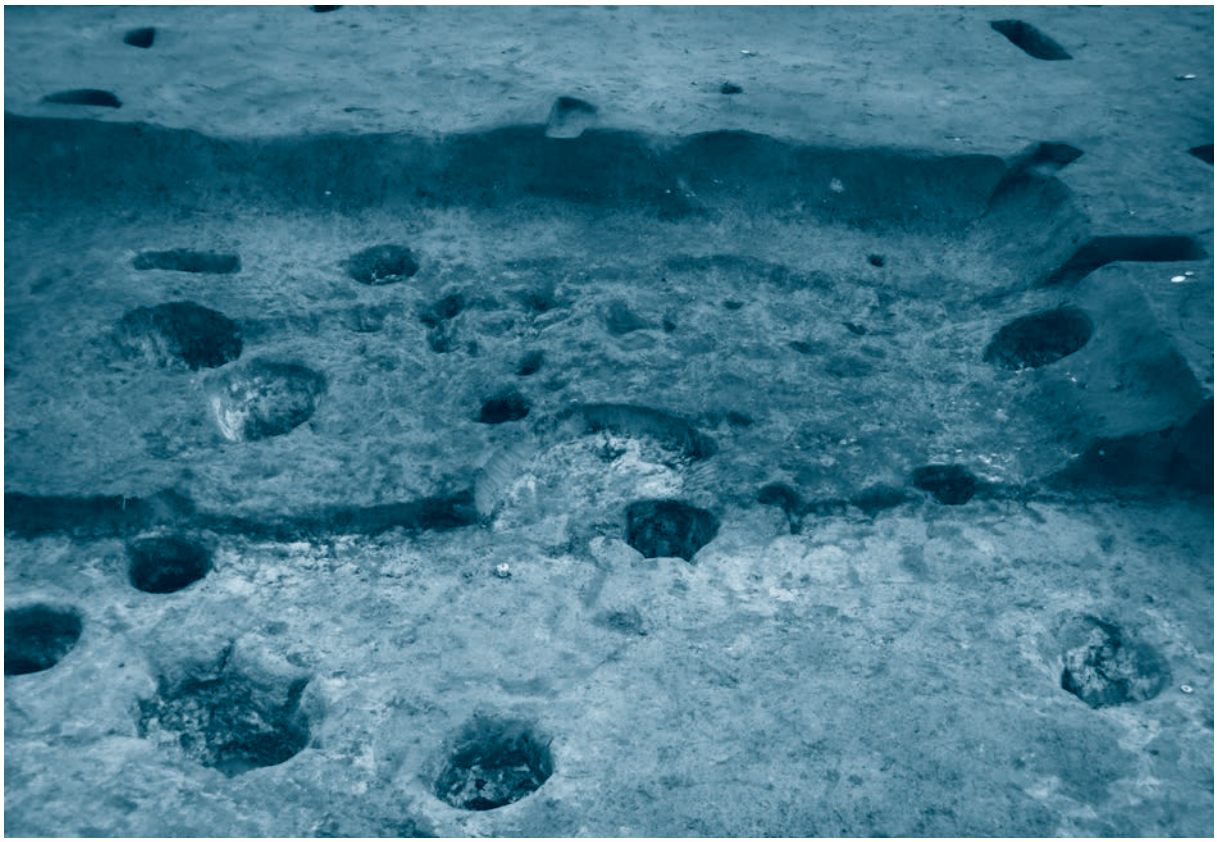
10　３号住居跡細部

a　土層（西北から）　b　遺物出土状況（北西から）
c　遺物出土状況（西から）　d　完掘状況（南西から）

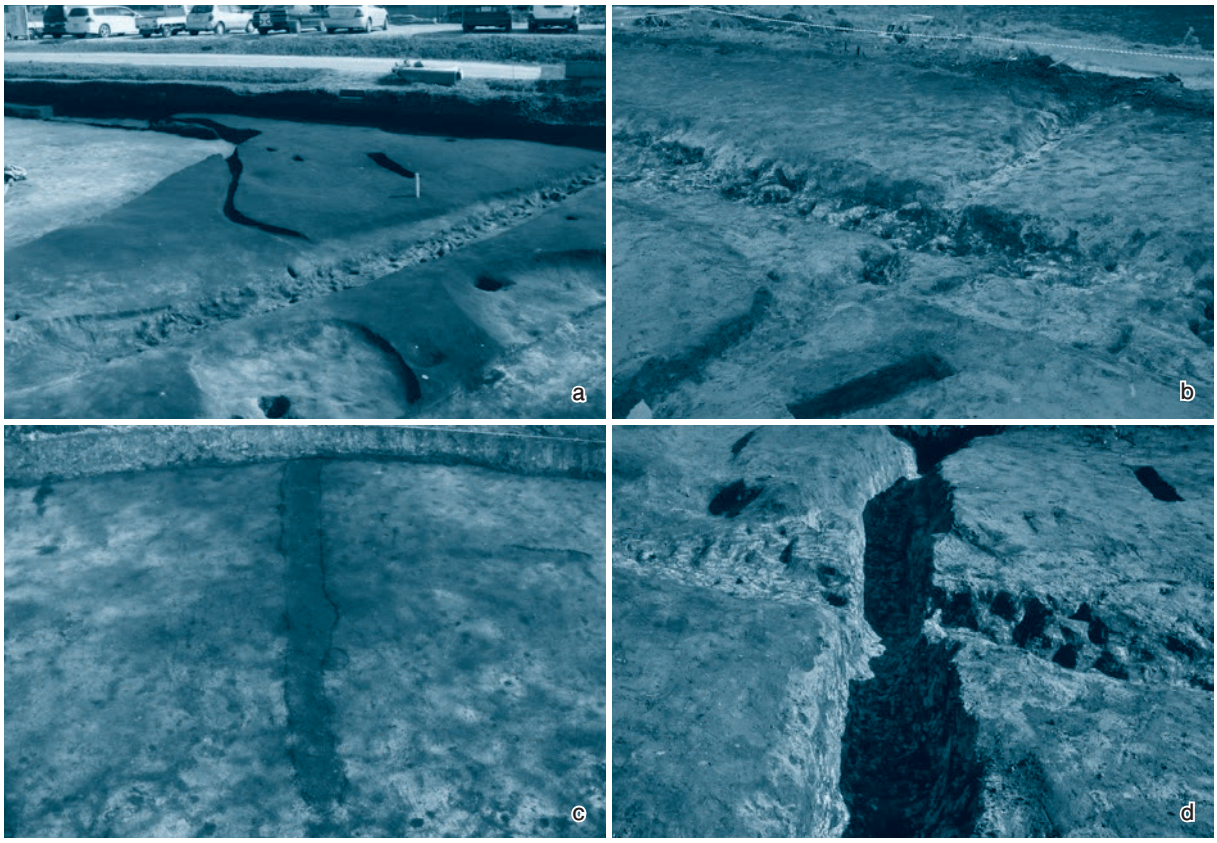
11　７号住居跡（南から）

12　７号住居跡細部

a　検出（南から）　b　土層（南西から）
c　遺物出土状況（北東から）　d　溝状施設（南東から）



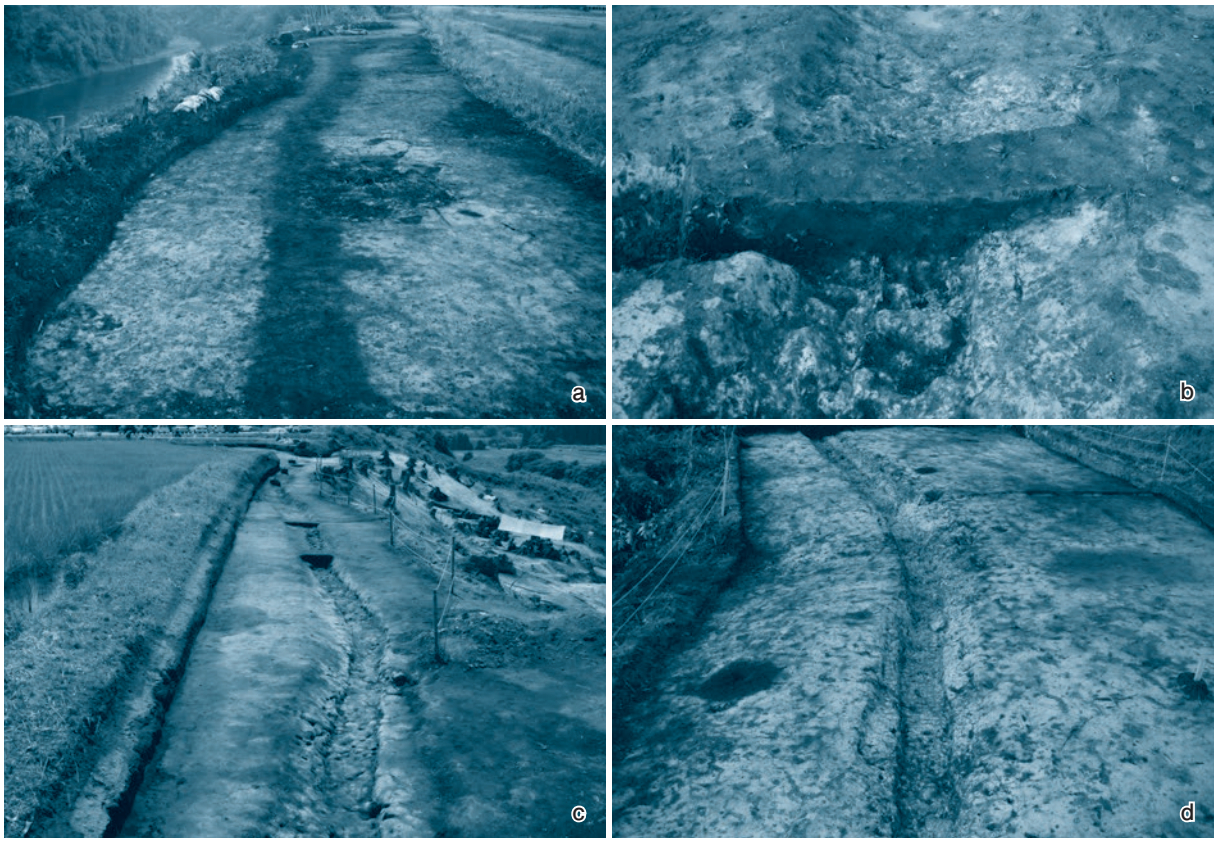
13　10号住居跡（南西から）



14　2・3・6～8号溝跡

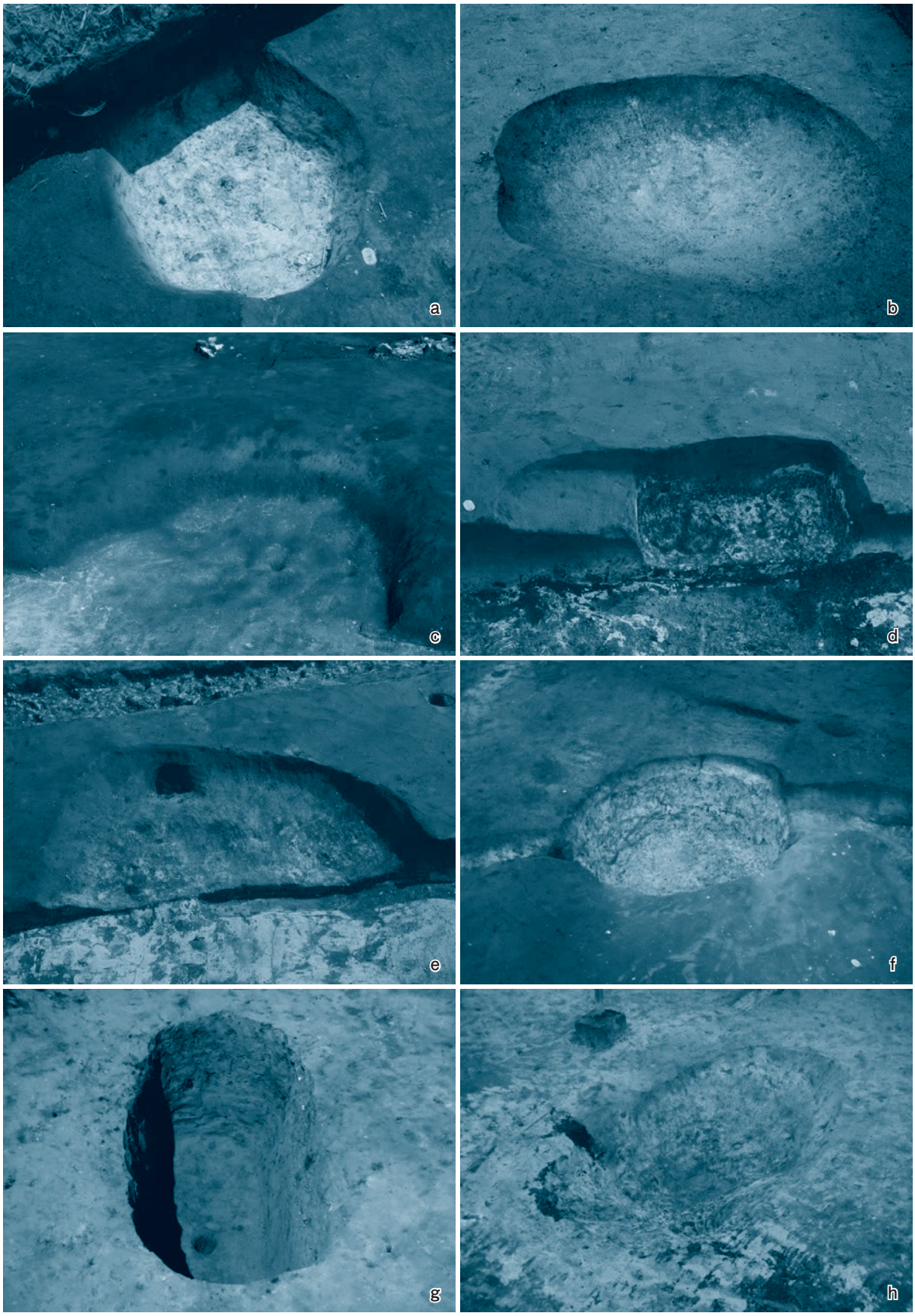
a　2号溝跡（北西から）　**b**　3号溝跡（北東から）
c　6号溝跡（西から）　**d**　7・8号溝跡（西から）

15　１号溝跡（南から）



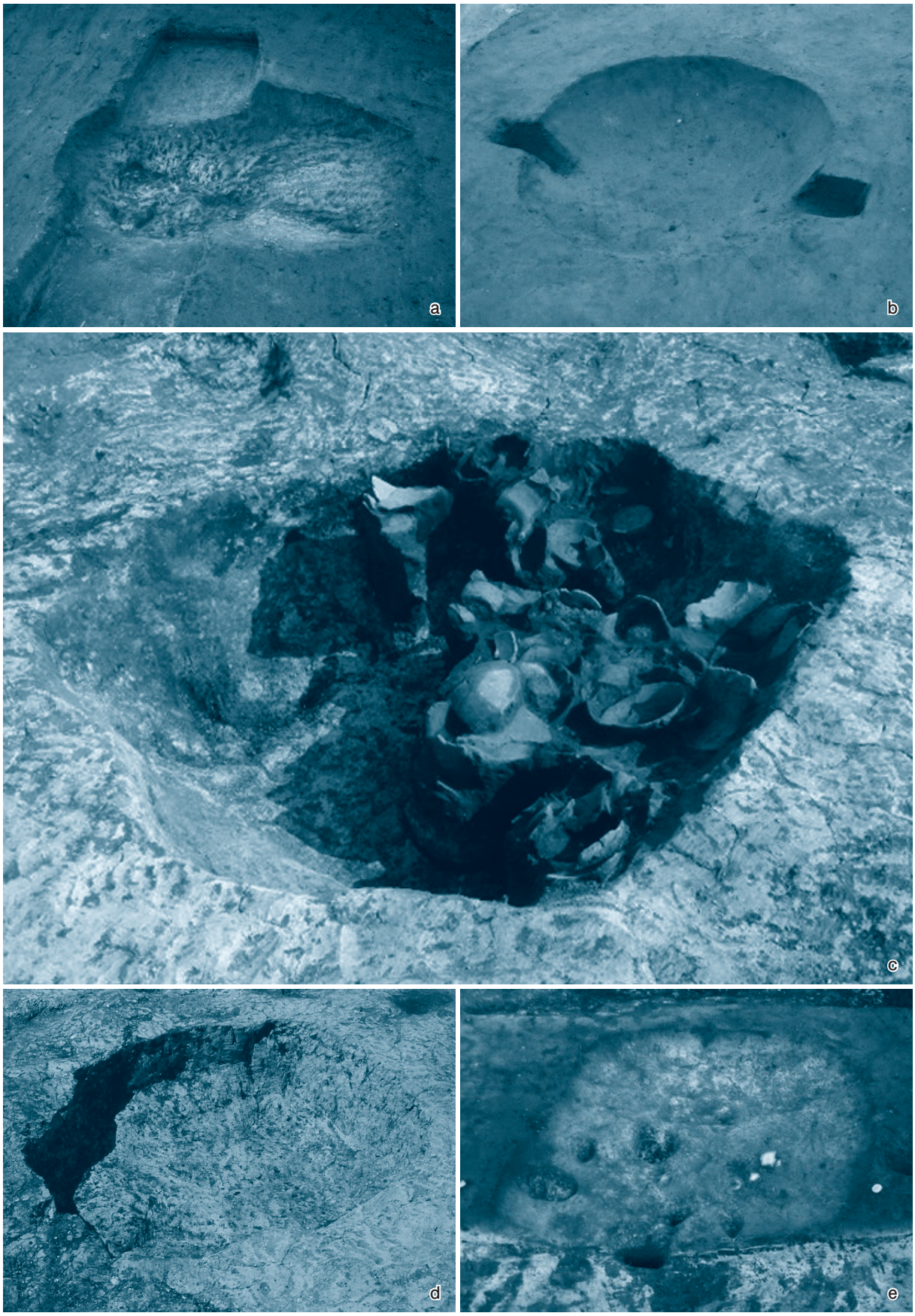
16　１号溝跡細部

a　検出（南から）　**b**　土層（南から）
c　南部（北から）　**d**　中部（南から）



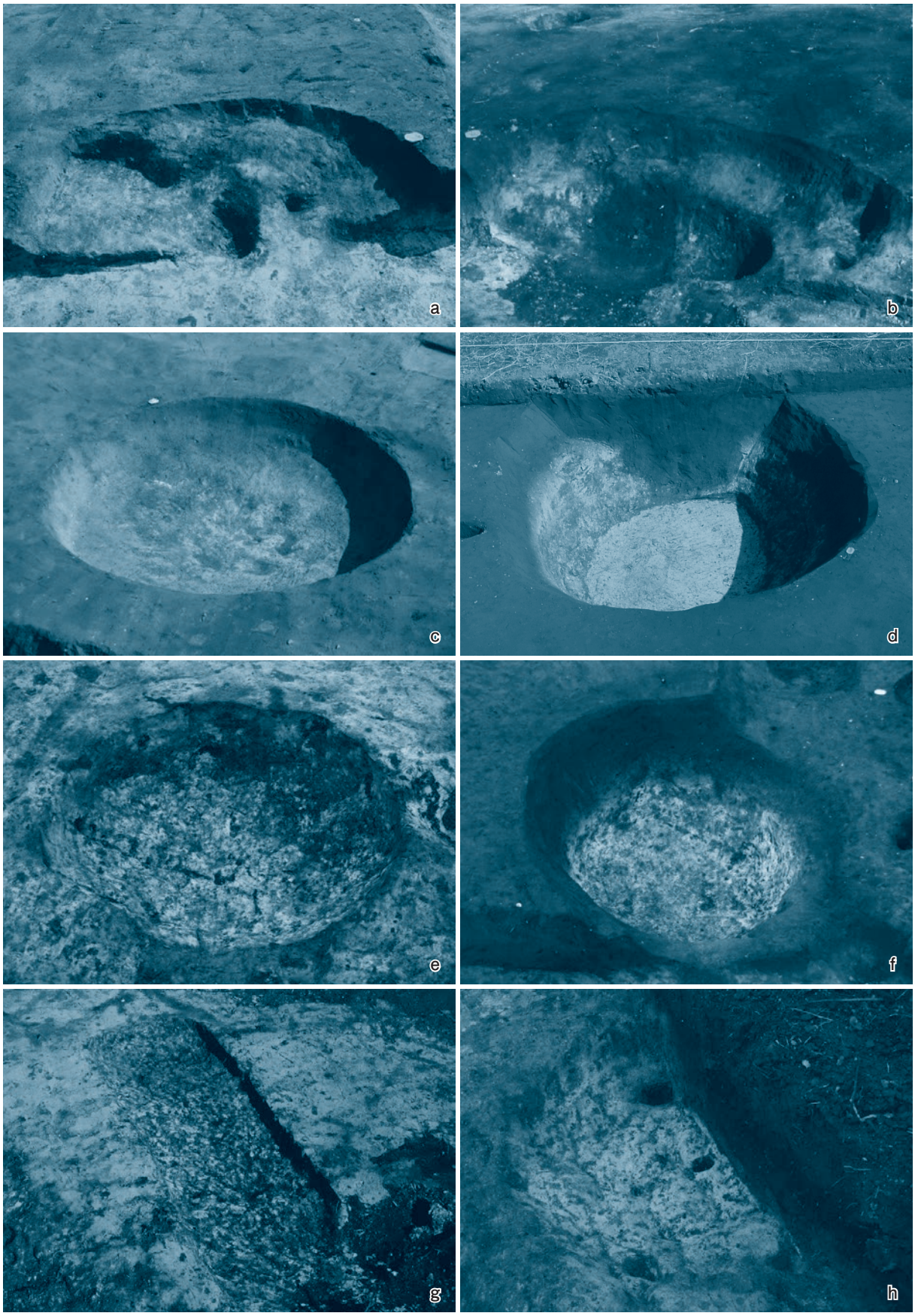
17　土坑（1）

a　1号土坑（西から）　**b**　2号土坑（西から）
c　3号土坑（西から）　**d**　4号土坑（西から）
e　5号土坑（北西から）　**f**　6号土坑（南から）
g　8号土坑（南東から）　**h**　9号土坑（南西から）



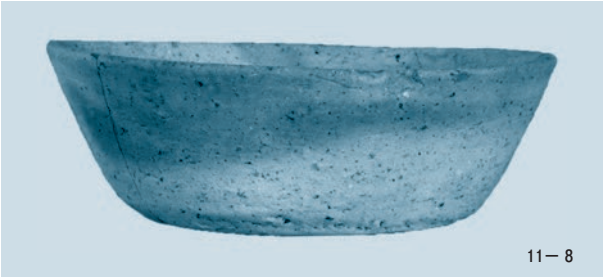
18　土坑（２）

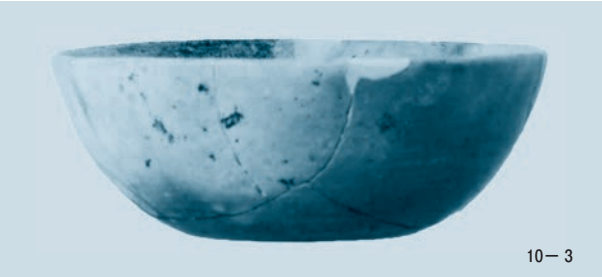
a　11号土坑（南東から）　**b**　12号土坑（南東から）
c　７号土坑遺物出土状況（北から）
d　７号土坑（南から）　**e**　13号土坑（南西から）

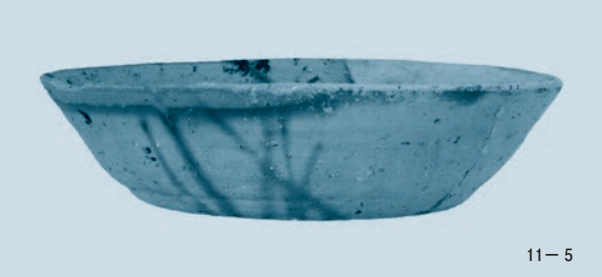


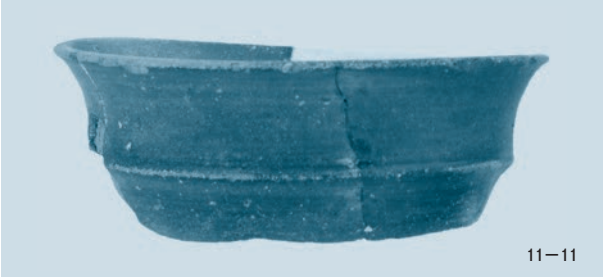
19　土坑（3）

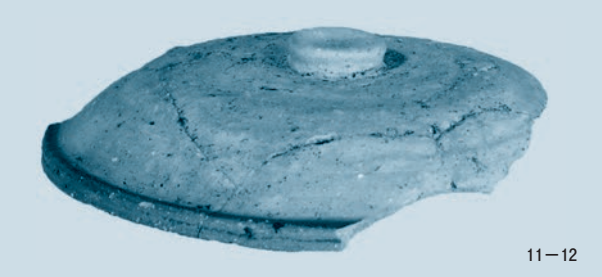
a　14号土坑（西から）　**b**　15号土坑（南西から）
c　16号土坑（西から）　**d**　17号土坑（西から）
e　19号土坑（西から）　**f**　20号土坑（西から）
g　27号土坑（南西から）　**h**　33号土坑（北から）



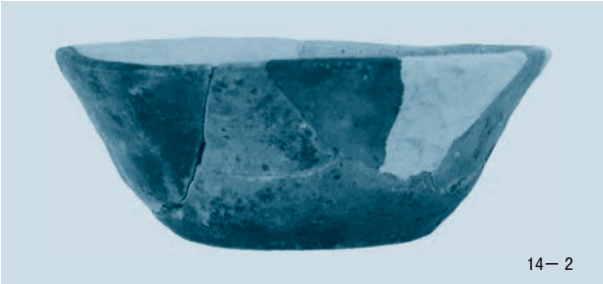


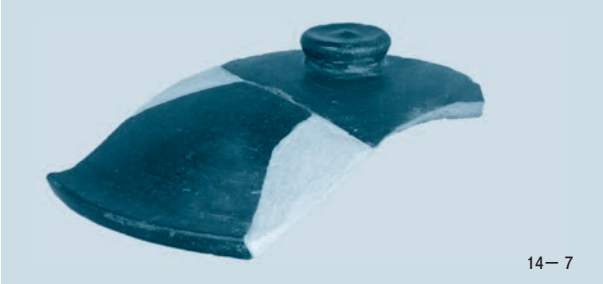


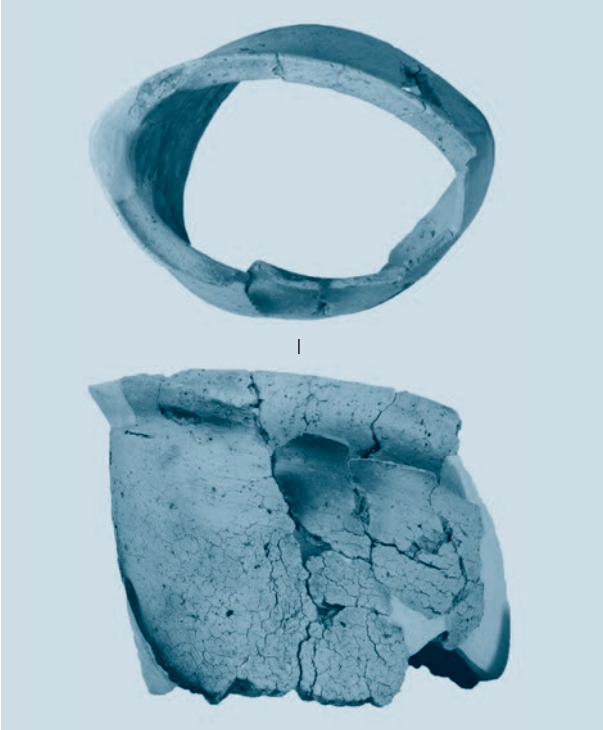


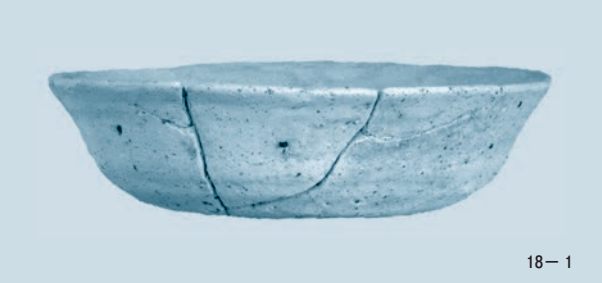


20　1号住居跡出土遺物

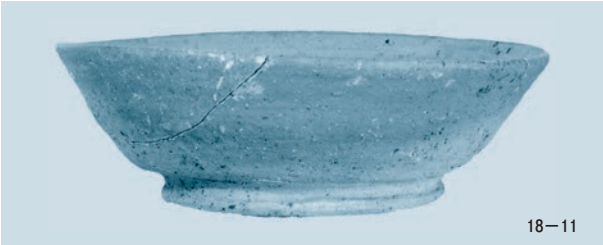


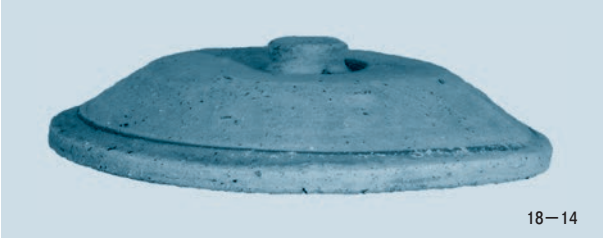


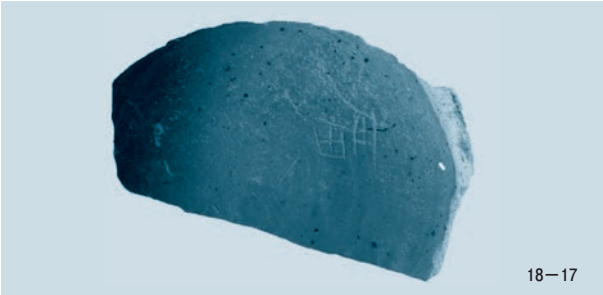


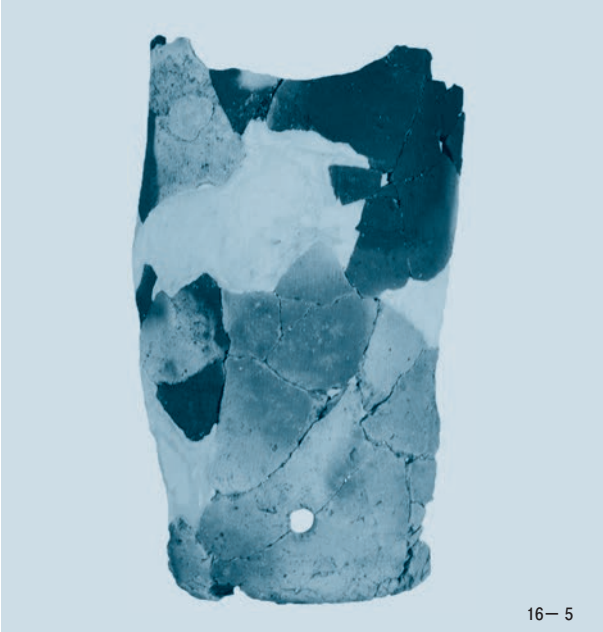


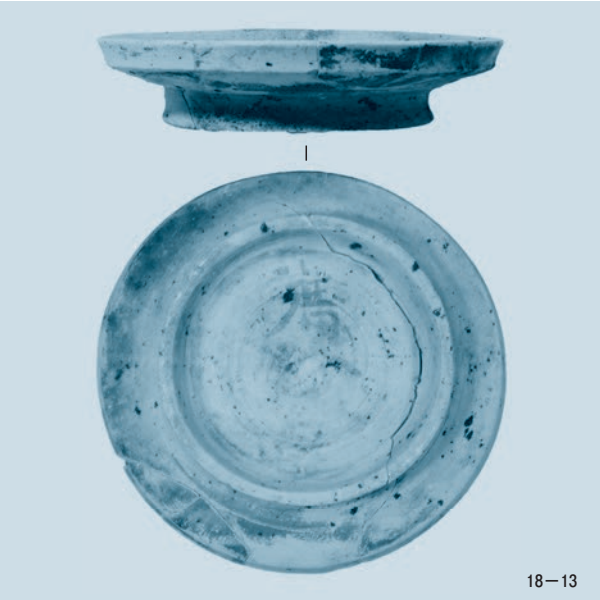
21　2号住居跡出土遺物（1）



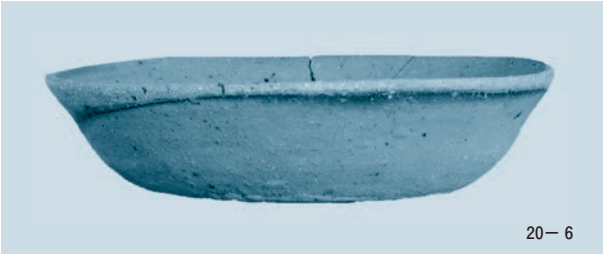


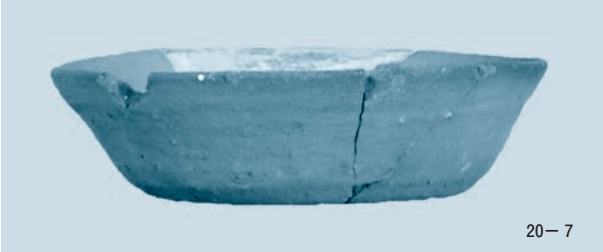


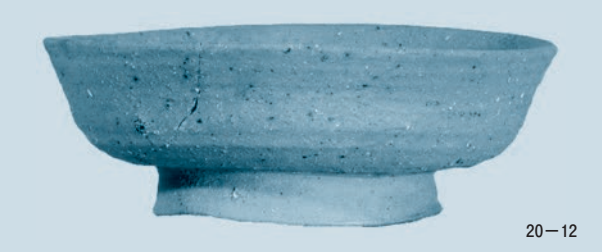




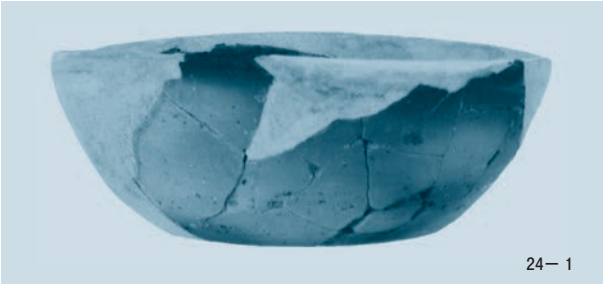
22　2号住居跡出土遺物（2）

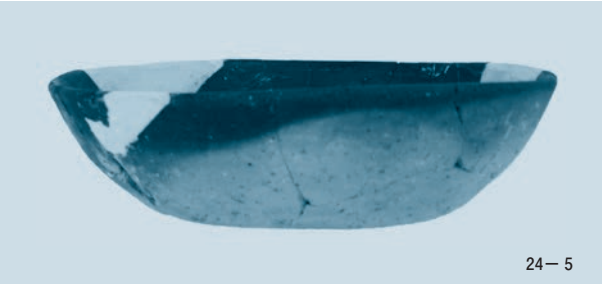


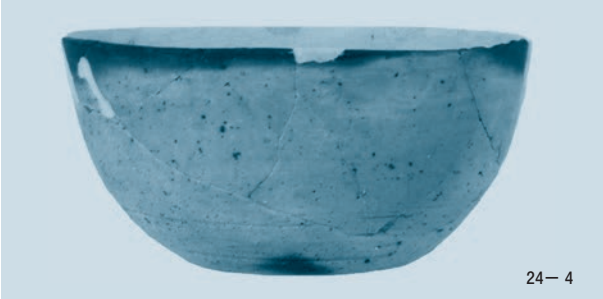


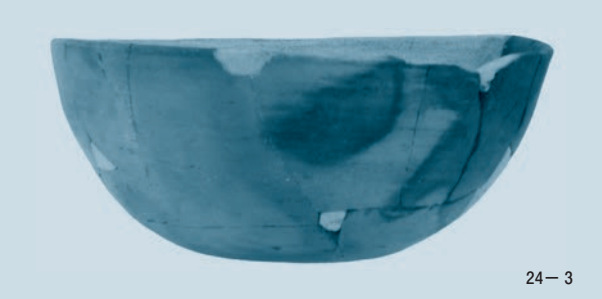


23　3号住居跡出土遺物


24－1


24－5


24－4


24－3

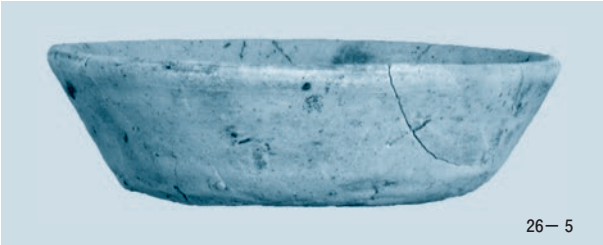
24－7

24－8

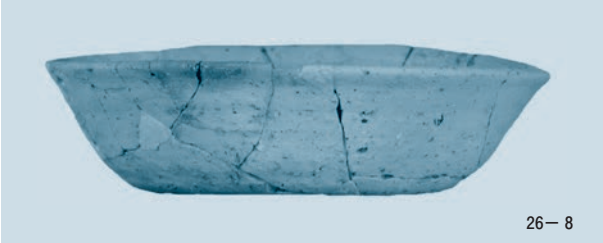
24－10

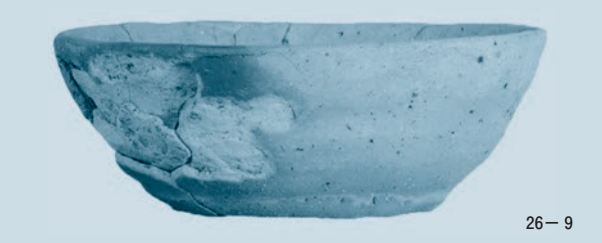
24－9

24　7号住居跡出土遺物（1）


26－5

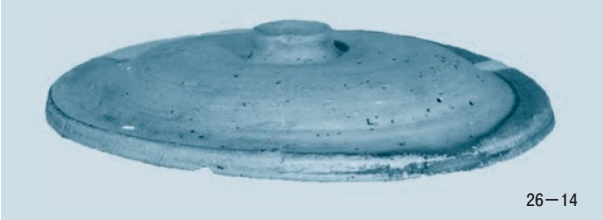
26－4

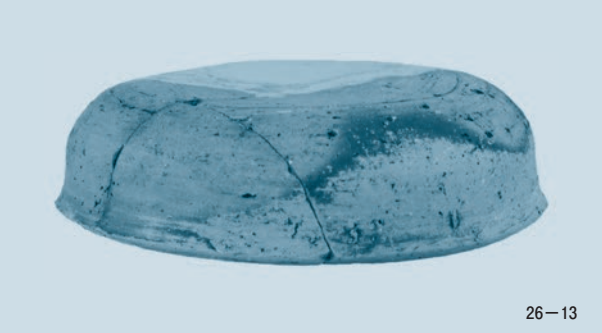

26－8

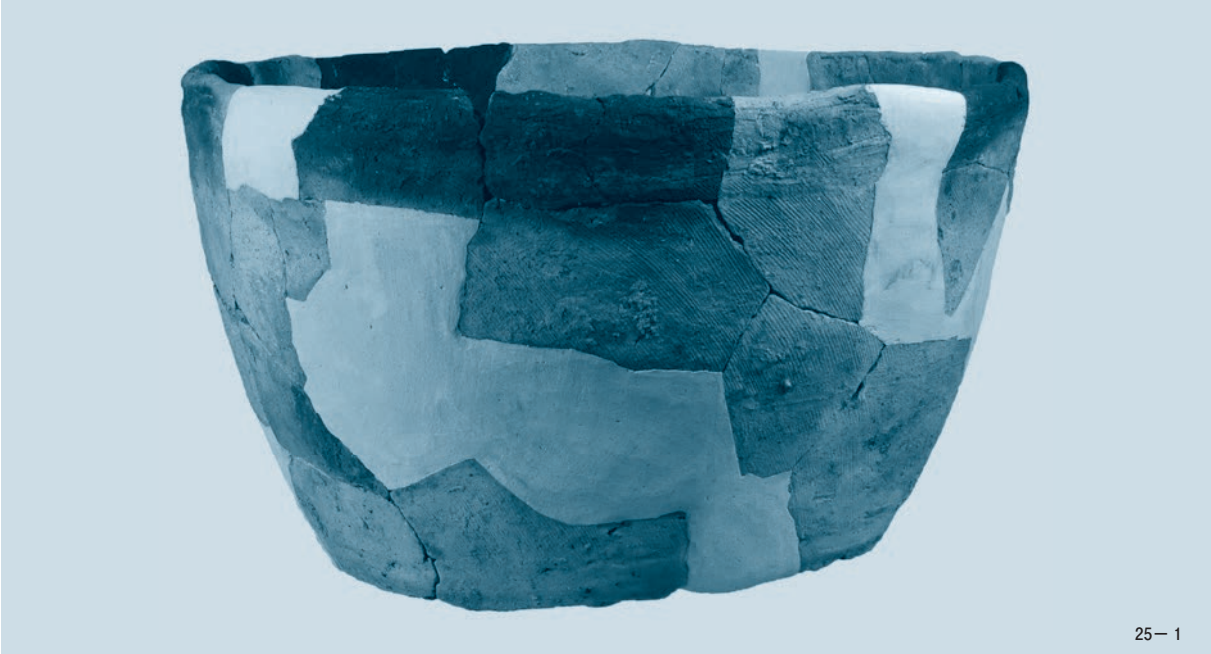

26－9

26－11

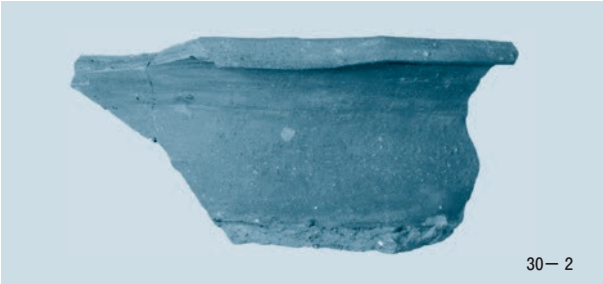
26－12

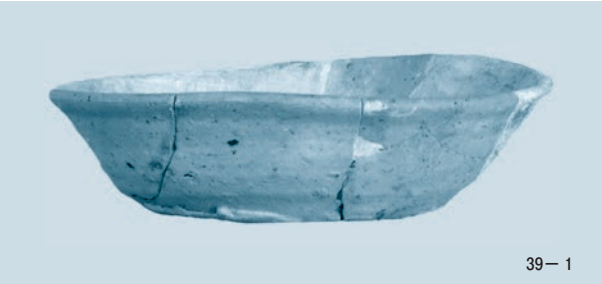

26－14

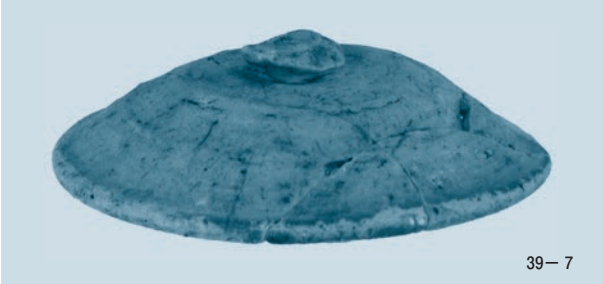

26－13


25－1

25　7号住居跡出土遺物（2）


30－2


39－1


39－7

40－7

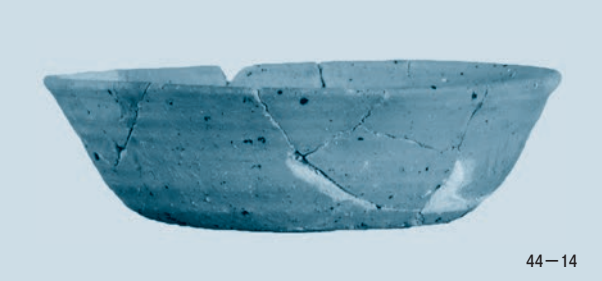
40－9

41－7

41－10

41－2

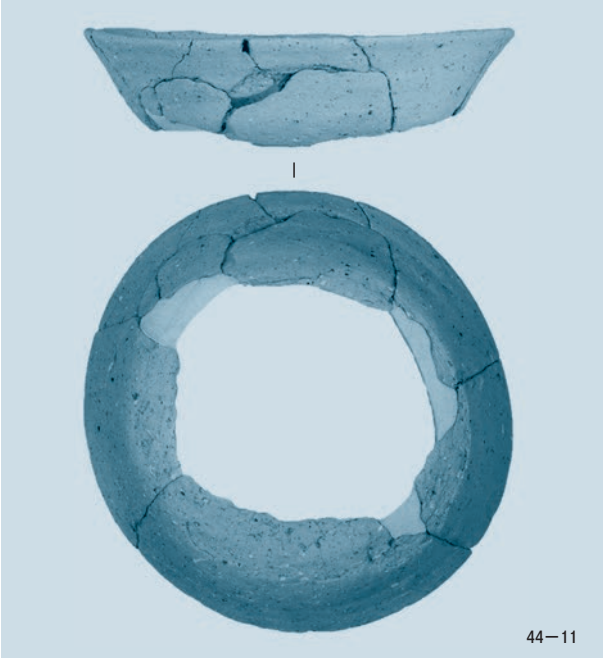
41－11

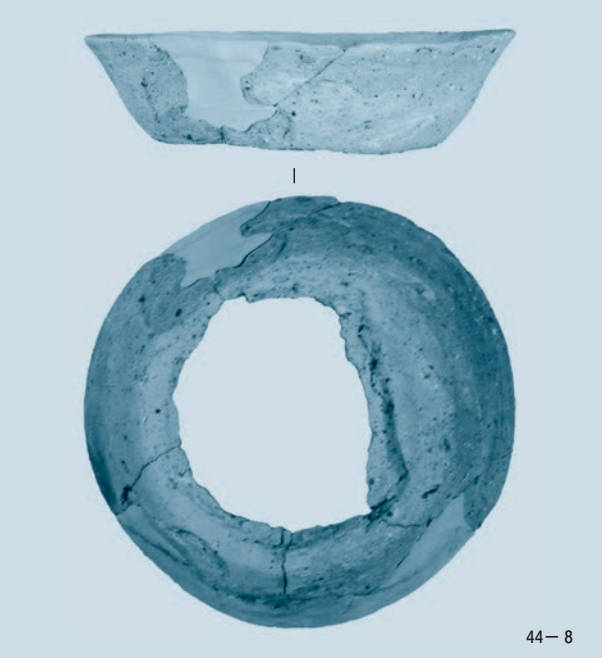

44－14

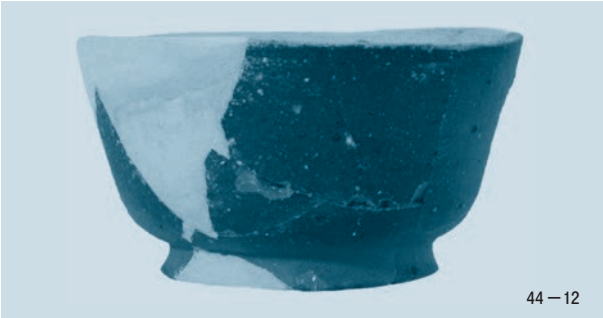
26　溝跡・土坑出土遺物

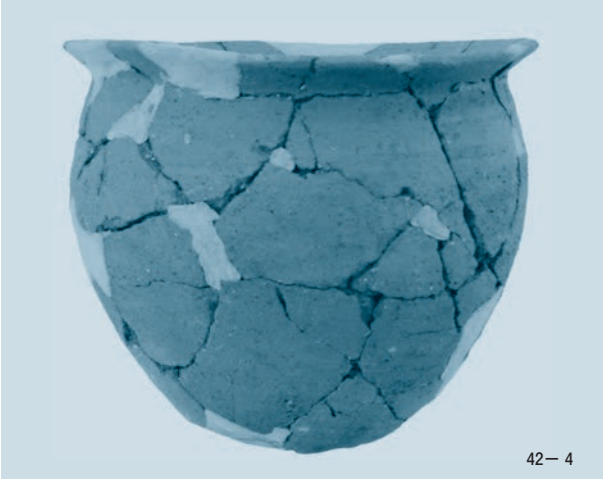
42－1

43－14


44－11

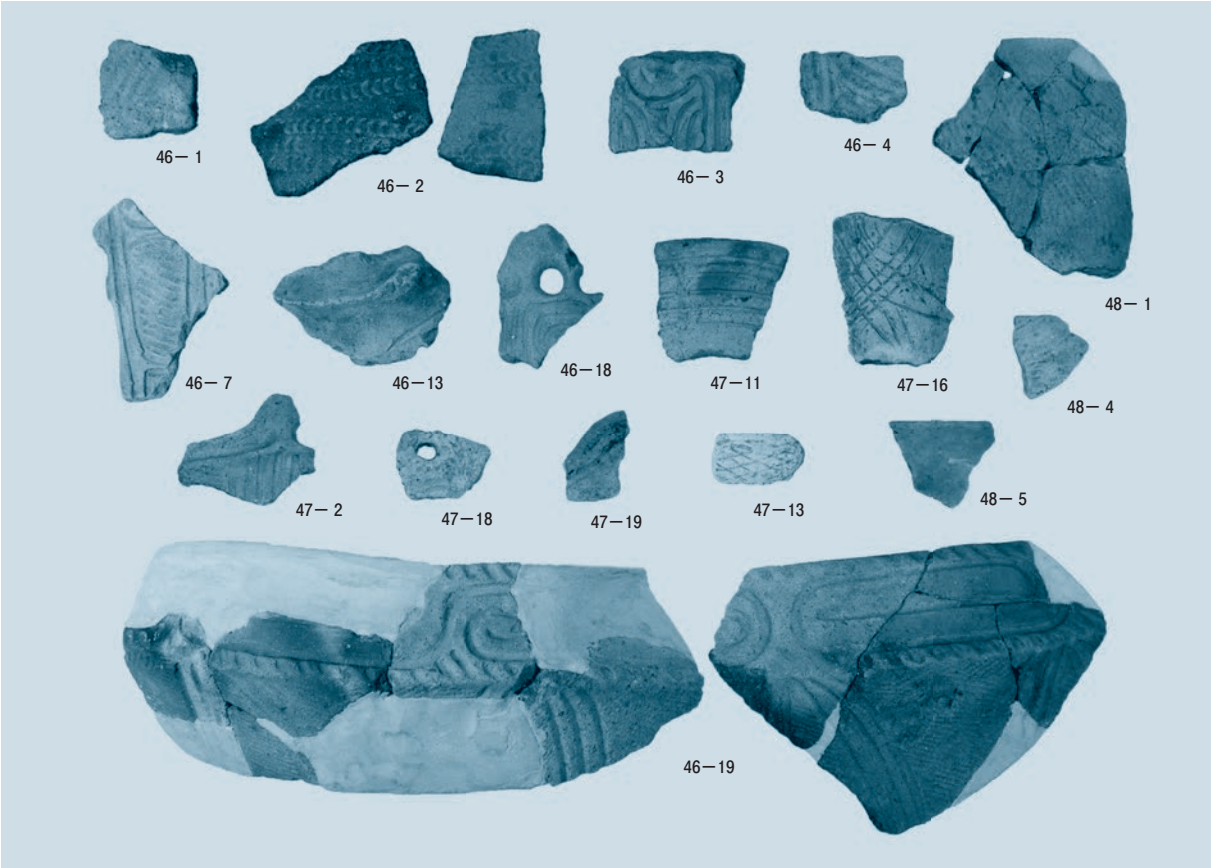

44－8

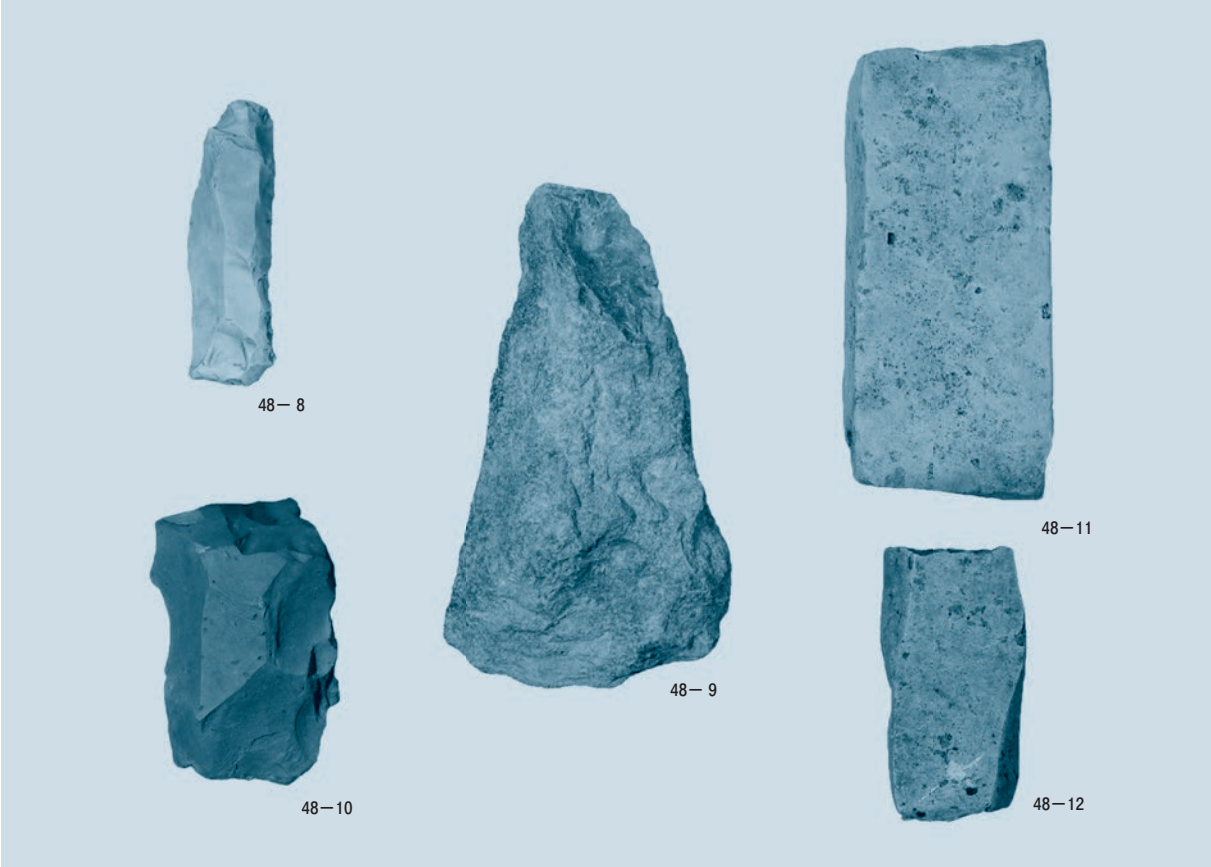

44－12


42－4

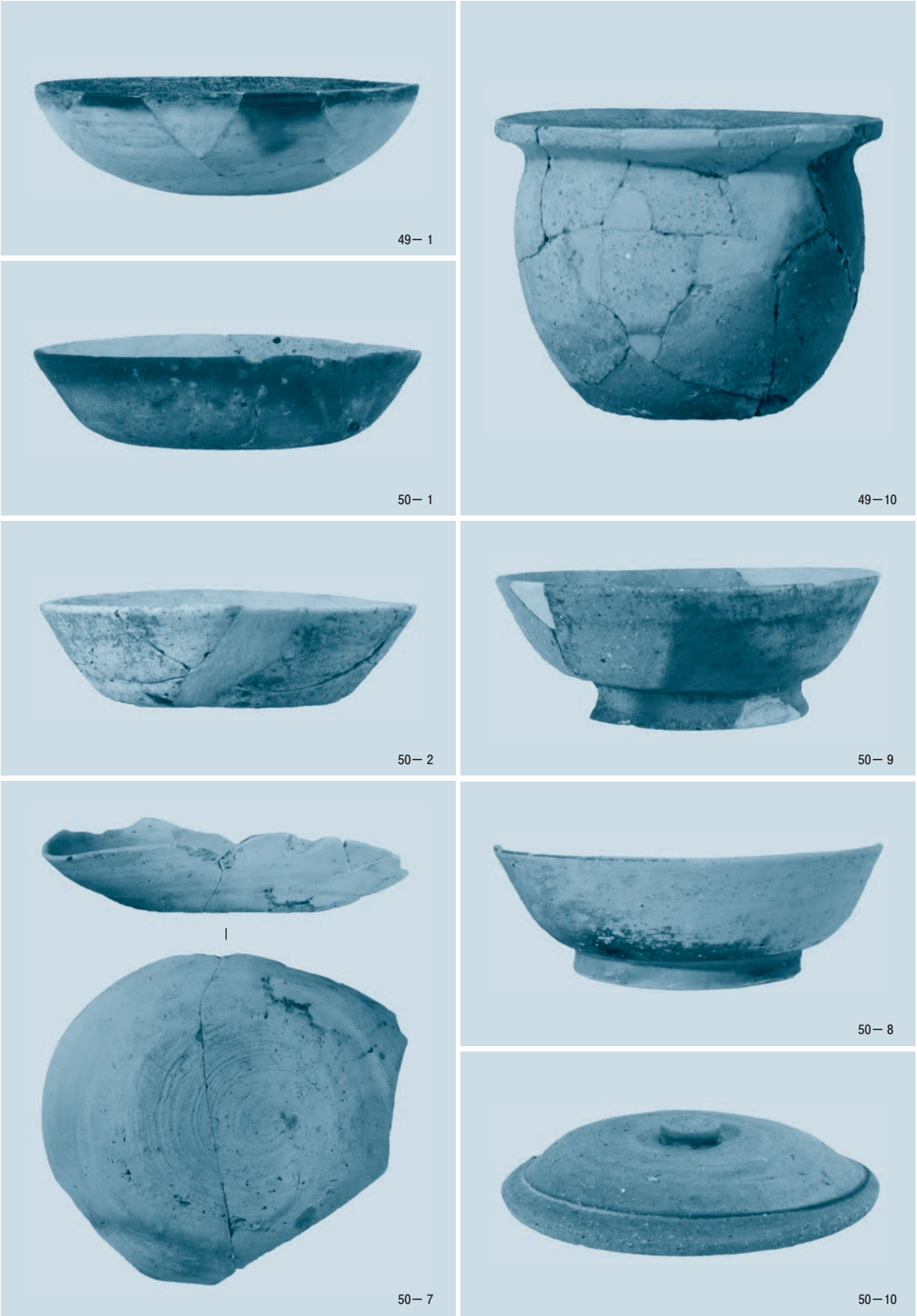
42－5

27　土坑出土遺物

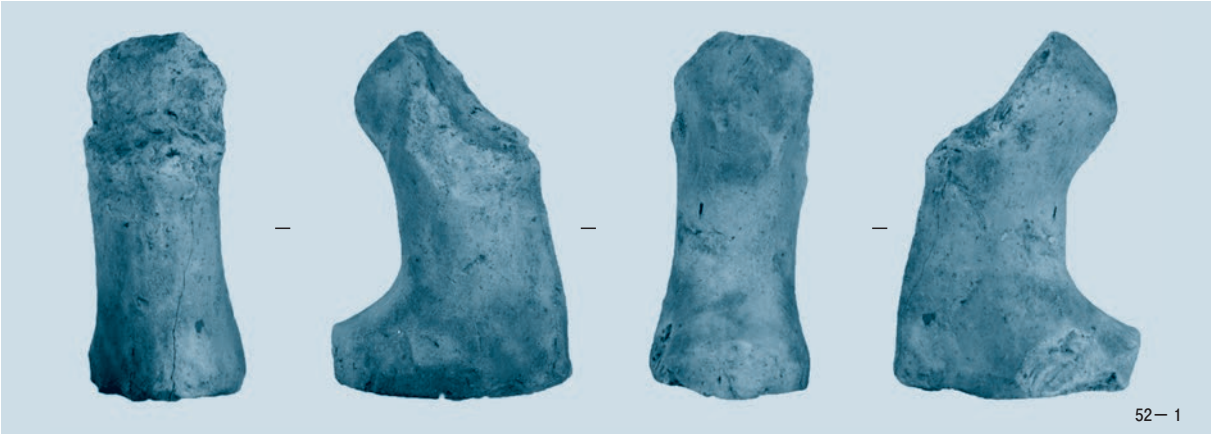


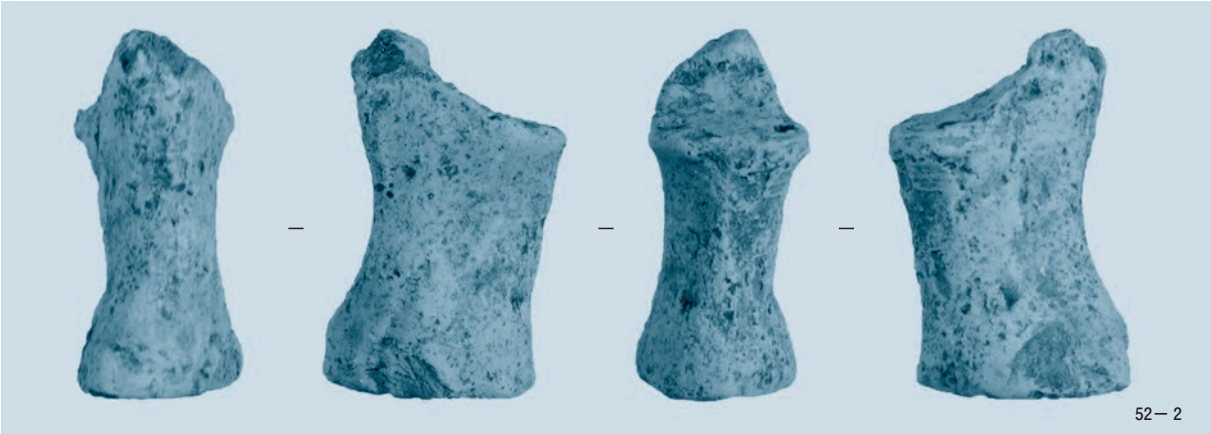


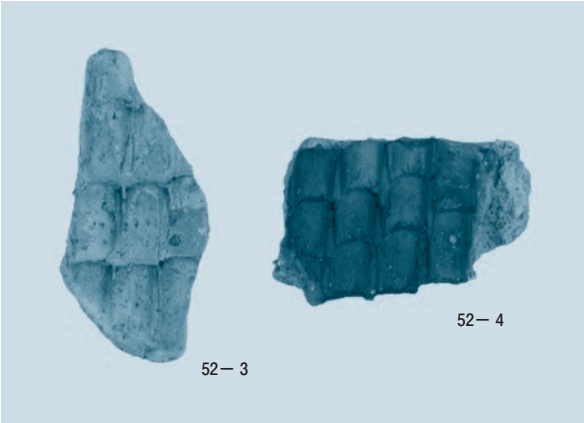
28 遺物包含層出土遺物（1）

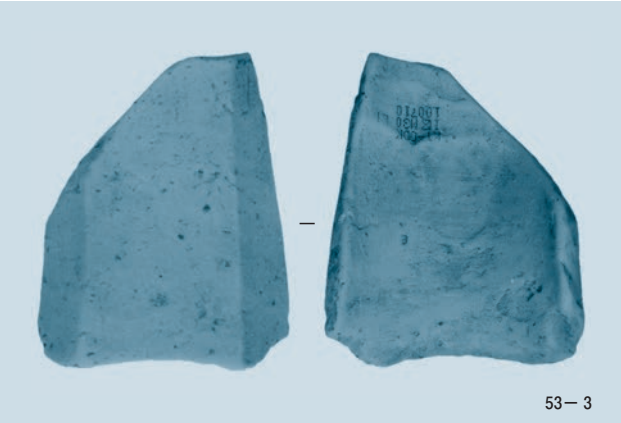


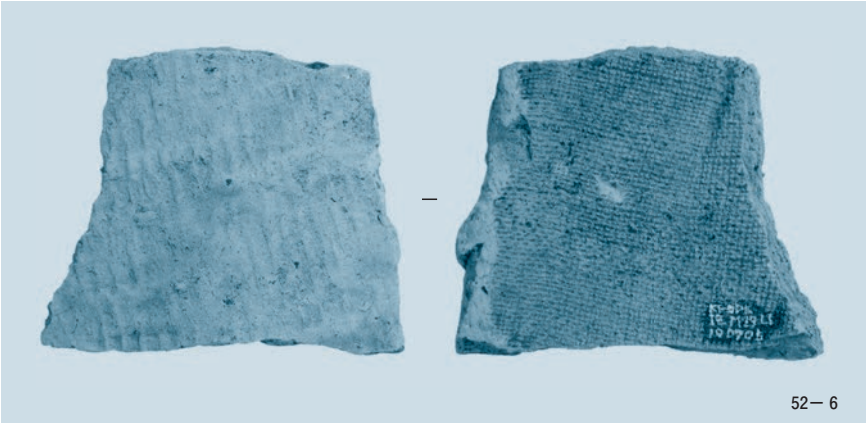
29 遺物包含層出土遺物（2）











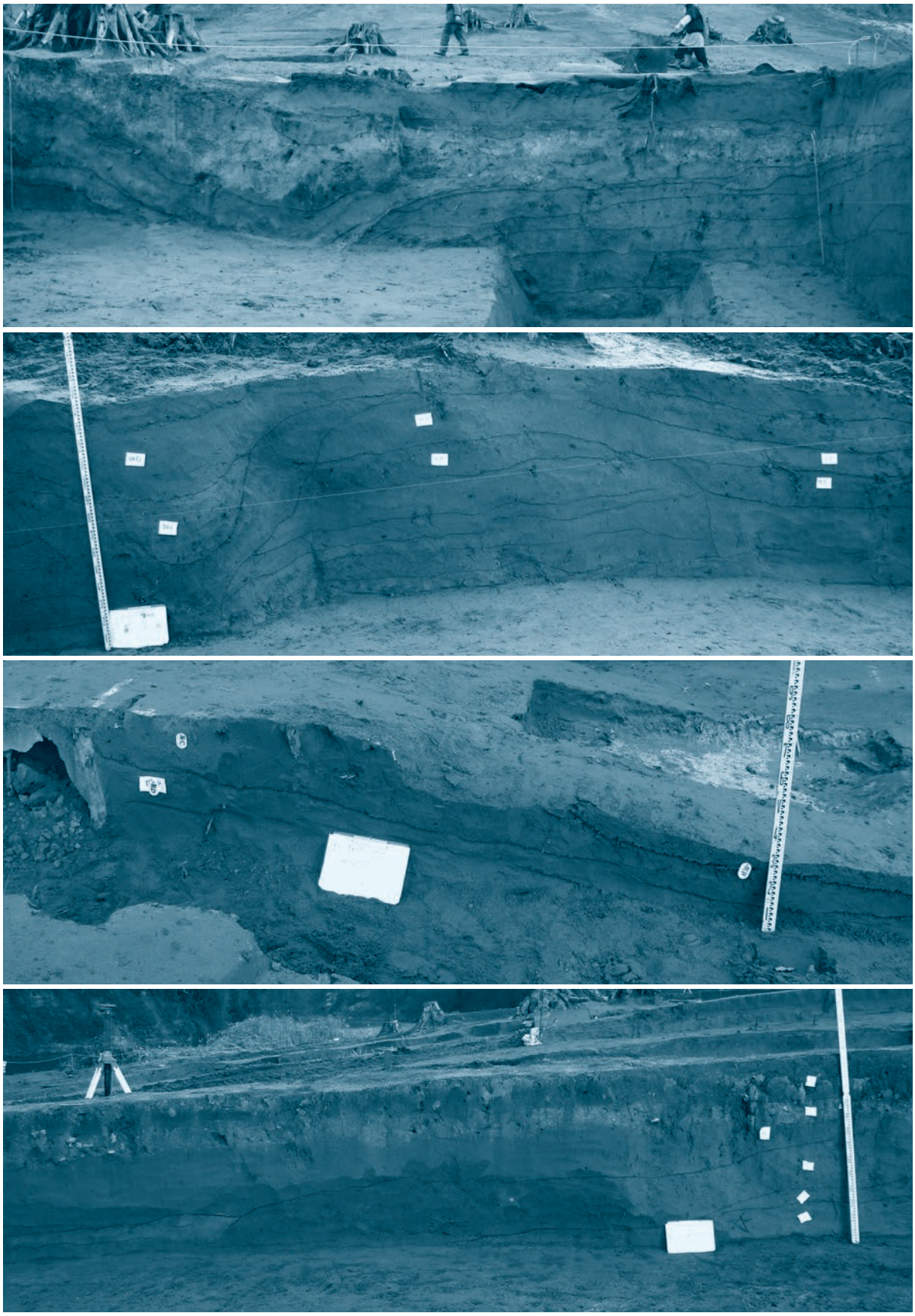
30　遺物包含層出土遺物（3）

31　Ⅱ区全景（北上空から）

32　Ⅱ区全景（上空から）

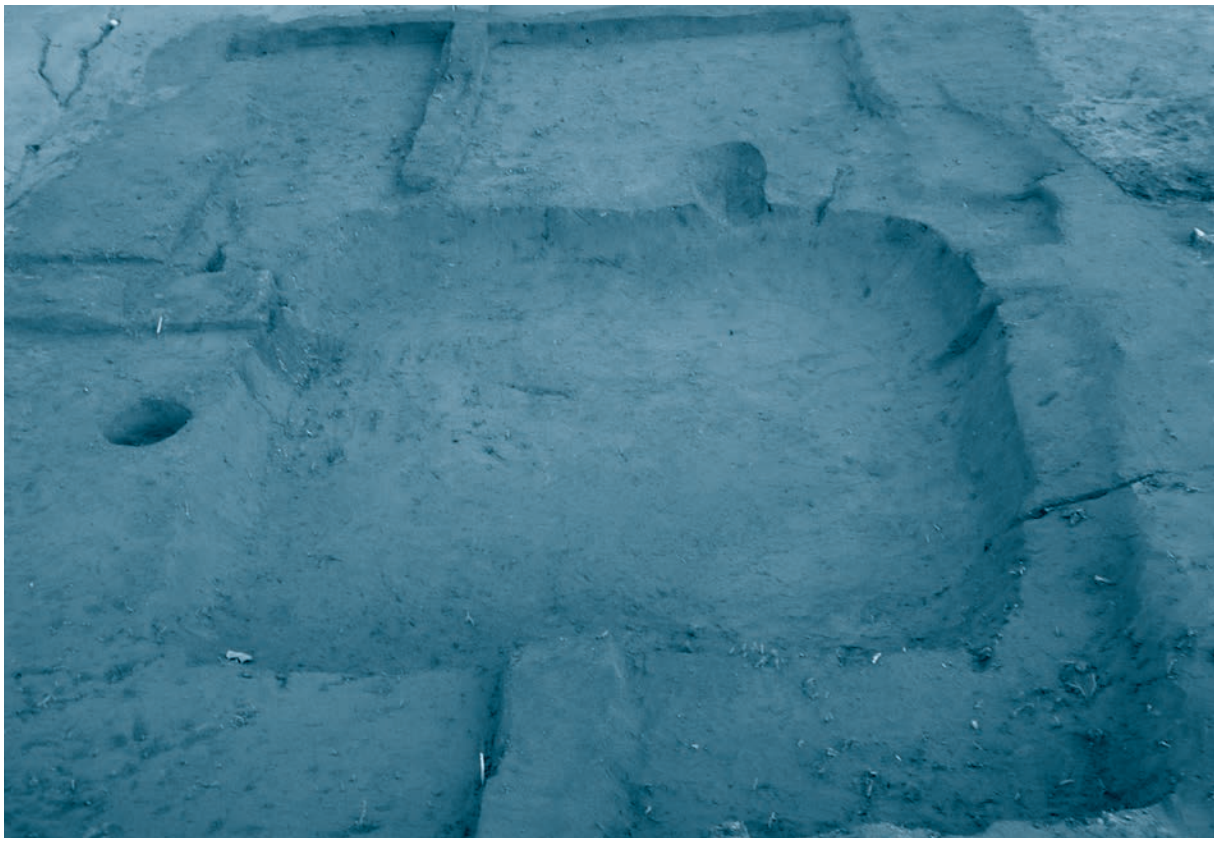
33　10Ｇ列ＬⅡ土層（南西から）

34　Ｈ６ＧＬⅡ土層（南から）

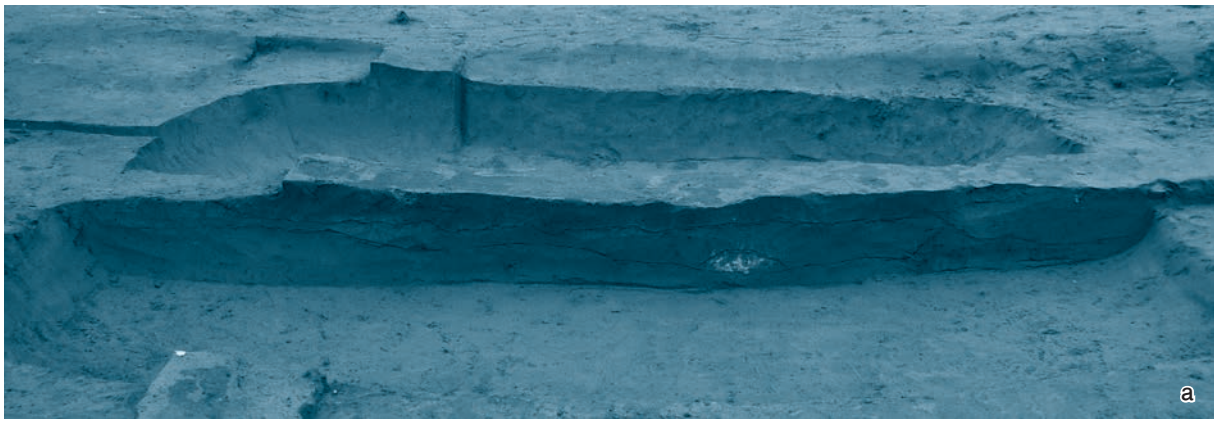


35　基本土層

a　D－D′（西から）　**b**　E－E′（北から）
c　J－J′（南から）　**d**　O′－O″（南から）

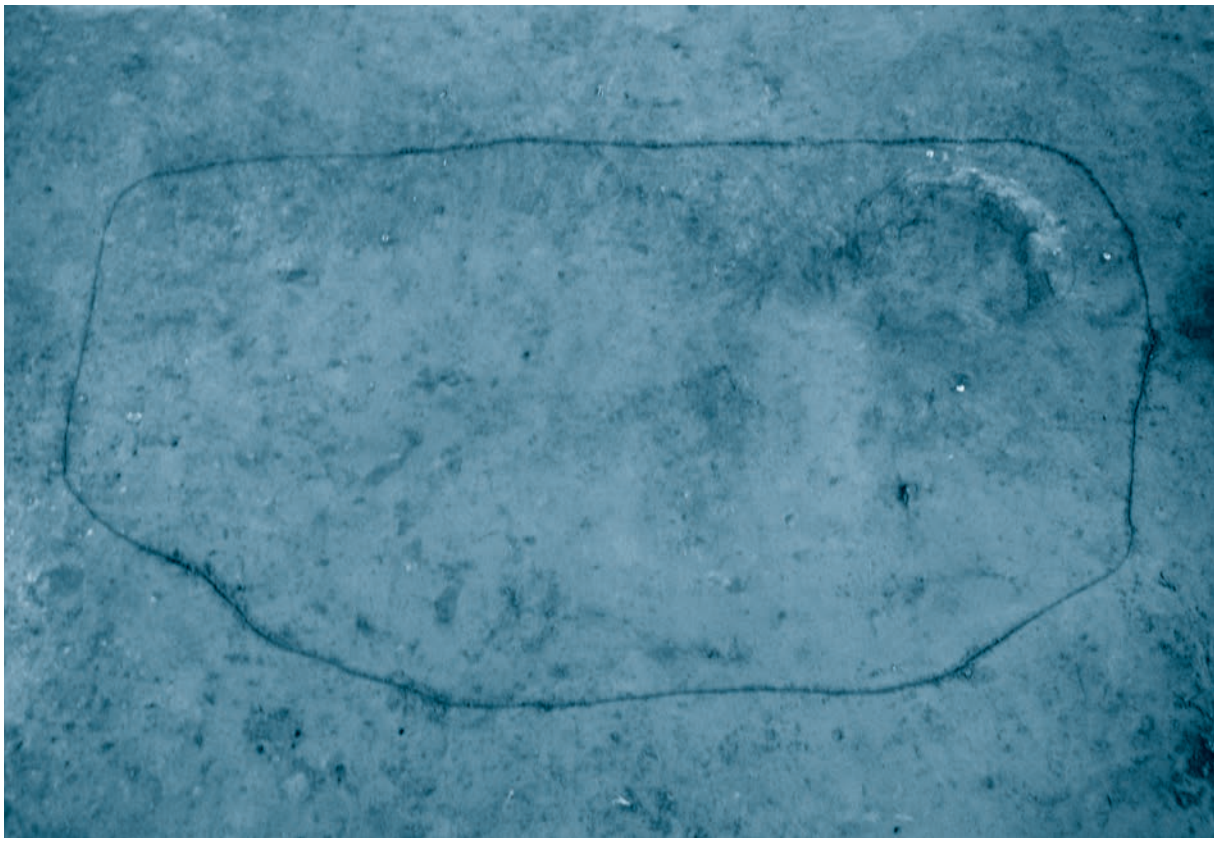


36　4号住居跡（西から）

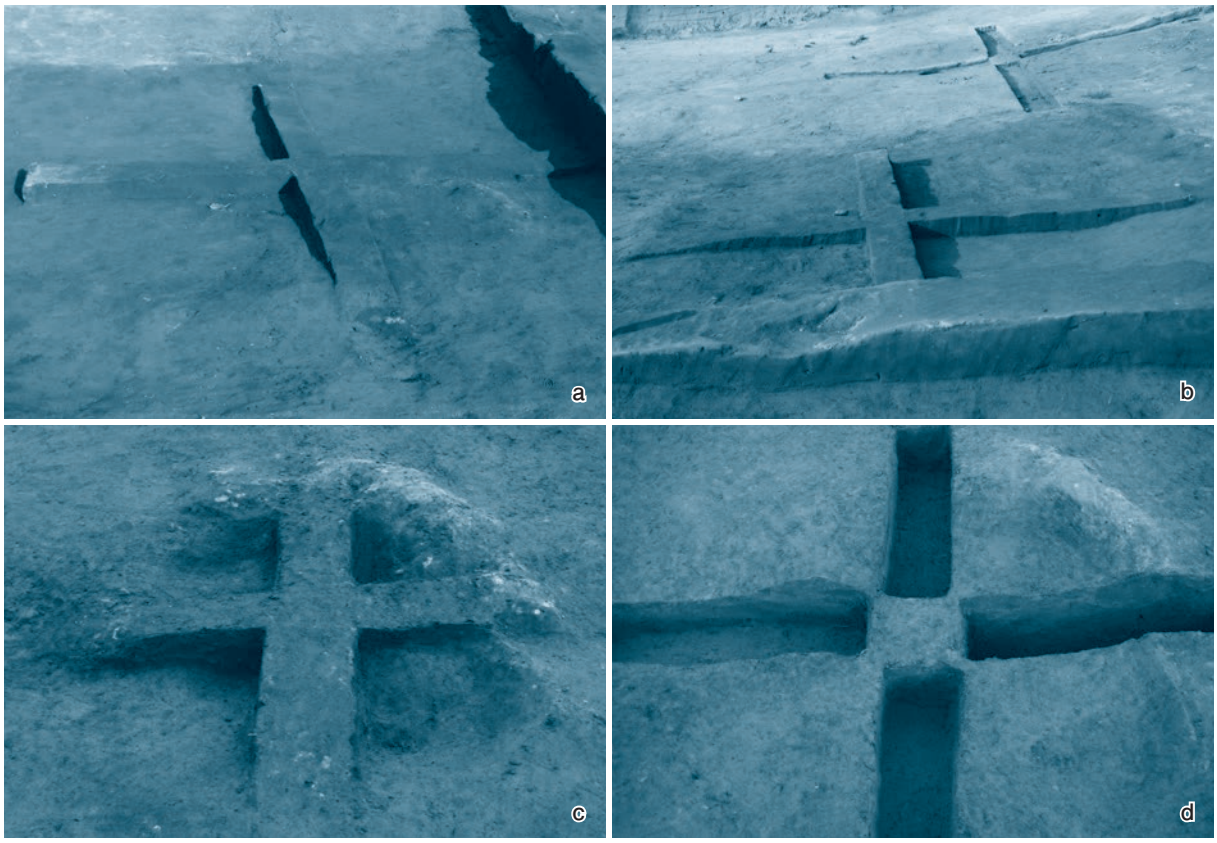


37　4号住居跡細部

a　土層（北から）
b　検出（西から）　c　完掘状況（南から）

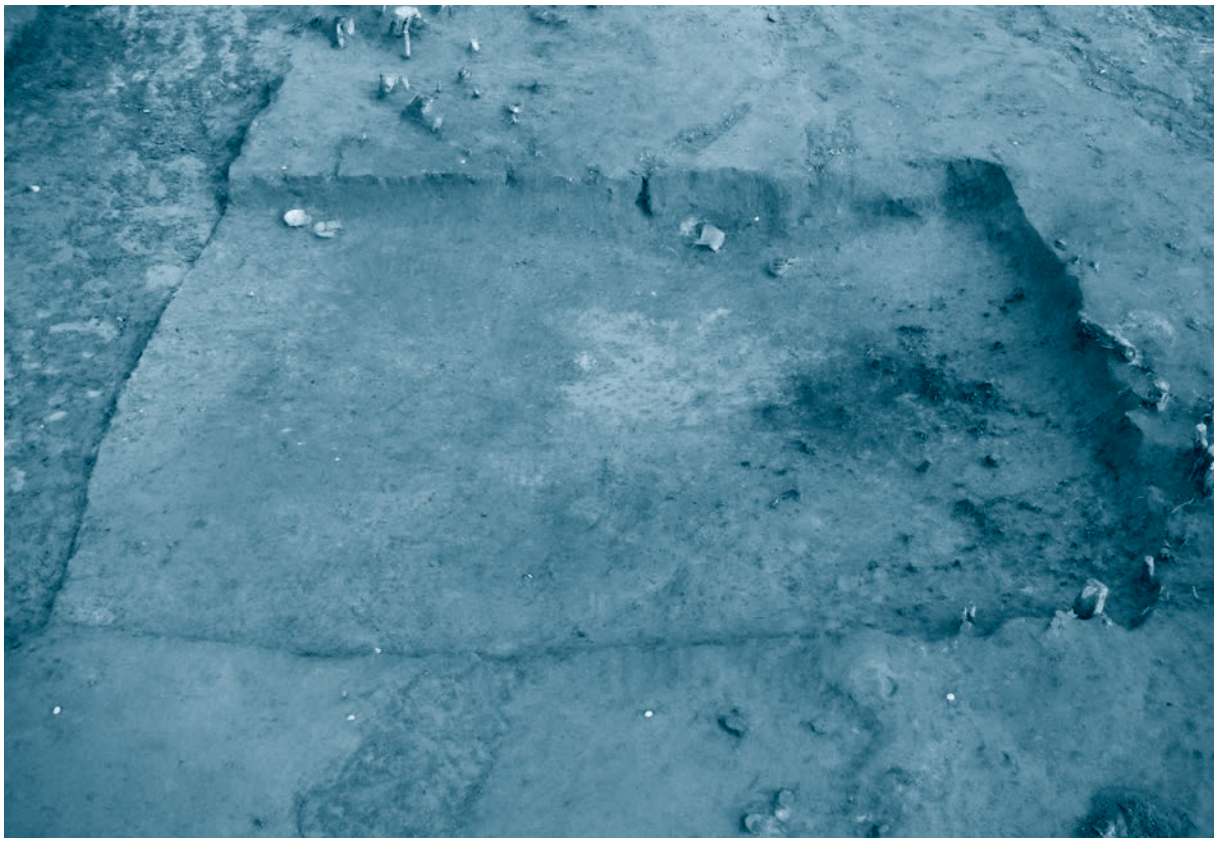


38　５号住居跡（西から）

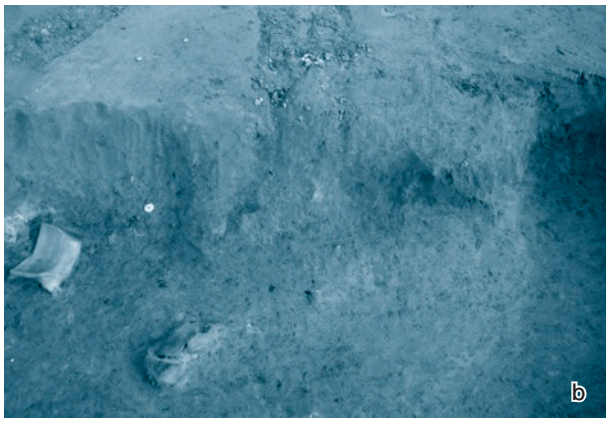


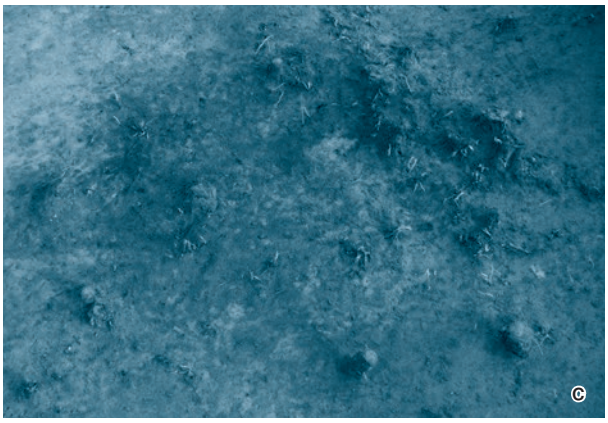
39　５号住居跡細部

a　上部土層（西から）　b　上部土層（南から）
c　カマド断面（西から）　d　カマド断ち割り（西から）



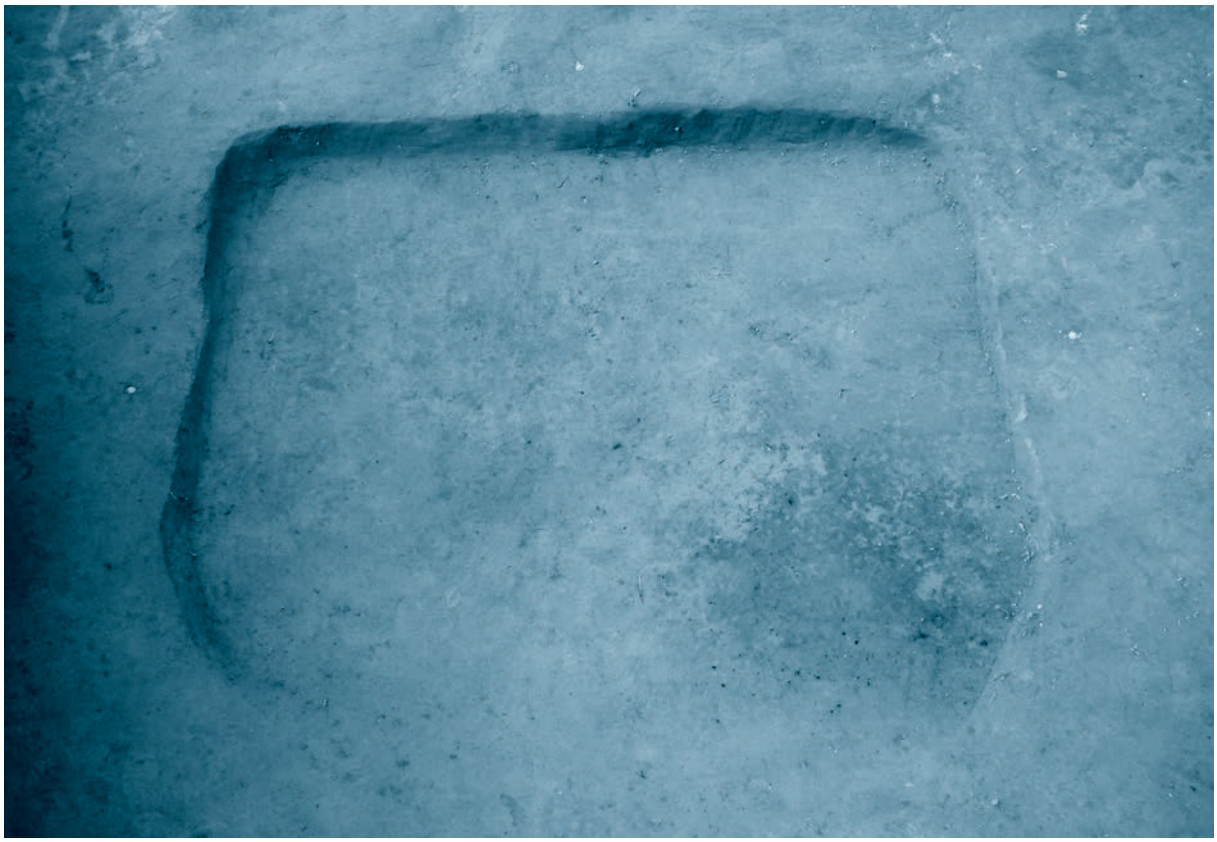
40　8号住居跡（西から）



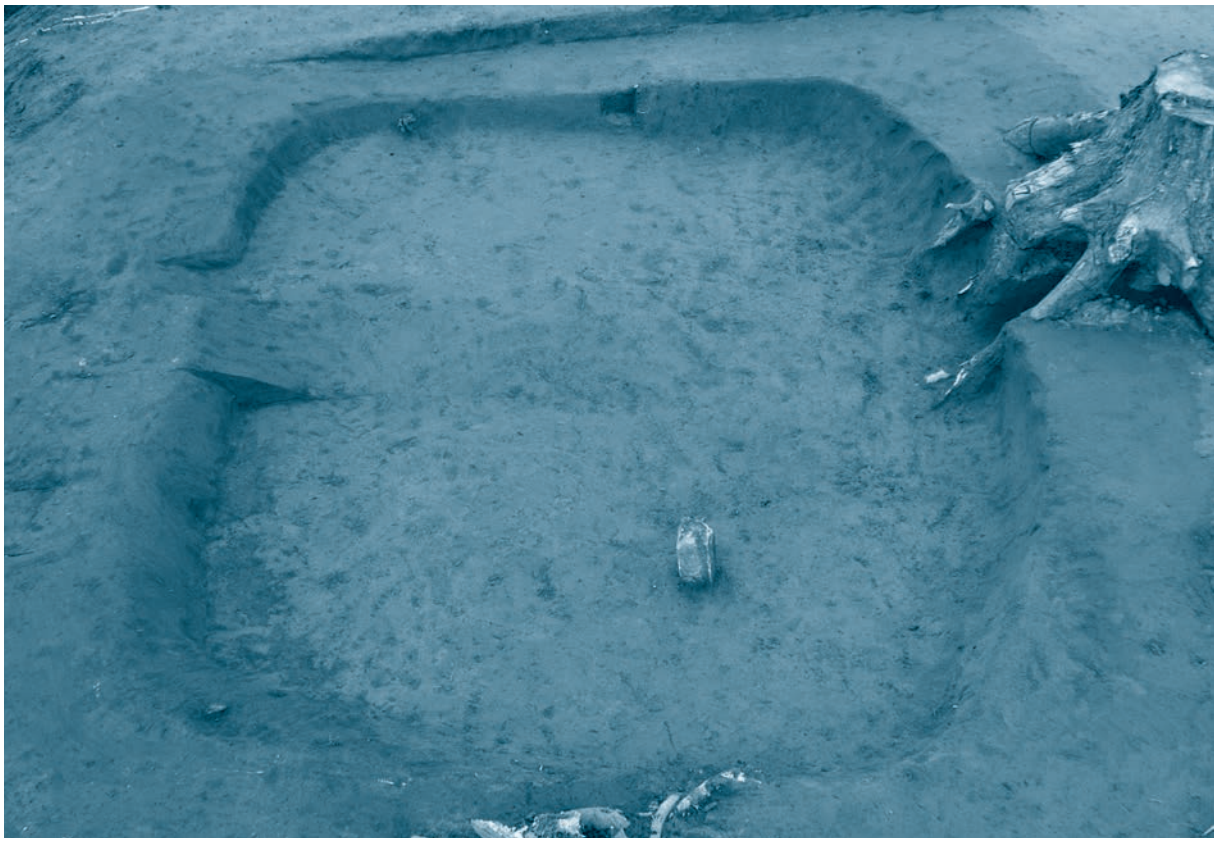


41　8号住居跡細部

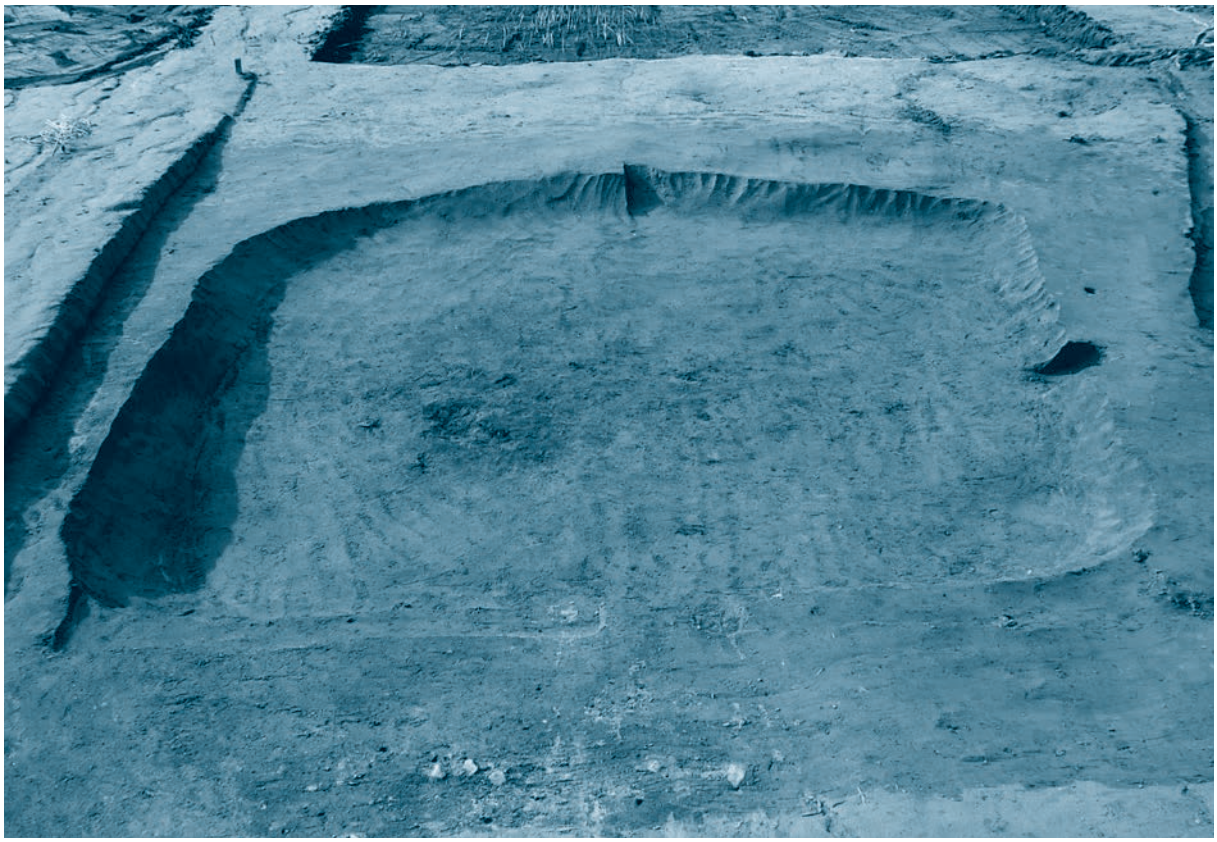
a　土層（西から）
b　カマド（西から）　c　炉跡（西から）



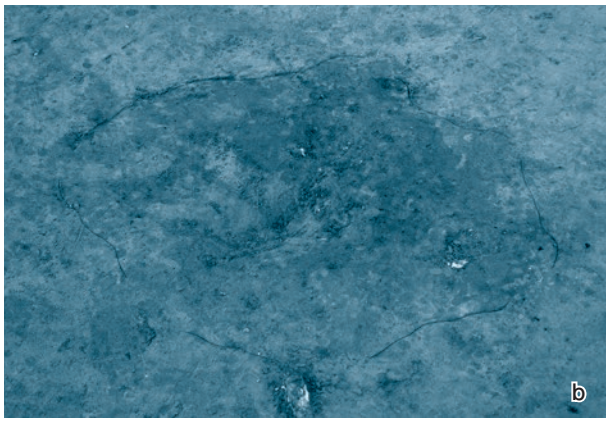
42　9号住居跡（東から）

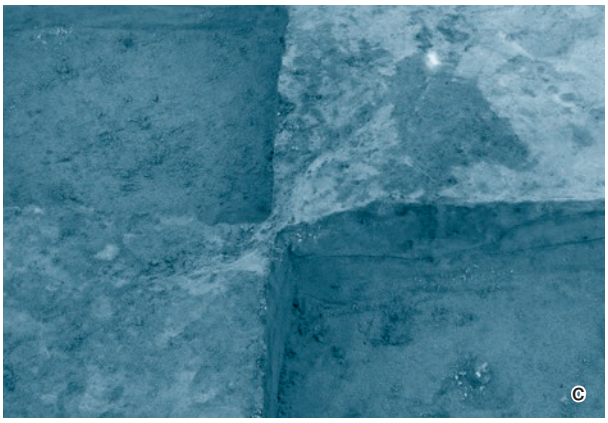


43　13号住居跡（南から）



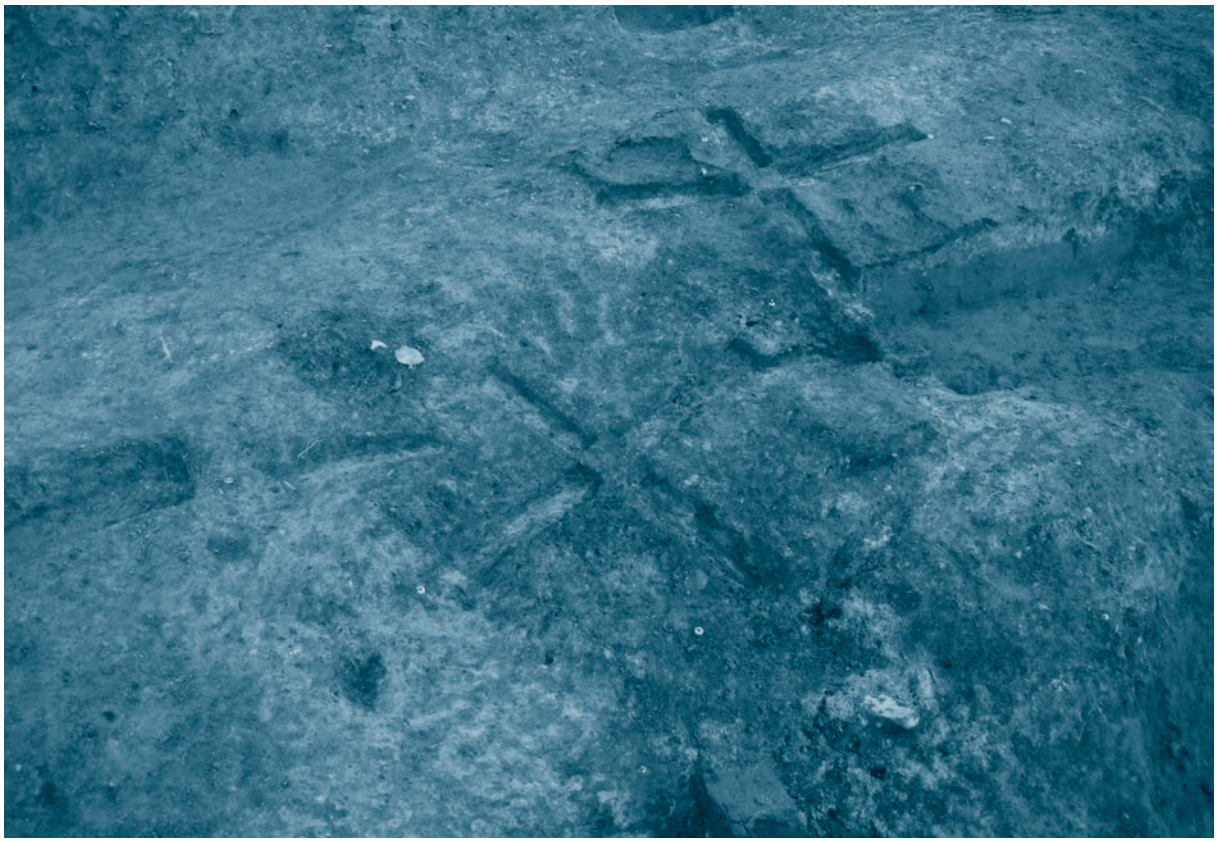
44　12号住居跡（東から）





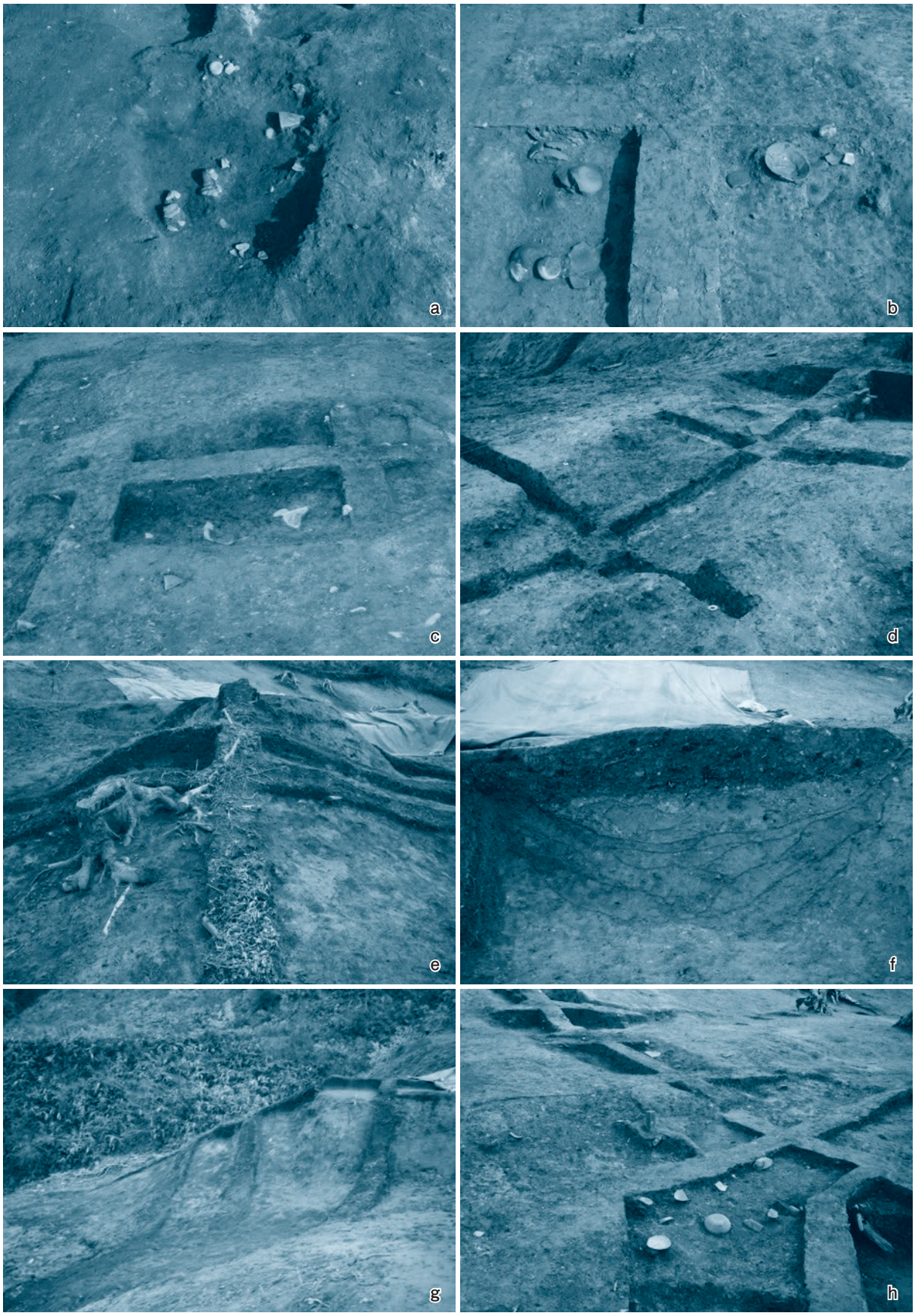
45　12号住居跡細部

a　土層（東から）
b　炉跡（南から）　c　炉跡断ち割り（南から）



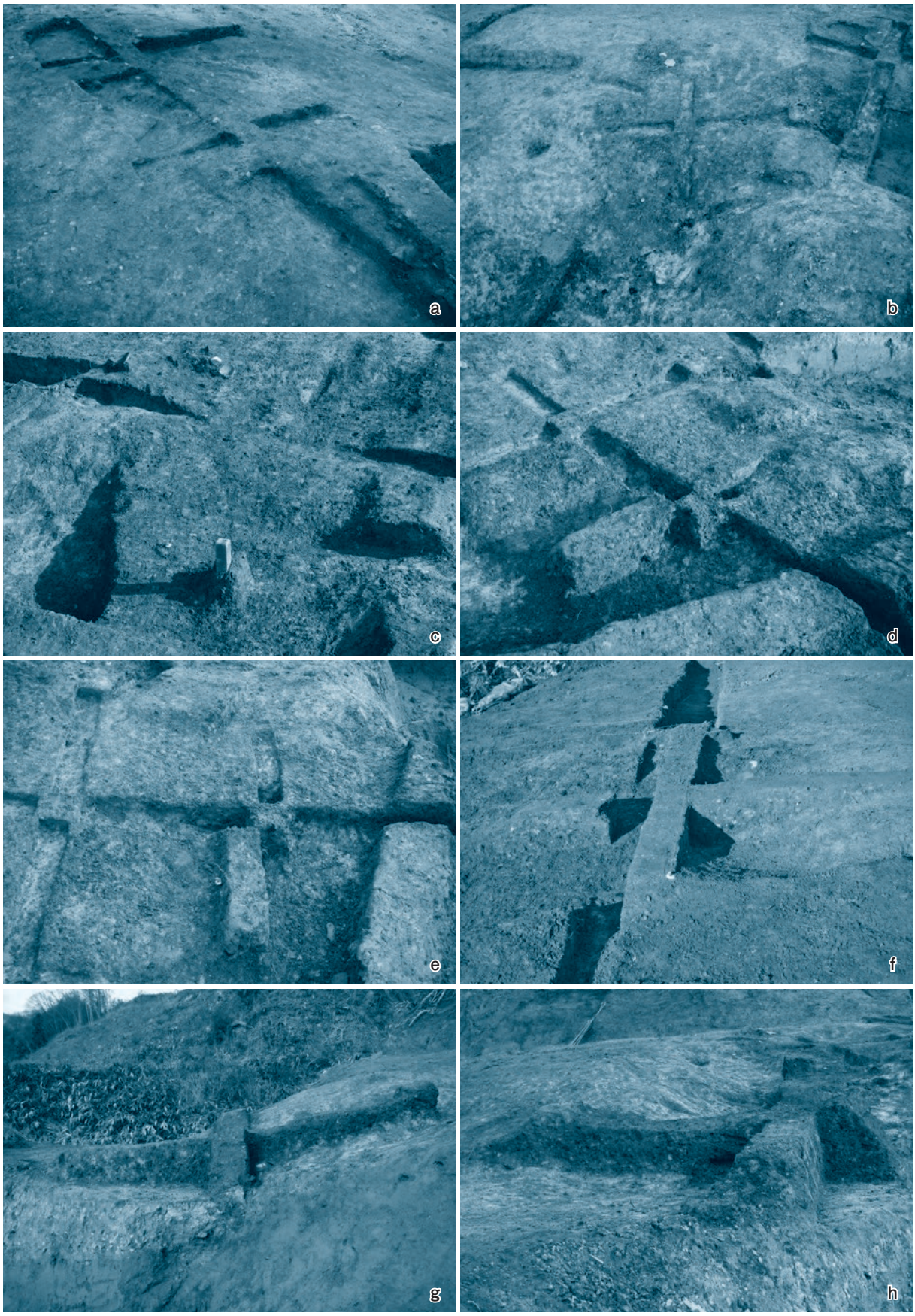
46　１・３号須恵器窯跡（北西から）

47　２号須恵器窯跡（南西から）



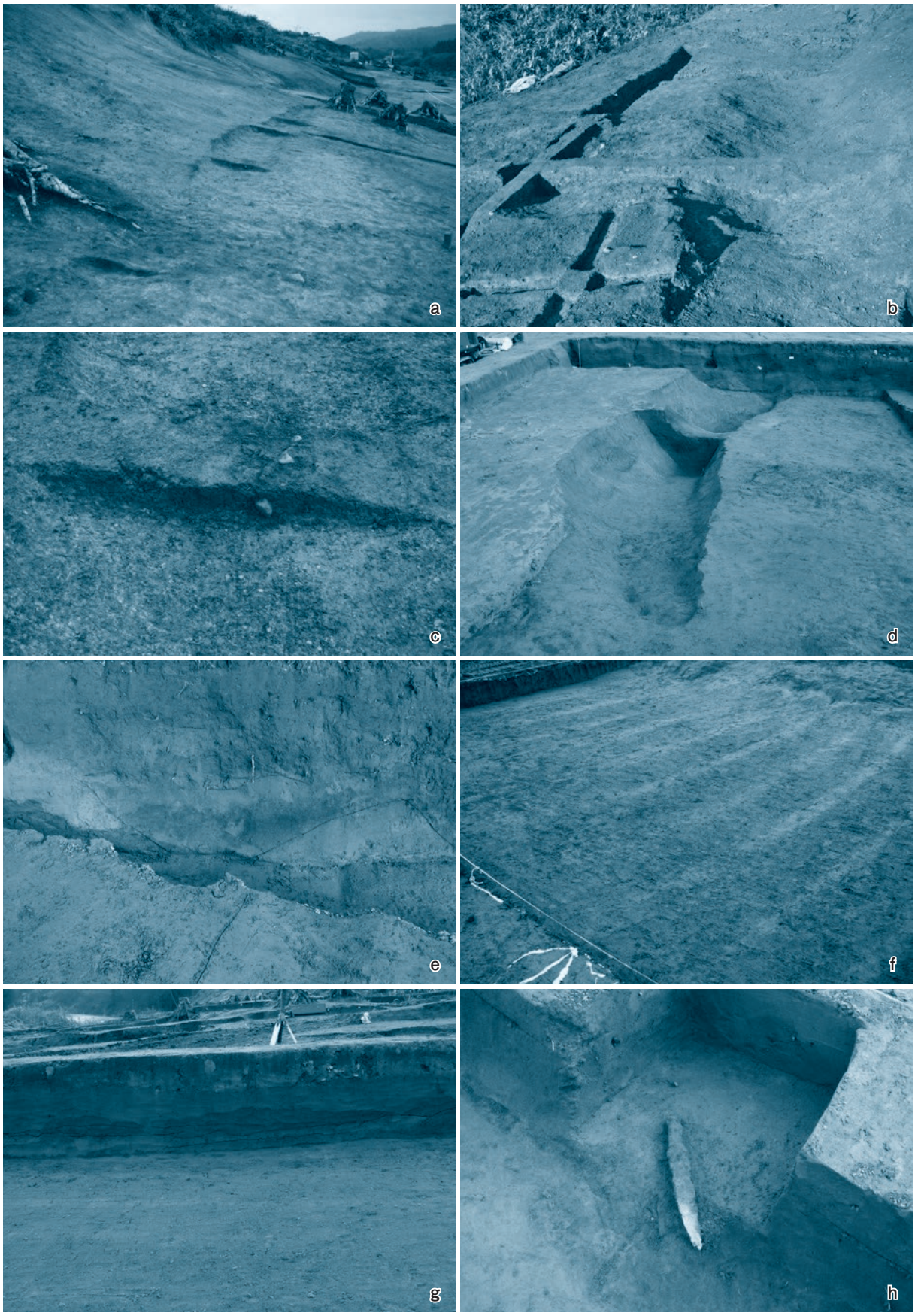
48　1号須恵器窯跡細部

a　全景（西から）
b　ℓ 1遺物出土状況（西から）
c　土層断面（南から）
d　断ち割り断面（西南から）
e　作業場南北断面（西から）
f　作業場南北断面（西から）
g　作業場東西断面（南から）
h　作業場遺物出土状況（北西から）



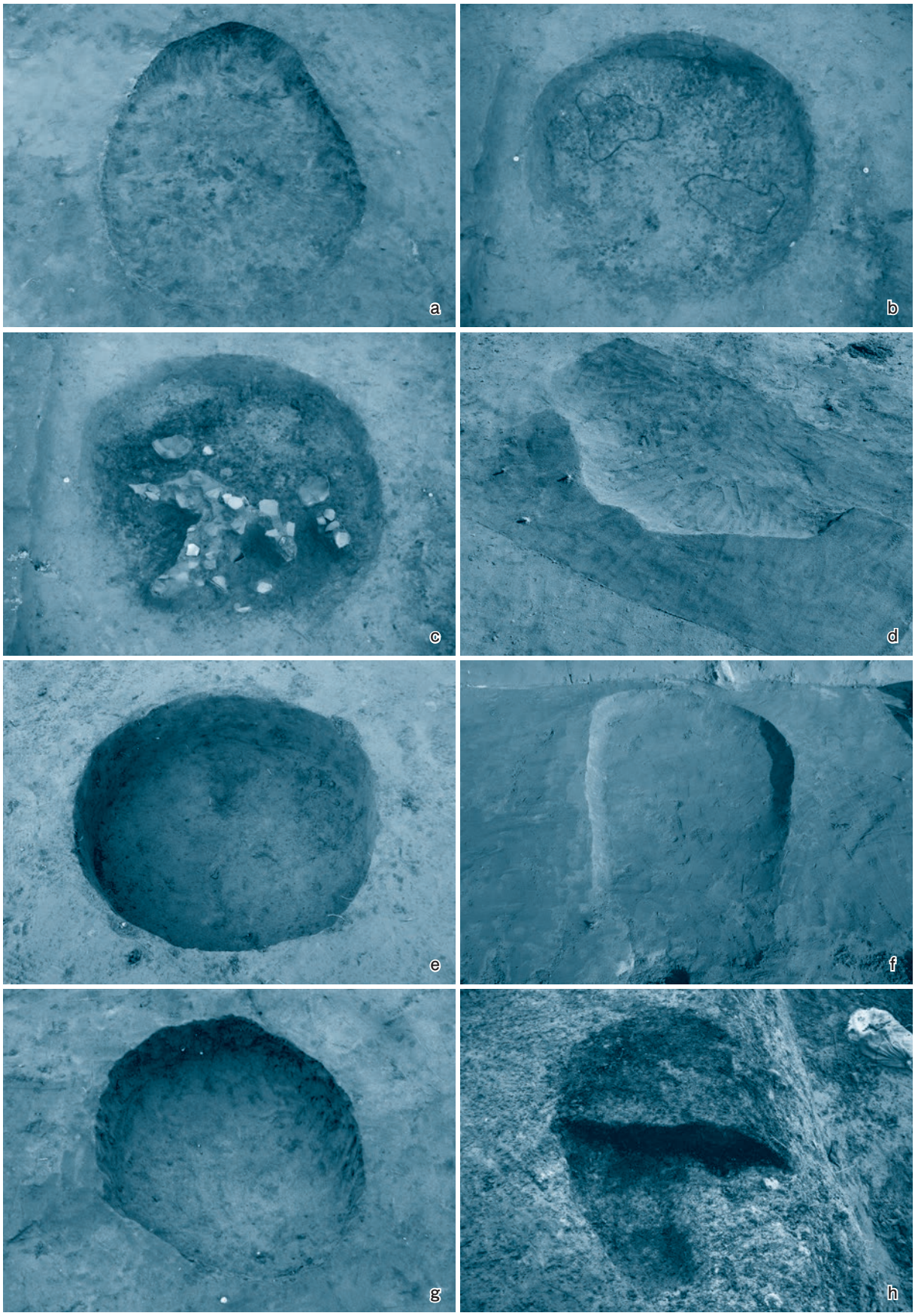
49　2・3号須恵器窯跡細部

a　2号断面（西から）
b　3号断面（南西から）
c　3号検出（南西から）
d　3号断面（北西から）
e　3号断面（北から）
f　3号断面（南西から）
g　3号作業場断面（南から）
h　3号作業場断面（西から）



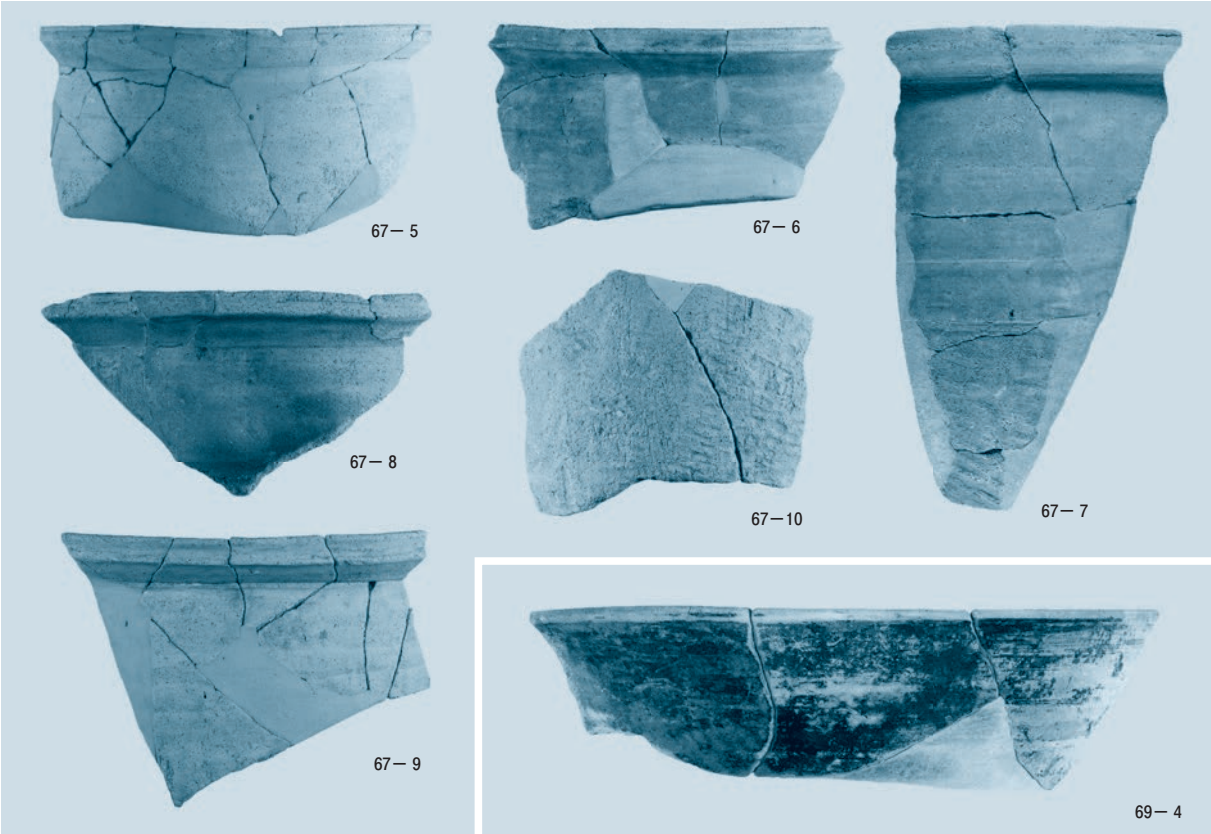
50　4・9号溝跡，畝状遺構，遺物出土状況

a　4号溝跡全景（北から）
b　4号溝跡断面（南から）
c　4号溝跡断面（北から）
d　9号溝跡全景（西から）
e　9号溝跡断面（西から）
f　1号畝状遺構（北東から）
g　1号畝状遺構断面（南から）
h　H6G鉄刀出土状況（北西から）

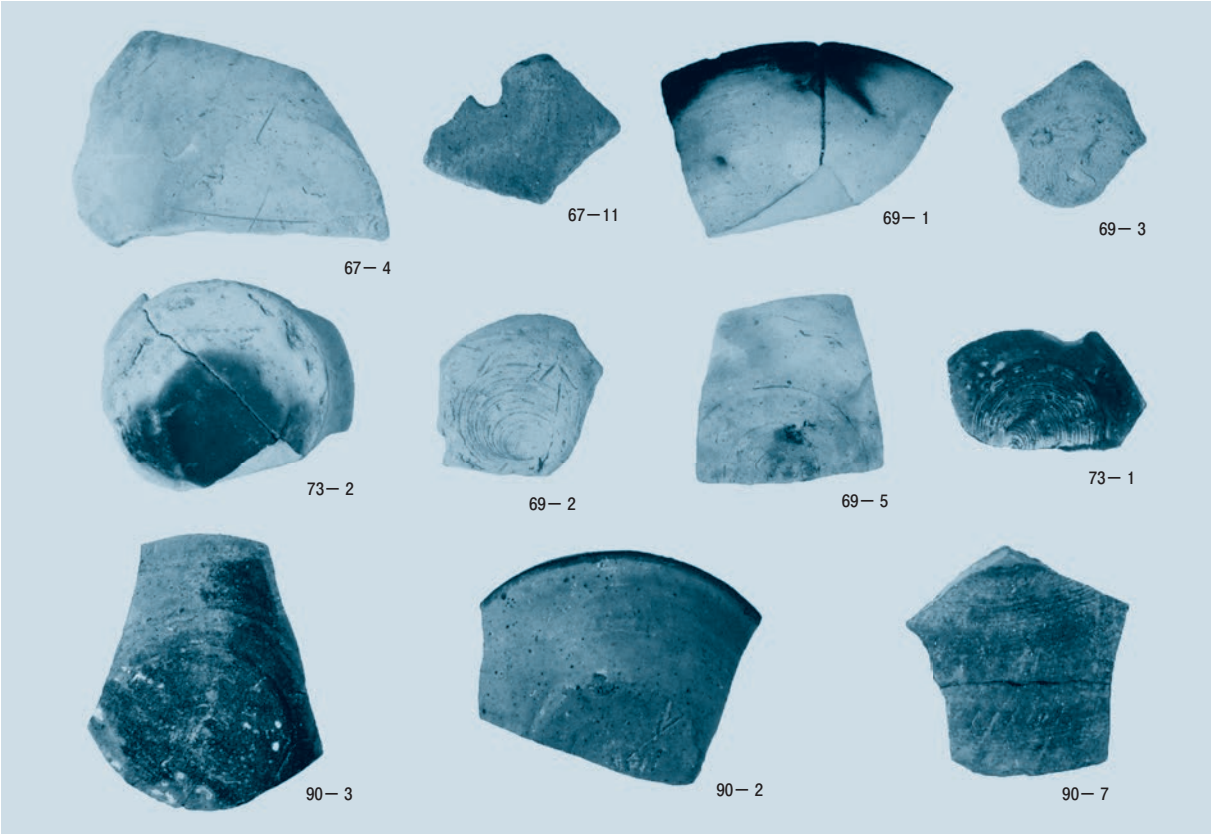


51　Ⅱ区土坑

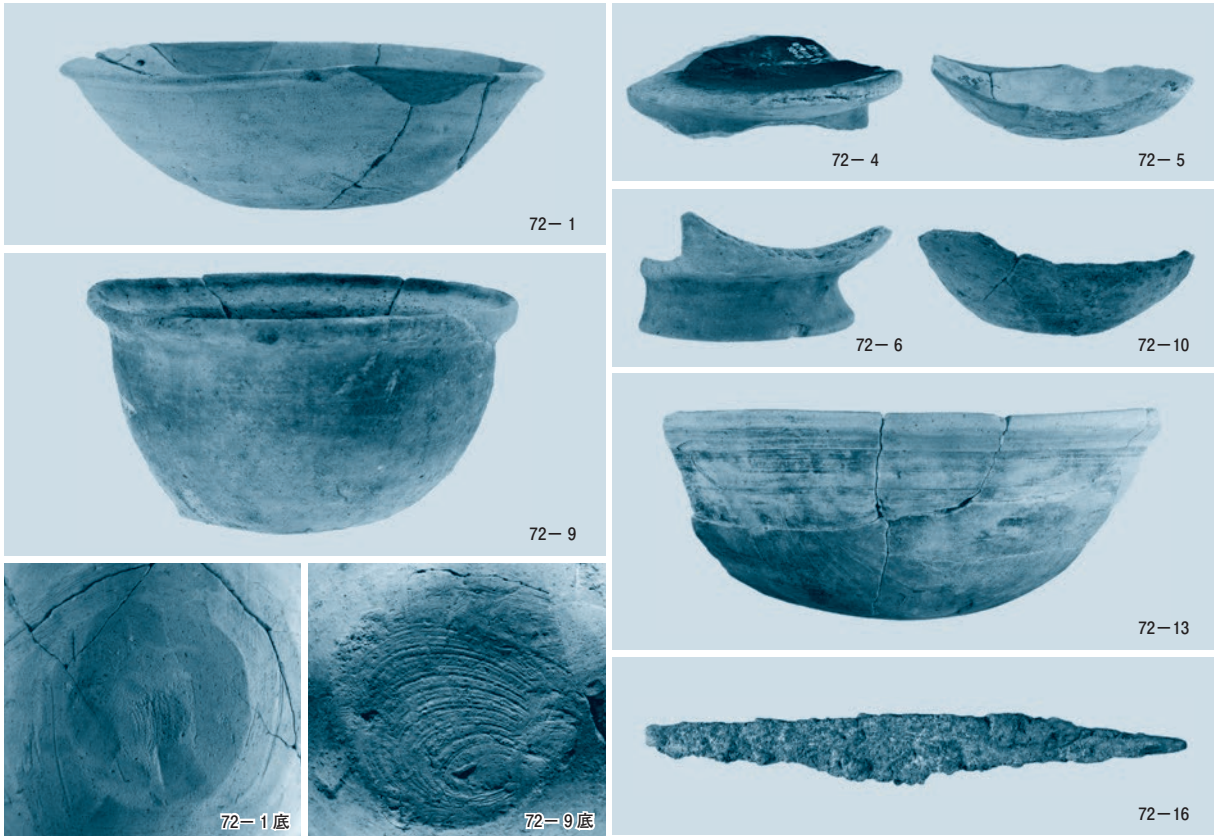
a　10号土坑（西から）
b　25号土坑（西から）
c　25号土坑遺物出土状況（西から）
d　26号土坑（北西から）
e　28号土坑（南から）
f　32号土坑（西から）
g　34号土坑（東から）
h　35号土坑断面（北西から）



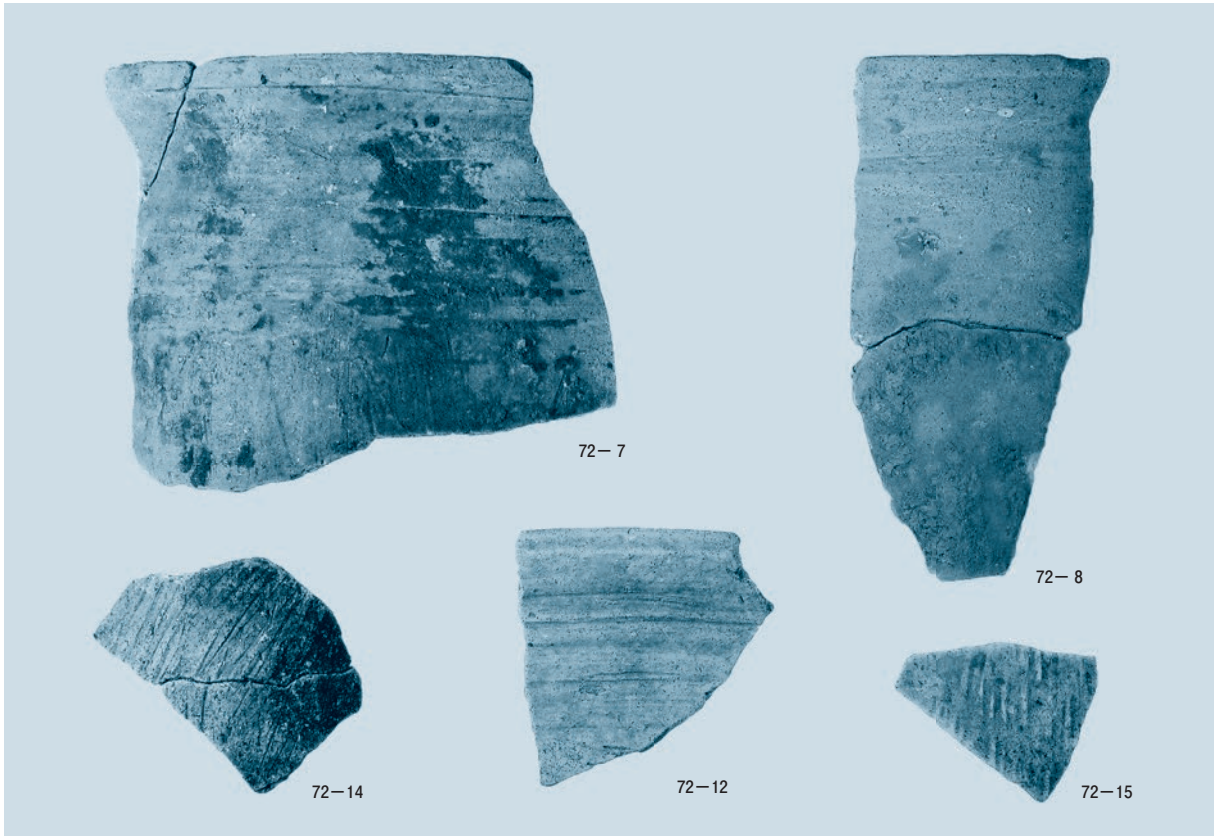
52　4・5号住居跡出土遺物



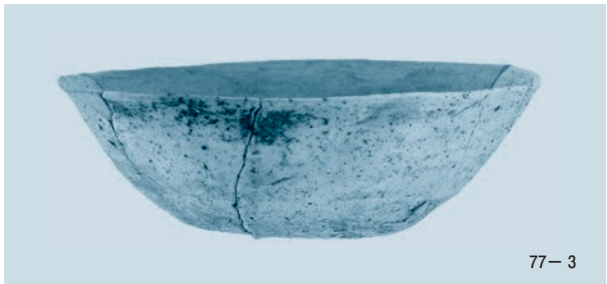
53　4・5・9号住居跡・4号溝跡出土遺物

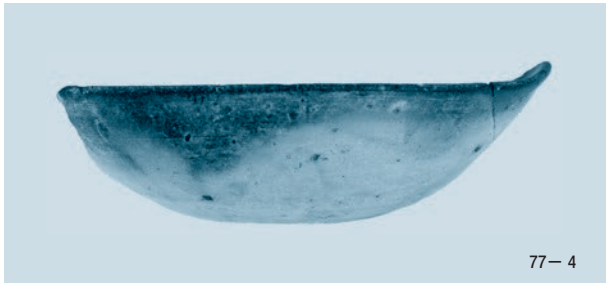


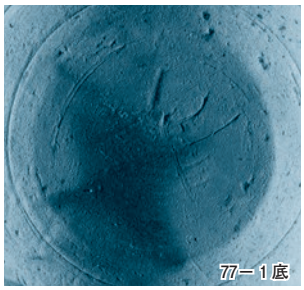
54　8号住居跡出土遺物（1）

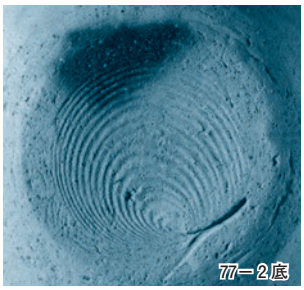


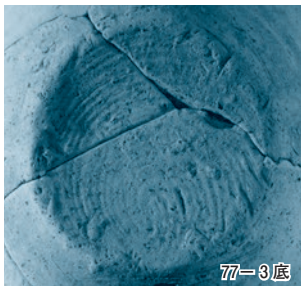
55　8号住居跡出土遺物（2）

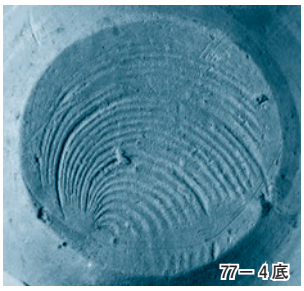


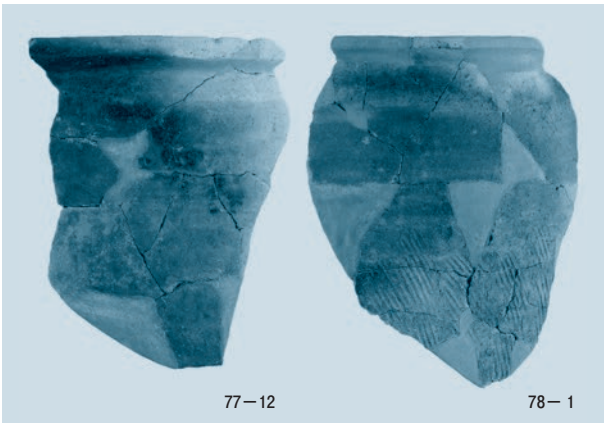


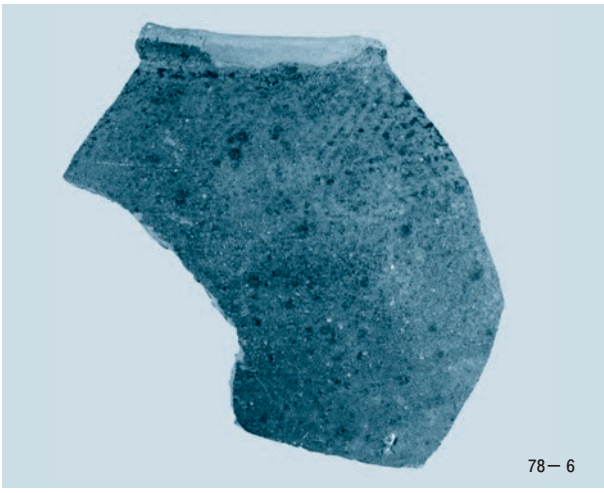




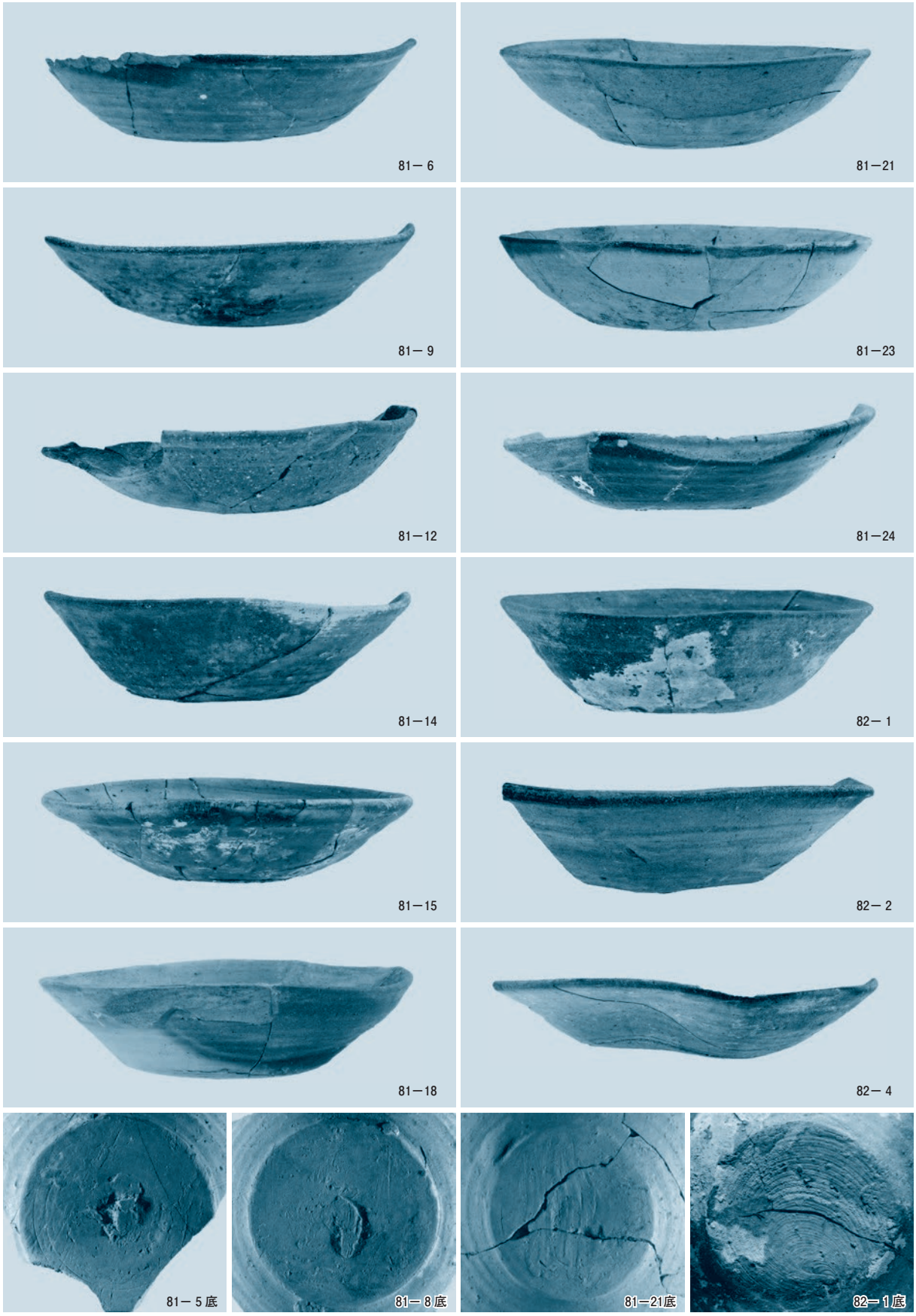




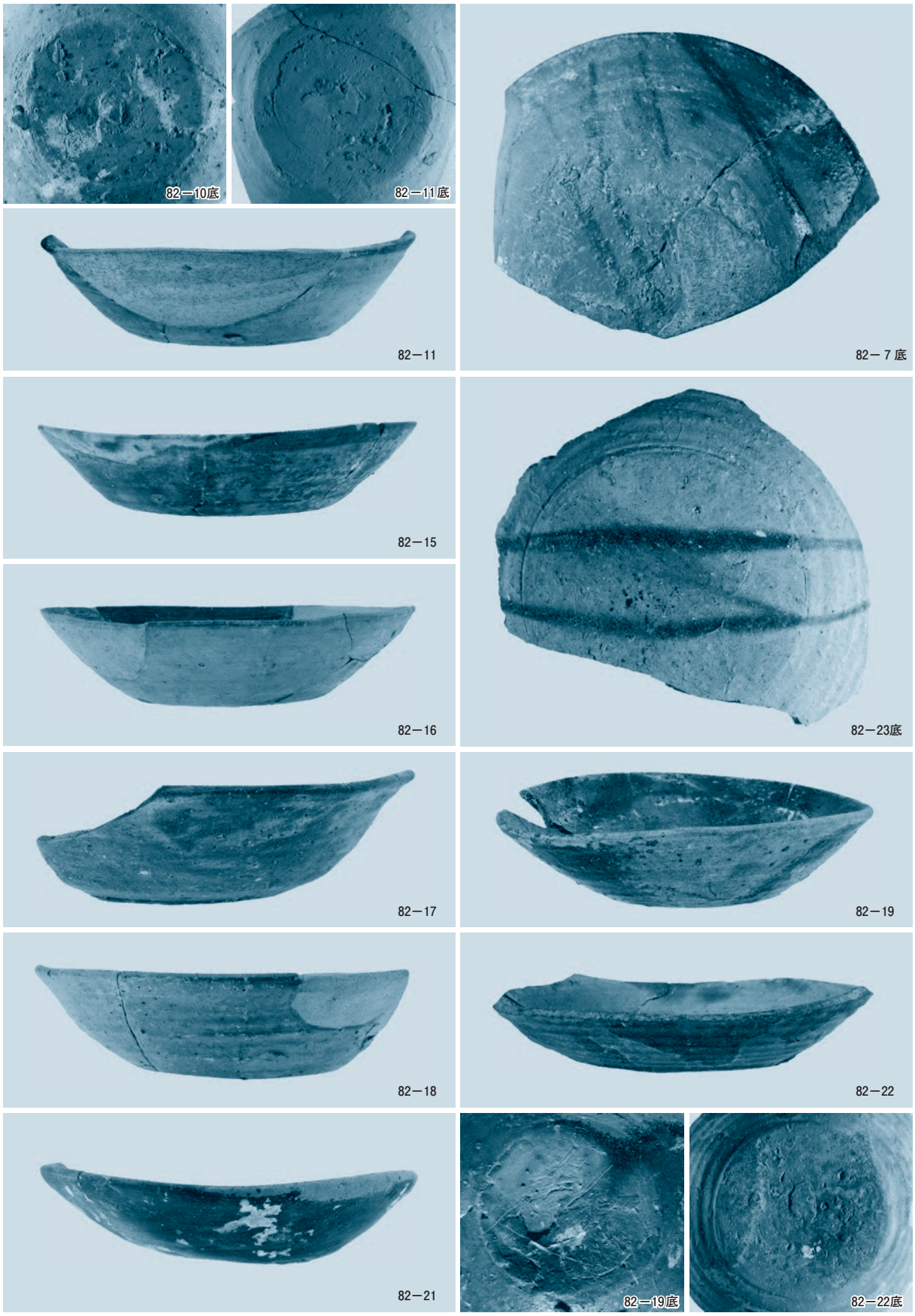




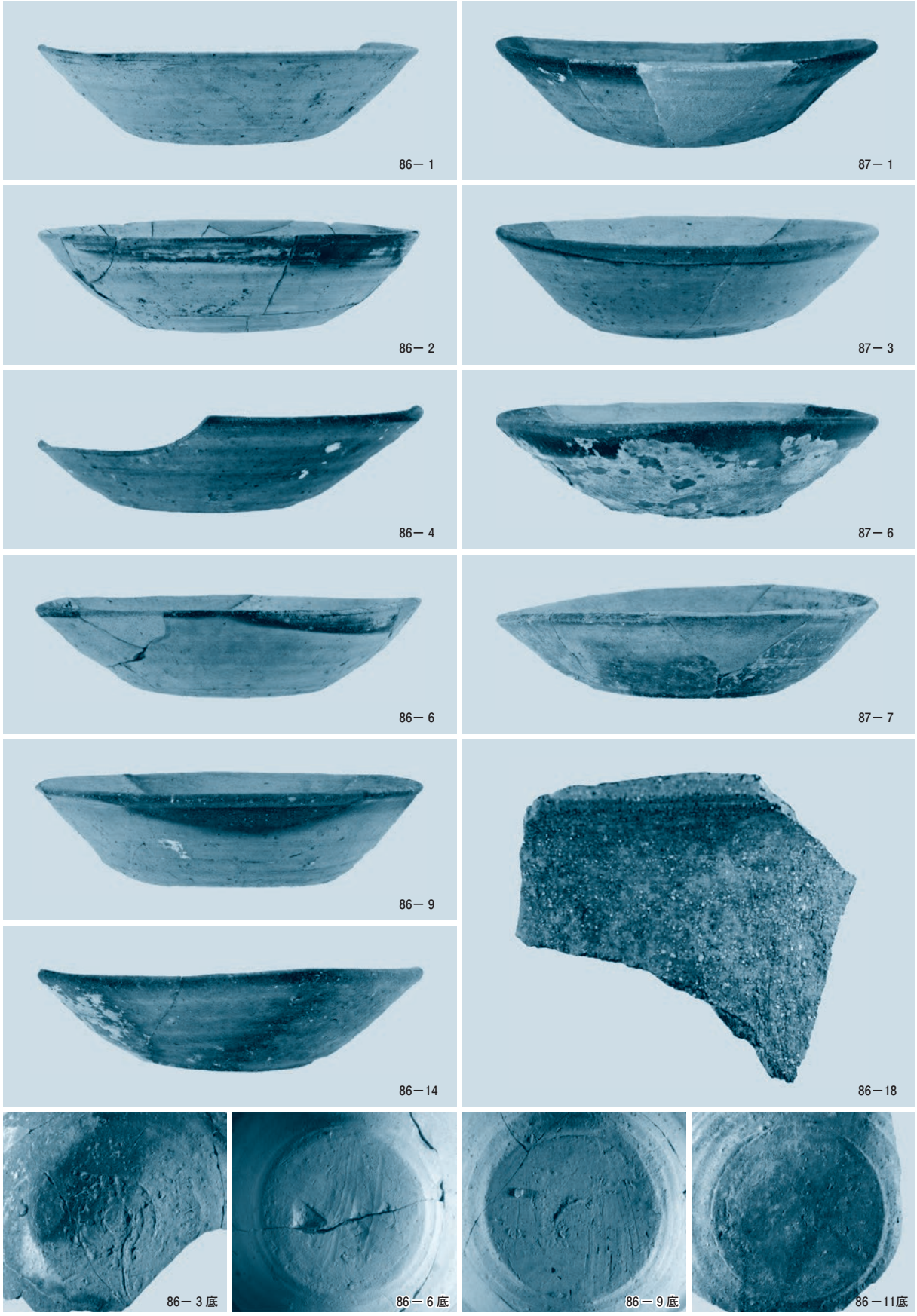
56　13号住居跡出土遺物



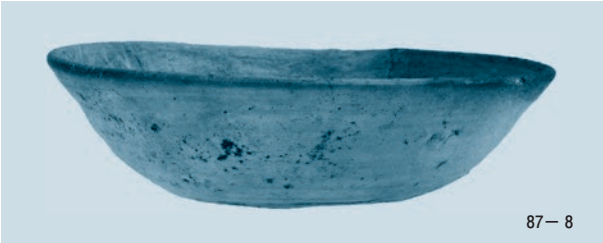
57　1号須恵器窯跡出土遺物（1）

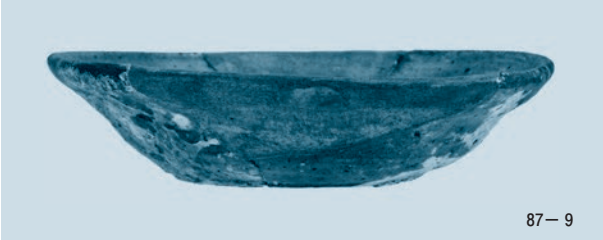


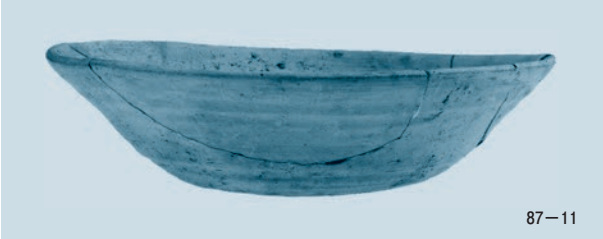
58　1号須恵器窯跡出土遺物（2）

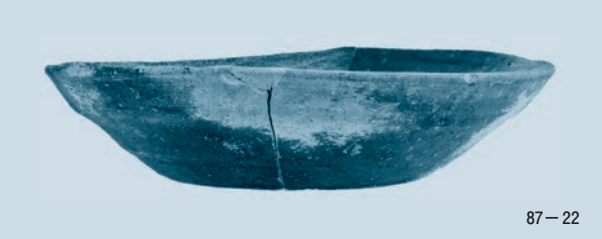


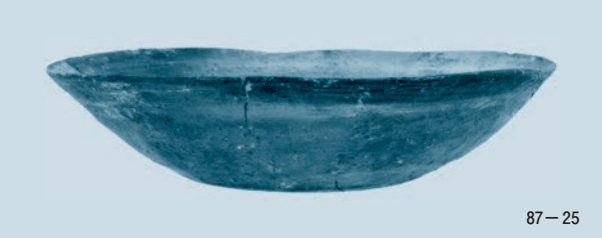
59　３号須恵器窯跡出土遺物（１）

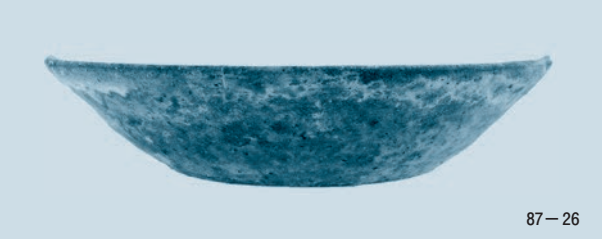


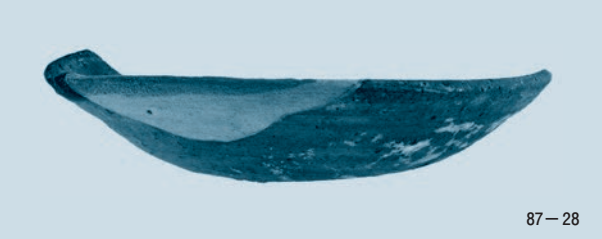




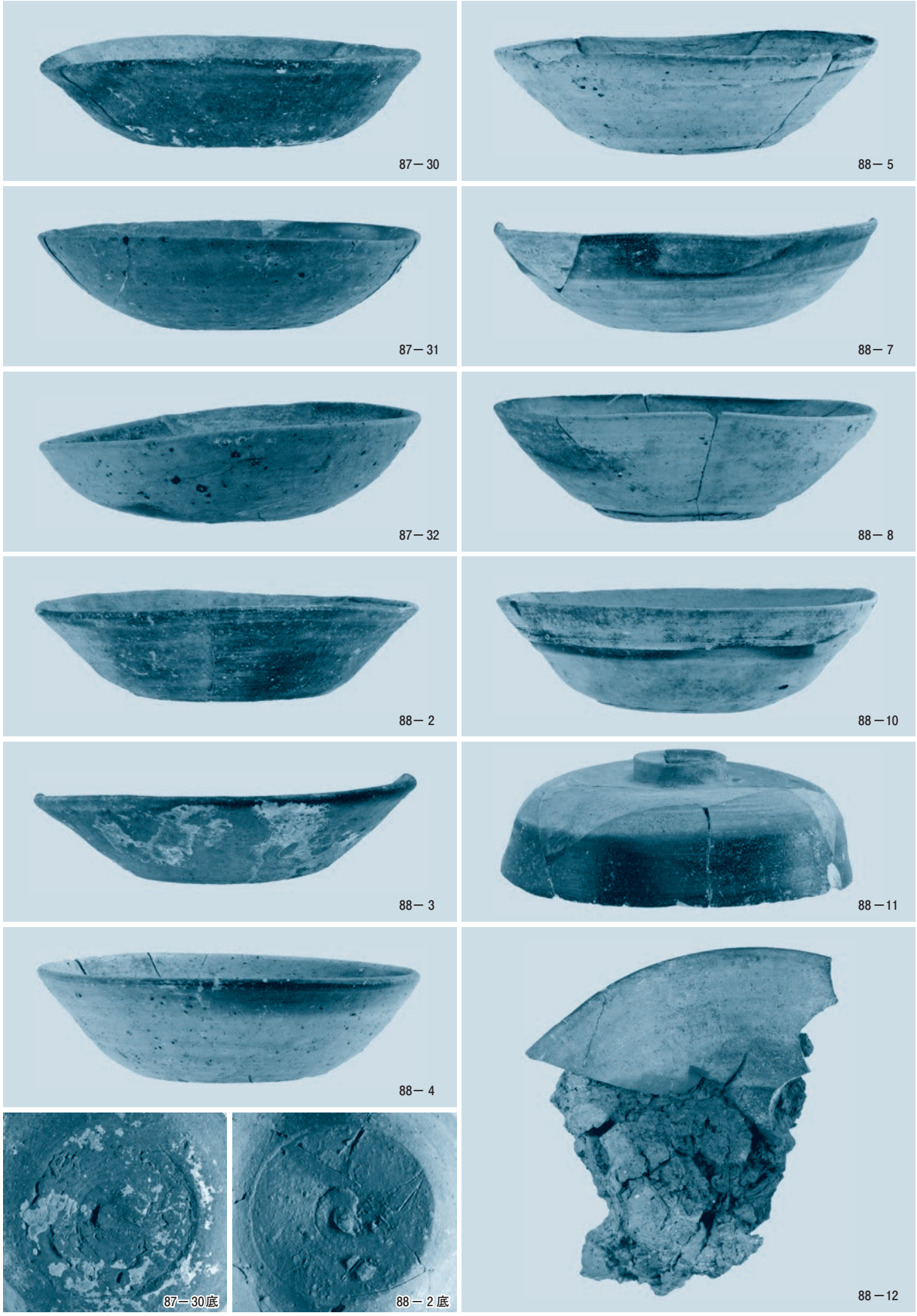




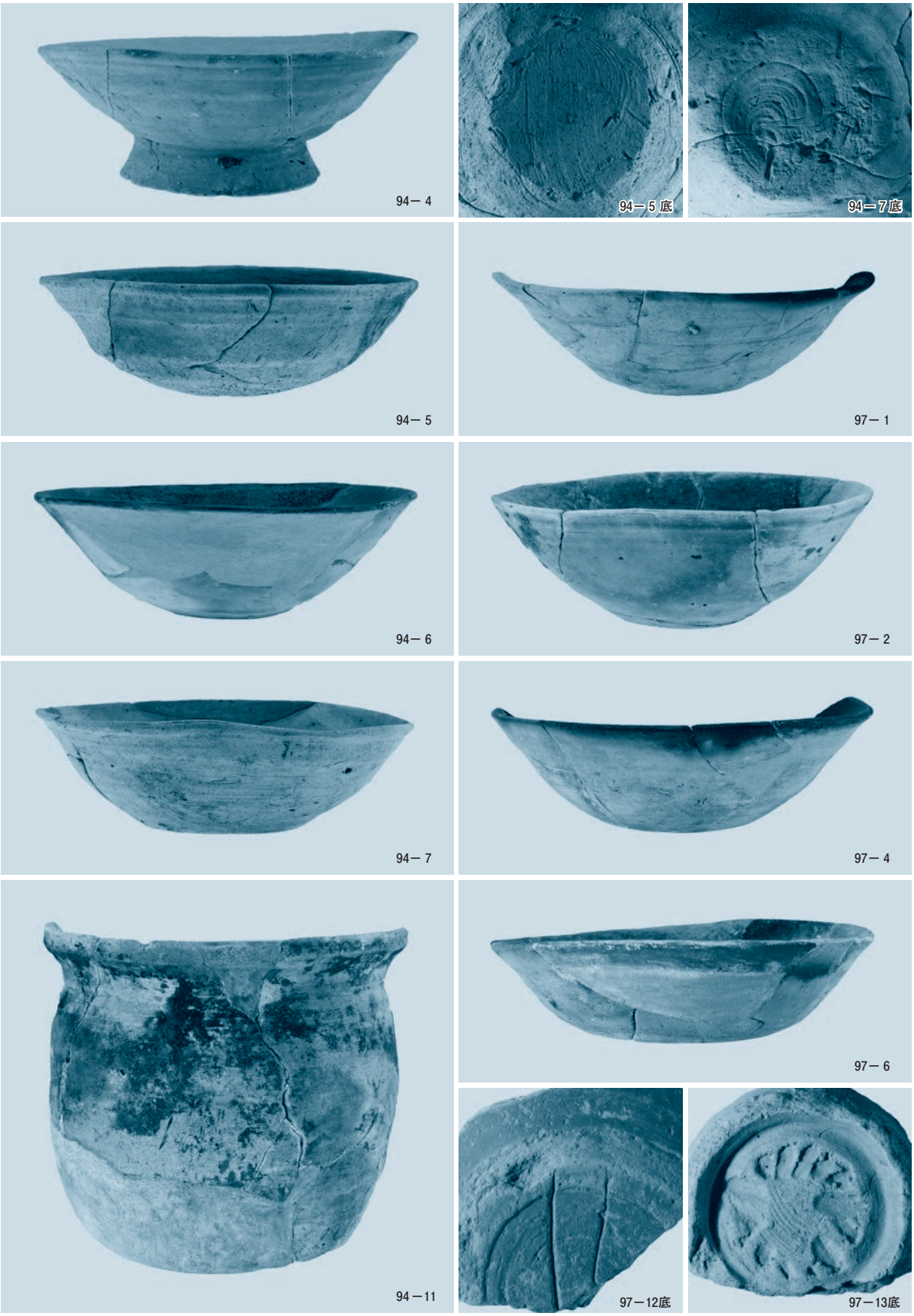




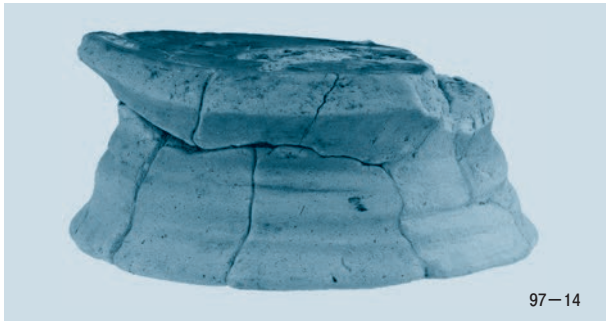
60　３号須恵器窯跡出土遺物（２）

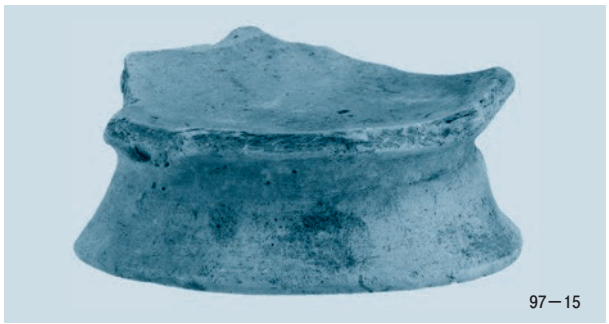


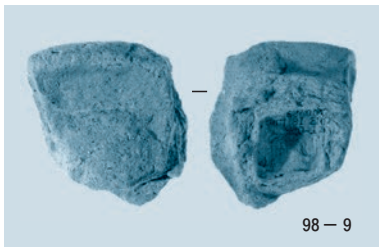
61　３号須恵器窯跡出土遺物（３）

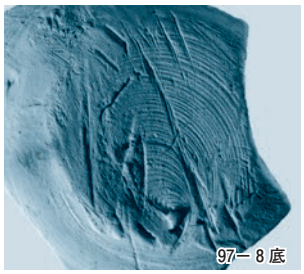


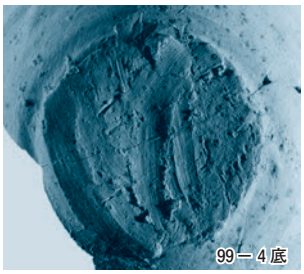
62　25号土坑・遺構外出土遺物（1）

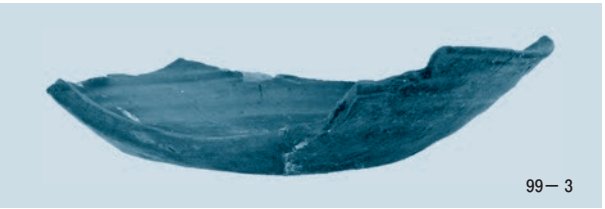


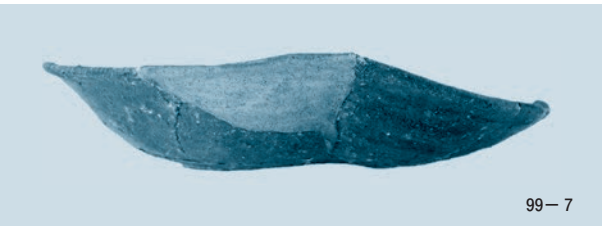


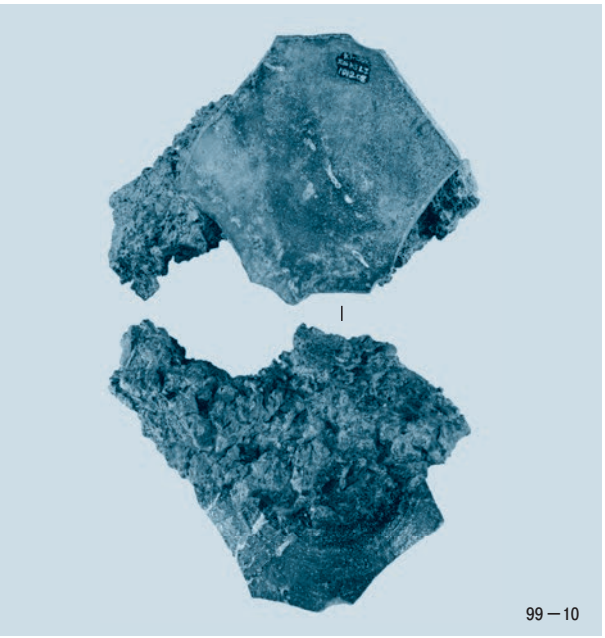




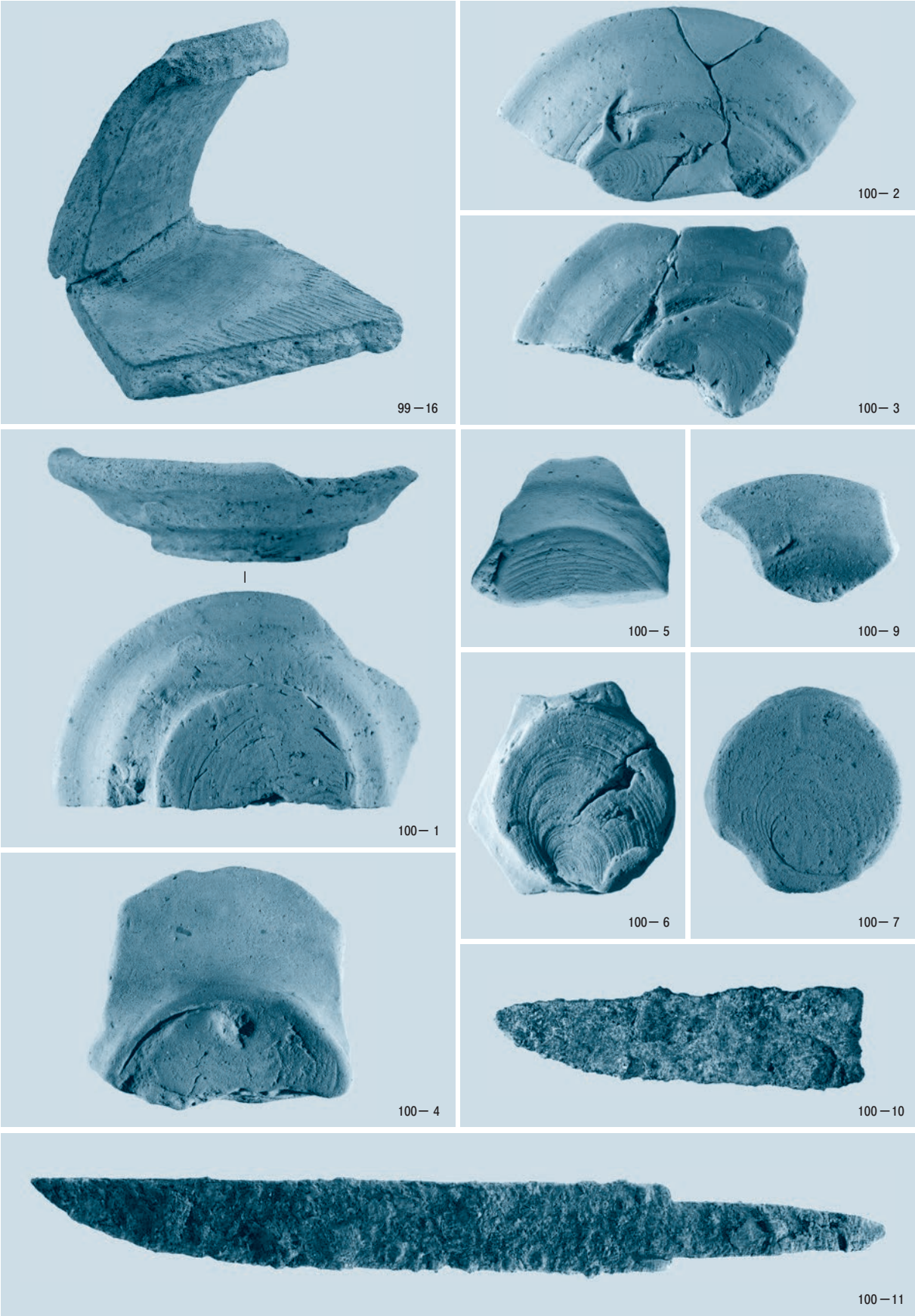








63　遺構外出土遺物（２）



64　遺構外出土遺物（３）

65　Ⅲ区全景（西上空から）

66　遺構集中部（上空から）

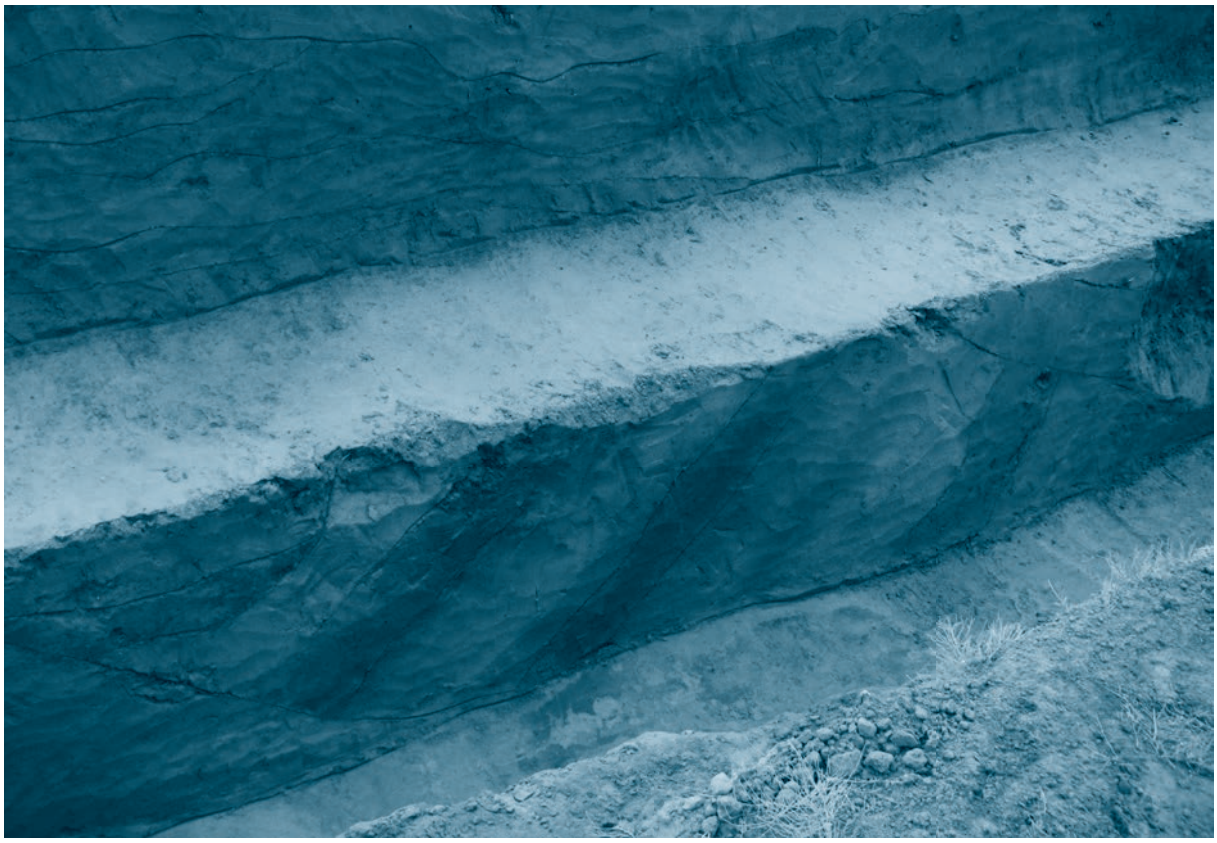
67　基本土層（ＬⅡ）

a　Ｊ17Ｇ（南から）
b　Ｊ20Ｇ沢２（西から）
c　Ｊ21Ｇ沢３（北から）

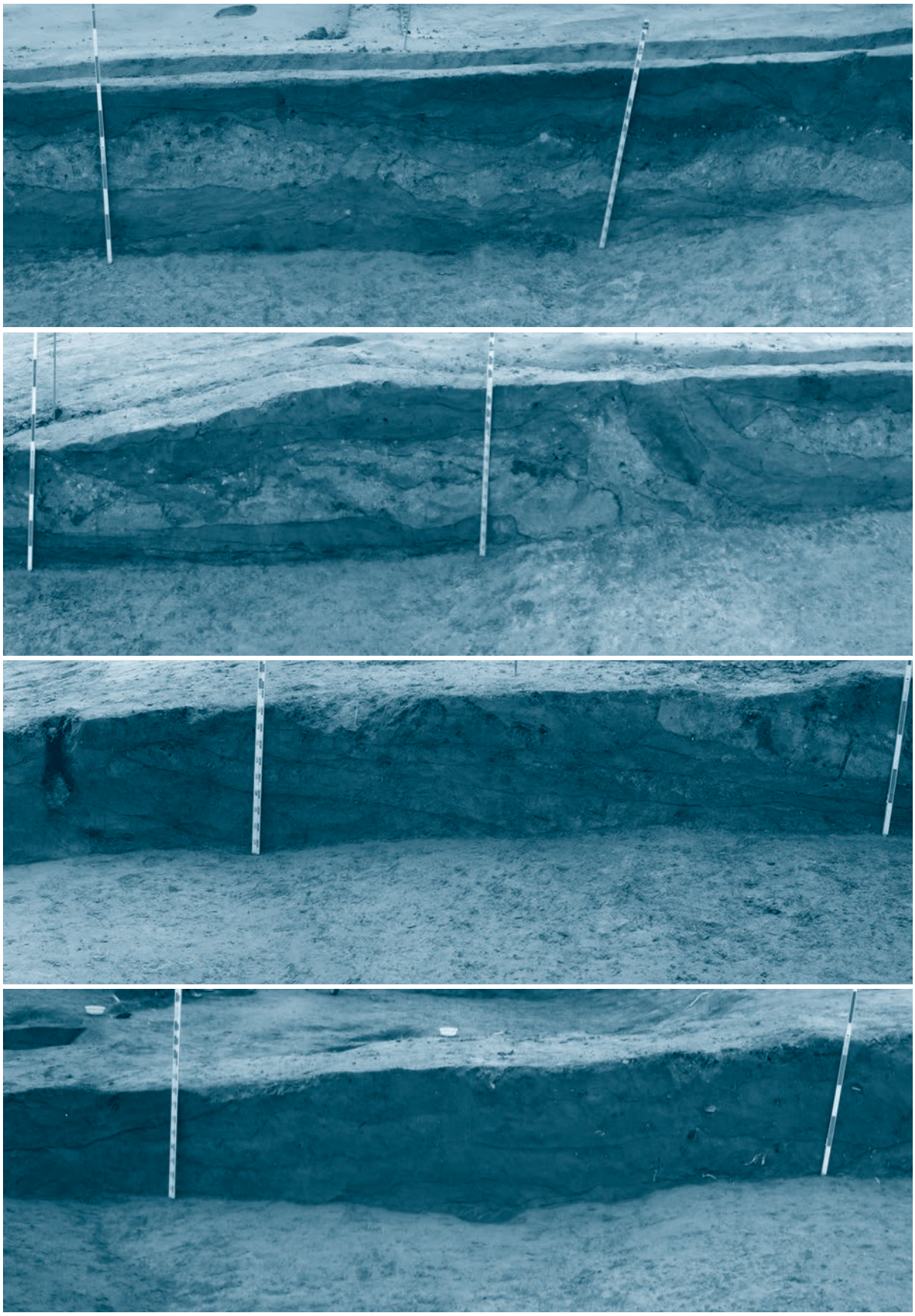
68　基本土層Ａ上部（南西から）

69　基本土層Ａ下部（南西から）

70　基本土層Ｂ（北西から）

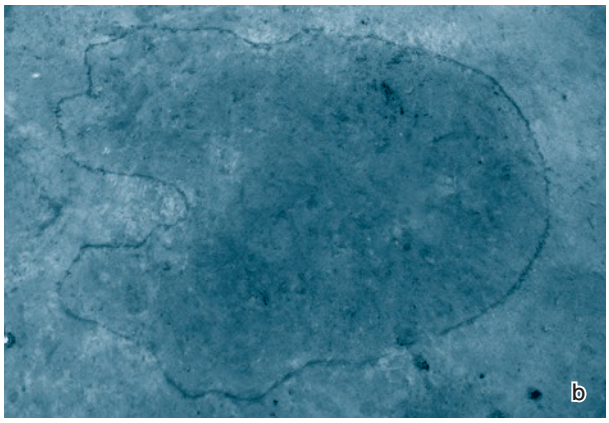


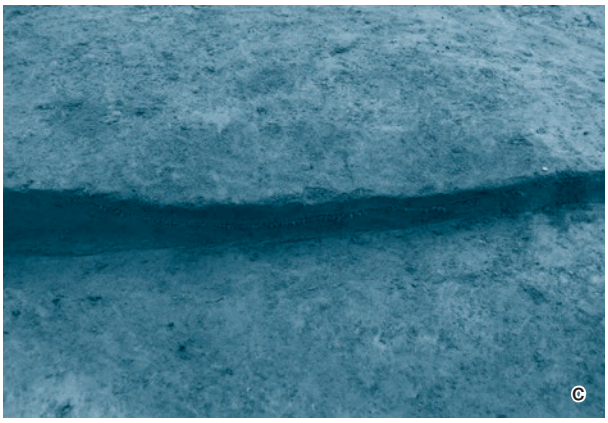
71　基本土層Ｂ地すべり層（北東から）



72　基本土層Ｃ（南から）

73　6号住居跡（南から）

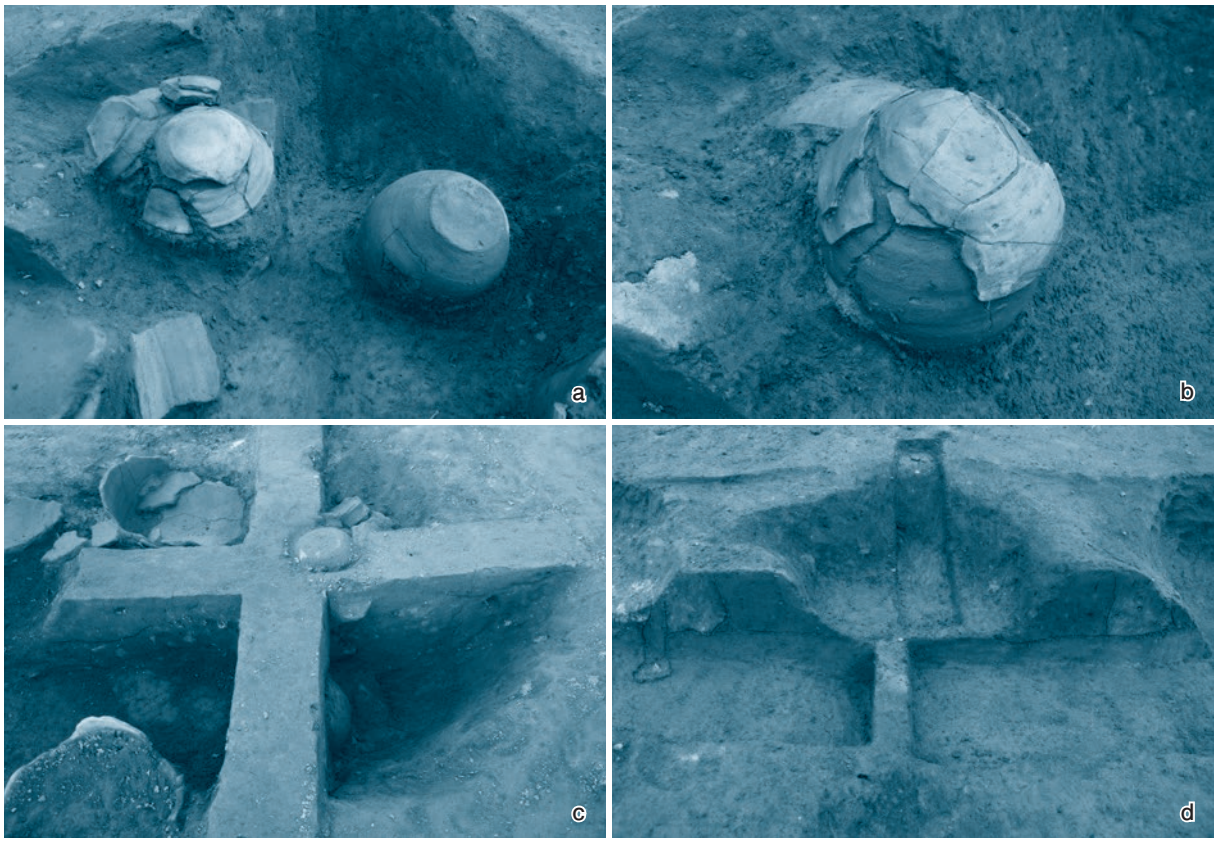




74　6号住居跡細部

a　土層（西から）
b　炉跡（東から）　c　炉跡断面（西から）

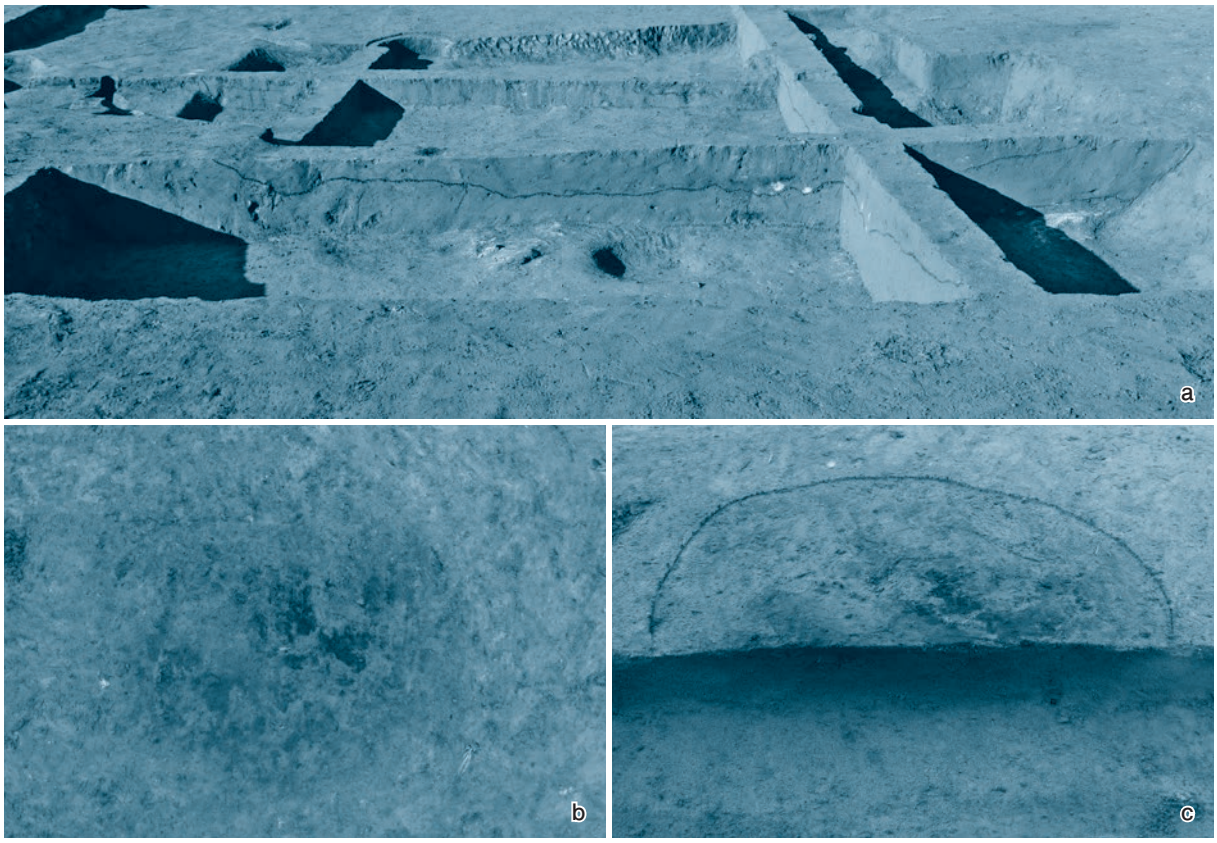
75　6号住居跡カマド（西から）



76　6号住居跡カマド細部

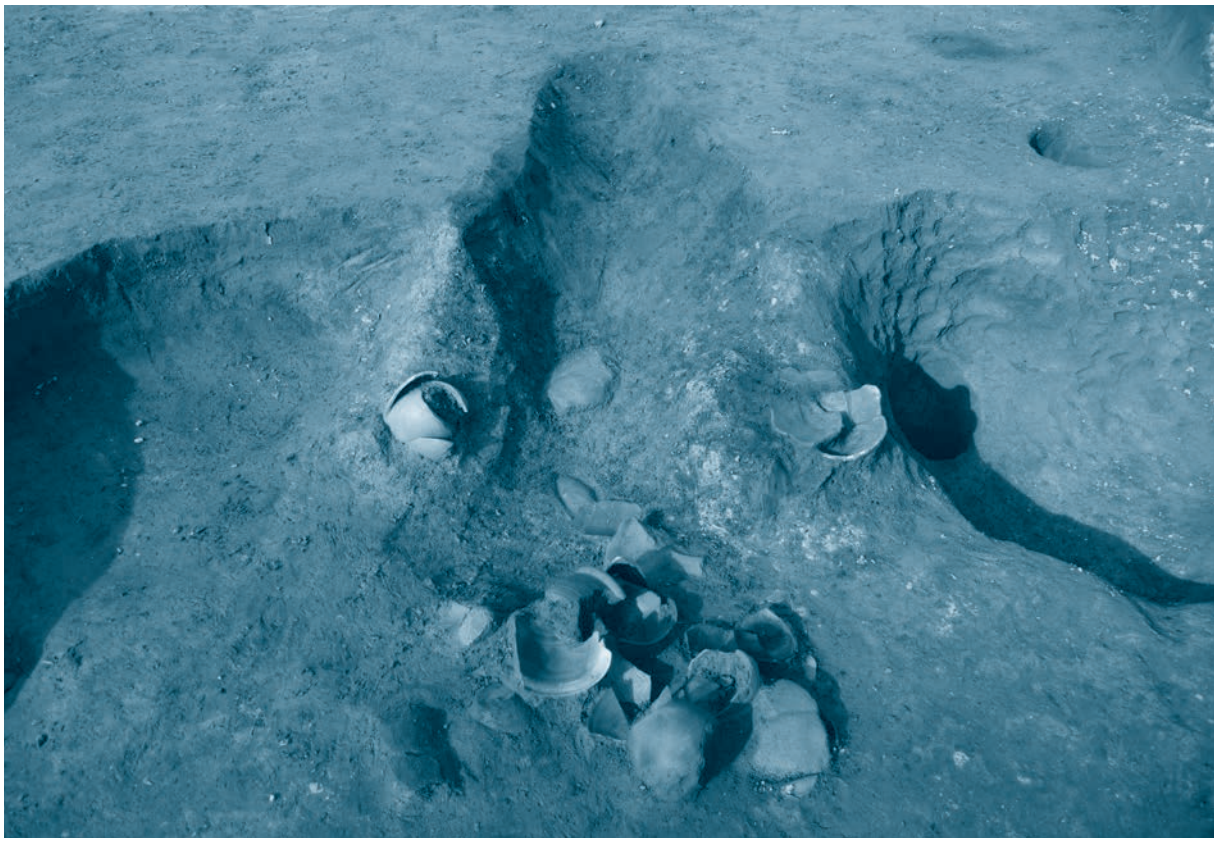
a　遺物出土状況（西から）　**b**　遺物出土状況アップ（西から）
c　東西土層（南から）　**d**　袖断ち割り（西から）

77　11号住居跡（南から）

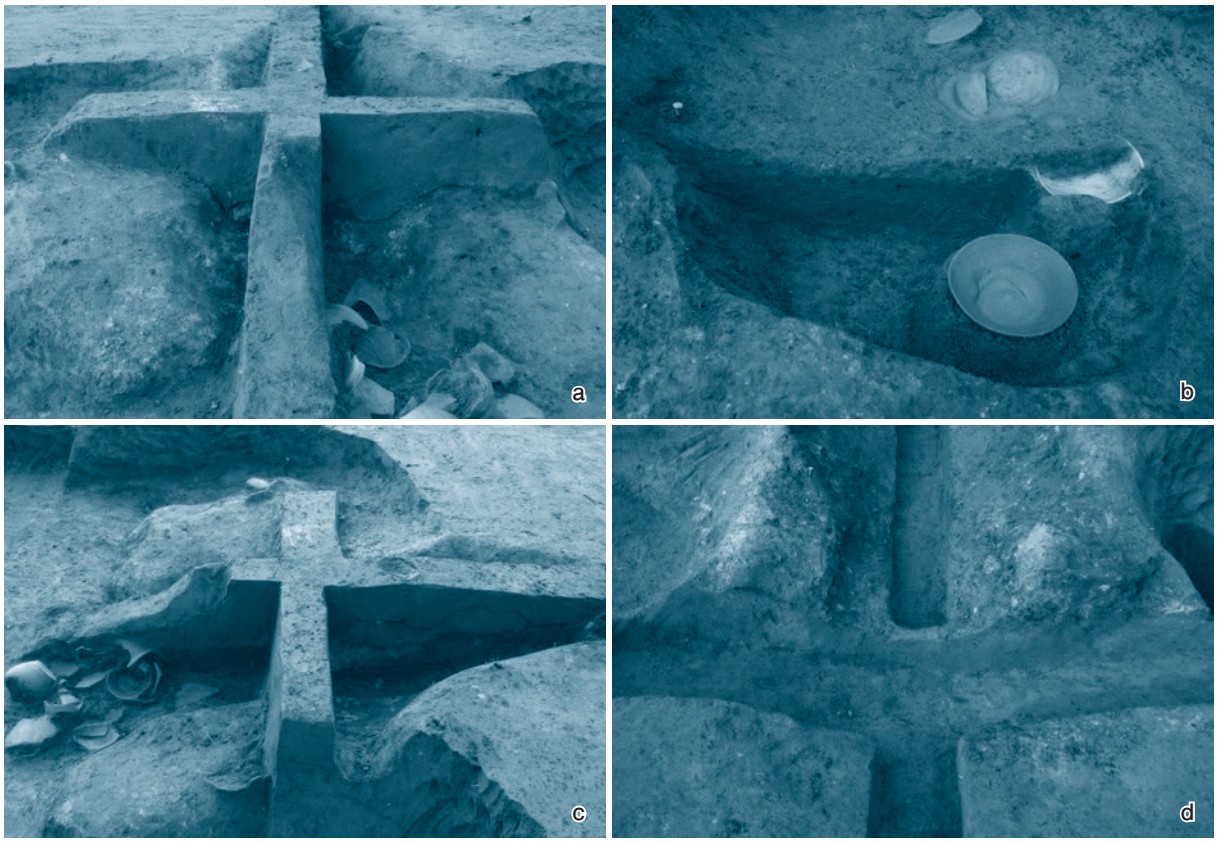


78　11号住居跡細部

a　南北土層（東から）
b　炉跡（南から）　c　炉跡断面（南から）

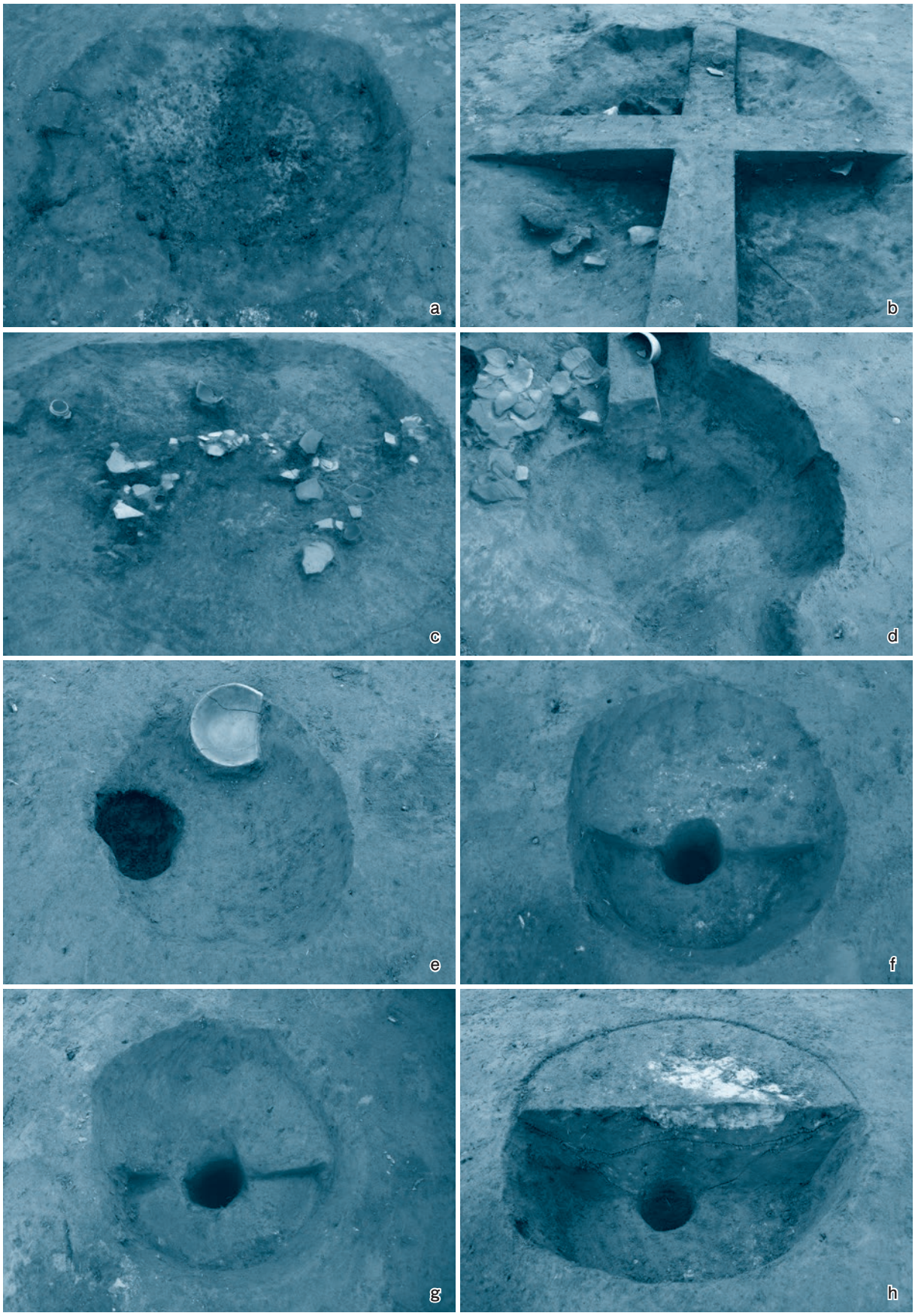


79　11号住居跡カマド（南から）



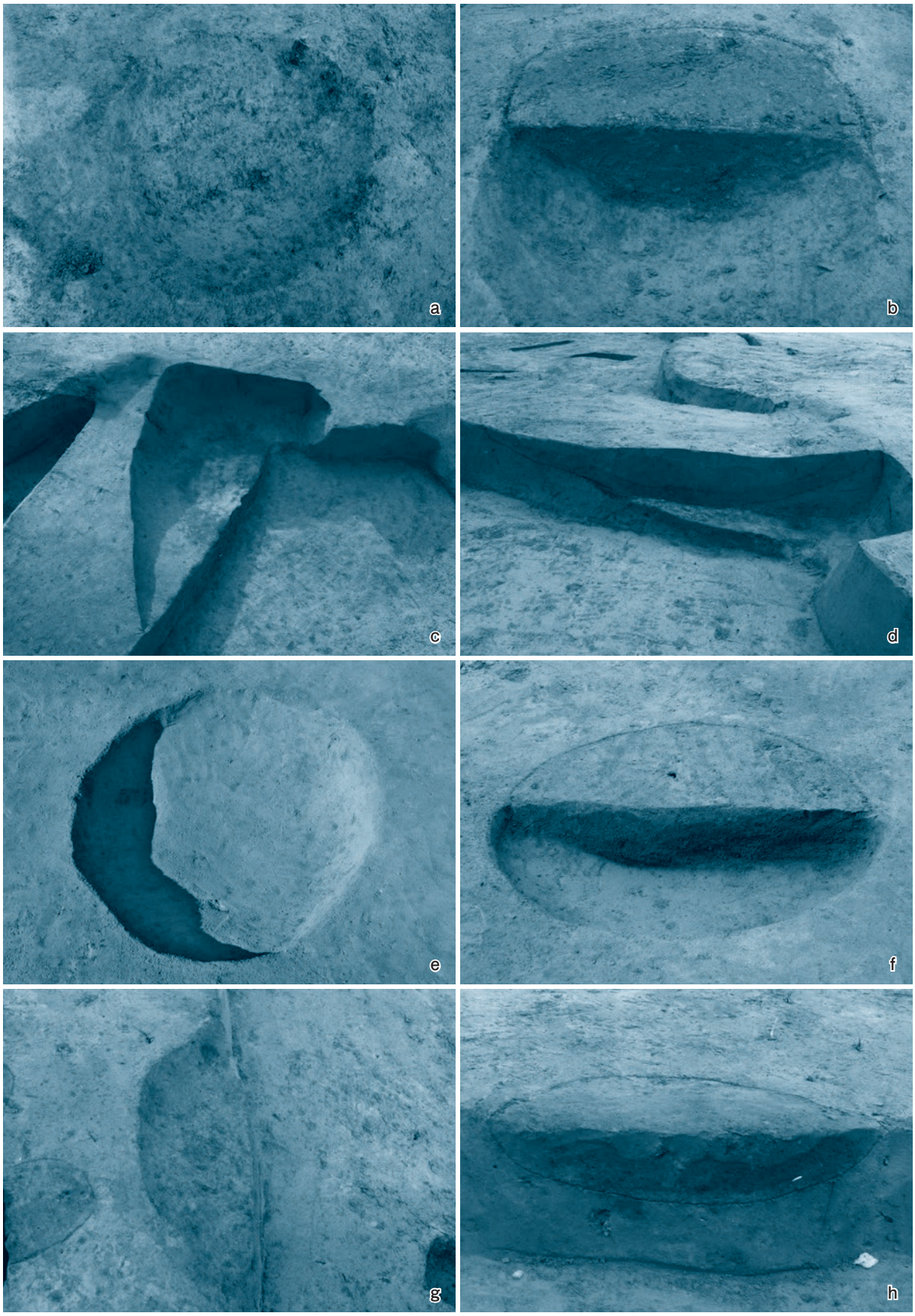
80　11号住居跡カマド細部

a　東西土層（南から）　**b**　Ｐ１土層（南から）
c　南北土層（東から）　**d**　袖断ち割り（南から）



81　土坑（1）

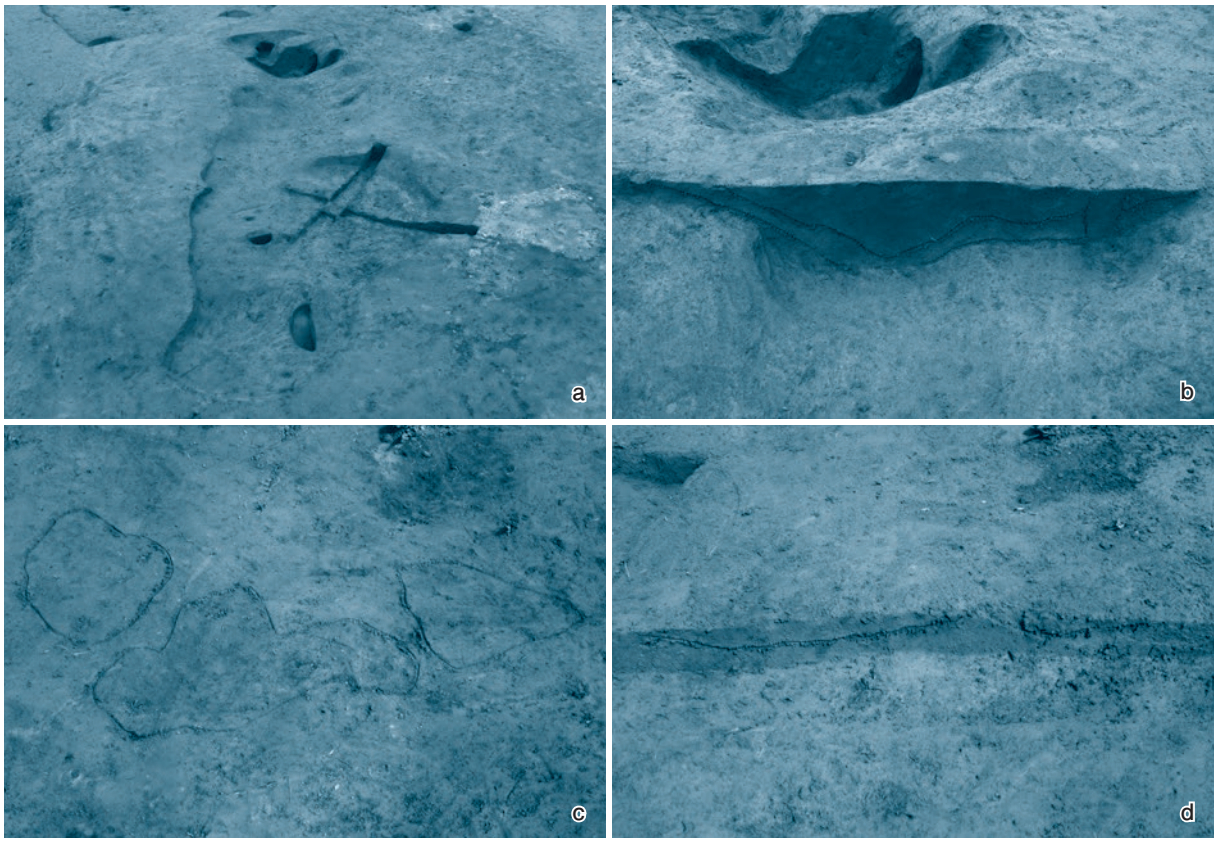
a　18号土坑（南東から）
b　18号土坑土層（北東から）
c　18号土坑（南東から）
d　21号土坑（西から）
e　22号土坑（東から）
f　23号土坑（西から）
g　23号土坑掘形（西から）
h　23号土坑土層（西から）



82　土坑（2）

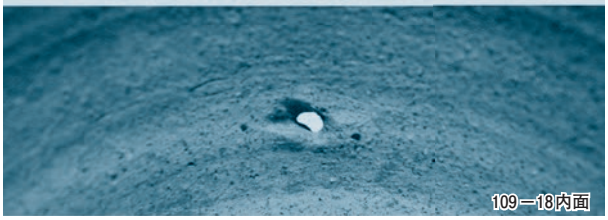
a　24号土坑（西から）
b　24号土坑土層（西から）
c　29号土坑（北東から）
d　29号土坑土層（北から）
e　30号土坑（南東から）
f　30号土坑土層（東から）
g　31号土坑（南から）
h　31号土坑土層（東から）

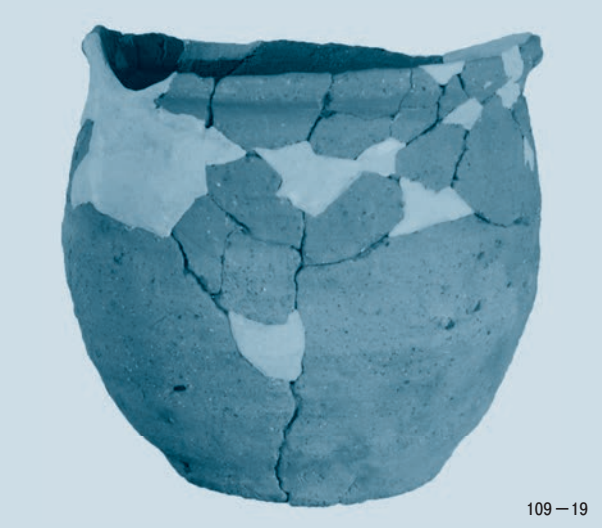
83　１号竪穴遺構（北から）



84　５号溝跡，１号焼土遺構

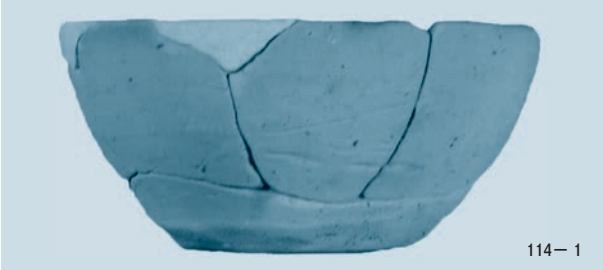
a　５号溝跡（南西から）　**b**　５号溝跡土層（南西から）
c　１号焼土遺構（南西から）　**d**　１号焼土遺構断面（南西から）

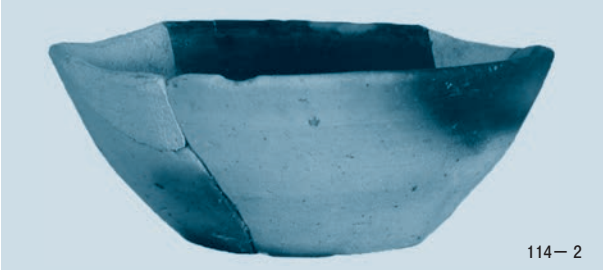


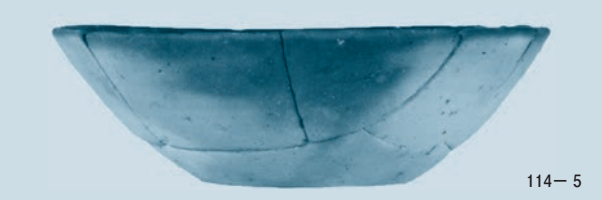


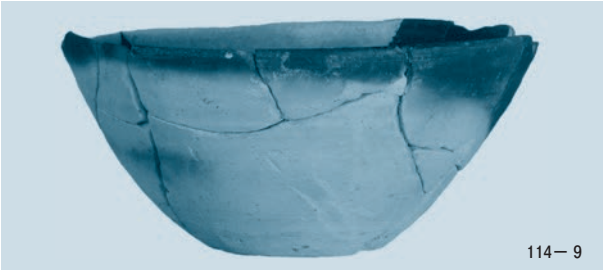
85　6号住居跡出土遺物（1）

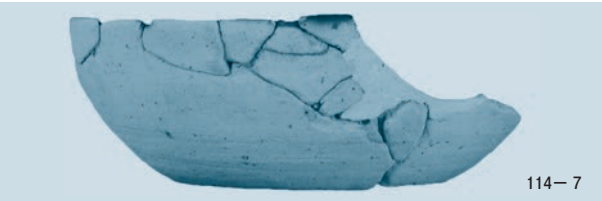
86　6号住居跡出土遺物（2）



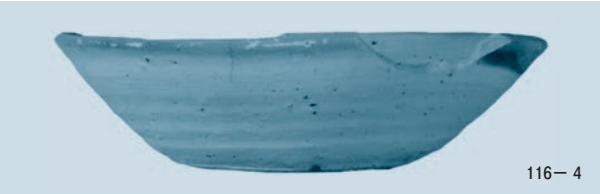




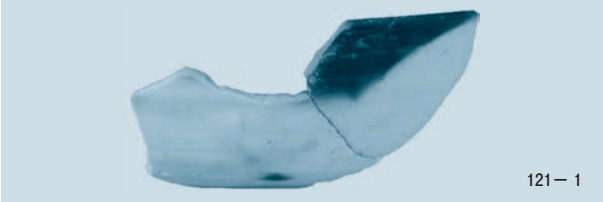


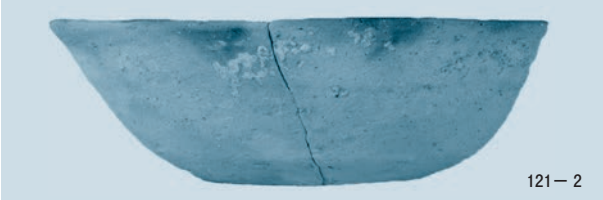


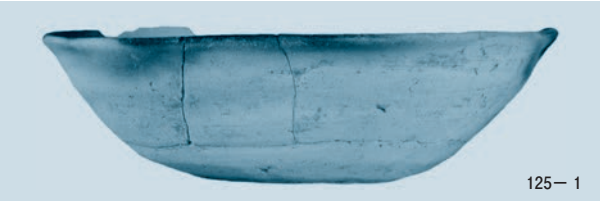
87　11号住居跡出土遺物（1）

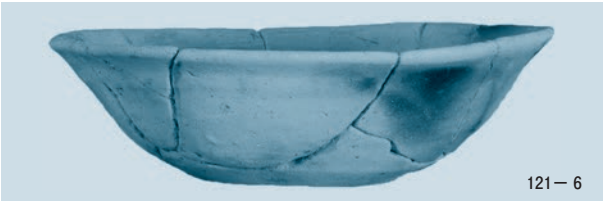


88　11号住居跡出土遺物（2）

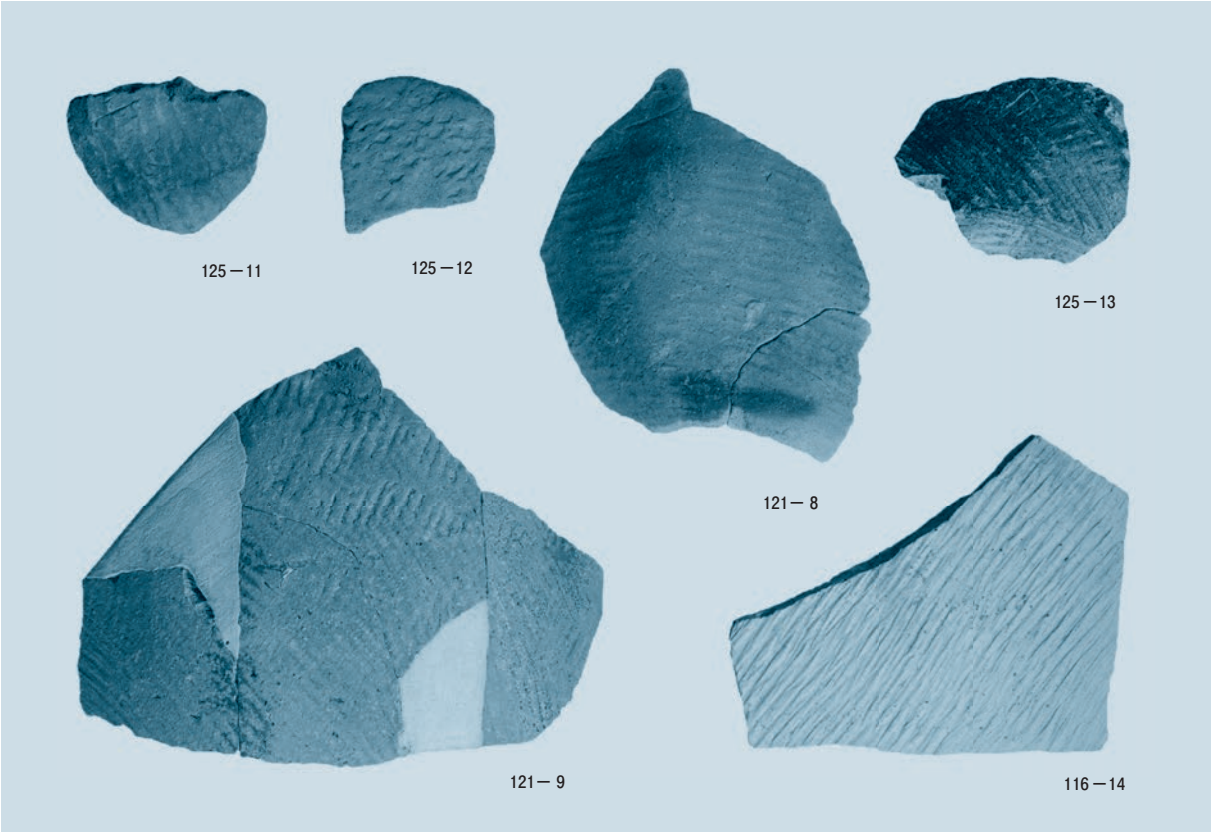




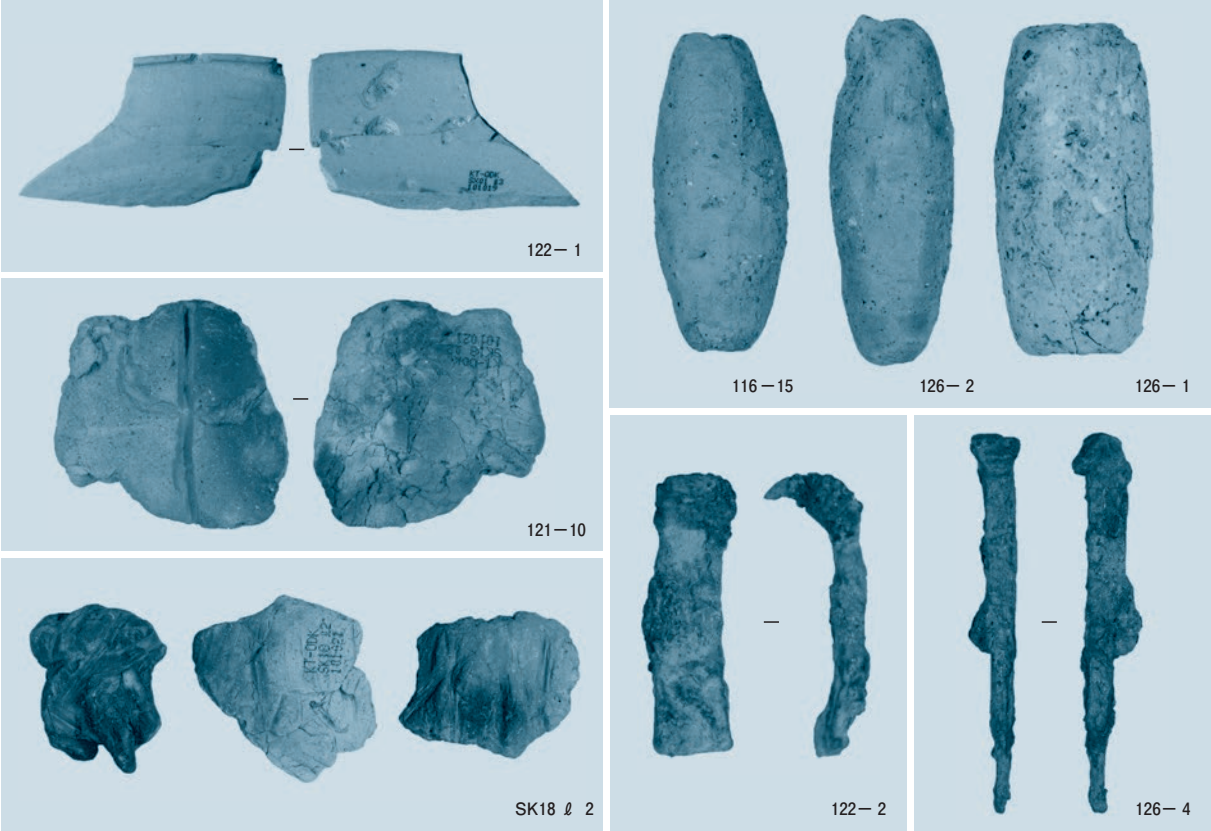




89　土坑・遺構外出土遺物



90　住居跡・土坑・遺構外出土遺物



91　磁器・土製品・鉄製品・粘土塊

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あががわかいしゅうながいちくいせきはっくつちょうさほうこく１
書　　名	阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告１
シ リ ー ズ 名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第482集
編 著 者 名	吉田　功　香川愼一　宮田安志　國井秀紀　大河原勉　山元　出
編 集 機 関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課 〒960－8115　福島県福島市山下町1－25　TEL 024－534－2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960－8688　福島県福島市杉妻町2－16　TEL 024－521－1111
発 行 年 月 日	2011年12月16日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
小田高原(おだこはら) （１次調査）	福島県喜多方市慶徳町山科字古屋敷(ふるやしき)・西新田(にししんでん)	2087	00024	37°37′07″	139°48′02″	20100513 ～ 20101217	15,800㎡	河川改修(阿賀川)に伴う事前調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
小田高原(おだこはら) （１次調査）	集落跡 窯　跡	縄文時代 奈良時代 平安時代 近　　世	竪穴住居跡 須恵器窯跡 溝　　跡 土　　坑 竪穴遺構 焼土遺構	13　軒 3　基 9　条 35　基 1　基 1　基	縄文土器 土師器 須恵器 鉄製品 石製品 陶磁器	平安時代を中心とする集落跡を確認し，須恵器窯跡・土師器焼成土坑などの土器生産遺構を検出した。また，遺物では，瓦塔・獣脚などの仏具や，帯金具の鉸具などが出土した。

要　　約

小田高原遺跡は，阿賀川右岸に位置し，標高170～200ｍの河岸段丘上に立地する。本年度の調査では縄文時代と奈良・平安時代の遺構・遺物を確認することができた。奈良・平安時代では，竪穴住居跡と須恵器窯跡，土器焼成坑などで構成される集落跡を確認している。これらの集落は，出土遺物の特徴などから，８世紀末葉～９世紀前葉と９世紀中葉～後葉の２時期が想定される。８世紀末葉～９世紀前葉の集落は，標高198ｍ程の河岸段丘上位の小田高原台地で確認された。遺構の分布状況などから，集落の中心部分は調査区東側に広がる台地上に形成されているものと考えている。集落の南側は，昭和40年代後半に須恵器資料が採集されている小田高原窯跡推定地にあたるが，今回の調査では小田高原窯跡に関係する遺構は確認されなかった。調査区内からは土器焼成坑と考えられる土坑も確認されており，集落内で須恵器生産と焼成坑による土器生産が併せて行われていたものと想定される。

集落内で出土した遺物は，伴膳具，煮炊具，貯蔵具の他に，仏具と考えられる稜椀，瓦塔，獣脚なども確認されている。鉄製品の中には帯金具の鉸具も出土しており，出土遺物の内容からみても一般的な集落とは様相が異なる。９世紀中葉～後葉の集落は阿賀川沿いの標高170～176ｍ程の河川敷で確認された。この時期も竪穴住居跡，須恵器窯跡，土器焼成坑などで構成される集落が引き続き営まれている。集落内からは，３基の須恵器窯跡が確認された。これらの窯跡は，いずれも長軸が2.5ｍ程で比較的規模が小さく，出土遺物も杯類がほとんどであり，小型品を生産する窯跡と考えられる。なお，竪穴住居跡に近接して土器焼成坑が位置していることから，これらの竪穴住居跡については工房的な性格を持っていた可能性がある。出土遺物は，土師器・須恵器，鉄製品(短刀，刀子)などが出土している。この他に11世紀後半～12世紀前半の土器も少量ながら出土しているが，これらの土器に伴う遺構は確認できなかった。

以上，小田高原遺跡については，８世紀末葉～９世紀後葉の生産集落であることが今回の調査で確認された。当地域においては８世紀末葉～９世紀前葉の集落跡の調査は少なく，貴重な追加資料といえる。なお，８世紀末葉～９世紀前葉の集落跡が営まれている小田高原台地の北東部には西新田窯跡が位置している。これらのことから，小田高原遺跡周辺では８世紀末葉～９世紀後葉の間，地点を変えながらも継続して須恵器生産が行われていたものと考えられる。また，本遺跡は出土遺物の内容や交通の要所に営まれている点などから，当地域の拠点的集落と思われる。

福島県文化財調査報告書第482集

阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告１

小田高原（おだこはら）遺跡（１次調査）

平成23年12月16日発行

編　集　財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課
発　行　福島県教育委員会　（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
財団法人福島県文化振興事業団　（〒960－8116）福島市春日町５－54
国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所　（〒965－8567）会津若松市表町２－70
印　刷　北斗印刷株式会社　（〒965－0052）会津若松市町北町大字始字深町67－2